昭和六年四月十日印刷
昭和六年四月十五日發行

國譯一切經 經集部 四

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園七號地十番
振替東京一一九四七一番
電話芝{二一〇一六番
　　　{三〇四〇番

製本所　　關角製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

——經集部四索引終——

謂く羯提月の白分の八日陛舍佉月の白分の八日とは、羯提月とは謂ゆる七月十六日より八月十五日に至る、是の八月を後半月と名け白分と名く。陛舍佉月とは正月十六日より二月十五日に至る。是の二月を後半月と名け白分と名く。此の二時二日は晝夜各(十五)三十摩睺路妬にして、是より後は羅婆、流れて或は晝減じ夜增し、或は夜減じ晝增す。名けて流と爲す。

達摩多羅禪經終

を說きて曰く、

方便治地の行をもて乃ち究竟處に至り、無上の法施主は是を說き傳へて今に至る。我れ彼の勝聞に從つて深妙なる義を撰說し、章句をもて集を莊嚴し、法をして久しく住せしめんと欲す。佛法は深くして底無く、修行も亦邊無し、我が少智力を以て無量の法を宣揚す、是れ深くして測る所に非ず、蚊の大海を嘗むるか如し。唯だ彼の已に度れる者のみ然る後に乃ち究竟せん。

九八 六十二界の六(六)種とは、六情、六塵、六識、六界、六覺、(謂はく貪・恚・癡の三不淨覺と、是れに反する三淨覺なり)と苦・樂・不苦不樂・憂・喜・捨となり。六三とは・欲・色・無色界。又色・無色・滅界。三世の法。軟中上の法。善、不善、無記の法。學、無學、非學非無學なり。四二とは食、非食。漏・無漏。依欲・依出要。有爲・無爲なり。

九九 三十六不淨の次第は髮・毛・爪・齒・薄皮・厚皮・膶・筋・肉・骨・髓・脾・腎・心・肝・肺・小腸・大腸・胃・胞・屎・尿・垢・汗・淚・涕・唾・膿・血・黃・白の痰・癊・肪・䏟・腦・膜なり。

一〇〇 刹那數は百二十刹那を一怛刹那と名く、六十怛刹那を一羅婆と名く、三十羅婆を一摩睺路姤と名く、三十摩睺路姤を一日一夜と名く。一〇一 一歲中唯だ二時二日、三十摩睺路姤にて晝夜等し。謂く羯提月の白分の八日と、(八月を一〇二羯提と名け、後半月を名けて白分と爲す。)一〇三 陛舍佉月の白分の八日となり。(二月を陛舍佉と名け、後半月を白分と名く。)此の二時二日に晝夜各十五摩睺路姤なり。是より後には羅婆流れ或は晝減じ夜增し或は夜減じ晝增す。名けて流と爲す。一〇四 晝夜は等しく各三十摩睺路姤なり。

【九八】 以下は本文中の辭句の註解にして先づ六十二界の說明なり。
(一)六六種とは、六種の六界にて合計三十六界あり、文の中の六情は六根、六塵は六境、六界は六大のことなり。
(二)六三とは、六種の三界にて合計十八界あり。
(三)四二とは、四種の二界にて合計八界あり。
以上三類を合して六十二界となる。之れに關しては集異門足論卷二の界善巧を明す段に、右と大同小異の六十二界を示せり。

【九九】 次に三十六物の列擧。

【一〇〇】 次に刹那數の說明は十二因緣分第十二の流注緣起の項の脚註參照せられたし。

【一〇一】 春分、秋分を云ふ。

【一〇二】 羯提(Kārttika)。

【一〇三】 陛舍佉(Vaiśākha)。

【一〇四】 晝夜を合すれば一年中等しく、三十摩睺路姤が一晝夜との意なり。

法、寂滅の法、無所有の法にして作者不可得なり。但だ無明と諸行と和合して有漏の法生ずること有り、受は軸と爲りて有支輪を轉じ諸の結縛を生ず。諸結の中に愛支增し、諸縛の中に取支增し、諸使の中に識支增し、諸纒の中に無明增し、生に向へば結增し生を受くれば縛增し、諸識漂へば利使增し境界に於ては愚癡煩惱增す。是くの如く煩惱業縛能く轉じて果を生じ、輪常に轉ずるありて無智の衆生を漂はす。義增すに隨ふ故に差別有るを說く、當に知るべし諸分に皆結縛使纒有ることを。

[九四]復次に修行して六種に十二緣起を觀ずべし。十二支に於て義に隨順して說かば、謂ゆる安般念は業支と有支とを觀ず。出息入息は是れ身行、覺觀は是れ口行、想思は是れ意行なるを以て、是の故に安般念は是れ彼の對治なり。界方便觀は識支と生支とを觀ずべし。識增上するが故に胎に處し、識の諸界に於て增上するを[九五]七識界と說く。是の故に界方便觀は是れ彼の對治なり。陰方便觀は名色支と老死支とを觀ずべし。是の故に陰方便觀は是れ彼の對治なり。諸の入出を破する方便觀は六入支と觸支とを觀ずべし。是の故に入方便觀は是れ彼の對治なり。緣起方便觀は無明支と受支とを觀ずべし、是の故に緣起方便觀は是れ彼の對治なり。何を以ての故に、受及び無明は是れ諸の煩惱の根本なるが故に。是の故に智慧は是れ彼の對治なり。愛取の二支は淨に染著するが故に不淨は是れ對治なり。

[九六]復次に修行して十二緣を觀ずるに、或時は因に從つて度し、或時は果に從つて度し、或は無明行より乃ち老死に至り、或は識を觀じて乃ち老死に至り、或は三事和合して觸を生じ、觸は受を生じ、受は愛を生じ、愛は取を生じ、乃ち老死に至る。或は愛取有より老死を生じ、或は老死より乃ち無明に至り、或は老死を觀じて乃ち識に至る。佛の城喩經に說きたまへるが如し。

[九七]復次に修行して四念處に於て十二支を觀ずるに各增上して、身念處に六入支を觀じ、受念處に受支を觀じ、心念處に識名色支を觀じ、法念處に總じて餘支を觀ず。此の義を說き已りて而して讚偈

【九四】十二緣起と、數息・界・陰・入・緣起・不淨の六觀。

【九五】七識界とは、七識住のことか、七識住とは、有情の心識が依處として樂著する處を三界の中に於て七處に分類したるものなり。

【九六】十二緣起觀の起點順序。

【九七】四念處觀と十二緣起。

く、去るも亦積聚すること無し。一刹那起り一刹那滅す。刹那は一念の如く一念は刹那の如し。前の刹那聚已に滅し、滅する時後と與に起り、隨順して四緣具足して後の刹那起る。境界觀を修行すれば一刹那の間に無量の微塵有り、無量の微塵は一一の刹那に次第に相續して猶ほ連珠の如し。譬へば四の善射人の倶に四の箭を放つに、一人有りて健行して箭の未だ地に至らざるに、能く空中に就て四箭を接取し地に落さしめざるが如し。地神の迅速なることは復是に過ぎ、虛空神の疾きことは地神に過ぎ、日月天の疾きことは虛空天に過ぐ。是くの如く健行天の疾きこと日月に倍過す。當に知るべし諸行無常の迅きこと是に過ぎ譬喩すべからず。修行して迦羅邏の七日の住分に無量の刹那有ることを觀ずるが如く、當に知るべし餘の一切の分も亦是くの如し。是くの如く觀じ已りて諸の愚癡を離れ明慧を增益す。是くの如きの無量を、修行して緣起の刹那を觀ずと名く。

[九一]復次に修行し、初て正受に入るを名けて連縛と爲し、境界增長するを名けて流注方便と爲し、境界安住するを名けて分段と爲し、境界漸く滅するを名けて刹那と爲す。

[九二]復次に已に四種の別相に緣起を觀ずるを說きぬ。佛はまた總じて緣起を說きたまふ。今當に說くべし。二支は種、二支は熟、二支は[九三]起、二支は牽所種、二支は生長、二支は成就、二支は受、二支は作人、二支は田、二支は寄者、二支は所寄、二支は受寄者なり。是を說いて有支と名く。修行して緣起を觀ずるに或は五陰或は四陰なり。五陰は欲色界にして、四陰は無色界なり。無常・空等の諸行は陰に於て眞實を決定し、眞實を決定し已れば決定の相現在前す。是の事有るが故に是の事有り、是の事起るが故に是の事起る。是の事無きが故に是の事無し、是れ滅するが故に是れ作さざるなり。譬へば鑽有り燧有り人有れば、方便をもて煙火乃ち出で薪に因りて熾然たるが如し。亦樹に因りて蔭有り、日に因りて光有り、燈に因りて焰有るが如き皆緣起による。無明は我れ能く行を生ずと言はず、行も亦我れ無明より生ずと言はず、當に知るべし一切の有支は皆是くの如く是れ空の

【九一】四種緣起の別義。

【九二】以上緣起の別釋を終り以下總釋。

【九三】起を三本には興に作る。

の師子王を起す、師子王の上に各七寶の池有り、七寶の池の中に各七寶の蓮華有り、一一の花の上に皆坐佛有りて普ねく光明を放ち菩薩の境界を極む。然る後に乃ち住せる是の諸の菩薩の初發心より金剛座に至るまで、修する所の善根一切の功德、若しくは業若しくは果及び諸の緣起の一切は悉く現ず。是より復た無量の師子王を起す。師子王の上に各七寶の池有り、七寶の池の中に各七寶の蓮花有り、一一の花の上に皆坐佛有りて大光明を放ち、普照して佛法甚深の緣起一切悉く現ず。爾の時に佛は神力を以て阿難に佛の境界を示し已りて、阿難に語りて言はく、爾炎の中に更に無量無邊の諸佛の境界有り、佛智の行ずる所は是くの如く甚深微妙なる境界なり。云何が欣悅して見易しと言ふや、汝智淺く及ばずして謂ふて見易しと爲すのみ。上の如く爾炎の境界は無量の諸法現在前し已りて然して後乃ち壞し、一切皆空にして淸淨寂滅なり。寂滅し已りて復た勝妙なる爾炎を觀じ、佛の法身を起し、漸漸廣大にして十方に周滿し、無量の法寶法身に充滿し、法身の光明邊際有ること無し。不共の智慧の行ずる所の境界は一切の佛法甚深の緣起悉く現在前し、然して後乃ち壞し一切皆空にして淸淨寂滅なり、處所有ること無く猶虛空の依止する所無きが如し。寶の手に入るを名けて得寶と爲すが如く、修果の是くの如くなるを決定相と名く。阿難よ如來の境界は不可思議なり、我れ今汝が爲に少少を示すのみと。阿難は佛の境界を見て歡喜踊躍し、佛に白して言さく、甚深なり、世尊、世尊よ爾炎の境界は其の底を得難し、若し我れ先に如來の境界の是くの如く深妙なるを知らば、寧ろ我が身を碎いて胡麻の如くならしむとも、要らず當に佛法の彼岸を究竟すべしと。是くの如く一切を修行して緣起の分段を觀ずと名く。

[九〇]刹那とは三世一刹那にして、一刹那三世なり。法の未だ起らざるを未來と名け、起る時を現在と名け、已に起れるを過去と名く。一刹那生ずれば卽ち一刹那苦なり。無常と俱なるが故なり。當に知るべし、衆行は刹那の頃も住せず、亦從來する所無く去るも亦所至無く、轉ずと雖も亦所去無

【九〇】第四、刹那緣起(Kṣaṇika-p.)。

し。無明の諸の積聚を破壞し已りて、一相の淨妙なる境界を成就すれば、行者の身體柔軟にして光澤あり。光澤にし已りて身極めて明淨なること明鏡の像の如し。是くの如きの相現じて明淨なれば已が身內の衆物を觀ずるに、各各の自相一切顯現す、是くの如きの觀成就するを名けて界に於て度を得と曰ふ。何を以ての故に、五種の癡と五種の對治の相有り、一には界、二には入、三には陰、四には卑賤、五には垢汚なり。是を五種の癡と名く。或は界を觀じて度を得、或は復た陰を觀じ入を觀じ、彼の增せる功德を觀じ、第一義を觀じ、而して度を得れば是を五種の對治と名くるなり。

復次に修行者は快淨瑠璃三昧に入り、明淨なる境界に於て緣起支を觀ずべし。緣起枝を觀ずる時は便ち見易き想を生ず。說くが如くんば阿難、佛に白して言さく、緣起は見易しと。佛、阿難に告げたまはく、十二緣起は甚深にして底無く見難く知り難し、汝は我が三阿僧祇劫の甚深微妙にして得難きの果を毀壞せんと欲するや。云何んが欣悅して是の言を說くや。是れ深妙の觀なり。我れ今當に汝を度すべし、當に我に隨て佛境界を觀ずべし。[八八]佛境界の海に浮漂せる外道は無智闇冥にして二邊の愚癡もて爾炎の境界を離れ、入ること能はざるところなり。[八九]聲聞辟支佛能く少しく入ると雖も其の底を得ざるなりと。爾の時に世尊是の語を說き已りて卽ち甚深微妙なる爾炎に入りて、三昧自在の正受に住したまふ。正受の境界に三師子王有り、師子王の上に各七寶の池有り、七寶池の中に各七寶の蓮華有り、七寶の蓮華の上に皆坐佛有りて大光明を放ちて聲聞の境界を極む。然る後に乃ち住せる是の諸の聲聞の初發心より、最後身に至るまで種うる所の善根及び諸の緣起は一切悉く現ず。是より復た三師子王を起す、師子王の上に各七寶の池有り、七寶の池の中に各七寶の蓮華有り、七寶の蓮華上に皆坐佛有りて大光明を放ちて辟支佛の境界を極む。然る後乃ち住せる諸の辟支佛の、初發心より乃至究竟まで種うる所の善根及び諸の緣起は一切悉く現ず。是より復た無量

【八八】三本には佛の字なし。
【八九】辟支佛 Pratyekabud-dha)は、獨覺又は緣覺と譯す。

に住すれば、爾の時に聞・思・修の慧と熟相と壞相と次第して起る。諸の餘の升進の義は前の入處に說けるが如し。復次に是事有るが故に是の事有り、是の事起るが故に是の事起るとは、謂はく修行者は先づ內身を壞して次に外色を觀ずべし。猶鏡に照すに物に因りて像現ずるが如く、是くの如く所依の相起れば外相も亦起るなり。

復次に修行して諸の不淨に於て其の緣起を觀ずべし。先づ方便の處に於て念を繫けて堅固ならしめ、然る後に肢節に於て分解して其の緣起を觀ずべし。明相を起し已れば無明相壞す。脚の骨に依りて蹲の骨・髀の骨・跨の骨・肩の骨・頸の骨・頭の骨有りて十方に充滿せり。有漏の業相普ねく下より現じ、諸の雜不淨の相階級して次第に起る。

復次に修行して四因能く衆苦を生ずと觀ずべし、展轉因と隣近因と周普因と不共因となり。復次に修行して觀ずべし、果は生因に從り、生は有因に從り、有は取因に從ると。是くの如く乃至行は無明の因に從る。行は是れ果にして亦是れ因なり、因に從りて果を推して還て老死に至るも亦是くの如し。若し無明に於て因を求むれば必ず大に恐怖して而して斷見を起さん。無智闇冥にして餘明甚だ微なること猶螢火の如し。是くの如くにして猶復た因を求めて、自の見を已めざれば唯大黑闇と俱なり。世尊說いて言はく、正思惟ならざるに由ると。衆生若し是れと俱なれば則ち生死に輪轉して無明に縛せらるゝが故に輪の常轉有り。無明本と爲り餘支の作す所各相有りて現ず。一切の有支輪にて無明最も自在なり、自在力に轉ぜらるゝこと、奴の其の主に屬するが如し。是れ無きが故に是れ作さず、是れ滅するが故に是れ轉ぜず。當に知るべし餘枝も皆是くの如きことを。[八五]死に四種有り、漸漸死・頓死・行盡死・刹那死なり。又[八六]三種の無常を說く、一には刹那無常、二には分段無常、三には種類無常なり。修行して此の無常を了すれば則ち[八七]四魔を遠離し、無明を破壞して明相顯現すること、明淨なる燈の能く衆冥を消すが如し。乃至老死滅して諸の明相起るも亦復た是くの如

【八五】四種の死（漸々死・頓死・行盡死・刹那死）

【八六】三種の無常（刹那・分段・種類）。

【八七】四魔とは、煩惱魔・五蘊魔・死魔・天魔なり。

と爲す。諸根始めて開け未だ所作有らずして、[75]觸に於て愚癡にして適と不適とを知らず雨滴の水に注げば水は則ち泡を起すが如く、情塵の觸を生ずるも亦復た是くの如し。外刺、身を刺し觸は中より起る、亦燈を然やすに油炷の成ずる所の如し。是を修行して爾炎の觸を觀ずるの相と名く、觸相起り已りて次第に[76]受を生ず、譬へば水泡の如く三種の相現ず。若し諸根を分別すれば則ち[77]五受有り。受起り已りて次に[78]渴愛を生ず、譬へば舌にて蜜を塗れる刀刃を舐むるが如し。愛の諸の煩惱を增すを名けて[79]取と爲す。取の次に[80]有を生じ、三種の業を有す。業は當來の果を起すが故に名けて有と爲す。已に種生じて而も未だ受けざるを名けて[81]未來生と爲す。生じ已つて熟せるを謂つて[82]老死の二支と爲す。未來生を說く時、生相增上す。佛は識分を說きたまふ。[83]未來識の生ずる時を名けて生と爲し、名色・六入・觸・受を名けて老死と爲す。前世の愛・取・有は能く今有を集むるが故に此の生に於ては過去と爲す。愛・取は是れ煩惱の分なるが故に說いて無明と爲す。有は則ち是れ行にして現在の三支は能く來生と過去の二枝を種ゑ生死の輪を轉ず。彼の衆生の輪轉するは無明の翳を以ての故なり。八は現在、二は過去、二は未來にして世を差別するが故に是の如く分別す。當に知るべし轉ずる時は一切皆十二なり。

[84]復次に更に餘分の因緣有り、今當に說くべし。迦羅邏より皰と肉段と堅厚と肢節と嬰兒と童子と壯年と衰分と老死分と、是の十種の分に於て緣起を觀察すべし。復次に起住と起緣と入と出と方便分と、乃至餘の一切の分に於て悉く緣起を觀ずべし。復次に是の事起るが故に是の事起るとは、謂ゆる彼の眼と色とは能く、眼識を起す。三事和合して觸あり。受・想・思を生ず。是を修行して異種に緣起を觀ずと名く。復次に修行して方便をもて諸入の緣起を觀じ、明淨の境界を以て向自り諸入の門を觀ずべし。是くの如く見已りて各自相を觀ずる處に諸入を破し、無量の積聚を出し、熟相現じ已りて十方に流注すれば、極智の境界は彼の觀察に到る。明智にして升進する者は修して巧便

【七五】六、觸。
【七六】七、受。
【七七】苦・樂・捨の三受に、憂・喜を加へて五受となる。
【七八】八、愛。
【七九】九、取。
【八〇】十、有。
【八一】十一、生。
【八二】十二、老死。
【八三】三世兩重の因果を示す。
【八四】分段緣起の別義を示す。

に生ず。是を分連縛と名く。[六二]趣とは謂く遍ねく諸趣に至り、修行して諸の趣相を觀ず、是を趣連縛と名く。[六三]生門とは謂く四生相續輪廻して絶えず、是を生門連縛と名くるなり。刹那とは五陰を觀ずるに念念に相續し生滅して斷ぜず、是を[六四]刹那連縛と名く。[六五]成壞とは一切の境界起滅し劫數始終あり、修行して此の成壞の相續を觀ずるを名けて成壞連縛となす。是れ則ち修行して緣起の連縛を觀ずるなり。

[六六]流注とは謂ゆる修行して[六七]刹那流れて怛刹那に至り、乃ち羅婆、摩睺路姤に至ると觀ず、是を流注と名く。迦羅邏分の流注は七日なり。皰・肉段・堅厚乃至衰老分是を流注と名く。起分と住分と起緣分と入分と出分と方便分と一切の正受は、巧便流注して次第に起るを盡く流注と名く。諸趣迴轉すること旋火輪の如し、是を流注と名く。是くの如く一切無量の流注は是れ則ち修行して緣起の流注を觀ずるなり。

[六八]分段とは修行し觀察して分より分に至るが故に分段を說く。能く是くの如く知れば則ち緣起に於て成就す。[六九]謂ゆる無明增上すれば猶盲人の如く見相有ること無し。大黑冥の光明を遠離するが如く、或は前に於て見ること無く、或は後に於て見ること無きは、是れ則ち偏盲なり。若し前後に見ること無ければ是れ二俱盲なり。若し二盲を離るれば則ち癡冥を捨てて明淨なる慧眼を得。是くの如く苦・集・滅・道と佛・法・僧寶とを知ること無き、是を[七〇]十種の癡と名け、十種の癡滅するを名けて十種の慧と爲す。佛は無明を初因と爲して[七一]三種の業を種うと說きたまふ。若し修行して無明の過患を知らざれば則ち三種の業を種う。業起り已れば是より[七二]識を生ず。諸識は幻の如く種種に悉く現じ、識より相續して[七三]名色を起し彼の一身に於て而も二相有り。譬へば虛軟泪爛の物、内に諸蟲有りて外をして動搖せしむるが如し。亦野蠶の初めに繭膜を作るが如く、名色の二相も亦復た是くの如し。乃至諸根の未だ成ぜざるを說いて名色の二相と爲す。諸根既に開けるを名けて[七四]六入

【六二】三、趣連縛。
【六三】四、生門連縛。
【六四】五、刹那連縛。
【六五】六、成壞連縛。
【六六】第二、流注緣起（Prākarṣika-p.）を明す。
【六七】刹那(Kṣaṇa)×120＝怛刹那(Tatkṣaṇa)×60＝羅婆(Lava)×30＝摩睺路姤(Muhūrta)×30＝一晝夜なり。
【六八】第三、分段緣起(Avasthika-p.)を明す。
【六九】一、無明。
【七〇】十種の癡とは、左の如し、
一、緣起の前分を知らず｝偏盲
二、緣起の後分を知らず｝
三、前後分を知らず―二俱盲
四―七、四諦を知らず、
八―十、三寶を知らず、
【七一】二、業(行)。
【七二】三、識。
【七三】四、名色。
【七四】五、六入。

す。是の故に修行して生死を壞し涅槃に趣かんと欲する者は、當に諸根を降伏して境界を遠離すべし。

修行觀十二因緣第十七

已に諸の對治及び所治を說きぬ。愚癡の對治は是れ應に一切諸佛の說きたまふ所の緣起もて、癡冥を滅除して如實智を生じ、甚深微妙なる隨順の功德有ることを分別すべし。今當に略說して、諸の修行の功德を增益して愚癡を滅除せしむべし。緣起を觀察し斷常二邊の諸想を遠離して、因緣和合して有爲の法生ずることを知る。亦能く迷醉の外道を降伏し、牽いて第一空法に隨順して、慧眼明淨に無明を悉く滅せしむ。

[五八] 修行して緣起を觀ずるに四種有り、一を連縛と名け、二を流注と名け、三を分段と名け、四を刹那と名く。連縛に六種有り、一に曰く生、二に曰く分、三に曰く趣、四に曰く生門、五に曰く刹那、六に曰く成壞なり。[五九] 生とは死陰より次で、中陰を起し、中陰の次に生陰を起すなり。中陰の衆生は無明昏亂して愚癡に盲ひられ有ゆる業を造作す。中陰の衆生は男女の和合するを見て、無明增すが故に顚倒の想を生じ、或は害想を生じ或は愛想を生ず。女と俱ならんと欲する者は男に於て害心を生じ、然して後自ら彼と和合すと見る。爾の時に欲心迷醉す、是を愛は身見を起すと名く。和合せる不淨を謂うて已が有と爲す、是を慢は身を起すと名く。母の飮食によりて增長することを得て、身をして敷起せしむ、是を食は身を起すと名く。四大は迦羅邏と俱に生じて報身を得、是を四大は身を起すと名く。結業、方便と爲りて[六〇] 二支旣に過ぎ次第し識種生ず、是を種子識と名く。始め迦羅邏に處する時、其の心沈沒して識知する所少く識は明利ならず、是を名けて生と爲す。迦羅邏を得已りて識明利なるが故に是を名けて識と爲す。是を生連縛と名くるなり。[六一] 分段とは迦羅邏より次に胞を起し、肉段となり、堅厚の肢節となり、嬰兒となり、童子となり、盛壯するや衰分老分次第

【五八】 以下緣起の四種を明す
第一連縛緣起(Sāmbandhika-pratityasamutpāda)を明す。
【五九】 一、生連縛に就いて。
【六〇】 二支とは、無明と行となり。
【六一】 二、分段連縛。

現す。內入は空聚なり、外の色・聲・香・味・觸及び三世・三種の法、善と不善と無記の一切は悉く現じて其の眞實を觀ず。

復次に外の六入は賊の如く、內の六入は空聚の如し。亦內外の入を說いて此の彼岸と爲す。此の十二入の諸の勝妙なる相は增廣なること無量にして、佛の說きたまへる修多羅の中に廣く說けり。

復次に修行者は此の境界に於て熟相起り、起り已つて復た壞す。間間に斷離の相有り、斷離の相は極遠に流注して一處に停住し、寶瓶に水を盛るが如く、然る後還つて開けて漸く寂滅を見る。寂滅し已りて復た諸の餘の一切の功德相有りて諸入門中に生ず。常に雜相流出し各各に出で已りて、復一處に於て曼荼邏を成じ、曼荼邏の上に復た自相有りて起り、起り已つて復た熟し、熟し已て久しからずして寂滅す。然して後、修行して復た專精を加へ、更に淸淨微妙なる禪相を現じ、現じ已りて前の如く次第に寂滅す。

復次に修行は諸入の中に於て、更に種種の妙相有りて、心を繫くる處に於て決定の相起るを、譬中の明珠と名け三昧に喩ふ。修行して自ら身を觀じて二分の衆寶藏と作し上に寶蓮花有り、修行して自ら身の蓮花上に在りて衆寶の妙花莊嚴圍遶せりと見る。

復次に世尊は修多羅に六衆生の喩を說きたまへるが如く、行者此に於て具足して觀察すべし。所謂眼は狗と爲り走りて五色の村を逐ひ、耳は鳥と爲り空聲に隨て起り、鼻は毒蛇と爲り香穴に隨逐し、舌は野干と爲り五味の死屍を貪り、身は[五七]輸收磨羅と爲りて常に樂みて觸海に入り、意は猨猴と爲り常に樂みて三世の法林に遊縱す。若し六種の衆生を一處に繫著すれば、自在に各々所樂に遊ぶこと能はず。修行も是くの如く三昧の正念を以て六根を繫縛して、自在に所緣に馳散せしめず。然る後、淸淨の智を以て法の眞實を觀ず。癡冥の凡夫は六境の中に貪著して無量の惡法を悕望す。是くの如く正觀すれば、悉く能く一切衆生の境界に樂著し、自ら障礙を起し涅槃に至らざるを除滅

【五七】輸收磨羅（Śiśumāra）は、海豚（いるか）のこと。

を生ずれば麁澁の四大滅す。是くの如き等を修行憶念中の相と名く。

復次に三種の中に更に雜相の惱亂し、障礙し失念して意任せざる有り、不善の惡業を悔過して守死して爲さず、夢中にも犯すこと無く、持戒を增益せんことを請求すべし。佛の說きたまはく戒を花鬘・塗香・莊嚴の衆具と爲す。香風一方より來るは是れ世界の香なり、諸方より來るは是れ戒德の香なり。或は身に手・足・眼・耳・鼻・舌無く、一切の肢節悉く完具せず、或は身は塵埃に沒し、或は自身より諸の塵垢を離れ、澡浴して身に塗り名衣の上服ありと觀察すれば、是を修行して依・緣・憶念に於て、尸羅の種種の雜相を觀察すと名く。威儀と定共と道共との三種の戒も悉く已に中に於て說く。此の三種の戒は更に無量の諸の深妙なる相有り、明智の者は當に廣く演說すべし。

修行し已りて淨戒を觀じ諸入の山を破せんと欲せば當に二法を修すべし。所謂止と觀となり。先づ當に觀ずべし、惡を離れて悅樂其の身に充滿し、麁澁の四大滅して柔順の四大生じ、寂止の樂に趣き一心にして亂れず、自ら內身に於て心を入相に繫げ、當に善く入相の所起の處を守護すべし。觀察する時白淨の相起らば、比丘は此の相を見て當に善く守護して、佛の所說の如くすべし。譬へば伏雞の善く其の子を護りて必ず成就を得るが如く、比丘の修行も亦復た是くの如し。專精に守護すれば乃ち成就することを得て、十二の修果の相現じて分明なり。修行して善く守護する時諸の放逸を離れ、修果成就すれば境界淨妙にして諸の垢汚を離れ、明なること寶珠の如く亦懸水の如し。境界廣く滿ちて身處の少分周遍し遠流し、然る後に來還し、還り已りて一相現じ、復た分れて二分と爲り還り合して一と爲る。曼荼邏の境界を成じ、平正に安住して普ねく衆相を現ずること、猶衆星の光耀布列するが如し。然る後に乃ち壞し、壞し已りて各各に流出し還て合して一と爲る。復た周遍して遠流し諸方に充滿す。諸方に充滿し已りて復た還りて安隱に堅住し、住し已りて熟相現ず。熟相現じ已りて種種の衆相有りて周遍して彌よ廣し。微妙の器服、諸の奇特の相悉く境界に

處に隨つて熱時清涼なるが如し。淨戒も是くの如く煩惱の火中に於て能く熾然を息む。犯戒の比丘は自ら惟ふに罪深くして、身逝き命終りて必ず惡道に入ると、心常に憂悔し死する時恐怖す。淨戒の人は心常に歡喜し生れては憂悔無く死する時安樂なり。淨戒を梯となして能く慧堂に升り、戒を莊嚴の具と爲して亦善き戍衛と爲す。戒は能く人を將ひて涅槃に至らしめ、戒は良地と爲りて十善の種子を生じ、教誡師、水を時に隨て漑灌すれば信根則ち生ず。無漏の陰は幹と爲り、〔五五〕四如意は華と爲り、慈心は枝條と爲り、少欲知足は柯葉と爲り、七覺意は華と爲り、解脫智は果と爲り、寂滅法は甘露と爲る。戒香流出して一切普ねく熏じ、賢聖の鳥王は其の間に棲宿す。悲は重陰清涼たる廣覆と爲り、辯才法師は蜜峰王と爲る、和聲もて相顧み、精味を背め採る。其の樹修直堅固にして貞實なり。虛僞諂曲腐病有ること無き、是を則ち名けて功德の大樹と曰ふ。諸の修行者涅槃に趣き三世の苦に背き、解脫の城に向はんと欲せば、漸次に諸善の功德を發行して彼の樹下に息ひ、法の甘露を飮みて三渴の患を止め、其の身を安隱にして能く涅槃に至らん。

復次に戒に衆多の數有り、或は一二三四、或は七、或は十二、或は二十一、若しは念念須臾の頃に則ち無量の戒種有り。〔五六〕道共・定共・倶生戒・正語・正業・正命、心とともに廻轉す。此の諸戒を觀ずるに其の相は各別にして、或は淳淨無垢或は輕薄明淨なり。是くの如き無垢の戒相境界に現ずれば、修行して依・緣・念の三處に於て戒相を觀察するに、若し塗香・柔軟・離垢・悅樂・明淨・潔白なれば、是れ所依中の相なり。若し其の地平廣にして妙華・寶器・嚴飾の具・衆寶滑澤なれば、是れを修行境界中の相と名く。譬へば犛牛の尾を護りて、一毛も樹に著かば樹を守りて而も死すとも毛をして斷たしめざるが如し。比丘の戒を護るも亦復た是くの如く、一微の戒も守死して犯さず、妙相身を嚴にし衆好具足すること、猶ほ秋月の虛空に停り照すが如し。三昧を修行し此の淨相を觀じ已れば、乃至命終るとも復た憂悔無く、亦熱惱無く復た恐怖せず。安悅歡喜し踊躍增長して、寂止の樂

【五五】四如意足及次の七覺意の名目は坐禪三昧經卷下の註を見よ。

【五六】道共戒は、無漏道に入ると共に具はる戒を云ふ、定共戒は禪定に入ると共に具はる戒を云ふ。倶生戒は或は性戒（本來守るべき戒）のことか。而して三本には倶生戒戒と作せり。

の如きの正觀を勤修すべし。現法樂の爲の故に、後世に大明を作すが爲の故に、一切苦の本を斷ずるが故に、衆生を饒益するが故に、況んや凡夫に於て空しく所得無く、而も自ら放逸にして勤めて修習せざるをや。五陰を觀じ竟る。[五二]［達摩摩那斯伽邏の達摩は法謂ゆる世間第一法なり、摩那斯伽邏は謂ゆる一に心に經るなり。譯者義をもつて思惟と言ふ］

修行觀[五三]入第十六

六入は各々境界に於て無智の衆生を縛し、貪欲の心の故に常に淨想を起す。修行して當に知るべし、諸根の境界に於て非法を防制し、心の所緣を攝して繫めて動ぜざらしむべし。正に六入を觀ずるに譬へば空村の如く、我我所を離る。[五四]不定の義は是れ入處の義なり。牽下の義も是れ入處の義なり。能く衆生を將いて惡道に入る。又内入の相は燒けたる鐵鏘の如く、極利なる劍の如く、亦利刀の如し。佛の言はく若し此の相を觀ずれば則ち能く捨離すと。復次に外入は惡賊なりと觀ず。善の珍寶を劫むればなり。若し修行するに正念を捨て諸入の門を開き、馳せて六境を縱にすれば、六境の惡賊淨戒を劫奪して諸の功德を失ふこと、鳥の兩翼無くして而も空を飛ばんと欲し、人の兩足無くして而も遠きに遊ばんと欲するが如し。修行も是くの如く淨戒の功德を毀るが故に、止觀の兩翅永く復た生ぜず。生死を出でんと欲すれども是れ終に能はず。破瓶に水を盛るに須臾も住せざるが如し。破戒の比丘も亦復た是の如く、三昧の法水は念頃も住せず。天の德瓶守護して壞せざれば常に珍寶を出すこと意に隨て盡くること無きが如し。修行も是くの如く淨戒を毀らざれば則ち常に聖功德の寶を出生す。輕んじて德瓶を壞すれば珍寶卽ち滅せん。若し戒瓶を破れば則ち永く法寶を失す。譬へば人の鼻を截られて鏡に照すに自ら喜樂せざるが如し。破戒の比丘も亦復た是くの如く、内に其の身を省みて心自ら悅ばず。百穀の藥木は地に依つて生じ、諸善の功德は悉く淨戒に依る。栴檀を身に塗り能く熱惱を除くが如く、淨戒は清涼にして能く欲火を止む。如意寶珠の所著の

【五二】［　］内は解釋挿入の句なり。

【五三】入とは處(Āyatana)のこと、六根を内の六入とし、六境を外の六入となす。

【五四】不定の義、牽下の義、入處の義とは、入の原語なる Āyatana の字義を色々に解釋したるものなるべし。六入、十二入などに用ふる場合の Āyatana は、入處の意味が正當なれども、此の語の語原なる yat 及び其の類似語原 yam には、保つ、制定す、引下ぐ、などの意味ありて、而も名詞として成立したる形は大體同じになるを以て、同じ Āyatana に、不定の義、牽下の義、入處の義ありと言いしならん。卽ち

ā+yata(√yat)+na＝入處
ā+yata(√yam)+na＝牽下
a+yata(√yam)+na＝不定

には非るか。

所謂病の如く、癰の如く、刺の如く、殺の如く、無常と苦と空と無我となり。四は是れ聖行にして、四は聖行に非ず。苦陰に於て決定して其の眞實を觀ず。是くの如きの四諦十六の聖行は是れ則ち煖法を修行するの初相なり。眞諦の地に於て眞實の慧を得、苦陰は燒鐵丸の如く亦堅固なること無しと觀察して、涅槃に向ひて生死に背き有を貴ばず生を樂はず。譬へば群獸の獵師に圍逼せられて、急を怖るゝの力を以ての故に超勇奔出するが如し。修行も是くの如く生死の熾然なる大苦の圍迫を見、厭智の力を以て超出無礙なり。復次に修行者は思慧生ずる時煖法の種起り、息止の修慧生ずる時煖種增長し、煖の自地に到り煖相滿足す。息止の修慧生ずる時頂法の種起り、煖法生ずる時頂種增長し、頂の自地に到り頂相滿足す。煖法生ずる時忍法の種起り、頂法生ずる時忍種增長し、忍の自地に到り忍相滿足す。復次に五陰に於て悅可するを名けて煖法と爲す。煖法に五陰を觀じ三寶に於て悅可するを名けて頂法と爲す。頂法に[四七]十八界を觀じ四諦に於て悅可するを名けて忍法と爲す。忍法に十二入を觀ず。俱に三種を觀ずるに、彼の善根の一增上するに隨ふが故に差別有りと說く。是の一切は盡く眞諦を觀ずるも但だ忍のみ眞實に於て觀增す。煖法は想增し、頂法は信[四八]觀喜增し、忍法は智慧增す。復次に修行に三種の緣有り、謂ゆる上と下と諸方との三種の善根なり。此の三緣各ゝ一を增上するに依ての故に說く。[四九]復次に三種の修あり。煖は厭離に依り、頂は勸喜に依り、忍は平等捨に依り、亦彼の善根の一增上に隨ての故に說く。當に知るべし一種の修盡く三法を成就す。

復次に修行は當に知るべし、譬へば人有り五怨賊有りて刀を拔き隨逐して常に害を加へんと欲するが如し。前後の五陰轉じ相い煎逼するも亦復た是くの如し。佛の言はく[五〇]阿鼻三磨耶を求めんと欲せば、當に[五一]達磨摩那斯伽邏を作せと、常に眞實義を觀じ聖行の刀を以て陰賊を斷除すべし、劣夫の如くなる莫れ、杖を執ること能はずんば彼の爲に害せられん、乃至一切の賢聖も皆應に是く

【四七】十八界は、六根・六境・六識。十二入(十二處)は六根・六境なり。

【四八】觀喜を三本には歡喜に作る。

【四九】故說の次に割註〔悅可本云出設〕。

【五〇】阿鼻三磨耶(Abhisamaya)は、現觀と譯す、四聖諦の理を現在に平等に觀じ解することにて、見道位の働きなり。此の下の割註に曰く〔此は是れ見道を名けしなり〕。

【五一】達磨摩那斯伽邏(Dharma-manaskāra)とは、作意して無漏法を思惟すること、執杖を三本には報讎に作る。

自ら其の身を顧みて周遍觀察す。觀察し已りて復外に陰相を觀ずれば、盛火熾然にして卽ち厭心を生じ、勇猛精進して生死無邊の苦海を度らんと欲す。修行して五陰の熾然なる相に於て厭離し已れば、離欲の相・解脫の相・涅槃の相・一切功德の相次第に起り現ず。

復次に修行者は七處の觀を具して五陰の苦・集・滅・道を觀ず。復愛に因りて生ずる五陰を觀じて厭患し出離す。是くの如く眞諦の中に於て方便もつて種子の慧を生ず。是の七處に於て善く三種の觀の義を修し、自相の觀成し、決定堅固を成就し已りて、然る後に無垢息止の修慧を得、是の慧起り了れば境界平正にして淳一無雜なり。復次に勝妙なる無垢の思慧を得、決定して五陰の興衰念念磨滅するを觀ずれば眞實の相を見る。譬へば毒飯を食する者は必ず死するが如く、修行して五陰に三相の雜ふる所を觀ずるも亦復た是くの如し。一念生ずれば一念苦なり、卽ち一念の時に亦は生じ亦は住し亦は滅す。彼の念生ずる時卽ち苦と倶に生ず。是の故に一念一念卽ち壞するなり。修行して五陰の是くの如き生滅を觀じて、虛僞無常の過惡を破壞す。卽ち無常の行、苦の行、空寂の行、無我の行を起すは穿漏の法・不實の法・速朽の法・破壞の法なり。是くの如きは無常の義なり。修多羅に廣く乃至百句を說けるが如し。修行して盡く是くの如きの諸相を行じて諸法の眞實を知れば便ち解脫を得、賢聖地の三昧の想行を以て此の非常の相を觀ずれば、便ち深き憂厭を起して有爲の過患を見て三有を樂します。

復次に修行者、若しは生則ち滅に非ずと觀じ、若しは滅則ち生に非ずと觀ず、是くの如くんば則ち進行を生ぜず。要らず一心一相にして正に解脫に向ひ然る後に智を生ず。是れ聖行を決定するなり。聖行既に起らば一切の法相寂滅して餘すこと無し。癡愛の煩惱及び諸の罪垢は能く轉じて、苦陰なる者皆悉く除滅し、滅し已りて其の心調伏す。是れ五陰無我にして亦我所無しと見る。無常の諸行を以て苦陰を觀察し、苦陰を觀察するに[四六]八苦の逼迫有り、八苦の相に於て八行を成就す。

【四六】八苦とは、生・老・病・死の四苦と、愛別離、怨憎會、求不得・五陰盛とを加へたるもの。

昧・牛王三昧・象王三昧なり。心放逸無きが故に此の雄相を起し、修行して此の獸王三昧に住し、各其の類に隨て一切悉く攝す。又三昧の力にて男女の十相起り類に隨つて一切衆生を相攝し、是に於て悉く現ず。若し能く此の諸の三昧の相を分別して恐怖せざれば、是れ則ち名けて一切諸法に於ける自在功德と曰ふ。

復次に修行者は明淨の境界に於て陰流を觀察して、一處より出でて分ちて二分と爲す。是くの如く觀じ已りて還た合して一と爲し、一一の流の中に復五相を見る。相は各別異にして境界を布列し、境界を布列し已て還た合して一と爲す。色は聚沫の如く受は水泡の如く、想を觀ずるに炎の如く、行は芭蕉の如し、識を觀ずるに幻の如し。是の五は虛妄欺誑の相なり。修行して是くの如く觀じ已れば其の身は安穩に柔軟快樂なり。復た流の所起の處を觀ずれば無垢の相現じて、水の淨き泡の如く漸漸に增長して其の身に充滿す。修行して心放逸ならず專念に受持し、持し已りて淨相增廣周遍して、身を覆ひて明淨なる泡の如く、諸の過惡を離れ、更に勝妙の智を生じて、乃ち是の相を壞す。是の相既に壞すれば彼の流流れ下りて遠く注すること無量にして、淨頗梨の如く極めて境界を知る。極めて境界を知り已れば、彼に從て攝還して曼荼羅を成す。更に異相有りて本處に充滿し、然る後に流れて十方の無量世界に至り、十方に至り已りて各自相に住す。爾の時、修行して明に無量の色種を見るに、猶ほ山水の聚沫を漂積するが如く、一切の受の相は大雨の渧泡の如く、種種の諸想は春時の焰の如く、行は芭蕉の堅實有ること無きが如く、六識の種を觀ずるに猶幻化の如し。是くの如く種種虛妄にして但愚夫を欺誑す。是れを修行して陰の自相を觀ずと名く。

陰の自相を觀じ已りて復た智慧を以て自ら其の身を照し專念に觀察す。觀察する時、周匝して熾然の相起り、身は其の內に處して種種の雜華淨妙なる珍寶有りて周匝して身を遶ると見る。又自ら身を見れば、種種の雜寶諸の功德の相は微妙に莊嚴す。修行して是の諸相を見已りて慧眼開廣し、

て各自ら相有るも、捨無量は彼と同じからずと。謂ゆる平等清淨にして苦樂の相を離るれば捨の想似の相現ず、是を捨無量三昧と名く。世尊說き玉はく、捨無量乃至無所有處を修すと。已に略して四無量の相を說く。餘の種種の甚深なる相は行者應に次第に修習すべし。

修行觀陰分第十五〔四五〕

若し修行者久しく功德を積み曾て禪定を習へば、少しく開示を聞き其の本緣を發して、卽ち能く思惟し、五陰を觀察して深法に了達すべし。生死を滅除すること猶大風の重雲を飄散するが如く、亦一切の魔の所樂の法を斷ず。五陰を觀ずるの義今當に說くべし。

修行者內に自ら思惟し、煩惱の海を渡らんと欲して離欲を起せば潤澤を生じ、自身に快樂充溢の四大滅して隨順の四大生じ、諸の亂意を攝して能く究竟に趣き智慧を成就す。若し根本の觀處堅固明淨ならば能く三昧を起して、諸の亂想を離れ煩惱を滅除し、諸の微妙の相は是に於て悉く現ずること、淨妙なる瑠璃の如く水の淨き泡の如し。行者は此の明淨無垢の相を見て善念を起し、守持して心放逸ならず。既に放逸ならざれば則ち熟相起る。熟相起り已れば壞相現ず。壞相現じ已れば唯法想を起して一切寂滅なり。是くの如く法相を修行し具足し成就すれば、增上の厭離を得て、意堅固に精進し、動轉すべからずして甚深三昧・堅固三昧・不動三昧を得るなり。修行して是の三昧に住すれば能く五種の明淨なる三昧を起して遍く五道を照す。月光三昧・日光三昧・淨瑠璃三昧・練金光三昧・無垢頗梨三昧なり。此の五種の明淨なる三昧に因りて、復た光耀三昧・遍光耀三昧・無量光耀三昧を生ず。

復次に修行者は五種の壞相に因つて能く諸緣を壞す。一には曰く穿、二には曰く剝、三には曰く裂、四には曰く壞、五には曰く滅、是の五壞相を以て一切の法を壞す。五種の三昧を修行して境界を壞し、悉く清淨にし已りて次に復た五種の三昧の相を生ず。師子王三昧・龍王三昧・金翅鳥王三

【四五】陰とは、蘊(Skandha)のこと、色・受・想・行・識の五蘊を觀ずるなり。

慈心と名く。若し先づ衆生の無量の苦を受くるを觀ずれば不饒益を除くの心を起し、然る後に衆生の不饒益を除かしむ。不饒益を除き已れば種種の樂を受く。樂を與ふるに非ざるなり、是を悲心と名く。淨相を見るは是れ慈にして、虛空の相を見るは是れ悲なり。樂行は是れ慈にして、苦行は是れ悲なり。是れ則ち差別なり。謂ゆる修行者は諸の衆生を見るに、兇暴にして諍怒し、殘賊にして殺害し、共に相逼迫して覆護すること有ること無し。是くの如く見已て而して悲心を起して爲に覆護と作る。又衆生を見るに身・首・耳・鼻・肢體を斬截せられ、苦痛無量なれども能く救ふ者無し。修行し見已つて悲心を起す。又修行して悲心に住する時、五趣の衆生の苦痛熾然にして無量に燒迫せらるるを見て、深く悲心を起し救護の想を興すべし。是くの如く悲無量を修行して善根生ずる時、無量の功德の相現ず。若し此の衆生の無量の苦を受くるを見て、而も悲を起さざるは是れ則ち極惡無善根の人なり。是くの如きの大悲は一切諸佛の本修習したまふ所にして、是れに由りて一切の智海を究竟す。行者若し能く具足して修習すれば、當に知るべし、久しからずして必ず是の處に到らん。

[四〇]喜無量とは謂はく修行して慈の境界に於て、[四一]六思念等の諸善の功德、無量の佛法及び自身に成就せる戒定智慧の一切の功德を以て衆生を饒益し、自樂他樂盡く皆之を與へ、一切衆生の法樂を得るを見已つて其の心歡喜し、其の心歡喜すれば則ち憂戚滅す。憂戚滅し已れば一向に欣悅し踊躍歡喜して念言すらく、快い哉永く一切衆生を安樂ならしめんと。歡喜する時、樂相有るを見、輕微にして明淨なり。此の相を成就するを名けて喜無量三昧と爲す。佛の說きたまふ如く、喜等乃至[四二]識處を修集すと。

[四三]捨無量とは怨親を捨て已つて等しく中品を緣ず。此れ唯是れ衆生にして差別有ること無く、慈悲喜を離れて唯衆生の行を作し[四四]近境界の近相なり。是の故に世尊捨を說きたまふに、種種の捨あり

【四〇】三、喜無量心(Mudita-[illegible])。

【四一】六思念とは、念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天の六念のこと。

【四二】無色界の第三、識無邊處定のこと。

【四三】四、捨無量心(Upekṣā-[illegible])。

【四四】三本には近境界現に作る。

其の[三七]修行者の意の想念する所に隨つて、無量の法樂を等しく衆生に與ふ。相現在前して樂想起り已れば一一に觀察して相を以て自ら證し、便ち決定することを得ること、猶明鏡の物に因りて像現ずるが如し。慈三昧の鏡も亦樂事に因て種種の樂相悉く現在前す。

或時は修行、瞋恚の爲に亂さるゝも是の思惟を作すべし。我れ本よりこのかた是の瞋恚によりて殺害する所多く、諸の罪逆を興して惡道に入り、大地獄に於て還て苦毒を受け、或は蜂・蠆・蜈・蚣・毒蛇・惡龍・害鬼・羅刹、是くの如き種種の毒害の類と作る。今除滅せざれば復[三八]燒迫せられん。是の方便を以て能く瞋恚を止む、又復た思惟すらく、罵る者も受くる者も彼も我も無常にして須臾も住せず、二ながら倶に過ぎ去り惡聲已に滅して後、二人故無きに共に諍を起すと、又今の二人は念念即滅なれば虛妄にして實無し、誰か罵り誰か受けん、何爲れぞ顚倒して空と共に鬪はんや、我が耳根を計するに虛妄顚倒煩惱の業より起る。彼の人の舌根も亦復た是くの如く因緣生滅す。誰か罵り誰か聞かんや。修行して是くの如く思惟する時、瞋恚の縛解け能く慈心を修して離垢清淨なり。

佛の說きたまふ如くんば、慈を修する者は四念處に於て能く決定を得て、修習し增廣して無量の法門、勝妙の道果を成就して復た退還せず、是れ則ち三種の方便の大慈なり。若し已に離欲すれば更に淨妙なる離欲の慈心を修すべし。深心に饒益すること增廣無量にして眞實の果を得。此の功德に因りて所願を具足し涅槃を究竟す。所以は何んとなれば、一切の諸佛は慈を說いて無畏と爲し、慈を一切功德の母となし、慈を一切功德の鑚燧と爲す。慈は能く凶暴の諸惡を消滅す。是の故に修行して當に方便を勸め離欲の大慈を修すべし。

[三九]悲無量とは慈の境界の怨・親・中人の如く、悲も亦是くの如く次第して修習す。佛の言ふが如し。曰く衆生を饒益するを說いて慈心と名け、不饒益を除くを說いて悲心と名く。若し先づ衆生に於て饒益心を起して種種の樂具を以て悉く之を施與し、然る後に衆生を觀じて唯だ樂を受けしむ。是を

【三七】大正本には修行意とあれども、三本によりて修行者意と改む。

【三八】三本には燒迫に作る。

【三九】二、悲無量心(Karuṇā-[illegible])。

て外に青黄赤白なり。一切入は四大と四色と空・識なり。外及び內身を觀ずれば一相にして差別無く、諸結の妙願智、無諍の三摩提、逆順と超越との無量の三昧門を明智は決定して觀じ、五種の滿を具足す。一には身、二には境界にして定相普ねく周遍す。第三には憶念滿、喜厭捨を修行す。第四には諸地滿、十處の相明了なり。三乘の根具足するを是を第五の滿と說く。界方便成就して久遠の癡冥滅すれば能く意をして清淨ならしめ無垢なること虛空の如し。是くの如き諸の功德は一切悉く究竟す。

修行四無量三昧第十四[三五]

修行者若し廣く慈心[三六]を修めんと欲せば、先づ當に、心を所緣に繫め、漸く習して無量に過惡を滅除し、心諍競せず怨結無く、恚無く清淨ならしむべし。謂ゆる親・中・怨の三種九品の衆生は無量無數にして、十方盡く三分の際に安處するに於て、淳一に行ぜんことを樂ふ。唯國土世界を除き衆生の世界に於て、周普して總て緣ずれば成就して遊ぶ。行者慈方便を修せんには先づ等心に思惟し總に一切衆生を緣じて、心をして堅固にし瞋恚を滅除して慈心を起さしむ。是を總觀慈無量三昧と名く。是くの如く總觀するも猶瞋恚の爲に縛せらるゝ者は、當に上親に於て別相の慈を修し、次に中親・下親・中人・怨家に於て次第に九品の慈心を修習し、漸く瞋恚の心を離れて愛念を生じ種種の樂具を與ふべし。是の樂を與へ已つて然る後に、一切の衆生に於て法饒益の心を起して三種の慈を修すべし。廣大の慈と、極遠の慈と、無量の慈となり。瞋礙を捨除して仁愛の心に住し、其の所應に隨て功德善根一切の佛法皆悉く之を與ふ。謂ゆる種種の法樂を與へ種種の慈を修し、先に出家の樂を與へ次に禪定正受の樂を與へ、次に菩提の樂を與へ次に寂滅の樂を與ふ。彼の修行者の本曾て更る所・及び未だ更ざる所、種種の樂具、自得他得の清淨の善根、乃至無上の寂滅究竟の無爲、

【三五】四無量心(Catvāri-apramāṇa-cittāni)とは、慈・悲・喜・捨の四なり。
【三六】一、慈無量心(Maitri-ā.)。

ると三昧との五支の明了なり。所依の青瑠璃は清淨にして甚だ微妙なり。少身を緣することと無量なれば諸根次第に起る。[二六]第四には苦樂を斷ず。憂喜先づ已に滅し不苦不樂と捨と念と淨と三摩提と是くの如き四支の相は身及び境界を現じ、出息入息滅して所依極めて淳白なり。[二七]色を過ぎて有對を滅すれば是を空處に入ると說く。空相を過ぎれば識定にして、識を過れば無所有なり。是の無所有を過れば非想非非想なり。善く諸界の相を知りて味せず亦縛せず、清淨の四梵行高廣にして量有ること無し。慈悲普ねく周遍し喜捨亦復た然なり。

根本四禪の中に[二八]五の神通を修起す、三昧現在前するとき心を繫けて自身を觀ず。輕及び軟想を作して漸く擧げて動かしめざれば、境界現在前して地を離るること胡麻の如く、稍進みて大麥の如く、轉次に高きこと四指のごとし。此の床より彼の床に至り、漸漸に能く意に隨つて飛行し、及び變化すること自在にして障礙無し。是を修行者の微妙なる神通力と名く。[二九]心を自心に繫けて禪定現在前するとき、諦に外の音聲を取れば其の實の如く皆聞く。[三〇]心を自身に繫めて禪定現在前するとき、他の心の所念を觀ずれば一心に皆悉く知る。[三一]心を自身に繫めて禪定現在前するとき、自ら此の生の胎よりし、及び[三二]中陰なるを憶念し、漸く前身の事を見、乃至百千劫の一切の諸の更る所を實の如く憶念して知る。[三三]心を自身に繫め禪定現在前するとき、衆生類の生死及び形色を觀察し、其の業と果報と中陰と五道の生とに隨て修行すれば、天眼淨く一切は實の如く見ゆ。根本諸地の中に無量の餘の功德あり。修行の心自在なれば一切は悉く具足す。所謂[三四]八背捨と勝處と一切入となり。背捨の相に五有り、不淨と淨相と色相と煩惱と識となり、略して是の五相を說く。勝處は自身を先にすれば內色と外の少色との、若くは好若くは醜は一なり。外の多の二も亦然なり。內に色想行ること無く外に少多の色を觀ず。二は俱に若しくは好醜なり。是れ前の四勝處なり。後の四は內は無色にし

【二六】第四禪の四支は、不苦不樂・捨・念淨・三摩提(定)なり。

【二七】色界を過ぎて無色界に入り、空處→識定→無所有→非想非々想と次第して四無色定を經るなり。

【二八】以下五神通を示す、第一神足通(Riddhividhijñāna)。

【二九】天耳通(Divyaśrotra)。

【三〇】他心通(Paracittajñāna)。

【三一】宿命通(Pūrvanivāsānusmṛtijñāna)。

【三二】中陰(Antarābhava)とは、中有とも云ふ、今生と來生との中間存在の五蘊身を云ふ。

【三三】天眼通(Divyacakṣus)。

【三四】八背捨、八勝處、十一切入等は禪祕要法經卷中及坐禪三昧經卷下の註を見よ、今本文には之等を纏めて以下に略說せり。

處は世尊の說ける所なり。　愛慢の諸の煩惱は悉く是の中に於て起る。　是の身は衆微合し、虛妄空にして主無く我に非ず衆生に非ざるに迷惑して眞實なりと計す。　佛は〔二二〕羅睺羅に告げてのたまはく、界は悉く無常なりと觀ずれば、是くの如き六種の界は六處に從つて起り、六巧便を修習して六時に各一を觀ずと說く。　色處には悉く具足し、無色は唯だ識界のみなり。彼の種の所依の處、相行の地の境界、對治と所治と、實の如く分と數とを知り、身中の諸界種は還て自ら苦惱を生ず。　譬へば毒蛇を養ふて終に彼の爲に害せらるるが如し。　四大は造色を生じ即ち造色と共に住し、和合し相間錯し還て四大の爲に壞せらる。　不淨方便の觀は先づ造色に於て起り、安般方便の念は要らず四大より始む。　若し彼の修行者にして二方便を增廣し、四大及び造色を和合して等しく觀察すれば、始めて根本處に入る。　彼れ先に造色を壞し、入り已つて然る後に因る所の四大の壞を觀じ、定慧漸く增廣し念處具に成就す。　和合して總に觀察すれば一切悉く寂滅にして、彼の三十六物の臭穢は壞して磨滅す。　此の三と十想とは修行して厭離を增す。　佛は是の根本は能く一切の惡に及ぶと說きたまふ。　四十九種の法三昧、中に於て起る。

修行し諦に觀察すれば、自身と及び欲界とは無量の不淨種にして穢惡悉く充滿す。　衆苦に逼迫せられ盛火極めて熾然たり。　無常變壞の相を見已りて厭離を生じ、色界相似の種に微妙の相顯現す。　深く樂つて出離を求め厭患の想を增進すれば、〔二三〕覺有り亦觀有り欲を離れて喜樂を生じ、寂然として初禪に入り內外悉く清淨なり。　所依と及び境界とは練れる眞金の像の如し。　自身は梵世に處し中に於て娛樂を極め、又五支の相の身及び境界現ずるを見る。〔二四〕第二に覺觀を滅す。　內淨にして心は一處なり、定に從つて喜樂を生じ、四支は身內に現ず。所依及び境界は譬へば眞の珊瑚の如し。〔二五〕第三には離喜に處し行捨と念と慧除と身に樂を受く

〔二二〕羅睺羅（Rāhula）は、釋尊の嫡子なり。

〔二三〕初禪には五支（心作用）あり、覺・觀・喜・樂・寂然之れなり。覺・觀・寂然は、新譯にては尋・伺・定と云ふ。

〔二四〕第二禪の四支は、內淨・心一處（定）・喜・樂なり。

〔二五〕第三禪の五支は、行捨・念・慧・樂・三昧（定）なり、

し、沮み難きこと金剛に喩[一八]へたり。金剛の慧は能く壞す、上の曼荼羅に於て則ち熱相有り
て現ずること、譬へば火の熾然たるが如く、能く彼の堅固を破す。或は見て疑怪を生じ其の
心大に恐怖するも、明者は能く決定して諸の功德を增益す。已に虛空界を壞すれば能く升進の
相を起し、融壞すること流注するが若く復た碎くこと塵壓の如し。修行して眞實を見れば則
ち解脫の相を生ず。
空界既已に壞すれば上の諸界も亦然なり。是れ則ち壞相の上に餘の壞相の起ること有り。
若しくは復餘の一種も上に於て諸界を觀ずるに次第に普く周遍す。倶に壞すること前に說け
るが如し。[一九]六六種、六三及び四二と是くの如く六十二を觀察すべし。世尊は略して界を說
き玉ふ。色の壞に三種有り、刹那と世と極微となり。無色は唯、二種のみにして無爲には
壞相無し。界不淨念を修すれば則ち能く貪欲を捨つ。界方便觀に順ふは是れ我慢を治する
の藥なり。界四無量を觀ずれば瞋恚の毒を除滅す。[二〇]
阿難是の言を說けり、當に五念處を修すべしと、世尊之に告げて曰はく更に第六念有りと。
髮・毛・爪・齒・骨・筋・肉・厚薄の皮、肪・𦙶・髓・腦・膜・脾・腎・心・肝・肺、胞・胃・大小の腸、屎・尿・
膿・涕・唾、垢汚諸の血涙、黃白及び痰癊の三十六の不淨に、三種の界を觀察す。是の中濕相
は水にして火は熱く地に堅强なり。諸有の形色の處に内外の飄動する相あり。出入の息、
語言の通利等は廻轉す。一切を總じて五と說き是の相を風界と名く。眼・耳・鼻・舌・身・毛
孔・咽喉の空、山巖室宅の中に内外障礙無し。是くの如きの一切種を悉く名けて空界と爲す。
彼の六情根に於て生ずる所の諸の識種は、是くの如く多きこと無量にして總じて說いて識界と
名く。佛の言はく應當に知るべし六界は我有るに非ず、陰界の相を觀ぜざれば我及び我所を
計す。一切内外の界は是處に意廻轉す。是の意の行處に從て、[二一]三受と十八種と六觸及び四

【一八】喩を三本は踰に作る。

【一九】六六種、六三、四二、六十二に就いては卷末の註記を見よ。

【二〇】除滅瞋恚毒の下に割註あり〔一無常の頌を刹那と名く〕。

【二一】三受は、苦・樂・捨の三。十八種は、根・境・識の十八界。六觸は、眼・耳・鼻・舌・身・識の六觸。四處は、身・受・心・法のことか。

く。

修行觀界分[一五]　第十三

安般と不淨念との退住と升進と決定との眞實の相を、悉く已に分別して說きぬ。界の方便を修行する廣略差別の相の甚深微妙の義を今當に次第に說くべし。先に安般と不淨念とを修習し、然る後に諸界を觀ずることに因りて、安樂速に究竟する有り。自ら方便を以つて度するに此に成就し難きことを苦まば、頂上と兩眉との間に念を繫けて亂れざらしめば、寂止にして潤澤生じ三摩提增長し、所依已に柔軟に三昧安じて動ぜず。擾亂せる不淨心を智者は悉く調伏し、已に調伏の心に隨て修行處に安住す。是の處に明想を起せば一切の身分現ず。初め一髮より始め其の相の如く憶念せよ。一に於て自相を見て然る後に衆髮を總べ、次第に[一六]三十六の自相の總ても亦然なり。佛は三十六の各各に住處有りと說きたまふ。或時は彼の諸界の合聚するを內に觀察するに、猶明眼の人の倉を開いて五穀を見るが如し。時に復逆と順と超越と次第觀と有り、一界を其の下に蒔き餘種は悉く上に處く。次第に相連持して一一に其の相を知る。雜色と不雜色と周滿して悉く觀察し、心に止めて一處に在かば、境界は十方に遍して處處に安置し已り、是に依りて勤めて修習するなり。

一髮を百分と爲して思惟し正憶念せよ。復た一分の中に於て五種の界を分別し、[一七]次に空界の上の識想に於て、別に觀察し修行すれば無垢を見て清淨の妙相生ず。譬へば水上の泡の明淨にして障翳無きが如し。是の處に諸界を觀じ各各自相を見るに、水は濕、地は堅强、風は動、火は燒熱、虛空は障礙無く、別知するは是れ識の相なり。靑・黃・赤・白・綠と及び頗梨色、此の衆雜の色に於て修行し具足して觀ずれば、虛空の堅固なる相は、彌廣く周遍して住

[一五] 界(Dhātu)とは、種族の義と譯するが一般なり、成立せる物に就いて、其の種族、要素に分段し種々に因を探るなり。

[一六] 身內の三十六物のこと。

[一七] 以下地水火風空識の六界を考察す。

して決定を生じ、能く彼の地の中の一切の諸垢をして滅せしむ。　三摩提を繋念すれば諸の煩惱の縛を出で、惡露不淨の想は能く厭離の心を生ず。　青瘀等の諸の想を修行して普く決了すれば更に餘の三想有り、明想と及び觀想と第三に空想とを説く。　寂滅の慧を修習し色及び白身を淨くすれば、起す所の諸の煩惱、貪欲瞋恚癡は是の正觀に從て滅す。　此の一一の諸想は各三想の眷屬にして能く貪欲等の結縛・使・惱纏を除く。　是の諸の一切の想を明に審に淨く觀察すれば、是を修行者は不淨の想を決定すと名く。

久故にして朽たる白骨には踈瘠羸相現じ、破碎すれば塵塵の若く一切悉く磨滅す。　下より次第に起り方便をもて所依を壞す、淨慧の説く所は修行決定の相なり。　無量なる深妙の種は一切普ねく周遍し、彼の決定の眞實生ずること金翅鳥の如し。　次に清淨の地を起し平坦にして極めて莊嚴なり。　勇猛なる寶師子、牛王若くは龍象、此の諸のものも未だ曾て處處決定の相に類せず。　始め不淨に因て生じ亦不淨に從て長ず。　初に迦羅邏より起りて不淨の中に住す。　彼の七日にして[一四]住するを觀じ、念頃にも暫くも停らず、修行して善く明了なれば是を則ち決定と説く。　是くの如き一切の分、悉く能く相義を知り、明かに彼の眞實を見るに念念に生滅有り、諸の骨想を習ふに因て修行の覺意生ず、能く覺支の想を起すを説いて名けて決定と爲す。　彼の諸の修行者に二種の想を分別す、或は始習行有り、或は已に少習行あり、或は久修習有り、是れ悉く決定に近く。　彼の智慧力に隨て趣向するに差別有るなり、初業は始めて起り、少習の心は已に住し、久學は能く緣に趣く、是を三種の修と説く。　初業を始種と名け、第二を長養と爲し、最後に能く捨離するを説いて名けて決定と爲す。　不淨に二種有り或は共或は非共なり、前の三眷屬の如く是は共に不淨を離る。　聞と思と修慧との三種の不淨念は、此の一切の種に於て修行し、諦に明了に善く分別して欲を離る、是れを説いて決定と名

【一四】住を三本には長に作る。

ち淨解脫にして方便の不淨觀なり。

若し能く須臾の頃も此の勝觀を修習すれば、是れ則ち佛の教に順じ、一切の施を受くるに堪ふ。　世尊の稱歎する所、三界の良福田なり。　餘の一切の相を說かば、功德も亦復然なり白骨と青瘀の想成就すれば心厭離す、是の不淨念に因りて方便して諸地を度す。　所謂身念止と受・心・法念處とは、煖より來た及び頂忍と世間第一の法と見道と及び修道と乃至漏盡智となり。　是の方便に因つて一切の功德地を度す。　初め身念觀より乃し究竟の處に至る。　佛の說きたまふ不淨念は一切の諸の種子にして、世尊の說きたまふ貪欲は利にして深く底無きに入る。　正受は對治の藥なり、當に厭離の想を修すれば一切の餘の煩惱は悉く能く須臾にして治すべし。　我れ已に不淨方便升進の法を說きぬ、餘に勝道の進有るも相行は前に說けるが如し。

修行方便道不淨決定分第十二

不淨升進分の相義は我れ已に說きぬ、今當に不淨決定分を修行することを說くべし。　惡戒の爲に縛せられざれば亦業煩惱に非ず。　心は解脫に背かず歡喜して常に志樂す。　是くの如く隨順して生ずれば麁澁の四大滅す。　柔軟なる寂止の樂あれば三昧は中に於て起る。　定より智慧を生じ修行し能く厭患し、厭想已に修起すれば則ち能く有愛を離る。　思惟して[一三]有愛を離るれば解脫の實智生じ、已に解脫智を生ずれば縛に於て解脫を得、是れに從つて無爲を得れば究竟して三有を離る。　是れを說いて修行して決定分を成就すと名く。　天王に五の威相あり、相を觀じて煩惱を壞し、漏過漸く衰薄し、是れに由りて滅を究竟す。　人王に五相有り、獸王の相も亦然なり。　諸地の相明了なるを說いて名けて決定と爲す、身を動じて四に顧視し威を奮て大音を暢げ、自在にして獨り遊步するは師子王の威相なり。　此の十五相に於て修行

【一三】有愛とは、生死の果たる此の身、此の世界に愛著することにて三有即ち三界に對する愛著なり。

細滑の欲を離る。腐碎して塵壓の若く、磨滅して所有無し。是くの如きの相を成就すれば有形の欲を遠離す。[九] 五欲も亦た五壞す、病に隨て對治し眞實相に相對して、修行し正觀察せよ。色變じ若くは離散し、威儀容止滅し羸朽し及び磨碎す、是を五種の壞と名く。此れは則ち自身の中なり。無量の諸の境界は修行して正憶念すれば悉く能く自在を得べし。已に二無量を說く、自在と及び境界とは修行して自在ならざるも亦已に分別して說く。作想是の不淨念に於て聞と思と修との慧を正觀して慧眼を開く、是れを三種有りと說く。に二種有り、時に復た想せずして住し、倶に開解し思惟す、或時は開解に非ず。[一〇] 第三は性無垢にして、離垢清淨の住は想せず開解せず、是の慧より修禪起り身に寂止の樂を起す。餘の二は則ち能はず、心も亦寂靜の樂にして、是を名けて修慧と爲す。身を滋潤して柔軟なるは是れ則ち寂靜の想なり。二は倶に柔軟ならざれば當に知るべし寂靜に非ずと、彼の二は寂靜ならず、一は則ち安隱住なり。是を色の中に修禪して起す所の慧有りと說く。不淨觀の一智は[一一] 十地に依止して起る。根本と及び未至と、亦欲と中間とを說く。[一二] 一界に依住する身の境界は欲界に於てす。化生は既に命終れば即ち滅して不淨無し。身淨くして餘穢無く厭患を起すこと能はず、唯彼の生滅變易無常の相を觀ずるのみ。胞胎より生ずる所の身には則ち死屍の形有り、身に於て淨想を起せば不淨觀もて對治す。求めされば貪欲を止め思惟して厭患を習ふべし。更に淨對治有り厭患の想を作さず、方便もて淨解脫して智者は慧眼を開く。謂ゆる不淨の緣に於て白骨より流光出で、是より次第に青色の妙寶樹を起す。黄赤若しくは鮮白の枝葉花も亦然なり。上服の珠と瓔珞の種種微妙の色は、是れ則ち淨解方便を修行するの相と名く。彼の不淨身に於て處處に莊嚴現じ、階級次第に上り三昧は慧燈を然し、彼の一身より出て高殿に普く周遍す。一切の餘身に起る莊嚴も亦是くの如し。此れ則

【九】遠離有形欲の下の割註あり「有形は必ずしも是れ欲生ならず」。

【一〇】非開解の下に割註あり「解は即ち開なり」。

【一一】十地は、四禪の九地（四根本、三近分と中間と未至）と欲界の一地となり、上來數息觀の依地の項を參照せよ。

【一二】一界を三本には三界に作る。

宣べて諸味を三萬六千の道に通ず。　身中の諸の毛孔は九十九萬の數あり。　身內を侵し食ふ蟲の戶は八十千有り。　內の血と外の精氣の是の二は共に和合して先づ迦羅邏を得。（此は）身根と命根となり。　是の身に不淨起るは迦羅邏より出づ。　結業の起す所なり。　愚惑は樂著を生じ、二種の重煩惱は愛恚癡冥の心にして、謂る初に生を受くる時は二の顚倒の想を興し、內に於て愛欲を生じ外に於て瞋恚を起す。　男に是くの如きの想有り、女は則ち上と相違す。

不淨を迦羅邏といふ。　迦羅邏は泡を起し、泡より肉段を生じ、漸く厚くして、肢節を成す。　出胎するを嬰兒と名け、轉次して童子と爲る。　是くの如く漸く增長して盛壯な　を中年と謂ひ、年逝き形枯悴し朽耄し日に衰老し、識滅して壽命終る。　身壞し白骨現れ、靑く毀れて節節離れ、消碎して盡く磨滅す。　是の十五種の如く修行して自相を觀ぜよ。　始め迦羅邏より次第に衰老して死し、七日にして漸く毀變し乃至灰滅し盡くす。　宿世に曾て修行せしものは先づ迦羅邏より出生して老死に至り、次第に諦に觀察す。　白骨の靑赤の相、肢節皆離散し、骨瑣[六]羸朽に及び、腐壞し盡く磨滅す。　彼の諸の修行者は不淨念を思惟するに、因に從つて觀察し或は果の方便によりて學する有り、深妙の慧を成就して能く是の相義を了じ、迦羅邏乃至一切の分、四大和合せる淨、造色の五情根を觀察するに、無量[七]極微の種にして一切彼より起る。　當に復た更に死後の次第の相を觀察すべし。　日に日に漸く變異し、乃至七日に於て復來去有ること無く、視瞻と笑と語言と容止とは、悉く已に滅し威儀の姿を捨離す。　死屍漸漸異り其の色日に毀變す。　靑等の諸の不淨は是くの如くして次第に現じ、膖脹して膿爛れ潰え、流漫せる極臭の處に種種の諸の蟲出づるを見已りて色欲を離る。　本著する所を觀察するに已に壞して食ひ盡さず離散して處處に在り、[八]能く全具せる欲を滅す。　自ら枯朽せる骨を見るに復、滋潤の相無く、久故にして極めて麁澁なれば、能く

【六】　骨瑣を三本には骨鎖に作る。

【七】　極微（Paramāṇu）は、色法を分析して其の極限に達したる微細を云ふ。

【八】　能滅全具欲の次に說明の句あり曰く「上に端正と言ふは其の本に非ず、亦た應に全具と言ふべし」。

修行方便道不淨觀住分第十

我れ已に略して不淨退滅の分を分別す。　其の住過の相の如きは今當に次第に說くべし。　修離すれども煩惱業は增長して內に充滿し、〔二〕知度の法を曉らずんば愚癡縛して住せしむ。　自ら身の少分に於て淨に背きて皮色を壞し、升進の法を知らずして煩惱增すが故に住す。　或は漸く升進すること有りて遍身に壞相を見るとも、外緣を求むること能はずんば樂んで內身を觀じて住す。　若し外の境界に於て修行して心に進むことを樂ひ、去らんと欲せば應に隨ひ去るべし。　方便して住せしむること勿れ。　未だ究竟の處を見ず而も便ち中路にして止まらば、癡冥の住に縛らるること猶象の樹に繫がるが如し。　堅相ありて其の體密にして間なしと骨想するも、不次に衆想を行じて亦升進を求めず、又厭離の心無ければ亦決定すること能はず。　修行して不淨奇特の道を成就すと雖も、勝想を起して其の身をして柔軟ならしむること能はず。

若し身を柔軟にせざれば流覺則ち生ぜず、流覺を生ずること能はざれば是を修行住と說く。

修行方便道不淨觀升進分第十一

已に不淨觀の方便道の住過を說きぬ。　若し勝道の中に於ても住は應に前に說けるが如くすべし。　今當に次第に不淨の〔三〕升進法を說くべし。　先づ總相を思惟し念を不淨の緣に繫け、次に身の少分に住して正しく自相を觀察すべし。　自在及び外緣の二種に無量を說く。　行者は內身の自在三摩提に於て正方便を勤習し究竟の處を周滿すれば、外緣の無常なるものの境界普く周遍す。　而も彼の正受に於て數自在なること能はず、又自ら內身を觀じ是を亦無量と說く、謂く自の身處に種種衆多の色あり。　筋連と肉段とは其の數各五百あり、〔四〕提頼と揵大とは是れ皆六種有り。〔五〕　三十六種の物、三百二十の骨、節は九百分に解く。　九十千種の脈は氣を

【二】知度を三本には智度に作る。

【三】三本には升進分に作る。

【四】提頼(Tila ?)は、右脇、揵大(Kanda ?)は、肉臓のこと。

【五】皆有六種の次に解釋の句あり曰く「提頼は果に似、揵大は瘤に似て盡く腹內に在り」。

らず、而も怨敵を禦がんと欲せば必ず彼の爲に害せらるゝが如し。自身を修行して愚癡未だ決定せざるに、而も外緣を觀ぜんと欲せば是れ必ず行に於て退く。我れ已に比丘の無黠なるが故に修退することを說けども、更に餘の退過有り。今當に說くべし善く聽け。當に知るべし修行退は癡冥に沒在するが故に、或は盛なる煩惱業行の爲に障蔽せらる。人有り色欲に因り而して煩惱を起して退き、彼の美艷の色に於て癡愛して正念を覆ふ。種種の上衣服の文彩の光澤を發する、瓔珞の莊嚴の具、金銀衆妙の寶、先俗の樂む所に於て、修行すれども還て顧戀す。此に因りて欲想を動ぜば當に是れ必ず退くことを知るべし。形相を端嚴なりと計し、處處に姿好なる一切の身肢節に著し、妄想して貪欲を起す。身體の諸の肢節の細滑柔軟の觸、此れ本更る所なるを憶ひ欲火還て復た熾にして、或は泣き或は言笑し、歌舞し相顧眄し、姝服は珠環を貫き、文繡莊嚴の具、來去し若くは容止して行者の心を流轉せしむ。是の威儀を顧念すれば欲起りて退轉せしむ。人有り情欲深くして專ら四種に在らず、愚癡にして煩惱を增し形に遇へば婬亂を起す。是れ則ち極惡の欲にして疾く修行をして退かしむ。是の諸の愛欲に由りて迷亂して正念を失ふ。相と想と明了せば是れ終に退轉せず。諦に自ら內身を見て次に外を善く觀察せよ。境界廣く增滿し周匝して嶮岸を見る。究竟の處を識らざれば修行疾く退沒す。身に於て深く愛著し怖畏して進むこと能はず、修行して疑怖を生ずるは是れ必ず疾く退滅するなり。若し疑怖を離れんと欲せば身に於て厭患を修すべし。厭患の想已に生じて其の心猶ほ馳亂せば、當に修行者は是れ必ず復た還り退くと知るべし。已に諸の修行の不淨方便の退を說きぬ。若し勝道の中に於て退するも亦前に說けるが如し。

修行方便道不淨[一]觀退分第九

我が力の能ふ所の如く已に安般念を說けり。不淨觀を修行するを次第に應に分別すべし。初め方便を修行するに自ら身の少分に於て、淨に背き皮色を開いて其の起る所の相を觀ず。暫くは皮色を壞ると雖も力めて方便を勤めざれば淨想還て復た生ずるを說いて修行退と名け、所應を起すこと能はず、重ねて皮色をして壞せしむるも淨想仍ほ除かずんば、亦た修行退と名く。修行して愛欲增さば應に往いて冢間に至りて彼の不淨の相を取り、本處に還り來つて坐すべし。見し所の諸の死屍のごとく我身も亦復然りと、一心に內に觀察すること彼の冢間の相の如くす。彼は我が爲に證と爲り是によりて眞實を得。已に眞實の相を得ば復た邪想を起さず。是くの如く方便して修するも慧眼猶淨からずんば、當に知るべし是顚倒無智癡冥の聚なりと。若し足指に於て緣ずるに闇亂して心住せずんば、當に上に於て心を繫け觀察して升進を求むべし。上の色を壞する處に於て其の心復た馳亂せば、當に力め勤めて精進し方便して退過を離れ、煩惱の爲に染せられ解脫に至らざらしむること勿るべし。自ら方便を勉め勤むれば疾く涅槃に到ることを得ん。自ら身壞の相に於て繫念して分散すること無く、日夜に勤めて修習し煩惱をして起さしむることと莫れ。修行による微妙の想は世尊の說く所なり。常に能く想を守護すれば是れ終に退滅せず、具足して內身を觀ずれば其の念已に堅固たり。次には應に外緣を觀じ漸く習ふて增廣ならしむべし。外に於て已に周滿すれば堅固なる三摩提なり。當に知るべし是れ久しからずして次第に諸漏を盡すと。王に器甲無ければ安足するに堅固な

【一】不淨觀(Aśubhāsmṛti)。

量食を知る。　亦人の車に膏するが如く味を貪るが爲の故ならず。　一切有ゆる所生は悉く過患なることを曉了し、思惟し善く觀察せよ。　三有は火の然ゆるが如し。　彼の重病人の醫方の療を信受するが如く、善知識の說を聞き觀察し諦に思惟して、常に清淨心を以て身を繫ぎ放逸なること勿れ。　寂嘿として言說を少くし宴坐して實義を思ひ、丘壙林樹の間に閑居して遠離を修し、無事にして山巖を樂しみ窟中露地に坐し、樹下に草葉を敷き是くの如く清淨に住すべし。　修行して內に思惟し勤習して休懈無く、專精に己の利を求め退住の過を遠離せよ。　必ず能く升進して功德分決定するを得ん。　勤方便を修行して諸の善根を具足す。　我れ少慧の力を以て略して諸の法性を說く。　其の究竟の義の如きは十力智の境界なり。

五漸く和合し思惟して自相を壞し、總じて[一五〇]五盛陰を緣ず、[一五一]七處三種の觀、悅樂せる廣境界、還滅して生滅を觀ずるに、一念に眞實を見て法念處を具足す。正に陰種の相を觀ずれば化と夢と水月との如し。定慧轉た增廣して彼に則ち[一五二]煖法生ず。其の心は極めて寂靜にして總じて五陰の相(卽ち)自身の欲火燒け、三界盡く熾然たるを見、諸相の[一五三]三三昧もて正に解脫門に向ふ。初めに四聖諦の眞實の十六行を觀じて煖法を成就し已て眞實觀を增進し、佛身の相好、無量の諸の功德を見る。第一寂滅の法は淸淨にして煩惱を離れ聖衆の功德海は甚深して崖底無し。種種微妙の相と現身及び境界を見已て心歡喜す。頂法に相を具足し增進して法忍を生ず。[一五四]五趣に境界を現じ、惡道の熾然たるは滅して淸涼の處に遊息す。中に住して生死を經れども最上唯一心なり。先づ無量の苦を觀じ、次に苦種の生を見る。種轉じて增廣大し漸く苦集の滅を見る。滅し已て然る後に[一五五]八聖平等の道を觀ず。變滅は[一五六](1)無常の相なり。麁澁逼迫は(2)苦なり。(3)空寂にして衆生無し。自在ならざるは(4)無我なり。苦種は是れ(5)因[一五七]の義にして衆緣合して(6)集と爲り、種生の故に(7)起と說き興果を名けて(8)緣と爲す。苦集盡くるが故に(9)滅、滅靜を(10)寂止と說く。淸淨は三有を(11)離れ、覺を說て(12)妙出と爲す。徑路は是れ(13)道相にして、平直を(14)正義と說く。進向は之を(15)趣と謂ひ、乘出の故に(16)乘と說く。四諦十六行具足して眞實に歡び、忍法は次第に世間第一の法を生じ、聖行正受の地に是の三決定を得、見道と思惟道とは次第に漸く究竟す。一切の微妙の相は各各地に隨て起り、實智慧を成就し諸の功德を具足す。當に上の所說の[一五八]如く決定分を修行すべし。諸の明智を有する者は應に正方便を作すべし。信勤して懈怠すること勿れ、常に欲を起して慚愧し諸の[一五九]梵行者に於て常に當に愛して恭敬すべし。自ら守りて淨戒を修め威儀もて安諦ならしめ、假令利養を得るも少欲にして止足を知れば、滿たし易く亦養ひ易く、身に適して

【一五〇】五盛陰とは、五蘊の勢力熾盛なるを云ふ。
【一五一】七處三觀とは、七處善三種觀の意にして、五蘊、十二處、十八界の三種に就いて夫々如實に、苦、集、滅、道、愛味、患痛、出離の七通りの觀を起すを云ふ、(雜阿含第二參照)。
【一五二】煖法以下、四善根位の觀法を示す。
【一五三】三三昧とは、空、無相、無願を云ふ。
【一五四】五趣とは、五道とも云ふ、地獄、餓鬼、畜生、人間、天上の五なり。
【一五五】八聖平等法とは八正道のこと。
【一五六】以下十六行相の名を出す、本文には數字を以て示すが如し、坐禪三昧經卷下を參照せよ。
【一五七】大正本は因緣とあれども、三本によりて因義と改む。
【一五八】大正本は知とあれども三本によりて如と改む。
【一五九】梵行とは、淸淨の行の意。

苦、日無き獄に幽閉せられ、生熟の藏に迫らる。　行廁に長養し不淨苦に臭悶して、胎を出づるも生苦を受け老病死に輪轉す。　一切の諸陰起り[三七]三相に迫切せらる。　色を觀ること聚沫の如く、受は水上の泡の如く、想は春時の炎の如く、衆行は芭蕉の如く、識種は猶ほ幻の如く、虚妄にして眞實無し。

逼迫は是れ苦の相、因緣は是れ集の相、寂靜は滅盡の相、出要は是れ道の相なり。　此の四聖諦に於て修行し、漸く觀察して[三八]十六行を思惟せば生死の苦を解脱す。　略して一切の法の[三九]自相及び共相と[四〇]明知の決定の義を說かん。　修行して正に觀察せよ、修行して慧燈を然やし正に四眞諦を觀ずれば、能く惡趣の分を斷じ諸の受胎の苦を離れ、復た樂を身に受けて世の苦惱に嬰らず。　利養の行を捨除し獨處して遠離を修し、已に能く厭離を修すれば生天の樂を味はず。　況や復た人間に著して諸の苦痛を受くるに忍びんや。[四一]種を觀ずること毒蛇の如く陰を五怨賊と爲し、自ら貪欲の患は長夜に密に侵害することを覺る。　六根は空聚の如く塵賊競うて來集す。[四二]此の內外の入に於て眞實觀を修行すれば、見愛は大河の如く涅槃は彼岸の如く、修行して慧眼淨く法の空無我を觀ぜん。　是くの如く眞實を知り[四三]三有に處することを樂はず、明に諸法を見る者に略して三成の相を說く。　及び前に三壞を說く、方便・勤・修習の次第相行の義は是れ今當に更に說くべし。　一色を種種に觀じ、一一に[四四]四種の因あり。　決定して因果を知り身念處を究竟す。[四五]受と心と相應して觀ずる時は惟だ[四六]自體なり。　因緣の果は無量なるも其の相は同種性なり。　修行して[四七]思惟起るは悉く所依に依りて現ず。　心は猶ほ調はざる馬のごとく、幻の如く猨猴の如く、無量の因緣の相は一切、現の所依なり。[四八]二陰は空にして無我なり。[四九]次に想と色とを合して觀ずべし。　想と受と識とを合し、行の二も亦是くの如し。　次第して想色受も想色識も亦然なり。　想受識を分別す、行の三も想の說に同じ。　四

【三七】三相は生住滅のこと。
【三八】四諦の理を觀ずるに十六通りの觀じ方あり、之を四諦十六行相と云ふ、坐禪三昧經卷下を見よ。
【三九】自相は自己特有のもの、共相は他と共通の屬性を云ふ。
【四〇】明知を三本には明智に作る。
【四一】種は能造の四大種、陰は五蘊のこと。
【四二】內入は六根、外入は六境のこと。
【四三】三有は三界のこと。
【四四】四種因とは四大種のこと。
【四五】受(Vedanā)は五蘊の第二の受。
【四六】自體を三本には四體に作る。
【四七】思惟起を三本は思惟定に作る。
【四八】二陰とは受と心となり。
【四九】以下、色、受、想、行、識の五蘊の各々を幾通りにも組み合はして觀ずるなり。

す。外に聖法の衣を假り[一三〇]力めて癡惑を離れず。彼の五欲の利を捨て出家の業に依止するも、而も佛法中に於て少功德を獲ず。內に貪著を捨つと雖も而も出要を得ず。[一三一]四念未だ成就せず何によりてか心樂を得ん。髮を剃り形好を毀つも而も憍慢を捨てず、空しく欲味の歎を失ひ禪悅の樂を得ず。[一三二]五無間の業に於て未だ定んで起さざること能はず。譬へば舟楽無くして而も深水を越えんと欲するが如し。未だ決定の聚に入らず、復た生天の業無し。無明心眼を覆ひ永く生死の淵に沒す。應に業として務むる所を勤むべし、作無きの果有ること無けん。作者は終に喪はず、修行して宜しく善く思ふべし。常に人の信施を受けて彼の肌體の分を侵す。我れ功德有りと謂ふとも自ら顧みるに空しくして實無し、此の利養の心に由つて我が善功德を驚す。[一三三]深く骨を剋するの苦を思ひ即時に厭離を興すべし。未だ諸の惡趣を脫せず顚倒の見に縛せられ、平等の路なる[一三四]牟尼一乘の道に向はず。得難きの趣に生ずることを得て諸根悉く具足す。佛の世に興るに値ひ又正法を聞くことを得、而も苦器を捨てず未だ貪欲の海を渡らず、刀を拔ける五惡賊是れ亦未だ摧滅せず。是くの如く正觀する時修行して解脫に向ひ、是の憂厭の相を作して則ち便ち決定を生ず。身は不淨の器と爲りて三十六充滿す。譬へば大地種の衆の雜類を生育するが如し。身は隱覆の聚と爲り、亦常に澡浴・楽沫・撮摩の法を假り久しからずして必ず當に滅すべし。譬へば毒蛇の篋の如く四大の篋も亦然なり。八萬の蟲、中の舍に常に共に競ひ侵食す。是の身は[一三五]災宅と爲り、四百四病の惱と種種の苦と不淨と一切內に充滿す。譬へば故き空舍の如く、亦丘塚の間の坏器の堅固無きが如し。身を說くも亦復た然なり。無量の衆惡聚は虛妄にして眞實に非ず。顚倒して貪著を起し長夜に楚毒に嬰り、將に復た胞胎に處して數數に生苦を受けんとす。眞實法を見ず生死の輪常に轉ず。[一三六]始め迦羅邏を受け次に泡肉段を生じ、漸厚して肢節を成じ、五根胞胎の

【一三〇】力を三本には內に作る。

【一三一】四念は四念處のこと。

【一三二】五無間業、無間地獄(阿鼻地獄のこと)に墮つる五種の惡業にして、殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧の五逆罪なり。

【一三三】剋を三本には剝に作る。

【一三四】牟尼(Muni)は寂默と譯し佛陀のこと、一乘(Ekayāna)は万人平等に佛陀の道を得ること。

【一三五】災を三本には火に作る。

【一三六】胎內の五位を示す、母胎に在つて成育する順序なり、
一、迦羅邏(Kalalam)、初めて凝結せる時を云ふ、
二、胞とは二七日を經て瘡疱の形をなせる時にして、頞部曇(Arbudam)と云ふ。
三、血肉とは三七日を經て血肉の成れる時にして閉尸(Peśī)と云ふ。
四、段肉とは、四七日を過ぎて肉の次第に堅まる時にして鍵南(Ghana)と云ふ。
五、支節とは、五十日を過ぎて次第に六根の具はる時にして、鉢羅奢佉(Praśākhā)と云ふ。

愁怖して自ら安んぜず。(1)天眼卒に便ち瞬き、(2)浴已て水、身に著く。(3)一切の妙境界も其の心に喜樂ならず、(4)千種の樂、(5)自然の加陵頻伽[一二六]の音も今は則ち寂として聲無し。 當に七日にして死するを知るべし。(また)(1)玉女悉く捨て去り餘天共に從事し見已て熱惱を生ず。 命終て地獄に入る、 唯賢聖の人有りて無常の變を了達して生死の苦を解脫す。 凡夫は燒然の爲に(2)腋下に流汗出で、(3)衣服卒に垢膩し見已て大に恐怖す。 是れ則ち淨業盡くるなり。 (4)華冠皆鮮嚴なる而して今は忽ち萎熟せり。 身體本光澤なるが一朝にして頓に枯悴し、(5)常に愛樂せる所の坐を今は惡みて復た樂しまず。 是の五の惡瑞現ずれば當に知るべし死時至ることを。 唯諦を見ること有る者は此の諸の惡相無し。 我今比丘に說かば、是に於て厭患を增さん。[一二七] 諸天及び天處は衰變して久しく住せず、 明智の修行者は斯の無常變を見る。 四寶の須彌王を眞金山は圍遶す。 修行して慧眼淨ければ此の悉く融消するを見る。 又諸の[一二八]大鐵圍は四天下を周匝するも消壞の非常の相を行者は見ること明了なり。

[一二九]修行して天上に於て是くの如く觀察し已て復た人道の中に於て思惟し正憶念すべし。 或時は王法を犯して身手足を斬截せられ、拷掠せられて極めて楚毒するを、我悉く遍ねく經歷せり。 親戚永く別離し悲戀して爲に淚を墮とし、 設し一處に集著すれば四大海を過ぎん。 我本より來た人中に生を受くる所の白骨を計るに、 悉く積聚せば高廣なること須彌に喩ふ。 三惡道に流迴して楚毒過ぐる者無し。 人天の受くる所の苦も是れ亦多く無量なり。 廣く分別して說かんと欲すれば劫を窮むるも盡すこと能はず。 三昧の境界地に思惟して生ずる所の果を觀察して、 善く明了なれば修行して深く憂厭す。 我れ家業を捨つと雖も道果を成ずること能はずんば自ら出家たりと謂へども未だ生死の獄を出でず。 我恩愛を棄て名けて所生を捨つと曰ふと雖も而も癡愛業の父母を免離すること能はず。 徒に自ら人の子と爲りて佛法に從つて生せ

【一二六】加陵頻伽(Kalavinka)は鳥の名にして聲極めて美音なり。

【一二七】增厭患の下の割註「梵本中に此の一偈無し」。

【一二八】鐵圍山(Cakravāḍa)。

【一二九】人間界を觀ず。

如く亦燒かるゝ舍に蚖蛇毒嗽の聚るが如し。 生死の畏は是に過ぎたり。 譬へば猶ほ空聚落のごとく又彼の虛器の如し。 諸法は空無我にして、眞實の性も亦然なり。 此の三惡道の中には是くの如きの苦無量なり。

[一一九] 天に喜樂有りと雖も是れ亦大苦と爲す。 譬へば彼の盛火の然ゆるが如く、貪愛の熾なること是くの如し。 久しく天上に處在せば常に欲火の爲に焚かる。 自ら憶ふに [一二〇] 忉利天にて善法の坐に安處し、天女侍して供養し無量に極めて快樂なり。 四園に寶樹を列し花果妙に莊嚴す。 意に隨て五の所欲一切曾て悉く受く。 時に白龍象に乘りて諸の浴池を遊觀し、意を林流の間に縱にし、迴顧して日夕に彌る。 食は必ず [一二一] 須陀味、飲は則ち甘曇陀にして、充實して、[一二二] 疑患無く樂を受くること大海の如し。 又內勝堂に處して天女は音樂を進め、妖艷極まり姿態光色は心目を曜す。 妙音六萬種常に美軟の聲を聞き耳目彼に隨て轉じ、我が心をして醉冥せしむ。 諸天は微なる歌を發し聲は絃管と諧ふ。 偃臥して音樂を聽き寤寐に皆喜悅す。 諸根は五欲を迴りて猶ほ旋火輪の如し。 [一二三] 須彌山王の頂に安處すれば快自在なり。 百一衆の雜寶間錯して地を莊嚴し、諸天共に娛樂して經歷甚だ久長なり。 彼の五境界に觸れて五情根を發動し、一切悉く奇特にて皆是れ快樂の因なり。 諸天は器を共にして食するも福に隨て差別有り。 此の異色を見る時に心則ち憂惱を生ず。 是くの如く極めて愁慘なること猶地獄の苦の如し。 此の不淨飯を食し頭を低うして內に慚恥し、悔ひて本の宿業我をして此苦に致さしむるを責む。 諸天と [一二四] 阿修羅と自守して彼の利を貪り、是に由りて諍怒を興し死を畏れて大に恐懼す。 或は天の爲に給使し或は復た極めて貧窶す。 我れ天上に生ずと雖も惡道の苦に異ること無し。 彼の恒樂の處に於て衰死の二の五相あり。 是の相及び命終、爾の時最も大苦なり。 方に所樂を恣にせんと欲するも [一二五] 五衰忽然として至る。 若し是の相を見る時は

【一一九】 天上界を觀ず。
【一二〇】 忉利天(Trāyastriṁśa)は六欲天の第二天なり。
【一二一】 須陀味(Sudhā)、甘曇陀(Amṛta)。
【一二二】 三本には疑を盈に作り、內勝堂を四勝堂に作る。
【一二三】 須彌山(Sumeru)。
【一二四】 阿修羅(Asura)は果報勝れて天に似たれども天に非ずして、常に天人と戰ふ、六道の一なり。
【一二五】 以下天人の死に近づくや五衰の相現ずることを示す、本文は二種の五衰を示す、數字にて示すが如し。

[一二五]闇冥の心は畜生不淨の業を增上し、癡の不愛の果と種々の苦報の身を受く。九萬九千種の形類は各別異にして、空行水陸の性あり、蚑行蠕動の類ありて、業に隨て各生を受け此の劇處に宛轉す。一切の諸の畜生は展轉して相殘食す、我は愚癡を以ての故に悉く[一二六]增して此の苦を受く。此を顧みて而して懼を懷き、心は厭患と俱に修行して、深く憂厭すれば則ち苦に於て決定す。修行已に是くの如くなれば方便もて厭離を生ず。

[一二七]又復自ら餓鬼の無量の苦を憶念するに咽の細きこと針の孔の如く、互身なること沃焦の如し。此に於て無數劫飢渴し極めて熱惱す。天の甘雨を降らすを見て飲まんと欲するも炭火と成る。彼の四大海の深廣にして涯底無きが如き、之を飲んで悉く盡さしむるも飢渴を止むこと能はず。裸形にして長髮を被り、狀燒かれて[一二八]多羅樹のごとく、中に於て甚だ久長に此の種種の苦を受く。業風東西を飄へし身を吹いて碎折せしむ。亦狂飈起りて久枯の樹を摧破するが如し。我れ慳貪の行を積み惠施の業を習はざるが故に、餓鬼處に生じて此の諸の苦痛を受く。

三昧の境界地にて修行して思惟起り、種種別に觀察して便ち不放逸を得ば、未だ煩惱を斷ぜずと雖も此の衆苦迫楚毒を見て、深く憂懼し極めて生死の苦を厭ふ。既に厭へば能く欲を離るゝこと掌中の寶を見るが如く、貪欲既已に離るれば便ち速に解脫を得ん。譬ば香美食の其の中に蠱毒有るが如く、種種の生死の味に雜はる苦も亦是くの如し。亦篋に蛇を盛り人有りて負ひて自ら隨ひ、若し能く覺して棄捨すれば毒の爲に中られざるが如く、身も亦復是くの如し。四大を毒蛇と爲す、智者は能く捨離して彼の爲に害せられず。愚にして火炬を執り急に持すれば則ち自ら燒き、明人は時を知りて捨て火の爲に焚かれざるが如し。生死に樂著する者は災炎常に熾然たり。若し能く覺めて捨離すれば火の爲に焚かれず。譬へば諸の恐怖の處の

【一二五】畜生道を示す。
【一二六】三本には增を曾に作る。
【一二七】餓鬼道を觀ず。
【一二八】多羅(Tala)。

べし、是の決定は修行して善く心を繋けて三摩提に安住し、是れ能く所縁に於て明に彼の種相を見る。　此の地の熟は時熟にして、[二三]境界の海に充滿す。　修行して見る所の壞は水大決定の相なり。

火大の壞する所の相は今當に說くべし。　善く聽け、識類と非識類とは斯れ亦上に說くが如し。　自ら火然を現ずるに及んで一切皆消盡す。　乃至劫の成敗には世界悉く灰滅し、彼の火輪の處に於て熾炎の大火起り、亦二禪の際より彌滿して悉く火を雨ふらす、盛火普ねく周遍して世界俱に洞然たり。　彼の三昧地に於て正觀思惟起り、修行して此の變を見るは火壞決定の相なり。

風大壞する所の相は今當に次第に說くべし。　上の如き諸の種類は悉く風の爲に壞せらる。大地及び須彌は分散して粉塵の若く一切盡く磨滅す。　是れ皆風大の力にして、上は第四禪を際り下は風輪界を極む。　災風彼より起り其中皆散壞して一切は風に壞せらる。　智者は眞實を見て、是くの如く正思惟するは風壞決定の相なり。

云何が彼は修行して常に深き憂厭を起し、地獄の相を觀ず、前に於て苦法を見、隨て憶念して忘れざる。　八苦[二四]大地獄は各十六分を增し、彼々衆苦の類に無量の邊地獄あり。衆生は彼處に生じ行に隨て衆苦を受く。　我は此の惡道に於て未だ離れずして或は牽來せらる。　八大地獄の如きは誰か能く盡く稱說せん。　其の中の無量の苦は邊際を得べきこと難し。　設し、人百頭有り、頭に各百舌有りて、地獄苦を說かんと欲して劫を窮むるも盡すこと能はず。　愚黠地經の如し、唯佛のみ善く分別したまふ。　我悉く能く究竟するに能く測る者有ること無し。苦毒海に輪廻して無量劫に往返し、顚倒して善行ならざれば此の大苦果を致す。　自ら宿命を見る時、是の痛みを曾て悉く經たり。　修行して本苦を憶はば便ち涅槃に順ふを得べし。

【二三】熟時熟の下に割註「亦の義に曰く、壞とは此の地能く煩惱を壞する時に壞相を見る」と。

【二四】八大地獄ありて各々又十六地獄を攝す。

細微の覺を修行して一切諦に、是くの如き[一〇七]十六分を明了にすれば悉く名けて決定と爲す。方便升進の如く功德住を分別して、安般念を決定するも亦是くの如く說くべし。彼の未だ說かざる所の諸餘の功德住の如きは、是の故に我れ當に說くべし。其の決定分の如く風の起る所の根本極清淨を觀察し、妙微の相を修行すれば則ち是の處に於て彼の究竟處に摩尼寶三昧を現ず。當に知るべし此の功德より方便と根本と生ず。已に妙方便の根本決定分を說けり。餘の深正受の相は一切前に說けるが如し。

修行勝道決定分第八[一〇八]

已に方便道所攝の決定分を說けり。勝道の決定の相は是れを今我れ當に說くべし。修行し善く決定して心を繫する處[一〇九]堅固なれば、身受と心法と是に於て正しく觀察す。[一一〇]六種の因有りて是れ能く果を成就すと說く。成壞の各の三種、[一一一]修行決定の相なり。是の六種の因に於て方便して善く觀察すれば、是れ則ち能く次第に疾く諸の漏盡を得ん。復た更に餘因有り、種々の成壞の事は是くの如く多く無量なり。我今當に略して說くべし。何等をか修行と爲す、水種に壞せらるゝの相は、謂く七日にして死屍は毀變の相已に現ず。彼彼の諸の死屍は青黑瘀爛壞す。已に壞して膿血流れ惡汁相澆漫し、潰漏し若しくは分離し、雜惡極めて臭穢なり。是れ悉く水に壞せらるゝなり。內身も倶に亦然なり。乃至[一一二]劫の成敗は斯れ水大の力に由る。水輪極めて沸湧すれば大地皆燋壞す。彼の三禪の際より周匝して水來下し、洪注極つて漂蕩し有ゆる物は皆消盡す。一切情識の類、百穀及び叢林、土地、地の生ずるところ悉く水の爲に壞せらる。衆生の水に壞せらるるは是皆宿業に依る。上の火災の相の如きは無垢決定の說なり。此の諸の一切の種は皆三地の修行果より起る所なり。當に知る

【一〇七】十六分は、十六特勝のこと。

【一〇八】大正本には方便勝道とあれど、三本によりて方便の二字を省けり。

【一〇九】堅固の下の割註〔爾炎を謂ふなり〕

【一一〇】六種の因とは、水、火、風の三によりて世界の成立し破壞せらるるを云ふ。

【一一一】三種の下に割註〔成は熟にして、熟は亦壞なり〕。

【一一二】劫の成敗とは、此の世界の成敗のことにて、此の時の水力を水輪と云ふ。

に瓶下り轉じて遠に就き、旣に插して還た上らしめ、訖り至りて復た之れ短きが如し。譬へば仰いで空を射るに矢發して疾きこと無閡なるも、其の去るや漸く高遠に勢極つて還て自ら下るが如し。修行し正思惟して依風の相を觀察するに、初めは遠く然る後に近し、長短の義も亦然なり、猶ほ旋輪を牽くに屈伸互に往來し、遠く往くを名けて長と爲し近く來るを則ち短と爲すが如し。息風迭に出入し長短も亦復然なり。[一〇四]彼の眞諦觀の先に苦にして而して後に集なるに譬ふ。息を觀ずるも亦是くの如く、先に長く然る後に短かし。若し初禪の息短かければ第二禪の息長しと、正受の義に違ふを以て是の說は則ち然らず。彼の初禪の中に於ては息風の勢極めて遠く、第二禪は息短かくして正受漸く差別あり。滿身遍ねく覺知するは則ち第三禪に依る。最後の身行の息は毛孔を離るゝを以ての故に。此に諸の三昧隨順功德の相を說く。修行して彼に安住すれば覺想の爲に亂されず。何が故に初禪の中には唯だ長のみにて短無しと說くや。諸の所依を捨てず是に由るが故に息長し。彼は覺想力を以て能く息をして去て長からしむ。第二は諸依を捨てゝ勢羸きが故に息短し。甚深の[一〇五]修多羅に佛說きたまふ。山頂の泉は涓流勢遠からず、餘處より來ること無きが故なりと。彼の山頂の喩の如く[一〇六]第二依も亦然なり。唯だ其の處に從て起る、是れ終に遠きこと能はず。彼は、健士夫の重きを負うて而して山に上り、力を竭して氣をして奔らしめ、息風急に迴轉するも、旣に安隱の處に到れば其の息乃ち調達すと說きたまふ。是の喩は彼の息の前に短、後に長きを說く。說く所の健士夫の重きを負ふて而して山に上り、身力の方便を以て是れ乃ち息をして長からしむ。彼の劣方便の如きは自力にて重きを負はざれば、力の方便無きを以て、息微なるが故に遠からず。譬へば壯夫の射は能く箭をして極めて遠からしむるも、劣力にして方便無きは勢弱く去れば則ち近きが如し。此の喩は應當に知るべし是れ長短の義を說くなり。

【一〇四】先に苦諦を觀じ後に集諦を觀ずるの意。

【一〇五】修多羅(Sūtra)は經のこと。

【一〇六】第二禪のこと。

ふ。　正念にして心亂れざれば次第に具足に至らん。　是を修行者の十種の數成就すと說く。　上の如き十種の法は是れ則ち數の究竟なり。　上に於ては更に復た捨てよ、數を增すは修行に非ざるなり。　是くの如く數を修行せば是れ則ち數の法成ず。　成じ已て應に捨て復た餘の方便に進むべし。　數法を修行して若し復た成就せずんば、應に更に前に說けるが如く還た初數より起し、方便して數法を成ずべし、便ち決定の分を得ん。　數法已に成就せば慧者の心[一〇三]六種に隨順すること、前に修行の正方便を說けるが如し。　六種を修行せば疾く厭離の想を生じて、生死に樂著せず。　勤め憂へて煩惱を斷じ、修行して心に一切の有爲法を遠離せよ、當に知るべし是の離欲は淸淨決定の分なり。　或は(息の)長前に在りと說き、或は短前に在りと說く、其の決定の義の如きは、今當に次第に說くべし。　謂く出息始めに起るを說いて短前に在りと言ふ。　是れは所應に非ずと說く、勢漸く增進するが故に、息去りて漸く久遠なり、乃至未だ還らざる間は當に盡く是れ長なりと知るべし。　謂く短は則ち然らざるなり。　出息漸く增長するも未だ究竟の處に到らざれば、是の中に觀察する所を說いて長中の短と名く。　一心に方便を勤め、念を專らにして正思惟し、增長して究竟に至るを說いて長中の長と名く。　觀已に風に迴轉し、餘の求想を捨離し、然る後に決定を得れば此れ則ち短中の長なり。　入息極短の時は還て所起の處に到る、是に於て觀察する所を說いて短中の短と名く。　是くの如く正思惟し、修行して善く明了なれば已に決定の分を得。　復た餘の方便に進み、滿身遍ねく出入の身行の息を覺知す。　是くの如きの覺を修行すれば則ち決定分と爲す。　譬へば火の熾然として光炎則ち長遠に、薪盡き火將に滅せんとするや光炎還た漸く短く、若し更に薪を增益すれば光炎普ねく周遍し、勢盡きて乃ち滅に歸するが如し。　四種の風も亦然り、或は說く長短の內外に於て互に名を立つと。　或は二俱に長短と、是くの如く種々に說く。　彼の深井を汲む

【一〇三】六種とは、數、隨等の六妙門のこと。

て是の法乃ち生ずることを得、虚妄にして堅固なること無く、速に起り而して速に滅す。　非常の毒に毒せられ、其の性久しく住せず。　是くの如きの觀を修行せば此れ則ち決定の念なり。譬へば天の運行するが如く、息の變ずることは彼よりも疾し。　無常想を決定し修行して涅槃に趣く。　出息未だ滅せずして而して入息生ずること有るに非ず、入息未だ滅せずして而して出息生ずること有るに非ず。　是くの如く諦に觀察するは修行決定分なり。　麁澁・利刺生じ種々の苦逼の相は、謂く息の出と入との一切時に逼切す。　息に於て能く衆苦の相を具足するを覺了す。　是くの如く諦に思惟するを、說いて名けて決定と爲す。　自相は堅固なること無く、寂滅空無我にして因緣力の起す所なり、緣によりて起るが故に滅す。　有我相を捨離[一〇三]すれば常住にして變易せずと、是くの如きの顚倒の行は一切悉く遠離し、唯だ眞實の觀を作さば、是を名けて決定と爲す。　非我にして牢固なること無く、亦た自在有ること無し。　彼の出入の息には曾て覺知の相有るに非ず。　諦に知れ、無我なるが故に是を說いて決定と爲す。

當に知るべし是の智相は相似の聖行の名なり。　此を則ち方便と爲し彼の眞實の行には非ず。　比丘よ安般念の雜想覺に亂され、既に亂れて心悅ばずんば應に數より起すべし。　或は入息に從つて數へ、或は出に從つて數を思ふ。　思の亂ゝ覺觀の想とは是に由りて究竟して離れん。　慧者は入息に於て心を繫け、數を行ずる時に一入を數へて一と爲し、出息を雜へ數へずして念を專らにして數を亂さず、是くの如くして乃ち十に至り、彼の十の出息を捨てなば、此れに從つて決定を得ん。　此れ則ち具足して根本數を成就すと說く。　更に餘の數法有り方便を修行して起る、若し根本數に於て決定を起す能はずんば、息を促めて覺へ易からしめ、方便して心を生ぜしめ、當に二の出息を捨てゝ然る後に入の一を數ふべし。　定意の心亂れざれば第二の數成就す。　若し二方便に於て猶ほ決定を起さずんば乃至十の出を越え然る後入の一を數

【一〇三】大正本には捨利とあれど三本によりて捨離と改む。

に還る。　根本種性の中にて其の相は三階に起る。　功德住の五相と功德進の五相あり。不壞の功德に二あり、半壞の功德に二あり、盡壞の功德に一あり、復た心を繫る處に還て本種性に住し已つて流散して、十方に遍ねく【一〇〇】功德十相の上に各復た一相現ず。　又流散の邊に於て諸の深妙の相を生じ、彼の深妙の際に於て復た深妙の相を生ず。　上下輪の諸相亦復た是くの如く現じ、彼の三階の處に於て種々の雜相生ず。　自相各已に滅して唯だ彼の總相に住し、諸雜既に無にして寂靜の行迴轉す。　此の三の曼荼邏は境分猶ほ移らず本の功德住に順ず、自體は前に說けるが如し。　入息の三摩提は遍ねく下方に充滿し、出息の三摩提は遍ねく上方に充滿す。　二俱に十方に滿ち正受妙甚深なり。　是くの如く意に隨へば、是を法自在と謂ふ。　淸淨にして心を繫る處、法として求めざる無く、既に生じて長養有りて諸の功德を成就す。　天の【一〇一】曼陀樹の曼陀池に生長するが如し。　功德住と升進と種々衆妙の相は是の義我れ已に說きぬ。　修行して善く守持せよ。

修行方便道安般念決定分第七

已に升進の法所攝の諸の功德を說けり、修行の決定分は是れを今次第に說かん。　出息の念を善くすれば入息も俱に亦た然り。　出入諦に思惟し、分別して具に明了ならば、此れ則ち決定の分にして、世尊の所說なり。　一切諸の善根は各各自相を盡し、最勝無上の智を說いて名けて決定と爲す。

彼の諸の修行者は決定分に安住し、出息入息の時正しく無常の相を觀ずべし。　息法は次第に生じ、展轉して更に相因り、乃至衆緣合して起る時暫くも停らず。　當に知るべし和合の法は是の性速に朽滅す。　法は因緣によりて起り、性は羸なるが故に無常なり。　一切衆緣の力に

【一〇〇】遍十方の下に割註〔十相生〕、十相上の次に同じく〔十相各生十相〕。

【一〇一】曼陀樹(Mandārava)。

二　功德住と升進との自地を以て廣く說きぬ。　自地の善根力にて他地の功德生ず。　修行の最勝の義、此の相を今略して說かん。　自地既に增上すれば餘の勝淨の法生ず。　當に知るべし是の功德は他地にして而して升進し、無量の行方便、一切諸度の法、種々對治の相にて他地の功德起る。　謂く初念の處に於て三念兼て已に修す。[96]煖來り及び頂と忍と世間第一法と見道と思惟道と無學道も亦修す。[97]諸禪と神通と無量と無色定と正法道品分と究竟の漏盡智と背捨と一切入と妙願智と淸淨と、身念の善根力乃ち是の諸法を起す。　微妙なる功德の相は一切隨順して生ず、若し繫心の處に住すれば是れ則ち自地の相なり。　其の相の起ること身に在り。

亦は現じ亦復た僞す。　有時は近果と說き有時は近に非ずと說く、或は復た果を與ふる有り、或は空にして與ふる所無し。　所謂近果なる者は是れ相の近邊に住するなり。　若し彼の果近からずんば當に知るべし是れ相遠きなり。若し現にして觸ならしむれば是れ卽ち果を與ふる相なり。　現ずと雖も而も觸せざれば空相にして功德無し、譬へば猶ほ果無き樹の華繁くして而も實無きがごとし。　人の冷渴に逼られて遠く水火有るを見るも、彼れ終に觸を起さゞるが如く、但だ相を見るも亦然り、空にして功德無きが故に身に於て快樂無し。　喜悅極めて增長し息樂と及び寂止と、身心に斯の樂を受く。　是を與果の相と說く。　功德及び餘法の、自地と他地との升進の相の廻轉するに、四種倶に亦然り。　一切の升進の相と、殊妙なる種々の印と、蓮華衆寶の樹と、靡麗なる諸の器服とは、光炎極めて顯炤し無量の莊嚴具す。　慧(者)は說いて勝道[98]功德住升進と爲す。　功德住と升進と起る所の諸の妙相を我今當に具さに說くべし。　修行者諦に聽け、上の[99]曼荼邏に於て淳一に衆相を起して、流光參然として下り、淸淨なること頗梨の如く其の光四體に充つ。　身をして極めて柔軟ならしめ、又復身より出でて漸々に稍流下して、其の善根力に隨つて、遠近に定相無く、彼れ曼荼邏を成じて勢極つて本處

【九六】煖、頂、忍世第一法の四善根、見道、思惟道、背捨、一切入等に就いては坐禪三昧經卷下を見よ。

【九七】諸禪は、色界四禪、神通は五神通、無量は四無量心、正法道品分は八正道三十七道品のことなり。

【九八】功德住升進の五字三本にはなし。

【九九】曼荼邏(Mandala)、は境場又は輪圓具足と譯す、一定の佛菩薩天神及び其の持物、服具等が一定の秩序によりて一集團となれるものを云ふ。

已に竟り、所依の諸の過惡爲さゞれば則ち清淨なり。　是を須臾の頃に、阿那般那念方便道の所攝なりと說く。　功德住と升進と、是の義我れ已に說きぬ。

修行勝道升進分第六

功德住と升進と及び餘の方便とは修行の一切地(卽ち)共地と不共地とを攝す。　功德住と升進と、彼は勝道に依りて起る。　種々の相行の義を今當に說くべし、善く聽け。　梯禰[九五]旣に已に起らば心の愛樂を修行せよ。是くの如き愛樂心は巧便の功德住なり。　慧者は善く方便して意を起して勤めて修行す。　其の如く功德住は是れ則ち巧方便なり。　將に微妙の境に入らんとするに流注の想に隨ふこと勿れ。　慧者は心を攝して住し、應の如く善く所住の妙功德を受持し、澄淨にして垢濁無く、具足して減少無く清淨にして安隱に住す。　淳一にして普く鮮明に、凝定にして動ぜず、是れ緣の有を感ずるに由る、時に過つて復た無に歸す。　色相次第に起り種々の衆相生じ、修行し正思惟せば身心に喜樂を生ず。　是の功德住に於て具足して止觀を攝し、旣に能く身樂を起して心も亦た正しく安隱なり。　自地亦た他地の功德住と升進と、是れを今當に略して說くべし。　修行を廣く分別せん、修行の三摩提と巧便隨順念とを智者は慧眼を開いて說いて名けて功德と爲す。　心足の安立する處を說いて功德住と名け、聖道の對治を修するを說いて功德進と名く。　對治の諸の聖行の功德住と升進とは、地に隨つて過惡の心の起る所を悉く能く除く。　修行して勤めて精進せば功德の利增廣す。　信と戒と聞と捨と慧と、貪・恚・癡根無きと、欲と精進と慚愧と除と喜と不放逸と悅樂と念と定と捨と正智と餘の善法と、是くの如き一切の種は自地に諸の垢を離る。　其の功德住立すれば卽ち地に隨て對治す。　是れ精進力に由りて善を助け心を長養す。　何ぞ彼の地中に於て種數を攝受せざらん。

【九五】旣已起の下の割註〔心住處名〕、

上に於て觀察し已て風に依て還た止住す。　所應を觀察し已つて復た餘の所修を起す。　若し彼の風を觀ずるの心、還に於て善く決定すれば、是を修行者の迴轉巧方便なりと說く。　人の聚落に遊びて所作し訖つて已に歸るが如し。　是くの如きの觀を修行すれば喜樂遂に增長す。　已に入息の念を捨て出息の緣に安處し、亦た出息の念を捨て入息の緣に安處す。　數に於て已に究竟し息去れば亦た隨ひて去る。　是くの如き一切種を亦た名けて迴轉と爲す。　所應の相を觀察するに相相而も迴轉し種々衆事の觀次第に轉ずるも亦た然り。　迴轉を善くする者には此の迴轉の義を說くべし。　當に知るべし是れ迴轉とは智慧を修行する處なり。　彼の方便起るに從ひ勝道[九二]現生前す。　聞慧の念已に度し次第に思慧生ず。　已に欲界の行を捨て然る後に修慧に入る、是を悉く迴轉と名づくるは世尊の所說なり。　彼の未至地より次第に初禪に入り乃ち第三禪に至る、其の轉も亦是くの如し。　第四禪の眷屬若し彼に風有らば是も亦た應に迴轉して根本地に入るべし。　彼に從て巧便を起し次第に起緣に住す。　入出と[九三]優波との此の六は悉く迴轉す。　共方便地を捨てゝ共地現在前し、共方便地を捨てゝ不共現在前す。　不共方便を捨てゝ不共現在前し、相方便地に緣つて究竟地に展轉す。　是を上迴轉と名け明智の[九四]稱說する所なり。

我が智方便の如く已に迴轉の義を說く。　無垢淸淨の念今當に次第に說くべし。　彼の修行をして須臾も蓋を抑止せしむるが如きは是を則ち淸淨と爲す、不淨は所應に非ざるなり。　若し已に數を成就すれば能く內の貪著を捨つ。　此の義應當に慧者の觀淸淨なりと知るべし。　隨順已に成就すれば能く外の貪著を捨つ。　是くの如く正思惟すれば智者の念淸淨なり。　若し比丘の心已に住して亂の爲に亂されず、是くの如く念を動ぜざれば修行智淸淨なり。　若し已に風際に於て觀察して疑惑を離れ、復た更に息を求めざれば是を則ち淸淨と爲す。　念地悉く

との」の一句を入れて解すべし。

【九二】 除疑觀の下の割註〔觀門竟る〕。

【九二】 現生を宮本には現在に作る。

【九三】 優波(Upa)は近づく意味なり、南方論部にては近分定を Upacāra と云ふ點より考ふるに、本文にても之れを近分定の意味に解して然るべきか、然らば入出を根本定とし、色界下三禪の未至根本及近分を六と言いしなるべし。

【九四】 所稱說の下の割註〔凡夫人凡夫共有の法を名けて共地と爲し、緣より緣に至るを名けて轉と爲す、諸相、諸方便諸地の次第轉も亦是くの如し〕。

す。當に知るべし彼は名を緣じ時に或は復た義を緣ず。阿那般那念の所起に禪慧を修すれば、悉く已に捨つるを觀と名け、唯諸法の義を緣ず。當に知るべし近境界は種々の異有ること無し、亦た相續の緣に非ず是を等智の行と說く。是を安般念は無癡の智慧性なりと謂ふ。

亦た名けて捨性と爲す是れ則ち佛の所說なり。當に知るべし是の慧性は捨根と共に倶に生ず。[八六]若し是の捨性をして則ち餘と共に起らしめば欲色二有の搫なり、無色は身依無ければなり。

(また)彼の最後の禪にも非らず、身密にして息無きが故なり。或は[八七]根本地と謂ふも亦た復た是れ眷屬なり。說いて唯眷屬にして是れ根本地に非ずと言ふ。彼の捨性をして根本地に在らしめんと欲すれば阿那般那念は應に[八八]八地に在るべし。言ふ所、唯だ眷屬のみに是くの如き捨根を說かば、知るべし彼の安般念は唯だ五地に在ることを。此の定は五地に在りて是の處に依りて迴轉す。欲と中間と未至と及び後の二眷屬となり。最上頂なる四禪には、彼に捨根有りと雖も彼の身に於て毛孔道を淨治すること有ること無し。[八九]第四及び眷屬は彼の中に二種を說く、報生と長養となり。唯だ依風有ること無し。出息と入息とは是の風を名づけて依と爲す。身極めて厚密にして依無きを以て二種と說く。佛は出入の息を(第)四禪正受の刺なりと說き、亦た咽喉の處なりと言ひたまふ。明に知りぬ[九〇]所說有ることを。是れ彼の方便の故に亦禪義を以て攝す。出息と入息とは彼處に定んで有ること無し。修行して出息を觀ずるには上は第四禪に際り、已に風の境界を極め彼に於て正憶念すらく、云何ぞ我が是の心は緣に於て究竟するや未だしやと。或は復た更に上に於て少しく進みて重ねて觀察せよ。或は卽ち彼に於て住して餘の方便を作さず、是くの如きの觀を修行すれば則ち能く疑惑を除く。修行して風際を極め是の處を善く觀察せよ。當に知るべし是くの如きの心は則ち[九一]除疑觀と名づく。

【八六】以下數息觀の所依の地を論ずるなり、前段に數息觀の體性は慧の心所にして、又苦樂捨の三受の中にては捨と相應するものあることを說けり。而し此の捨が數息觀と共同して働く(餘と共に起ら使む)とするならば、數息觀の起るのは欲界と色界とに屬し(欲色二有の繫)と、無色界は身無き故に數息ある筈なし、又色界の中にても最後第四禪は息風なき故に數息なし。

【八七】次に根本とあるは根本定のこと、眷屬は未至定のことなり、數息觀は色界の下三禪の中にても、其の根本定には無くして未至定のみ存するなり。

【八八】八地とは、欲界と色界との禪を十地に分ちたる中、欲界禪と、色界初禪の未至、根本兩定と、初二禪の間にある中間定と、第二第三禪の近分、未至の四定とを云ひ、五地とは、初二三禪の根本定を除きたる殘りを指す。

【八九】「第四及眷屬」とは「第四禪の根本定と未至定」の意にして、此處には三種風の中にては報生風と長養風と二種のみにて依風(出入息の風)は存せず、故に數息なし。

【九〇】所說有ることをの上に、「第四禪は數息の依地に非ず

離れ[七九]極風の處に安止し[八〇]三摩提等しく起る。　三昧既に起れば便ち[八一]功德住を得[八二]正住を修行し已つて種々に風を觀察し先づ本處を觀る。　謂ゆる風の從つて起る所、此の處爲めに那とか云はん、一とせんや二とせんや冷暖悉く觀察せよ、八種も前に說くが如し。　總じて諸大を觀ずとせんや、唯だ一種在りとせん耶、觀ずる時悉く倶に有るも一增上を以て說くなり。修行して風大を觀ずれば造色彼より生ず。　唯心と心法と彼の造色に依つて起る。　彼れ造色し已つて而して復た種大有るに非ず。　諸有の入出の息は是の風を依種と名づけ、報風及び長養と是を[八三]三種風と爲す。　或は說く入は前に在り出は後に在りと、或は說く出は前に在り入は後に在りと。　皆因緣有るが故に彼れ是くの如きの說を作す、其の眞實義の如きは慧者乃ち決定す。　臍處の所起に於て毛孔道を[八四]淨治す。　此の風の義に由るが故に彼れ出は前に在りと說く。　毛孔已に開淨すれば入は則ち前に在り、人の初めて生ずる時の如し。　阿那は入の故に起り息風最も先に出づ、是の故に[八五]波那と說く。　息風諸の種大は割截すれども苦を生ぜず、當に知るべし彼は受に非ずと、謂ふに受は則ち然らず。　彼の修行者は諸の斷逼を患へざるを以て、是の故に出入の息は身に於て復た受に非ざるなり。　識命若し斷ずる時は息則ち廻轉せず、是れ則ち衆生數にして必ず命根に由て起る。　息は則ち是れ身行なりとは世尊の所說なり。　亦た根本依と名け衆生の由りて轉ずる所なり。　是の息既に滅すれば命則ち所依無し、能く命根を持するを以ての故に衆生數と說く。

阿那般那念は風に緣て境界と爲す。　正思惟と曰ふと雖も而も眞實行に非ず。　一切の修する所の觀は彼れ悉く風に緣て起る、觀に差別有り、次第に今當に說くべし。　阿那般那の念は分別するに三種有り。　所謂聞より起ると、思慧と、修慧となり。　是の安般念に於て比丘の聞慧生ずれば、一切時に悉く受くる名字を境界と爲す。　出入の息を境界として正念し、思慧生

【七九】　離、外食著の次の割註〔隨門竟る〕。
【八〇】　安止極風處の下の割註〔極めて下風の際に止まる〕。
【八一】　便得功德住の下の割註〔止門竟る〕。
【八二】　正住を三本には止住に作る。
【八三】　三種風は、依種（出入息）、報風、長養風なり。
【八四】　淨治毛孔道の下の割註〔此の報風は毛孔を開くが故に出と名くるも外に出づるに非ず〕。
【八五】　說波那の下の割註〔此は是れ眞實義なり〕、

出息修行する時、諸根は所緣に隨ひ心々法倶に順ふ是れ亦た般那と說く。出息滅に歸すれば乃ち根本地に入る。　正受の命終に及ぶは、斯れ出息を捨つるに由る。出息の滅を修行すれば次第に[七三]阿那生ず。　[七四]滅盡の三摩提、第四禪も亦た然り。　般那旣に已に滅すれば次第に阿那生ず、阿那の時に悕望するを[七五]阿世婆娑と說く。　我れ彼の死者を觀るに定んで是の相有ること無し。　彼の息更に生ぜば是くの如きの相あるを觀ぜよ。　毒・淤埿・火蛇、此れ相似の境界なりと。　出息能く意を攝して所緣に隨はしめざること猶ほ象を制する鉤の如くんば、波世婆娑と名づく[七六]顚倒の想を捨除して眞實の想を成就し、自在及び常を離れて唯だ空行聚と爲る。本從來する所無く去も亦所至無く、去來不可得にして亦須臾も住せず。　慧智明に此を見て諸の知作者を離る。　出息に作者無し、見あれば則ち顚倒に墮す、出息已に過ぎ去れば、彼則ち見るべからず。　命斷じて諸息滅すれば過去も亦復然り。　安般の諸の功德、出息と入息と衆物及び字義、我れ已に略して說き竟んぬ。　是の種は增すが故に說未だ曾て用を相離れず。

若し覺想亂を爲さば當に安般念を習ふべし。已に能く數に應ずれば則　內の貪著を除かん。數に於て若し隨順すれば是れ則ち不順を離る。　志を無亂の境に在いて能く諸の亂想を攝せよ。　先づ數は一より起りて是くの如く乃ち十に至る。　修行して此の數に順ぜば便ち功德住を得ん。　已に功德住を得ば則ち能く升進を求めん。　一切の亂覺を滅することは佛、增上の[七七]故にと說く數は能く一切を滅す、覺するを佛但だ滅と言ふ。　一切亂れざるは增上を以ての故なり。

內外出入の息去るに則ち心影のごとくに隨ひ、決定し善く觀察して順ずれば是れ涅槃に趣く。出入の息を修行すれば隨つて所起の處に[七八]到る是くの如く知つて升進すれば能く外の貪著を

【七三】阿那生の次に三本には「得入無想定」の一句あり、無想定(Asamjña-samāpatti)は色界の第四無想天に生れんとして、修する無心定のことなり。

【七四】滅盡定（Nirodha-samāpatti）は無色界の第四に相應する定にて、無想定と同じく心作用の全く中止さるゝものなり。

【七五】阿世婆娑（Āśvāsa）は入息に際して精神安慰快適にして心調ふを云ひ、波世婆娑(praśvāsa)は出息に際して右の如くなるを云ふ。巴利聖典にては Assāsa, Passāsa として屢々論ぜらるゝも、何れを入息とし出息とするかは異說あるものゝ如し。

【七六】波世婆娑の次に割註あり、曰く「出息心を攝するの義有り」。

【七七】故說の次の割註に曰く「數門竟る」。

【七八】到所起處の次に、割註「出入息は所起の處同じく臍に在り」。

修行方便道升進分第五

比丘よ安般念の功德住と升進とは能く智慧をして增さしむ、我れ今次第に說かん。　功德住已に進む、進むも復た功德住なり、是の故に功德住を修行して升進せよと說く。　修行は鼻端に心を繫して堅住せしめ、念を專にして諦に思惟し、正觀して風相に依る。　入息と出息とに心を繫して隨て憶念し、憶念して若も忘ぜざれば是れ初の功德住なり。　彼の功德住已つて復た方便を起して求め、更に功德を求むる時、住すれば則ち升進を生ず。　升進等しく起る時は亦た功德住を生ず、是を住し已て進み進み已て功德住すと名く。　善く安般の相、功德及び諸過、息の輕と重と冷と暖と軟と麁と澁と滑とを解して、阿那に般那を攝して　是を[七〇]諸根に攝持し、彼の所緣の境に於ても之を攝して寂止ならしむ。　外の散ぜる　心數法[七一]を攝還するの義も亦然り。風を持し來つて內に入る、是の故に阿那と說く。　心、所緣に轉ずれば止めて復た轉ぜざらしめ、心、所緣に於て起れば亦た復た制して滅せしむ。　修行して　觀[七二]若し增さば之を制して止に從はしむ。　修行して若し止增さば之を起して觀に從はしむ。　見增さば則ち觸を以てし觸增さば則ち見を以てす。　得證と智證と二增さば倶に相攝す。　修行するに緣、寂ならずとも、意寂止して攝し來らば、身中に淸凉起り諸の熱惱を滅除す。　掉踊して靜心ならずんば之を攝して寂止せしめ、勤めて方便して迴轉すれば其の身に悉く充滿す。　四大種を長養することは當に知るべし息より起ることを。　是の種復た增猛すれば行者四大に執す。　阿那の力は能く寂止・善法の分を起し、諸所の大惡刺をも亦能く拔いて出さしむ。　息短く向して漸く滅して修行、心安靜なり。　是の故に佛世尊說いて名けて阿那と爲す。　復た次に般那の相は是れを今當に略して說くべし。　毛孔諸の竅處、先づ息道を淨治し、前に出るを般那と名け始めに入風より起る。

【七〇】「是」を本には「亦」に作る、然らば「亦諸根を攝す」と讀むべし。

【七一】心數法は、心所有法(Caitta)の舊譯にして心作用の各方面を取りて四十六を擧げ、之れに一々體ありと見るは倶舍論の說なり。

【七二】觀(Vipaśyanā)は觀智、止(Śamatha)は寂然不動の心にして、禪の兩面なり。

ず亦た沒せず、相の所起を見ず、亦た滅處を知らざれば、過も亦た無過も是たり。　說く所の諸の障礙は皆是れ堅住の相にして、彼の住に由らずと謂ふは、斯れ明智の說に非ず。　諸の過患を興造して若干の因緣の縛あるも、能く諸の對治を用ふれば衆妙復た[六六]顯說す。　所尊を恭敬せず亦た憍慢を捨てず、自ら其の過を隱覆して明者に向つて說かず。　我れ年旣に衰老して已に衆の爲に棄てらる。　或は能く利養を失ひ我をして苦惱を生ぜしむ、心常に憂畏を懷き深く慮り長歎息す。　我れ後に當に死すべき時に將た何の計をか何さんと欲す。　過を隱して心憂惱し愚惑を作して縛せられ、橫に自ら罪累を生じ大功德海を失ひ、[六七]現法樂に味著し貪餮にして[六八]黠慧なし。　後世の果を棄捨し此の諸の過惡を興す、是くの如くの諸の住縛は起る所各々異る。

修行して怯劣無ければ能く應に治すべき所を治し、怯劣にして方便無くんば自ら進むに由無しと謂ふ。　是れ則ち甚だ拔き難くして、象の深泥に溺るゝが如く、是くの如く甚だ拔き難し。　懈怠心に欺かれ、長夜に住の泥に沒して熱迫せられて死に趣く。　業行と煩惱と報と此の三障の爲に覆はれ、智無く勢起ることも無く、永く住の爲に沒せらる、久遠に癡冥を積み業行諸の煩惱、斯等の類に繫縛せられて、迷亂して自在ならず。　諸の過惡に習近せば善功德を遠離し、其の意をして忽擾せしむ。　箭の虛空を旋り、蛇毒盛に充滿し、蝮蠍惡龍の處、巨海深くして底無く、無澤の大火聚に盲人彼に近いて遊び、闇に往いて而して見ざるが如し。　修行して住に縛せらるる、其の過も亦是くの如し。　住の過多きこと無量にして升進の德も亦然り、海の涯底無きが如く是れ深うして量るべからず。　世間無知の障は眞實慧を燈と爲し、燈を持して放逸無ければ彼の明終に滅せず。　善く住分の過は諸の無黠の者を縛するを說き、[六九]決定知の境界は究竟我が分に非ず。　種々の過の縛する所の是の縛は一相に非ず、當に知るべし業と衆緣とは唯だ佛のみ能く覺了したまふ。

【六六】　顯說は三本には顯現に作る。

【六七】　現法樂とは、定の七名の一にして、色界の四根本定に入れば現在に法樂を得るを以て名づく。

【六八】　大正本には黠無慧とあれど三本によりて無黠慧と改む。

【六九】　三本には決定智に作る。

爲に厭心增長せず。　厭心增進せざれば貪欲を離るゝこと能はず、若し貪欲を離れずんば何によりてか解脫有らん。　解脫成就せずんば終に漏盡を得ず。　諸漏を斷ぜずんば則ち實智慧無し。　彼の身念處に於て住相已に分別す、受・心・法の念處も是くの如く應に廣く說くべし。修行して心悅ばず彼の喜亦た生ぜず、身に寂止の樂しみ無ければ、當に知るべし是れ住相なり。　修行して受獲する所の信・戒・聞・捨・慧は常に其の少分を守れば、是を則ち住相と爲す。

住縛の比丘有りて往いて阿難の所に到り所住の相に迷ふ、是れ今當に略して說くべし。　無相三昧を得て六年住に縛せられ、所說を聞かんと樂欲して常に阿難に隨逐するも所業を進むること能はず、亦た復た退轉せず、住の境界に住して解脫の道を得ず。　來らず亦た去らず解脫し已つて而して住し、住し已つて復た解脫し、解脫し已つて還つて縛せらる。　或は修行者有りて不退の地に住在し、微細の煩惱起るも而も覺知する能はず、煩惱を覺せざるが故に勝處に到ること能はず、地に於て分別無く亦た退過有ること無く、地の諸過起らず、是くの如きは住に止まる。

或は住分の中に於て而も衆妙の相を失するあり。　衆妙の相滅すと雖も意猶ほ彼の地に順ふ、意彼の地に順ふ時、餘分の樂相生ず。　已に少樂有るが故に心寂止に依りて住す、其の寂止の心に因りて自ら作は已に作せりと謂へり。　不具足に安止して具足の果を得ず。　無智は心目を翳ひ而して自ら謂ひて智と爲す。　無智障を修行して所應の用を覺らず、所應の用を覺る者は地に於て能く[六五]究竟し。　彼れは共地の中に住して種々の垢に汚さる。　若し修行者をして不共地を成就せしむれば、是くの如き過患を知りて彼は終に縛せられず。　煩惱の過を識らず愚癡にして實智無ければ、禪に於て吉安を覺るも猶ほ象の樹に繫がるゝが如し。　修行して爾炎を觀、所起の處を知ること莫きは、其の依て出づる所を而も自ら知る能はざるに從る。　涌せ

【六五】能究竟の次に、三本には則能得不共の一句あり。

相を捨てざれば自相則ち顯現す。　薄皮は不淨を覆ひ身穢を見ざらしめ、威儀及び衆具、利樂は身苦を弱ふ。　相似次第に生じ前後續いて間無く、非常の相を隱蔽し身變を見ざらしむ。服用受を施作し吾我の相を攝持し、能く本事を憶念して身の非我觀を隱す。　是の諸の相似の相、修行して分別せざれば、彼に於て愛樂を起し而して功德の相を生じ、染著の妄想生じて復た升進を樂はず、勝法[六二]を取る能はずして住の過、日に增長す。　非我相似の相、此等廻轉せず、是くの如く廻轉せざれば行者の癡惑生じ、無智住に縛せられ、彼處に繫著して樂著すれば諸過を生ず。　是の相今當に說くべし、爾炎漸く損壞して、分離し及び交亂し破散して和合し回し、是れ則ち[六三]住相の縛なり。　身に於て巧便ならず、自ら分離の想を生じ、交亂し或は塵碎す、是を住に縛せらるゝと爲す。　常を守りて異相無く、衆色次でならずして生ず。　種々衆の妙想亦た次第ならずして起り、流出して而も住せず其の身漸く消滅す。　相或は來り復た去りて修行增長せず。　寂止既に生せず、身に於て長養無く、心悅樂を起さず、是を不淨捨と說く。　彼の不清淨の捨は、所見鮮白ならず、亦た升進する能はず、亦た復た退轉せず。戲沙門の像の如く少時の悅樂を生ずるも、譬へば借りたる衣服の如く亦た夢の見る所の如し。

命を不清淨と爲し、諂曲及び惡、聚落の知識の所に、自ら其の功德を顯はし、諸の過惡を覆藏し罪を犯して發露せず、及び餘の一切の縛は修行者を垢汚す。　髣髴として事相有れば而も便ち實想を起し、未だ熟せざるに熟したりと謂ひ、未だ滅せざるに已に滅すと想ふ。　方便等滿ならずして而して升進を求めんと欲するは、[六四]穢を含める苗を部するが如し、是れ則ち住に縛せらるゝなり。　業始より方便無く、相現じて堅く守持し過進して心矜擧す、是の如きは住に縛せらるゝなり。　或は修行者有りて而も斷常の見を起さば、是の見は心をして亂れしむ、則ち縛に縛せらるゝと爲す。　或は修行者有りて身身を細微に觀ずるも、彼住に縛せらるゝが

【六二】取を三本には趣に作る。

【六三】住相縛を三本には、住縛相に作る。

【六四】穢を、三本には穢に作り、部を割に作る。

聞慧既に生ずれば應に思慧の念を起すべし。善く次第を解せざれば愚癡住に縛せらる。若し數已に成就せば息去り應に隨ひ去るべし。隨順の法を知らざれば是れ修行住と說く。佛比丘に問ふが如し。誰か安般念を習ふやと、一比丘有りて答ふ、是の念我れ修習すと。汝安般念有り、汝有る無しと言はず、復た更に勝妙なる有り、牟尼の說當に方便道の安般を修すべし。

修行勝道住分第四

勝道は[五八]正觀を修し相行念已に成ずるも、升進の法を善くせざれば是れ則ち住に縛せらる。所緣の境を愛著せば業を進むるも心懈怠す。是の縛に縛せらるに由り勝處に至る能はず。或は動ずべからざる有ると、軟に非ざると亦た堅に非ざると、或は强極牢密なると、亦た金剛像の如きと、此の五の障閡有らば、進まず亦た退かず、是れ則ち住縛の相にして升進の道を遠離す。亂光及び黑闇ありて、忍の自身現はれず、譬へば濁油を燃す火のごとく、亦た霧日にして視るが如く、光明顯發せず諸の喜樂を背捨し、寂止息樂の分、彼れ終に復た生せず、猶ほ堅實の物にして而も[五九]濡相有りて現ずるが如く、或時は修行者の住相も亦復然り。相は所欲に隨ふに非ず而も欲に隨ふて想を起す。意に隨はしめんと欲すと雖も終に所樂に從はず。謂ゆる相は留まる所に非ず而も强く制持せんと欲して、是くの如く念に違反すれば則ち住の爲に縛せらる。是の[六〇]想已に成就せば當に知るべし制する所に非ず。彼の去留の相に住し能く最勝の處に到る。涌をして沒を作さしめんと欲し、或は高をして下と爲さんと欲し、去に於て來ならしめんと欲し、住に於て欲せず、滅の時滅せざらんと欲せば終に所欲の如くならず。修行を生滅に[六一]住して所行常に轉進し、諸法の相已に成せば終に自相を捨てず、若し自

[五八] 正觀を三本には、止觀に作る、以下皆同じ。

[五九] 濡を三本には軟に作る。

[六〇] 想を三本には相に作る。

[六一] 住を三本には任に作る。

遂に長養の分を失して其の心一ら定まらず、身も復た滋潤無く悅樂も亦生ぜず。　所依樂しむべからず、身意俱に錯亂し、三昧復た起らず其の心永く住せず、是くの如く住せざる心は必ず修行に於て退す。　愛と見と慢と禪を增すと、緣に於て心味著すると此の累念有りて生ずる、是を修行退と說く。　身は利刺にて害するが如く或は復た極めて振掉し、體を擧げて皆煩壯して、蛇毒の充滿するが如し、此の三過惡有れば必ず修行に於て退す。
未だ得ざるを得たりとして服行し、他の務意に閑はず三退の法に習近す、是を修行退と說く。
業と煩惱と報と是を三障閡と說く、亦解脫の障有り、是れ修行をして退かしむ。　方便想の[五五]惡行、三摩提の行地、彼に於て觀察せずば、是れ修行をして退せしむ。　方便想の諸地、三昧行及び餘を、聞く所に隨つて悕望すれば則ち發趣に於て退す。　生の時滅の想を作し、滅の時生の想を作さば、二想俱に當に失すべし、是れ則ち修行退なり。　若し住法の中に於て而も生滅の想を作し、此の諸の顚倒を興さば、是を修行退と說く。　入の時出の想を作し、出の時入の想を作し、二俱に住の想を作さば、是を說いて顚倒と爲す。　[五六]煩惱の得を斷ぜんと欲して正方便を修行すれば、彼に由て力を得るが故に相似の諸相生ず。　相似の相旣に生ずれば、修行心隨つて轉じて煩惱卽時に起る、是を修行退と說く。　退過は諸の駛水のごとく修行者を漂浪す、我が力の能くする所に隨つて少かに退法の海を量る、無量の餘の退過は是れ深くして[五七]惻る所に非ず、諸の深明なる智者は自ら當に廣く稱說すべし。

修行方便道安般念住分第三

我が力の能ふ所の如く退過を演說し已る、今當に住過を說くべし。　修行者善く聽け、若し入出の息に於て見無く亦た覺無く、方便して求むることを解せずんば是れ則ち初門の住なり。

【五五】惡を三本には要に作る。
【五六】得を三本には縛に作る。
【五七】惻を元、明、宮本には測に作る。

意普ねく流散し諸の境界に樂著す。 形消えて意愁慘し其身、皆熾然たり。 是くの如く熾然たる者、是を說いて憂退と爲す。 方便して精勤せずんば後則ち悔恨を生ず。 應に成就すべき所を聞いて進まんと欲すれども劣にして能くすること無く、喜勝の處に趣かず。 或は勝を見て取らず皆無智に出るが故なり、是を修行退と說く。 自ら越戒有るを念じて疑悔し、及び諸覺、意淡くして滋味無し、是を修行退と說く。 諸の過定は意羸く三昧漸く消滅し心亂れて蓋に覆はる、是を修行退と說く。 心の擧調・順捨、時・非時を觀ぜず、住と起と緣とを了せず、無智の故に修退す。[四九] 六時の行を知らず、[五〇]六界も亦善くせず、亦六巧便に愚なる、是を修行退と說く。 貪欲瞋恚の覺、[五一]十想の巧方便、諸禪の地に向ふを得、及び法と心との妄解、一切次第に度すべきに無知の故に修退す。

處非處、業報及び[五二]正受を觀ぜず、禪定諸の解脫・淨味を愚にして了せず、諸根到る處の道、性欲分別せず、心は衆くの雜相に隨ふ、是れ悉く無知にして退するなり。 苦樂の速道に於て其の心趣向せず、是くの如く意迷惑して必ず退轉の處に向ふ。起と住と起緣と入と出と及び方便と六法成就せずば、是れ修行をして退せしむ。 法を知り亦義を知り、時を知り亦量を知る、自知と衆を知ると及び[五三]福伽羅を知るとの七に於て愚にして了せずば、是れ修行をして退せしむ。

諸の惡法を興起し卑賤の業を習行し、不善友に親近すれば、是れ修行をして退せしむ。 錯り說いて所應に違すれども愛著は心に樂向す、當に知るべし是れ久からずして必ず修行に於て退す。 所止の處及び人の床臥等の衆具は、斯れ皆な樂む所に非ず、近づけば修行をして退せしむ。 喜んで諸の雜相に隨へば修する所の慧を損減し、所緣の處を棄捨し心眞實を得ず、修行は本相を捨て、散心は外緣に隨ふ。 彼處に還らんと欲すと雖も[五四]意樂くして復た樂まず、

【四九】 六時は日出、日中、日沒、初夜、中夜、後夜なり。

【五〇】 六界は、地水火風空識の六大のことか。

【五一】 十想は、無常、苦、無我、食不淨、世間不可樂、死、不淨、斷、離、盡の十種の觀法を云ふ。

【五二】 正受(Samnyā) 正しく對象を受容認識すること。

【五三】 福伽羅(Pudgala)は人と譯す、三界流轉の主體なり。

【五四】 衆を三本には、終に作る。

若し退減分に入れば則ち解脫有ること無し。　無常と斷と離欲と滅盡とを觀察して、出息入息滅す、是を修行勝と名く〔四三〕是くの如きの十六行、自在にして心迴轉す。　覺觸の獲る所、見得も亦復然なり。　若し見と觸とに於て善く分際を識らざれば、是の過應當に知るべし、無智にして修をして退せしむ。　上增進を修行せば當に下を緣ずべからず。　下を緣ずること亦是くの如くんば上增進に應ぜず。　若し二增進を見ば心住して等觀すべし。　之に〔四四〕任ずれば則ち自ら成じて還て修行處に到る。

修行勝道退分第二

勝念已に成就すれども、懈怠すれば竟に沈沒す、是を則ち退像と爲し求むる所に堪ゆること無し。〔四五〕不染汚無記諸の〔四六〕煩惱退を起して垢濁・熱炎生じ、是れに由りて正見を失ふ。　振掉し或は闘諍し、浮飄と麁澁と滑と、是の五は退減の相なれば修行して應に分別すべし。　遠きを望みて悕ふ所を絕ち、已に墜落すと見、還た深嶮を顧覩すること有るは是れ皆な退減の相なり。長病と誦と止諍と多業と遠遊行とは、彼の〔四七〕時解脫の種(にとりて)、是の五は退減の因なり。　信・戒・聞・捨・慧是れに於て漸く衰退す。
身重と惛鈍と耽睡及び沈沒と、是の五は應當に知るべし、修行退轉の相なり。　恐怯にして猶豫多く驚畏して欣樂せず、懈怠して所欲を離れ迴向せずして修行す。　習せざると修習を過ると、是の二は倶に失と爲す。　彼の時解脫の種は是に於て修行退す。　三昧雜して樂しまず、〔四八〕爾炎皆な消盡し、麁澁の四大種還つて身內より起り掉動して正念を失す、是に由て意憒亂し其の心恬靜ならず、斯に行者より生ずる、一切諸の瑞相は顯現分明ならず、是くの如きの觀を修行せば(瑞相を)見んと欲するも甚だ難しと爲す。　諸根悉く馳縱し欲に隨つて所緣に向ひ、邪

【四三】修行勝の下の割註に曰く〔此の四相は法念處に似たり〕。

【四四】宋、元、明三本には任を住に作る。

【四五】不染汚とは、染汚(Kliṣṭa)即ち煩惱、雜染に非るものを云ひ、善、惡、無記の三性の中にては、善と無覆無記とを攝す。無記は善惡何れにも非るものにて之れに有覆と無覆とあり、前者は無明に覆はるゝ無記にして、道を覆ひ障ゆれども、輕微にして果を招く力なきが故に、惡に非ずして無記の一種となすなり。

【四六】大正本は煩惱とあれど宋、元、明、三本によりて煩憒と改む。

【四七】時解脫とは、阿羅漢にして鈍根なる者は種々の條件を具備する好時節を待たざれば入涅槃し得ざるを云ふ。

【四八】爾炎(Jñeya)は所知、應知、智境などと譯す、正智の對象を云ふ。

滑とを憶念し、修行して諦かに覺知し、隨順して善く調適すべし。觸に於て復た了ぜれば是を修行退と說く。　一を數へて以て二と爲し、二を數へて以て一と爲し、九に至るも猶ほ錯亂すれば是を修行退と說く。　若し修行退に於て更に數へて初より起し、十數滿足せば諸の過行を遠離す。修せざると、過修と、或は異修起と有りて、此の諸の過生ずること有れば、是を修行退と說く。　修行して若し倶に數ふるは心惑亂を生ずるに據る。　惑亂苦し增長すれば是を修行退と說く。　氣息通流せずして鼻面を衝擊すれば頭頂悉く苦痛にして、內に或は絞風起り息亂れて其の道を失ふ。　而も彼れ治することを知らざれば、身體極めて燋熱し其の心憒亂を生ず。四種既に錯亂し依風極めて遑諍す。修行して息め令んと欲するに、而も方便を善くせず對治の法を知らざれば、是れ必ず疾く退滅す。　修行して入息を緣じて、而して反つて出息を緣じ、修行して出息を緣じて、而して反つて入息を緣じ、二に於て心、倶に淨ならば是れ應に修行の果なるべし。　寂止にして定意生ずるも、而も復た更に數を求む。　此の諸の過謬行るは是れ皆た修行退なり。　急に喘ぎて而して安般すれば、則ち念をして錯亂せしむ。　是の錯亂の念に出りて修行すれば心狂を發す。　其の心狂を發するが故に應と不應とを知らず、二に於て分別無し、是を修行退と說く。[三八]　數を修行すること已に成じて息去らば亦隨も去る、去り已て處處に住し、彼に於て善く觀察す。　既に觀じて息をして還らしめ、還り已て清淨を起す。　善く六種を知らざれば是を修行退と說く。[三九]　長短悉く分別し遍身盡く覺知し、身行漸く休息すれば一切應に決了すべし。此に於て善く知らざれば是れ修行をして退[四〇]かしむ。　喜を知り亦樂を知り方便の意行を勉む。　當に復た心行を制して掉亂に至らざらしむべし。[四一]　次に分別して心を知り修行して正しく觀察すべし。　又欣悅の心を生じ還つて復た攝めて定ならしむ、是れ定心ならざるに非ず、定なり已つて心解脫す[四二]　善く解脫を修する者は心をして退沒せしめず

【三八】以下、數、隨、止、觀、還、淨の六種は安般の六妙門にして、詳しくは坐禪三昧經卷上を見よ。

【三九】以下數息の十六特勝を擧ぐ、修行道地經卷五、坐禪三昧經卷上に就て見よ。

【四〇】修行退の下の割註に曰く〔身念處の四勝竟る〕。

【四一】此の下の割註に曰く〔受念處の四勝竟る〕。

【四二】心解脫の次に割註あり曰く〔心念處の四勝竟る〕。

前に牟尼尊の熾然たる煩惱滅したまいて、流轉し退住する者を度するに升進の道を以てし、微妙の法を修行して能く退住の過を離れ、亦一切の惡を滅し諸の功德を成就したまへるを禮したてまつる。

佛世尊は善く法相を知りたまふ、如實の智慧を得て煩惱の盛火を滅し、熾然の宅を出で[二六]諸波羅蜜の船に乘じて無量の苦海を度り、本願の大悲力を以ての故に衆生を捨てず。諸の修行の爲に未曾有の法を說き、諸の未だ度せざるものを度して安隱を得せしむ。謂ゆる[二七]二甘露門に各〻二道有り。一は方便道にして二は曰く勝道なり。清淨具足甚深微妙にして、能く一切の諸の修行者をして[二八]三退の法を出でて住縛を遠離し、增益升進し成就決定し、生死の苦を盡し、解脫を究竟し、兼ねて衆生久遠の癡冥を除かしむ。佛滅度の後、尊者[二九]大迦葉、尊者阿難、尊者末田地、尊者舍那婆斯、尊者優波崛、尊者[三〇]婆須密、尊者[三一]僧伽羅叉、尊者達摩多羅、乃至尊者[三二]不若蜜多羅、諸の持法の者、此の慧燈を以て次第に傳授す。我れ今其の所聞の如く而も是の義を說く。

[三三]我れ今所聞の如く修行地を演說せん。方便と勝究竟とは其の修の生ずる所の如し。善法を修行するには先づ當に四種を知るべし、退減と、住と、升進と、諸の功德を決定するとなり。

[三四]修行退減する時、住法をして生ぜざらしめ、亦昇進すること能はず。是れを今當に略して說くべし。先づ當に等意を起して慈心觀を習行し、須臾に瞋恚を止め暫らくも、息めて行ぜざらしむ。煩惱暫らく止息せば次に當に[三五]尸羅を淨くすべし、尸羅既に清淨なれば三昧中に於て起る。[三六]三昧已に修起せば應と不應とを觀察し、善く應と不應とを知りて應に作すべき所に修向す。既に所應作に向はば念を繫心の處に專らにす。已に能く彼の處を樂しまば正觀して風相に依るべし。正觀して風に依る時其の心猶ほ馳亂せば、心を止めて入息に在き、[三七]繫し調へて馬を御するが如くす。心既に入息に止まらば、思惟して正に冷暖と輕重と柔軟と麁澁と

【二六】波羅蜜(Pāramitā)は到彼岸又は度と譯す。

【二七】二甘露門とは、數息觀と不淨觀となり。

【二八】三退とは、已得退、未得退、受用退にして、修行者ば已得未得の功德に就いて退轉するを云ふ。

【二九】大迦葉(Mahākāśyapa)。

【三〇】波須密(Vasumitra)。

【三一】僧伽羅叉(Saṅgharakṣa)。

【三二】不若蜜多羅(Puṇyamitra)。

【三三】此の一段は序文に當る。

【三四】以下正しく退分を說く。

【三五】尸羅(Śīla)は戒のこと。

【三六】三昧(Samādhi)、後文に三摩提とも云へり。

【三七】在入息の次に割註あり曰く「安般は二種あり、一は見にして、二は觸なり、鈍根は不見なり」。

て以て心に宅く。是に於て異族氣を同じうして幻形跡を造り、深緣起に入りて生死の際を見る。爾らば乃ち九關を龍津に闢き[一六]三忍を超えて以て位に登り、垢習を無生に凝し形累を神化に畢ゆ。故に曰く從生する所無く不生の所靡くして諸の所生に於て而も所生無しと。

今譯する所は[一七]達摩多羅と[一八]佛大先とより出づ。其の人は西域の俊、禪訓の宗なり、經要を搜集し大乘を勸發するに、弘教同じからざるが故に詳略の異有り、達摩多羅は衆篇を同道に闔べ、一色を開いて恒沙と爲す。其の觀爲るや、起も生を以てせず滅も盡を以てせず、往復して際無しと雖も、而も未だ始より如を出でざるを明す。故に曰く、色は如を離れず、如は色を離れず、色則ち是れ如なり、如則ち是れ色なりと。佛大先は以爲らく源を澄して流を引くに固に宜しく漸有るべし、是を以て[一九]二道より始めて甘露の門を開き、四義を釋して以て迷を反し、歸途を啓き以て命を領せしむ。陰界を分別して導くに正觀を以てし、緣起を暢散して優劣をして自ら辯せしめ、然る後、始を原ね終に反らしむ。妙は其の極を尋ぬるに、其の極盡くるに非ず、亦盡くす所に非ず。乃ち無盡と曰ひ、如來無盡の法門に入る。夫れ道は[二〇]三乘に冠し智は[二一]十地に通ずるに非ずんば、孰か能く玄根を法身に洞にし、宗一を無相に歸し、靜にして照を遺す無く動にして寂を離れさる者か。[二二]庾伽遮羅浮迷、譯して修行道地と言ふ。

[二三]達摩多羅禪經

卷の上

東晉の天竺三藏、[二四]佛陀跋陀羅譯す

修行方便道[二五]安那般那念退分第一

【一六】九關は九結（煩惱の九種）を指すか、三忍に就いては種々あり、四善根位中の忍位ならば上中下の三忍位のこと、最も廣くは生忍、法忍、無生忍に分つ、之れは位にあらず、忍辱行の分類なり。

【一七】達摩多羅（Dharmatrāta）。

【一八】佛大先（Buddhasena）。

【一九】二道は、方便道と勝道、四義は退、住、升進、決定のこと。

【二〇】三乘とは、聲聞、緣覺、菩薩の三道のこと。

【二一】十地は、菩薩の修行位次を十種に分ちしもの。

【二二】庾伽遮羅浮迷、（Yogācārabhūmi）。

【二三】宋、元、明三本によりて、標題及譯者名を此に入れたり。

【二四】佛陀跋陀羅（Buddhabhadra 覺賢と譯す）。

【二五】安那般那（Ānāpāna）入息出息と譯す、詳しくは修行道地經卷五の脚註を見よ。

ず闇に無匠に執り、孱焉として差ふこと無し。其の後、優波崛有り、弱にして超悟し、智世表に紹へて才高く應ずるもの寡し、理に觸するに簡に從ひ、八萬の法藏、存するところ唯だ要のみなり。〔九〕五部の分此より始まる。斯に因て推すに固に知る、形運は廢興を以て自ら兆す。神用は幽歩して跡無く、妙動尋ね難ければ徂に渉て異を生ずることを。愼まざる可けんや、察せざる可けんや。茲自り已來、事變を感じ其の舊典を懷ふ者、五部の學並に其の人有り、咸な大法の將に理の深きに頽れんとするを懼る。其の概(によりて)遂に各々禪經を述讃し以て業を隆盛にす。其の教たるや、無數の方便以て寂然を求め、寂乎として唯寂なるは、其の揆一なるのみ。而も條を尋ね根を求むる者は衆く、本を統べて末を運らす者は寡し。或は將に暨ばんとして至らず、或は方を守つて而も未だ變ぜず。是の故に經に〔一〇〕滿願の德を稱して普事の風を高ぶ。原るに夫れ聖旨は徒に其の長を全うするのみに非ず、亦其の短を救ふ所以なり。若し然らば五部の業を殊にするは其の人に存す、人經世せざれば道或は隆替し、廢興時有つて互に相昇降す。小大の目其れ定む可けんや。又節に違して變を善くすれば出處に際無く、名を晦して跡に寄すれば聞く無く示す無し。斯くの若きの人は復た以て名部を以て分つ可らず。既に名部の分つ所に非ざれば、亦其の外に出でて別に宗有らざること明なり。

毎に大教東流するに〔一一〕禪數尤も寡く、三業の統ぶること無くして斯の道殆んど廢するを慨ふ。頃〔一二〕鳩摩耆婆の〔一三〕馬鳴の所述を宣べて乃ち此の業有り。其の道未だ融せずと雖も、蓋し是れ山を一簣より爲すものなり。時之を來たし遇ゝ奇趣を感すること有るを欣ぶ。若し人夫の制勝の論を捨て不言の辯に順ふに於ては、誓を遂げ〔一四〕僧那を被むり至寂を己が任と爲し、德を懷ふて未だ忘れず、故に訓を遺すこと茲に在り。其の要爲るや大成を未象に圖り、微言を開いて而して體を崇ぶ。惑色の德に悖るを悟りて、〔一五〕六門を杜ぢて以て患を寢む。忿競の性を傷ぶることを達して、彼我を齊うし

【八】　優婆崛(Upagupta)。

【九】　五部の分とは、優婆崛の下に戒律の傳持に關して五派を生ぜりとの傳説にして、所謂同世の五師と稱するものなり。

【一〇】　滿願は富樓那(Pūrṇa)のこと。

【一一】　禪數とは、支那初期に於いて坐禪觀法を一括して稱する術語なり、蓋し禪觀の種類、習禪の階程等が數目的名數を以て示され居るが爲めならん。後世より云へば小乘禪のことなり。

【一二】　鳩摩耆婆(Kumārajīva)は羅什三藏のこと。

【一三】　馬鳴(Aśvaghoṣa)の所述を宣ぶとは、坐禪三昧經のことか。

【一四】　僧那は、詳しくは僧那僧涅(Saṃnāha-saṃnaddha)にして、弘誓、誓願と譯す。

【一五】　六門は、六根門のことなるべし。

達摩多羅禪經

序[一]

夫れ三業の興るは禪智を以て宗と爲す、精麁異分する雖も而も階籍方有り。是の故に軫が發するに達を分つも塗に轍を亂るゝこと無し。俗を革め務を成せば功積むこと待たずして靜もまた出る所あり、則ち幽詣、造微にして淵博究め難きも、然も[二]理亡昧せず庶旨統べて尋ぬべし。試みに略して言はば、禪は智に非ずんば以て其の寂を窮むること無く、智は禪に非ずんば以て其の照を深くすること無し。然れば則ち禪智の要は照寂の謂なり。其の相濟すや照は寂を離れず、寂は照を離れず感ずれば則ち倶に遊び、應ずれば必ず同じく趣く。玄を在用に功にし、養を萬法に交ふ。其の物に妙たるや、群動を運して以て一に至るとも而も有とせず。大像を未形に廓かにすとも而も無とせず。思ふこと無く爲すこと無くして而も爲さざること無し。是の故に心を洗ひ亂れたるを靜むる者は、之を以て慮を研き、悟徹して微に入る者は、之を以て神を窮むるなり。

若し乃ち將に其の門に入らんとすれば機、攝會に在り。理玄にして數廣く、道は文に隱る、則ち是れ阿難曲しく音詔を承けて、其の人に非ざるに遇へば必ず之を靈府に藏す。何となれば心は常規無くして其の變多方なり。數は定像無くして感を待つて應ず。是の故に化を天竺に行じて之を有匠に緘し、幽關闢くこと莫く、其の庭を闚ふこと罕なり。此によつて觀るに理行藏有れば道虛しく授けず、良に以有るかな。

如來の[三]泥曰未だ久しからずして[四]阿難は其の共行の弟子[五]末田地に傳へ、末田地は[六]舍那婆斯に傳ふ。此の[七]三應眞は咸な至願に乘じて冥に昔に契ふ。功は言外に在つた　經の辯ぜざる所、必

【一】大正本は序の字なくして直ちに卷上となし、次に譯者を出せど、今は宋、元、明三本によりて改む、此の序文は慧遠の作にして、出三藏記集第九卷に收錄す。

【二】大本は理不云昧とあれど、宋、宮本によりて亡昧に改む。

【三】泥曰は、涅槃（Nirvāṇa）。

【四】阿難(Ānanda)。

【五】末田地（Madhyantika）。

【六】舍那婆斯(Śāṇavāsika)。

【七】應眞は、阿羅漢（Arhat）の舊譯、供養を受くるに足る眞人の意。

を關中の禪經と呼ぶに對し、之れを廬山の禪經と稱して、殊に南方の禪觀實修者に愛翫味讀せられ、南北朝初期の禪法普及に多大の關係を有して居る。

本經が達磨多羅の名を冠するの故を以て、後の禪宗史家の間に注目せられ、宋の明教契嵩(一〇〇七—一〇七二年)の如きは、達磨多羅と菩提達磨とを同一人なりとし、本經は達磨の所說なりと考へて、印度に於ける禪門二十八祖說の根據を確立せん爲めに、「傳法正宗論」二卷を著はして、盛んに本經を依用して無二の寶典であるかの如くに卓上して居る。日本に於ても鎌倉時代華嚴學の實踐家たる明惠上人は、本經を披讀して觀智の啓發に資すと傳へられ、德川初期に至つては洛東獅嶽升蓮社の藏本として、天和二年に獨立刊行せられ、更に白隱門下の東嶺圓慈は、本經を禪門有數の典籍となし、研鑽講述年を重ね、遂に「達磨多羅禪經說通考疏」六卷(天明元年、西紀一七八一年撰)を著はすに至つた。之れまた契嵩と同じく本經を菩提達磨の說と信じて、達磨を尊信するの餘り本經を研鑽したものであつて、其の說固より經の本文　釋としては取るに足らざるも、諸禪經中本經に限り、獨立の刊行を企てられ、更に註疏の撰述出版を見るに至つたことは珍奇とするに足るではないか。而も右說通考疏の如きは、明治の年間に於て改版發兌せられて居り、今日も尚坊間に流布して居る。

昭和六年二月十三日

南都戒壇院に於て

譯者　佐藤泰舜　識

ることになる。以上の記錄以外には達磨多羅所說の禪法書と見なすべき何物もないのは甚だ遺憾である。上來此の項に於て述べた所に關しては、忽滑谷博士の禪學思想史上卷、境野博士の支那佛教史講話上卷にも指摘考證してあるから參照せられたい。

本經の撰者佛大先に就いて、當代支那の諸記錄に依れば、彼れは天竺の人、罽賓に行化して禪觀の首領と仰がれ、本經の譯者佛陀跋陀羅、幷に彼を東土に請し來れる入竺求法の僧智嚴、共に罽賓に於て佛大先の禪法を面受し、又治禪病祕要經の譯者たる沮渠京聲は、于塡に於て佛大先に會い、其の經の原本を授つた。されば彼は五世紀の初め頃、西域に於て盛んに禪法を弘めた巨匠であつて、其の師承する所は、慧觀の序によれば、曇摩羅—婆陀羅—佛陀先と次第し、薩婆多部記目錄には、婆羅多羅—不若多羅—佛大先—達磨多羅、幷に婆羅多羅—佛大先—曇摩(達磨)多羅の兩系統を擧げ、又本經の初めには佛大先自らの言葉と取つて然るべき書き方で、佛滅度の後、尊者大迦葉…僧伽羅叉—達摩多羅—乃至不若蜜多羅、次第に傳授す、吾今所聞の如く是の義を說かんと述べてある。確然たることは分らないにしても、當時禪法受業の系統說が重んぜられ、佛大先は其の正統權威者の禪匠たる事は間違ないであらう。而して所謂達磨多羅其の人は、佛大先から禪法を受けたとする說と、佛大先の先輩なりとする記錄と、兩者何れが眞に近きか分らないが、慧觀の序には兩人共に力を合せて罽賓に於ける禪法の鼓吹に努めたと述べて居る。

四、傳譯流布

本經は東晉の佛陀跋陀羅(Buddhabhadra覺賢)三藏の譯出する所、三藏は六十華嚴の譯者にして、羅什と時を同うして傳譯界の泰家であり、又特に禪法の宗匠であつた。彼が支那に來りしは法顯と共に入竺せる智嚴が、罽賓に於て彼に會い、支那禪法の指導者無きの故を以て、頻りに其の渡來を懇請せしに基くもので、本經傳譯の事情は彼が長安を去つて南下するや、廬山の慧遠に請せられて、南地禪法の不備を補はんが爲めに、此の山に於て譯出したものであり、其の年時は明記せざれども、佛祖統記卷三十六には義熙九年(西曆四一三年)、入山して後禪數諸經を譯し、之より江東初めて禪悅に耽ると記してゐる。

本經は斯くの如き要望によつて譯出せられ、譯者自ら禪法の爲めに渡來し、自ら禪觀を樂しんで實地に指導した人であるから、譯出後の普及影響の大なるもの有りしに相違なく、慧遠、慧觀は力を傾けて序文を製し、羅什譯出の坐禪三昧經

一名修行道地經、佛陀跋陀羅譯と記して、翻譯當初の名稱と達磨多羅禪經なる名稱とを同本異名の者としてしまつた。更に開元錄に於ける數ケ所の記錄を綜合すると、「達磨多羅禪經二卷、一名庾伽遮羅浮迷、譯して修行道地と言ふ、廬山に於て佛陀跋陀羅の譯するところ、一名不淨觀經、亦名修行方便禪經、凡そ十七品、五十一紙、達磨多羅及び佛大先の造る所にして經部に屬せず」と云ふにあつて、三寶記の記載を認容して詳述し、本經の選者を出して、達磨多羅禪經の名稱を以て、本經の正式の名となして居る。爾來今日に至るまで此の名稱が通名として用いられて居るが、之れには過誤が潛んで居る。其は本經の撰者に關する記錄を辿る事によつて明にされよう。

慧遠の序文を見れば、「今譯せる所の經は達磨多羅(Dharmatara)と佛大先(Buddhasena佛陀斯那)とより出づる所であつて、其の人は西域禪法の宗匠にして、經典の要を搜し集めて大乘を勸發するに、弘教の法同じからずして、評略の異がある。達磨多羅は衆篇を同道に闔べ、其の觀法たるや生に起なく滅に盡なく、往復無際にして如を離れず、色は則ち如、如は則ち色なりと喝破して居るが、佛大先は本源に達するに宜しく漸有るべしとなして、二道四義を立て、陰界を分別し緣起を分解して、以て迷を返して本原に歸せしむるの道を以てする。」と述べて居る。之によれば佛陀跋陀羅の譯した譯經は、達磨多羅の簡易直截な大乘空觀の禪法と、方便次第を詳述せる佛大先の禪法との兩方面から出來て居る譯である。然るに現存の本經は二道四義を分ち、陰界因緣を解拆せる者のみであつて、毫も達磨多羅所說と見らるゝ如き點を存せず、全く佛大先の所說と云はるゝ方面のみである。從之觀是、現存の本經は正しく佛大先所說の部分のみであつて、從つて達磨多羅禪經なる名稱は全く事實を誤り、寧ろ佛大先禪經と名くべきである。

然らば達磨多羅所說の簡易直接なる大乘禪觀の撰述は譯出後如何やうになつたであらうか。之に就いて出三藏記には、「後漢失譯現在有本として、庾伽三摩斯經一卷、譯して修行略と言い、一名達磨多羅禪法、或云達磨多羅菩薩撰禪經要集」と云ふ記載がある。法經錄は單に此の經名のみを失譯の部に揭げ、三寶記は三藏記の如く記して、東晋時代の失譯となし、而して開元錄も亦之等を繼承しつゝ無本の部に入れて居る。右の記錄によれば庾伽三摩斯經が慧遠の所謂達磨多羅所說の禪法ではあるまいかと想像される。但し三藏記の云ふが如く漢代失譯とすれば東晋の佛陀跋陀羅と年代を隔つるけれども、此は何等かの誤謬にして、三寶記の記るす如く東晋の失譯とすれば時代は合す

も、禪觀の種別分類に就いても、何等組織的に說明する所がなく、關中の禪經を代表する坐禪三昧經が組織整然たるに比して、南方の禪經を代表する本經が、實觀の提示に力を注いで、組識の方面を輕視するは、南北教學の對比と照應して注目すべき現象である。

第五、大小乘の教義に就いて本經は殆んど小乘禪觀に留まつて居る。修道の位次得果に關して略述せる部分も、聲聞道の範圍に局限して居ると云つてよい。唯併し十二因緣觀の敍述に於て、聲聞・緣覺・菩薩・佛の四等の淺深を分ち、禪定の心理に映ずる四種の境界に優劣の差あることを示して居るが、之れとても法相問題としての敍述に非らず、又大小乘を對立せしめての說明でもなく、一經を通じて大乘的の色彩は認め得られないと云つてよい。尚一言附記すべきは、修道者が禪觀の上達によりて聖者の境地を心理に浮べるに當つて、「殊妙なる種々の印、蓮華衆寶の樹、靡麗なる諸の器服、光炎極めて顯炤し、無量の莊嚴を具す」と敍べて、此の諸の妙相を曼荼羅(Maṇḍala)と稱して居る。(卷上、安般勝道升進分第七、並に卷下、觀陰分第十五參照)、之れ元より密教の曼荼羅とは同一でないけれども、而も慧眼を以て見る一種の觀念曼荼羅とも稱すべきものにして、曼荼羅思想の發達上一瞥に價することではあるまいか。

三、經名、原存本并に撰者に就いて

達磨多羅禪經(Dharmatāradhyāna-sūtra)の經名に就いては、佛陀跋陀羅の譯出當初から二三の名稱が併用されて居たが、其の後流傳の間に錯雜を來たし、現存の經名は嚴密に其の經を表はしてゐない事になつて居る。譯出當初にあつては、慧遠は修行方便禪經と稱して序文を草し、慧觀は修行地不淨觀經と名けて序文を書いて居る。此の二序は出三藏記集第九に現存し、前者は現行本の經初にも載せられてゐる。出三藏記集には禪經修行方便二卷、一名庾伽遮羅浮迷(Yogācārabhūmi)譯して修行道地と言い、一名、不淨觀、凡そ十七品有りと記載し、慧遠の序文の最後にも經初に揭載の方には、庾伽遮羅浮迷譯言修行道地の十二字が、後人の添加とも思はるゝ形に於て附記してある。卽ち以上の記錄に於ては未だ達磨多羅禪經なる名稱が用いられて居ないことが分る。

然るに法經錄には小乘經部の下に、達磨多羅禪經二卷東晉佛陀跋陀羅譯と明記してあり、之れ此の經名の用いらるゝ最初である。同錄には又聖賢撰集の下に、禪經修行方便二卷、一名不淨觀經、佛陀跋陀羅譯と記して居る。次に三寶記に至つては、達磨多羅禪經二卷、一名不淨觀經、

夫々の對治作用を起すと云ふが如きは、各觀の所對治を分ちつゝも、各觀夫れ自體が互に包攝し合つて居るのであるから、所對治も亦判然と區分されない譯である。恐らく實地の修行に於ては之れが事實であらうけれども、本經は所謂の五停心觀の齊形類別に對して、重きを置いて居ないと云ふべきであらう。

第二、修道の位次階程並に得果の問題に就いて、本經の敍述は極めて簡略である。他の禪經に於ては、生天、得神通、入無漏道、得涅槃、受記作佛等の、禪定の得果を力說するのが常であるが、本經は之等の事に就いての說明が頗る淡白である。從つて四禪四無色定の階程、四善根位、四諦十六行相、斷惑證理、四向四果等の段階說明が甚だ略されて居る。之等を豫想し、若しくは輕るく觸れては居るが、修行道地經や坐禪三昧經の如く、殆んど阿毘達磨の實踐的法相を代辨するかの如き觀を呈して居ない。修行の進展を位次に配當しての煩瑣な敍述に入り込まないのは本經の一特色である。

第三、阿毘達磨の法相に就いて、斷惑證理や位次階程の方面に於ては、極めて無關心であつたが、其の他の方面に於ては本經程小乘論書の法相の詳細な部分にまで觸れて居る禪經は稀れである。例へ數息觀に於ける依地の問題、界觀に於ける諸界の分別、十二因緣觀に於ける四種緣起の如きは其の著しきものであつて、其の他隨處に阿毘達磨の法相が伏在して居るので、餘程此の方面の知識が無くては、文々句々を意味付けて讀み下すことは不可能である。加ふるに舊譯の特徵として、之等法相に關する譯語が明確でなく、又あまり常用されない特殊法相が示されてあるので、文義を釋する場合には相當の困難が伴ふことを覺悟せねばならぬ。但し之等法相は殆んど全く有部系統に屬するもので、他派の教義を雜へて居ないやうである。

第四、禪定修道の實際に於ける心理に就いての敍述は、本經が特に意を用いた所で、方便、勝道の二道、退、住、升進、決定の四義を分つが如きは、全く修行者の心的經過を分拆して、觀法の進展に關する自覺と警戒とを與へたもので、禪法の實際的指導書として特筆に價する。かの禪祕要法經も禪觀の心理を十遍處風に敍述すること詳細を極めて居るが、本經は直接修行者自身の內省を喚起するの態度を以てして居る。此の傾向は特に本經の前半に於て著しい。全篇に渉りて細密な阿毘達磨の法相に關說し、文義の解釋としては甚だ煩瑣に流れるけれども、文義を看過して修道の實際的用心として通讀する時は、懇切なる習禪指導の精神を看取する事が出來るであらう。其の反面に於て本經は、修道の位次階程に就いて

知るべく、敍述の繁を避けたのであらう。界觀とは界(Dhātu)を分析せる要素部門の意味に取りて、廣くは世界、最も直接には吾が身體を各部門要素に分析して其の眞實の存在に非らず、固定執着す可からざるの實際觀を說明するものであつて、地・水・火・風・空・識の六大觀を基本として、各種の要素部門を說いて居る。

　四無量觀は通途の如く、慈・悲・喜・捨の四無量心を以て、忍辱慈心を以て衆生を愛念し、瞋恚の害心を起さゞるの實觀を示すものである。

　五蘊觀に於ては、色・受・想・行・識の五蘊を綜合的に種々の立場から觀念して、世界人生の空無なる所以の觀法を示して居る。

　六入觀は內の六入たる六根と、外の六入たる六境との接觸に於て生ずる凡夫の迷情惡識を打破する爲めに、固く戒法を守りて、心意を制し感覺を統御して、六入に對する眞實の智見を起すべき觀法を說くのである。

　十二因緣觀は、無明の愚癡により萬般の事象に對して如實正當の智見を起し得ざるの病弊を打破するもので、十二因緣に對する連縛、流注、分段、刹那の四種の觀法を詳細に說明し、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四人によりて、各々觀法の淺深を異にする所以を說き、又十二因緣觀と前來說き來れる各種の觀法との關係等を示し、阿毘達磨の法相に觸るゝこと最も多く、界觀以下の五觀の中、最も詳述されて居る。

二、本經の特色

　第一、觀法の種類を見るに、本經の說く所は數息、不淨、界、四無量、五蘊、六入、十二因緣の七觀であるが、之れを所謂五停心觀に當つれば、四無量は慈心觀に、界、蘊、入、因緣の四觀は因緣觀に攝し得るから、之れに數息と不淨とを加へて四停心觀となり、念佛觀を欠くことになる。併し五停心觀の數へ方は、天台智者の如きも念佛觀を省いて界觀を代りに入れて居る場合もあるから、此の立場よりすれば、本經には五停心觀が備つて居ると見るべきである。併し乍ら本經の態度は、坐禪三昧經や五門禪經要法の如く、五種觀法を一群として齊形的に說く意圖を示して居らず、又修行道地經や禪祕要法經の如く、五種觀法の所對治を明瞭に分判して居ない。勿論數息觀は散亂心を、不淨觀は貪婬を、四無量觀は瞋恚を、十二因緣觀は愚癡を對治することは敍述に於て明瞭であるが、之等を必ずしも一律に規定しようとせず、十二因緣觀の實修に於て、界、入、陰、數息、不淨、緣起の六觀が成立して、夫々の對治作用を成じ、又界觀の成立する時には、界不淨觀、界方便觀、界四無量觀等が成立して、

達摩多羅禪經解題

一、內容一般

本經は一部二卷十七品に分れ、初めの八品は數息觀(安般念)、次の四品は不淨觀、次の五品は次での如く、界觀、四無量觀、五蘊觀、六入觀、十二因緣觀を說いて居る。

即ち數息觀の說明に最も多くの紙數を費し、上卷の全部を占めて居る。先づ方便道と勝道とに分ち、更に之れを退分、住分、升進分、決定分の四義に分ちて、數息觀進展の心理、狀態を詳述するのである。方便道とは數息の行相即ち呼吸を專念して禪定三昧に入るの規定、方法、心理經過等に關する方面にして、勝道とは方便道によりて眞の禪定に入りたる時に生ずる觀智の方面を云ふ。されば方便道に於ては、數息觀の所謂六妙門、十六特勝、幷に禪定の進展に伴ふ呼吸の長短と心理活動の增減等を詳細に說明し、勝道に於ては禪定に伴ふ智の働きによつて、善惡を判別し、眞僞を辨知し、迷界の苦惱虛妄を察して、悟界の如實安樂なる所以を洞觀し、淨・樂・我・常の四顚倒を遠離して、四諦十六行相の觀智を以て、解脫の境地を體得することを說明してある。而して此の二道に退、住、升進、決定の四分ある所以は、方便道に於ては數息の六妙門、十六特勝等の諸條件の整はざるを退と云ひ、其の一部分成立して全分に及ばざるを住分となし、次第に完成に向ふは升進分、全く完成の域に達するは決定分であり、勝道に於ては禪定成らず觀智生ぜざるを退分とし、一分の觀智生ずるも之れに定着して進まざるを住分となし、漸次進展するは升進分、全く觀智自在の妙用成るは決定分である。即ち退分は全く不可、住分は少しく不可、升進分は大いに可にして決定分は全く可なる狀態を云ふのである。

次に不淨觀に於ては、唯方便道の四分を說くのみにて、勝道の說明は省略してある。蓋し方便道は行相であり方法であるから、不淨觀としての觀法規定、其の心的經過等を述べて、數息觀の夫等と區別する必要があるけれども、勝道は夫れに依つて(得た)る禪定の境地に生ずる觀智であるから、數息觀に於ける勝道と區別して說くの要がないから、凡て前に說けるが如しと云つて說明を省いて居る。

次の界觀以下の五觀に於ては、方便・勝道の二道を分たず、退・住・升進・決定の四義を辨することなく、專ら各觀法の特色のみを說いて居る。蓋し前に準じて

ることなし。是くの如き觀を習はば五欲自ら斷じ五蓋自ら除き、[30]五根增長して卽ち禪定を得。此の定中に住せば深く佛に愛せらる。又當に是の甚深微妙の一相一門淸淨の法に入るべし。當に[31]普賢・藥王・大樂說・[32]觀世音・[33]得大勢・[34]文殊・彌勒等の大菩薩衆を恭敬すべし。是を一心に精進して說の如く修行し、正しく法華經を憶念すと名く。此を禪定と和合して心を堅固ならしむと謂ふ。是くの如くすれば三七日中に則ち普賢菩薩六牙の白象に乘つて其の所に來至すること。經中に說くが如し。[35]

思惟略要法 終

【三〇】五根とは、信・精進・念・定・慧の五が善根の種となるを云ふ。

【三一】普賢(Samantabhadra)。

【三二】觀世音(Avalokiteśvara)。

【三三】大勢至(Mahāsthāmaprāpta)。

【三四】文殊(Mañjuśrī)。

【三五】此の一段は法華經勸發品第二十八に詳かなり。

無量壽佛の國に生ぜんと欲せば、應當に是くの如く上の無量壽佛を觀ずべし。又諸法實相を觀じ、又當に世間の夢の如く幻の如く皆實の者なきことを觀ずべし。但だ顚倒虛妄の法を以て横に煩惱を起して諸の罪報を受く、人の諸の小兒の共に諍ひて、瓦石土木もて便ち瞋り鬪を生ずるを見るが如し、諸の世間を觀ずるも亦復た是くの如し。當に大悲を興して誓つて一切を度し、常に其の心を伏し二忍を修行すべし。所謂衆生忍と法忍となり。衆生忍とは若し恒河沙等の衆生種種に惡を加ふるも心瞋恚せず、種種に恭敬供養するも心歡喜せず。又衆生を觀ずるに初なく後なし、若し初あれば則ち因緣なし、若し因緣あれば是れ則ち初なし、若し初なくんば中後も亦なし、是くの如く觀ずる時常斷の二邊に墮せず、安隱の道を用つて諸の衆生を觀じ邪見を生ぜず、是を衆生忍と名く。法忍とは當に諸法は甚深淸淨にして畢竟空相なるを觀ずべし、心に罣礙無ふして能く是の事を忍ぶ、是を法忍と名く。新發意者は未だ是の法忍を得ずと雖も當に是くの如く其の心を修習すべし。又諸法の畢竟空相を觀じて、衆生に於て常に大悲を興し、所有の善本は盡く以て迴向し、無量壽佛の國に生ぜんことを願はゞ便ち往生することを得ん。

法華三昧觀法。

三七日一心に精進して說の如く修行し、正に法華經を憶念するには、當に[二七]釋迦牟尼佛の耆闍崛山に於て、多寶佛と七寶の塔に在つて共に坐するを念ずべし。十方の分身化佛は移る所の衆生の國土の中に遍滿し、一切の諸佛に各[二八]一生補處菩薩一人ありて侍と爲ること、釋迦牟尼佛の[二九]彌勒を以て侍と爲すが如し。一切の諸佛は神通力を現じ、光明は無量の國土に遍照し、實法を證せんと欲して其の舌相を出せば、音聲は十方世界に滿つ。說く所の法華經とは、所謂十方三世の衆生若しくは大若しくは小なるも、乃至一たび南無佛と稱せば皆當に作佛すべし。惟だ一大乘にして二なく三なし。一切諸法は一相一門にして、所謂生なく滅なく畢竟空相なり。唯だ此の大乘のみありて二あ

【二七】釋迦牟尼(Sākyamuni)は、能忍寂默と譯す、多寶佛(Prabhūtaratna)、寶塔出現の說は法華經見寶塔品第十一にあり。
【二八】一生補處は、修行道地經卷六の脚註を見よ。
【二九】彌勒(Maitreya)は、今現に一生補處の菩薩として兜率天に在り。

諸法實相觀とは當に知るべし。諸法は因緣より生ず、因緣生の故に自在なるを得ず、不自在の故に畢竟空相なり。但だ假名ありて實の者あることなし、若し法實有ならば應に無と說くべからず、先に有にして今無ならば是を名けて斷と爲す、不常不斷にして亦有無ならず、心識處滅し言說亦盡く。是を甚深の淸淨觀と名くるなり。又婬怒癡の法を觀ずるに卽ち是れ實相なり。何を以ての故に、是の法は內に在らず外に在らず、若し內に在らば應に外の因緣を待つて生ずべからず、若し外に在らば則ち住する所なし、若し所住なくんば亦生滅なく、空無所有にして淸淨無爲なり。是を婬怒癡の實相觀と名く。又一切の諸法は畢竟淸淨なり。諸佛賢聖の能く爾らしむる所に非ず、但だ凡夫は未だ慧觀を得ざるを以て、諸の虛妄の法に種種の相あるを見る。實相を得る者之を觀ぜば鏡中の像の如し。但だ人眼を誑かすも、其の實は生ぜず亦滅あることなし。是くの如く法を觀ずること甚深微妙なり。行者若し能く精心にして深く靜かに實相を思惟して邪を生ぜずんば、卽ち便ち無生法忍を得べし。此の法は緣じ難く、心多く馳散す、若し馳散せずば或は復た縮沒せん。常に應に其の心を淸淨にして了了に觀察すべし。若し心攝し難くんば當に心を呵責すべし。汝無數劫來常に雜業に應じて厭足あることなく、世樂を馳逐して苦たることを覺らず、一切の世間に貪樂して患を致し、業因緣に隨つて〔二五〕五道に受生す、皆心の所爲なり。誰の爾らしむる者ぞや、汝は狂象の蹈籍殘害して〔二六〕拘制あることなきが如し。誰か汝を調する者ぞや、若し善く調するを得ば則ち世の患を離る。當に知るべし、胎に處しては不淨の苦厄逼りて、身を迫切すること猶ほ地獄の如く、旣に生じて世に在りては老・病・死・苦・憂・悲・萬端にして自在を得ず。若し天上に生ずるも當に復た墮落すべし、三界は安きことなし。汝何ぞ以て樂著するやと。是くの如く種種に其の心を呵責し已つて還た本緣を念ず。心想住せば心柔軟なることを得て、種種の色光の身より出づることあるを見る。是を諸法實相觀と名く。

【二五】五道は、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五界を云ふ。
【二六】大正本には物制とあれど三本によりて拘制に改む。

十方の諸佛皆爲に說法し、疑網の雲消えて無生忍を得ん。若し宿罪の因緣によりて諸佛を見ずんば、當に一日一夜〔二三〕六時に懺悔し隨喜し、勸請して漸く自ら見るを得べし。縱使諸佛爲に說法せざるも、是の時心は快樂を得て身體安隱ならん。是を則ち名けて十方諸佛を觀ずと爲す。

観無量壽佛法

〔二四〕無量壽佛を觀ずとは二種人あり。鈍根の者は先づ當に心眼もて額上一寸を觀察せしむべし。皮肉を除却し但だ赤骨を見る。繫念して緣に在きて他念せしめず。心若し餘緣ならば之を攝して還らしむ。是くの如きを見るを得ば、當に復た此の赤骨の辟方一寸を變じて白きこと珂の如くならしむべし。既に是くの如く見るを得ば、當に復た自ら其の身を變じて皆白骨となし、皮肉あることなく色珂雪の如くならしむべし。復た是くの如く見るを得ば、當に更に此の骨身を變ぜしめて琉璃光色たらしむべし。淸淨にして表を視れば裏に徹す。既に是くの如く見るを得ば、當に復た此の琉璃身中より白き光明を放たしむべし。近きより遠きに及びて閻浮に遍滿し、唯だ光明を見て諸物を見ず。還た光明を攝して身中に入れ、既に入るるの後復た放つこと初めの如し。凡そ此の諸觀は易より難に及び、其の白きことも亦應に初め少にして後に多なるべし。既に能く是くの如くならば、當に身中より此の白光を放ち、乃ち光中に於て無量壽佛を觀ずべし。無量壽佛は其の身姝大、光明亦妙にして西向端坐す。相相諦取して然る後其の身を總觀するに、結跏趺坐の顏容巍巍として紫金山の如し。繫念して佛に在きて他緣ならしめず、心若し餘緣ならば之を攝して還らしめ、常に佛と對坐せるが如く異らざれ。是くの如くせば久しからずして便ち見ることを得べし。若し利根の者ならば但だ當に先づ明想を作すべし。晃然空淨にして乃ち明中に於て佛を觀ずれば便ち見ることを得べし。行者若し無量壽佛の國に生ぜんと欲せば、當に是くの如く作して無量壽佛を觀ずべし。

諸法實相觀法

〔二三〕六時は日出・日中・日沒・初夜・中夜・後夜を云ふ。

〔二四〕無量壽佛（Amitāyus-buddha）は、阿彌陀如來のこと。

畏なること死賊に過ぎたるはなし。唯だ佛一人の力のみ能く救拔し、能く種種の人天に涅槃の樂を與ふ。復た次に一切諸佛は世世常に一切衆生の爲の故に身命を惜まず。釋迦牟尼佛の昔太子たりし時の如し。出遊して道に癩人を見、醫に勅して治せしむるに、醫の言く、當に不瞋人の血を須ゐて之に飮ましめ、髓を以て之に塗るべし、乃ち差ゆることを得べしと。太子念じて言く、是の人得難し、設使有るとも復た爾すべからずと。卽ち便ち身を以て之に與へて治せしむ。若し一切衆生の爲めにすること亦復た是くの如し。佛恩深重なること父母に過ぐ。若し一切衆生をして悉く父母たらしめ、佛を一分と爲さば、二分の中常に當に佛を念ずべし、應に餘念なるべからず。是くの如き種種の功德隨念は何事なりや。若し此の定成ぜば結縛を除斷し乃至無生法忍を得べし。若し中間に於て諸病起らば病に隨つて藥を習ふ。若し定を得ざるも、[三]六欲天中豪尊第一にして飛行して至る所に宮殿自ら隨ひ、或は諸佛の前に生じて終に空しからざるなり。若し人藥を赤銅に和するに、若し金と成らざるも銀を失はざるなり。

十方諸佛觀法。

十方諸佛を念ずとは、坐して東方を觀ずるに、廓然明淨にして諸の山河石壁なく、唯だ一佛の[三]結跏趺坐して擧手說法するを見る。心眼もて觀察するに光明相好畫然として了了たり。繫念して佛に在き他緣ならしめざれ、心若し餘緣ならば之を攝して還らしむ。是くの如く見ば更に十佛を增し、既に見るの後復た百千を增し乃至邊際あることなけん。身に近ければ則ち狹く轉た遠ければ轉た廣く、但だ諸佛の光光相接するを見る。心眼もて觀察して是くの如きを得ば、身を東南に迴して復た上の如く觀ず。既に成就するを得ば南方・西南方・西方・西北方・北方・東北方、上・下方も都て亦是くの如し。既に方方に皆諸佛を見るを得ること、東方の如くにし已つて、當に復た端坐して總じて十方の諸佛を觀ずべし。一念の緣ずる所に周匝して見ることを得。定心成就せば卽ち定中に於て

[三] 六欲天とは、欲界にある六天を云ふ、四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化天なり。

[三] 結跏趺坐は、修行道地經卷一の脚註を見よ。

垂んとす。猶ほ赦鼓の開門して囚を放つが如し、鼓音漸く已れば門扉を止めんと欲す、已に一扉を閉づれば豈自ら寛にして出獄を求めざるべけんや。過去無始の世界より已來、更る所の生死の苦惱萬端なり。今受くる所の法は未だ成就するを得ず、無常の死賊は須臾も保つべからず、當に復た更に無央數劫の生死の苦を受くべしと。是くの如く種種に心を鞭つて心をして住することを得せしむ。心住するの相は坐臥行步常に佛を見ることを得。然る後更に生身法身に進まば、初觀を得已つて展轉すること則ち易し。

生身觀法

生身觀は既に像を觀じ已つて、心想成就し意を[一六]撿して定に入らば便ち見るを得ん。當に像に因つて以て生身を念ずべし。(乃ち)佛の菩提樹下に坐し光明顯照にして相好奇特なるを觀じ、或は[一七]鹿野苑中に坐して五比丘の爲に四諦の法を說く時の如きを(觀じ)、或は[一八]耆闍崛山に大光明を放つて、諸の大衆の爲に般若を說く時の如きを(觀ず)。是くの如く隨ひ用いて一處に繫念し、緣に在つて繫外に散ぜしめざれ。心想住するを得ば卽ち便ち佛を見、舉身快樂にして樂骨髓に徹す。譬へば熱に涼池を得、寒に溫室を得るが如し。世間の樂は以て喩と爲すものなし。

法身觀法

法身觀とは、已に空中に於て佛の生身を見たり、當に生身に因つて內の法身(所謂)[一九]十力・四無所畏・大慈大悲・無量の善業を觀ずべし。人の先づ金瓶を念じ後に瓶內の摩尼寶珠を觀ずるが如し。尊妙にして神智無比なる所以、遠なく近なく、難なく易なくして無限の世界悉く目前にあるが如く、一人の外に在る者あることなく、一切の諸法了せざる所なく、常に當に專念して心を散ぜしめざるべし。心餘の緣を念ぜば之を攝して還らしむ。復た次に一切の愚(者)智(者)、其の死する時に當つて、外諸根を失して黑坑に投ずるが如し、若し能く聲を發せば聲[二〇]梵天に至る、大力・大苦・大怖・大

【一六】撿を三本には斂とす。

【一七】鹿野苑(Mṛga-dāva)は、釋尊最初の說法地にして憍陳如等の五人の比丘は最初の弟子なり。

【一八】耆闍崛山(Gṛdhrakū-ṭa)は、靈鷲山とも云ふ、摩訶陀國王舍城の附近にあり。

【一九】十力は、修行道地經卷六、四無畏は坐禪三昧經下卷の脚註を見よ。

【二〇】梵天(Brahma-deva)は、色界初禪天にあり。

能はざるをや。既に骨人を見ば當に骨人の中其の心生滅相續すること〔一三〕綖の珠を穿つが如きを觀ずべし。意の所見の如く及び外身を觀ずるも亦復た是くの如し。若し心住せんと欲せば精勤して廢すること莫れ。火を鑽るに烟を見、井を掘るに濕を見るが如く、必ず得ること久しからず。若し心靜住せば眼を開き眼を閉づるも光骨明了なること、水の澄靜なれば則ち面像を見るが如し。濁れば則ち了せず、竭きれば則ち見ず。

〔一四〕觀佛三昧

佛は法王と爲り能く人をして種種の善法を得せしむ。是の故に習禪の人は先づ當に佛を念ずべし。念佛は無量劫の重罪を微薄にし、禪定に至るを得しむるなり。至心に佛を念ずれば佛も亦之を念ず。人の王の爲に念ぜらるれば、怨家債主も敢へて侵近せざるが如し、念佛の人は諸餘の惡法來つて擾亂せず。若し佛を念ぜば佛は常に在すなり。云何んが憶念するや。人の自ら信ずること眼に過ぎたるはなし。當に好像を觀じ便ち眞佛の如くすべし。先づ〔一五〕肉髻・眉間・白毫より下つて足に至り、足より復た肉髻に至る。是くの如く相相を諦取して靜處に還り、目を閉ぢて思惟し心を繫けて像に在き他念せしめず。若し餘緣を念ずれば之を攝して還らしむ。心目もて觀察して意の如くに見ることを得ば、是れを觀像の定を得と爲す。當に是の念を作すべし。我れ亦往かず、像も亦來らず、而も見ることを得るは心定想に住するに由るなりと。然る後進んで生身を觀じ、便ち之を見ることを得て對面するが如く異ることなけん。人の心馳散すれば多く惡法を緣ず。當に乳母の其の子を伺視して、坑井險道に墜さしむること莫きが如くすべし、念は則ち子の如く行者は母の如し。若し心住せずんば當に自ら心を責むべし。老病死を念ずれば甚だ切近をなし、若し天に生ずれば妙欲に著して治心善法あることなく、若し三惡道に墮すれば苦惱怖懼して善心生ぜず。今妙法を受く云何んが至心に專念せざる可けんやと。又念を作して言く、生れて末法に在り。末法已に滅せんと欲するに

【一三】綖を三本には綫に作る。

【一四】此の觀佛は觀佛像若しくは觀佛相好の意味なり。

【一五】肉髻以下佛の三十二相を指す、坐禪三昧經卷上を見よ。

行厠するなり。身狀此くの如し何ぞ是に由つて淨ならん。又此の身を觀ずるに假に名けて人と爲す、四大和合するは之を譬ふれば屋の如し、脊骨は棟の如く、脇肋は椽の如く、骸骨は柱の如く、皮は四壁の如く、肉は泥を塗るが如く、虛僞にして假りに合するのみ。人は安くに在りと爲さん。危脆にして眞に非ず、幻化のごとく須臾なり。脚骨の上に脛骨之に接し、脛骨の上に髀骨之に接し、髀骨の上に脊骨之に接し、脊骨の上に髑髏之に接し、骨骨相拄へて危きこと累卵の如し。此の身を諦觀するに一として取るべきものなし。是くの如くして心則ち厭惡を生じ、常に不淨なる三十六物を念じて如實に分別す、內身此くの如く外身も異らず。

若し心住せずんば之を制して還らしめて專ら不淨を念ぜよ。心住するの相は身體柔軟にして漸く快樂を得るなり。心故に住せずんば、當に自ら心を訶すべし。無數劫より來た常に汝に隨ふが故に、三惡道の中を更歷して苦毒萬端なり。今日より去我れ當に汝を伏すべし、汝且つ我に隨へと。還た其の心を繫して成就を得しむ。若し極めて其の身を厭惡せば、當に白骨觀に進むべし。亦初禪に入る可し。行者志して大乘を求めば、命終して意に隨つて諸佛の前に生ず。爾らざるも必らず、兜率天上に至つて、彌勒を見るを得ん。

白骨觀法

白骨觀[三]とは身の皮血筋肉を除きて都て盡し、骨骨相拄へて白きこと珂雪の如く光も亦是くの如し。若し見ずんば譬へば癩人の如し。醫其の家に語る、若し血の色の乳に同じき者を飲ましむれば便ち差ゆるを得べしと。家中の所有を悉く白く作さしめ銀梧に血を盛り之に語る、乳を飲まば病必らず、差ゆるを得と。癩人言く血なりと。答へて言く白物之を治す、汝豈に家中の諸の物悉く是れ白きを見ずや、罪の故に血なりと見る、但だ當に專心に乳の想をなし、是れ血なりと謂ふこと莫れと。是くの如くすること七日にして便ち變じて乳と爲る。何に況んや實に白きを、而も見ること

【三】白骨觀も不淨觀に屬するものなり。

在らば、即ち應に急に却くべし。若し心馳散して五欲に入り及び五蓋の爲に覆はるれば、當に精進して智慧の力を以て、强く之を攝して還すべし。慈心を修習すれば當に衆生を念じて佛樂を得せしむ。之を習ふて息まずんば、便ち五欲を離れ五蓋を除きて、初禪に入ることを得ん。初禪の相を得ば喜樂身に遍じ、諸の善法の中に歡喜の樂を生じ、種種微妙の色を見る。是を入佛道の初門、禪定福德の因緣と名く。是の四無量心を得已つて、一切衆生に於て忍辱して瞋ならずんば、是を[七]衆生忍と名く。衆生忍を得已らば法忍を得ること易し。法忍とは所謂諸法は不生不滅にして畢竟空相なり。能く是の法忍を信受せば是を無生忍と名け、阿耨多羅三藐三菩提の[八]記を得、當に作佛を得べし。行者應當に是くの如く修習すべし。

不淨觀法

貪欲・瞋恚・愚癡は是れ衆生の大病なり。身を愛し欲に著すれば則ち瞋恚を生ず。顚倒に惑はさるれば即ち是れ愚癡なり。愚癡に覆はるるが故に、內身外身の[九]淨相に愛著す。之を習ひ來ること久しうして[一〇]染心遣り難し。貪欲を除かんと欲せば當に不淨を觀ずべし。瞋恚は外に由れば既に蘭く制すべし、人の竹を破るに初節を難しと爲すが如く、既に貪欲を制すれば餘の二は自ら伏す。

不淨觀とは當に知るべし。此の身は不淨の處に生じて胞胎に在り、還た不淨中より出づれば薄皮の內純ら是れ不淨なり。外に四大あり變じて飲食と爲つて其の內を充實す。心を諦かにして觀察するに足より髮に至り髮より足に至るまで、皮囊の裏一も淨なる者なし。腦・膜・涕・唾・膿・血・屎・尿等、略して說けば則ち[一一]三十六、廣く說けば則ち無量なり。譬へば農夫の倉を開いて種種に麻米豆麥等を別ち知るが如し。行者は心眼を以て是の身倉を開き、種種に惡露せる肝・肺・腸・胃・諸蟲の動食するを見る。九孔は不淨を流出して常に休止することなし。眼は眵淚を流し、耳は結聹を出し、鼻中には涕流れ、口は唌吐を出し、大小便孔は常に屎尿を出す。復た衣食もて障覆すと雖も實に是れ

【七】衆生忍、法忍 無生忍、之れを三忍と云ふ、衆生忍は衆生の患を觀じて忍辱し、法忍、無生忍は諸法の空無生を觀じて著せざるなり。

【八】記(Vyākaraṇa)と記前の略、將來何の時、何の處に於て成佛すべしと云ふ認可のこと。

【九】大正本には淨相とあれど三本によりて淨相と改む、

【一〇】染心とは、染汚の即ち煩惱の作ふ心。

【一一】三十六物に就いては坐禪三昧經卷上を見よ。

多きや君の遲水多きやと。答ふ、喩と爲すべからずと。佛の言はく、指を以て洗はずんば多しと雖も用なきなりと。行者當に勤め精進して智定の指を用て心垢を洗除すべし。若し是くの如くならずんば法を離るること能はざるなり。

四無量觀法

佛道を求むる者は、當に先づ[五]四無量心を行ずべし、其の心無量なれば功德も亦無量なり。一切衆生の中に於て凡そ三分あり、一には父母・親里・善知識等なり、二には怨賊の人を嫌つて常に惱害せんと欲する者なり、三には中人にして親ならず怨ならず。行者は此の三品の人の中に於て、慈心もて之を視ること當に親里の如くすべし、老者は父母の如く、中年は兄弟の如く、少年は兒子の如し。常に應に是くの如き慈心を修習すべし。人の怨と爲るは惡緣あるを以てなり、惡の因緣盡くれば還つて復た親と成る、怨親は定りなし。何を以ての故に、今世は是れ怨なるも後世は親と成らん。瞋惱の心は自ら大利を失す、忍辱の福を破り、慈心の業を失ひ、佛道の因緣を障ふ、是の故に應に瞋惱すべからず。怨賊は應當に之を視ること其の親里の如くすべし、所以者何となれば是の怨賊は我をして佛道の因緣を得しむればなり。若し怨賊をして我れに惡みなからしめば、我れまた忍ぶ所なく、是れ則ち我が善知識と爲す、我をして[六]忍辱波羅蜜を成ずることを得せしむればなり。已に怨賊の中に是の慈を得れば、十方の衆生に於て慈心愛念し、世界に普遍せしむ。諸の衆生の無常變異し、老病死ありて衆苦逼切し、蜎蜚蠕動皆安き者なきを見ては悲心を起し、若し衆生の今世の樂及び後世の樂を得、生天の樂、賢聖道の樂を得るを見ては喜心を起す。衆生に苦樂の事あるを見ずんば、不憂不喜にして慧を以て自ら御し、但だ衆生を緣じて捨心を起す。是を四無量心と名く。十方の衆生に於て慈心遍滿するが故に名けて無量と爲す。

行者常に應に是の心を修習すべし。若し或は時に瞋恚の心起るありて、蛇の如く火の如く身上に

【五】　四無量心(Catvāry apramāṇa-cittāni)。
一、慈無量心(Maitrī-a.)、
二、悲無量心(Karuṇā-a.)、
三、喜無量心(Muditā-a.)、
四、捨無量心(Upekṣā-a.)、
捨とは、他に對して憎愛なく心平等なるを云ふ。

【六】　忍辱波羅蜜（Kṣānti-pāramitā）は、六波羅蜜の第三。

思惟略要法

姚秦の三藏、羅什法師譯す

[一]形の疾に三あり、風・寒・熱の病にして患たること輕微なり。心に三病あり、患禍深重にして動もすれば劫數にわたりて諸の苦惱を受くることあり。唯だ佛のみ良醫にして能く制藥を爲る。行者は無量の世界に長く此の疾に嬰り、今始めて行を造る。當に其の心を決定せしめて、專精にして身命を惜まざれ。人、賊の入るに心決定せずんば賊を破ること能はざるが如く、亂想の軍を破るも亦復た是くの如し。佛の言まふが如し、曰く、血肉盡くると雖も但だ皮筋の倘ほ在るあれば精進を捨てず、人の火の身衣を燒くに但だ火を救はんと欲して更に餘念なきが如し。煩惱の苦を出づるも亦復た是くの如く、當に病苦・飢渴・寒熱・瞋恨等を忍事すべし。當に憒鬧を避けて閑寂に樂住すべし。所以者何となれば、衆音は定を亂すこと棘林に入るが如ければなり。

凡そ[二]初禪を求むるには先づ諸觀を習ふ。或は四無量を行じ、或は不淨を觀じ、或は因緣を觀じ、或は念佛三昧、或は[三]安那般那、然る後初禪に入るを得ること則ち易し。若し利根の人ありて直ちに禪を求めば、五欲の種種の過患は猶ほ火坑の如く、亦圊舍の如しと觀じ、初禪の地は清涼の池の如く、高き臺觀の如しと念ぜば、五蓋則ち除きて便ち初禪を得ん。波利仙人の初めて禪を學ぶ時の如し、道に死女の膖脹爛臭せるを見て、諦かに心に相を取り、自ら其の身の彼の如く異らさるを觀じ、靜處にて專思して便ち初禪を得たり。佛は恒水の邊りに在つて坐禪せるに、一寡聞の比丘ありて佛に問ふ、云何にしてか道を得るやと。佛の言はく、他物を取ること莫れと。(比丘)便ち法の空を解して即ち[四]道跡を得たり。多聞の比丘あり、自ら所得無きを怪みて佛に問ふ。佛の言はく、恒水中の小石を取つて君の、遲水を以て淨洗せよと。比丘、教の如くす。佛、問いたまはく、恒水

【一】此の一段は總序の如きものにて禪觀初入の門を示す。

【二】初禪とは、色界四禪の第一にして、禪定の確立する第一階段なり、今は此の初禪を得る準備として四無量心以下の五種の方便門、所謂五停心觀を幷べたるなり。

【三】安那般那 Ānāpāna は、數息觀のこと、修行道地經卷五の註を見よ。

【四】道跡とは、須陀洹(Srota-āpanna)のこと、預流と譯す、初めて無漏智を得て聖道に入る位なり、坐禪三昧經卷を見よ。

ものである。本經に於ては之等大乘禪觀が寧ろ重要な地位にあつて、他の禪經に於けるが如く、中心に小乘禪觀を置き、後部に大乘觀法を附加して說くの態度に比するに、本經に於ては阿毘達磨の修道に關する法相には毫も觸れないで、一經の重點が此の三種の大乘觀法に在るの感を抱かしむるのは、本經獨特のものと云はなければならぬ。

本經は明瞭に十種觀法を標示して、混雜なく簡結な叙述を試みて居るが、一經を通じての組織はなく、終始の脈絡不明にして、補遺的に十種を略述列擧したものゝ如くである。

二、傳譯流布

本經一卷は前二經と同じく羅什三藏の譯出となつて居り、內容成文上より見ても斯く斷定することが無理ではないが、出三藏記集に羅什譯出の記載なき點に於て、文獻上の確保が乏しいと云はねばならぬ。同記には却つて後漢安世高譯本の條に、思惟經一卷(或は思惟略要法)が記載せられ、外に形疾三品風經(抄思惟略要法經)一卷が失譯雜經の部に記せられて居る。形疾有三品とは現存本經の書き出しであるから、右の抄經は必ず現存經と關係深きものであらうが、兎も角三藏記に依つては羅什譯出の確證を見出すことが出來ない。歷代三寶記には世高譯の外に、羅什譯の思惟要略經一卷を記載し、靜泰錄、內典錄に於ては、世高譯の思惟要略經一卷九紙としてあるから、世高譯としての同經を實見したものと思はれる。開元錄は以上を凡て認容して而も世高譯を缺本とし、羅什譯を現存有本、紙數十枚と記して、之れを拾遺編入の部に屬せしめ、又入大藏聖賢部に記載して居る。現存の本經を以て判ずれば、世高、譯とするよりも羅什譯と見做す方が、譯語、內容の兩面から見て事實に近いものと云はねばならぬ。

本經流布に關する表立つた記錄は一も存しないけれども、簡明た叙述、念佛觀の力說、殊に觀無量壽佛法に於ける往生思想、諸法實相觀法に示せる無相大乘の思想、法華三昧觀法に於ける無相一乘の思想の如きは、南北朝前半の教學と全く一致せるものであるから、時代教學に關心を持つ實踐修道者に取つて、必ず愛好翫賞せられたに違ひない。天台智者大師は「法華三昧懺儀」一卷を著して、仔細に法華の行法を制定し、又止觀法門に於て所謂四種三昧の行法を定めた中の、半行半坐三昧は、主として法華の行法であつて、之等は直接法華經に基いて制定せられた事は勿論であるが、かゝる行法を制定する其の事の芽生えが、本經の第十觀法華三昧觀法の一段に存したと認めてよからう。

昭和六年二月十二日

南都戒壇院に於て

譯者　佐藤泰舜　識

思惟略要法解題

一、內容と特色

本經は四無量心觀法以下法華三昧觀法に至る、十種觀法を略述せる一小篇であつて、改めて內容を紹介するまでもない。

最初に坐禪三昧經と全く同じき五門禪の名を列ねてあるが、初禪を得る爲めの方便觀にして、利根の者は必ずしも之れに由らずして、初禪に入り得ることを暗示し、所謂五停心觀に對して重要の地位を附して居ない。述ぶる所の十種觀法を五門禪に當てゝ見れば、第一の四無量觀法は慈心觀に、第二不淨觀と第三白骨觀とは不淨觀に、第四觀佛三昧法、第五生身觀法、第六法身觀法、第七十方諸佛觀法、第八觀無量壽佛法の六は念佛觀である事は云ふまでもないが、第九諸法實相觀は敍述から見て因緣觀とも見られ、また之によつて無量壽佛國に往生し得ると說く點は、第八觀無量壽佛法の一種に攝して念佛觀とも見られないこともない。第十法華三昧觀法は法華經を憶念するのであるが、之れまた經所說の釋迦牟尼佛、多寶如來、乃至十方の分身化佛を念じて、南無佛と稱ふることによつて、無二亦無三にして、一切衆生一門一相に作佛することが出來、普賢菩薩が六牙の白象に乘つて行者の前に至ると云ふのであるから、之れまた念佛觀の範圍に收めて見ることも出來る。斯くして本經には五門禪の中、數息觀の說明は全く缺けて居るが、全篇十種觀法は約めて四門禪に屬すと見ることが出來る。併し此は特に斯く觀察したまでであつて、本經の意圖は斯かる分類に拘泥して居るのではなからう。

本經の出色は寧ろ五門禪觀の關心を離れて、特に觀無量壽佛法、諸法實相觀法、及び法華三昧觀法の三觀を獨立に標示し敍述した所に存すと云はねばならぬ。觀無量壽佛法は觀無量壽經などに影響されたものであらう。內容は觀念々佛に留まり、自ら無生忍を得て其の佛土に往生し得ると說くのではあるが、當時擡頭し來れる阿彌陀佛の信仰を取り入れて、禪觀修道の一法とした事は注意すべき事である。諸法實相觀法も亦諸法の因緣空無生、婬怒癡卽實相、諸法畢竟淸淨を說いて、大乘空觀の實踐修道となしたもので、羅什時代の敎學思想當然の産物と云はねばならぬ。法華三昧觀法に至つては、明に法華經の所說に基いたもので、三七日を期して憶念法華經の行を立て、乃至前述の如き敍述は凡て法華經に依つて居る。別に法華三昧經が傳譯されて居るけれども、今の觀法は專ら法華經、就中、方便品、見寶塔品、勸發品の所說に從つて禪觀修道の一法を獨立標題として敍述した

にして滅する時なきが如し。　若し行放捨を止め調縮するも、設し復た[二二九]撥捨せば[二三〇]護法を失す。　譬へば病人を宜しく將つて養ふも　若し復た放捨せば活くるを得ることなきが如し。若し捨想正しく等心ありて、宜しく時に勤行せば得道すること疾かなり。　譬へば人あり調象に乘りて意の如くに至湊し躓礙なきが如し。

若し多婬欲愛もて亂心せば、是の時應に慈等を行ずべからず。　婬人慈を行ぜば癡悶を益す、人の冷病に冷藥を服するが如し。　婬人の心亂るれば不淨を觀ぜよ、不淨を諦觀せば心定を得。

行法是くの如くして相應するが故なり、人の冷病に熱藥を服するが如し。　若し多瞋恚忿にして亂心せば、是の時應に不淨を觀ずべからず。　瞋人惡を觀ぜば恚心を増さん、人の熱病に熱藥を服するが如し。　若し人瞋怒せば、慈心を行ぜよ慈を行じて捨てずんば瞋心滅せん。　行法是くの如くにして相應するが故になり。　人の熱病に冷藥を服するが如し。　若し多愚癡にして心闇淺ならば、不淨と行慈は行法に[二三一]非ず。　二行ともに癡を増して益なきが故なり、人の風病に麨藥を服するが如し、人心癡闇ならば因緣を觀ぜよ。　分別し諦觀せば癡心滅せん。

法行是くの如く相應するが故なり、人の風を病むに膩藥を服するが如し。　譬へば金師の炭を[二三二]鞴扇し、巧を用ふるとも非時なれば[二三三]橐法を失するが如し。　忽々にして急に橐して時を知らず、或は時に水を澆ぎ或は放捨す、金融くるに急に橐せば則ち消過し、未だ融けざるに便ち止めば則ち消せず。　非時に水を澆げば金則ち生じ、非時に放置せば則ち熟せず。　精進し攝心し及び放捨して、應當に行道法を觀察すべし。　非時の方便は法の利を失す。　若し法利に非ずんば非利と爲す。　譬へば藥師の三種病(所謂)冷・熱・風病を除滅するが故に、病に應じて藥を與ふるが如し。　佛も是くの如く、婬怒癡の病を藥に隨つて滅す。

坐禪三昧經　終

【二二九】大正本は發捨とあるも、元、明、宮本によりて撥捨と改む。

【二三〇】護法とは、捨法の古譯なり。

【二三一】大正本は悲となすも、元、明、宮本によりて非と改む。

【二三二】大正本は排となす、今は元、明、宮本によりて鞴と改む。

【二三三】元、明、宮本は鞴に作る。

忍も亦是くの如し。未だ菩薩の果を得ざる者無生法忍を得ば、菩薩道行の果を得。是を菩薩道の果と名く。是の時[二三二]般舟三昧を得、衆生中に於て大悲を得、般若波羅蜜門に入る。[二三三]爾の時諸佛便ち其の號を[二三四]授け隨つて佛界中に生じ、諸佛の爲めに念ぜられ、一切の重罪は薄く、薄きは滅し、三惡道を斷ず。常に天上人中に生じ、不退轉と名け不動處に到る。末後に肉身盡きて法身中に入り、能く種種の變化を作して一切衆生を度脫し、[二三五]六度を具足し諸佛を供養し、佛國土を淨め衆生を敎化し、[二三六]十地の中に立ちて功德成滿し、次第に阿耨多羅三藐三菩提を得。（これを）菩薩禪法中の初門と爲す。

[二三七]行者定心もて道を求むる時、常に當に時と方便とを觀察すべし。若し時を得ず方便なくんば、是れ應に失と爲すべし、利と爲さず。犢未だ生ぜざるに牛乳を搆するが如し、乳は得べからず時に非るが故に。若し犢生じ已つて牛角を搆するも、乳は得べからず無智の故に。濕木を鑽つて火を出さんことを求むるが如し、火は得べからず、非時の故に。若し乾木を折り以て火を求むるも、火は得べからず無智の故に。處を得、時を知り、己が行を量り、心方便力の多少、宜しく應に精進すべきや。及び宜しからざるや、道相宜しき時なりや、宜しからざるやを觀ぜよ。

[二三八]若し心掉動するも應に勇むべからず。是くの如き勇の過は定を得ず。譬へば多薪の熾大なる火の、大風來り吹いて肯へて滅せざるが如し。若し能く定を以つて自ら心を調ふれば、是くの如く息を動ずるも心定を得。譬へば大火に大風吹くも、大水の來り澆がば滅せざるなきが如し。若し人心軟に復た懈怠せば、是くの如くんば厭沒して應に行ずべからず。譬へば少薪にして焰火なく、風の吹くを得ずして便ち自ら滅するが如し。若し精進勇猛心ありて、是くの如くんば轉た健にして得道疾かなり。譬へば小火の多く薪を益し、風吹いて轉た熾ん

【二三二】般舟三昧(Pratyutpanna-samādhi)は、佛立三昧、常行三昧などと譯す。一定の期間行道三昧に入りて諸佛眼前に立つを見るなり。
【二三三】總じて菩薩道の果を示す。
【二三四】大正本は受・隨とあるも、元、明、宮本によりて授・隨と改む。
【二三五】六度とは、布施・持戒・忍耐・精進・禪定・智慧にして菩薩の必須的德目なり。
【二三六】十地とは、菩薩修道の階程を十段に設けたるものにてその名目に就いては二通りあり、今は略す。
【二三七】以下禪觀修行者の時と方便とを知るべき心得を說く。僧叡の序によれば此の二十偈は馬鳴の作なりと。
【二三八】大正本は調動とあるも、元、明、宮本によりて掉動と改む。

可見法・不可見法、有對・無對法、有漏・無漏、有爲・無爲、上中下法において、其の實相を求む。實相とは云何ん。有常に非ず無常に非ず、樂に非ず不樂に非ず、空に非ず不空に非ず、有神に非ず無神に非ず。何を以つての故に有常に非ずや、因緣生の故なり、先に無くして今有るが故に、已に有つて還つて無きが故に、是の故に有常に非ざるなり。云何んが無常に非ずや、業報失せざるが故に、外塵を受くるが故に、因緣增長するが故に、無常に非ざるなり。云何んが樂に非ずや、新苦の中に樂想を生ずるが故に、一切無常性の故に、欲に緣つて生ずるが故に、是の故に樂に非ざるなり。云何んが不樂に非ずや、樂受あるが故に、欲染より生ずる故に、樂を求めて身を惜まざるが故に、是の故に不樂に非ざるなり。云何んが空に非ずや、內外の入は各各受することを了了たるが故に、罪福の報あるが故に、一切衆生信ずるが故に、是の故に空に非ざるなり。云何んが不空に非ずや、和合等[二二八]より生ずるが故に、分別して求むるに不可得の故に、心力もて轉ずるが故に、是の故に不空に非ざるなり。云何んが有[二二九]神に非ずや、不自在の故に、第七識界不可得の故に、神相不可得の故に。是の故に有神に非ざるなり。云何んが無神に非ずや、後世あるが故に、解脫を得るが故に、各各我心生じて餘處を計せざるが故に、是の故に無神に非ざるなり。是くの如く生ぜず滅せず、不生ならず不滅ならず、有に非ず無に非ず、受せず著せず、言說悉く滅し心行處斷すること、涅槃の性の如し。是の法は實相なり。此の法の中に於て信心淸淨にして無滯無礙に、軟知・軟信・軟進なる、是を柔順法忍と謂ふ。

云何んが無生法忍なりや。如上の實相法の中にて智慧・信・(精)進增長し根利なる、是を無生法忍と名く。譬へば聲聞法の中にて煖法・頂法の智慧・信・精進增長して忍法を得るが如し。忍とは涅槃を忍し、無漏法を忍するが故に名けて忍と爲す、新得新見の故に名けて忍と爲す、法忍も亦是くの如し。[二三〇]時解脫の阿羅漢は[二三一]無生智を得ず、精進し廣利轉成して不時解脫ならば無生智を得。無生法

【二二八】大正本は和合等實となれど、元、明、宮本によりて和合等生と改む。

【二二九】南北朝初期に於ける佛教用語として「神」は、六識以上のものにして、來生に相續する精神的存在とも云ふべきものなり。

【二三〇】時解脫(Samaya-vimukta)とは、阿羅漢の鈍根なる者は、涅槃に入るに時節因緣の條件を要することを云ふ。不時解脫は利根にして時を選ばず隨時になすことを得るを云ふ。

【二三一】無生智とは、一切の煩惱を斷盡したる時に、更に之れ以上斷盡すべき何物もなしと確定する堅固の智なり。

爾の中間に非ず、前世より來らず、亦後世に[二四]往かず、東西南北四維上下より來るに非ず。實法あることなし、無明性は爾なり。無明性を了すれば則ち變じて明と爲る。一二之を推すに癡は不可得なり。云何んぞ無明は行を緣ぜん。虛空の不生・不滅・不有・不盡・本性淸淨なるが如く、無明も亦是くの如し。不生・不滅・不有・不盡・本性淸淨なり。乃至生老死を緣ずるも亦爾り。

菩薩は是くの如く十二因緣を觀じて、衆生の虛誑にして苦患に繫在するを知る。(故に衆生は)度し易き(の)み、諸法若し實の相あらば度するを得べきこと難し。思惟して是くの如くならば則ち愚癡を破る。

[二五]若し菩薩、心に多思覺なれば常に阿那波那を念ず。入時出時に一を數へて乃ち十に至り、一一心を馳散せしめず。菩薩は此の明より一心を得、五蓋の欲行を除く。菩薩は見道に應に[二六]三種の忍法(所謂)生忍・柔順忍・無生忍を行ずべし。云何んが生忍なりや。一切衆生或は罵り或は打ち或は殺し、種種の惡事あるも、心動轉せず、不瞋不恚にして、唯だに之を忍ぶのみならず、而も更に慈悲す。此の諸の衆生は諸の好事を求む、願はくは一切を得んことを。心捨放せずば、是の時漸やく諸法實相を解するを得ること、氣の熏著するが如くならん。譬へば慈母の其の赤子を愛して乳哺養育するに種種の不淨も以つて惡みと爲さず、倍憐念を加へて樂を得しめんと欲するが如し。行者も是くの如し。一切衆生の種種の惡、淨不淨行を作すも、[二七]心增減せず不退不轉なり。復た次に十方無量の衆生を、我れ一人應當に悉く度して佛道を得しめんと。心に忍んで不退・不悔・不却・不畏・不難にして是の生忍中に一心に繫念して三種に思惟して外念せしめず。諸緣を外念せば之を攝して還らしむ。是を生忍と名く。

云何んが柔順法忍なりや。菩薩既に生忍の功德無量を得て、是の功德福報の無常なるを知る。是の時無常を厭いて自ら常福を求め、亦衆生の爲に常住の法を求む。一切諸法(所謂)色・無色法、

【二四】大正本は住とあり、今は元、明、宮本によりて往と改む。

【二五】第五、菩薩道の數息觀。

【二六】三種忍に關しては經論に諸說あり、而して同じく忍と云ふも、不瞋・信認・識認等種々の意味あり。

【二七】大正本は增惡となすも、元、明、宮本により增減と改む。

の法なりやを知るべし。復た更に思惟す、是れ四種縁(所謂)因縁・次第縁・縁縁・增上縁なり。[二一二]五因因縁と爲る。過去現在の阿羅漢の最後心を除きて餘の過去現在の心心數法は是れ次第縁なり。縁縁・增上縁は一切法を縁とす。復た自ら思惟して言く、若し法先に因縁中に有らば則ち應に是の法は因縁生なりと言ふべからず。若し無ならば亦應に因縁中に生ずと言ふべからず。半有半無なるも亦應に因縁生なるべからず。云何んが因縁あらんや。若し法未だ生ぜざるに、若し過去の心心數法失せば、云何んが能く次第縁を作すや。若し佛法中の妙法は無縁ならば涅槃は云何んが縁縁と爲らんや。若し諸法實に無性ならば有法は不可得なり。若し因縁より果生じ此に因つて彼ありといはゞ、是の說は則ち然らず。若し因縁中各各別なるも、若しくは一處に和合するも、是の果は不可得なり、云何んが因縁邊に果を出さんや。因縁の中には果無きが故なり。若し因縁中先に果無くして而も出さば、何を以つてか非因縁邊よりも果を出さざるや。二俱に無なるが故になり。果は因縁に屬し因縁邊より出づるも、(而も)是の因縁は自在ならず、餘の因縁に屬すればなり。(故に)是の果は餘の因縁に屬す(べきなり)、云何んぞ不自在の因縁能く果を生ぜん。是の故に果は因縁より有るにあらず、亦非因縁より有るにもあらず。則ち非果と爲す。果なきが故に縁と非縁とも亦無なり。

[二一三]問うて曰く、佛の言はく十二因縁、無明は諸行を縁ずと。汝云何んが無因果と言ふや。答へて曰く、先に已に答ふ。應に更に難ずべからず。若し難ぜば更に當に答ふべし。佛の言はく、眼の因、色の縁にて癡邊に邪憶念が生ずと。癡は是れ無明なり。是の中無明は何の所に依り住するや。若しくは眼に依るや。若しくは色中なりや、若しくは識中なりや。應に眼に依つて住すべからず、若し眼に依つて住せば、應に色を待たずして常に應に癡なるべし。若し色に依つて住せば、應に眼を待つべからず。是れ則ち外癡にして何ぞ我が事に預らん。若し識に依つて住せば、識は無色・無對・無觸・無分・無處なれば、無明も亦爾らん、云何んぞ住すべけん。是の故に無明は內に非ず、外に非ず、

【二〇三】大正本は正覺とあれど元、明、宮本によりて正見と改む。

【二〇四】信根(Sraddhā-indriya)、精進根(Viryā-i.)、念根(Smṛti-i.)、定根 Samādhi-i. 慧根(Prajñā-i.)、之れを五根(Pañcendriyāni)と云ふ。

【二〇五】五力(Pañcabalāni)。

【二〇六】七覺意(Sapta bodhyangāni)。

【二〇七】四念止(Catvāri smṛtyupasthānāni)。

【二〇八】四正勤(Catvāri prahāṇāni)。

【二〇九】四神足(Catvāra ṛddhipādā)。

【二一〇】次に廣く因縁の空を說く。

【二一一】次に四縁(Catvāra pratyayā)の空を說く、因縁(Hetu-pratyaya)、次第縁(Samanantara-p.)、縁々(Ālambana-p.)、增上縁(Adhipati-p.)。

【二一二】五因(Pañca hetava)とは、生因(Janana-hetu)、依因(Niśraya-h.)、立因(Pratiṣṭhā-h.)、持因(Upastambha-h.)、養因(Upabṛṃhaṇa-h.)なり。

【二一三】次に十二因縁特に無明の空を說く。

を離る、是を正命と名く。是の如く觀ずる時精進す、是れ正方便なり。是の事を念じて散ぜず、是を正念と名く。是の事を思惟して動ぜず、是を正定と名く。[二〇三]正見は王の如く、七事は隨從す。是を道諦と名く。是の事を一心に實信して動ぜず、是を[二〇四]信根と名く。一心に精勤求道す、是を精進根と名く。一心に念じて忘失せず、是を念根と名く。心一處に住して亦馳散せず、是を定根と名く。思惟分別して無常等を覺す、是を慧根と名く。是の根の增長して得力する、是を[二〇五]五力と名く。問うて曰く、八正道中皆慧念定等を說くに根力中に何を以つてか重說するや。答へて曰く隨入行の時初めに小利を得れば、是の時を名けて根と爲し、是の五事增長得力すれば、是の時名けて力と爲すことを得、初めて無漏の見諦道中に入れば、是の功德を八正道と名くるなり。(また)思惟道に入る時を[二〇六]七覺意と名け、初入道中に身痛心法を觀念して常に一心に念ず、是を[二〇七]四念止と名け。是くの如くして善法味を得て四種精勤すれば、是を[二〇八]四正勤と名け、是くの如く欲精進定慧の初門に勤め精進して如意自在を求むれば、是を[二〇九]四神足と名く。四念止・四正勤・四神足・五根等と名くと雖も皆攝して、行時の初後、少多、行地の緣に隨つて各各名を得るなり。譬へば四大の各各に四大あれども、但だ多なるもの名を得て、若し地種多く水火風少き處には、名けて地大と爲すが如し。水火風も亦是くの如し。是の如く三十七品中各各諸品あり。四念止中に四正勤・四神足・五根・五力・七覺・八道等あるが如し。是くの如く十二分・四諦行・四念止・四正勤・四神足・五根・五力・七覺意・八正道を觀ぜば、其の心安樂なり。

[二一〇]復た此の法を以て衆生を度脫し、一心に誓願し精進して佛を求む。是の時心中に思惟觀念す、我れ了了として此の道を觀知するも應に證を取るべからず。二事の力あるが故に未だ涅槃に入らず。一には大悲もて衆生を捨てず。二には深く諸法實相を知る。諸の心心數の法は因緣より生ず。我れ今云何んが此の不實に隨はんや。當に自ら思惟して深く觀十二因緣に入らんと欲し、[二一一]因緣は是れ何

最高の天なり。

【一九二】虛空とは、無色界の最下なる空無邊處のこと。

【一九三】十一、生(Jāti)。

【一九四】受陰 (Upādāna-skandha)は、凡夫の五蘊のこと、持(Dhātu)は、十八界のこと、入(Āyatana)は、十二處のこと、命(Jīvita)。

【一九五】十二、老死 (Jarā-maraṇa)。

【一九六】次に十二因緣の空を觀ず。

【一九七】六情は、六識、六塵は、六境の舊譯なり。

【一九八】大正本には謂法とあるも、元、明、宮本により知諸法と改む。

【一九九】次に十二因緣の實相觀を說く。

【二〇〇】摩訶衍(Mahāyāna)は、大乘、般若波羅蜜(Prajñāpāramitā)は、智慧到彼岸と譯す。

【二〇一】次に十二因緣と四諦との關係を說く。

【二〇二】次に四諦と三十七道品との關係を示す、先づ八正道(Āryāṣṭāṅgika-mārga)。正見 (Samyag-dṛṣṭi)、正覺(Samyak-saṃkalpa)、正語(S.-vāca)、正業 (S.-karmānta)、正命(S.-ājīva)、正方便(S.-vyāyāma)、正念(S.-smṛti)、正定(S.-samādhi)。

し。其の生時は甚だ微細にして明眼の人ありて能く見て不見者に指示す、此の不見の人は但だ其の指を視て月に迷ふ。明者語つて言はく、癡人、何を以て但だ我が指を視るや。指は月の緣と爲る、指は彼の月に非ずと。汝も亦是くの如し、言音は實相に非ず、但だ言を假りて實理を表はす。汝は更に言聲に著して實相に闇し。

〔二〇一〕行者若し是の如き正知見を得ば、十二分を觀じて和合して因果二分と爲す。果時の十二分を苦諦と爲し。因時の十二分を習諦と爲す。因滅すれば是れ盡諦にして、因果の盡くるを見れば是れ道諦なり。四種に果を觀ずれば無常・苦・空・無我なり。四種に因を觀ずれば集・因・緣・生なり。問うて曰く、果に四種あるも但だ苦諦と名け、餘者には諦名なきや。答へて曰く、若し無常諦と言ふも復た疑はん、苦諦も亦疑ひ、無我諦も亦疑はば一種に處し難し。復た次に若し無常諦と言ふも咎なく、空・非我諦も亦咎なし。若し無常・苦・空・無我諦は說に於て重と爲るが故に、是の故に四に於て一と說くなり。問うて曰く、苦に何の界相ありて三の中に於て獨り名を得るや。答へて曰く、苦は是れ一切衆生の厭患する所、衆生の怖畏する所なり。無常は爾らず、或は人あり苦の爲めに逼られて無常を得んと思ふも、苦を得んと欲する者あることなし。問うて曰く、人あり刀を捉へて自殺を得んと欲し、針灸し苦藥(を飮み)賊に入る。是くの如き種種は苦を求むるに非ざるや。答へて曰く、苦を得んと欲するが爲には非ず、大樂を存せんと欲するなり、苦を畏るるが故に死を取るのみ。苦を第一の患と爲し樂を第一の利と爲す。是を以つての故に實苦を離れて快樂を得るなり。是の故に佛は果分を以て獨り苦諦と名け、無常・空・無我諦に非ず。

〔二〇二〕是の四諦中に於て了了たる實智慧もて疑はず悔ひず、是を正見と名く。是の事を思惟して種種增益するが故に是を正覺と名く。邪命を除きて四種の邪語を攝し、餘の四種の邪語を離れて四種の正語を攝す。邪命を除きて身の三種業を攝し、餘の三種の邪業を除くを正業と名く。餘の種種の邪命

想(Samjñā)。
〔一七七〕是意法の下の割註に曰く「痛は世界の人の著する所に名く。三種の痛あり、痛は應に受と爲すべし。受は則ち界に隨つて受く、苦と樂とは上界に無き所なり。故に宜しく受想は出家の所患と言ふべきなり」。
〔一七八〕三、識(Vijñāna)。
〔一七九〕四、名色(Nāma-rūpa)。
〔一八〇〕四大は、物質の根本要素にして造色は四大により造られたる物色質なり。
〔一八一〕五、六入(Ṣaḍāyatana)。
〔一八二〕六、觸(Sparśa)。
〔一八三〕七、受(Vedanā)。
〔一八四〕使(Anuśaya)は、新譯には隨眠と云ふ、限定すれば異說あれども、大體としては煩惱の異名と見て可なり。
〔一八五〕八、愛(Tṛṣṇā)。
〔一八六〕九、取(Upādāna)。
〔一八七〕十、有(Bhava)。
〔一八八〕此の三有は卽ち三界のこと、迷の因果亡びずして存する意なり。
〔一八九〕阿鼻大泥梨(Avīci-mahānirāya)は、阿鼻大地獄のこと。
〔一九〇〕他化自在天(Paranirmitavaśavartina)は、欲界の最上の天なり。
〔一九一〕梵世は、梵天にして色界の最下、阿迦尼吒天は色界

り、是を正見と名くと。云何んが無常等の觀を名けて正見と爲すと言ふや。答へて曰く、若し摩訶衍中の諸法の空無相なるを說かば、云何んが無常・苦・空等不實なりと言ふや。若し不生・不滅・空是れ實相なりと言はば應に無相と言ふべからず。汝の言は前後相應せず。復た次に佛は四顚倒を說く。無常中の常顚倒も亦道理あり、一切の有爲は無常なり、何を以つての故に、因緣生の故に、無常の因無常の緣にして所生の果云何んが常なりや。先に無にして今有り、已に有つて便ち無し。一切衆生皆無常なるを見る。內に老病死あり、外に萬物の凋落するを見る。云何んが無常を實ならずと言ふや。問うて曰く、我は有常を實と爲し無常を不實と爲すと言はず、我は有常無常俱に是れ不實なりと言ふ、何を以つての故に、佛の言はく、空の中に有常無常の二事は不可得なり、若し此の二事に著せば是れ俱に顚倒なりと。答へて曰く、汝の言は法と相應せず、何を以つての故に、無法と言ふは云何ん。復た二俱に顚倒と言ふも、一切空無所有は是れ實にして不顚倒と爲す。若し我れ有常を破して無常に著せば我が法應に破すべし。而して實我ならず。有常顚倒を破するが故に無常を觀ず、何を以ての故に、無常力能く有常を破するが故に、毒の能く餘毒を破するが如く、藥の病を除けば藥も亦俱に去るが如し。當に知るべし、藥妙なるは能く病を除くが故なり。若し藥を去らずんば後に藥は病と爲る。此も亦是くの如し。若し無常法に著せば應當に破すべし、不實の故に。我れ無常法を受けずんば云何んが破せん。佛の言はく、苦は是れ四眞諦中實に苦なりと言ふ、誰か能く樂ならしめん。苦因は是れ實の因なり、誰か能く非因ならしめん。苦盡は是れ實盡なり、誰か能く不盡ならしめん。盡道は是れ實道なり、誰か能く非道ならしめん。日は或は冷かならしむべく、月は或は熱からしむべく、風は不動ならしむとも、是の四眞諦は終に動轉すべからず。汝は摩訶衍中に於て了すること能はずして、但だ言聲に著す。摩訶衍中諸法實相あり。實相は破すべからず、作者あることとなし。若し破すべく作るべくんば摩訶衍に非ず。月の初め生して一日二日なるが如

すべし」。

【一六七】優塡(Udayana)は、憍賞彌國の王名、阿婆陀那(Apadāna)は譬喩と譯す。此の物語りは大寶積經卷九十七に出づ。

【一六八】三緣の慈悲に就いては經論によりて說異る、且らく一義によれば、生緣とは、一切衆生を緣じて慈を起すこと、法緣とは、衆生が空無我の理を知らずして吾我の見を起せるを愍みて起す慈悲を云い、無緣とは、衆生が諸法の實相を知らずして顚倒せるを愍みて起す慈悲なり。

【一六九】第四、菩薩の因緣觀、

【一七〇】先づ十二因緣の總觀を示す。

【一七一】以下十二因緣の細釋、一、無明(Avidyā)。

【一七二】黑法は、惡法にして、白法は善法のこと。

【一七三】六觸法とは、觸(Sparśa)の心所の六方面にして、眼觸・耳觸・鼻觸・舌觸・身觸・意觸なり。

【一七四】二、行(Saṃskāra)。

【一七五】有覺、有觀(Savitarka, Savicāra)は、新譯の有尋、有伺にして、分別推求の心作用の粗なるを覺と云い、細きを觀と云ふ。

【一七六】受(Vedanā)は、新譯の受なり。

して還らしむ。

[一九六]十二分を觀ずるに三世中に生ず。(卽ち)前生・今生・後生なり、菩薩若し心住するを得ば、當に十二分の空にして主あることなきを觀ずべし。癡は我れ行を作すを知らず、行は我れ癡よりあるを知らず、但だ無明の緣の故に行生ず。草木の種の如し、子より芽出づるも子も亦我れ芽を生ずるを知らず、芽も亦子より出づるを知らざるなり。乃至老死も亦復た是くの如し。是の十二分中の一一、無主無我なりと觀知すること、外の草木の主なきが如し。但だ倒見より吾我ありと計す。問うて曰く、若し吾我なく主なく作なくんば、云何んが去來して此に死し彼に生ずと言說するや。答へて曰く、吾我なしと雖も、[一九七]六情因と作り、六塵緣と作りて、中に六識を生ず。三事和合するが故に觸法生じ諸業を念知す。是に由つて去來して是より生死ありと言說す。譬へば日愛珠の如し、日と乾牛屎の和合方便に因るが故に火出づ。五陰も亦爾なり。此の五陰の生に因つて後世の五陰出づるも、此の五陰後世に至るに非ず。亦此の五陰を離れて後世の五陰を得ず。五陰は但だ因緣より出づ。譬へば穀子中より芽の出づるが如し。是の子は芽に非ず、亦餘芽の邊より生ずるに非ず、異に非ず一に非ず。後世の身を得るも亦爾なり。譬へば樹の未だ莖・節・枝・葉・華・實あらざるが如し、時節因緣を得て華葉具足す。善惡業報も亦復た是くの如し。種子壞するが故に常に非ず一に非ず、芽・莖・葉等生ずるが故に斷ならず異ならず。死生の相續するも亦復た是くの如し。行者は[一九八]諸法の無常・苦・空・無我・自生・自滅なるを知り、愛等に因つて有るを知り、滅に因つて是れ盡くるを知り、是を盡くすの道を知る。四種の智を以て十二分を知る、是れ正見道なり。衆生は縛著の爲に誑かさる、人の無價の寶珠ありて其の眞を別たず、他の爲に欺誑せらるるが如し。是の時菩薩は大悲心を發して、我れ當に作佛して正眞法を以て彼の衆生を化し正道を見せしめんと。

[一九九]問うて曰く、[二〇〇]摩訶衍の般若波羅蜜中に言ふが如し。諸法は不生・不滅・空・無所有・一相・無相な

眼、二、天眼、三、慧眼、四、法眼、五、佛眼之れなり。

【一五五】十力(Daśa-balāni)とは、佛に特有なる十種の心力にして其の名數は修行道地經卷六の脚註に出せり。

【一五六】十八不共法(Aṣṭādaśa-veṇika-dharma)は、佛に特有の十八種の德力にして其の名目は禪祕要法經卷下の脚註に出せり。

【一五七】次に菩薩道としての念佛三昧の特徵。

【一五八】第二、菩薩道の不淨觀。

【一五九】九想は、貪欲を治する爲めに人の屍に就て不淨觀を修して淨顚倒の想を滅するもの一脹想、二壞想、三血塗漫想、四膿爛想、五青瘀想、六噉想、七散想、八骨想、九燒想之れなり。

【一六〇】六分は六大のこと、人身の構成要素を六分せるなり。

【一六一】諸法實相觀としての不淨觀。

【一六二】諸法實相とは、萬法の眞實の體相の義なり。

【一六三】諸法實相の下の割註に曰く〔羅漢法を出過するなり〕。

【一六四】第三、菩薩道の慈心觀。

【一六五】大正本は貪とあれど、元、明、宮本によりて求に改む。

【一六六】不能熱大海の下の割註に曰く〔此の下應は優塡王、五百發の箭を持することを出

名く。
[一八二]六入因緣にて觸あり。云何んが觸なりや、六種の觸界あり。(卽ち)眼觸乃至意觸なり。云何んが眼觸なりや。眼、色を緣じて眼識を生じ、三法和合する是を眼觸と名く、乃至意觸も亦是くの如し。
[一八三]觸の因緣にて受あり。云何んが受なりや、三種の受(卽ち)樂受・苦受・不苦不樂受あり。云何んが樂受なりや、愛[一八四]使なり。云何んが苦受なりや、恚使なり。云何んが不苦不樂受なりや、癡使なり。復た次に樂受は樂を生じ樂に住して苦を滅し、苦受は苦を生じ苦に住して樂を滅し、不苦不樂受は苦を知らず樂を知らず。
[一八五]受の因緣にて愛あり。云何んが愛なりや、眼、色に觸れて愛を生ず、乃至意、法に觸れて愛を生ず。
[一八六]愛の因緣にて取あり。云何んが取なりや、欲取・見取・戒取・我語取なり。
[一八七]取の因緣にて有あり。云何んが有なりや、三種の有あり。(卽ち)[一八八]欲有・色有・無色有なり。下は[一八九]阿鼻大泥梨より上は[一九〇]他化自在天に至る、是を欲有と名け、及び其の能く業を生ずるもの(をいふ)云何んが色有なりや。下[一九一]梵世より上は阿迦尼吒天に至る、是を色有と名く。云何んが無色有なりや、[一九二]虛空より乃ち非有想非無想處に至る、是を無色有と名く。
[一九三]有の因緣にして生あり。云何んが生なりや、種種衆生の處處に生出し、[一九四]受陰あり持を得、入を得、命を得、是を生と名く。
[一九五]生の因緣にて老死あり。云何んが老なりや、齒落ち髮白く多皺にして、根熟し根破れ氣壞び、身傴みて杖にて拄へて行步す、陰身朽するが故に、是を老と名く。云何んが死なりや、一切衆生處處に退落墮滅し、斷死失壽して命盡く、是を死と名く。先に老ひ後に死するが故に老死と名く。
是の中に十二因緣あり。一切世間は無因緣邊に非ず、天邊に非ず、人邊に非ず、種種等の邪緣邊より出づるに非ず。菩薩は十二因緣を觀じ、繫心して動ぜず外念せしめず。諸緣を外念せば之を攝

【一四二】放捨の下の割註に曰く「放捨とは、三脫門にて空・無願・無相なり、空・無願・無相は卽ち十二門念に反して著する者なり」。
【一四三】次に辟支佛(Pratyeka-buddha)は、獨覺と譯す、普通には緣覺と云ふ。
【一四四】因緣退の下の割註に曰く「舍利弗の如き是れなり」。
【一四五】羅漢、緣覺、佛の相違點を示す。
【一四六】聲聞(Śrāvaka)は、佛の說法の音聲を聞いて修行する者のことにして、小乘佛教の代表的行者なり。
【一四七】波羅奈(Vārānasī)は、鹿野苑のありし所、今のベナレスの地なり。
【一四八】牛頭栴檀は、牛頭山より出づる栴檀の木。
【一四九】釧は、臂環のこと。
【一五〇】以下菩薩道としての五門禪を說く、第一、菩薩の念佛觀。
【一五一】先づ生身觀佛を說く。
【一五二】次に法身觀佛を說く。
【一五三】四無畏(Catvāri-vaiśāradyāni)とは、佛が說法するに當りて畏るゝ所なき四種の智力を云ふ、一正等覺無畏、二漏永盡無畏、三說障法無畏、四說出道無畏之れなり。
【一五四】五眼は、諸法の事と理とを認識する眼にして一、肉

業を知らず果を知らず業果を知らず、因を知らず緣を知らず因緣を知らず、罪を知らず福を知らず罪福を知らず、善を知らず不善を知らず善不善を知らず、有罪法を知らず無罪法を知らず、應近法を知らず應遠法を知らず、有漏法を知らず無漏法を知らず、世間法を知らず出世間法を知らず、過去法を知らず未來法を知らず、現在法を知らず、[一七二]黑法を知らず、白法を知らず、分別因緣法を知らず、[一七三]六觸法を知らず實證法を知らず。是くの如き種種の不知・不慧・不見・闇黑無明なる、是を無明と名く。

[一七四]無明行を緣ず、云何んが行と名く。行に三種あり、身行・口行・意行なり。云何んが身行なりや。入息出息是れ身行の法なり。所以者何となれば、是の法は身に屬するが故に身行と名く。云何んが口行なりや、[一七五]有覺有觀是なり、覺觀を作し已つて然る後口に語る、若し覺觀なくんば則ち言說なし、是を口行と謂ふ。云何んが意行なりや。[一七六]痛想是れ意法なり、[一七七]意に繫屬するが故に、是を意行と名く。復た次に欲界繫の行、色界繫の行、無色界繫の行あり。復た次に善行・不善行・不動行あり。云何んが善行なりや、欲界一切の善行亦色界の三地なり。云何んが不善行なりや、諸の不善法なり。云何んが不動行なりや、第四禪の有漏の善行及び無色定の善の有漏行なり。是を行と名く。

[一七八]行の因緣にて識あり。云何んが識と名くるや、六種の識界なり眼識乃至意識、是を六識と名く。

[一七九]識の因緣にて名色あり。云何んが名と爲す、無色の四分(卽ち)痛・想・行・識、是を名と謂ふ。云何んが色と爲す、一切の色、(卽ち)[一八〇]四大及び造色是を色と謂ふ。云何んが四大なりや、地・水・火・風なり。云何んが地なりや、堅重の相は地なり、濡濕の相は者水なり、熱の想は火たり、輕動の相は風なり、餘色の可見・有對・無對なる是を造色と名く。名と色の和合する是を名色と謂ふ。

[一八一]名色の因緣にて六入あり。云何んが六入なりや。內の六入(卽ち)眼內入乃至意內入、是を六入と

脫を開きて、加ふるに所緣の境を制伏して煩惱を起らざらしむる力用を以てせり。

【一三六】十一切入(Daśa-kṛtsnāyatanāni)は、十遍處とも云ふ、地・水・火・風・空・識の六大と青・黃・赤・白の四顯色の一々に就いて、夫等が一切處に遍滿すとなす觀法なり。

【一三七】九次第定は、四禪、四無色定及び滅盡定の九禪定が次第して雜念を交えず進展する意味より名けたるものなり。

【一三八】願智とは、所願の如く有爲無爲の一切法を直觀的に了知する智のこと。

【一三九】阿蘭若三昧(Araṇyaka-samādhi)は、無諍三昧のこと、空理に住して諍鬪戲論なき三昧なり。

【一四〇】阿蘭若三昧の下の割註に曰く〔秦には無諍と言ふ、阿蘭若は無事と言ひ、或は空寂と言ふ。舊に須菩提の常に行ずる空寂行と言ふは非なり。無諍とは將に衆生を護つて諍を自ら是れ無諍行なるのみ。無諍を起すとは舍利弗、目連の我れに起さゞらしむるのみ。陶屋中に入つて宿り、拘迦離と諍を起すに致るものの如き是れなり〕。

【一四一】超越三昧とは、小乘にて云へば中間の一地を超越して進み得る三昧のこと。

射殺せんと欲す、舍迷婆帝は諸の直人に語る、我が後に在つて立てと、是の時舍迷婆帝は慈三昧に入る、王は弓を挽きて之を射れども箭は足下に墮し第二箭は還つて王の脚下に向ふ。王大いに驚怖し復た箭を放たんと欲するに、舍迷婆帝王に語つて言く、止ね止ね、夫婦の義是の故に相語らん。若し此の箭を放たば當に直に汝の心を破るべしと。王時に恐畏し弓を投じ射を捨てて、問うて言く、汝何の術ありや。答へて言はく、我に異術なし。我は是れ佛弟子にして慈三昧に入るが故なりと。是の慈三昧は略說するに[一六八]三種の緣あり。(所謂)生緣・法緣・無緣なり。諸の未だ道を得ざる、是を生緣と名け、阿羅漢辟支佛、是を法緣と名け、諸佛世尊是を無緣と名く。是れ略して慈三昧門を說く。

[一六九]菩薩道を行ずる者、三毒中に於て若し愚癡偏に多ければ、當に十二分を觀じて三種の癡を破るべし。(即ち)內には身癡を破り外には衆生癡を破る。思惟し念じて言く、我及び衆生は俱に厄難に在り。常に生じ、常に老い、常に病み、常に死し、常に滅し、常に出づ。衆生愍むべし、出道を知らず、何によつてか脫するを得んと。[一七〇]一心に思惟すらく、生老病死は因緣より生ずと。當に復た思惟すべし、何の因緣より生ずるやと。一心に思惟するに、生の因緣は有なり、有の因緣は取なり、取の因緣は愛なり、愛の因緣は受なり、受の因緣は觸なり、觸の因緣は六入なり、六入の因緣は名色なり、名色の因緣は識なり、識の因緣は行なり、行の因緣は無明なり。是くの如く復た思惟すらく、當に何の因緣もて生老死を滅すべきやと。一心に思惟すらく、生滅するが故に老死滅す、有滅せるが故に生滅す、取滅するが故に有滅す、愛滅するが故に取滅す、受滅するが故に愛滅す、觸滅するが故に受滅す、六入滅するが故に觸滅す、名色滅するが故に六入滅す、識滅するが故に名色滅す、行滅するが故に識滅す、癡滅するが故に行滅すと。

[一七一]此の中十二分とは云何。無明分とは前を知らず後を知らず前後を知らず、內を知らず外を知らず內外を知らず、佛を知らず法を知らず僧を知らず、苦を知らず習を知らず盡を知らず道を知らず、

守法(Anurakṣaṇā-d.)、住法(Sthitākampya-d.)、必知法(Prativedhanā-d.)、不壞法(Akopya-d.)、慧脫(Prajñā-vimukta)、共脫(Ubhayato-bhāga-v.)、順正理論、成實論にも九種を擧ぐれど、俱舍には六種に纏めあれり。

【一三〇】濡は、煖又は軟の意。

【一三一】五種法とは、五門禪(上卷所說)のこととなるべし。

【一三二】未到地は、未至定(Anāgamya-samādhi)のこと、初禪に於ける根本定の豫備加行の定なり。

【一三三】滅禪は、滅盡定(Nirodha-samāpatti)のこと。

【一三四】八解脫(Aṣṭau vimokṣāḥ)とは、觀法によりて貪著心を背捨して三界の煩惱を斷じ生死を解脫すること、八種の名は禪祕要法經卷の中の關註を見よ。

【一三五】八勝處(Aṣṭāv abhibhvāyatanāni)とは、觀法によりて所緣の境(即ち處)を克服し煩惱に勝つが故に名く。一內有色想觀外色少、二內有色想觀外色多、三內無色想觀外色少、四內無色想觀外色多、五內無色想觀外色青、六內無色想觀外色黃、七內無色想觀外色赤、八內無色想觀外色白にして、八解脫の中の前三解

諸天善神常に隨つて擁護す。問うて曰く、若し當に行人慈三昧を得べくんば、云何んが失せずして復た增益するや。答へて曰く、戒を學んで清淨にして善信倚樂し、諸の禪定一心智慧を學び、閑靜に處するを樂しみ、常に不放逸にして少欲知足し、行慈教に順し、身を節して小食し、睡眠を減損して初夜にも後夜にも思惟して廢せず、煩はしき言語を省き默然として靜を守り、坐臥行住に時を知りて消息し、度を失して疲苦の極まるを致さしめず。寒溫を調和して惱亂せしめず。是を慈を益すと謂ふ。

復た次に佛道の樂、涅槃の樂を以て一切の人に與ふ。是を大慈と名く。行者思惟すらく、現在未來の大人、慈を行じて一切を利益す。我も亦被蒙る。是れ我が良祐なり。我れ當に慈を行じ畢に施恩に報ずべし。復た更に念じて言く、大德は慈心もて一切を愍念し此を以て樂と爲す、我も亦當に爾るべし。彼の衆生を念じて佛樂・涅槃の樂を得しめん、是を報恩と爲す。復た次に慈の力は能く一切の心をして快樂を得しめ、身は熱惱を離れて清涼の樂を得、慈福を持ち行ひて一切を安んじ以て其の恩を報ぜんことを念ず。復た次に慈に善利あり。瞋恚の法を斷じて名稱門を開き、施主良田は梵天に生ずる因なり。離欲處に住し怨對及び鬪諍の根を除却し、諸佛稱揚し智人愛敬す。能く淨戒を持して智慧の明を生じ、能く法利を聞けば功德醍醐は好人を決定す。出家の猛力は諸患を消滅し、罵辱不善も慈もて報ゆれば能く伏す。悅樂を結集して精進法を生ず。富貴の根因を辦ずるは智慧の府なり。誠信の庫は諸の善法門を藏す。稱譽法を致し根本佛正眞道を敬畏す。若し人惡を持して向はば、還つて自ら其の殃を受く。五種の惡語(所謂、非時語・非實語・非利語・非慈語・非軟語、是の五惡語も傾動すること能はず、一切の毒害も亦傷くること能はず。譬へば小火の大海を熱すること能はざるが如し。[一六六]毘羅經の中の[一六七]優塡王、阿婆陀那說の如し。二夫人あり。一を無比と名け、二を舍迷婆帝と名く。無比は舍迷婆帝を誹謗す、舍迷婆帝に五百の直人あり、王は五百箭を以て一一之を

脫道に對して煩惱を斷ずる當所を無間道(Ānantarya-mārga)と云ふ。

【一一八】現般涅槃 (Dṛṣṭ-dharma-parinirvāṇa)。

【一一九】中般涅槃(Antarā-p.) 中陰とは、今生と來生との中間存在なり。

【一二〇】生般涅槃 (Npapadya-p.)。

【一二一】有行般涅槃(Sābhisaṃskāra-p.)。

【一二二】無行般涅槃 (Anabhisaṃskāra-p.)。

【一二三】上流般涅槃 (Ūrdhra-srotā-p.)。

【一二四】阿迦尼吒(Akanisṭha)は、色究竟天のことにて色界の最頂なり、有頂天とも云ふ。

【一二五】無色定涅槃。

【一二六】身證(Kāyasākṣin)。以上九種不還の中、俱舍にては七種を數へ、成實論にては八種を數ふ(第十品)。

【一二七】無礙道は、無間道のこと、先きの解脫道の脚註を見よ。

【一二八】金剛三昧(Vajropama-samādhi)は、金剛喩定のこと、一切を摧破するに喩へたるなり。

【一二九】九種羅漢　退法(Parihāṇa-dharma)、不退法(Aparihāṇa-d.)、死法(Cetanā-d.)、

んば是れ菩薩道なり。慈三昧に住し以て諸法實相を觀じ、清淨にして不壞不動なり。願はくは衆生をして此の法利を得しめん。此の三昧を以て東方一切の衆生を慈念し佛樂を得せしむ。十方も亦爾なり。心轉亂せず、是を菩薩の慈三昧門と謂ふ。

問うて曰く、何ぞ一時に總じて十方の衆生を念ぜざるや。答へて曰く、先づ一方を念ずれば一心得易く、然る後次第に諸方に周遍す。問うて曰く、人に怨家あれば恒に相害せんと欲す、云何んが慈を行じて彼をして樂ならしめんと欲するや。答へて曰く、慈は是れ心法にして心より出生す、先づ所親よりし、所親轉增して乃ち怨家に及ぶ、火の薪を燒いて盛なれば能く濕を然やすが如し。問うて曰く、或は時に衆生は種種の苦に遭ふ、或は人中、或は地獄中に在り。菩薩慈なりと雖も彼れ那ぞ樂を得ん。答へて曰く、先づ樂人より其の樂相を取り、彼の苦人をして彼の如く樂を得しむ。敗軍の將怖懼して膽を失すれば、彼の敵を視て、人皆勇士と謂ふが如し。問うて曰く、慈三昧を行じて何の善利かある。答へて曰く、行者自ら念ず、出家離俗は應に慈心を行ずべし、又思惟して言く、人の信施を食す、宜しく利益を行ふこと佛の所言の如くすべし、須臾にも慈を行ず是れ佛の教に隨ふなり、則ち爲に入道し空しく受施せず。復た次に身は染服を著けて心は應に不染なるべし、慈三昧の力は能く不染ならしむ。復た次に我れ心に慈を行じ、破法の世に於て我れは有法なり、人は非法なり。衆中にて我れ有法にして人の如法にして惱なきは慈の定力の故なり。菩薩は道を行じて甘露の門に趣き、種種の熱惱を慈もて涼冷し樂ならしむ。佛の言ふ所の如し。人の熱極なる時、清涼池に入れば樂なり。復た次に大慈の鎧を被りて煩惱の箭を遮す、慈は法藥と爲りて怨結の毒を消す、煩惱は心を燒き慈は能く除滅す、慈を法梯と爲して解脫の臺に登る。慈を法船と爲して生死の海を渡る。善法財を[一六五]求むるには慈を上寶と爲し、涅槃に行趣するには慈を道糧と爲す。慈を駿足と爲して涅槃に度り入り、慈を猛將と爲して三惡道を越ゆ、能く慈を行ずる者は衆惡を消伏し、

【一二五】見諦斷とは、十六心の中の前十五心中にて、四諦の理に迷ふ煩惱總じて八十八使を斷ずることにて見道位のこと。思惟斷とは、第十六心に至りて、事に迷ふ煩惱即ち三界總じて八十一品の修惑を斷ずることにて、修道位のことなり。此の修惑は欲界に九品あり、本文に九種とあるは之れなり。而して此の欲界九種の煩惱は濺根によりて、見道十五心に入る前に其の一部分又は全部を斷ずる場合あり、次の本文は之等に就いて論ず。

【一二六】一種息忌陀伽迷果・向阿那伽迷とは、一來果の學者が不還果に進みつゝある道程にある位を云へるものにて、一種とは Ekavicika(一間)を Ekavijika(一種)と見誤りて譯せしなるべし、一間とは未だ一品の結殘りて不還果に至るに一の間隔あるの謂にして、不還向(Anāgāmi prati pannaka)のことなり。因に本文には十六心中一種名息忌陀伽迷果向阿那伽迷とあり。

【一二七】解脫道(Vimukti-mārga)は、一つの煩惱を斷じ終り之を解脫して眞智の顯はれたる所を云ふ、本文に第九とあるは欲界九品の惑の第九を斷じたる結果を云ふなり。解

【一六一】復た次に、我れ當に【一六二】諸法實相は有常ならず無常ならず、淨に非ず不淨に非ざることを學求すべし。我れ當に云何んが此の不淨に著すべけんや。不淨を觀ずる智は因緣より生ず。我が法の如きは當に實相を求むべし、云何んが身中の不淨を厭患して涅槃を取らん。當に大象の駛流水を度るに源底を窮盡するが如く、實の法相を得て涅槃に滅入すべし。豈に獼猴諸兎の駛流を畏怖して、趣かに自ら身を度すが如くなるべけんや。我れ今當に學すること菩薩法の如くなるべし。不淨觀を行じて婬欲を除却し、廣く衆生を化して欲患を離れしめ、不淨觀の爲に厭沒されず。復た次に既に不淨を觀ずれば則ち生死を厭ふ。當に淨門を觀じて心を三處(所謂)鼻端・眉間・額上に繫くべし、當に是の中に於て一寸の皮を開いて血肉を淨除すべし。心を白骨に繫けて外念せしめず、諸緣を外念せば之を攝して還らしめ、三緣中に著して恒に心と鬪ふ。二人相撲するが如し。行者若し心に勝たば、則ち之を制して住せしむるに如かず。是を一心と名く。若し厭患を以て大悲心を起し衆生を愍念せば、此の空骨の爲めに涅槃を遠離して三惡道に入り、我れ當に勤力して諸の功德を作し、衆生を敎化して身相の空を解せしむべし。骨は皮を以て覆ひ實に不淨を聚む。衆生の爲の故に徐に當に此の諸法の相を分別すべし。少しの淨想あらば心に愛著を生じ、不淨想多ければ心に厭患を生ず。法相を出づることあることあるが故に實法を生ず。諸法實相中には淨なく不淨なく、亦閉なく出なし、諸法の等を觀ずるに、壞すべからず動ずべからず。是を諸法實相と名く。【一六三】

【一六四】菩薩道を行ずる者、若し瞋恚偏へに多ければ當に慈心を行ずべし。東方の衆生を念じ、慈心淸淨にして怨なく恚なく廣大無量にして、諸の衆生悉く目前に在るを見る。南西北方四維上下も亦復た是くの如し。心を制し慈を行じて外念せしめず、異緣を外念せば之を攝して還らしむ。心目を持して一切衆生を觀じ、悉く見ること了了にして皆目前に在り。若し一心を得ば當に發願して言ふべし。我れ涅槃、實の淸淨法を以て衆生を度脫し實の樂を得しめむと。慈三昧を行じて心此くの如く

成しつゝ、十結乃至十四結を斷ぜしものが總計八十八となり、之を見惑と云ふ。

【一〇七】見得(Dṛṣṭiprāpta)は、前の隨法行の者が預流果に入りての名なり。

【一〇八】信解(Śraddhādhimukta)は、前の隨信行者が預流果を得ての名なり。

【一〇九】思惟結とは、修惑のこと。

【一一〇】餘殘七世生(Sapta-kṛtva-bhava-parama)とは、欲界九品の修惑を少しも斷ぜずして初果を得たるものは、最大限度として七度欲界に受生するの意なり。

【一一一】「三種斷ぜば家々三世生」とは、欲界修惑の前三品を斷ずる時は、七世生の中にて四世生を免れ、殘り三生となる、之れを三生家々と云ふなり。家々(Kulaṃkula)は初果と二果との中間に位する聖者を指す。

【一一二】「聖道八分…須陀般那と名く」とは、預流果の名を說明せるなり、聖道八分とは八正道、三十七品は三十七菩提分法のこと。

【一一三】三結は、身見・疑・戒禁取見なり。

【一一四】九種の下の割註に曰く「上上、上中、上下。中上、中中、中下。下上、下中、下下」。

し。衆生云何んが更に餘業を求めて佛を求めざるや。譬へば貴家の盲子大深坑に墮し、飢窮困苦して糞を食し泥を食す、父甚だ之を愍み爲に方便を求めて之を深坑より拯ひ、之に食せしむるに上饌を以てするが如し。行者念じて言く、佛の二種身と功德との甘露は是の如くなるも、而も諸の衆生は生死の深坑に墮して諸の不淨を食す。大悲心を以て我れ當に一切の衆生を拯濟して、佛道を得しめ生死の岸を度し、佛の種種の功德法味を以て悉く飽滿せしむべし。一切の佛法願はくは悉く之を得んことを。聞・誦・持・問・觀・行・得果爲に階梯と作し、大要誓を立てて三願の鎧を被り、外には魔衆を破り內には結賊を擊ち、直入して迴せず。是くの如き三願は、無量の諸願に比するに、願皆之に住せん。衆生を度し佛道を得んが爲の故に。是くの如く念じ是くの如く願ふ、是を菩薩の念佛三昧と爲す。

一五八 菩薩道を行ずる者、三毒中に於て若し婬欲偏に多ければ、先づ自ら身を觀ず。骨・肉・皮・膚・筋・脈・流血・肝・肺・腸・胃・屎・尿・涕・唾等の三十六物、一五九 九想不淨を專心に內觀して外念せしめず、諸緣を外念せば之を攝して還らしむ。人の燭を執つて雜穀の倉に入り、種種に豆麥黍粟を分別して、識知せざることなきが如し。復た次に身の一六〇 六分を觀ず。堅を地分と爲し、濕を水分を爲し、熱を火分と爲し、動を風分と爲し、孔を空分となし、知を識分と爲す。亦屠牛を分つて六分と爲し、身・首・四支各自ら處を異にするが如し。身に九孔ありて常に不淨を流し、革囊もて屎を盛る。常に是の觀を作して外念せしめず。諸緣を外念せば之を攝して還らしむ。若し一心を得て意に厭患を生じ、此の身を離れんことを求め、速かに滅して早く涅槃に入らしめんと欲せば、是の時當に大慈大悲を發すべし。大功德を以て衆生を拔濟し前の三願を興す。諸の衆生は不淨を知らざるを以て諸の罪垢を起す、我れ當に甘露の地に拔置すべし。復た次に欲界の衆生は不淨に樂著すること、狗の糞を食するが如し。我れ當に度脫して淸淨道に至らしむべし。

【九六】須陀般那の下に割註あり曰く〔下子上子。（異本には、涉入涅槃）〕須陀般那。
【九七】隨法（Dharmānusāri）。
【九八】隨信行（Śraddhānusāri）、
【九九】初果向（Srota-āpatti-pratipannaka）は、預流向と譯す。
【一〇〇】「先に未だ斷結せずして（第）十六心を得る」とは、十六心の間に總計八十八結を斷ずるも、之れ見惑（理に迷ふ）にして、未だ修惑（事に迷ふ）を斷ぜざる故に、未斷結と云ふなり。
【一〇一】「若し先きに六品の結を斷じ」とは、欲界の修惑に九品ある中、前六品を斷ずるの謂なり。
【一〇二】息忌陀伽迷。（Sakṛdāgāmi）は、一來果と譯し二果とも云ふ。殘れる三品の惑によりて今一度欲界に受生するの意なり。
【一〇三】割註に曰く〔条には一來と言ふ〕。
【一〇四】阿那伽迷（Anāgāmi）は、不還果と譯す、欲界に還らざるの意にして三果なり。
【一〇五】割註に曰く〔条には不來と言ふ〕、
【一〇六】八十八結とは、十六心の間に四諦十六行相の觀法を

む。釧少ければ聲も微なり。唯だ獨なれば釧は寂然として聲なし。王時に悟つて曰く、國家・臣民・宮人・婇女の事多ければ惱多きも亦是くの如しと。即時に離欲して獨處に思惟して辟支佛を得、鬚髮自ら落ちて自然の衣を著け、樓閣より去り、已が神足力を以て出家して山に入る。是くの如き因緣は中品の辟支佛なり。

[一五〇] 若し行者、佛道を求めて禪に入らば、先づ當に繫心して專ら十方三世諸佛の[一五一]生身を念ずべし。地・水・火・風・山・樹・草・木を念ずること莫れ。天地の中の有形の類、及び諸餘の法、一切念ずること莫れ。但だ諸佛の生身の虛空に處在するを念ぜよ。譬へば大海の淸水中央の金山王須彌の如く、夜闇中に大火を然すが如く、大施祠中の七寶の幢の如し。佛身も是の如し、三十二相八十種好あり、常に無量淸淨の光明を虛空相の青色中に出す。常に佛の身相を念ずること是くの如し。行者便ち十方三世諸佛の悉く心目の前に在るを一切悉く見るを得。三昧して若し心餘處を緣ぜば、還つて攝して住せしめ念を佛身に在くべし。是の時便ち東方の三百千萬億種種無量の諸佛を見る。是くの如く南方・西方・北方・四維・上下、所念の方に隨つて一切の佛を見る。人の夜星宿を觀じて百千無量種の星宿を悉く見るが如し。菩薩は是の三昧を得て無量劫の厚罪を除きて薄からしめ、薄きは滅せしむ。

[一五二] 是の三昧を得已つて當に佛の種種無量の功德、一切智・一切解・一切見・一切德を念ずべし。(佛は)大慈大悲自在を得。初より無明の殼を出で[一五三]四無畏・[一五四]五眼・[一五五]十力・[一五六]十八不共法もて能く無量の苦を除き老死の畏を救ひ、常樂の涅槃を與ふ。佛に是の如き等の種種無量の功德あるを(念ず)。

[一五七] 是の念を作し已つて自ら發願して言く、我れ何時にか當に佛身・佛功德の巍巍たること、是の如きを得べきやと。復た大誓を作す、過去一切の福・現在一切の福を盡く持して佛道を求め餘報を用ゐずと。復た是の念を作す、一切衆生甚だ憐愍すべし。諸佛の身・功德の巍巍たること是くの如

が、色界と無色界とにて十二となるなり。

【八五】 盡法忍(Nirodhe dharma-jñāna-kṣānti)は、新譯に滅法智忍と云ふ。

【八六】 盡法智(Nirodhe dharma-jñāna)は、新譯に滅法智と云ふ。

【八七】 盡比忍(Nirodhe nvaya-jñāna-kṣānti)は、新譯に滅類智忍と云ふ。

【八八】 盡比智(Nirodhe nvaya-jñāna) 新譯に滅類智と云ふ。

【八九】 道法忍 (Mārge dharma-jñāna-kṣānti)は、道法智忍のこと。

【九〇】 道法智 (Mārge dharma-jñāna)。

【九一】 八結は、十結より身見・邊見を除きたるもの。

【九二】 道比忍(Mārge nvaya-jñāna-kṣānti)は、新譯に道類智忍と云ふ。

【九三】 道比智(Mārge nvaya-jñāna)は、新譯に道類智と云ふ。

【九四】 十四結は、前の八結より瞋を除きたる七結が、色界と無色界とにて十四となる。

【九五】 須陀般那(Śrota-āpanna)は、須陀洹とも書き、預流果と譯し、無漏の聖者の流類に預るの意にして、初果とも云ふ。

阿羅漢あり、一切有爲法を常に厭ひて滿足し、更に功德を求めず、時を待つて涅槃に入る。阿羅漢あり、四禪・四無色定・四等心・[134]八解脫・[135]八勝處・[136]十一切入・[137]九次第・六神通・[138]願智・[139]阿蘭若三昧・[140]超越三昧・[141]熏禪・三解脫門及び放捨[142]を求めて更に利智もて勤精進を作し、是くの如き諸禪の功德に入る。是を不退法不壞法を得と名く。

[143]若し佛出世せず、佛法なく弟子なき時、是の時に離欲の人たる辟支佛出づ。辟支佛に三種あり。(所謂)上・中・下なり。下とは本と須陀般那若しくは息忌陀迦迷を得、是の須陀般那は第七世生の人の中に於て、是の時、佛法なく弟子と作るを得ず、復た應に八世生なるべからず、是の時、辟支佛と作る。若し息忌陀伽迷は二世の生にて、是の時佛法なく弟子と作るを得ず、復た應に三世生なるべからず、是の時辟支佛と作る。人あり、辟支佛と作らんことを願ひて、辟支佛の善根を種うる時、佛法善根の熟することなし。爾の時、世を厭ひて出家得道するを辟支佛と名く。是を中辟支佛と名く。人あり、佛道を求め智力進力少く因緣を以て退す、[144]是の時佛出世せず、佛法なく亦弟子なし、而して善根の行熟して辟支佛と作る。相好ありて若しくは少若しくは多なり。厭世出家得道す。是を上辟支佛と名く。[145]諸法の中に於て智慧淺くして入るを阿羅漢と名け、中にして入するを辟支佛と名け、深く入るを佛と名く。遙かに樹を見れば枝を分別すること能はず、小しく近けば能く枝を分別するも、華葉を分別すること能はず。樹下に到れば盡く能く分別して樹・枝・葉・華・實を知るが如し。[146]聲聞は能く一切諸行の無常、一切諸法の無主にして、唯だ涅槃のみ善く安隱なるを知る。聲聞は能く是くの如く觀ずるも、分別して深入し深知なること能はず。辟支佛は少しく能く分別するも、亦深入深知なること能はず。佛は諸法を知り、分別究暢し深入深知なり。[147]波羅奈國王の如し。夏の暑熱時には高樓上に處して七寶の床に坐し、靑衣をして[148]牛頭栴檀香を身に塗らしむ。靑衣臂に多く釧を著く。王身を摩する時[149]釧の聲耳に滿つ。王甚だ之を患ひ次第に脫せし

するが上に、類忍、類智と云い、舊譯にては比忍、比智と云ふなり、今は第二無漏心の名なり。

【七五】 等智とあるは次の第三心の苦比智のことなるべし、新譯苦類智(Duḥkhe nvaya-jñāna)。

【七六】 元、明、宮本には道法中とありて智の字なし。

【七七】 知他心智(Paracitta-jñāna)。他心通のこと、五通及び六通の一なり。

【七八】 十八結とは、前の十結の中、瞋を除きたる九結が色界と無色界とにて十八となるなり。

【七九】 習法忍は、新譯に集法智忍(Samudaye dharma-jñāna-kṣānti)と云ふ。

【八〇】 習法智は、新譯に集法智(Samudaye dharma-jñāna)と云ふ。

【八一】 七結は、十結の中より、身見・邊見・戒禁取見を除きたる七を云ふ。

【八二】 習比忍は、新譯に集類智忍(Samudaye-nvaya-jñāna-kṣānti)と云ふ。

【八三】 習比智は、新譯に集類智(Samudaye-nvaya-jñāna)と云ふ。

【八四】 十三結は、明、宮本に十二結とあるが正し、卽ち貪・瞋・慢・疑・邪見・見取見の六結

(一二三)三結斷じ三毒薄きを息忌陀伽迷と名く。復た次に欲界の結(一二四)九種について、(一二五)見諦斷と思惟斷となり。若し凡夫人先づ有漏道を以て欲界繫の六種結を斷じて見諦道に入れば、十六心中にて息忌陀伽迷と名くるを得。若し八種を斷じて見諦道に入れば、第十六心中にて(一二六)一種息忌陀伽迷果・向阿那伽迷と名く。若し佛弟子須陀般那を得ば單に三結を斷じ息忌陀伽迷を得んと欲す。是の思惟斷にて欲界繫の九種結の六種を斷ぜば是を息忌陀伽迷と名け、八種を斷ぜば是を一種息忌陀伽迷果・向阿那伽迷と名く。

若し凡夫人先に欲界繫の九種結を斷じて見諦道に入れば、第十六心中にて阿那伽迷と名く。若し息忌陀伽迷を得て、進んで三種の思惟結を斷ずる第九(一二七)解脫道を阿那伽迷と名く。阿那伽迷に九種あり。(一二八)今世にて必らず涅槃に入る阿那伽迷、(一二九)中陰にて涅槃に入る阿那伽迷、(一三〇)生れ已つて涅槃に入る阿那伽迷、(一三一)勤求して涅槃に入る阿那伽迷、(一三二)勤求せずして涅槃に入る阿那迦迷、(一三三)上行して涅槃に入る阿那伽迷、(一三四)阿迦尼吒に至つて涅槃に入る阿那伽迷、(一三五)無色定に到つて涅槃に入る阿那伽迷、(一三六)身證阿那伽迷、阿羅漢に行向する阿那伽迷なり。

色・無色界の九種結にて、第九(一二七)無礙道の(一二八)金剛三昧を以て一切結を破り、第九解脫道の盡智もて一切善根を修す。是を阿羅漢果と名く。是の(一二九)阿羅漢に九種あり。退法・不退法・死法・守法・住法・必知法・不壞法・慧脫・共脫なり。(一三〇)濡智もて濡進し(一三一)五種法を行じて退く、是を退法と名く。利智もて利進し五種法を行じて退せざる、是を不退法と名く。濡智もて濡進し利く厭ひ思惟して自ら身を殺す、是を死法と名く。濡智もて大進し自ら身を護る、是を守法と名く。中智もて中進し不增不減にして處中に住す、是を住法と名く。少利智もて勤め精進して能く不壞心解脫を得、是を必知法と名く。利知もて大進して初めて不壞心解脫を得。是を不壞法と名く。諸禪に入ること能はず(一三二)未到地中にて諸漏盡く、是を慧解脫と名く。諸禪を得亦(一三三)滅禪・諸漏盡を得、是を共解脫と名く。

更に身口二業幷に心不相應法に屬するものも、今の慧と一體になりて作用すと云ふ意にて、之れは見・緣・事の三現觀倶現すと云ふ說一切有部の正義を採れるものなり、倶舍論卷二十三參照。

【六八】苦法忍の下に割註あり曰く〔法は無漏の法なり、忍は信受なり〕。

【六九】苦法智(Duḥkhe dharma-jñāna)は、正しく欲界苦諦の眞理を證る智にして、之れ第二心なり。

【七〇】欲界繫とは、欲界に繫縛せらるゝ煩惱の意にして十結とは、貪・瞋・痴・慢・疑・身見・邊見・邪見・見取見・戒禁取見なり。

【七一】爾時異等智、得(以)無漏智、未得無漏慧得、是時成就一(等)智とあり。

【七二】成就一智の下に割註あり曰く〔等智とは未來の成就なり〕。

【七三】四智(所謂)苦智・法智・比智・等智とあるは、次での如く苦智・苦法智・苦類智　世俗智のこと。

【七四】苦比智忍は、新譯にては苦類智忍(Duḥkhe nvaya-jñāne-kṣānti)と云ふ。上二界の苦諦に對する無漏心にして、上二界は無漏心の對象も其の行相も欲界の夫等に類同

相應の心心數法、是を[68]苦法忍と名く。身業口業及び心不相應諸行、現在未來世一切無漏法の初門、是を苦法忍と名け、次第に[69]苦法智を生ず。苦法忍は結使を斷じ苦法智は作證す。譬へば一人刈り一人束ぬるが如し。亦利刀もて竹を斫り風を得れば卽ち偃ふが如し。忍と智と功夫するが故なり。是の事、[70]欲界繫の苦(諦)を見て、十結の斷の得を辨ずるなり。[71]爾の時、等智と異りて無漏智を得するも、未だ無漏慧の得を得せず。是の時一の(等)智を[72]成就す。

第二心中に法智を成就し、苦智、等智もて第三、第四心を過ぎて[73]四智(所謂)苦智・法智・[74]比智・[75]等智を成就す。習、[76]盡、道法智中には一一智增す。離欲の人は[77]知他心智成就し增す。苦比忍・苦比智は[78]十八結を斷ず。是の四心は苦諦を能得す。[79]習法忍・[80]習法智は欲界繫の[81]七結を斷じ、[82]習比忍・[83]習比智は色・無色界繫の[84]十三結を斷ず。[85]盡法忍・[86]盡法智は欲界繫の七結を斷じ、[87]盡比忍・[88]盡比智は色・無色界繫の十二結を斷ず。[89]道法忍・[90]道法智は欲界繫の[91]八結を斷じ、[92]道比忍・[93]道比智は色・無色界繫の[94]十四結を斷ず。道比智は是を[95]須陀般那と名く。[96]實に諸法の相を知る。是れ十六心なり。

能く(前)十五心中にて利根なるを[97]隨法行と名け、鈍根なるを[98]隨信行と名く。是の二人は未だ欲を離れず、[99]初果向と名く。[100]先に未だ斷結せずして(第)十六心を得るを須陀般那と名く。[101]若し先に六品の結を斷じて(第)十六心を得ば[102]息忌陀伽迷と名く。[103]若し先に九品の結を斷じて(第)十六心を得ば[104]阿那迦迷と名く。[105]先に未だ離欲せず、[106]八十八結を斷ずるが故に須陀般那と名く。復た次に無漏果の善根を得。得るが故に須陀般那と名く。利根を[107]見得と名け鈍根を[108]信愛と名く。[109]思惟結未だ斷ぜずんば[110]餘殘七世生なり。若し思惟結を[111]三種斷ぜば家家三世生と名く。[112]聖道八分三十七品を流と名く、涅槃に流向すればなり。是に隨つて流行するが故に須陀般那と名く。是を佛の初功德子と爲し惡道より脫するを得。

が故に、忍智も亦之れに應じて八種の忍と八種の智とを要す。此の八忍八智が卽ち無漏の十六心なり。而して其の順序は先づ欲界の苦忍を起し、次に同じく苦智を生じ、第三には上二界の苦忍を起し、第四に同じく苦智を生じ、以下之に準じて集、滅、道諦の順序に、欲界と上二界とを逐次に觀じ行くなり。「一時に四行…一諦を觀ず」とは、以下十六心の第一心、卽ち苦法忍を說明するものにて、欲界の苦諦に對して、一刹那に無常・苦・空・無我の四行相を起して、欲界苦諦の眞理を信認するの意なり。十六心の中前十五心は總べて一刹那宛の働きなり。

【六五】苦法忍とは、正しくは苦法智忍(Duhkhe dharma-jñana-kṣanti)にして、前の四善根の忍法と區別せんが爲めに、次の第二心の苦法智を引き起す忍と云ふ意味にて苦法智忍と呼べるなり。

【六六】大正本は共緣となすも今は元、明本により一苦緣とす。

【六七】「是の中心忍慧…是を苦法忍と名く」とは、苦法忍が現に働く時の主將たる心作用は慧の心所なるも、同時に夫れに相應する心々所も働き、

佛寶と法僧寶とに　誰か少信淨あらば　是を頂善根と名く。　汝曹一心に持せよ。

云何んが少信と爲すや。佛、菩薩、[59]辟支佛、阿羅漢の邊に於て少と爲し、野人の邊に於て多と爲す。復た次に此は破すべく失すべし、是の故に少と名く。[60]法句の說の如し。

芭蕉は實を生じて死し、竹の實を生ずるも亦然り。　騾に子あれば則ち死し、小人は養を得れば死す。破失非利の故に。　小人名譽を得れば　白淨の分失盡し、乃至頂法より墮す。

復た次に未だ諸結使を斷ぜず、未だ無漏無量の慧心を得ず。是を以つての故に少と名く。

[61]復た次に勤め精進して一心に涅槃道中に入り、更に了了に五陰四諦十六行を觀ず。是の時心縮せず悔せず退せず、愛樂して忍に入る、是を忍善根と名く。忍とは何等なりや、四諦行に隨ふ、是を名けて忍と爲す。是の善根に三種あり、上中下の三時なり。云何んが忍と名く。五陰の無常・苦・空・無我を觀じて心忍不退なる是を忍と名く。復た次に觀ず。諸の世間は盡く苦空にして樂あることなく、是の苦の因は習愛等の諸の煩惱なり。是の習を智の緣もて盡す。是を上法と名け更に上あることなし、八直道能く行人をして涅槃に至るを得しむ、更に上あることなしと。是くの如く信じて心に悔ひず疑はずして忍す、是を忍と名く。是の中更に忍あり、種種の結使種種の煩惱疑悔、來つて心中に入るも破らしむること能はず。譬へば石山に種種の風水あるも漂ひ動かすこと能はざるが如し、是の故に忍と名く。是の事をもつて眞好の野人と名くるを得。佛の[62]法句中に說くが如し。

世界正見の上に、誰か多を得る者あらば、乃ち千萬歲に至るも、終に惡道に墮せじ。

是の世間の正見、是を名けて忍善根と爲す。是の人多く增進し一心に極めて世界行を厭ひ、四諦相を了了にし證を作して涅槃に趣かんと欲す。是の如き一心中是を[63]世間第一法と名く。

[64]一時に四行（所謂）無常・苦・空・無我に住して一諦（苦諦）を觀ず。[65]苦法忍は[66]苦（諦を）緣ずる故に。何を以ての故に、欲界の五受陰の無常・苦・空・無我を觀ずればなり。[67]是の中・心忍慧に入り、亦是の

【五九】辟支佛（Pratyekabuddha）は、緣覺のこと、此の卷の下に說く。

【六〇】法句經卷下利養品第三十三。

【六一】三、忍（Kṣānti）は、四諦の理を確認するを云ふ。確認は證悟の前提なり。

【六二】法句經卷上、敎學品第二。

【六三】世間第一法（Laukikāgradharma）は、世間卽ち有漏法の中の最上の位を意味す。

【六四】次に無漏道の十六心を說く、前の四善根の位に於て四諦十六行相の觀法をなせしも、之れ未だ有漏道の範圍に屬せり。今は正しく無漏道に入りて四諦十六行相の觀法をなし、眞に聖者の域に入るなり。十六心（十六行相と十六心と同じには非らず）の作用を大別して忍と智との二種とす、忍は信認又は確認の作用にして、智は正しく覺證するの作用なり。而して忍は智に前行するものにて、同一對象に對して忍先づ起り次に智を生ず。此の際對象となるものは苦、習（集）、盡（滅）、道の四諦なれば、忍と智も之れに應じて苦忍、苦智等の四種の忍と四種の智ある譯なり。然るに四諦は欲界と上二界（色、無色）とにては性質を異にする

め精進するが故に煖法と名く。諸の煩惱の薪を無漏の智火もて燒くに、火出でんと欲する初相を名けて煖法と爲す。譬へば火を鑽るに初鑽に煙出づるが如し。是を煖と名け、是を涅槃道の初相と爲す。佛弟子中に二種の人あり。一には多く一心を好んで禪定を求む。是の人は有漏道なり。二には多く愛著を除いて實智慧を好む。是の人は直ちに涅槃に趣く。煖法中に入つて煖相ある者は深く一心を得、實法の鏡は無漏界邊に到る。[五五]行者是の時大いに安隱を得て自ら念ず、我れ定んで當に涅槃を得べし此の道を見るが故にと。人の井を穿つに濕泥に至るを得ば、當に水を得べきこと久しからずと知るが如く、人の賊を擊つに賊已に退散せば、自ら勝ちを得たるを知り、意中安隱なるが如く、人の死人を怖れ、活けるや不やを知らんと欲せば、當に先づ之を試みるに杖を以て身を打つべし。若し隱胗脈起らば是れ煖あり、必らず活くるを得べしと知るが如し。亦聽法の人思惟喜悅して心著せば、是の時心熱するが如し。行者是くの如く煖法あるが故に名けて有煖と爲す。亦能く涅槃の分善根を得たりと名く。是の善根法に十六行四諦緣あり。[五六]六地中の一智慧にして一切無漏法の基なり。野人は能く[五七]安隱を行ず。是を有煖法と名く。

增進轉止せば更に[五八]頂法と名く。乳の變じて酪と爲るが如し。是の人法の實相を觀じ、我れ當に苦脫を得べしと。心に是の法を愛し、是を眞法と爲して、能く種種の苦患及び老病死を除く。是の時思惟すらく、此の法は誰か說く。是れ佛世尊なりと、是より佛寶中に信心淸淨大歡喜悅を得。若し此の法なくんば一切の煩惱誰か當に能く遮すべき。我れ當に云何んが實智慧少許の明を得べきやと。是れより法寶中に信心淸淨大歡喜悅を得。若し我れ佛弟子輩の好伴を得ずんば、云何んが當に實智慧少許の明を得べきやと。是より僧寶中に信心淸淨大歡喜悅を得。是の三寶中に一心淸淨を得て實智慧に合す。是れ頂善根なり。亦頂法と名く。亦能く涅槃の分善根を得と名く。波羅延那經中に說くが如し。

にして、無漏善の位に進む根本基礎なる故に善根と云ふ。

【五四】一、煖(Uṣmagata)は、見道無漏の智火が起る前に、先づ暖を覺ゆるの意味より名く。

【五五】無漏界邊の下に割註あり曰く「鏡中の像は面に似て、界邊は中に非ず、故に以て喩となす」。

【五六】六地とは、四禪の根本定と未至定と中間定との六なり。

【五七】安隱の下に割註あり曰く「無漏に於て疎なるが故に名けて野人となす、梵本を案ずるに爾の先きを凡夫人と言ふは非なり」。

【五八】二、頂法(mūrdhāna)は、煖位の修行が一の頂點に達したるを意味す。

り。是を法念止と名く。

若し行者、法念止を得ば、世間は空・老・病・死の法にして、都て少し許りも常樂我淨なきことを厭ふ。我れ此の空法に於て復た何ぞ求むる所あらんや。應當に涅槃に入つて最善法の中に住すべし。精進力を建て深舍摩陀[四四]を得るが故に、是の時深舍摩陀を得て第四法念止中に住す。諸法の相を觀ずるに皆苦にして樂なし、無樂是れ實にして餘者は妄語なり。苦は愛等諸の煩惱及び業に因る。是れ天に非ず、時に非ず、塵等の種種の妄語中より生ずるに非ず。是の煩惱及び業は此の苦を出生す。是の苦は涅槃に入る時一切滅盡す。色、無色界及び世界始[四五]等の種種の妄語、能く此の苦を滅するに非ず。正見等の[四六]八直是れ涅槃道なり。[四七]餘の外道の苦行種種の空持戒・空禪定・空智慧に非ず。何を以つての故に、佛法中戒定慧の三法合し行ふて能く涅槃に入る。譬へば人の平地に立つて、好き弓箭を持して能く怨賊を射殺するが如し、三法合し行ふも亦是くの如し。戒を平地と爲し、禪定を快弓と爲し、智慧を利箭と爲し、三事備足して能く煩惱の賊を殺す。是を以つての故に外道の輩は涅槃を得ず。

[四八]行者是の時四法緣を作して、緣を觀ずること射博の如し。[四九]苦を觀ずるに四種あり。因緣生の故に無常、身心惱の故に苦、一として得べきものなきが故に空、無作無受の故に無我なり。[五〇]習を觀ずるに四種あり。煩惱と有漏業と和合するが故に集、相似の果生ずるが故に因、是の中に一切の行を得るが故に生、相似の果相續するが故に緣なり。[五一]盡を觀ずるに四種あり。一切の煩惱を覆ふが故に閉、煩惱の火を除くが故に滅、一切法の中に第一なるが故に妙、世間を過ぎ去るが故に出なり。[五二]道を觀ずるに四種あり。能く涅槃に到るが故に道、不顚倒の故に正、一切聖人の去處なるが故に跡、世の愁惱を脫するを得るが故に離なり。

[五三]是くの如く觀ずる者は無漏相似の法を得、名けて[五四]煖法と爲す。云何んが煖と名くるや。常に對

【四四】舍摩陀の下に割註あり曰く〔深舍摩陀とは心一處に住するの名なり、此の上には是の名なし〕舍摩陀（Śamatha）は心の定に住することにて、止觀に對する時の止之れなり、古くは寂とも譯せり。

【四五】世界始の下に割註あり曰く〔外道の謂く、一切有法の初めを名けて世界始となし、外道は謂へらく涅槃なりと、此の有始能く萬物を化す、卽ち造化と名くるなり〕。

【四六】八正道のこと、元、明本には八直道となす。

【四七】大正本には非餘外道苦行種々空持戒空禪定空智慧とあれど元、明、宮本には非餘斷食等種々苦行亦非種々空持戒空禪定空智慧となす。

【四八】次に四諦十六行相を示す、四諦各四種に觀ずる故に四法緣と云ひ、合して十六種となる。

【四九】苦諦の四種觀法は非常・苦・空・無我なり。

【五〇】習（集）諦は集・因・生・緣。

【五一】盡（滅）諦は閉・滅・妙・出（新譯にては滅・靜・妙・離とす）。

【五二】道諦は道・正・跡・離（新譯にては道・如・行・出とす）。

【五三】次に四善根を說く、四諦十六行相を觀ずる修行の位

は應に苦なりと觀ずべし、[四一]苦痛は應に樂なりと觀ずべし、箭の體に在るが如し。不苦不樂を應に生滅無常なりと觀ずべしと。是を痛念止といふ。

[四二]當に知るべし、心は苦樂を受け、不苦不樂を受く。云何んが心なりや。是の心は無常なり、因緣より生ずるが故に。生滅して住せず、相似の生なるが故に。但だ顚倒の故に謂ふて是を一と爲すのみ。本なく今有り、已に有つて還た無し、是の故に無常なり。心空を觀知するには云何んが空と爲すや。因緣より生じて、眼あり。色ありて見るべく、憶念ありて見んと欲す。是くの如き等和合して眼識生ず。日愛珠の如し。日あり珠あり、乾草牛屎あり。衆緣和合して是に於て火生ず。一一推求するに火は不可得なり。緣合して火あるのみ。眼識も亦爾なり。眼中に住せず亦色中に住するに非ず。兩の中間に住するに非ず。住處あることなく亦復たなきにあらず。是の故に佛の言はく、幻の如く化の如しと。現在心もて過去心を觀ずるに、或は苦或は樂或は不苦不樂なり。心は各各異り各各滅す。欲心あり欲心なきも亦是くの如し。各各異り各各滅す。內心を觀じ外心を觀じ內外心を觀ずるも亦是くの如し。是を心念止と名く。

[四三]復た次に心は誰に屬するやと觀ぜよ。想・思惟・念・欲等の、諸心の相應法、不相應法を觀じて其の主を諦觀するに、主は不可得なり。何を以ての故に、因緣より生ずるが故に無量なり、無常なるが故に苦なり、苦なるが故に自在ならず、不自在の故に主なし、無主の故に空なり。前には身痛心法の不可得なるを別觀せり、今更に四念止中に主の不可得なるを總觀するに、此の處を離れて求むるも亦不可得なり。若し常不可得ならば無常も亦不可得なり。若し常ならば應當に常苦常樂なるべし、亦應に忘るべからず。若し常に神あらば殺惱罪なく亦涅槃なし。若し身是れ神ならば、無常の身滅すれば神も亦應に滅すべし、亦後世なく亦罪福なし。是くの如く遍ねく觀ずるに主なく、諸法皆空にして自在ならず。因緣合するが故に生じ、因緣壞するが故に滅す。是くの如く緣合して法た

【四一】苦痛は、苦受の古譯。

【四二】三、心念處(Citta-s.)。

【四三】四、法念處(Dharma-s.)。

〔三七〕行者は顚倒を破らんと欲するが故に常に四念止觀を習ふ。〔三八〕身を觀ずるに種種諸の苦患多し。因緣より生ずるが故に無常なり。種種に惱むが故に苦なり。身に三十六物あるが故に、不淨なり。自在を得ざるを以ての故に無我なり。是くの如き觀を習ひ、内身を觀じ外身を觀じ内外身を觀ず。是くの如き觀を習ふ、是を身念止と謂ふ。

身の實相は是くの如し。何が故に此に於て顚倒を起して此の身に愛著するや。〔三九〕諦かに思惟して身邊の〔四〇〕樂痛を念ずるに、樂痛を愛するを以ての故に此の身に著す。當に觀ずべし、樂痛は實に不可得なり。云何んが不得なるや、衣食に因るが故に樂を致すも、樂過ぐれば則ち苦生ず。實の樂に非ざるが故に、瘡を患ふて苦しみ、藥を以て塗り痛を治し止むれば樂と爲すが如し。大苦を以ての故に小苦を謂ひて樂と爲すも、實の樂には非ざるなり。復た次に故苦を以て苦と爲し新苦を樂と爲す。重きを擔いで肩を易ゆれば新なる重を以て樂と爲すが如く、實の常樂には非ざるなり。火性の熱して暫らくも冷ゆる時なきが如く、若し是れ實の樂ならば應に不樂あるべからず。或るが曰く、外事は是れ樂の因緣にして必らずしも是れ樂ならず。或る時は樂因或る時は苦因なり。若し心法と愛とを相應せしめば、爾の時是れ樂なり。恚を相應すれば爾の時是れ苦なり。癡と相應すれば不苦不樂なり。此を以て之れを推して、有樂無樂を知るべしと。答へて曰く、無なり。婬欲は應に是れ樂なるべからず。何を以ての故に。若し婬欲内に在れば應に外に女色を求むべからず。外に女色を求むるは當に知るべし。婬は苦なることを。若し婬是れ樂ならば應に時時に棄つべからず。若し棄てなば應に是れ樂なるべからず。大苦の中に於ては小苦を以て樂を爲す。人の應に死すべきを、命を全うせんとして鞭を受け、是を以て樂と爲すが如し。欲心熾盛なれば欲を以て樂と爲すも、老ゆる時には欲を厭ひて欲の樂に非ざるを知る。若し實に樂相ならば應に厭を生ずべからず。是くの如き種種の因緣により樂の相を欲するも實に不可得にして、樂失すれば則ち苦なり。佛の言はく樂痛

【三七】次に四念處觀を示す、之れ常樂我淨の四顚倒を破らんが爲めなり、本經上卷の脚註參照。

【三八】一、身念處（Kāyasm-rityupastāna）。

【三九】二、受念處（Vedanā-ā）。

【四〇】樂痛は、樂受の古譯なり。

亦猿猴の高上より墮つるも心力強きが故に身に痛患なきが如く、此も亦是の如し、欲力・精進力・一心力・慧力、其れをして廣大ならしむ。而して身更に小なれば便ち能く身を運ぶ。復た次に身容界を觀じ常に此の觀を習へば、欲力・精進力・一心力・慧力極めて廣大と爲り便ち能く身を擧ぐ。大風力の重きを致して遠きに到るが如く、此も亦是の如し。初めは當に自ら試みて地を離ること一尺二尺なるも、漸く一丈に至り還た本處に來たる。鳥の子の飛ぶことを學び、小兒の行くを學ぶが如く、思惟して自ら心力の大にして必らず能く遠きに至るを審知す。四大を學び觀ずるに、地大を除却して但だ三大を觀ず。心念散ぜざれば便ち自在を得て身に罣礙なし。鳥の飛行するが如く、當に復た學習すべし。[32]遠きも近想を作す、是の故に近は遠を滅し出さん。復た能く諸物を變化す。木を地種なりと觀じ餘種を除却するれば、此の木便ち變じて地と爲るが如し。所以者何んとなれば木に地種の分あるが故なり。水・火・風・空・金・銀・寶物悉く皆是くの如し。何を以ての故に、木に諸種の分あるが故なり。是れ初神通の根本にして、四禪に十四變化心あり。初禪に二果あり。一には初禪、二には欲界。二禪に三果あり。一には二禪、二には初禪、三には欲界。三禪に四果あり、一には三禪、二には二禪、三には初禪、四には欲界なり。四禪に五果あり、一には四禪、二には三禪、三には二禪、四には初禪、五には欲界なり。餘通は[33]摩訶衍論中に說くが如し。

[34]世尊の弟子[35]五法門を習學して、涅槃を志求するに二種の人あり。或は定を好むもの多し、[36]快樂を以ての故に。或は智を好むもの多し、苦患を畏るるが故に。定多き者は先づ禪法を學んで後涅槃を學び、智多き者は直ちに涅槃に趣かんとす。直ちに涅槃に趣かんとする者は未だ煩惱を斷ぜず亦未だ禪を得ざるも、專心にして散ぜずんば直ちに涅槃を求めて愛等の諸煩惱を越えん。是を涅槃と名く。(則ち)身は實に無常・苦・不淨・無我なるも、身顚倒を以ての故に常・樂・我・淨とす。是を以ての故に事事其の身に愛著す。是れ則ち底下の衆生なり。

【三二】神足通を得る時は、能く境界を變現することを得、而して之れに十四種あるを以て十四變化心と云ふ、其の十四種は本文にある如く、初禪に二種、二禪に三種、三禪に四種、四禪に五種の割合なり。此の內欲界の變化心は色・香・味・觸の四境を變現し、初禪以上は色・觸の二境を變作するなり。

【三三】摩訶衍論とは、主に大智度論を指すが如し。

【三四】次に禪定を修して涅槃を求むるに、定を主とするものと、智を主とするもののあることを示す。

【三五】五法門は、上卷所說の五門のこと。

【三六】元、明、宮本には快樂を樂著に作る。

て第一の樂と爲す。樂は則ち是れ患なり。所以者何となれば第一禪の中には心動轉せず、無事を以ての故なり。動あれば則ち轉あり、轉あれば則ち苦あり。是の故に三禪は樂を以て患と爲す。復た善妙を以て此の苦樂を捨つ。先づ憂喜を棄てて苦樂意を除き護念清淨にして[一七]第四禪の不苦不樂護清淨念の一心に入るを得。是くの故に佛の言はく、護の最清淨第一なるを第四禪と名くと。第三禪は樂動ずるを以ての故に之を名けて苦と爲す。是の故に四禪は苦樂を除滅して不動處と名く。

[一八]漸く空處を觀じ內外の色想を破り有對想を滅し、種種の色想を念ぜず[一九]無量空處を觀ず。常に色の過を觀じて空處定の上妙の功德を念じ、習ふて是の法を念じて[二〇]空處を逮得す。無量識處を念じて空處の過を觀じ、[二一]無量識處の功德を念じて是の法を習念し[二二]識處を逮得す。無所有處を念じて識處の過を觀じ、[二三]無所有處の功德を念ず。習ふて是の法を念じて便ち無所有處を得。[二四]非有想非無想處を念ずるに、若し一切の想は其の患甚だ多くして病の若く瘡の若し。(而も)若し無想ならば是れ愚癡處なり。是の故に非有想非無想是れ第一安隱の善處なり。無所有處の過を觀じ非有想非無想の功德を念じ、習ふて是の法を念じて便ち非有想非無想處を得。

[二五]或は行者ありて、先づ初地より乃ち上地に至り、復た上地に於て[二六]慈心を習行す。先づ自ら樂を得て瞋恚の毒を破り、次に十方無量衆生に及ぶ、是の時便ち慈心三昧を得。悲心もて衆生の苦を憐愍し、能く衆惱を破りて無量の衆生に及ぶ。是の時便ち[二七]悲心三昧を得。能く不悅を破つて無量の衆生をして皆喜悅を得しむ。是の時便ち[二八]喜心三昧を得。能く苦樂を破りて直ちに十方無量の衆生を觀ず。是の時便ち[二九]護心三昧を得。二禪も亦復た是の如し、三禪と四禪とには喜を除く。

次に[三〇]五通を學び、身能く飛行し變化自在なり。行者一心に欲定・精進定・一心定・慧定もて、一心に身を觀じて常に輕想を作し飛行を成ぜんと欲す。若しくは大若しくは小[三一]此の二は俱に患あり。精進し翹勤して常に能く一心に思惟輕觀す。能く浮ぶ人の心力強きが故に沈沒せざるが如く、

【一七】第四禪には行捨清淨・念清淨・非苦非樂受・定の四作用を作ふ。

【一八】次に無色界相應の四無色定を說く。

【一九】一、無量空處定。新譯には空無邊處定と云ふ。

【二〇】元、明、宮本には空定となす。

【二一】二、無量色處定。新譯には識無邊處定と云ふ。

【二二】元、明宮本には識定となす。

【二三】三、無所有處定。新譯も同じ。

【二四】四、非有想非無想定。新譯には非想非々想定と云ふ。

【二五】次に四無量心を說く。

【二六】一、慈無量心。

【二七】二、悲無量心。

【二八】三、喜無量心。

【二九】四、捨無量心。

【三〇】次に五神通を得ることを說く、就中第一神足通のみを說明せり。これを四神足と云ふ。

【三一】此の下割註に曰く〔欲定過ぐるを以て大となし、欲定減ずるを小となす〕。

ることを。當に初禪を求めて欲火を斷滅すべし。行者は一心に精勤信樂して、心を增進せしめ意を散亂せず、欲を觀じて心に厭ひ結惱を除き盡して初禪定を得、欲の盛火を離れて清涼の定を得ること、熱に蔭を得るが如く、貧の富を得るが如くせよ。是の時便ち初禪の[六]喜覺を得。禪中の種種の功德を思惟し、分別好醜を觀じて便ち一心を得。

[七]問うて曰く、禪を修行する人、一心を得たるの相は云何んが知るべきや。答へて曰く、面色悅澤し徐行端正にして一心を失せず、目色に著せず、神德定力もて名利を貪らず憍慢を擊破し、其の性柔軟にして毒害を懷かず復た慳嫉なし。直信心淨にして論議し諍はず、身に欺誑なく與に語るべきこと易し。柔軟慚愧にして心常に法に在り、勤修精進し持戒完具し、誦經し正憶念して法行に隨ひ、意常に喜悅して瞋處を瞋らず、[八]四供養中にて不淨は受けず、淨施なれば則ち受け、量を知りて止足す。寤起輕利にして能く[九]二施を行じ忍辱もて邪を除く。論議して自ら滿せず言語尠少なり。謙恪にして上中下座を恭敬し、善師善知識には常に親近し隨順す。飲食に節を知りて[一〇]好味に著せず、獨り靜處を樂しみ若しくは苦若しくは樂なるも心に忍んで動ぜず、怨なく競なく鬪訟を喜ばず。是くの如き等の種種の相もて一心の相を知ることを得。[一一]

[一二]此の[一三]覺、觀の二事は禪定心を亂すこと、水澄靜なるに波蕩すれば則ち濁るが如し。行者是くの如く內已に一心なるも覺觀に惱まさる。極まりて息を得るが如く睡に安きを得るが如く、是の時次第に無覺無觀にして清淨の定を生じ、[一四]內淨喜樂にして二禪に入るを得。心靜默然として未得ざる所、今此の喜を得、是の時心に觀じ喜を以て患を爲すこと上の覺觀の如し。無喜法を行じて[一五]乃ち喜地を離れ賢聖所說の樂を得、一心に諦知し護を念じて三禪に入るを得。已に喜を棄つるが故に諦知して[一六]樂の護(捨のこと)を憶念す。聖人は樂の護(捨のこと)を言ふも餘人は捨て難し。(これ)樂中の第一にして此を過ぎて以往には復た樂なし。是の故に一切の聖人は一切の淨地中に於て慈を說い

【六】喜と覺とは、初禪相應の心作用なり。
【七】次に初禪の相を說く。
【八】四供養は、本經上卷に註す。
【九】二施は、財施と法施。
【一〇】大正本は欲味とあれど元、明、宮本によりて好味と改む。
【一一】元、明、宮本には次に如是得入初禪觀分別好醜知の一句あり。
【一二】次に初禪の欠點を舉げて二禪を示し、次第に三禪四禪に進ましむ。
【一三】覺(Vitarka)は、新譯にては尋となし、觀(Vicāra)は、同じく伺と譯す。前者は麤、後者は細なる分別作用にして、共に初禪相應の心作用なり。
【一四】第二禪には、內淨・喜・樂・定の四の心作用を伴ふ。
【一五】大正本は乃至離喜地得賢聖所說樂とあれど元、明、宮本には離喜妙樂得賢聖樂となす。
【一六】第三禪には捨・念・慧・樂・定の心作用を伴ふ、本文に護とあるは捨(二三頁註二)の舊譯にして、心の不出なるを云ふ。

巻の下

【一】爾の時に行者一心を得と雖も定力未だ成ぜず、猶ほ欲界煩惱の爲に亂さる。當に方便を作して進んで【二】初禪を學び愛欲を呵棄すべし。云何んが呵棄するや。欲界の過を觀じて、欲(界)は不淨にして種種の不善ありと爲し、當に初禪の安隱快樂を念ずべし。欲を觀ずるとは云何。欲は無常にして功德の怨家たり、幻の如く化の如く空無所得なりと知る。之を念じて未だ得ざるも癡心已に亂るるなり、何に況んや已に得て婬欲の纏覆するをや。天上の樂處も猶ほ常に安らかならず。何に況んや人中をや、人心は欲に著して厭足あることなく、火の薪を得るが如く海の流を呑むが如し。【三】頂生王は七寶を雨らし四天下に王となりて、帝釋座を分つと雖も猶ほ足ることを知らざるが如し。【四】那睺沙轉金輪王の欲の爲に逼られて蟒蛇中に墮するが如し。又仙人の果を食ひ草を衣て深山に隱居し、髮を被りて道を求むるも、猶ほ復た欲の賊に壞さるるを免れざるが如し。欲の樂は甚だ少く怨毒は甚だ多し。欲に著する人には惡友は相近づき善人は疎遠す。欲は毒酒たり愚にして惑はゞ醉死せん。欲は欺誑たり愚人を走使し、疲苦萬端自在を得ず。唯だ離欲あれば身心安隱にして快樂極りなし。欲は得る所無くして狗の枯骨を齩むが如し。欲を求むるには勤勞極苦して乃ち得。之を得るは甚だ難く之を失ふは甚だ易し。假借須臾なるが如く、勢久しきを得ず。夢の所見の如く恍惚として即ち滅す。欲の患たるや之を求むるに既に苦にして之を得るも亦苦なり。多く得れば多く苦なり。火の薪を得ること多ければ焱と多く熾なるが如し。欲は【五】揣肉を衆鳥の競ひ逐ふが如し、要を以て之を言へば、蛾の火に赴くが如く、魚の鉤を呑むが如く、鹿の聲を逐ふが如く、渴して鹹水を飲むが如し。一切衆生は欲の爲に患を致し苦として至らざるなし。是の故に當に知るべし。欲は毒害た

【一】色界四禪(四靜慮とも云ふ)を說く、先づ欲界定の不完全なることを示す。
【二】初禪とは、色界初禪天相應の禪定なり。
【三】頂生王のことは本經上卷の初めに註せり。
【四】那睺沙(Nahuṣa)の下の割註に曰く「[姓なり]」と。Ayus の子、Yayāti の父にして、帝釋の座を分有し、後却けられて蛇に變ずとの物語、マヌの法典、マハーバラタ等に出づ。
【五】元、明、宮本は段肉に作る。

佛の諸三昧智慧成佛を得るをや。而も專念せず。是の故に行者は常に當に專心にして意をして散ぜさらしむべし。既に佛を見るを得ば請ふて所疑を質せ。是を念佛三昧もて等分及び餘の重罪を除滅すと名く。

行き魔軍を降伏して、後夜の初明に等正覺を成す。光相分明にして遠く十方を照して周遍せざるなし。諸天は空中に弦歌供養し散華雨香す。一切衆生咸な敬すること無量なり。三界を獨歩し還た顧みて身を轉ずること象王の迴るが如し。道樹を觀視し、初めて法輪を轉じ、天人得悟し道を以て自ら證つて涅槃に至るを得。佛身は是の如く感發無量なり。專心に念佛して外念せしめず。諸緣を外念せば之を攝して還らしむ。是くの如くして亂れず。是の時便ち一佛二佛乃至十方無量世界の諸佛の色身を見ることを得。心想を以ての故に皆之を見ることを得。既に佛を見ることを得て又說法の言を聞く。或は自ら請問せば佛は爲に說法して諸の疑網を解く。既に佛念を得ば當に復た佛の功德法身、無量の大慧・無崖底の智・不可計の德・[一二七]多陀阿伽度・阿犁呵・三藐三佛陀・鞞伽遮羅那三般那・宿伽陀・路伽憊・阿耨多羅・富樓沙曇藐・舍多提婆魔㝹舍喃・佛婆伽婆を念ずべし。

爾の時に復た二佛の神德を念じ、三四五佛乃至無量盡虛空界皆悉く是くの如し。復た還つて一佛を見る。能く一佛十方佛と作るを見、能く十方佛一佛と作るを見る。能く一色をして金銀水精毘琉璃色を作さしめ、人の意樂に隨つて悉く之を見せしむ。爾の時に惟だ二事を觀る、(乃ち)虛空佛身及び佛功德なり。更に異念なし。心自在を得て意馳散せず。是の時念佛三昧を成ずるを得。若し心馳散して念[一二八]五塵に在り若しは六覺に在らば、當に自ら其の心を勗勉刻勵して强ひて之を制伏すべし。是くの如くして思惟すらく、人身得ること難く佛法遇ひ難しと。故に曰く衆明は日を最と爲し、諸智は佛を最と爲す。所以者何となれば佛は大悲を興して常に一切の爲の故に、頭目髓腦もて衆生を救濟す。何ぞ放心して專ら念佛せずして重恩に[一二九]孤負すべけんや。若し佛世に出でずんば則ち人道・天道・涅槃の道なし。若し人香華もて供養し骨肉血髓を以て起塔し供養するも、未だ行人の法を以て供養して涅槃に至るを得るに若かざるなり。然りと雖も猶ほ佛恩に負く。設ひ當に念佛して空無所獲なるべきとも、猶ほ應に勤めて心專念にして忘れず以て佛恩に報ずべし。何に況んや念

【一二七】以下佛十號の下に一々割註ありて原語を譯し釋すれど今は略す。多陀阿伽度(Tathāgata)は、如來と譯す。阿犁呵(Arhat)は、應供と譯す。三藐三佛陀(Samyaksambuddha)は、正遍知と譯す。鞞伽遮羅那三般那(Vidyācaraṇa-saṃpanna)は、明行足と譯す。宿伽陀(Sugata)は、善逝と譯す。路伽憊(Lokavid)は、世間解と譯す。阿耨多羅(Anuttara)は、無上士と譯す。富樓沙曇藐(Puruṣa-damya-sārathi)は、調御丈夫と譯す。舍多提婆魔㝹舍喃(Śāstra-devamanuṣyānāṃ)は、天人師と譯す。佛婆伽婆(Buddha-bhagavat)は、御世尊と譯す。

【一二八】五塵は、色・聲・香・味・觸の五境のこと。

【一二九】元、明、宮本には辜負に作る。

住處安し。[一一三]二十三には威一切に振ふ。二十四には一切觀んことを樂ふ。二十五には面長からず。二十六には正容貌不撓色なり。二十七には[一一四]脣頻婆果の色の如し。二十八には面圓滿なり。二十九には響聲深し。三十には臍圓く深くして出でず。三十一には毛處處に右旋す。三十二には手足滿つ。三十三には手足意の如し。[一一五]三十四には手足の文明にして直し。三十五には手文長し。三十六には手文斷ぜず。三十七には一切惡心の衆生、見る者皆和悅の色を得。三十八には面廣姝なり。三十九には面月の如し。四十には衆生見る者怖れず懼れず。四十一には毛孔より香風を出す。四十二には口より香氣を出し衆生遇ふ者法を樂しむこと七日。四十三には儀容師子の如し。四十四には進止象王の如し。四十五には行法鵞王の如し、四十六には頭は[一一六]摩陀羅果の如し。[一一七]四十七には聲分滿足す。[一一八]四十八には牙利なり。四十九には[一一九]〔漢名なきが故に出すことを得ず〕。五十には舌大にして赤し。五十一には舌薄し。五十二には毛は純紅色にして色淨潔なり。五十三には廣長眼。五十四には孔門滿つ。[一二〇]五十五には手足赤白なること蓮華の色の如し。五十六には腹[一二一]見えず出でず。五十七には[一二二]凸腹ならず。五十八には身を動かさず。五十九には身重し。六十には大身なり。六十一には身長し。六十二には手足滿淨なり。六十三には四邊に[一二三]大光遍く光明自ら照して行く。六十四には等しく衆生を視る。六十五には敎化に著せず弟子を貪らず。六十六には衆に隨つて聲滿ちて減ぜず過ぎず。六十七には衆の音聲に隨つて爲めに說法す。六十八には語言無礙なり。六十九には次第に相ひ續いで說法す。七十には一切衆生目もて相を諦視して知り盡すこと能はず。七十一には視るに厭足なし。七十二には髮長好なり。七十三には[一二四]髮好し。七十四には髮亂れず。七十五には髮破れず。七十六には髮柔軟なり。七十七には髮青くして毘琉璃色なり。七十八には[一二五]髮紋上す。七十九には髮稀ならず。八十には胸に德字[一二六]あり手足に吉字あり。

光明無量の世界を徹照し、初生して七步を行き口を發して要言を演ぶ、出家勤苦して菩提樹下に

【一一二】此の下割註に曰く〔三月受胎して二月生る〕。

【一一三】同じく〔牛王の如く立つて動かず〕。

【一一四】頻婆(Bimba)。赤色にして形齊正なる果實の名。

【一一五】同じく〔舊に內外に握ると言ふは是れなり〕。元、明、宮本は紋に作る。

【一一六】摩陀羅(Madana)。醉果と譯す、形大にして檳榔の如し。

【一一七】此の下割註に曰く〔此果は不圓不長なり〕。

【一一八】同じく〔髀に六十種分有り佛は皆具足す〕。

【一一九】〔 〕の中は割註の文なり。

【一二〇】此の下割註に曰く〔九孔の門相具足して滿つ〕。

【一二一】元、明、宮本には現に作る。

【一二二】同じく尖腹に作る。

【一二三】元、明、宮本には光に作る、

【一二四】同じく髮旋に作る、

【一二五】同じく髮紋右上に作る。

【一二六】德字は、卍のこと、吉字は卐の意味する吉祥海雲相(Śrivatsa-lakṣaṇa)の吉を取りたるなり。

誰の像相なるやと。則ち是れ過去釋迦牟尼佛の像相なり。我れ今、佛の形像を見るが如きは、像も亦來らず我も亦往かず、是くの如く心に過去佛を想見するに、初め降神の時天地を震動し、[一〇〇]三十二大人の相あり。

一には足下安平にして立つ。二には足下に千輻輪あり。三には指長好なり。四には足跟廣し。五には手足の指合して縵網あり。六には足趺高平好なり。七には[一〇一]伊泥延鹿蹲なり。八には平住せば手膝に過ぐ。九には[一〇二]陰馬藏相。十には[一〇三]尼倶盧陀身。十一には一一の孔に一一毛生ず。十二には毛上向に生じて右旋す。十三には身色上金に勝る。十四には[一〇四]身光面一丈。十五には皮薄好なり。十六には[一〇五]七處滿ず。十七には兩腋下平好なり。十八には上身師子の如し。十九には身大好にして端直なり。二十二は肩圓好なり。二十一には四十齒。二十二には齒白く齊密等にして根深し。二十三には四牙白くして大なり。二十四には頰方にして師子の如し。二十五には味中に上味を得。二十六には舌大に廣長にして薄く。二十七には[一〇六]梵音深遠なり。二十八には迦蘭頻伽の聲なり。二十九には眼紺青色なり。三十には眼睫牛王の如し。三十一には[一〇七]頂髮肉骨成ず。三十二には眉間の白毛長好にして右旋す。

復た次に[一〇八]八十種の小相あり。一には頂を見ることなし。二には鼻直高好にして孔現はれず。三には眉は初生の月の如くにして紺琉璃の色なり。四には耳好し。五には身[一〇九]那羅延の如し。六には骨際鉤鎖の如し。七には身一時に廻り象王の如し。八には行く時足地を去ること四寸にして印文現はる。九には爪は赤銅の色の如く薄くして潤澤なり。十には膝圓好なり。十一には身淨潔なり。十二には身柔軟なり。十三には身曲らず。十四には指長くして圓纖なり。十五には指紋畫の如く雜色莊嚴す。十六には脈深くして現れず。十七には踝深くして現はれず。十八には[一一〇]身潤ふて光澤あり。十九には身自ら持して[一一一]陀に委せず。二十には身滿足なり。[一一二]二十一には容儀備足す。二十二には

【一〇〇】大正本には三十二相とあれど元、明本によりて相を除けり。以下三十二相の說明、三十二相の一々に就いては諸經論によりて多少の出入あり。
【一〇一】伊泥（大正本に尸とあれど元、明、宮本によりて泥と改む）延(Aineya)は、鹿の名なり。
【一〇二】陰馬藏相とは、陰處淸淨にして而も隱れて見えざること馬王の如きを云ふ。
【一〇三】尼倶盧陀(Nyagrodha)。榕樹のこと、樹枝垂れて地に入り形齊正なるを佛身に譬ふ。
【一〇四】身光面一丈とは、面光上下八方各一尋の間を照すこと。
【一〇五】七處滿とは、兩足・兩掌・頸・兩肩の七處平滿なること。
【一〇六】梵音は、梵天の音聲のことにて、微妙淸淨の音律を出だす。
【一〇七】元、明、宮本には髻に作る。
【一〇八】八十種好は、八十隨形好とも云ふ。三十二相に比して細部の特相なり、又諸經論によりて異る。
【一〇九】那羅延(Nārāyaṇa)は、天上の力士の名。
【一一〇】元、明、宮本には身光潤澤となす。
【一一一】同じく逶迤となす。

出づるは、過去の因緣に從つて和合するが故に集まり、因緣壞するが故に散ず。是くの如きの隨觀是を出散觀と名く。[九二]欲結を離るることを觀ずるにも、亦息の入出を念ず。心諸の結を離る。是の法第一なり。是を隨離欲觀と名く。[九三]盡を觀ずるにも亦息の入出を念ず。諸の結使の苦は在在處に盡き、是の處安隱なり。是を隨盡觀と名く。[九四]棄捨を觀ずるにも亦息の入出を念ず。諸の染愛・煩惱・身心・諸の有爲法を棄捨すれば、是れ第一安隱なり。是くの如く觀ずる[九五]是を隨法意止觀と名く。[九六]是を十六分と名く。[九七]

第五、等分を治する法門

第五法門は[九八]等分行、及び重罪人の佛を求索するを治す。是の如き人等には當に一心に念佛三昧を教ふべし。念佛三昧に三種人あり、或は初習行、或は已習行、或は久習行なり。若し初習行の人は將ゐて佛像の所に至り、或は教へて自ら往いて佛像の相好を諦觀せしめ、相相明了に一心に[九九]取持して還つて靜處に至り、心眼もて佛像を觀じて意をして轉ぜざらしめ、繫念して像に在りて他念せしめず。他念せば之を攝して常に像に在かしむ。若し心住せずんば師當に教へて言ふべし。汝當に心を責むべし。汝罪を受くること稱計す可からざるに由り、無際の生死に種種の苦惱を更受せざるなし。若し地獄に在れば洋銅を呑飮し燒鐵丸を食し、若し畜生に在れば糞を食し草を噉み、若し餓鬼に在れば飢餓の苦を受け、若し人中に在れば貧窮困厄し、若し天上に在れば失欲して憂す。常に汝に隨へるが故に我をして此の種種の身惱心惱無量の苦惱を受けしむ。今當に汝を制すべし、汝は當に我に隨ふべし。我れ今汝を一處に繫し、我れ終に復た汝の爲に困せられて更に苦毒を受けず。汝常に我を困せり、我れ今要らず當に事を以て汝を困らすべし。是くの如くにして已まずんば心散亂せず。是の時便ち心眼もて佛像の相、光明を見るを得て、(肉)眼の所見の如く異ることあることなし。是の如く心住すれば、是を初習行者の思惟と名く。是の時當に更に念じて言ふべし。是れ

【九二】第十四、觀離欲。
【九三】第十五、觀滅。
【九四】第十六、觀棄捨。
【九五】以上の五は法念處觀に屬す。
【九六】大正本には法意止觀是名十六分とあるを元、明、宮本には、棄捨觀息入出是名數息十六分也とあり。
【九七】第五門念佛觀(Buddhānusmṛti)を示す。
【九八】等分とは、性貪の見と著我の見と斷常の二見とが皆存するを云ふ。
【九九】元、明本には憶持とあり。

息入息出を見る。是の故に知る、息は諸身に遍するを[七六]諸身行を除くに亦入出息を念ず。初め息を學ぶ時、若し身懈怠睡眠して體重ければ、悉く之を除棄す。身輕く柔軟にして禪定心に隨つて喜を受く。亦息の入出を念じ懈怠睡眠心重を除いて、心輕く柔軟を得て、禪定心に隨つて喜を受く。[七七]

復た次に[七八]身念止中に入り竟り、次に痛念止を行ず。已に身念止を得、實に今更に痛念止を得て實に喜を受く。復た次に[七九]已に身の實相を知り、[八〇]今心心數法の實相を知らんと欲す。是の故に喜を受く。[八一]亦息の入出を念じて樂を受け、[八二]亦息の入出を念ずれば是れ喜增長するを名けて樂と爲す。復た次に初め心中に悅を生ず是を喜と名け、後に遍身の喜あり是を樂と名く。復た次に初禪二禪中の樂痛を喜と名け、三禪中の[八三]樂痛を樂を受くと名く。諸の心行を受くるにも亦息の入出を念ず。諸の心生滅の法、心染法心不染法、心散法心攝法、心正法心邪法、是くの如き等の諸の心相を名けて心行と爲す。[八四]心の喜を作す時も亦息の入息を念じて先づ喜を受く。自ら生じて故らに作さずして心を念ずるが故に喜を作す。問うて曰く、何を以ての故に喜を作すや。答へて曰く、二種の心を治せんと欲す、(乃ち)或は散心或は攝心なり。是くの如く作心して煩惱を出づることを得。是の故に念法の心は喜を作す。復た次に若し心悅ばずんば勸勉めて[八五]喜ばしむ。

[八六]心の攝を作す時も亦息の入出を念ず。設し心不定ならば強いて伏して定ならしめよ。經中の說の如し、心定なる是れ道なり心散ぜるは道に非ずと。[八七]心解脫を作す時も亦息の入出を念ず。若し意、解けずんば強いて伏して解かしむ。譬へば羊の[八八]蒼耳に入るが如く、蒼耳身に著けば人爲に漸漸に之を出す。心諸の煩惱結を解脫するを作すも亦復た是くの如し。[八九]是を心念止作解脫と名く。

[九〇]無常を觀ずるにも亦息の入出を念ず。諸法を觀ずるに無常生滅し空にして吾我なし。生時に諸法空生じ、滅時に諸法空滅す。是の中男なく女なく人なく作なく受なし。是を無常觀に隨ふと名く。

[九一]有爲法の出散を觀ずるにも、亦息の入出の無常を念ず、是を出散と名く。諸の有爲法の現世中に

【六九】以下十六特相を示す。
【七〇】六、妙門のこと。
【七一】第一、知息入。
【七二】第二、知息出。
【七三】第三、知息長短。
【七四】元、明、宮本は隨に作る。
【七五】第四、知息遍身。
【七六】第五、除諸身行。
【七七】以上の五特勝は身念處觀に屬す。
【七八】大正本は息とあれど元、明、宮本によりて身と改む。
【七九】第六、受喜。
【八〇】心心數とは、心王、心所有法のこと。
【八一】第七、受樂。
【八二】大正本は愛樂とあれど宮本によりて受と改む。
【八三】樂痛は、樂受の古譯。
【八四】第九、心作喜。
【八五】以上の四は受念處觀に屬す。
【八六】第十、心作攝。
【八七】第十一、心解脫。
【八八】蒼耳は、ミミナグサのこと。
【八九】以上の二は心念處觀に屬す。
【九〇】第十二、觀無常。
【九一】第十三、觀出散。

爲す。
[六二]風門に住するを捨て麁なる觀法を離る。麁の觀法を離れて息の無常を知れば、此を轉觀と名く。五陰の無常を觀じ、亦入息出息の生滅無常を念ず。初頭の息を見るに從來する所なく、次後の息を觀ずるも亦跡處なし。因縁合するが故にあり、因縁散ずるが故になし。是を轉觀法と名け、[六三]五蓋及び諸の煩惱を除滅す。先に止觀を得と雖も煩惱の不淨心雜はる、今此の淨法において心獨り清淨なるを得。
[六四]復た次に前には異學相似の行道を觀じて息の入出を念ずるも、今は[六五]無漏道相似の行善有漏道なり。是を清淨と謂ふ。復た次に初に身念止の分を觀じ、漸漸に一切の身念止(を觀ず。)次に痛と心との念止を行ず。是の中、非清淨にして無漏道遠きが故に[六六]今法念止の中に、[六七]十六行を觀じて入出息を念じ、煖法・頂法・忍法・世間第一法・[六八]苦法忍乃至無學盡智を得。是を清淨と名く。
[六九]是の十六分中、[七〇]初めの入息分に[七一]六種安那般那行あり。[七二]出息分にも亦是くの如し。[七三]一心に息の入出、若しくは長若しくは短を念ず。譬へば人の怖れ走り、山に上り、若しくは重きを擔負し、若しくは上氣するが如く、是くの如きは是れ息短たるに比す。若し人極まる時安息歡喜を得、又は利を得て獄中より出づろが如く、是くの如きは息長しと爲す。一切の息は二處に[七四]隨ふ。乃ち若しくは長若しくは短の處なり。是の故に息長息短と言ふ。是の中亦安那般那の六事を行ず、[七五]諸息の身に遍きを念ずるにも、亦息の出入を念じ、悉く身中の諸の出息入息を觀ず。(入息には)身中乃至足指、遍至し諸の毛孔に遍きこと、水の沙に入るが如きを覺知し、息の出づるには足より髮に至るまで、諸の毛孔に遍きこと亦水の沙に入るが如きを覺知す。譬へば橐囊に入出ともに皆滿つるが如し。口鼻より風の入出するも亦爾り。身を觀ずるに周遍して風の行く處を見ること、藕根の孔の如く、亦魚網の如し。復た次に獨り口鼻より息の入出するを觀ずるのみに非ず、一切の毛孔及び九孔中にも亦

【六二】第五、轉(Vivartanā)。
【六三】蓋(Nivaraṇa)とは、蓋覆の義にして煩惱のこと、貪欲(Kāma-cchanda)、瞋恚(Vyāpāda)、惛眠(Styāna-middha)、掉悔(Auddatya-kaukṛtya)、疑(Vicikitsā)なり。
【六四】第六、淨。
【六五】有漏道(Sāsrava-mārga)は、世間道とも云ふ、煩惱未斷時に於ける修行道にして、見道卽ち預流果以前なり。無漏道(Anāsrava-mārga)は、出世間道とも云い、煩惱の一部分を斷じたる以後の修行道にして、見道以後なり。
【六六】念止(Smṛtyupasthāna)は、念住とも云い、廣くは念處と譯す、身・受・心・法の四に對して次での如く不淨・苦・無常・無我と觀じて、淨・樂・我・常の四顚倒を滅する觀法なり。本文中に痛(Vedanā)とあるは受の古譯なり。此の四念處觀は小乘にて云へば五停心觀の次ぎ、四善根位の前に位する修行法なり。之れを四善根と云ふ、詳しくは本經下卷に至りて知れ。
【六七】十六行は、四諦十六行相のことなるべし、本經下卷に說明あり。
【六八】苦法忍、無學盡智も亦下卷に至りて知るべし。

に、譬へば水を含めば水暖く、水を吐けば水冷ゆるが如し、冷者還た暖まり、暖者還た冷ゆるが故に。答へて曰く、爾らず。內心動くが故に息の出づるあり、出で已つて卽ち滅す。鼻口外を引けば則ち息の入るあり。入るが故に息滅し、亦將つて出づることなく、亦將つて入ることなし。復た次に少と壯と老人とにては、少者は入息長く、壯者は入出息等しく、老者は出息長し、是の故に一息に非ず。復た次に臍邊に風發し、相似て、相續して、息出でて口鼻の邊に至り、出で已つて便ち滅す。譬へば[五八]橐囊中の風は開く時卽ち滅するが如し。若し口鼻の因緣を以て之を引けば則ち風入る。是れ新因緣の邊より生ずるなり。譬へば扇の衆緣合するが故に則ち風あるが如し。是の時入出息は因緣によりて有り、虛誑不眞にして生滅無常なるを知る。是くの如く思惟し、出息は口鼻の因緣より之を引きて有り、入息の因緣は心動じて生ぜしむ。而も惑る者は知らずして以て我が息と爲す。息は是れ風にして外風と異ることなし。地・水・火・空も亦復た是くの如し。是の五大の因緣合するが故に識を生ず。識も亦是の如く我が有に非ざるなり。[五九]五陰・十二入・十八持も亦復た是くの如し。是の如く之を知つて息入息出を逐ふ。是を以て隨と名く。

[六〇]已に隨法を得ば當に止法を行ずべし。止法とは數と隨との心極りて、意を風門に住せしめて、入出の息を念ずるなり。問うて曰く、何を以ての故に止なりや。答へて曰く、諸思覺を斷ずるが故に、心散せざるが故に、數と隨との息の時は、心不定にして心多劇なるが故に。止なれば則ち心閑にして事少なきが故に、心一處に住するが故に息の出入を念ず。譬へば門を守る人の門邊に住して人の入出を觀ずるが如し。止の心も亦爾なり。息出づる時は臍心胸咽より口鼻に至り、息入る時は口鼻咽胸心より臍に至るを知る。是くの如く心を一處に繫くれば、是を名けて止と爲す。

[六一]復た次に心は止法の中にて觀に住す。入息の時の五陰は生滅異り、出息の時の五陰も生滅異る。是くの如く心亂るれば便ち除却し、一心に思惟して觀をして增長せしめよ。是を名けて觀法と

【五八】明本は鞴囊に作る。

【五九】五陰（Pañca-skandī）は、五蘊のこと、十二入Dvādaśāyatanāni）は、十二處のこと、十八持（Aṣṭadaśadhā-tava）は、十八界のこと。

【六〇】第、三止（Sthāna）。

【六一】第四、觀（Upalakṣaṇi）。

れ今日當に此を作すべし、明後當に是を作すべしと言ふこと莫れ。是くの如く[五五]正觀して種種に不死覺を除く。

是くの如く先づ麁の思覺を除き、却て後に細の思覺を除き、心清淨を生じて正道を得、一切の結使盡きて、是より安隱の處を得ん。是を出家の果と謂ふ。心自在を得、三業は第一清淨にして復た受胎せず、種種の經を讀んで多聞し、是の時報果を得。是くの如く得る時、空しからずして魔王の軍を破り、便ち第一勇猛を得て、世界の中に名を稱せられん。煩惱に將ゐ去らるれば、是を健と名けず。能く煩惱の賊を破り、三毒の火を滅し、涼樂清淨にして、涅槃林中に安隱高枕し、種種の禪定・根・力・七覺の清風四起し、衆生の三毒の海に沒するを顧念す。德妙の力是くの如きを乃ち名けて健と爲す。是くの如き等の散心には、當に阿那般那を念じて六種法を學び、諸の思覺を斷ずべし。是を以ての故に數息を念ず。

問うて曰く、若し餘の不淨念佛[五六]等の四觀中にも、亦思覺を斷ずるを得るや、何を以ての故に獨り數息のみなるや。答へて曰く、餘の觀法は寛にして失し難きが故に、數息の法は急にして轉じ易きが故に。譬へば牛を放つに、牛は失し難きを以ての故に、之を守るに事少きが如く、獼猴を放てば失し易きが故に、之を守るに事多きが如し。此れも亦是の如し、數息の心數は少時も他念を得ず、少時も他念せば則ち數を失す。是を以ての故に初め思覺を斷ずるには應に數息すべし。

[五七]已に數法を得ば當に隨法を行じて諸の思覺を斷ずべし。入息竟りに至りて當に隨つて一を數ふること莫るべし。出息竟りに至りて當に隨つて二を數ふること莫るべし。譬へば負債の人を、債主の隨逐して初めて捨離せざるが如し。是くの如く思惟せよ、是の入息は是れ還た出でて更に異あり。出息是れ還た入つて更に異あり、是の時入息異り出息異るを知る。何を以ての故に、出息は暖にして入息は冷なり。問うて曰く、入出息は是れ一息なり。何を以ての故に、出息還つて更に入るが故

【五五】元、明、宮本は種々に正觀してと作す。

【五六】大正本は四等觀とあるも、元、明、宮本によりて等四觀と改む。

【五七】第二隨(Anugama)。

るも是れ信ずべからず。復た次に人睡る時必らず覺めんことを期せんと欲するも、是の事信じ難く。受胎より老に至るまで死事恒に來りて死の時節を求む。常に死せずと言ふも云何んが信ずべけん。譬へば殺賊の刀を拔き箭を注いで、常に人を殺さんことを求め、憐愍心なきが如し。人世間に生るれば死の力最も大なり、一切は死力の强きに勝るものなし。若しくは過去世の第一妙人も能く此の死を脫する者なし。現在も亦大智人の能く死に勝つ者なし。亦軟語もて求むるも非なり、巧言もて誑して避脫し得べきに非ず。亦持戒精進するも此の死を却くるに非ず。是を以ての故に當に知るべし、人は常に危脆にして怙恃すべからず。常を計して我が壽久しく活すと信ずること莫れ。是の諸の死賊は常に人を將ゐて去る。老ひ竟るを待つて然る後當に殺すにあらず。阿羅漢の諸覺に惱まさるる弟子に敎へて言ふが如し。汝何を以てか厭世入道を知らざるや、何を以てか此の覺を作すや。人未だ生ぜずして便ち死するあり、生ずる時死する者あり、乳餔の時なるあり、斷乳の時なるあり、小兒の時なるあり、盛壯の時なるあり、老時なるあり。一切時の中間に死法界あり。譬へば樹華の華時に便ち墮つるあり、果時に墮つるあり、未だ熟せざる時に墮つるあるが如し。是の故に當に知るべし。勤力精進して安隱の道を求むるも、大力の賊共に住して信ずべからず。此の賊は虎の巧に身を覆藏するが如し。是くの如く死賊常に人を殺さんことを求む。世界の所有は空にして水泡の如し、云何んが當に時を待つて道に入ると言ふべけんや。何ぞ誰か能く汝は必らず老いて行道を得べしと證言せんや。譬へば嶮岸の大樹の上に大風あり、下に大水ありて其の根土を崩すが如し。誰か當に此の樹の久住するを得るを信ずべき者ならんや。人命も亦是くの如く少時も信ずべからず。父は穀子の如く、母は好田の如く、先世の因緣罪福は雨澤の如く、衆生は穀の如く、生死は收刈の如し。種種諸の天子人王の智德は、天王の天を佐けて諸の(五四)阿須倫軍を鬪破し、種種の樂を受けて極めて高大にして明らかなるも、還つて黑闇に沒在するが如し。是を以ての故に命活を信じて、我

【五四】阿須倫(Asura)は、多く阿修羅と書く、非端正の意なり、惡形惡心にして戰を好み、天人に似て天人に非らず、三界五道を六道に開く時は、之れを獨立せしめて六道となす。

生の時は先世の非親も今は遇ひて和合して親と作る。若し死時に當つては復た非親なり。是くの如く思惟して當に親に著すべからず。人の兒の死するに、一時三處に父母俱時に啼哭するが如し。[49]天上の父母妻子を誑らかす。人中に亦誑を爲し、龍中の父母も亦誑を爲す。是の如く種種に正觀して親里覺を除く。

[50]問うて曰く、云何んが國土覺を除くや。答へて曰く、行者若し是の國土は豐樂安隱にして諸好人多しと念ぜば、恒に國土覺の纒の爲に牽かる。將に罪處を去らんとすと、心を覺すること是くの如くせよ。若し有智の人は應に念著すべからず。何を以ての故に、國土は種種の過罪に燒かれ、時節轉ずるが故に。亦飢餓ありて、身疲極するが故に。一切の國土は常に安きものなし。復た次に老病死の苦は國として有らざるなし。是の間の身苦より去りて彼の處の身苦を得。一切の國土に去るも苦ならざるはなし。假ひ國土の安隱豐樂なるあるも、而も結惱ありて心に苦患を生ず。是れ好ましき國土に非ず。能く雜惡の國土を除き、能く結使を薄くし心をして惱まざらしむれば、是を好ましき國土と謂ふ。一切衆生に二種の苦あり。身苦と心苦となり。常に苦惱ありて國土に此の二惱なきことあるなし。復た次に國土の大寒なるあり、國土の大熱あるあり、國土の飢餓あるあり、國土の多病あるあり、國土の多賊あるあり、國土の王法の不理なるあり。是くの如き種種の國土の惡あり、心應に著すべからず。是くの如く正觀して國土覺を除く。

[51]問うて曰く、云何んが不死覺を除くや。答へて曰く、應に行者に教ふべし。若しくは好家に生じ、若しくは[52]種族、才技、力勢人に勝るるとも一切念ふこと莫れ。何を以ての故に、一切死時には老少貴賤才技力勢を觀ぜず。是の身は是れ一切憂惱の諸の[53]因緣の本にして、自ら少多の壽を見るのみ。若し安隱を得ば是れを癡人と爲す。何を以ての故に、是れを憂惱の因と謂ひ、是れは四大に依る(が故に)四大造色は四毒蛇の如く共に相應せず、誰か安隱を得る者ならんや。出息の入るを期す

【四九】「天上の父母妻子……亦誑を爲す」を元、明、宮本には「天上の父母妻子謂く、人中は虛誑と爲すと。龍中の父母も亦人中を以て虛誑と爲す」と作せり。
【五〇】五、國土覺。
【五一】六、不死覺。
【五二】大正本には種族子とあれど、元、明、宮本によりて子を省けり。
【五三】同じく因緣因とあるを、三本によりて因緣本と改む。

是くの如く種種に惱覺を呵し、是くの如く種種に正觀して惱覺を除け。

【四八】問うて曰く、云何んが親里覺を除くや。答へて曰く、應に是の如く念ずべし。世界生死の中にて自業の緣牽く、何者か是れ親にして何者か非親なるや、但だ愚癡を以ての故に橫に著心を生じ、計して我が親となす。過去世の非親は親と爲り、未來世の非親は親と爲る。今世は是れ親なるも過去は非親なり。譬へば鳥の栖むに暮には一樹に集り晨には飛んで各〻緣に隨つて去るが如し。家屬親里も亦復た是くの如し。世界の中に生じて各各自ら心を異にす。緣會が故に親、緣散ずるが故に疎なり。定實あることなく、因緣果報もて共に相親近す。譬へば乾沙を手に緣つて團握するが如し。捉ふるに緣るが故に合し、放つに緣るが故に散ず。父母子を養はば老いて當に報を得べし。子は懷抱養育を蒙るが故に應に報ずべし。若し其の意に順ずれば則ち親にして、若し其の意に逆へば是れ賊なり。親の益する能はずして反つて害するあり、非親の損ずるなくして大いに益するあり。人は因緣を以ての故に愛を生ず。愛の因緣の故に更に斷ず。譬へば畫師の婦女の像を作り、還つて自ら愛著するが如し。此も亦是くの如し。自ら染著を生じて外に染著す。過去世の中に汝に親里あるも、今世に汝に於て復た何の作す所あらん。汝も亦過去の親を益する能はず。過去の親は汝を益せず。兩りながら相益せず。空しく之を念じて是れ親なり非親なりと爲す。世界中不定無邊なり。阿羅漢の新に出家して親を戀ふる弟子に敎へて言ふが如し。惡人の食を吐して更に還つて噉はんと欲するが如く、汝も亦是くの如し。汝は已に出家を得。何を以て還た愛著を欲するや。是の剃髮染衣は是れ解脫の相なり。汝は親里に著して解脫するを得ず還つて愛の爲に繫がる、三界は無常にして流轉不定にして、若しくは親、非親なり。今親里なりと雖も久久にして則ち滅す。是くの如く十方の衆生廻轉し親里は定りなし。是れ我が親に非ず。人の死せんと欲する時心なく識なし。直視して轉ぜず、氣を閉ぢて命絕すること、闇坑に墮するが如し。是の時親里家屬安くに在りや。若し初

【四八】四、親里覺。

世に樂を得て後(世)も亦然り。得道して常樂なる是れ涅槃なり。若し心に不善覺を積聚せば、自ら己が利を失し幷に他を害す。[四三]是を不善は彼我の失なりと謂ふ。他に淨心あるも亦復た沒す。譬へば阿蘭若道人の、手を擧げ哭して賊我を劫むと言ふが如し。

[四四]有る人問うて言く、誰か汝を劫むるや。答へて言く、財賊は我れ畏れず。我れ財を聚めて世利を求めず。誰か財賊あつて能く我を侵さん。我は善根諸の法寶を集むるに、覺觀の賊來つて我が利を破る。財賊は避くべし、藏處多ければなり。善を劫むるの賊來らば避くる處なし。是の如く種種に瞋恚を呵し、是の如く種種に正觀して瞋恚覺を除け。

問うて曰く云何んが惱覺を除くや。

[四五]答へて曰く衆生百千種の諸病更互に恒に來り惱まし、死賊捕伺して常に殺さんと欲し、無量の衆苦ありて自ら沈沒す。云何んが善人復た惱を加へん。讒謗し謀害して慈仁なくんば、未だ彼を傷づくるに及ばずして身を殃せらる。俗人の惱を起すは是れ恕すべし、此の事は世法惡業の因なるも、亦自ら我れ修善すと言はず。淸淨の道を求むる出家人にして、瞋恚を生じ嫉心を懷かば、淸冷の雲の中に毒火を放つものなり。當に知るべし此の惡の罪は極めて深し。阿蘭若の人嫉妬を興さば、阿羅漢の他心智あるありて敎誡苦責すらく、汝何ぞ愚にして、嫉妬もて自ら功德の本を破るやと。若し供養を求めば當に自ら、諸の功德の本を集めて身を莊嚴すべし。若し持戒禪多聞ならずんば、虛假の染衣もて法身を壞す、實に是れ乞兒弊惡の人なり。云何んが供養を求めて身を利せんや。飢渴寒熱百千の苦あり、衆生は常に此の諸惱に[四六]困す。身心の苦厄は窮盡なし。云何んが善人諸惱を加へんや。譬へば病瘡に針を以て刺すが如し。亦獄囚の[四七]考せられて未だ決せざるが如し、苦厄身に纏ひ衆惱集るを、云何んが慈悲もて更に劇しからしめんや。

【四三】是謂不善彼我失の七字を、元、明、宮本には、旣自心中善法失となす。

【四四】元、明本に於ては、有人問言以下、賊來無處避まで、前に續いて七言八句の偈文となす。

【四五】三、惱覺。

【四六】元、明、宮本は困の字に作る。

【四七】同じく拷に作る。

【四一】　一、欲覺。

多欲の人を見るに欲を求むるは苦なり。　之を得て守護するも亦是れ苦なり、之を失ひて憂惱するも亦大苦なり、心に得んと欲する時滿つことなきも苦なり、欲は無常空にして憂惱の因なり、衆共に此れあれば當に覺して棄つべし。　譬へば毒蛇の人の室に入るが如し、急に之を除かずんば害必らず至る。　不定不實不貴重なるを、種種に欲求し顚倒して樂しむ。　六神通の阿羅漢、教誨して弟子を覺せしめんと欲して言ふが如し。　汝は破戒せず戒清淨にして、女人と共に同室に宿せされ。　欲結の毒蛇心室に滿ち、纏綿愛喜して相離れず。　既に身戒を知りて毀つべからず、汝の心は常に欲火と共に宿す、汝は是れ出家求道の人なり、何に緣つてか心を縱にして乃ち是の如きや。　父母汝を生養し長育し、宗親の恩愛共に成就し、咸皆涕泣して汝を戀惜するも、汝は能く捨離して顧念せざれ。　而も心常に欲覺中に在りて、欲と共に嬉戲して厭心なく、常に欲火と共に一處ならんを樂ひ、歡喜し愛樂して暫らくも離れず。

是の如く種種に欲覺を呵し、是の如く種種に正觀して欲覺を除け。　問ふて曰く、云何んが瞋恚覺を滅するや。　答へて曰く。

【四二】　二、瞋恚覺。

胎中より來生して常に苦なり、是の中衆生瞋惱すること莫れ。　若し瞋惱を念はば慈悲もて滅せよ、慈悲と瞋惱とは相比せず、汝慈悲を念ずれば瞋惱は滅す。　譬へば明闇の同處せざるが如し。　若し淨戒を持して瞋恚を念はば、是の人は自ら法利を毀破せん。　譬へば諸象の水に入つて浴し、復た泥土を以て身に塗坌するが如し。　一切は常に老病死あり、種種に鞭箠せられて百千の苦あり。　云何んが善人は衆生を念じて、而も復た加益するに瞋惱を以てせん。若し瞋恚を起して彼を害せんと欲せば、未だ前人に及ばざるに先づ自ら燒く。　是の故に常に念じて慈悲を行じ、瞋惱の惡念を内に生ぜざれ。　若し人常に念じて善法を行はば、是の心常に佛の所念を習ふ。　是の故に應に不善を念ずべからず。　常に善法を念じて心を歡樂せば、今

[三二]第四思覺を治する法門

若し[三三]思覺偏へに多ければ當に[三四]阿那般那三昧の法門を習ふべし。三種の學人あり。或は初習行、或は已習行、或は久習行なり。若し初習行ならば當に敎へて言ふべし。一心に念じて入息出息を數ふ。若しくは長若しくは短、一を數へて十に至る。若し已習行ならば當に敎へて言ふべし。一を數へて十に至り息の入出に隨つて、[三五]念と息とを俱に心の一處に止む。若し久習行ならば當に敎へて言ふべし。[三六]數・隨・止・觀・轉觀・淸淨の阿那般那三昧六種門十六分なり。

[三七]云何んが數と爲す。一心に入息を念じ入息竟りに至らば一を數へ、出息竟りに至らば二を數ふ。若し未だ竟らずして數ふるは非數と爲す。若し二を數へて九に至つて誤らば更に一より數へ起す。譬へば算人の一と一を二と爲し、二と二を四と爲し、三三を九と爲すが如し。問うて曰く、何を以ての故に數ふるや。答へて曰く、無常觀を得易きが故に、[三八]亦諸の思覺を斷ずるが故に、一心を得るが故に。身心の生滅無常にして相似て相續するは見難きも、入息出息の生滅無常なるは知り易く見易きが故に。復た次に心を數に繫在すれば諸の思覺を斷ず。思覺とは欲思覺・恚思覺・惱思覺・親里思覺・國土思覺・不死思覺なり。淨心を求めて正道に入らんと欲する者は、先づ當に三種の麁思覺を除却し、次に三種の細思覺を除く。六覺を除き已つて當に一切淸淨の法を得べし。譬へば採金の人の先づ麁なる石砂を除き、然る後に細なる石砂を除き、次第に細なる金砂を得るが如し。問うて曰く、云何んが麁病と爲し、云何んが細病と爲す。答へて曰く、欲・瞋・惱覺是の三を麁病と名け、親里・國土及び不死覺是の三を細病と名く。此の覺を除き已つて一切淸淨の法を得。問うて曰く、未だ得道せざる者は[三九]結使未だ斷ぜず。六思覺强ければ從つて心は亂を生ず。云何んが能く除かんや。答へて曰く、心に世間を厭ひ正觀して能く遮す、而も未だ拔くこと能はざるも、後に[四〇]無漏道を得て能く結使の根本を拔く。何をか正觀と謂ふ。

【三二】第四門は數息觀（Ānāpāna-smṛti）を示す。

【三三】思覺の覺は新譯の尋（Vitarka）に當り、推理分別の心作用なり。

【三四】阿那般那（Ānāpāna）に就いては修行道地經卷五の脚註を見よ。

【三五】念（Smṛti）は、憶念する心作用なり。

【三六】數息觀の六妙門と十六特勝のこと、以下に說明あり、尙ほ修行道地經卷五、俱舍論廿二卷、婆沙論廿六卷、顯正理論六十卷等に說明あり。

【三七】以下數息觀の六妙門を說く、第一、數（Gaṇanā）。

【三八】此の一段は六覺を除くことを說く、六覺とは六種の惡覺作用にして、成實論・華嚴經等には八覺を說けり。

【三九】結使は、煩惱の異名にして三界に結び付け人を使役するの義なり。

【四〇】無漏（Anāsrava）とは、煩惱の滅したる境界を云ふ、無漏道とは、十六心見道の位に於て煩惱を滅する時を云ふ。本經下卷に說明あり。

言ふべし。行は識に緣たり、識は名色に緣たり。名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり。愛は取に緣たり、取は有に緣たりと。是くの如く思惟して外を念せしめず。外に諸緣を念せば之を攝して還らしむ。若し久習行ならば當に敎へて言ふべし。無明は行に緣たり、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老死に緣たり。是くの如く思惟して外を念せしめず。外に諸緣を念せば之を攝して還らしむ。問うて曰く、一切智人は是れ明あり。一切餘人は是れ無明なり。是の中云何んが無明なるや。答へて曰く、無明とは一切不知を名く。此の中無明は能く後世の有を造る。有者はなく無者はあり。諸善を棄てて諸惡を取る。實相を破つて虛妄に著す。無明相品中に說くが如し。

自を蓋ふの法を明らめず、道德の業を知らず、而して結使の因と作ること、火の鑽燧より生ずるが如し。　惡法に心著し、善法を遠棄す。　衆生の明を奪ふの賊は、去來の明も亦劫む。
常樂我淨想を、五陰中に計し、苦習盡道の法も、亦復た知ること能はず。　種種惱の險道を、盲人は中に入つて行く。　煩惱の故に業集まり、業の故に苦流迴す。　取るべからざるを取り、取るべきを反つて棄つ。　闇を馳せて非道を逐ひ、株を蹴つて地に蹶す。　目あつて而も慧なし、其れ喩ゆるに亦是くの如し。　是の因緣滅するが故に、智明なること日の出づるが如し。

是くの如く略して無明を說く。乃至老死も亦是くの如し。問うて曰く、佛法の中にて因緣は甚深なり。云何んが癡多き人能く因緣を觀ずるや。答へて曰く、二種の癡人あり。一には牛羊の如し。二には種種邪見もて癡惑闇蔽す。邪見癡人は佛之が爲に說く、當に因緣を觀じて以て三昧を習ふべしと。

するに、是の人は過去世の時に或に是れ我が親善なり。豈に今の瞋を以て更に怨惡を生ぜんや。我れ當に彼を忍べば是れ我が善利たるべし。又行法を念ずるに、仁德含弘にして、慈力無量なり。此れ失すべからず。復た思惟して言はく、若し怨憎なくんば何によつてか忍を生ぜん。忍を生ずるは怨に由る。怨は則ち我が親善なり。復た次に瞋の報は最も重く、衆惡中の上にして是に過ぐるあることなし。瞋を以て物に加ふれば其の毒制し難し。他を燒かんと欲すと雖も實に是れ自ら害するなり。復た自ら念じて言く、外に法服を被り內に忍行を習ふ。是を沙門と謂ふ。豈に惡聲此を縱にし、色を變じ心を〔二八〕憋すべけんや。復た次に〔二九〕五受陰は衆苦の林藪、受惡の的なり。苦惱惡來れば何に由つてか免るべけん。刺の身を刺すが如く苦刺無量なり。衆怨甚だ多く除くを得べからず。當に自ら守護して忍の革屣を著くべし。佛の言ふが如し、曰く。

瞋を以て瞋に報ぜば、瞋還つて之に著く。　瞋恚報ぜずんば、能く大軍を破る。　能く不瞋恚なれば、是れ大人の法なり。　小人は瞋恚して、動かし難きこと山の如し。　瞋は重毒たり、殘害する所多し。　彼を害することを得ずして、自ら害して乃ち滅す。　瞋は大暝たり、目あるも視ることなし。　瞋は塵垢たり、淨心を染汚す。　是の如き瞋恚は、當に急に除滅すべし。　毒蛇室に在り、除かずんば人を害す。　是くの如きの種々、瞋毒は無量なり。　常に慈心を習つて、瞋恚を除滅せよ。

是を慈三昧門と爲す。

〔三〇〕第三、愚癡を治する法門

若し愚癡偏へに多ければ當に三種の思惟法門を學ぶべし。或は初習行、或は已習行、或は久習行なり。若し初習行ならば當に敎へて言ふべし。〔三一〕生は老死に緣たり、無明は行に緣たりと。是くの如く思惟して外を念ぜしめず。外に諸緣を念ぜば之を攝して還らしむ。若し已習行ならば當に敎へて

【二八】 憋は、性急の狀。
【二九】 五受陰は、新譯にては五取蘊 Pañcopādāna-skandha) と云ふ、色・受・想・行・識なり。
【三〇】 第三門は因緣觀（Pratītyasamutpāda-smṛti）を示す。
【三一】 十二因緣に就いては下卷に說明あり。

觀ずるが故に淨觀と名く。上の如き三相皆自ら之を知り、他所を見ず。上三品の者初習行は未だ發意せず、已習行は三四身の修にして、久習行は百年身學なり。

二七 第二、瞋恚を治する法門

若し瞋恚偏へに多ければ、當に三種の慈心法門を學ぶべし。或は初習行、或は已習行、或は久習行なり。若し初習行ならば當に教へて言ふべし、慈を親愛のものに及ぼせと。云何んが親しきものに及ぼし、親しきものに樂を與へんと願ふべきや。(曰はく)行者若し種種なる身心の快樂を得、所謂、寒き時に衣を得、熱き時に凉を得、飢渇に飲食を得、貧賤に富貴を得、行極まる時止息を得ば、是くの如き種種の樂を親愛の得んことを願ひ、繫心して慈に在き異念せしめず、もし諸緣を異念せば之を攝して還らしむるなり。若し已習行ならば、當に教へて言ふべし。慈を中人に及ぼせと。云何んが中人に及びて樂を與へんと願ふべきや。(曰く)行者若し種種なる身心の快樂を得ば、中人の得んことを願ひ、繫心して慈に在き異念せしめず。諸緣を異念せば之を攝して還らしむ。若し久習行ならば當に教へて言ふべし。慈を怨憎のものに及ぼせと。云何んが彼に及んで其の樂を與ふるや。(曰はく)行者若し種種なる身心の快樂を得ば怨憎のものも得んことを願ひ、親しきものと同じきことを得、同一の心を得て心大いに清淨なるべし。親と中と怨とを等しくして廣く世界に及ぼし、無量の衆生をして皆樂を得しめ、十方に周遍して同等にして大心清淨ならざるなし。十方衆生を見ること皆自らを見るが如く、一目前に在りて了了に之を見て快樂を受くることを得。是の時卽ち慈心三昧を得るなり。

問うて曰く、親愛と中人とは樂を得せしめんと願ふも、怨憎惡人は云何んが憐愍して復た樂を與へんことを願ふや。答へて曰く、應に彼に樂を與ふべし。所以者何となれば、其の人更に種種の好き淸淨法の因あり。我れ今云何んが豈に一怨を以つての故に其の善を沒すべけんや。復た次に思惟

【二七】第二門は慈心觀(Maitri-smṛti)を示す。

今に然らず。狗の糞を食して之を謂ひて淨と爲すも、人を以て之を觀ずるに甚だ不淨と爲すが如し。是の身は内外一として淨處なし。若し身外に著せば、身外の薄衣擧身之を取つて纔かに篠の如きを得るも是れ亦不淨なり。[二五]何に況んや身内の三十六物をや。復た次に身の因縁を推すに種種不淨なり。父母の精血不淨合成し、旣に身と爲るを得ば常に不淨を出す。衣服床褥も亦臭く不淨なり。何に況んや死處をや。是を以て當に知るべし。生死内外は都て是れ不淨なることを。

復た次に觀に亦三品あり。或は初習行、或は已習行、或は久習行なり。若し初習行ならば當に教へて言ふべし。皮を破るの想を作して不淨を除却し、當に赤骨人を觀ずべし。意を繫して觀行して外念せしめず。外に諸緣を念ずれば念を攝して還らしむ。若し已習行ならば當に教へて言ふべし。想もて皮肉を却け、盡く頭骨を觀じて外念ぜしめず。外に諸緣を念ぜば念を攝して還らしむ。若し久習行ならば當に教へて言ふべし。身中一寸、心にて皮肉を却け五處に繫く。(所謂る)頂・額・眉間・鼻端・心處なり。是くの如く五處に意を住して骨を觀じて外念せしめず。外に諸緣を念せば念を攝して還らしむ。常に念じて心を觀じ心出づれば制持す。若し心疲極せば念を所緣に住せしめて、外を捨てて守り住すべし。譬へば獼猴の繫がれて柱に在り極まつて乃ち住息するが如し。所緣は柱の如く、念は繩鎖の如く、心は獼猴に喩ふ。亦乳母の常に嬰兒を觀て墮ち落さしめざるが如し。行者の心を觀ずるも亦復た是くの如し。漸漸に心を制して緣處に住せしめよ。若し心久しく住せば是れ應に禪法なるべし。若し禪定を得れば卽ち三相あり。身體和悅し柔軟輕便にして、白骨の流光猶ほ白珂の如く、心靜住することを得。是を[二六]觀淨と名く。是の時便ち色界中の心を得。是を初學の禪法、色界の心を得と名く。心禪法に應ぜば卽ち是れ色界の法なり。心此の法を得ば身は欲界に在るも、四大極めて大柔軟快樂に、色澤淨潔、光潤和悅にして悅樂と謂ふ。二には向の骨觀の白骨相中の光明遍照して淨白色なり。三には心一處に住す、是を淨觀と名く。肉を除いて骨を

【二五】是不淨の下に割註あり曰はく「經文二門に至つて初む」。

【二六】元、明、宮本には淨觀となす。

惟して因縁を觀ずる法門もて治し、若し思覺多き人は息を念ずる法門もて治し、若し等分多き人は念佛法門もて治す。諸の是くの如き等の種種の病は種種の法門もて治す。

第一、貪欲を治する法門

[二一]婬欲多き人は不淨觀を習ふ。足より髮に至り不淨充滿す。[二二]髮・毛・爪・齒・薄皮・厚皮・血・肉・筋・脈・骨・髓・肝・肺・心・脾・腎・胃・大腸・小腸・屎・尿・洟・唾・汗・涙・垢・坋・膿・腦・胞・膽・水・微膚・脂肪・腦膜、身中に是くの如き種種の不淨あり。復た次に不淨觀心は青瘀・膖脹・破爛・血流塗漫・臭膿噉食・不盡骨散燒焦を觀ず。是を不淨觀と謂ふ。復た次に多婬の人は七種の愛あり。或は好色に著し、或は端正に著し、或は儀容に著し、或は音聲に著し、或は細滑に著し、或は衆生に著し、或は都て愛著す。若し好色に著せば當に青瘀觀法を習ふべし。黄・赤・不淨色等も亦復た是くの如し。若し端正に著せば當に膖脹身散觀法を習ふべし。若し儀容に著せば當に新死血流塗骨觀法を習ふべし。若し音聲に著せば當に咽塞命斷觀法を習ふべし。若し細滑に著せば當に[二三]骨見及び乾枯病觀法を習ふべし。若し衆生を愛せば當に六種の觀を習ふべし。若し都て愛著せば一切遍觀す。或は時に種種を作さば更に異觀を作す。是を不淨觀と名く。

問うて曰く、若し身不淨にして臭腐死者の如くんば、何に從つてか著を生ぜん。(答へて曰く)若し淨身に著せば臭腐爛身も亦當應に著すべし。若し臭身に著せずんば淨身も亦應に著せざるべし。二身等しきが故に。[二四]若し二の實淨を求むれば倶に得べからず。人心狂惑して顚倒の爲に覆はれて、非淨を淨と計す。若し倒心破すれば便ち實相法觀を得て、便ち不淨は虚誑にして眞ならざるを知る。復た次に死屍は火なく命なく識なく諸根あることなし。人之を諦知せば心に著を生ぜず。身に暖あり命あり識あり諸根完具するを以て心倒惑して著す。復た次に心、色に著する時は謂ふて以て淨と爲せども、愛著心息めば即ち不淨と知る。若し是れ實に淨ならば應當に常に淨なるべし。而も

【二一】第一門は不淨觀(Aśubha-smṛiti)を示す。
【二二】之れを身内の三十六物と云ふ。但し經論により多少の相違あり。
【二三】元、明、宮本には骨觀に作る。
【二四】元、明、宮本には若を答に作る。

屑に緻せて陋謀し、語り難く悦び難く事へ難く可し難し。其の心猶の如くにして人の闕を宣べ、義論強梁にして折伏すべからず。傾動すべきこと難く親しみ難く沮み難し。毒を含みて吐き難く、受誦しては失せず。多能多巧にして心懈墮ならず、事を造すに疾速なり。望を持ちて語らず、意深くして知り難し。恩を受けては能く報じ、能く衆を聚めて自ら人を伏事することありて沮敗すべからず。能く事を究竟して干亂すべきこと難く、畏れ難ずる所少し。譬へば師子の屈伏すべからざるが如し。一向にして廻せず直造直進す。憶念して忘れず多慮思惟し誦習憶持す。能く多くを施與して小利をも廻せず。師と爲りては利根にして欲を離れ獨處して婬欲少し。心常に勝を懷き斷見に愛著す。眼は常に惡視し眞實に言語し說事分了なり。親友少く、事を爲すに堅く著し、堅く憶して忘れず。筋力多く肩胸姝大に廣額齊髮なり。心堅くして伏し難く疾く得て忘れ難し。能く自ら欲を離れ喜んで重罪を作す。是くの如きの種種是れ瞋恚の相なり。

[一九]愚癡人の相は多疑多悔にして懶墮無見なり。自滿して屈し難く憍慢にして受け難く、信ずべきを信ぜず信に非ざるを信ず。恭敬を知らず處處に信向し、多師輕躁にして無著搪突なり。事を作すに慮なく敎に反し渾戾す。親友を擇ばず自ら修飾せず、好んで異道を師とし善惡を別たず。受け難く忘れ易く鈍根にして懈怠なり。行施を訶謗し心に憐愍なく、法橋を破壞して事に觸れて了せず。目を瞋らして視ず智巧あることなし。多求悕望し、多疑少信なり。好人を憎惡し罪福の報を破り、善言を別たず過を解することと能はず。誨喩を受けずして親離憎怨し、禮節を知らずして喜んで惡口を作す。鬚髮・爪長く、齒・衣に垢多し、人の爲に驅役せられ、畏處を畏れず、樂處を憂ひ、憂處を喜び、悲處を反つて笑ひ、笑處を反つて悲しむ。牽かれて後隨ひ能く苦事を忍ぶ。諸味を別たず、離欲を得ること難く、罪を爲すこと深重なり。是くの如きの種種是れ愚癡相なり。

[二〇]若し婬欲多き人は不淨法門もて治し、若し瞋恚多き人は慈心法門もて治し、若し愚癡多き人は思

【一九】此の一段は愚癡人の相を說く。

【二〇】以下の五門を五門禪又は五停心觀(支那にて)と稱し一般に禪觀初入の階程となし、特に小乘有部にては修行の初門として重んずること、諸阿毘達磨論書に說くが如し。

一七 云何んが相を觀ずるや。若し多婬の相は人と爲り輕便にして、多く妻妾を畜へ多語多信にして、顏色和悅言語便易なり。瞋恨を少くし愁憂少し、多能技術にして好聞多識なり。文頌に愛著し善く能く談論し、能く人情を察し諸の畏怖多し。心房室に在つて、薄衣を好著し女色を渴欲し、臥具・服飾・香華に愛著す。心柔軟多く能く憐愍あり。言語を美にし好んで福業を修し、意に生天を樂ふ。衆に處しては難なく、人の好醜を別ち、婦女を信任し、欲火熾盛にして心に悔變多し。喜んで自ら莊飾し好んで綵畫を觀る。己物を慳惜し他財を僥倖す。好んで親友と結び獨處を喜ばず。所止に樂著し流俗を隨逐し、乍ち驚き乍ち懼れ志獼猴の如し。所見淺近にして事を作すに慮なく、輕志にして爲す所趣かに適意を得れば喜啼喜哭す。身體細軟にして寒苦に堪へず。阻ひ易く悅び易く事を忍ぶ能はず。少しく得れば大いに喜び、少しく失へば大いに憂ひ、自ら伏匿を發く。身溫かにして汗臭く薄膚細髮にして多皺多白なり。爪を剪り鬚を治し、白齒にして趣行し潔淨の衣を喜ぶ。學專一ならずして好んで林苑に遊び、多情多求にして意常見に著す。附近の有德には意を先んじて問訊し、喜んで他語を用ゐ强顏にして辱に耐ふ。事を聞いて速解し、所爲の事業、好醜を分別し苦厄を愍傷す。自ら大にして勝を好み侵欺を受けず。喜んで施惠を行ひ善人を引接し、美飲食を得ては人と之を共にす。近細に存せずして志遠大に在り。眼は色欲に著し事は究竟せず、遠慮あることなし。世の方俗を知り、顏色を觀察して人心を逆探し、美言辯慧にして結友固からず。頭髮稀疏にして睡眠を少くし、坐臥行立に容儀を失せず。所有の財物もて能く速に急を救ひ、尋いで後に悔惜し、義を受けては疾に得、尋いで復た喜んで忘る。擧動を惜み、自ら改變すること難く、離欲を得ること難く、罪を作すこと輕微なり。是くの如きの種種は是れ婬欲の相なり。

一八 瞋恚の人の相は憂惱多し。卒暴にして忿を懷き、身口麁獷にして能く衆苦を忍べども、事に觸れて可ばず、愁多く歡び少なくして能く大惡を作し、憐愍心なくして喜んで鬭訟を爲す。顏貌毀悴し

【一七】此の一段は多婬の相を示す、以下三段は修行道地經卷二、分別相品十九章の初三章の說と同じ。

【一八】此の一段は瞋恚の相を示す。

以て當に覺悟して、睡を以て心を覆ふこと莫く、[一〇]四供養の中に於て、量を知り止足を知るべし。大怖倶に未だ免れずんば、當に宜しく勤めて精進すべし。一切の苦至る時、悔恨するとも及ぶ所なし。[一一]衲衣もつて樹下に坐し、所應の如く食を得、貪味の爲の故に、自ら毀敗を致すこと勿れ。食過ぎれば味處を知るも、美惡は都て異ることなし。愛好すれば憂苦を生ず。是を以て愛を造ること莫れ。[一二]行業の世界の中にて、美惡更ざるなし。一切已に共に受く、當に是を以て自ら抑ゆべし。若し畜獸中に在らば、噬草を具味と爲す。地獄は鐵丸を呑み、燃ゆる熱劇しくして鐵を迸らす。若し[一三]薜荔中に在らば、膿吐火糞屎、涕唾諸の不淨、此を以て上味と爲す。若し天宮殿に在らば、七寶の宮殿中にて、天食[一四]蘇陀味あり、天女以て心を娯しましむ。人中の豪貴處にては、七饌衆味を備ふ。一切曾つて更し所なり。今復た何ぞ以て愛して、世界中に往返せんや。苦樂の事を更るを厭はば未だ涅槃を得ずと雖も、當に勤めて此の利を求むべし。

[一五]禪を學ぶの人、初めて師の所に至れば、師應に問うて言ふべし。汝持戒して淨なるや不や。重罪惡邪のものに非ざるや不やと。若し五衆の戒淨にして重罪惡邪なしと言はば、次に道法を教ふ。若し破戒すと言はば、應に重ねて問うて言ふべし。汝何戒を破るやと。若し重戒と言はば、師言く、人の耳鼻を截らるれば照鏡を須ゐざるが如し。汝且らく還り去り、精勤して誦經し勸化作福し、後世の道法の因緣を種うべし。此の生永く棄つ。譬へば枯樹の漑灌を加ふと雖も、華葉及び其の果實を生ぜざるが如し。若し餘戒を破らば、是の時應に如法懺悔を教ふべし。若し已に清淨にして、師若し[一六]天眼他心智を得ば、卽ち爲に病に隨つて道に趣くの法を說く。若し未だ通を得ずんば應當に相を觀ずべし。或は復た之に問ふ。三毒の中何者か偏重なるや、婬欲多きや、瞋恚多きや、愚癡多きやと。

【一〇】飮食・衣服・臥具・醫藥を四事供養と云ひ、比丘が放捨によりて正當に受用すべき物質なり。
【一一】衲衣とは、糞掃衣と同じ、廢物によりて作れる比丘の法衣なり。
【一二】行業の世界とは、煩惱業によりて流轉する世界のこと。
【一三】薜荔(Preta)は、餓鬼道のこと、六道、五道及三惡道の一なり。
【一四】蘇陀(Sūda)は、牛乳の類にして美味の飮料なり。
【一五】此の一段は初入の禪者は先づ持戒堅固なるべきを說く。
【一六】天眼通(Divyacakṣu)他心通(Paracittajñāna)。

らず。　死賊時を待たず、至れば則ち緣を脫るることなし。　鹿の渴して泉に赴き、已に飮まんとして方に水に向ふに、獵師慈惠なくして、飮み竟るを聽さずして殺すが如し。　癡人も亦是の如し、勤めて諸の事務を修するも、死至らば時を待たず。　誰か當に汝の護と爲るべけんや。　人心富貴を期し、五欲[7]の情未だ滿たず。　諸大國王の輩も、此の患を免るるを得ることなし。　仙人の呪箭を持するも、亦死生を免れず。　無常の大象は蟻蛭を踏むこと地と同じ。

且らく一切人を置く。　諸佛正眞覺は生死の流を越え度るも、亦復た常在ならず。　是を以ての故に當に知るべし。　汝の愛樂すべき所、悉く應に早く捨離して、一心に涅槃を求むべし。　後に身を捨てて死する時、誰か當に我を證知すべけんや。　復た法寶に遇ふことを得、及以遇はざる者も、久久に佛日出でて、大無明の瞑を破り、以て諸光明を放ちて、人に道と非道とを示す。　我は何所より來り、何處より生じ、何處に解脫を得るや。　此の疑は誰か當に明らむべきぞ。　佛聖一切智は、久遠にして乃ち出世す。　一心にして放逸すること莫くんば、能く汝の疑結を破らん。　彼は實利を樂はずして、弊惡心に好著するも、汝は衆生の爲に長く、當に實法の相を求むべし。　誰か能く死する時、所趣何道に從ふやを知らん。　譬へば風中の燈の滅する時節を知らざるが如し。　道法に至ること難からず、大聖指事して說き、智及び智處を說く。　此の二は外を假らず。　汝若し放逸ならずして、一心に常に道を行ずれば、久しからずして涅槃の第一常樂の處を得ん。　利智にして善人に親しみ、心を盡して佛法を敬し、穢れたる不淨の身を厭はば、苦を離れて解脫を得ん。　閑靜にして寂志[8]を修し、結跏して林間に坐し、心を撿して放逸ならずんば、意に悟つて諸緣を覺せん。　若し有中[9]を厭はず、安睡して自ら悟らず、世の非常を念ぜず、畏るべきを而も懼れず、煩惱深くして底なく、生死の海無邊なるに、苦を度るの舡未だ辦ぜずんば、安んぞ睡眠を樂しむを得ん。　是を

【七】五欲は、色・聲・香・味・觸の五境に於ける欲なり、又財・色・食・名・睡を云ふこともあり。

【八】寂志は、定心のこと。

【九】有中とは、有は三界迷妄の生存を意味す。

坐禪三昧經

姚秦の三藏、鳩摩羅什譯す[一]

卷の上

[二]導師の說は遇ひ難く　聞く者の喜びも亦難し。　大人の聽くを樂ふ所　小人の聞くを惡む所なり。　衆生は愍傷すべし、老死の嶮路に墮つ。　[三]野人は恩愛の奴にして　畏れに處して癡は懼れず。　世界若し大小なりとも、法として常なる者あることなし。　一切は久しく留らず。暫らく現ずること電光の如し。　是の身は老死に屬し、衆病の歸する所なり。　薄皮不淨を覆ひ、愚は惑ひて爲に欺かる。　汝は常に老賊の爲に、盛壯の色を呑滅せらる。　華鬘の枯れ朽つるが如く、毀敗せば直す所なし。　[四]頂生王の功德は、釋天王と共に坐し、報の利福弘多にして、今日悉く安在す。　此の王は天人中にて、欲樂具すること最と爲すも、死時には極めて苦痛す。　此を以て意に悟るべし。　諸欲は初め軟樂なるも、後に皆大苦を成ず。　亦怨の初め善にして、滅族の禍後に在るが如し。　是の身は穢器となし、[五]九孔常に惡を流す。　亦は那利瘡の如く、治を醫藥に絕す。　骨車の力甚少に、筋脈纏ひて識轉ずるを、汝は以て妙乘を爲し、忍著して羞恥なし。　死人の聚めらるる處、委棄せられて塚間に滿つ。　生時に保惜する所を、死すれば則ち皆棄捐す。　常に當に是の如く念ずべし、一心に觀じて亂るること莫れ。癡倒黑冥を破り、炬を執つて以て明觀す。　若し[六]四念止を捨つれば、心に惡として造らさるなし。　象の逸して鉤なきが如く、終に調道に順はず。　今日此の業を營み、明日彼の事を造り、樂著して苦を觀ぜず、死の賊の至るを覺せず。　怱怱に己が務を爲し、他事も亦閑な

【一】元、明二本には僧伽羅刹造と記す。

【二】此の一段は生死の苦を厭ひ禪法を修して解脱すべきことを明す、僧叡の序によれば、此の五言四句の四十三偈は鳩摩羅陀の作なりと。

【三】元、明二本には「常爲恩愛奴」となせり。

【四】頂生王（Mūrdhagata）は長淨王の頂上より生れ、忉利天に上りて帝釋天王と共に快樂を縱にすと云はる。

【五】九孔とは、兩眼・兩耳・兩鼻・口・大小便の所なり、

【六】四念止は、四念處の古き譯。

應じて次第階程を秩序立てんとしたるが如き組織法に就いては、後の天台智者大師が止觀法門を綜合大成するに當つて、必ずや好箇の參考となしたに相違ない。天台が「次第禪門」等に於て「禪經」に曰くとして引用する場合、必ずしも本經を指さずとするも、主として本經を依用した事は、其の止觀法門の組織の一斑を見るならば、本經の敍述結構の與つて力ありし事は、何人も否定することが出來ない。かくして陰に陽に支那禪教の發達に及ぼした本經の影響は多大なることを認めねばならぬ。

昭和六年三月十五日

南都戒壇院に於て

譯者　佐藤泰舜　識

點も類似すと云ふことが出來よう。

三、傳譯流布

本經は前述の如く鳩摩羅什(Kumārajiva)三藏が譯出したもので、僧叡の序文によれば弘始九年(西暦四〇七年)閏月五日重ねて檢校を求め、初出の時の不審を質して詳定したとあり、出三藏記は坐禪三昧經の外に、禪法要三卷の名を擧げて此の下に、右重校の日附を註記して居るけれども、禪法要が或は本經と同一であるか、然らざれば本經の下に記すべきを處を誤つて註したのであらう。歷代三寶記は二秦錄、寶唱錄等によつて、初めの譯時を弘始四年正月五日と記し、開元錄は之等を襲用して初譯及重校の年時を次での如く併記して居る。然るに卷數に就いて現存は二卷なるも、僧叡の序、三藏記、三寶記等何れも三卷とし、法經、彥悰、靜泰の三錄は二卷となし、開元錄は三卷或は二卷としてあるが、之れ分卷の相違にして恐らく內容に增減あつたものではあるまい。

次に本經の異譯異名に就いて經錄の所載を一言すれば、歷代三寶記幷に內典錄に坐禪三昧經三卷、阿練若習禪法二卷、共に羅什の所譯にして同本異譯であると記るし、法經、彥悰、靜泰の三錄また同本異譯として居る。そして三寶記、內典錄ともに、宋の求那跋陀羅(Guṇabhadra)が阿練若習禪法二卷を譯出したことを記載して居る。出三藏記は阿練若習禪法經に就いては、失譯の部に一卷本を擧げて、卽ち是れ菩薩禪法の第一卷を抄出したものだと註して居るのみで、羅什にも求那跋陀羅にも此の經の譯出ありし事を云つて居ない。開元錄は之等の記事を綜合して、羅什譯の三昧經と跋陀羅譯の阿蘭若經とは同本異譯にして、二譯一存、後者は缺失して傳はらぬとなし、そして羅什譯の阿蘭若經は、文を檢するに全く同一であるから、唯名を異にして傳ふるのみ、異譯とすべからず、双行するの要なしと言つて居る。思ふに跋陀羅譯の阿練若經に關しては經錄の過誤にして、本經は唯羅什一回の傳譯ありしのみであらう。

本經に關する註疏的研究は殆どないやうであるが、前にも述べし如く諸禪經中最も傑出した經典であるから、南北朝時代の禪法實習者は必ずや讀誦玩味したことであらうし、單に禪經と云へば本經を指す場合の少なからぬ事を思へば、其の流傳の程を察すべきである。殊に南方慧遠一派が、覺賢譯の達磨多羅禪經を、廬山の禪經として珍重せしに對し、本經は關中の禪經として羅什の一門を初め、北方の禪界に極めて重要な位置を占めて居た事も、當代の文獻によつて明である。而して本經が包容調和の態度を以て、諸種の禪觀を攝取して、而も敎義の發達に

であらう。

僧叡が續いて序文の中に、本經編述に際しての材料に關して敍ぶる所は次の如きものがある。

(一)經初の四十三偈は究摩羅羅陀(Kumāralabdha)法師の作。

(二)最後の二十偈は馬鳴(Aśvaghoṣa)の作。

(三)五種法門に就いては、婆須蜜(Vasmitra)、僧伽羅叉(Saṅgharakṣa)、漚波崛(Upagupta)、僧伽斯那(Saṅgha-sena)、勒比丘、馬鳴、羅陀の禪要中より抄し集めたもの。

(四)六覺中の偈(數息觀の六妙門の第一、數に就いての說明に六覺を出す)は馬鳴菩薩の修習する所であつて、今は之れによつて六覺を釋した。

(五)經の初めに多婬、多瞋、多癡の三業生の性情相貌、并に其の三門に就いては僧伽羅叉の撰する所である。

(六)息門の六事(數息觀の六妙門)に關しては諸論師の說を集めた。

(七)菩薩禪の中には、後に持世經に依つて增補し、別に十二因緣一卷、要解二卷を撰した。

僧叡の爲めに撰譯された本經に就いて、彼自らの言ふ所であるから、右の材料に關しても殆んど全部信憑して然るべきであらうが、固より關係文獻を涉獵した結果でなくては確實に保證する譯にはいかぬ。

唯僧伽羅叉(剎)の關する部分に就いて修行道地經と比較して見るに、本經の初めに師たるものが入門者に對して、其心相性行を觀破すべきを述ぶる點は兩經相類似し、殊に貪瞋癡三種の相狀を說く一段は、道地經卷二の分別相品第八に示す十九章の初三章の文章と殆んど一致し、恐らく本經は道地經に由つて此の一段の文章を作つたであらう。又本經の五法門の中、念佛觀を除いた四門は、道地經の同品に列擧する所と全同であるけれども、僧叡の云へる「婬恚癡の相及び其の三門は皆僧伽羅叉の撰する所」と云ふに就いては、道地經との比較に於ては、婬恚癡の三相は認められるが、其の三門に關しては說明に於て大いに異りがあると云はねばならぬ。それは兎に角として、本經全體の結構に於ては頗る道地經と類似する觀がある。唯後者にあつては前後錯雜し、終始一貫するの脈絡を缺いて居るが、大體五停心より初めて、四禪、四無色、得五通の一系列を示した後に、四念處觀乃至四向四果の一系列を示し、最後に緣覺道と菩薩禪とを說いて、禪觀修道の階程を概雜して居る點は兩經殆ど軌を一にして居ると云つてよい。尙又四禪并に聲聞道の階程を述ぶるに當つて、兩經共に大部分有部の法相に傾き乍ら、兩者共に多少非有部系統の法相を加味する

本經は四禪、四無色、得五通の禪法を說き終つて、四念處乃至四果に至る聲聞道の禪法を說き起す中間に、次の如き敍述を挾んで居る。

世尊の弟子、五法門を習學して涅槃を志求するに二種の人あり。或は定を好むもの多し、快樂(又は樂著)を以ての故に。或は智を好むもの多し、苦患を畏るゝが故に。定多き者は先づ禪法を學んで後涅槃を學び、智多き者は直ちに涅槃に趣かんとす。直ちに涅槃に趣かんとする者は未だ煩惱を斷ぜず、亦未だ禪を得ざるも、專心にして散ぜずんば、直ちに涅槃を求めて愛等の諸煩惱を越えん。是を涅槃と名く。(則ち)身は實に無常・苦・不淨・無我なるも、身顚倒を以ての故に常・樂・我・淨とす。……行者は顚倒を破らんと欲するが故に、常に四念止觀を習ふ。云々(卷下、四念處觀の初め)

之れ四禪、四無色、得五通の禪法と、四念處觀乃至羅漢果の禪法との關係を巧みに關係せしめたものである。則ち等しく五門の禪法を修しても、定に傾く者は先づ前者に進み、觀智に傾くものは先づ後者に進入し、共に最後は涅槃を得ると云つてある。而して後者が無漏前十五心の觀智を得た後は、定を主となす四禪の階程に入ることとは、四向四果の說明に於て明であるから、此の進程に於ては先智後定に依つて涅槃に至ること云はずして明瞭である。唯前者の進程に於て、四禪、四無色、得五通(細論すれば四禪には定智併存なれども、四念處、四諦觀等に比すれば、大體に於て定を主とする)の何處に於て觀智を得るかを說明せず、此の點尙ほ不充分であるけれども、兎も角、一を凡夫有漏禪、他を佛弟子無漏禪として判別し、前者を拒否する如き修行道地經などの態度に比して、本經は斯くの如く兩者を融合し關係づけた點は、之れ又輕視すべからざる一大特徵と云はねばならぬ。

二、本經編述の材料幷に修行道地經との關係

本經は出三藏記第九卷に收錄せる僧叡の關中出禪經の序文に「尋いで衆家の禪要を抄し撰することを蒙り此の三卷を得たり」と記するによれば、彼が羅什に從つて禪法を受けて後、禪觀に關する諸家の說を拔粹し編纂されたものを、羅什三藏から授つたのが此の坐禪三昧經の譯出された所以となつて居る。元、明の大藏經には經題の下に、僧伽羅刹造と明記してあるけれども、修行道地經の撰者たる僧伽羅刹が、本經の撰者であると斷定する譯には行かぬ。本經は西北印度若しくは西域諸國に於て、何んかゞ禪法に關する諸家の說を纏めたものか、或は羅什三藏が僧叡に示す際に自ら編纂譯出したもの

來上つて居る。修行道地經は修道の階程を網羅して、觀法進展の相狀を一系に并べやうとして居るけれども、其間多少の錯雜や溝渠が存して、未だ組織としての態を具ふるに至つて居ないが、本經に於ては前述の如く五種法門を基調として、四禪八定、四善根位、四向四果、緣覺、乃至菩薩道に至るまでを包容し、其の脈絡貫通せる修道の階程を形造れる點は、實に見逃すべからざる一大特色と云はねばならぬ。而して修行道地經に於ては、菩薩大乘禪を說くに、爾前の小乘禪との關係が特に曖昧であるけれども、本經に來つては一方には五法門に依つて兩者を包括し、他面には緣覺は勿論、菩薩道も亦聲聞道の中に胚胎し、其れより出立せるかの如き感を抱かしむる如き敍述を以て、兩者を關係せしめて居る。蓋し大小兩乘を一系の中に融合せしむることは、全佛教々學上の大問題にして、法華、華嚴兩大經は、菩薩道を基本として聲聞道を包攝するの態度を取り、天台、華嚴の兩教學は極力之れの闡明に努めて居るけれども、教理史上の立場よりすれば尙ほ困難なる問題を殘して居る程であるから、今單に禪觀修道の一部門を略述する本經が、到底此の大問題に回答し得べき筈はないけれども、然も前述の如き二方面よりして、其の時代までに發達し來れる大乘菩薩道を、阿毘達磨により完成せる聲聞道に關係づけた點は、輕々に過すべからざるものであらう。

第三には前項の修道階程の組織の中に含まるゝことであるが、特に四禪八定と小乘禪觀との關係に就いて注目すべき點がある。四禪八定によつて五通を得、生天の果を得るは有漏凡夫の禪であつて、四念處觀、四諦十六行相、十六心無漏道を經て四沙門果を得し、最後解脫の涅槃に入るのは佛弟子無漏の禪であつて、右の兩者は斷然區別せざる可からずと力說するのが、修行道地經の一特色であることは同經の解題に於て述べた所である。蓋し之れ佛教以外の修道禪觀と、佛教のそれとの相違を明にする必要に迫られたものであらうが、外道にも通ずる四禪五通の禪法が、事實佛教の禪法に於ても有力なる地位を占め、小乘阿毘達磨の實踐門に於ては、四禪なくして說明され得ないことになつて居る。此に於て四禪四無色、五通、生天と系列をなす禪法と、四念處、四諦十六行相を經て後、四禪、四無色定に據つて無漏十六心より四向四果の階梯を設くる一系の禪法とが、如何なる關係にあるかを明にするのは極めて必要な事である。而して之れを法相的に解釋するは緻密煩瑣なる阿毘達磨の職能であるけれども、今此の坐禪三昧經に於ては、極めて簡明に兩者の關係を敍述して居る。

の進展を說き示すものが、此の一段の敍述である。卽ち四念處觀、四諦十六行相觀、四善根位、無漏十六心、見修二道、須陀洹に初まりて四向四果一々の說明、筆を勞すること少なくして而も要約肯綮を得、最後阿羅漢の究竟位に至つて、解脫得涅槃の相を述べて居る。

次に羅漢としての得涅槃に附隨して、其れの變態としての辟支佛の得涅槃を略述し、辟支佛は羅漢と菩薩との間に位する中根の機となして居る。以上を以て下卷の前半を費し、後半は菩薩の禪觀を說くの一段として居る。

菩薩道としての禪觀は、聲聞の如く五種禪觀より進んで涅槃に至るを究竟目的となさず、五種禪觀を修して佛道を成ずることを理想とするものであると提示し、以下菩薩道としての念佛觀、不淨觀、慈心觀、因緣觀、數息觀の五種法門の特相を述べ、最後に修禪者の實際上の心得として、時と方便とを辨知して善處すべきことを示せる、七言四句の二十偈を以て本經の結びとしてある。而して菩薩禪觀の特徵は五種法門を通じて、衆生濟度を念願とすること、諸法本空の理に達すること、之れ卽ち諸法實相なることの三點に存する。五種法門の中にては因緣觀の說明最も詳かにして、十二因緣の各支、十二因の緣空實相、四諦、三十七道品等との關係に及んで居る。數息觀に於ては三忍を說いて空理を明し、念佛觀にては生身、法身の二觀を說けども、二身の概念は小乘敎義を出でないやうである。

本經は全體として組織整然內容充實して、諸禪經中嶄然頭角を顯はして居ることは前述の如くであるが、今其の主なる特色を擧ぐれば左の三項に歸するかと思ふ。

第一に五種法門、所謂五停心觀が、明瞭均等に敍述せられて間然する所なく、

而も五法門が單に入禪初門の觀法たるのみならず、進んで四禪八定の基本となり、四善根、四向四果の小乘禪觀を包み、更に大乘菩薩禪の五方面をなせることを明示し、五種法門が禪觀修道の全體を一貫せることを述ぶる點に於て、他に全く類を見ざる特徵と云ふべきである。宋の曇摩蜜多の譯する五門禪經要法は、五門禪を標題とし乍ら、經初に亂心多き者には安般、貪愛多き者には不淨、瞋恚多き者には慈心、著我多き者には因緣、心沒する者には念佛の五觀を揭ぐるも、其の說明に至つては念佛、不淨、慈心の三門のみを前後交錯して雜然と說けるに比較し、本經の說相の整然判明にして、而も簡結に其の要を盡し、他の禪經に於けるが如く、四大、六大等の觀法を雜ゆることなく、純然たる五門禪を說述し、肯綮を得て居る。

第二に禪觀修道の大系組織が殆んど出

坐禪三昧經解題

一、内容一般と特色

坐禪三昧經上下二巻は首尾一貫して敍述の繁簡宜しきを得、組織の整正内容の充實、禪經中の第一に推さるべきものである。先づ初めに掲げし五言四句の四十三偈に於て、生死輪廻を脱するに禪法實修を以てすべきことを示し、次に長行の一段は師たる者の坐禪入門者に對する用意と、衆生の病弊各種ある中、貪瞋癡の三毒に溺るゝ三聾の徒の、性情相貌の特色を舉げ、之等に對して適當なる觀法を授くべきことゝを説きて、五種法門(即ち五停心)を提示し、以て一經序分の體を成して居る。

以下順次に五種法門を説述して上巻を終つて居るが、五種法門は即ち

第一、治貪欲法門――不淨觀
第二、治瞋恚法門――慈心觀
第三、治愚癡法門――因緣觀
第四、治思覺法門――數息觀
第五、治等分法門――念佛觀

にして、各門初め簡明に觀法を説き、更に問答體を以て敍述の微に入り、行者の段階に初習行、已習行、久習行の三品を明かすのが、五門を通じての説相である。而して第四數息觀の説明は最も詳細にして上巻の半分量を占め、所謂六妙門、十六特勝、六覺の細釋に及び、第五念佛門に於ても三十二相、八十種好の一々の説明を試みて居る。

進んで下巻に移りては、以上の五門禪は要するに欲界定なることを示唆して、其の不完全なることを指適し、更に色界初禪の德を示して之れに導き入れ、又更に初禪の缺陷を舉げて二禪に導き、順次に三禪、四禪に進入せしめ、進んで無色の四定を説明し、四無量心の觀法を略述し、斯くして五通を得ることを示して、第一神足通を説明して一段落を告げて居る。

此に於て佛弟子たる者、五門禪を修して最後に到達する所は涅槃にある事を示し、而も此の涅槃に達する順序として二種の機根あり、一は先づ定を主として後に觀智を得るもの、二は先づ觀智を主として後に定を得るものである。而して前者は五門禪を進めて四禪、四無色定、四無量觀、得五通の課程を以て、前段所説の如く進展することを暗示し、後者は先づ顚倒の妄見を破して正智を得る爲めに、淨・樂・我・常の倒見を打破して非淨・苦・無我・無常の正見に住すべきを説き、以下所謂四念處觀の説明より、順次觀智

の無常觀を修するものあることなけん。此の相現する時、法幢崩れ慧日沒し、一切衆生は盲ひて眼目なし。釋迦牟尼佛、弟子ありと雖も、著くる所の袈裟は木頭幡の如く自然に變白し、諸の比丘尼は猶ほ婬女の如く、色を衒賣して以用つて自活す。諸の優婆塞は旃陀羅の如く殺生度なく、諸の優婆夷は邪婬無道にして、欺誑百端なり。此の相現する時、釋迦牟尼の無上正法は永く沒して餘りなし。

佛、阿難に告げたまはく、汝佛の語を持して未來世の四部弟子の爲に、當に廣く其の義を宣說分別し、愼んで忘失すること勿るべし。復た次に阿難よ、汝は當に來世の諸の衆生等の爲に、當に此の言を宣ぶべし。如來の大法は久しからずして必らず沒せん。汝等佛法中に於て應に勤め精進すべし。當に苦・空・無常・無我等の法を觀ずべしと。

佛、此の語を說きたまう時、八千の天子無常を悟解し、遠塵離垢して法眼淨[57]を得たり。五百の比丘は卽ち座上に於て諸法を受けず、漏盡意解して阿羅漢を成ぜり。爾の時長者阿祇達幷びに千二百五十の比丘諸天龍神は佛の此の無常觀門を說くを聞いて心開意解し、皆悉く苦・空・無常を達解し、佛足を頂禮して歡喜奉行しき。

禪祕要法經　終

【五七】法眼淨とは、明瞭に眞諦を見る眼を具へたること、小乘にては須陀洹果に至りて四諦の理を證見するをいふ。

四禪を修し、四無量心を修し、甚深無量の空三昧門に遊入し、乃至六神通を得べし。是くの如き種種勝妙の功德は、但だ當に一心に密にして之を行ひ、愼んで虛妄に多くの衆の前に於て自ら[五五]過人法を得たりと說くこと勿るべし。若し過人法を得たりと說かば、上の所說の如く、必定して當に阿鼻地獄に墮すべし。

[五六]佛、阿難に告げたまはく、我れ般涅槃の後、初の一百歲は此の不淨觀閻浮提に行はれん。放逸を攝する者には四諦を觀ぜしめ、一日の中に無常觀を修して解脫を得る者は、我が住世の如く等しくして異りあることなけん。二百歲の後には、此の閻浮提の四部の弟子の二分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。三百歲の時、四部の弟子の四分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。四百歲の時、四部の弟子の五分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。我が涅槃の後、五百歲の時、四部の弟子の十分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。六百歲の時、四部の弟子の百分中一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。七百歲の時、四部の弟子の千分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。八百歲の時、四部の弟子の萬分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。九百歲の時、四部の弟子の千萬分中の一分の弟子は、無常觀を修して解脫道を得ん。千歲の時、四部の弟子の億分の中、十人百人は無常觀を修して解脫道を得ん。千歲を過ぎ已つて、此の無常觀は復た閻浮提中に流行すと雖も、億億千萬衆多の弟子の若しくは一若しくは兩のみ、無常觀を修して解脫道を得ん。

千五百歲の後、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷ありて無常・苦・空・無我觀を讚歎し宣說せば、多くの衆生ありて嫉妬心を懷き、或は刀を以て斫り、或は瓦礫を以て彼の人を打拍し、罵つて言く。癡人、世間の何處に無常觀、苦・空・無我ありや。身肌は白淨なること無量なり、云何んが反つて身は不淨と爲すと說くや。汝に大惡人なり、宜しく驅擯に合ふべしと。此の相現ずる時、百千人中一人

【五五】過人法（Uttar-manu-ṣya-dharma）。

【五六】此の一段は未來の法滅を說く。

如し。

復た次に阿難、佛滅度の後現前に佛なくして、四部の弟子解脫を求むる者不淨觀を得ば、當に密に藏秘して他をして知らしむること勿るべし。譬へば人あり、貧窮孤獨にして濁惡世に生れ無道の王に屬す、彼の貧窮人地を掘つて水を求むるに宿世の因緣にて忽ち伏藏に遇つて大いに珍寶を獲、惡王を怖畏して此の寶を密藏し他をして知らしめず、但だ屛處に於て此の珍寶を取つて以て妻子に供して、密かに快樂を受くるが如し。佛滅度の後四部の弟子の禪樂を得る者も亦復た是くの如く、當に密に之を藏して廣說するを得ざるべし。若し廣說せば大重罪を犯さん。

復た次に阿難、譬へば長者獨り一子ありて、大重病に遇ひて鬚眉落ち盡すが如し。爾の時に長者は內に自ら思惟すらく。我れ今衰禍なり、唯だ此の一子は此の重病に遇ふ。當に何處に良醫を求覓すべきやと。此の語を作し已つて大いに財寶を出して良醫を募訪するに、長者の宿福にて忽ち一醫の多く經方を知れるに遇ふ。長者白して言さく、唯だ願はくは大師、大慈悲を起したまへ。我に一子ありて患に遇ふこと多時なり。唯だ願はくは大師、此の患を救療したまへ。設し病を愈するを得ば、今我が家中に大いに財寶あり。猶ほ北方[五三]毘沙門天王の如し。若し子差ゆるを得ば唯だ我が身を除いて、一切奉上し敢へて違逆せじと。時に彼の良醫長者に告げて言はく。汝今能く七重の闇室を造つて極めて深密ならしめ、然る後汝の子をして服藥せしむべし。此の藥を服し已らば人を見るを得ず、他に向つて說かざれ。四百日を經て兒乃ち差ゆべしと。

佛、阿難に告げたまはく、佛滅度の後、佛の四部衆の弟子、若し禪定を修して解脫を求めば、重病人の良醫の故に隨ふが如く、當に靜處に於て若しくは塚間、若しくは林樹の下若しくは阿練若處にて甚深の諸賢聖道を修行すべし。當に身口を密にして、內心中に於て[五四]四梵行を修し、四念處を修し、四正勤を修し、四如意足を修し、五根を修し、五力を修し、七覺道を修し、八聖道分を修し、

【五三】毘沙門(Vaiśramana)。四天王の一。多聞と譯し北方を衞る。

【五四】四梵行とは、四無量心のこと。

佛、阿難に告げたまはく、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、繫念して意を住せしめて、心散亂せず、端坐正受して意を一處に住し、諸根を閉塞せば、此の人は安心念定力の故に、境界なしと雖も身を捨てて他世に兜率天に生じ、彌勒に値遇し、彌勒と倶に閻浮提に下生して、龍華の初會に最も先に法を聞いて解脫道を悟らん。

〔五二〕復た次に阿難、佛滅度の後、濁惡世中に若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷ありて、實に梵行を修し、十二頭陀を行じて身を莊嚴し、心に念定を行ひ、白骨觀を修し、不淨を觀じて深境界に入り、心眼明利にして禪法に通達せば、此くの如き四衆は佛法を增長せんが爲の故に、法滅せざらんが爲の故に、當に身口意を密にすべし。猶ほ人ありて身心の病に遇ふが如し。良醫は當に醍醐を服すべしと處方す。爾の時に病者は則ち國王に詣つて醍醐を求め乞ふ。王は慈愍の故に即ち醍醐を以て持用つて之に賜ひ、因みに病人の醍醐を服するの法を勅すらく、當に密屋の風塵なき處に於て取つて之を飲むべし。飲み已つて口を閉ぢ、四大の氣を調へ度を失せしむること勿れと。若し比丘・比丘尼、此の甘露灌頂の藥を服せば、唯だ知法教授の師を除き、妄りに他人に向つて宣說するを得ず。若し他に向つて說かば即ち境界を失し、亦十三僧殘の罪を犯さん。若し諸の白衣の禪定を行ぜんと欲し、五神通を得るすら尙ほ應に他人に向つて、宣說して我は神通仙呪の術を得たりと言ふべからず、一切宜しく秘すべし。何に況んや出家して具足戒を受くるをや。若し不淨觀乃至暖法を得ば、妄りに他人に向つて宣說するを得ず。若し他に向つて說かば即ち境界を滅し、多くの衆生をして佛法の中に於て疑惑の心を生ぜしめん。是の故に我れ今此の衆中に於て、諸の比丘・比丘尼若し不淨觀乃至暖法を得ば、當に密に修行し心をして明利ならしめ唯だ智者教授師に向つてのみ說き、廣く傳へて他人に向つて說くことを得ざるべしと制す。若し他に向つて說かば利養心の爲に、時に應じて即ち十三僧殘を犯さん。過時に懺せず心に慚愧なくんば、亦重罪を犯すこと上の所說の

【五二】此の一段は密行を勸む。

て大妄語を犯す。此の大惡人は波旬に使はる。是れ旃陀羅にして屠兒羅刹の同類なり。必定して當に三惡道中に墮すべし。此の優婆塞の命終らんと欲する時、十八地獄の火車驢炭、變化の惡事一時に之を迎へん。必定して當に三惡趣中に墮すべし。疑あることなけん。若し優婆塞實に不淨觀乃至暖法を得ずして、大衆の中に於て增上慢を起して、唱へて是くの如く言はく、我れ不淨觀乃至暖法を得たりと。當に知るべし此の優婆塞は是れ天人中の賊なり。世間・天・龍八部を欺誑す。此の優婆塞は命終の後、雹雨よりも疾かに必定して當に阿鼻地獄に墮すべし。一大劫を滿ちて地獄の壽盡きて餓鬼中に生じ、八千歲を經て熱鐵丸を噉む、餓鬼より出でて畜生中に墮し、生れて恒に重きを負ひ、死して復た皮を剝がる。五百身を經て還た人中に生ずるも、聾・盲・瘖瘂癃殘百病以て衣服と爲さん。是くの如き苦を經ること具に說くべからず。若し優婆夷にして異を顯はして衆を惑はし、實に坐禪するに非ずして坐禪すと謂言はば、此の優婆夷は失意罪を得。垢結不淨にして起たず、墮落し不淨にして臭旃陀羅と作るあり。此の優婆夷は惡と伴を爲し、是れ魔の眷屬なり。必定して當に三惡趣中に墮すべし。是の優婆夷過時に說かず自ら改悔せずんば、須臾の間を經、一日乃至五日にして、是の優婆夷貪求して厭くことなく、實に非梵行にして自ら梵行すと言ひ、實に坐禪するに非ずして自ら坐禪すと言はば、此の大惡人は必定して當に三惡趣中に墮し業に隨つて受生すべし。若し優婆夷實に不淨觀乃至暖法を得ずして、大衆の中に於て唱へて、是くの如く言ひ增上慢を起して、自ら我れ不淨觀乃至暖法を得たりと言はば、此の優婆夷は是れ天人中の賊なり。命終の後雹雨よりも疾かに、必定して當に阿鼻地獄に墮すべし。一大劫を滿ちて地獄の壽盡きて餓鬼中に生じ、八千歲を經て熱鐵丸を噉み、餓鬼より出でて畜生中に墮し、生れて恒に重きを負ひ、死して復た皮を剝がれ、五百身を經て還た人中に生ずるも、聾・盲・瘖瘂癃殘百病を以て衣服と爲さん。是くの如き苦を經ること具に說くべからず。

四六龍華の初會に遇ひ、必らず先きに法を聞いて解脱を證するを得ん。

四七佛、阿難に告げたまはく、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷ありて、佛法の中に於て利養の爲の故に、貪求して厭くことなく、名聞を好むが爲に、假僞にして惡を作りて實に坐禪せず、身口放逸にして放逸行を行ひ、利養を貪るが故に、自ら坐禪すと言はゞ、此くの如き比丘は四八偸蘭遮を犯す。過時に説かず自ら改悔せずんば、須臾の間に即ち十三四九僧殘を犯す。若し一日を經て二日に至らば、當に知るべし、此の比丘は是れ天人中の賊、羅刹の魁膾にして、必ず惡道に墮して大重罪を犯さん。若し比丘尼、邪媚を妖冶し利養を求めんと欲して、猫の鼠を伺ふが如く、貪求して厭くことなく、實に坐禪せずして自ら坐禪すと言ひ、身口放逸にして放逸行を行ひ、利養を貪るが故に自ら坐禪すと言はゞ、此くの如き比丘尼は偸蘭遮を犯す。過時に説かず自ら改悔せずんば、須臾の間を經て即ち十三僧殘を犯す。若し一日を經て二日に至らば、當に知るべし。此の比丘尼は是れ天人中の賊、羅刹の魁膾にして必ず惡道に墮して大重罪を犯さん。

若し比丘・比丘尼、實に白骨を見ずして、自ら白骨を見、乃至阿那般那せりと言はば、是の比丘・比丘尼は諸天・龍・鬼神等を誑惑し、世間人を欺く。此の惡人の輩は是れ五〇波旬の種なり。妄語の爲の故に自ら説いて言はく、我れ不淨觀乃至頂法を得たりと。此の妄語の人は命終の後電雨よりも疾かに、必定して當に阿鼻地獄に墮すべし。壽命一劫にして地獄より出でて餓鬼中に墮し、八千歳中熱鐵を噉まん。餓鬼より出でて畜生中に墮し、生れて恒に重きを負ひ、死して復た皮を剝がれ、五百身を經て還た人中に生ずるも、聾・盲・瘖瘂癃殘百病を以て衣服と爲さん。是くの如き苦を經ること具に説くべからず。若し優婆塞實に坐禪せずして自ら坐禪すと言ひ、實に五一梵行せずして自ら梵行すと言はば、是の優婆塞は失意罪を得、不淨有作不起にして、[illegible]旃陀羅に墮落し惡と伴を爲す。是れ朽敗の種にして善芽を生ぜず。利養を貪るが故に多く求めて厭くことなく、一日を經乃至五日にし

【四六】龍華初會とは、彌勒菩薩が將來兜率天より下りて此の土に出世し、龍華樹の下に大法會を開く其の最初のことなり。

【四七】此の一段は虚僞の禪を戒しむ。

【四八】偸蘭遮(Sthūlātyaya)は、波羅夷と僧殘との未遂罪なり。

【四九】僧殘(Saṃghāvaśeṣa)とは、僧伽に殘り得るの意にて、此の罪を犯したる時、一定の懺悔をなせば僧伽を放逐されずに許さるゝが故に僧殘と云ふ、之れに十三種あり。

【五〇】波旬(Pāpīyas)は、惡魔の名。

【五一】梵行とは、梵天に生るゝ行にして清淨行の意、時に婬欲を離るゝことなり。

婆夷ありて、若し三世の佛法を學んで生死の種を斷じ、煩惱の河を度つて生死の海を竭し、愛の種子を免れて諸の使流を斷じ、五欲の樂しみを厭ふて涅槃を樂はんと欲する者あらば、當に是の觀を學ぶべし。此の觀の功德は須彌山の如く、衆光を流出して四天下を照さん。此の觀を行ずれば沙門果を具すること亦復た是の如し。

【四四】佛、阿難に告げたまはく、佛滅度の後、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷ありて、此の法を學ばんと欲せば、當に四種の惡を離るべし。何等をか四と爲す。一には禁戒を淨持し、威儀を犯さず、五衆戒に於て若し犯す所あらば、應當に至心に懺悔して淸淨にすべし。戒を淸淨にし已らば梵行を莊嚴すと名く。二には憒鬧を遠離し、獨り閑靜に處して一處に繫念し、少語法を樂しみ、甚深の十二頭陀を修行して、心に疲厭なく頭燃を救ふが如くす。三には掃偸婆を地に塗り楊枝淨籌を施し、及び諸の苦役もて以て障罪を除く。四には晝夜六時に常に坐して臥せず、睡眠を樂しまず、身倚側するには常に塚間、樹下、阿練若處を樂しみ、食鹿の食するが若く死は鹿の死するが如し。若し四衆ありて此の四法を行ぜば、當に知るべし此の人は是れ苦行人なり。此くの如き苦行は久しからずして必らず四沙門果を得ん。

【四五】佛、阿難に告げたまはく、若し四衆ありて繫念法を修し、乃至脚の指端、手の指端を觀見して、一節少分の白骨の相を極めて明了ならしめ、若しくは一指を見若しくは一爪を見て、一切をして諸の白骨ならしむれば、當に知るべし。此の人は心利きを以ての故に、命終の後必定して兜率陀天に生ずるを得て、三惡道の一切の苦患を滅せん。未だ解脫せずと雖も惡道に墮せじ。當に知るべし、此の人の功德は滅せずと。已に三塗の苦難を免離するを得。何に況んや諸の白骨人を具足するをや。此の骨人を見ば、未だ解脫せずと雖も無漏の功德あり。當に知るべし、此の人は已に一切三塗八難苦厄の患を免る。當に知るべし、此の人は世世生ずる所に見佛を離れず、未來世に於て彌勒

【四四】此の一段は禪法修行の用意條件を示す。

【四五】此一段は白骨觀の利益を述ぶ。

ず。此の觀を作す時、生死を願はず涅槃を樂はず。生死の本際空寂なるを觀じ、涅槃の性相皆同じく空に入り、和合あること無きを觀ず。是を無願三昧と名く。無作三昧とは心を見ず、身及び諸の威儀の修作する所あるを見ず、涅槃の性相を起すあるを見ず、但だ滅諦を見て空無所有に通達するなり。

爾の時に行者は佛世尊の、是の空・無相・無願三昧を說くを聞いて、身心靜寂にして三空門に遊ぶこと、猶ほ壯士の臂を屈申する頃の如く、聲に應じて卽ち九十億の生死洞然の結を超越することを得、阿羅漢を成じて後有を受けず、梵行已に立つて如道眞を知り、豁然として意に解し復た餘習なく、漏盡慧通自然にして得、其の餘の五通も要は假なれば六通の義を修得す。廣說すること阿毘曇の如し。

爾の時、世尊阿祇達の爲に是の賢聖の空相應の心境界を說き、[三九]十一切入相を分別し已る。（阿祇達は）默然として安隱に[四〇]無諍三昧に入つて衆の色光を放ち普く世界を照す。是の時、會中の二百五十の比丘は心意開解して阿羅漢を成ず。五十の優婆塞は二十億洞然の結を破つて須陀洹を成じ、天人大衆は佛の所說を聞いて皆大いに歡喜しき。

[四一]爾の時に長老阿難は卽ち坐より起ちて、佛に白して言く、世尊、如來は初め迦絺羅難陀の爲に不淨門を說き、禪難提比丘の爲に數息の法を說き、阿祇達の爲に四大觀を說きたまふ。是くの如き衆多の微妙の法門を云何んが受持し、當に何の名を以て後世に宣示すべきやと。佛、阿難に告げたまはく、此の經は禪法祕要と名け、亦白骨觀門と名け、亦次第九想と名け、亦、雜想觀法と名け、亦阿那般那方便と名け、亦次第四果想と名け、亦分別境界と名く。是くの如く受持して愼んで忘失すること勿れと。

佛、阿難に告げたまはく、我が滅度の後、若し比丘・比丘尼・[四二]式叉摩尼・[四三]沙彌・沙彌尼・優婆塞・優

【三九】十一切入（Daśa-kṛtsnāyatanāni）は、十遍處とも譯す、地・水・火・風・空・識の六大、青・黃・赤・白の四顯色の十種を取りて、各と一切處に遍滿すと觀ずる十種の觀法なり。

【四〇】無諍三昧とは、空理を觀じて一切の諍論立義を排すること。

【四一】此の一段は本經の經名を說く。

【四二】式叉摩尼（Śikṣamāṇā）は、沙彌尼が比丘尼となるに就いて、六種の戒法を受け學ぶ間の稱呼にして、正學女と譯す。

【四三】沙彌（Śrāmaṇera）、沙彌尼（Śrāmaṇerikā）は、勤策男、勤策女と譯す、十戒を受けて出家したるも、未だ具足戒を受けざるもの。

大千世界に遍滿する諸の堅鞕の物、大地・山河・石壁は一切悉く空にして心の所寄無し。爾の時自然に金剛際を見るに、十四の金剛輪ありて、金剛輪の下より自然に上踊し、更に相振觸して行者の前に至る。

爾の時に心樹の諸の妙花の端に、自然に火起りて諸の華葉を燒き、樹上の四果は行者の頂に墮し、頂より入つて心中に住す。爾の時此の心豁然として明了し障外の事を見る。復た六象あり。其の色正黑にして大地を踏んで壞し諸水を吸飮す。風象を吹いて殺し、象の耳火を出して象を燒いて都て盡くす。四大毒蛇走つて樹端に上る。一人の大力士に似たるありて、此の大樹の下は金剛際に至り、上は三界の頂に至るを拔かんとして樹をして動搖せしむるを見る。行者の心中の四明珠の果、復た大火を出して樹莖を燒き絕す。是の時大樹は散つて微塵の如く、行者見已つて、我れ今風等及び水大とを觀ずるに一切無常にして須臾に變滅す。當に自ら我が身内の四大を觀ずべし。火起ること窮りなし。地・水・風等も亦復た是の如し。此れ無明の相なり空無所有にして假僞顚倒なること猶ほ霜炎の如し。三界に屬し癡愛を緣じ、三十三億念生の法、九百九十轉す。次第に麁相を念ずるに、結使九十有八、枝條種子三界に彌覆し、是の衆結の爲に生を受くること無數なり。或は地獄に墮して猛火身を焚き、或は餓鬼と爲りて融銅を呑飮し熱鐵丸を噉ひ、百千世中水穀を聞かず。或は畜生と爲りて駝・驢・猪・狗、數を知るべからず。人中に苦を受くるも衆難一に非ず。是くの如きの衆多のものは癡愛より得るなり。今癡愛を觀ずるに性無所有なり。

是の思惟を作す時、釋迦牟尼佛は金色の光りを放ち、諸の聲聞眷屬と圍遶し行者に告げて言はく、汝今知らずや、色相は虛寂にして受・想・行・識も亦復た是の如し。汝今應當に空・無相・無作・無願三昧を諦觀すべし。空三昧とは色性及び一切の諸法は空無所有なるを觀じ、是くの如き衆生を空三昧と名く。無願三昧とは涅槃の性の寂滅無相なるを觀じ、生死の相々悉く如・實際に同じき事を觀

虛僞にして眞ならず。亦生處もなく、因緣を假つて現ず、因緣は性空なり。色陰も亦然なり。受・想・行・識も性相皆空にして中に堅實なし。此の五陰を觀ずるに實に因緣なく、亦受有ることなし。此くの如き四大は云何んが增長して三界に遍滿するやと。此の思惟を作す時、一切の火を見るに、一切の毛孔より出でて三界に遍滿し、還つて一切の毛孔より入る。復た一切の地大を見るに猶ほ金剛雲の如く、一切毛孔より出でて三界に遍滿し、還つて一切毛孔より入る。復た水大を見るに猶ほ微塵の如く、一切の毛孔より出でて三界に遍滿し、還つて一切の毛孔より入る。復た風大を見るに其の勢羸劣にして、一切の毛孔より出でて三界に遍滿し、還つて一切の毛孔より入る。是くの如く四大は毛孔より出でて毛孔より入り、往復反覆して八百遍を經。

三八 此の事を見已つて、前の如く數息し已つて、氣を閉ぢて住し一七日を經。爾の時自然に此の大地の漸漸に空なるを見る。一床下の漸漸に空なるを見、一房の漸漸に空なるを見る。一房を見已つて一庭地の漸漸に空なるを見る。一庭を見已つて一城地の漸漸に空なるを見る。一城を見已つて十頃の地の漸漸に空なるを見る。十頃を見已つて百頃の地の漸漸に空なるを見る。百頃を見已つて一由旬の地の漸漸に空なるを見る。一由旬を見已つて二由旬の地の漸漸に空なるを見る。二由旬を見已つて三由旬の地の漸漸に空なるを見る。三由旬を見已つて四由旬の地の漸漸に空なるを見る。四由旬を見已つて五由旬の地の漸漸に空なるを見る。五由旬を見已つて乃至十由旬の地の漸漸に空なるを見る。十由旬を見已つて乃至百由旬の地の漸漸に空なるを見る。百由旬を見已つて、乃至閻浮提八千由旬の地の漸漸に空なるを見る。閻浮提を見已つて弗婆提の地、十千由旬の漸漸に空なるを見る。弗婆提を見已つて瞿耶尼の地、三萬由旬の漸漸に空なるを見る。瞿耶尼を見已つて鬱單越の地四萬由旬の漸漸に空なるを見る。鬱單越を見已つて須彌山・四大海水・山河・石壁・四天下中の一切の所有堅鞕に見ゆる物の、一切悉く皆漸漸になるを見る。四天下を見已りて心遂に廣大して、三千

【三八】 此の一段空觀を示す。

に滿ち已つて五由旬に滿つ。五由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して百由旬に滿つ。百由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して閻浮提に遍滿し、地火の二大其の性各異りて更に相鼓動し、三千大千世界に遍滿し、上は三界の頂に至り下は金剛際に至り、還つて頂より入る。

此の事を見已つて復た當に更に風大を觀ぜしむべし。風大を觀ずとは、自ら身內を觀ずるに心華樹の間に紫色の風を出し、水大隨ひ入りて此の風色を滅して同じく水色と爲す。風動き水湧いて身內に遍滿し、漸漸に廣大して一床に遍滿す。一床に滿ち已つて一房內に滿つ。一房に滿ち已つて一庭に遍滿す。一庭に滿ち已つて一城に遍滿す。一城に滿ち已つて漸漸に廣大して一由旬に遍滿す。一由旬に滿ち已つて、風水の二性其の性各異り、風は此の水を吹いて琉璃沫の如く、其の色焰熾にして更に相鼓動し二由旬に遍滿す。二由旬に滿ち已つて三由旬に滿つ。三由旬に滿ち已つて四由旬に滿つ。四由旬に滿ち已つて五由旬に滿つ。五由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して百由旬に滿つ。百由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して閻浮提に遍滿す。閻浮提に滿ち已つて漸漸に廣大して三千大千世界に遍滿し、上は三界の頂に至り下は金剛際に至る。

此の事を見已つて自ら己身を見るに、身の諸の毛孔の一切に火起る。此の火の光炎は三界に遍滿し、三界の外に出でて眞金の華の如し。華上に菓あり、華葉相次いで彼の菓光中にて四諦及び十二因緣、生死を度るの法を演說す。復た身內を見るに一切の水起る。其の水溫潤にして毛孔より出で、三界に流布し遍滿せざるなし。水色光を出して三界の頂を照し、火光の菓中に入る。復た身內を見るに一切の風起つて身內に遍滿し、毛孔より出でて漸漸に廣大し、駛速飄疾にして三界に遍滿し、化して金雲となり火光の菓中に入る。復た地の氣あり、極めて微薄となりて四大に彌滿す。

此の事を見已つて復た當に更に五陰を諦觀せしむべし。色陰を觀ずるに此の色陰は地大に依つて有り。地大は不定にして無明より生ず。無明の因緣もて妄見するを色と名く。此の色相を觀ずるに

に至り下は金剛際に至り。還つて頂より入る。

此の事を見已つて、復た當に更に地大を觀ぜしむべし。地大を觀ずとは自ら身内を見るに、心樹の諸の華漸漸に廣大して、金剛雲の如く身内に遍滿す。身内に滿ち已つて復た一床に滿つ。一床に滿ち已つて一房に遍滿す。一房に滿ち已つて一庭に遍滿す。一庭に滿ち已つて一城に遍滿す。一城に滿ち已つて漸漸に廣大して十頃に遍滿す。十頃に滿ち已つて百頃に遍滿す。百頃に滿ち已つて一由旬に滿つ。一由旬に滿ち已つて其の色青く變じ、漸漸に廣大して二由旬に遍滿す。二由旬に滿ち已つて三由旬に滿つ。三由旬に滿ち已つて四由旬に滿つ。四由旬に滿ち已つて五由旬に滿つ。五由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して百由旬に滿つ。百由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して閻浮提に滿つ。閻浮提に滿ち已つて漸漸に廣大して三千大千世界に遍滿し、上は三界の頂に至り下は金剛際に至り、還つて頂より入る。

此の事を見已つて復た當に更に還た地大を觀ぜしむべし。此の地大を觀ずるに金剛雲の如く摧碎すべきこと難し。當に云何んが滅すべけんやと。此の觀を作す時、佛世尊釋迦牟尼を見るに、金剛座に坐して、尊弟子眷屬五百とともに行者の前に坐し、異口同音に滅諦を讃歎す。此の語を聞き已つて當に地大を觀ずべし。(地大は)因緣より起り無明の持する所なり。無明は無性にして癡愛は主無し。虚僞因緣にて假に無明と名く。愛・取・有等皆此の相に屬すと。此の思惟を作す時、自心内を見るに、衆くの華樹の端に漸漸に火起つて金剛雲を燒く。一一の雲は諸の葉間に於て火と合體して身内に遍滿す。身内に滿ち已つて地火倶に動き一床に遍滿す。一床に滿ち已つて一房に遍滿す。一房に滿ち已つて一庭に遍滿す。一庭に滿ち已つて一城に遍滿す。一城に滿ち已つて漸漸に廣大して十頃に遍滿す。十頃に滿ち已つて百頃に遍滿す。百頃に滿ち已つて一由旬に滿つ。一由旬に滿ち已つて二由旬に滿つ。二由旬に滿ち已つて三由旬に滿つ。三由旬に滿ち已つて四由旬に滿つ。四由旬

微水を出して琉璃の氣の如く、漸漸に增廣して白色の雲に似て身內に遍滿す。身內に滿ち已つて六根より出でて、頂上に涌出し身を遶ること七匝し、白雲の行くが如く滴滴として水を雨らす。其の水柔軟にして一床に盈滿す。一床に滿ち已つて漸漸に廣大し一房內に滿つ。一房に滿ち已つて一庭中に滿つ。一庭に滿ち已つて一城中に滿つ。一城に滿ち已つて十頃の地に滿つ。十頃に滿ち已つて百頃の地に滿つ。百頃に滿ち已つて一由旬に滿ち、水色正白にして白琉璃の光りの如し。其の氣微細にして凡夫眼根の境界を過ぐ。漸漸に廣大して二由旬に滿つ。二由旬に滿ち已つて三由旬に滿つ。三由旬に滿ち已つて四由旬に滿つ。四由旬に滿ち已つて五由旬に滿つ。五由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して十由旬に滿つ。十由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して百由旬に滿つ。百由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して一閻浮提に滿つ。一閻浮提に滿ち已つて漸漸に廣大して三千大千世界に遍滿し、上は三界の頂に至り下は金剛際に至る。是くの如きの水相、其の氣、雲の如くにして還つて頂より入る。

此の事を見已つて復た更に火大を觀ぜしむ。火大を觀ずとは、自ら身內を觀ずるに心華樹の端の諸の華葉間に、微細の火ありて猶ほ金光の如く、心端より出でて身內に遍滿し、毛孔より出でて漸漸に廣大して一床に遍滿す。一床に滿ち已つて一房內に滿つ。一房に滿ち已つて漸漸に廣大して一庭中に滿つ。一庭に滿ち已つて一城中に滿つ。一城に滿ち已つて十頃の地に滿つ。十頃の地に滿ち已つて百頃の地に滿つ。百頃の地に滿ち已つて一由旬に滿ち、火色白く變じて眞珠の光りの如く、更に復た鮮白にして頗梨雪山も比と爲すを得ず。紅光照錯し以て文章を成ず。漸漸に廣大して二由旬に滿つ。二由旬に滿ち已つて三由旬に滿つ。三由旬に滿ち已つて四由旬に滿つ。四由旬に滿ち已つて五由旬に滿つ。五由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して百由旬に滿つ。百由旬に滿ち已つて漸漸に廣大して閻浮提に滿つ。閻浮提に滿ち已つて漸漸に廣大して三千大千世界に遍滿し、上は三界の頂

不壞にして、[三六]如實際に同じ。凡夫は愚擬にして老死の大賊の爲に追逐せられて妄見顚倒す。顚倒を以ての故に三塗愛欲の河中に墮落し、駛水の爲に漂はされて三界に沒溺す。我れ今云何んが凡夫行に同じうして妄想もて佛を見ん。我が大和上釋迦牟尼佛は、往昔の時、頭目・髓腦・國城・妻子を持用て布施し、百千の苦行もて解脱の法を求め、今者已に生死を超越することを得て大涅槃に住し、寂滅究竟して更に復た生ぜず、過去佛の法の如く常樂の處に住し、亦去來なく諸智を現在して、身心不動にして恬怕無爲なり。此くの如く智慧成就する所の身は、當に何の想かあるべき、云何んが變動せんや。我が今見る者は妄想より現じ、諸の因緣に屬す。故に是れ顚倒せる色相の法なりと。是の思惟を作す時、一切の諸佛及び諸の賢聖は、寂然として身を隱し更に復た現ぜず。唯だ一佛のみ在して、四大弟子ありて以て侍者と爲る。

[三七]爾の時、釋迦牟尼世尊は、行者の爲に更に四大淸淨の觀法を說かんとして告げて言はく、法子よ、過去三世の諸の賢聖等は此の行を觀ずる時、自然に皆風大の觀法を觀ず。風大を觀ずとは、先づ身内を觀ずるに、心華樹より一微風を生ず。是くの如き微風は漸漸に增長して身體に遍滿す。身體に滿ち已つて毛孔より出で一房内に滿つ。一房に滿ち已つて、此の微風の一庭内に滿つるを見る。一庭に滿ち已つて、復た漸漸に一頃地に滿つるを見る。一頃に滿ち已つて、復た更に增廣して一由旬に滿つ。一由旬に滿ち已つて二由旬に滿ち、二由旬に滿ち已つて三由旬に滿ち、三由旬に滿ち已つて四由旬に滿ち、四由旬に滿ち已つて五由旬に滿ち、五由旬に滿ち已つて此の如く漸漸に廣大して十由旬に滿つ。微風纔かに動いて漸漸に廣大して三千大千世界に遍滿し、上は頂に至り下は金剛際に至る。此の諸處に遍じ已つて還た頂より入り、其の心樹の一切の華葉をして漸漸に萎落せしむ。自ら己身を見るに頗梨鏡の如く表裏映徹す。

爾の時、復た當に水大を觀ぜしむべし。水大を觀ずとは先づ身内を觀ずるに、心華樹の端より一

【三六】如(Tathatā)は、法の有の儘のこと、眞如と譯すが普通なり、實際(Koṭi)は、法の眞實なること。

【三七】此の一段は四大觀を示す。

【三三】爾の時に復た當に更に數息を教ふべし。一を數へて二隨ひ、二數三隨し、三數四隨し四數五隨し、五數六隨し六數七隨し、七數八隨し八數九隨し、九數十隨し十數百隨し、百數千隨し、息の多少に隨つて氣を攝して住せしむ。爾の時に自ら己身を見るに、百千萬億の蓮華の一切萎脆するが如く、四面より風來り萎華を吹き去つて變じて琉璃と成り、琉璃器の如し。自ら其の心を見るに大華樹の如く、下方金剛際より乃至三界の頂上に四葉あり。其の葉は微妙にして如意珠の如し。六種の光ありて三千大千世界を遍く照す。行者此の事を見る時、金剛地際乃至上方三界の頂を見るに、中に滿てる諸佛は大弟子眷屬に圍遶せらる。或は諸佛あり、虛空に飛騰し身上に水を出し、身下に火を出し、身下に水を出し身上に火を出し、東踊西沒し西踊東沒し、南踊北沒し北踊南沒し、中踊邊沒し邊踊中沒し、或は大身を現じて虛空中に滿たし、大は復た小を現じて芥子許の如く、變現自在にして隨意無礙なり。或は諸の聲聞の四大の定に入るを見るに、身は火聚の如く、諸の火焰の端は猶ほ金筒に衆色の水を盛るが如し。復た己身の彼の如く入定するを見る。爾の時に當に行者に教へて是の言を作すべし。汝の見る所は是れ多くの佛及び諸の聲聞なりと雖も、汝今當に此の諸世尊は、是れ無相身なり、是れ大解脫なり、是れ無學果なりと觀ずべし。應當に善く汝の心を攝して、前の如く數息すべし。此の數息法に【三四】十六科あり、具に說くべからず。

【三五】爾の時に行者既に數息し已つて、心意恬怕にして寂然無見なれば、復た當に更に心蓮華を觀ぜしむべし。(心蓮華は)猶ほ華樹の如く樹上に葉あり、摩尼珠の如く六種の光を現はす。其の光は明顯にして三界の頂より下方金剛地際を照す。心華樹を見るに茎は絕えなんと欲す、然も深きこと無量なり。爾の時當に諸佛の法身を觀ずべし。諸佛の法身は色身に因つて有り。色身は譬へば金瓶の如く、法身は摩尼珠の如し。應當に諦觀すべし。色身の內の十力・四無所畏・十八不共法・大慈・大悲・無礙解脫・神智・無量・絕妙境界は、眼の所見に非ず、心の所念に非ず。一切諸法は無來無去、不住

【三三】此の一段は數息觀を示す。

【三四】十六科は、十六特勝のこと、修行道地經卷五、坐禪三昧經卷上を見よ。

【三五】此の一段は法身觀を示す。

は識を緣じ識は名色を緣じ、名色は六入を緣じ六入は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ愛は取を緣じ取は有を緣じ、有は生を緣じ生は老死憂悲苦惱を緣ずと。

爾の時に行者は内に自ら思惟す。此の無明は何處より來りて、孚乳產生し三界に遍滿するやと。此の無明を觀ずるに、地大を假りて成長するを得、風大に依つて動搖を得、地大に因つて體堅く不壞なり。火大は照育し、水は衆性を成ず。是の如き動作あり。風性は住せず、水性は隨流し、火性は炎盛し、地性は堅鞕なり。此の四大の性は二上二下、諸方も亦二なり。東方は色陰の性を成じ、南方は受陰の性を成じ、西方は想陰の性を成じ、北方は行陰の性を成じ、上方は識陰の性を成ず。此の五受陰は無明に依つて有り。觸より受生じ、樂觸の因緣は諸受を生ず。受の因緣は愛・取・有を生じ、有の因緣の故に三界に生れて九十八使及び諸の結業は衆生を纒縛して出期あることなし。是くの如く諸業は無明より有り。癡に依つて愛生ず。此の無明は本相の出る所何よりして生じ、三界に遍布して諸の衆生に於て大纒縛を爲すや。我れ今應に無明識相は何處より起るやを觀ずべし。此の無明は是れ地大と爲すや、地大を離ると爲すや、地と合すと爲すや、地より生ずと爲すや、地より滅すと爲すや。地性は本と空なり、地を推すに主なし。云何んが無明なりや。(無明は)癡愛の想を起して行を緣じて有り。而らば此の諸行及び愛・取・有は風より起ると爲すや、水より生ずと爲すや、火の照す所と爲すやと。此くの如く四大を一一諦觀するに、此の諸大は實に性相なく如實際に同じ。云何んが諸の衆生を牽いて三界に纒在し、大煩惱の燒然する所と爲すやと。此の思惟を作し已つて、生死を怖畏し生天の樂を患ふ。諸の天宮を觀ずるに夢の如く幻の如く、露の如く電の如く、呼聲の響の如し。普ねく一切三界の衆生を見るに、猶ほ環旋の如く苦を受くること無窮なり、此の事を見已つて愁憂して樂しまず。世間は駛水の流るるが如し、涅槃道を求めて刹那刹那の頃に解脫を欲求す。

二九 佛、阿祇達に告げたまはく、若し行者ありて此の事を見已らば當に慈心を敎ふべし。慈心を敎ふとは地獄を觀ぜしむ。爾の時に行者は卽ち十六地獄の火車・爐炭・刀山・劍樹に苦を受くる衆生を見るに、皆是れ己が前身の父母宗親眷屬、或は是れ師徒諸善知識なり。一一の人を見るに阿鼻地獄の猛火に身を燒き、或は復た人あり、節節に火然え、或は劍樹に上り、或は刀山を踏み、或は鑊湯に投じ、或は灰河に入り、或は沸屎を飮み、或は熱鐵丸を噉み、或は融銅を飮み、或は鐵床に臥し、或は銅柱を抱き、或は劍林に入つて、身を碎くもの無數なり。或は眼を挑る者無數にして、熱銅丸を持つて眼睚中に安ず。或は餓鬼を見るに身形長大にして數十由旬、火を噉み炭を噉み、或は膿血を飮むで變じて融銅と成り、擧體に火起りて足跟より銅流る。或は闇冥なる鐵圍山間を見るに、中に滿てる衆生の狀、羅刹の如く更に相食噉す。諸の夜叉を見れば裸形にして黑く瘦せ、雙牙上出して頭上に火然え、首は牛頭の如く、角端より血を雨らす。復た世間の虎狼、師子、諸の惡禽獸の更に相噉食するを見る。復た一切諸の畜生の苦を見、或は阿修羅の耳鼻を割截して、諸苦事を受くるを見る。復た三界の一切衆生の欲の爲に使はれ、悉く苦惱を受くるを見る。三〇無想天を觀ずるに猶ほ電幻の如く、久しからずして當に大地獄中に墮すべし。要を擧げて之を言へば、三界三一二十五有の一切衆生は皆三塗苦惱の業あり。

三二 爾の時に行者は、三界に苦を受くるの衆生を觀見して、其の心明了なること掌中を觀るが如く、深く慈悲を起して憐愍心を生じ、諸衆生の宿行惡業の故に惡報を受くるを見る。此の事を見已つて悲泣して涙を雨らし、救護を生ぜんと欲し、其の心力を盡すも救濟すること能はず。爾の時心中に極めて憐愍を生じ、生死を厭患し久しく處るを願はず。心に驚怖を生ずること、人の刀を捉へ來つて己を害せんと欲するが如し。此の事を見已つて更に慈悲を起し、苦を拔かんと欲すれども之を奈何ともするなし。爾の時行者は内に自ら思惟す。是の諸の衆生は無明に因る。無明は行を緣じ行

【二九】此の一段再び慈心觀を說く。

【三〇】無想天(Asañjñāsattva-deva)は、色界の第四禪にあり、外道は無想定を修して此の天に生れ永く無心の狀態に入るを以て理想となす。

【三一】二十五有は、三界を開いて欲界を十四有、色界を七有、無色界を四有となせしもの、有は生死の果報の實に存する意なり。

【三二】此の一段は十二因緣觀を示す。

[二四]佛、阿祇達に告げたまはく、諦に聽け諦に聽け、當に善く之を思ふべし。如來今者、汝阿祇達に因つて、普ねく未來世の一切衆生の爲に、廣く阿那含より阿羅漢に至ることを說くべし。其の中間に於ける所有微細の一切の境界は當に自ら分別すべし。若し風病多き者は、風大定に入る時、風大に因るが故に喜んで狂病を發しなば、當に佛を觀ぜしむべし。佛を觀ぜしむとは、如來の[二五]十力、四無所畏、[二六]十八不共法、大慈大悲、三念處法を觀ぜしむ。此の法を觀ずる時、自然に無量の色身の微細の妙相好を見ることを得。或は諸佛あり、空中を飛騰して十八變を作す。或は諸佛あり、一一の相好普ねく無量百千の變化を現ず。此の事を見る時、當に恭敬供養の心を起し、香華想を作して普ねく諸佛に散ずべし。然る後、復た當に自ら思惟して言ふべし。我が今身中の五陰四大は皆悉く無常なり、生滅して住せず。結使の枝條及び使の根本は皆悉く無常なり。我が念ずる所の者は、佛の十力・四無所畏・十八不共・大慈・大悲を念ず。是くの如き功德は色身を莊嚴す。猶ほ寶瓶に如意寶珠を盛るが如し。寶珠の力の故に此の瓶に映飾す。珠に我所なく瓶も亦住するなし、但だ衆生の爲にす。佛も亦是の如し、色性と色像とあることなく、解脫清淨なり。云何んが我れ今如來の十力（卽ち）是處非處力乃至漏盡力、十八不共法、大慈・大悲を諦觀せんや。云何んが更に無量の色像を見んと。此の想を作し已つて眞金の像の娑婆世界に滿ちて、行住坐臥の四威儀中に、皆苦・空・無常・無我を說くを見る。此の事を見ると雖も復た當に意想を起すべし。是の諸佛は皆是れ戒・定・慧・解脫・解脫知見・十力・四無所畏・十八不共法・大慈・大悲・[二七]三念處、此くの如き功德の共に合成する所にして云何んが色あらんと。此の想を作す時、一一諦觀して一切の佛の身心を無礙ならしめ亦色想なし。自ら己身を見るに空中の雲の如く、五受陰を觀ずるに諸の性相なく、豁然として歡喜す。復た還た身を見るに蓮華聚の如く、周匝して三千大千世界に遍滿し、諸の坐佛の己が華上に坐して、爲に甚深の空・無我・無願・無作・聖賢の[二八]十四境界門を說くを見る。

[二四] 此の一段は念佛觀を示す。

[二五] 十力、四無所畏は修行道地經卷六の註を見よ。

[二六] 十八不共法は、佛に限りて有する德にして、一、身無失、二、口無失、三、念無失、四、無異想、五、無不定心、六、無不知已捨、七、欲無減、八、精進無減、九、念無減、十、慧無減、十一、解脫無減、十二、解脫知見無減、十三、一切身業隨智慧行、十四、一切口業隨智慧行、十五、一切意業隨智慧行、十六、智慧知過去世無礙、十七、智慧知未來無知無礙　十八、智慧知現在世無礙なり。

[二七] 三念處法は、三念住とも云ふ、佛衆生を濟度するに大悲心を以て常に正念に住することにて、第一には衆生佛を信奉するも正念に住して敢えて喜ばず、第二には衆生佛を信ぜざるも正念に住して憂へず、第三には一類の者は信じ一類の者は信ぜざるも正念に住して喜もなく憂もなきこと。

[二八] 十四境界門とは、十四變化のことなるべし、佛菩薩神足通を得て色界の四禪に於て十四種の變化を作す、

願はくは我れ成佛する時、普く諸の天人を度し、身心罣礙なくして　普ねく一切を慈愛し、亦汝等を度し、諸の衆生の類をして、皆大涅槃に住して　永く快樂を受けしめん。

爾の時に太子は此の偈を說き已るや、諸天は華を雨らして持以て供養す。復た無量百千の珍寶を雨らし、積んで宮牆に滿たす。太子得已つて持用て布施し、布施して止まず。諸波羅蜜を修して皆悉く滿足し、佛爲ることを成じ得たり。佛、迦葉に告げたまはく、爾の時の波羅奈國王とは、我が父王閱頭檀是れなり。爾の時の月音長者は、今の汝摩訶迦葉是れなり。爾の時の長者の子とは、今の阿祇達比丘是れなり。爾の時の忍辱鎧太子とは、今我れ釋迦牟尼佛是れなり。爾の時の帝釋とは、今の舍利弗是れなりと。

〔三二〕佛、迦葉に告げたまはく、此の阿祇達比丘は乃往過去に、風大動ぜるが故に發狂して無知となる、是の故に今者四大定に入るも風定中に於て心疑つて行ぜず。設使此の人風大定に入つて四大を觀ぜば、頭破れて七分し心裂けて死せん。當に此の人をして慈心を修せしむべしと。爾の時に世尊は阿祇達に告げたまはく、汝今當に一切の衆生は悉く五苦の爲に逼切せらるるを觀ずべし。汝今應當に大慈心を生じて、衆苦を免れしめんと欲し、色・受・想・行・識は悉く皆無常・苦・空・無我なるを觀ずべしと。阿祇達は佛の此れを說くを聞いて豁然として意に解し、時に應じて即ち阿羅漢道を得、三明六通、八解脫を具せり。即ち佛前に於て身を空中に踊らして十八變を作す。十八變を作し已つて、空中より下つて佛足を頂禮し白して言く。世尊、如來今我が爲に往昔の因緣を宣說し、及び慈心を說き廣く四諦を演べたまふ。我れ佛力に因り、尋いで時に即ち三界の結業を破り阿羅漢を成ぜり。唯だ願はくは天尊、未來世濁惡の衆生は惡業の罪の爲の故に〔三三〕五濁世に生じ、此くの如き衆生若し頭陀行諸禪定を修して阿那含を得るも、我の如く心疑ひて停住して行ぜずんば、當に何法を修して苦際を離るるを得べけんやと。

【三二】此の一段は慈心觀を說く。

【三三】五濁は、一、劫濁、極めて末世に至れば人の機根濁惡となり、二、見濁、誤謬の思想、三、煩惱濁、四、衆生濁、五、命濁、壽命極めて短縮することなり。

欲するや。且らく須臾を忍べ。當に長者の爲に大方便を作すべしと。爾の時に長者は太子の勅を聞いて心大いに歡喜し、太子の足を禮して還つて家中に至り、象に其の子を負はしめ太子に送與せり。太子見已つて醍醐もて之に灌げり。

爾の時に仙人は太子に告げて言く、設ひ此の藥を以て此の男子に灌ぎ、九十日を經とも終に差ゆべからず。要らず慈心無瞋人の血を得べしと。爾の時に太子は內に自ら思惟すらく、我が身を除いて外に其の餘の衆生は、皆當に瞋を起すべし。我れ今此が爲に諸の病苦を救ひ、生死の命を濟ひ、誓つて佛道を求め、未來世に於て若し成佛するを得ば、亦當に此の法身常命を施すべしと。此の誓を作し已つて卽ち身を刺し血を以て彼の大長者の子に塗り、骨を破り髓を出して之に與へ服せしむ。長者の子は服し已つて病除愈するを得たり。是の時太子は骨破れるを以ての故に迷悶して地に躄せり。爾の時に天地六種に震動し、釋梵、護世の無數の天子僉然として俱に下り、太子の所に到り太子に告げて言く、汝今身を以て病める衆生を濟ふ。何等を求めんと欲するや。帝釋・魔王[一〇]・梵天・轉輪聖王を求めんが爲なりや。三界の中にて何等を求めんと欲するやと。

爾の時に太子は帝釋に白して言く、我が今求むる所は亦三界の中にて尊榮豪貴を欲せず。我が求むる所は乃ち、願はくは[一一]阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲すと。爾の時に帝釋此の語を聞き已つて、太子に告げて言く、汝今身を刺し骨を破つて髓を出し、身體戰掉するに慨恨ありや不やと。爾の時太子卽ち誓願を立つ、我れ始め身體を刺してより乃ち今に至るまで、若し慨恨の大いさ毛髮の如きすらなくんば、我が身體をして平復すること故の如くならしめよと。此の誓を作し已つて、身體平復すること前の如く異ることなし。爾の時に帝釋は此の事を見已つて、太子に白して言く、太子の威德は奇特無比なり、强大の志ありて必らず成佛することを得べし。太子成佛する時、願はくは先づ我を度したまへと。此の誓を作す時太子默然として偈を說いて言く。

【一〇】魔王は、天魔の王にして欲界の他化自在天王のこと。

【一一】Anuttarasamyaksambodhi 無上正等覺と譯す。

種に示現し衆生を教化す。人を度すること周く訖りて、像法[17]中に於て一大國あり。波羅奈[18]と名け、王を梵摩達多[19]と名く。王に太子あり、忍辱鎧と名く。堅く甚深の阿耨多羅三藐三菩提心を發して一切種智を求む。自ら不殺を誓つて十善業を修し六波羅蜜に於て疲厭の心なし。時に彼の國に一長者あり。日月音と名け自在無量なり。唯だ一子ありて忽ち熱病に遇ひ、風大心に入りて、狂亂無智にして手に利劍を執り、走つて巷陌に入り衆生を殺害す。時に彼の長者は子を愛念するが故に手に香爐を擎げ、四城門外に至つて燒香散華し、大誓願を發して是の言を作して言く。世間に若し神仙・聖人・醫師・呪師の能く我が子の狂亂病を救ふ者あらば、一切の所有を悉く用て奉施せんと。爾の時に太子は城を出でて遊戲し、大長者の慈心を修して、子の爲に願を求むるを見て、心に歡喜を生じて是の言を作す。此の大長者は慈心を勤修し、普く一切の爲にす。而も長者の子は大重病に遇ふ。願はくば諸神仙必らず慈悲を興して此處に來至し、長者の子を救はんことを。語る頃卽ち一大仙人ありて、雪山より、空に騰つて至る。名けて光味と曰ふ。長者の所に至り長者に告げて言く。汝の子の患ふ所は熱病より起る。熱病に因るが故に大瞋恚を生じ、心脈悉く開き風大心に入る。是の故に發狂せり。此の如き病者は仙經に說くが如きんば、風大動ずれば當に無瞋の善男子の心血を須ひ、以用て身に塗り、善人の髓を須ひ服すること大豆の如くすべくんば、除愈するを得べしと。爾の時に長者は仙人の說を聞いて、卽ち路中に於て太子を頂禮し白して言く、地天大仙人我が子の所患を說くらく、當に慈心無瞋人の血及以び骨髓を用ふべくんば乃ち差ゆるを得べしと。我れ今正に自ら我が身を刺して、血を出して子に食はしめ、骨を破つて髓を出し、持つて與へて服せしめんと欲す。唯だ願はくは太子、此の事を聽許したまへと。

爾の時に太子は告げて言く、長者、我れ佛の說を聞くに、若し衆生ありて父母を苦惱せしむれば、大地獄に墮して出期あることなしと。云何んが長者、自ら身體を破つて子をして差えしめんと

【一七】像法とは、佛滅後に佛法の次第に衰ふるを正、像、末の三期に分つ中の第二期なり、普通は正法五百年の後に像法五百年又は千年と云ふ。

【一八】波羅奈(Vārāṇasī)は、鹿野園のありし所、今のベナレスの地なり。

【一九】梵摩達多(Brahmadatta)。

を得たり。增進して阿羅漢を成ずること能はず。卽ち生より起ちて迦葉の所に至り、衣服を整へて叉手合掌し、摩訶迦葉を頂禮して白して言く、和上、我れ和上に隨つて勤修精進すること頭燃を救ふが如くにし、已に九年を經たり。今阿那含果に住するを得るも身心疲懈し、無上解脫に增進すること能はず。唯だ願はくは和上、我が爲めに速かに說きたまへと。

爾の時に摩訶迦葉は卽ち三昧に入つて比丘の心を觀ずるに、此の比丘の諸漏を盡さず、此より命終して阿那含天に生ずることを知り、三昧より起つて告げて言く、法子、我れ今身心一切自在なり。自在三昧に入つて汝が宿世の所有ゆる業報を觀ずるに、此の身上に於ては羅漢道を成じ得るの緣なしと。阿祇達多此の語を聞き已つて、悲泣して淚を雨らし白して言く、和上、我の如きは今は生天を樂はず。困病の人の求むるに常力なきが如く、我れ生死を畏るるも亦復た是の如しと。爾の時に迦葉告げて言く、法子、善い哉善い哉、善男子、夫れ生死の惡は猶ほ猛火の一切を燒滅するが如く甚だ厭患すべし。我れ汝の根を觀ずるに明審なるを得ず。又復た世尊は諸比丘と祇陀林に在り。我れ今汝と倶に佛所に往かんと。時に彼の比丘は衣を著け鉢を持して、迦葉の後に隨ひ、祇陀林に詣して佛所に到る。佛世尊を見るに、身は金山の如く大衆の中に處して威德自在なり。三十二相、八十種好皆悉く備足す。(迦葉は)佛の爲に禮を作し、佛を繞ること七匝して、却つて一面に住し、[一四]胡跪合掌して白して言く、世尊、我が此の弟子阿祇達多は我が後に隨從して、十二頭陀を修し深禪定に住して阿那含に至るも、增進して煩惱海を竭すこと能はず。唯だ願はくば天尊、爲に甚深なる灌頂甘露の淨解脫行を說きたまへと。

[一五]爾の時に世尊は阿祇達多に告げて言く、善い哉、善い哉阿祇達、快く是の事を問ふ。吾れ當に汝の爲に分別解說すべし。諦聽し善思せよ。乃ち往ける過去無央數世の彼の世に佛あり。大光明如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名く。彼の佛、出世して[一六]三

に關す欲塵を打ち拂ひて修行すること、普通十二頭陀と云ふ、一、在阿蘭若處、二、常乞食、三、次第乞食、四、受一食法、五、節量食、六、中後不得飲漿、七、著弊衲衣、八、但三衣、九、塚間住、十、樹下止、十一、露地坐、十二、但坐不臥なり。

【一四】胡跪は、胡人跪坐の義にして敬禮の爲めに跪くこと、多くは右膝著地を正儀とす。

【一五】此の一段は忍辱鎧太子の本生を說く。

【一六】三種示現とは、佛が衆生を敎導する上の三種の妙用を云ふ、一神變示現(Riddhi-prātihārya)は身に神通を現はすこと、二記心示現(Ādeśana-p.)は衆生の心に思ふことを知りて適當に導くこと、三敎誡示現(Anuśāsanī-p.)は眞理を敎へ導くこと。

し、他人の見るを慮るも、他人其の實は此の事を見ず。入定の時、心明なるを以ての故に、三千大千世界の麁相を見、閻浮提須彌山及び大海水を見て悉く皆了了たり。復た大海水中の摩尼珠王を見るに、其の摩尼珠王は諸火を焔出す。此の事を見已つて、爾の時佛、其の爲に廣く〔六〕九次第定を說くを見る。九次第定は〔七〕九無閡〔八〕八解脫、此の如き等の觀を豫受するを須ひず。佛現前するが故に佛自ら爲に說く。其の利根の者は、佛の說法を聞いて、九無礙道中に時に應じて卽ち阿羅漢道を得、〔九〕阿那含地を超越す。好白氎の染めて色を爲すこと易きが如し。

若し鈍根の者ならば、復た當に更に風大觀法を敎ふべし。風大觀法とは一切の風を見て極めて微細と爲し、細中の細なる者は、心眼を以て見るべく具に說くべからず。風復た火を雜へ、火復た風を雜ふ。水火中に入り、風水中に入り、火風中に入る。風火水等各毛孔に隨つて如意自在なり。或は復た風あり、十色を具足して十寶光の如く、身の毛孔より出でて頂上より入り、臍中より出でて足下より入り、一切の身分中より出でて眉間より入り、眉間より出でて一切の身分より入る。此の如く種種無量の境界、(卽ち)賢聖の光明、賢聖の種子、諸の賢聖の法は皆此の風大中より起り此の風大中より入る。此の風大觀は相貌微妙なる境界を具足す。唯だ阿羅漢のみ能く廣く分別し、具に說くべからず。行者坐する時に當に自然に見るべし。若し此の事を見ば諸の煩惱を練つて阿那含を成ず。此の風大觀を第三十の阿那含相應の境界の相と名く。佛、阿難に告げたまはく、汝好く是の阿那含相應の最勝の境界なる風大觀法を受持して、愼んで忘失すること勿れと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

〔一〇〕是の如く我れ聞く。一時、佛は舍衞國の祇樹給孤獨園に在して、千二百五十の比丘と俱なりき。爾の時に尊者摩訶迦葉に一の弟子あり。是れ王舍大城の〔一一〕苦行尼揵子の兒にして〔一二〕阿祇達多と名く。尊者摩訶迦葉を求めて出家學道し、苦行を修行し、〔一三〕十二頭陀を具し、五年を經歷して阿那含果

【六】九次第定とは、色界の四禪(初禪、二禪、三禪、四禪)と無色界の四定(空無邊處定、識無邊處定、無所有處定、非想非々想定)と及び滅盡定とを云ふ。

【七】九無閡とは、九無間道のことにて、欲界を一とし、色界無色界を各々四として、全體にて九段となして、八十一品の修惑を斷ずるを云ふ。

【八】八解脫は、本經中卷の註に出だす。

【九】阿那含(Anāgāmi)は、不還と譯す、一來果の次ぎに達する位にして、向と果とあり。不還とは、最早欲界に還り來らぬ意なり。阿羅漢(Arhat)は無學と譯す、不還果の次に達する位にして、全く三界を出離し最早學ぶべきことなき故に無學と云ふ、之れにも向と果とあり。以上須陀洹以來四向四果の位となす。

【一〇】以下段落改まりて祇園精舍に於ける阿祇達多の得道。

【一一】大正本は苦得とあれど、宋、元、明本によりて苦行と改む、尼揵子(Nirgranthaputra)は、六師外道の一派にして耆那教之れなり。

【一二】阿祇達多(Agnidatta)。

【一三】頭陀(Dhūta)は、抖擻(うちはらふ)と譯す、衣食住

の事を見る時出定にも入定にも恒に身を見ず。入定の時、外人亦水の毛孔より出で毛孔より入るを見る。貪婬多き者は火の頂上より入りて身根より出で、然る後に身體に遍滿るを見ん。水も亦然なり。復た當に自ら頭上の火の閻浮檀那金の光雲蓋の如きを觀ずべし。或は身下を見るに七寶華の如く、心中恬靜に安隱快樂にして、世間の樂事は以て譬と爲すものなし。出定の時も身亦安樂にして、外の衆生を見せしむ。已に禪定三昧安隱なれば金光金色の帝釋諸天恭敬禮拜し並びに言く、大德、汝今苦盡き、必定して當に斯陀含果を成ずべしと。聞き已つて歡喜し身に禪定を修して心に繫礙なく、安隱快樂にして無我三昧中に遊戲す。亦漸く空三昧門に入り無願・無作諸三昧等悉く現在前す。此の如き微妙善勝の境界は、行者坐する時禪定中に於て自然に分別せん。若し鈍根の者には大師世尊現前して爲に說かん。佛を見るを以ての故に聞法歡喜し、時に應じて即ち斯陀含道を得。復た當に至心に前觀を覆尋して二十五反を經、極めて明利ならしむべし。

佛、阿難に告げたまはく、汝好く此の第二十九の水大觀を持して。愼んで忘失すること勿れ。此の觀を得れば亦斯陀含と名け、亦善往來と名く。往宿世の善根業の因緣の故に、善知識淸淨法の行に遇ふて、汝乃ち當に此の斯陀含道を得べしと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[五] 佛、阿難に告げたまはく、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷ありて、若し此の微妙の水大觀を得已らば、復た當に更に安隱微妙なる最勝奇特の火大觀法を教ふべし。此の觀を作す時、自ら臍中の微妙の火光を見るに狀蓮華の如し。其の色の光明は百千萬億の閻浮檀那金を和合せるが如し。此の事を見已つて、復た當に更に身內の火を觀ぜしむべし。內火を觀ずる時、自ら心火を見るに、常に光明ありて百千萬億の明月神珠を過ぎ、心光淸淨なること亦復た是の如し。出定にも入定にも人の明火珠を持して行くが如く、他の見るを慮り恐れ、唯だ自心中に明了なること是の如く、他人は見ず。漸漸に大いに明にして身を見ること猶ほ頗梨の明鏡の如く、心を見ること亦明月神珠の如

【五】第三十微妙風大觀（阿那含を得）、若し利根の者は微妙火大觀によりて阿羅漢を生ず。

にして琉璃氣の如し。漸漸に廣大して三千大千世界に遍滿す。此の事を見る時、當に靜處に於て一心に安坐して、諸の同學に勅して皆清淨ならしめ、憒閙ならしめざるべし。爾の時復た當に水上に紫焰の起るを見るべし。當に自ら、此の水は何處より起るや、云何んが當に盡くべきや、若し我れ是れ水なりと言はば我が身は無我なり、前に已に無我を觀ず。今無法の中より水何によつて起るやと憶想すべし。是の念を作す時、水性は氣の如く、漸漸に頂上より沒す。水稍稍盡きて唯だ身皮在り。自ら己身を見るに極めて微薄と爲り、物として譬ふべきなく、微塵の草の束の如し。

復た身內を見るに忽然として火あり。身を燒いて都て盡く。身を觀ずるに所なく、永へに我あることなし。我と衆生と一切都てなし。爾の時に行者は心意恬怕にして極めて微細と爲り物の譬ふべきなし。此の想成ずる時、第二十七の眞無我觀と名く。亦滅水大想と名く。亦向　斯陀含[三]と名く。其の餘の微細なる賢聖の法界は、微妙難勝にして具に說くべからず。行者坐する時、諸三昧を修し。無我三昧を得る時當に自然に佛を見るべし。佛、阿難に告げたまはく、汝今好く是の眞實なる水大微妙の境界を受持し、廣く未來の一切衆生の爲に敷演し廣說せよ。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[四]佛、阿難に告げたまはく、此の觀を得已らば復た當に更に水大觀法を敎ふべし。此の水大觀は極めて微細と爲す。此の水大と火大とを合せしめ、身を見ること氣の如く琉璃の影の如し。臍の四邊を觀ずるに火焰倶に起る。火焰を見るに猶ほ日の映ずるが如し。若し臍上に火光の起るありて、或は鼻中より出づるあり、或は口中より出づるあり、耳、眼より隨意に出入するを見、若し此の事を見れば、一切の火の毛孔より出づるを見る。火出づるの後綠色の水ありて、尋いで火の後に從ふ。自ら身中を見るに水上り火下り、火上り水下りて身を觀ざるに身なし。此の想成ずる時、身の水火を見るに不溫不冷にして、身心寂爾として安住無礙なり。此を斯陀含果と名く。亦境界實相と名く。此

【三】斯陀含(Sakṛdāgāmi)は、一來と譯す、初果の次に進む位にして、向と果とあり。一來とは、今一度欲界に生を受くるの意なり。

【四】**第二十九境界實相觀**(第二十八を欠く。又之れ微妙水大觀にして、斯陀含果を得)。

たまはく、佛滅度の後四部の弟子比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、此の觀を作さば、第二十六の正觀と名く、亦得須陀洹道と名く。若し此の觀を得ば要らず當に審實に、身をして自然に五種の惡を離れしめ、[一]修多羅に合し、毘尼に違せず、阿毘曇に隨順すべし。此を須陀洹果の相と名く。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[二]佛、阿難に告げたまはく、若し行者ありて此の觀を得ば、宜しく當に密滅し妄りに宣傳すること勿るべし。但だ當に一心に勤行精進すべし。勤行精進し已らば復た當に更に地大を諦觀せしむべし。地大觀の法は亦上に說くが如し。地大を觀じ已つて次に水大を觀ぜしむ。水大を觀ずとは自ら已身の身中の諸水を觀ず。身は琉璃の如く剛强にして壞し難し。若し自身は悉く皆是れ水なりと見ば、當に易觀を敎ふべし。若し復た身は盡く琉璃と成るを見るも、亦易觀を敎ふ。地大を觀じて琉璃身をして猶ほ微氣の如くならしめ、水の眼中より現ずるを見る。若し此の事を見ば細微の四大觀と名く。

復た當に更に敎へて頭より已上に水をして中に滿たしめ、水は眼中より出でて亦地に墮ちずと見るべし。自ら已れの眼を見るに水上の沫の如く、亦水中に滿つ。若し此の事を見れば、頭水は溫ならず冷ならず調和して所を得。水若し溫ならば是れ假僞の觀にして、水色澄清ならば不溫不涼なり。次には當に更に腰より已上の水の不溫不冷なるを觀ぜしむべし。復た咽喉を觀ずるに琉璃筒の如し。水は胸中に入り次に下つて腹に至り、乃ち髀膝に至る。臂に入らしむること莫く、水をして澄清ならしむること頗梨精色の如くせよ。若し水の溫まるを覺ゆれば乃ち是れ眞觀なり。此の想成じ已らば、復た四支の諸節を通徹せしむ。水は皆中に滿つること、琉璃器を持用して水を盛るが如し。漸漸に廣大して一床に滿つるを見る。外人も亦見る。若し此の水清冷なるを見ば乃ち是れ眞水なり。若し餘の相を見ば眞實と名けず。水光三昧に入り漸漸に廣大して一室内に滿て、水皆澄清

【一】修多羅(Sūtra)は、經、毘尼(Vinaya)は律、阿毘曇(Abhidharma)は論、
【二】第二十七向斯陀含水大微妙觀、

なし。是の諸法の如く、復た七七四十九遍、心識は是れ敗壞の法なることを諦觀す。
爾の時に自ら己身を見るに白きこと珂雪の如く節節相拄ふ。復た當に更に自ら右手を以て此の身を摩觸せしむべし。身を見ること塵の如く、骨末は粉の如く、粉塵地の如し。尋いで復た更に敎ふ。身を觀ずるに氣の如くにして數息に從つてあり、身は氣嚢の如く暫らくも停ることあることなし。復た當に更に敎ふべし。尋いで自ら身を觀ずること前の如くして、還た一の白骨人と爲す。骨人を見已つて自ら己身を觀ずるに前の如く還た散ず。猶ほ微塵の如く人の粉を以て地に塗るが如し。尋いで地上を見るに靑色の骨人あり、復た前の如く觀ず。此の靑色骨人を(粉)末にして以用つて地に塗る。復た更に身を觀ずること靑微塵の如く、塵變じて骨人と成る。其の骨盡く黑し。復た當に前の如く(粉)末を以て地に塗るべし。復た自ら身を觀ずるに猶ほ黑地の如し。黑地の中を見れば四黑蛇あり　眼は赤うして火の如く、蛇來つて身に逼り、毒を吐いて害せんと欲するも害を爲すこと能はず。卽ち變じて火と爲り自ら己身を燒く。爾の時に空中に自然の聲ありて、恒に苦・空・無常・無我等の法を說く。此の事を見る時、一一の毒蛇の八十八頭は火の爲めに焚かる。此の事を見る時、空中に自然に水ありて毒蛇の身に灑ぎ衆火盡く滅し、八十八頭一切都て消ゆ。出定の時は身の安樂を覺えて恬怕無爲なり。復た當に更に敎ゆべし。自ら己身を觀ずるに、高大の想なし。尋いで復た身を見るに、自然に高大にして明顯觀るべくして七寶山の如く、自ら己心を見れば摩尼珠の如し。爾の時に復た當に上の如く空を觀ずべし。觀空を作す時、自ら己身の和悅、柔軟、快樂無比なることを覺らん、前の蓮華上の七寶の色光は己心に流入し、摩尼珠中に在つて滿足十過し、七支七色皆悉く具足す。自ら身の空を觀じて亦衆想なし。爾の時頂上に自然の光ありて金色雲に似たり、亦寶蓋の如く色は復た銀に似たり。頂上より入り摩尼珠の光上々覆ふ。出定にも入定にも恒に此の事を見る。此の事々見る者は、自然に不殺・不盜・不邪婬・不妄語・不飮酒なり。佛、阿難に告げ

爾の時に餓鬼は其の形長大なること數十由旬にして、足を擧げ足を下すに五百乘の車の聲の如く、行者の前に來たり至つて唱へて言く、飢ゑたり飢ゑたりと。爾の時に行者即ち慈心を以て乳を施し餓鬼に飲ましむ。飲む時口に至れば變化して膿と爲る。復た膿と爲ると雖も、行者の慈心を以つての故に即ち飽滿するを得。鬼の飽くを見已つて復た自ら身を觀ず。即ち自ら身を見るに足下に火出でて前の衆生及以び諸樹を燒き、泓然として都て盡く。

爾の時に若し衆多の異類を見ば、復た還た繫念して己身を諦觀し、心をして不動寂寞無念ならしめよ。既に念想なくんば當に誓願を發すべし。願はくは後世に生れて後有を受けず、世間を樂はずと。此の誓を作し已つて、尋いで前地を見るに猶ほ琉璃の如し。琉璃の下を見るに金色の水あり、自ら己身を見るに地と正に等しく水と色同じ。其の水溫暖にして水中に樹を生じ、七寶の樹の如し。枝葉蓊欝して上に四菓あり。菓聲は鈴の如く苦・空・無常・無我を演說す。此の聲を聞き已つて自ら己身を見れば、水中に沒し往いて樹所に趣く。諦かに自ら身を觀ずるに、頂上より水出でて琉璃の池中に彌滿し、忽然の頃に復た火の起るあり。火中に風を生じ猶ほ琉璃の如し。復た頂上を見るに、頂より堅强にして脚足に至り猶ほ金剛の如し。復た火の起るあつて、金剛を燒き盡し溫水枯涸す。尋いで更に身を觀じ我が前に身內を見れば、池中に忽然として樹あり、枝葉具足して樹端に菓あり。其の聲は鈴の如く苦・空・無常・無我・清淨の法を演說す。此くの如きの妙菓、好音聲ありて香味具足す。我れ今宜しく食すべしと。此の想を作し已つて即ち仰いで樹を攀ぢ、菓を取つて之を食ふに纔かに一菓を得たり。其の味甘美にして物の譬ふべきなし。既に菓を食し已つて樹の乾はき枯るるを見る。其の餘の三菓は尙ほ光明あり。菓を食するの後身心恬澹にして憂喜の想なし。自ら心識を觀ずるに是れ敗壞の法なり、從つて諸苦有り。諸苦の根本は識を因緣と爲す。今此の識を觀ずるに水上の泡の如く暫くも停ることあることなし、四大主なく、身に我あることなく、識に依止

卷の下

爾の時、復た當に自ら己身及以び他身を觀ずべし。我身も他身も顚倒より起り實には我所なし。若し我なる者あらば云何んが忽然として、此の餓鬼來つて我が邊に在るを見んと。爾の時に復た無量の餓鬼を見る。其の身長大にして無量無邊なり。頭は太山の如く咽は絲髮の如く、飢火に逼られて叫喚して食を求む。此の事を見已つて、當に慈心を起し身を以て鬼に施すべし。餓鬼得已つて其の體を噉食し即便ち飽滿す。是の事を見已つて復た當に更に衆多の餓鬼を觀ぜしむべし。諸の餓鬼を見るに身を繞ること四匝し、前の如く身を以て諸の餓鬼に食はしむ。此の事を見已つて復た身を攝し心をして散ぜざらしむ。自ら己身是れ不淨聚なることを觀ず。是の觀を作す時尋いで自ら身を見るに、膿血の諸肉皆段段に壞し、聚りて前地に在り、諸の衆生爭ひ取つて之を食ふを見る。既に是の事を見て復た當に自ら其の身を觀ずべし。(身は)諸苦より生じ諸苦より有り、是れ敗壞の法にして久しからずして磨滅し餓鬼に食はると。是の相を作す時、忽ち身內を見るに、心處に猛火ありて前池上の一切の蓮華及び諸の餓鬼を燒く。衆惡の醜形及び池水は泓然として都て盡す。

此の事を見已つて復た當に更に己身を諦觀せしむべし。前の如く完具し身體平復すれば、復た當に更に己身の一切の毛孔を觀ずべし。慈心を以ての故に血變じて乳と成り、毛孔より出でて地に在つて池の如く衆乳盈滿す。復た衆多の餓鬼、此の池上に至るも宿罪を以ての故に、乳を飮むことを得ざるを見る。爾の時に慈心もて鬼を視ること子の如く、乳を飮ましめんと欲するに、鬼の罪を以ての故に乳變じて膿と成る。斯の須くの間復た更に慈心をなし、慈心を以つての故に身の毛孔中より一切の乳出で、前に勝ること數倍なり。諸の餓鬼は飢苦に逼らるるに何ぞ來り飮まざるやと念ず。

に滿つ。此の想成ずる時、觀七覺華と名く。此の想を見ると雖も深禪定に於て猶ほ未だ通達せず。復た當に更に如上の數息を敎へ、心をして安隱に恬然無念ならしむべし。此の想成ずる時四大相應觀と名く。

佛、阿難に告げたまはく、汝好く是の七覺意四大相應觀を受持し愼んで忘失すること莫く、普く未來の一切衆生の爲に廣く分別し、諸の四衆の爲に敷演し解說すべしと。爾の時阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

六九 復た當に更に繫念し意をして住しめて、水大を諦觀すべし。(水大)毛孔より出でて其の身に彌漫し、出定にも入定にも身を見ること池の如し。其の水は綠色にして、此の如き綠水は山頂の泉に似て、頂より出でて頂に從つて入る。(池に)七華ありて、純ら金剛色にして金色の光りを放つを見る。其の金色の光りの中に金剛人あり。手に利劍を執つて前の六龍を斬る。復た衆火の龍口より出でて遍身に火然え衆水枯竭すれば火卽ち滅盡するを見る。水火滅盡し已つて自ら己身を見るに、漸漸に大白にして猶ほ金剛の如し。出定にも入定にも心意快樂にして猶ほ酥の灌ぐが如く、醍醐を服するが如く、身心安樂なり。復た當に更に繫念して他を觀ぜしむべし。外の境界を觀ずるに、外想を以ての故に自然に一樹あつて奇なる甘菓を生ずるを見る。其の菓は四色にして四光を具足せり。此の如き菓樹は琉璃樹の如く一切に彌漫す。此の樹を見已つて普く一切四生の衆生の飢火に逼られて、一切來り乞ふを見る。見已つて歡喜し憐愍心を生ず。卽ち慈心を起して此の乞者を見ること己の父母の大苦惱を受くるが如くす。我れ今云何んが當に之を救拔すべきやと。是の念を作し已つて卽ち自ら身を觀じて、前の如く還た膿血と爲し、復た肉段と爲し、持して飢者に施すに、是の諸の餓鬼は爭ひ取つて之を食ふ。之を食らひ旣に飽きて四散し馳走す。

【六九】次に己身觀の種々相を示す。

廣く分別し敷演し解說すべしと。阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。是を第二十五觀竟ると名く。

佛、阿難に告げたまはく、我れ火滅するを見る時、先づ鼻より滅し然る後身體一時に俱に滅す。身內の心火[六四]八十八結も亦俱に滅するを得。身中清涼にして調和の所を得、深く自ら覺悟し了了分明に無我を決定し、出定にも入定にも恒に身中に吾我あることなきを知る。此を滅無我觀竟ると名く。

[六五]佛、阿難に告げたまはく、復た當に更に灌頂の法を觀ぜしむべし。[六六]灌頂を觀ずとは、自ら己身を見ること琉璃の光の如くにし、三界を超出す。眞佛ありて澡瓶の水を以て頂より灌ぎ、身中に彌滿するを見る。身に彌滿し已つて支節にも亦滿ち、臍中より流れ出でて前地に在り。佛は常に水を灌ぐ。爾の時に世尊は灌頂し已つて卽ち滅して現れず。臍中より水出で猶ほ琉璃の如し。其の色は紺琉璃の光の如く、光氣は三千大千世界に遍滿す。水出で盡き已らば復た當に更に繫念せしむべし。願はくは佛世尊、更に我が爲に灌頂したまへと。爾の時に自然に身は氣の如く、麁大甚廣にして三界を超出するを見る。水の頂より入るを見、身の麁大にして水と正に等しく水中に滿てるを見る。復た自ら臍を見るに猶ほ蓮華の如く、涌泉流出して其の身を彌滿し、身を遶ること池の如し、諸の蓮華ありて一一の蓮華は七色の光明あり。其の光りは苦・空・無常・無我等の法を演說し、聲は[六七]梵音の如く耳根を悅可す。此の相現ずる時復た當に更に叉手閉目し、一心に端坐せしむべし。頂上より自ら身內を觀ずるに骨想を見ず。出定にも入定にも自ら己身を見るに琉璃の甖の如し。

[六八]復た當に念を起して、自己の心を四大毒龍の想ならしむべし。已心內を見るに毛孔の開くが如く、六種の龍ありて、一一の龍に六頭あり。其の頭は毒を吐きて猶ほ風火の如く池中に彌漫し蓮華上に在り。一一の華光は龍頂に流入す。光りの頂に入る時龍毒自ら歇み、唯だ大水ありて其の身內

【六四】八十八結は、八十八使とも云ふ、方便の修行終りて、初めて聖者の位に入り預流果を證する時に、斷ずる煩惱にして、五利使五鈍使の十結が基本なり。

【六五】第二十六、正觀得須陀洹道。

【六六】先づ灌頂法を說く。

【六七】梵音は、梵天の音聲にして五種清淨の妙音を具す。

【六八】次に四大相應觀を示す。

己身を見るに猶ほ芭蕉の如く皮皮相裹む。復た當に自ら衆の芭蕉の葉の猶ほ皮嚢の如きを觀ずべし。身內は氣の如く亦た骨を見ず。出定にも入定にも恒に此の事を見る。身體羸劣なれば復た當に更に教へて自ら身を觀ぜしむべし。還た聚めて一を成して乾草の束の如くすれば、身を見ること堅强なり。既に堅强を見れば復た當に酥を服すべし。飮食調適にして然る後に身を觀ずれば還つて空嚢に似たり。火あつて內より此の身を燒き盡す。身を燒き盡し已つて定に入る時恒に火光を見る。火を觀見し已つて四方に一切の火起るを見る。出定にも入定にも身熱して火の如く、此の火大の支節より起るを見る。一切の毛孔に火は中より出づ。出定の時も亦自ら身を見るに大火聚の如く、身體蒸熱して自ら持すること能はず。爾の時に四方に大火山あり。皆來たり合集して行者の前に在り。自ら己身を見るに衆火と合す。此を火想と名く。復た當に火をして身を燒き都て盡さしむべし。火既に燒き已らば入定の時、身を觀ずるに身なく、身を見るに悉く火の爲に燒き盡さる。火燒盡し已らば、自然に身中無我なるを知るを得。一切の結使も皆悉く同然にして具に說くべからず。此を火想眞實火大と名け、第二十四の火大觀竟る。佛、阿難に告げたまはく、汝好く是の火大無我觀を受持せよ。此の火大觀は智慧火と名け諸の煩惱を燒く。汝好く受持して未來世の一切衆生の爲に當に廣く敷演すべし。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[六三] 佛、阿難に告げたまはく、若し行者火大觀を得已らば、復た當に繫念思惟せしむべし。(まづ)鼻端を繫念して、更に此の火は何處より起るやと觀ぜしむ。此の火を觀ずる時、自ら己身を觀るに悉く我あることなし。既に我あることなくんば火は自然に滅す。復た當に念を作すべし。我が身は無我にして四大は主無し。此の諸の結使及び使の根本は顚倒より起る。顚倒も亦空たり。云何んが此の空法の中に於て横に身火を見んと。是の觀を作す時火と我と求覓するに所なし。此を火大無我觀と名く。佛、阿難に告げたまはく、汝好く此の火大觀を受持して未來世の一切衆生の爲に當に

【六三】 第二十五、身火滅觀(火大無我觀)。

に明淨にして、頗梨雪山も比と爲すことを得ず。自ら骨人を見るに各各離散す。此の觀を作す時、定心を久しからしめよ、心既に久しうし已らば、當に自ら頂上を見るべし。大光明あつて、猶ほ火光の如く腦處より出づ。佛、阿難に告げたまはく、若し此の事を見ば、便ち當に更に頭より足に至り、反覆往復すること凡そ十四遍せしむべし。此の觀を作し已らば出定にも入定にも、恒に頂上より火出でて眞金光の如く、身の毛孔中よりも亦金光を出し、粟金を散ずるが如く、身心安樂にして紫金の光明の如く、還た頂より入るを見る。此を頂法と名く。若し行者ありて此の觀を得る時は能く頂觀を得。佛、阿難に告げたまはく、汝好く是の頂觀法を受持し、廣く未來の一切衆生の爲に說けと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の觀を得ば第二十二の觀頂法竟ると名く。

六一 佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已らば復た當に更に繫念して、諸の白骨を觀ぜしむべし。(まづ)諸の散骨をして風の雪を吹くが如く聚めて一處に在き、自然に成積して白きこと雪山の如くせよ。若し此の事を見ば道を得ること難からず。若し先の身に戒を犯す者、今身に戒を犯す者あらば、散骨積んで猶ほ灰土の如きを見、或は其の上に諸の黑物を見ん。(その時)復た當に懺悔して智者に向つて自ら己の過を說くべし。既に懺悔し已つて骨積上を見るに、大白光ありて乃ち無色界に至る。出定にも入定にも恒に安樂を得て、本と愛樂する所は漸漸に微薄ならん。復た當に更に觀ずべし。前の如く覆導し九孔の膿流、不淨の物皆了了ならしめて心に疑悔なし。復た當に上の如く骨間に火を生じて諸の不淨を燒くべし。不淨已に盡くれば金光流出し還つて頂に入る。此の光り頂に入る時、身體快樂にして以て譬と爲すものなし。此の觀を得るを第二十三の觀助頂法方便竟ると名く。

六二 復た當に更に繫念して意を任せしむべし。自ら己身を觀ずるに猶ほ草の束の如し。出定の時亦

【六一】第二十三、助頂法方便觀。

【六二】第二十四、身火大觀。

爾の時に世尊は迦旃延に告げ及び阿難に勅したまはく、汝今應當に佛語を受持し此の妙法を以て普く群生を濟ふべし。若し後世愚癡の衆生、憍慢貢高なる邪惡の衆生にして、坐禪を欲する者あらば、初め迦絺羅難陀觀法より禪難提觀像の法に及び、復た當に此の槃直迦比丘所觀の法を學ぶべし。然る後自ら已身を觀じ、諸の白骨を見るに白きこと珂雪の如し。時に骨人還り來つて身に入り、悉く白骨の流光散滅するを見る。此の事を見已つて行者は自然に心意和悅し恬靜無爲なり。出定の時頂上溫暖にして、身の毛孔中より恒に諸香を出す。出定にも入定にも恒に妙法を聞き、續いて復た自ら見るに、身體溫暖にして悅豫快樂、顏貌熙怡にして、恒に少しく睡眠し身に苦患なし。此の暖法を得れば恒に自ら、心下溫暖にして、心常に安樂なることを覺知す。若し後世の人禪を學ばんと欲せば、初の不淨より乃ち此の法に至る。此の觀を得るを和暖法と名く。

佛、阿難に告げたまはく、佛滅度の後若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして濁世中に於て、正受思惟を學ばんと欲する者は、初め繫念して不淨を觀ずるより乃ち此の法に至る。是を暖法と名く。若し此の法を得ば第二十一の暖法觀竟ると名く。

佛、阿難に告げたまはく、汝今此の迦旃延子所問の暖法を持し愼んで忘失すること勿れと。爾の時に阿難は佛に白して言く、世尊、後世の衆生、若し能く是の三昧を受持する者ありて、一心安隱にして暖法を得ば、此の人は云何んが當に自ら覺知すべきやと。佛、阿難に告げたまはく、若し諸の結使の相を諦觀して初め不淨より乃ち此の法に至れば、自ら身心皆悉く溫暖に、心心相續して諸の惱患なく、顏色和悅なることを覺らん。此を暖法と名く。

復た次に阿難、若し行者あつて暖法を得已らば、次には當に更に繫念せしむべし。諸の白骨の間に在つて皆白光あり。白光を見る時白骨散滅す。若し餘の境界現在前せば、復た當に心を攝して還た白光を觀ずべし。諸の白光を見るに炎炎相次ぎて世界に遍滿す。自ら已身を觀ずるに復た更

【六〇】第二十二、頂法觀。

べし。人身中にて唯だ此の齒のみ白し。我が此の身骨も白きこと此の齒の如し。心想利なるが故に齒の長大して猶ほ身體の如きを見る。爾の時復た當に想を移して更に額上を觀ずべし。額上の白骨をして白きこと珂雪の如くならしむ。若し白からずんば復た當に易觀もて九想を作さしむべし。廣く說けば〔五九〕九想觀法の如し。此の觀を作す時若し鈍根の者は一月を過ぎ已つて九十日に至り、此の事を諦觀して然る後に方に見る。若し利根の者は一念に卽ち見る。此の事を見已つて復た更に腰中大節の白骨を觀ぜしむ。見已つて卽ち前の如く應に種種色の骨人を觀ずべし。

此の法成ぜずんば復た當に慈心觀を敎ふべし。慈心觀とは廣く說けば慈三昧の如し。慈心を敎へ已つて復た更に白骨を觀ぜしむ。若し餘事を見るとも愼んで隨逐すること勿れ。但だ此の心をして了了分明ならしめ、白骨人を見ること白雪山の如くせよ。若し餘物を見て心を起さば、滅除するに當に是の念を作すべし。如來世尊は我に觀骨を敎ふ。云何んが乃ち餘想の境界あらん。我れ今應當に一心に觀骨すべしと。白骨を見已つて心をして澄靜ならしめ、諸の外想なくば、普く三千大千世界の中に滿てる骨人を見ん。此の骨人を見已つて一一皆滅すること前の觀苦の如し。

爾の時に、槃直迦比丘は佛の此の語を說きたまふを聞いて、一一諦觀し心を分散せず、了了分明にして、時に應じて卽ち阿羅漢道を得、三明六通、八解脫を具し、自ら宿命を念じて、習ふ所の三藏を了了分明にし亦錯謬なし。爾の時に世尊は此の愚癡貢高槃直迦比丘に因つて此の清淨觀白骨法を制したまひ、佛、迦栴延に告げたまはく、此の槃直迦愚癡比丘すら、尙ほ繫念を以て阿羅漢を成ず。何に況んや智者にして修禪せざらんやと。爾の時に世尊は此の事を見已つて爲に偈を說いて言はく。

禪は甘露の法たり、定心もて諸惡を滅す。　慧は諸の愚癡を殺し、永く後有を受けず。　愚癡の槃直迦すら、尙を以て定心を得たり。何に況んや諸の智者にして、繫念を勤修せざらんや。

【五九】九想は、屍に對する九種の觀法にして、脹想・靑瘀想・壞想・血塗想・膿爛想・噉想・散想・骨想・燒想なり。

前の貢高に因り佛に遇ふと雖も法相を解せず。我れ今當に爲に諸の方便を設いて繫念法を敎ふべしと。

爾の時に迦絺延、佛に白して言さく、世尊、唯だ願はくは如來、此の愚癡槃直迦比丘及び未來世の一切愚癡亂想衆生の爲に正觀法を說きたまへと。佛、槃直迦に告げたまはく、汝今日より常に靜處に止まり、一心に端坐して叉手閉目し、身口意を攝して愼んで放逸なること勿れ。汝は放逸に因つて多劫の中久しく勤苦を受けたり。汝我が語に隨つて諸法を諦觀せよと。時に槃直迦は佛語に隨順して端坐繫心す、佛、槃直迦に告げたまはく、汝今應當に大指節を諦觀すべし。心を移らさらしめ指節上にて漸漸に皰を起らしめ、復た膖脹せしむ。復た當に意を以て此の膖脹をして漸く大に豆の如くならしむ。彼當に意を以て膖脹を爛壞し、皮肉兩披して黃膿流出し、黃膿の間に於て血流れて滂滂たらしむ。一節の上の肌膚爛盡して唯だ右脚指節の白きこと珂雪の如きを見る。一節を見已つて右脚より漸漸に廣大して、乃至半身膖脹爛壞し黃膿流血し、半身の肌皮をして皆兩向披して、唯だ半身の骨を皎然として大白ならしむ。半身を見已つて復た全身を見る。一切膖脹して都て已に爛壞し膿血惡むべく、諸の雜蟲の其の中に遊戲するを見る。是の如き種種亦上者の如し。一を觀見し已つて復た二を見る。二を見已つて復た三を見る。三を見已つて復た四を見る。四を見已つて復た五を見る。五を見已つて乃至十を見る。十を見已つて心漸く廣大して一房中を見る。一房中を見已つて乃至一天下を見る。一天下を見已つて若し廣ければ復た攝して還らしむること前觀の如し。

一たび觀じ已らば復た當に想を移して繫念し、鼻頭を諦觀すべし。鼻頭を觀じ已つて心を分散せざれ。若し分散せずんば前の觀骨の如く、復た當に自ら身肉肌皮を想ふべし　皆父母和合して不淨の精氣の共に合して成ずる所、此の如き身は種子不淨なりと。復た當に次に繫念して齒を觀ぜしむ

愼んで忘失すること勿れと。此の想成ずるを第二十の數息觀竟ると名く。爾の時に尊者阿難及び禪難提丼に諸の比丘は、佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[五四]是の如く我れ聞く。一時佛は舍衞國に在まして、遊行教化し[五五]多羅聚落に至る。聚落に至り已つて千二百五十の比丘と村に入つて乞食す。乞食より還り已つて樹下に止る。洗足し訖つて衣鉢を收め尼師壇を敷いて結跏趺坐す。爾の時に衆中に一比丘あり。[五六]迦栴延と名く。一弟子あり、[五七]槃直迦と名く。出家して多時八百日を經るも、一偈を讀誦して通利すること能はず。晝夜六時に恒に此の言を誦し惡を止め善を行ひ不放逸を修す。但だ此の語を誦するも終に得ること能はず。爾の時尊者迦栴延、其の道力を盡して弟子に教授するも得せしむること能はず。卽ち佛所に至り佛の爲に禮を作し、佛を遶ること三匝して佛に白して言く、如來世に出でまして利益する所多く、天人を利安し普く一切を度したまふ。唯だ我が弟子は獨り未だ潤ひを蒙らず。唯だ願はくは天尊我が爲に開悟し解脫を得しめたまへと。

佛、迦栴延に告げたまはく、諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ。如來今は當に汝の爲に往昔の因緣を說くべしと。迦栴延白して言く、世尊願樂し聞かんと欲すと。佛、迦栴延に告げたまはく、乃往過去九十一[五八]劫に佛世尊あり毘婆尸如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名く。彼の佛出世して衆生を教化し人を度すること周ねく訖り般涅槃に於て滅度を取る。佛滅度の後一比丘あり、聰明多智にして三藏を讀誦し自ら恃んで憍慢にして散亂放逸なり。從つて學ぶ者あるも肯へて教授せず。專ら愚にして貢高に正念を修せず。命終の後黑闇地獄に墮す。九十劫を經るも恒に闇處に在りて愚蒙無智なり。前の出家功德の力に由るが故に、地獄より出でて天上に生ずることを得たり。天上に生ずと雖も天宮光明及び諸の供具は一切黑闇にして諸天に卑しめらる。三藏を誦するが故に天上の命終りて閻浮提に生じて佛世に値ふことを得たり。

【五四】第二十一、暖法觀。
【五五】多羅(Tāla)は、樹名。
【五六】迦栴延(Kātyāyana)。
【五七】槃直迦(Panthaka)。
【五八】劫(Kalpa)。

く、世法は是れ重き患累なりと知るを得。凡夫は迷惑して死に至るも覺せず、衆苦を知らず、戀著免れ難く情を縦にして、狂惑し至らざる所なし。我れ今此の女色に狂惑するを觀るに、呼聲の響の如く亦鏡像に似て求覓するも得べからず。此の女色を觀ずるに何處に在りと爲すや。妄見衰害し諸の凡夫を欺き、害を爲すこと滋多し。今此の色を觀ずるに猶ほ狂華の風に隨つて零落するが如く、出づるに所從なく去るに亦所至なし。幻惑無實なるに愚夫は樂著す。今此の色を觀ずるに一切無常なり。癩病人を良醫の治差するが如く、我れ今苦・空・無常を觀じて此の色相を見るに皆堅實なし。諸の凡夫を念ずるに甚だ愍傷すべし。此の色に愛著して敬重し厭くことなく、耽愚惑著して甘樂窮なく、諸の恩愛の爲に奴僕となり、欲箭己を刺して痛は心髓に徹し、恩愛の枷鎖其の身を撿繋す。是の如く念じ已つて復た一切を觀ずるに都て皆空寂なり。此の諸の婬欲、諸の色情の態は皆五陰四大より生ず。五陰は主なく、四大は我なく、性相倶に空たり、何に由つてか有らん。是の觀を作す時智慧明顯にして身を見るに大明なること摩尼珠の如く、妨礙あることなく金剛の精に似たり。青白明顯して鹿の園を突いて獵師危害の苦を免るるを得るが如し。五陰を觀ずるに性相皆淨らかなり。六大を觀ずるに鳥の高翔して身は所寄なきが如し。以て色鉤を呑むも俛仰して度するを得、諸の女色を離れて更に情を起さず、自然に諸の婬欲海を超出す。一切の結使は猶ほ衆魚の競走隨逐して黑闇の坑に墮するが如く、無明老死は智慧の火の焚燒する所と爲る。色を觀ずるに雜穢にして醜惡不淨なり。猶ほ幻惑の如く暫くも停ること有ることなし。永く色染を離れて色の爲めに縛せられず。

佛、阿難に告げたまはく、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして貪婬多き者あらば、先づ佛を觀ぜしめて諸の罪を離れしめ、然る後方に當に更に繫念を教へ、心をして散ぜざらしむべし。心散ぜずとは所謂數息なり。此の數息の法は是れ貪婬の藥にして無上法王の所行の處なり。汝好く受持し

見已つて前に聚まる光明雲は猶ほ坏器の如く來つて其の身に入る。臍中より入り既に臍に入り已つて脊骨中に入る。脊骨に入り已つて自ら己身を見るに本と異ることなく平復故の如し。出定にも入定にも數息を以ての故に恒に上の事を見る。此の事を見る時復た當に還た繫心して意を任せしめて、本の臍光の中に在き心をして散ぜしめざらしめよ、爾の時に心意極めて安隱なり。既に安隱にし已つて復た當に自ら諸聖の解脫を審諦に分別することを學ぶべし。

爾の時復た當に過去七佛の其の爲に說法するを見るべし。說法とは四眞諦を說き、五受陰の空・無我所を說くなり。是の時諸佛は諸の賢聖と恒に行者の前に至りて種種の法を敎へ、亦空・無我・無作・無願三昧を觀ずるを敎へ、法子に告げて言はく、汝今應當に諦觀すべし。色・聲・香・味・觸 皆悉く無常にして久しく立つことを得ず、恍忽として電の如く卽時に變滅す。亦復た幻の如く、猶ほ野馬の如く、熱時の焰の如く、乾闥婆城の如く、夢の所見の如く覺すれば處を知らず、石を鑿ちて光を見るが如く須臾にして變滅す、鳥の空を飛ぶが如く跡を尋ぬべからず、呼聲の響の如く應ずる者あることなし。汝今亦當に是の如きの觀を作すべし。三界は幻の如く亦變化の如し。此に於て卽ち一切の身內と身外とを見るに空無所有にして、鳥の空を飛んで依止する所なきが如く、心は三界を超ゆ、諸の世間を觀ずるに、須彌巨海も皆久しく停まらず、亦幻化の如し。自ら己身を觀ずるに身相を見ず。便ち是の念を作す。世界は無常にして三界は不安なり、一切都て空にして何の處に身あらんや。及び眼の所對たる、此の諸の色欲及び諸女人は顚倒より起り、横に愛すべしと見る。實に是れ速に朽ち敗壞するの法なり。夫れ女色は猶ほ枷鎖の如く人の識神を勞す。愚夫は戀著して厭足するを知らず。自ら拔くこと能はず、杻械を免れず枷鎖を絕たず。行者は既に法相を識り法空寂を知る。此の諸の色欲は猶ほ怨賊の如く何ぞ戀惜すべけんや。復た牢獄に似て堅密にして捨て難し。我れ今空を觀じて三界を厭離す。世間を觀見するに水上の泡の如く斯は須く磨滅すべし。心に妄想な

故に、汝をして世世に生死の身を受けしむ。汝今應當に汝の身内の諸の羸悴の事、身外の諸火一切變滅するを觀ずべしと。

是の語を作し已つて前の如く還た不淨觀法を教ふ。身の諸蟲一切萎落するを觀ず。此の事を見已つて復た當に火を起して諸蟲を燒き殺すべし。蟲既に死せず、復た自ら身を見るに白頗梨の如く自然に鮮白なり。白骨を見已つて頭より光を出す。其の光の大小麁細は稍の如く長さ丈五ならしむ。復た當に念を作して頭を却向せしむべし。復た當に作意して頭を却向せしめ、身を皆倒さしめて、頭を以て脊骨を拄へ、臍の大節に對すべし。此の事を見已つて、復た當に諦觀して白骨人をして光と同色ならしむべし。既に同色にし已つて、其の光端を見るに種種の色の菓あり。是の菓を見已つて復た衆光の菓頭より出づるを見るに、白色の光りありて其の光り大いに盛にして白寶の雲の如し。是の諸骨の人其の色鮮白にして光りと異ることなし。復た諸の骨の摧折して墮落せるを見る。或は頭の地に落つる者あり、或は骨節の各各分散するあり、或は全身の白骨猶ほ猛風の雨雪を吹くが如きあり。聚散定まらずして譬へば掣電の如く隨つて現じ隨つて滅す。此の諸の骨人地に墮ちて聚を成し猶ほ堆阜の如く、腐れる木屑の一處に集聚するに似たり。行者自ら阜上を觀見するに自然の氣ありて出でて虛空に至り、猶ほ烟雲の如し。其の色鮮白にして虛空に彌滿し右旋して宛轉し復た還た雲集し一處に併在す。此の事を見る時復た當に一骨人の想を作さしむべし。此の骨人を見るに身に九色あり。九畫分明にして一一の畫中に九色の骨人あり。其の色鮮明にして具に說くべからず。一一の骨人は復た當に皆身體を具足せしめ、前の骨人中に映顯して妨礙せざらしむべし。

是の觀を作し已つて復た當に自ら觀ずべし。一一の色中猶ほ琉璃の如く諸の障蔽なく、其の色中に於て九十九色あり。一一の色に復た九色の衆多の骨人あり。是の諸の骨人に種種の相あり。其の性同じからずして相妨礙せず。此の事を見已つて應に勤め精進して一切の惡を滅すべし、此の事を

を諦觀し、數息を學ぶが如く心を亂れさらしめ、當に勤めて戒を持して一心に攝持すべし。小罪の中に於ても應に慇重に慚愧し、懺悔を生ずべし、乃至小罪も愼んで覆藏すること勿れ。若し罪を覆藏せば諸の光明を見ること朽敗木の如し。此の事を見る時卽ち戒を犯せるを知る。復た更に慚愧し懺悔自責して掃兜婆を地に塗り諸の苦役を作し、復た當に師長父母を供養恭敬すべし。師父母に於て視ること佛の如くに想ひ、極めて恭敬を生ぜよ、復た師父母に從つて弘く誓願を求めて是の言を作さく、我れ今師長父母を供養す。此の功德を以て願はくは我れ世世に恒に解脫を得んことをと。是の如く慚愧し功德を修し已つて、前の如く數息して、還た此の光を見るに明顯愛すべく、前の如く異ることなし。

復た當に更に繫念して腰中の大節を諦觀すべし。念心安定して分散の意なし。設し亂心あれば復た當に自ら責めて慚愧し懺悔すべし。旣に懺悔し已つて復た臍光を見るに七色を具足して猶ほ七寶の如し。當に此の光をして合して一光と爲し鮮白可愛ならしむべし。此の事を見已つて前の如く還た繫念思惟を敎ふ。白骨人を觀ずるに白きこと珂雪の如し。旣に白骨人を見已つて復た當に更に敎ふべし。繫念住意して骨人の頂に在き、骨人の頂を見るに自然に光を放つ。其の光大いに盛にして火色に似如たり。長短麁細正共稍等、其の頂上より顚倒下垂して頂骨中に入る。頂骨より出でて頸骨中に入る。頸骨より出でて胸骨中に入る。胸骨より出でて還た臍中に入る。臍中より出でて卽ち脊骨の大節中に入る。大節中に入り已つて光明卽ち滅す。光明滅し已つて時に應じて卽ち一の自然の大光明雲あり。衆寶莊嚴し寶華淸淨なり。色中の上なる者の中に一佛あり、釋迦牟尼と名く。光明具足し三十二相八十種隨形好あり。一一の相好は千の光明を放つ。此の光り大いに盛にして億千萬日の如く明赫炎炎たり。彼の佛亦四眞諦の法を說き、光相炳然として行者の前に住し手を以て頭を摩す、化佛復た敎へて言く、汝前身の時貪欲・瞋恚・愚癡の因緣もて諸惡を隨逐し、無明覆ふが

錢許の如し。漸漸に廣大して[五二]摩伽大魚の如きのみ。周遍聚集して復た白雲に似たり。白雲内に於て白き光明ありて頗梨鏡の如し。光明漸く盛にして擧體明顯なり。復た白光あり、團圓正等なること猶ほ車輪の如く、内外俱に明にして、明なること日よりも過ぎたり。此の事を見る時復た更に前の如く、一數二隨し、或は二數三隨し、或は三數四隨し、或は四數五隨し、或は五數六隨し、或は六數七隨し、或は七數八隨し、或は八數九隨し、或は九數十隨す。或は單に或は複にし修短は意に隨ふ。是の如く繫念し、密處に在りて心をして散ぜざらしむ。復た當に繫念し前の如く更に腰中の大節を觀ずべし。大節を觀ずる時定心不動なれ、復た自ら身を見るに更に益〻明盛にして前に勝ること數倍して大錢許の如し。倍〻復た精進し遂に更に身を見て明倍〻增長すること澡[五三]罐の口の如く、世間の明物は以て譬と爲すものなし。此の明を見已つて倍〻勤め精進し心懈怠せず。復た此の明を見るに胸前に當つて明鏡許の如し。此の明を見る時、當に勤め精進して頭然を救ふが如くすべし。慇懃にして止まずんば遂に此の明を見、益〻更に增盛して諸天の寶珠も以て譬と爲るものなし。其の明、清淨にして諸の瑕穢なく七種の色あり。光光の七寶の色胸より出でて明中に入る。此の相現ずる時遂に大いに歡喜し自然に悅樂し、心極めて安隱にして物の譬ふべきなし。復た更に精進して心懈息せずば、光を見ること雲の如く、身を遶ること七匝し、其の一一の光は化して光輪と成る。光輪中に於て自然に當に十二因緣の根本相貌を見るべし。若し精進せず懈怠懶惰にして、輕戒乃至突吉羅罪を犯さば、光を見るも卽ち黑く猶ほ牆壁の如し。或は此の光を見るに猶ほ灰炭の如し。復た此の光を見るに敗故せる衲に似たり。意縱逸にして小罪を輕んずるに由るが故に、賢聖の無漏の光明を障蔽す。

佛、阿難に告げたまはく、此の不淨觀灌頂の法門は諸の賢聖の種なり。諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に勅せよ。若し諸の賢聖法を修せんと欲するもの有らば、諸法の苦・空・無常・無我・因緣

【五二】摩伽(Makara)は、鯨のこと。

【五三】罐を宋、元、明本には瓶とす。

ざらしむと。

佛、阿難に告げたまはく、汝好く此の觀佛三昧灌頂の法を受持して、未來世の一切衆生の爲に當に廣く分別すべしと。佛是の語を說きたまふ時、尊者禪難提及び諸天衆、千二百五十の比丘は皆是の言を作さく、如來世尊は今日に於て、諸の衆生の亂心多き者の爲に除罪法を說きたまふ。唯だ願はくは世尊、更に甘露を開いて諸の衆生をして、佛の滅後に於て涅槃の道を得しめたまへと。禪難提比丘は佛の此の觀佛三昧を說きたまふを聞いて、身心歡喜し、時に應じて卽ち無量の三昧門を得、豁然として意に解し、阿羅漢を成じ、三明六通皆悉く具足せり。佛阿難に告げたまはく、此の想成ずれば第十九觀佛三昧と名く、亦灌頂法と名く。汝好く受持し愼んで忘失すること勿く、未來世の一切衆生の爲に分別し廣說せよと。佛此の語を說きたまふ時、諸の比丘衆は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[五二] 佛阿難に告げたまはく、貪婬多き者は此の如き觀佛三昧を得ると雖も、事に於て益なく、賢聖の道果を獲得すること能はず。次に當に更に自ら己身を觀ぜしむべし。前の法の如く還た骨人を作らしめ、皎然として大白ならしむること猶ほ雪山の如し。復た當に繫念して意を住せしめて臍中に在くべし。或は腰中に在き、息の出入に隨ふ。一を數へて二隨ひ、或は二を數へて三隨ひ、或は三數四隨し、或は四數五隨し、或は五數六隨し、或は六數七隨し、或は七數八隨し、或は八數九隨し、或は九數十隨す。終つて復た始む。息に隨つて往反し、十に至つて復た數を捨てて止めよ。爾の時に心意恬靜無爲にして自ら身皮を見るに猶ほ練囊の如し。

此の事を見已つて身骨を見ず心處を知らず。爾の時復た當に更に起想せしむべし。還た身內の心意、身體の支節をして白玉人の如くならしむ。既に此を見已つて復た當に繫念して、腰中脊骨の大節上に在き心を散ぜしめざるべし。爾の時に復た當に自然に身上を見るべし。一明相あり、大さ

【五二】第二十數息觀。

つて身體柔軟にして心意悅樂なり。當に自ら念じて言ふべし。如來慈父、此の法水の上味甘露を以て我が頂に灌ぐ、此の灌頂の法は必定して虛ならずと。

五〇 爾の時に復た當に更に想念を起すべし。唯だ願はくは世尊、我が爲に法を說きたまへと。罪業の除くは佛の說法を聞けばなり。佛の說法とは、四念處を說き、四正勤を說き、四如意足を說き、五根五力を說き、七覺を說き八聖道を說くなり。此の三十七法を一一分別して行者の爲に說く。此の法を說き已つて復た苦・空・無常・無我を觀ずることを敎ふ。此の法を敎へ已つて佛を見るを以ての故に、妙法を聞くことを得て、心意開解すること水の流に順ふが如く、久しからずして亦阿羅漢道を成ぜん。業障重き者は佛の口を動かすを見て說法を聞かず、猶ほ聾人の如く聞知する所なし。爾の時に復た當に更に懺悔を行ふべし。既に懺悔し已りて五體を地に投じ、佛に對して啼泣し、多時を經歷して諸の功德を修し、然る後方に佛の所說の法を聞く。說法を聞くと雖も義に於て了せずば、復た世尊の澡瓶の水を以て行者の頂に灌ぐを見るに、水色變異して純ら金剛色にして、頂上より入り其の色各異る。青黃赤白・衆穢の雜相亦中に現ず。水は頂上より入り、直に身中を下り、足跟より出で地中に流入するに、其の地卽時に變じて光明と爲り、大なること丈許の如く下つて地中に入る。是の如く漸く深く直ちに水際に到る。水際に到り已つて、復た當に作意して此の光に隨つて去るべし。復た此の水を觀ずるに水下は淳空なり。復た更に當に觀ずべし。空下に紺琉璃の地あり、琉璃地の下に金色の地あり、金色地の下に金剛の地あり、金剛地の下に復た虛空を見る。此の虛空を見るに豁然として大空は都て無所有なり。此の事を見已つて復た還た心を攝し前の如く一佛像を觀ぜよ。爾の時に彼の佛の光明益〻顯はれて具に說くべからず。復た澡瓶の水を持して行者の頂に灌ぐ。水相光明亦上に說くが如し。是の如く七遍す。佛、禪難提に告げたまはく、此を觀像三昧と名く、亦念佛定と名く、復た除罪業と名く、次に救破戒と名け禁戒を毀る者をして禪定を失は

【五〇】此の一段は佛像の說法を觀ず。

復た當に念を作すべし。過去に佛あり釋迦牟尼と名く。唯獨一身にて衆生を敎化し、此の世に住在すること四十九年にして、大涅槃に入つて般涅槃す。猶ほ薪盡きて火の滅するが如く永へに滅して餘りなし。我れ今心に想ふ。想心を以ての故に是の多像を見る。此の多像は來るに所從なく去るに所至なし。我が心想より妄りに此を見るのみと。是の念を作す時、漸漸に消滅して衆像皆盡き、唯だ一像の獨り華臺に坐して結跏趺坐するを見る。此の像を諦觀して三十二相八十種好を皆明了ならしむ。此の像を見已るを觀像法と名く。

[四八]佛禪難提に告げ及び阿難に勅したまふ。佛滅度の後、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、懺悔を欲する者、滅罪を欲する者は、佛不在なりと雖も繫念して形像を諦觀せば、諸惡の罪業は速に淸淨なることを得ん。此の像を觀じ已つて復た當に更に觀ずべし。像の臍中より便ち一光を放つ。其の光り金色にして分れて五支と爲り、一光は左を照し、一光は右を照し、一光は前を照し、一光は後を照し、一光は上を照す。是の如き五光の光光の上に皆化佛あり。佛相次第に虛空中に滿つ。此の相を見る時、極めて明了ならしめよ。復た化佛を見るに上は梵世に至り三千大千世界に彌滿す。三千大千世界中に於て金色の光り紫金山の如く、內外妨なきを見る。此の事を見る時、心意快然として前の坐像を見るに佛の眞影の如し。佛影を見已つて復た當に念を作すべし。此は是れ影のみ、世尊の威力智慧は自在にして現に此の事を作す。我れ今應當に眞佛を諦觀すべしと。

[四九]爾の時尋いで佛身を見るに、微妙なること淨琉璃の如く、內に金剛あり、金剛內に於て紫金の光りあり、共に相映發して衆相好を成し、三十二相、八十種好、猶ほ印文の如く焫然をして明顯し、微妙淸淨なること具に說くべからず。手に澡瓶を執りて空中に住立す、瓶內に水を盛るに狀甘露の如し。其の水五色にして五光淸淨なること琉璃珠の如くにして柔軟細滑なり。行者の頂に灌ぎ身中に滿つ。(行者は)自ら身內を見るに、水の觸るる所の處に八十戶蟲は漸漸に萎落す。蟲旣に萎し已

【四八】此の一段は佛像の放光明を觀ぜしむ。

【四九】此の一段は佛像より灌頂を受くるを觀ず。

地を塗り、淨籌[四六]を造作して謙卑下下し諸の懺悔を修すべし。

[四七]復た當に心を安じて一處に正念し、前の如く像を觀じて餘事を緣せず、像の眉間を諦觀せよ。像の眉間を觀じ已つて次第に其の餘の諸相を觀じ、一一の相好を皆分明ならしめよ。若し分明ならずんば更に復た懺悔して諸の苦役を作し、然る後心を攝して前の如く像を觀ぜよ。諸の佛像を見るに、身色端嚴にして三十二相皆悉く具足し、四海の內に滿ちて皆華上に坐す。坐像を見已つて復た更に念を作せ。世尊世に在るときは、鉢を執り錫を持して、里に入つて乞食し、處處に遊化し、福を以て衆生を度す。我れ今日に於ては但だ坐像を見て行像を見ず。宿何の罪ありやと。是の念を作し已つて復た更に懺悔せよ、旣に懺悔し已つて前の如く心を攝し繫念して像を觀ぜよ。像を觀ずる時、諸の坐像を見るに一切皆起ち巨身丈六なり。方正にして傾かず、身相光明皆悉く具足す。像の立てるを見已つて復た像の行くを見る。鉢を執り錫を持して威儀庠序たり。諸の天人衆皆亦圍遶す。復た衆像ありて虛空に飛騰し、金色光を放ちて虛空中に滿ちて、猶ほ金雲の如く、復た金山に似て、相好無比なり。復た衆像を見るに虛空中に於て十八變を作し、(所謂)身上に水を出し身下に火を出し、或は大身を現じて虛空中に滿ち、又復た小を現ずること芥子許の如し。地を履むこと水の如く、水を履むこと地の如く、虛空中に於て東踊西沒し、西踊東沒し、南踊北沒し、北踊南沒し、中踊邊沒し、邊踊中沒し、上踊下沒し、下踊上沒し、行住坐臥隨意自在なり。

此の事を見已つて復た當に念を作すべし。世尊世に在せば諸の比丘を敎へ右脇にして臥す、我れ今亦當に諸像の臥するを觀ずべしと。尋いで諸像を見るに僧伽梨を牒み、右肘を枕にし右脇にして臥し、脇下に自然に金色の床を生じ、金光栴檀・種種雜色、衆妙の蓮華を以て敷具と爲し、上に寶帳ありて諸の瓔珞を垂る。佛は大光を放つて寶帳內に滿たし、猶ほ金華の如く復た星月に似たり。無量の寶光は猶ほ團雲の如く、空に處して團結なり、中に化佛ありて虛空に彌滿す。臥像を見已つて

【四六】籌（ちう）は、人數を算する道具、懺悔受戒等に用う。

【四七】以下は坐像、立像、臥像を觀ぜしむ、

【四三】德字萬字は衆相の印中極めて分明ならしめ、印印光を出し五色具足す。次に佛像の臂を觀ずるに象王の鼻の如く柔軟にして愛すべし。次に像の手を觀ずるに十指參差して其の所を失はず、手の內外握れば手上に毛を生じて琉璃の光の如く、毛は悉く上に靡く。赤銅の如き爪あり、爪上は金色にして爪內は紅色なり、赤銅山と紫金と合するが如し。次に合曼掌を觀ずるに猶ほ鵝王の如く、舒ぶる時は則ち現じて眞珠の網に似たり、手を攝すれば見えず。像の手を觀じ已つて次に像の身を觀ずるに、方に坐して安隱なること眞金山の如く、前まず却かず中に坐して所を得たり。復た像の脛を觀ずるに鹿王の臑の如く纖直して圓滿なり。次に足趺を觀ずるに平滿安庠にして、足下に蓮華千輻具足し、足上に毛を生じて紺琉璃の如く、毛は皆上に靡く。脚指齊整にして參差中を得たり。爪色は赤銅にして、脚指の端に於て亦千輻相の輪あり、脚指の網の間は猶ほ羅文の如く雁王の脚に似たり。是の如き諸事及び身光・圓光・項光あり。光に化佛・諸大比丘衆・化菩薩あり。是の如き化人は旋火輪の如く光を旋逐して走る。是の如くして逆觀は足より逆に觀じて乃ち頂髻に至り、順觀は頂より足に至る。

【四四】是の如く像を觀じて心をして分明ならしめ專ら一佛像を見る。一佛像を見已つて復た當に更に觀じて二像を見るを得べし。二佛像を見る時、佛像の身をして瑠璃と成らしむ。衆くの色光を出し焰焰相次いで金山を燒くが如く化像無數なり。二像を見已つて復た三像を見る。三像を見已つて復た四像を見る。四像を見已つて復た五像を見る。五像を見已つて乃至十像を見る。十像を見已つて心轉た明利にして閻浮提を見て四海の內に齊うす。凡夫は心狹くして廣からしむるを得ず。若し廣大ならしめむには心を攝して還らしめ、四海內に齊しく鐵圍山を以て界と爲し、此の海內を見るに中に滿てる佛像に三十二相八十隨形好ありて、皆分明ならしむ。一一の相好に無數の光あり。若し衆光に於て一一の境界の雜穢不淨を見るは罪報によりて得るなり。復た應に更に起ちて【四五】兜婆を掃ひ

【四三】德字萬字は、共に卍のこと。

【四四】以下多佛像を觀ぜしむ。

【四五】兜婆（Stūpa）は、塔又は方圓の高顯處のこと。

頂光を放ちたまふ。此の光は金色にして五百の化佛ありて佛を遶ること七匝し、[37]祇陀林を照して亦金色と作す。此の相を現じ已つて還た佛の頂骨より入る。

[38]爾の時に世尊は禪難提に告げ及び阿難に勅す。汝等當に未來の衆生の罪業多き者に教ふべし。罪を除かんが爲の故に教へて念佛せしむ。念佛を以ての故に諸の[39]業障・報障・煩惱障を除く。念佛とは當に先づ端坐して叉手閉目し舌を擧げて齶に向け、一心に繫念して心心相注ぎ、分散せしめざるべし。心既に定まり已らば、先づ當に像を觀ずべし。觀像とは當に想念を起し前地を觀じて、極めて白淨ならしむべし。相を取ること長短あり。方二丈を[40]辟いて益々明淨ならしめ、猶ほ明鏡の如くせよ。前地を見已つて左邊の地を見て、亦た明淨ならしめ、右邊の地を見て亦明淨ならしめ、及び後地を見て明淨ならしむ。四方の地を悉く平なること掌の如からしめ、其の一一の方に各々二丈地想を作し、極めて明淨ならしむ。地既に明にし已らば、還た當に心を攝して前地を觀ずべし。(即ち)蓮華の想を作し其の華千葉にして七寶もて莊嚴せり。復た當に一丈六の金像の想を作し、此の金像をして結加趺坐して蓮華上に坐せしむべし。此の像を見已らば應當に[41]頂上の肉髻を諦觀すべし。頂上の肉髻を見るに髮は紺青の色にして、一一の髮は舒ぶれば長さ丈三あり。還た放つ時は右旋して宛轉す、琉璃の光ありて佛の頂上に住す。是の如く一一の孔に一毛旋生し、八萬四千の毛孔を觀るに皆了了たらしむ。此の事を見已つて次に像面を觀ずるに、像面は圓滿なること十五日の月の如く威光益々顯はれ分齊分明なり。復た額廣く平正なる眉間の毫相を觀るに、白きこと珂雪の如く頗梨珠の如く、右旋して宛轉す。復た像の鼻を觀ずるに鑄金の鋌の如く鷹王の嘴に似て面門に當る。復た像の口脣を觀ずるに色赤くして好きこと[42]頻婆羅果の如し。次に像の齒を觀ずるに、口に四十齒あり方に白くして齊平なり。齒上に印あり印中より光を出し白きこと眞珠の如し。齒間の紅色は紅の光を流出す。次に像の頸を觀ずるに琉璃筒の如く金顏を顯發す。次に像の胸を觀ずるに

【三七】祇陀林は、祇樹給孤獨園のこと。

【三八】此の一段は念佛觀像法の大體を示す。

【三九】障は、佛道のさわりとなるものを云ふ。業障は、種々の惡業、五逆十惡等。煩惱障は、一切の煩惱、貪瞋癡等。報障は、煩惱業の成果たる現實の迷界にして地獄、餓鬼、人間、天上界等。

【四〇】原本は壁とあれど、宋、元、明本によりて辟と改む。

【四一】以下三十二相八十種好を觀ぜしむ、列擧せるは其の一部分のみ。肉髻は、頂上の肉隆起して髻の形をなせるもの。

【四二】頻婆羅果(Bimb phala)は、赤色の果實の名。

き者の爲に、當に廣く分別すべしと。佛是の語を說きたまふ時、釋・梵・護世・無數の天子、天の[三一]曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を持して、佛上及び諸の大衆に散じ、佛足を頂禮し佛を讃歎して言く、如來の出世は甚だ希有なり、乃し能く驕慢邪見の迦絺羅難陀を降伏し、亦未來貪婬の衆生の爲に甘露の藥を說き、天種を增長し三寶を斷ぜず。善い哉世尊、是の法を快說すと。龍神夜叉乾闥婆等も亦諸天に同じく佛を讃歎す。尊者阿難、迦絺羅難陀及び千の比丘、無量の諸天、[三二]八部の衆は、佛の所說を聞いて歡喜奉行し、佛を禮して退く。此の觀を得る者は十色不淨と名け、亦分別諸蟲境界と名く。是れ最初の不淨門なり。十八方便諸境界の性ありて具さに說くべからず。三昧に入る時、當に自然に得べし。此の第十八、一門の觀竟る。

[三三]是の如く我れ聞く。一時佛は舍衞國、[三四]祇樹給孤獨園に住せり、爾の時世尊は千二百五十の比丘と俱なりき。是の時に會中に一比丘あり、禪難提と名く。深禪定に於て久しく已に通達し阿羅漢を成じ、三明六通、八解脫を具せり。卽ち坐より起ちて衣服を正し叉手長跪して佛に白して言さく、如來今は世間に現在して一切を利し安んず。佛滅度の後は佛現在せずして、諸の四部の衆、業障ある者、若し繫念する時境界現在前せずば、是の如き煩惱及び一切の罪、[三五]突吉羅乃至重罪を犯して懺悔せんと欲する者は、當に云何んが是の諸の罪相を滅すべきや。若し復た人あり、殺生邪見もて正念を修せんと欲するに、當に云何んが邪見殺生の惡煩惱障を滅すべきやと。是の語を作し已つて、大山の崩るるが如く五體を地に投じ佛足を頂禮し、復た佛に白して言く、唯だ願はくは世尊、我が爲に解說して未來世の一切衆生をして恒に正念を得て賢聖を離れざらしめたまへと。

爾の時に世尊は猶ほ慈父の其の子を安慰するが如く、告げて言はく、善い哉善い哉善男子、汝の慈を行ふ心は慈と倶に生ず。今大悲を具せば無漏の[三六]根・力・覺・道を成就せん。汝今日に於て未來世一切衆生の爲に除罪の法を問ふ。諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよと。爾の時に世尊は卽ち

【三一】曼陀羅(Mandārava)。曼殊沙(Mañjūṣaka)。

【三二】八部衆とは、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦なり。

【三三】第十九、觀佛三昧灌頂法。

【三四】祇樹給孤獨園(Jetavana-anāthapiṇḍasyārāma)は、祇園精舍の建てられし所にして舍衞城の南にあり、祇樹太子の所有せる園林を給孤獨長者の寄捨によりて精舍を建つ。

【三五】突吉羅(Duṣkṛta)は、惡作と譯す、二百五十戒の中、二不定、百衆學、七滅諍の百九戒を犯したる罪を總稱し、比較的輕罪なり。

【三六】五根・五力・七覺支・八正道のこと。

樹茎乃至金剛際を見る。時に金剛人刀を以て之を斫り樹茎を絶えしむ。樹茎絶ゆる時、諸龍諸蛇皆悉く焰を吐き樹に尋ねて上る。爾の時に復た衆多の羅刹あり、薪を樹上に積む。時に金剛人金剛杵を以て樹枝を擣ち折る。此の樹を擣つ時一杵乃至八萬四千杵にて樹枝方に折る。爾の時杵端自然に火を出し此の樹を燒き盡す。唯だ樹心ありて金剛錐の如く三界の頂より下は金剛際に至り、傾動すべからず。是の時行者此の觀を得る時、出定して安樂なり。出定入定に心恒に靜寂にして憂喜の想なし。復た懃に精進して晝夜息まず、精進を以ての故に、世尊釋迦牟尼は過去の六佛と、當に其の前に現じて爲に甚深の[二七]空三昧・無願三昧・無作三昧を說くべし。聞き已つて歡喜し、佛の教に隨順して空法を諦觀すること大水の流るるが如く、久しからずして當に阿羅漢道を得べし。

佛阿難に告ぐ。此の不淨想觀は是れ大甘露にして、貪婬の欲を滅し能く衆生の結使心病を除く。汝好く受持して愼んで忘失すること勿れ。若し佛滅度の後、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、此の甘露灌頂の聖法を聞き、能く諸根を攝して至心に繫念し身分を諦觀して、心分散せず心を歛めて住せしめば、須臾の間を經て此の人命終し天上に生ずるを得ん。若し復人ありて、佛の教に隨順して一爪一指を繫念諦觀し、心を安住せしむれば、當に知るべし、此の人は終に三惡道中に墮落せじ。若し復た人ありて、繫念諦觀して擧身の白骨なるを見ば、此の人命終して兜率陀天に生じ、[二八]一生補處の菩薩の號して彌勒と曰ふに値遇せん。彼の天を見已つて隨從して樂を受け、彌勒成佛せば最初に法を聞いて阿羅漢果を得、[二九]三明六通し[三〇]八解脫を具せん。若し復た人ありて、此の不淨を觀じて具足することを得ば、此の身上に於て佛の眞影を見、佛の說法を聞き、諸苦を盡すを得。

爾の時に阿難は卽ち坐より起ち衣服を整へて佛の爲に禮を作し、叉手長跪して、佛に白して言く、世尊、此の法の要を云何んが受持し、當に何と此の法を名くべきやと。佛、阿難に告げたまはく、此は觀身不淨雜穢想と名く、又破我法觀無我空と名く。汝好く受持して未來世濁苦の衆生の貪婬多

【二七】空三昧(Śūnyatā-samādhi)は、諸法の空を觀ずる三昧。無相三昧(Animittam-s.)は、諸法の無差別を觀ずる三昧、無願三昧(Apraṇihitam-s.)は、諸法に於て取捨し願求することなきを觀ずる三昧。以上の三三昧を小乘に於ては四諦十六行相に相應する三昧なりとして、空三昧は苦諦の二行相、無相三昧は滅諦の四行相、無願三昧は苦諦の二と集諦の四行相とに相應する定なりと配當す。

【二八】一生補處(Ekajāti-pratibaddha)。修行道地經第七卷の註を見よ。

【二九】三明は、宿命・天眼・漏盡の三通力を云ひ、六通は、之れに天耳・神足・他心の三通を加へたるもの。

【三〇】八解脫は、八背捨とも云ふ、八種の禪觀によつて三界を出離するが故に名く、
一、内有色想觀外色解脫、
二、內無色想觀外色解脫、
三、淨解脫身作證具足住、
四、空無邊處解脫、
五、識無邊處解脫、
六、無處有處解脫、
七、非想非々想處解脫、
八、滅受想定身作證具住。

深く禪定に入る者あり。中に默然として安住する者あり。中に大光明を放つ者あり。唯だ大和上釋迦牟尼佛は行者の爲に四眞諦を說き、苦・空・無常・無我・諸法の空義を分別す。過去の六佛も亦復た十二因緣を分別し、或は復た三十七道品を演說して聖行を讚歎す。

爾の時に行者は見佛聞法して、心に歡喜を生じ、時に應じて自ら思惟す。諸佛世尊に二種の身あり。今我が見る所は佛の色身を見て、如來の解脫知見五分法身を見ずと。是の思惟を作す時、復た更に懺悔し慇懃にして懈らず、晝夜六時に恒に三昧を修し、應に是の念を作すべし。此の色身は幻の如く夢の如く、焰の如く旋火輪の如く、乾闥婆城の如く、呼聲の響の如し。是の故に佛は一切の有爲法を、夢幻泡影の如く露の如く亦電の如しと說く。是の如き諸法等、我れ今一一應當に諦觀し極めて了了ならしむべしと。是の觀を作す時化佛現ぜず。若し少しも在る有れば復た更に空を觀ぜよ、空を觀ずるを以ての故に化佛卽ち滅せん。唯だ七佛在り。爾の時に七佛は諸の聲聞・眷屬・大衆と、廣く行者の爲に三十七助聖道法を說く。此の法を聞き已つて身心歡喜す。

復た更に苦・空・無常・無我等の法を諦觀せよ、是の觀を作す時、狂象大いに吼え樹を挽いて動ぜしむ。樹初め動く時一房地の[二四]六變に震動するを見る。復た夜叉あり、黑象を刺し殺す。衆多の黑象死臥して地に在り、久しからずして爛潰し、白膿・黑膿・靑膿・黃膿・綠膿・紫膿・赤膿・赤血、流れ汚れて地に在り。復た蜣蜋諸蟲ありて其の上に遊び集ふ。復た諸蟲あり、眼中より火を出して蜣蜋を燒き殺す。爾の時に下方の金剛地際に五金剛輪あり。五金剛人ありて其の輪間に在り、右手に金剛劍を執り左手に[二五]金剛杵を執り、杵を以て地を擣ち劍を以て樹を斫る。此の事を見る時大地漸く動いて城內の地の六種に震動するを見る。一城を見已つて復た二城を見る。漸漸に廣大して一[二六]踰闍那を見る。一踰闍那を見已つて復た更に廣大して普く三千大千世界の一切地の動くを見る。動く時東踊西沒し、西踊東沒し、南踊北沒し、北踊南沒し、中踊邊沒し、邊踊中沒す。此の地動く時大

【二四】　六種震動とも云ふ、動・起・涌・震・吼・擊なり。

【二五】　金剛杵（Vajra）。印度の武器、密教にては煩惱摧破の意味にて法器となす、三股五股等あり。

【二六】　踰闍那（Yojana）は、由旬に同じ。

前法の如くすべし。前の所見の如く初境界より一一諦觀して往復反覆し、十六反を經て極めて明淨ならしめよ、既に明淨にし已りて復た還た繫念して、身の苦・空・無常・無我を觀ずるに悉く亦皆空なり。是の思惟を作す時、身を觀ずるに身を見ず、我を觀ずるに我を見ず、心を觀ずるに心を見ず。爾の時忽然として此の大地山河石壁一切悉く無なるを見る。出定の時癡醉の人の如く、應當に至心に懺悔法を修し、禮拜して地に塗れて此の觀を放捨すべし。禮拜の時、未だ頭を擧げざる頃、自然に如來の眞影を見ることを得。(如來は)手を以て(行者の)頭を摩し讃して言く、法子、善い哉善い哉、汝今善く諸佛の空法を見ると。佛影を見るを以ての故に心大いに歡喜し、還つて醒悟を得。

爾の時尊者[14]摩訶賓頭盧は、五百の阿羅漢と飛んで其の前に至り、廣く爲に甚深の空法を宣說し、五百の聲聞比丘を見るを以ての故に、心大いに歡喜し頭頂懺悔す。復た尊者舍利弗[15]摩訶目揵羅夜那及び千二百五十の聲聞の影を見る。爾の時に復た釋迦牟尼佛の影を見る。釋迦牟尼佛の影を見已つて復た過去六佛の影を見る。是の時諸の佛影は頗梨鏡の如く明顯に觀るべし。各右手を伸べて行者の頂を摩し、諸佛如來は自ら名字を說く。第一の佛言はく我は是れ[16]毘婆尸なりと。第二の佛言はく我は是れ[17]尸棄なりと。第三の佛言はく我は是れ[18]毘舍なりと。第四の佛言はく我は是れ[19]拘樓孫なりと。第五の佛言はく我は是れ[20]迦那含牟尼なりと。第六の佛言はく我は是れ[21]迦葉毘なりと。第七の佛言はく我は是れ[22]釋迦牟尼佛なり。是れ汝の[23]和上なり。汝空法を觀ず。我れ來つて汝が爲に證と作る。六佛世尊現前して知見を證すと。佛是の語を說く時佛の色身を見るに了了分明なり。亦六佛を見るに了了分明なり。爾の時に七佛は各眉間の白毫大人の相光を放ち、光明大いに盛にして娑婆世界及び琉璃身を照して皆明顯ならしむ。爾の時に諸佛は此の相を現ずる時、身の諸の毛孔より大光明を放ち、化佛無數にして三千大千世界に遍滿す。地及び虛空は純ら黃金色なり。是の諸の世尊中に飛行する者あり。中に十八變を作す者あり。中に經行する者あり。中に

【一四】摩訶賓頭盧(Maha-pindola)は、十六羅漢の一人。
【一五】摩訶目揵羅夜那(Mahamaudgalyayana)は、佛十大弟子の一人、前出の目揵連と同じ。
【一六】毘婆尸(Vipaśyin)は、弗沙なども音譯す、釋尊が過去世に仕へし佛。
【一七】尸棄(Śikhin)は、式棄、螺髻なども云ふ。
【一八】毘舍(Viśvabhū)は、毘舍浮の音譯す。
【一九】拘樓孫(Krakucchanda)。
【二〇】迦那含牟尼(Kanakamuni)。
【二一】迦葉毘(Kāśyapa)。
【二二】釋迦牟尼(Śākyamuni)。
【二三】和上(Upādhyāya)は、和尚とも書す、師僧のことなり。

當に何の淨かれるべけんと。是の思惟を作す時、自ら已身を見るに猶ほ皮嚢の如し。出定して亦身內を見るに骨なく身皮は嚢の如し。亦他身を觀ずるに猶ほ皮嚢の如し。此の事を見る時、當に智者に詣つて諸の苦法を問ふべし。苦法を聞き已つて此の身を諦觀するに、諸の因緣に屬し當に生苦あるべし。旣に生を受け已つて、憂悲苦惱し恩愛と別離し怨憎と會す、是の如きの種種、是れ世間の苦法なり。今我が此の身は久しからずして敗壞し、苦網の中に在り生死の種に屬す。風刀諸賊、我が身に隨從し、阿鼻地獄の猛火熾然として當に我を焚燒すべし。駝・驢・猪・狗一切の畜生及び諸の禽獸、我れ悉く當に諸の惡形を經受すべし。此の如き諸苦を名けて外苦と爲す。今我が身內に自ら四大毒龍無數の毒蛇あり。一一の蛇に九十九頭あり。羅刹惡鬼及び鳩槃茶諸惡鬼等我が心に集在す。此の如き身心は極めて不淨と爲す。是れ弊惡の聚、三界の種子にして萠芽斷ぜず。云何んが我れ今、不淨中に於て淨想を生じ、虛妄の物に於て金剛の想を作し、無佛の處に於て佛像の想を作さん。一切世間の諸行の性相は悉く皆無常にして久しからずして磨滅す。我が此の身の如きは彈指の頃の如くにして亦當に敗壞すべし。此の虛相を以て不淨中に於て假僞に淨を見る。是の思惟を作す時、自ら已身を見るに淨らかなること琉璃の如く、皮嚢の諸相は自然に變滅し、身及び我を觀ずるに了に得ること能はず。

但だ四方を見るに諸の黑象ありて前地を蹴踏す。前地の金剛は一切摧碎す。地樹荄を見るに乃至下方に衆荄甚だ多く稱數すべからず。爾の時に黑象は前の如く鼻を以て樹に遶らす。無量の諸龍及び諸夜叉は黑象と共に戰ふ。狂象是の諸鬼神を蹴踏し悶絕して地に躄す。虛空の中に諸鬼神あり。其の數衆多にして手に刀輪を捉へ、黑象を佐助して此の樹を拔かんと欲す。是の如くすること多時にして樹の一根動く。此の樹動く時、行者は自ら繩床の下地を見るに自然に震動す。日日是の如くにして九十日に滿つ。是の如くして應に好美食及び諸補藥を乞ひ、以て身體を補ひ安隱端坐して復た

に明淨にして內外洞徹し諸の障礙なし。身內身外、中に化佛を滿たす。是の諸の化佛は各〻光明を放つ、其の光は微妙にして億千の日の如く、顯赫端嚴にして一切三千大千世界に遍滿す。中に化佛を滿たす。一一の化佛は三十二相八十種隨形好あり。一一の相好は各千光を放ち、其の光明盛なること百千の日月を和合せるが如し。一一の光間に無數の佛あり。是の如く漸漸に復た更に增廣して數知るべからず。一一の焰間に復た更に倍〻無數の化佛あり。是の諸化佛は廻旋宛轉して琉璃人の身中に入る。

爾の時自ら己身を見るに七寶山の如く高顯にして觀るべし。復た更に嚴顯にして雜寶須彌山の如く山は映顯して金剛地上に在り。時に金剛地は復た更に明顯なること[一二]焰摩天の紫紺摩尼珠の如し。身轉は復た明淨にして無數の諸佛の光明の如く、化して寶臺と成り亦琉璃人の頂に入る。復た前地を見るに、[一三]鐵圍山に在りて中に滿てる諸佛は結跏趺坐して蓮華臺に處す。地及び虛空の中間に缺くることなく、一一の化佛の身は世界に滿つ。是の諸の化佛は相妨礙せず。復た鐵圍諸山を見るに淨きこと琉璃の如く障礙の想なし。閻浮提を見るに山河石壁、樹木荊棘一切悉く是れ諸の妙化佛なり。心漸く廣大して三千大千世界を見るに、虛空及地は一切悉く是れ微妙なる佛像なり。是の時行者は但だ無我を觀じ、愼んで心を起して佛像を隨逐すること勿れ。復た當に思惟すべし。我れ佛說を聞くに諸佛如來に二種身あり。一には生身、二には法身なり。今我が見る所は既に法身に非ず、又生身に非ず。是れ假想の見にして虛妄より起る。諸佛は來らず、我も亦云何んが此の處に忽ち佛像を生ずるやと。是の語を說く時、但だ當に自ら己身の無我を觀じ、愼んで諸の化佛の像を隨逐すること勿るべし。

復た當に諦觀すべし。今我が此の身は前時に不淨にして、九孔より膿流れ筋纏い血塗り、生藏・熟藏・大小便利・八萬戶蟲あり。一一の蟲に復た八十億の小蟲ありて以て眷屬と爲す。此の如きの身

【一二】焰摩天（Yama）は、欲界の第三天なり。

【一三】鐵圍山（Cakravāḍa）は、須彌山世界の最外廓を遶る山。

琉璃幢を戴いて仰いで空中を看るに一切皆見ゆるが如し。爾の時行者は自身內と身外とに於て空を觀ずるを以ての故に、無我法を學ぶ。自ら己身を見るに兩足は琉璃筒の如し。亦下方に一切世間の希見する所の事を見る。此の想成ずる時、行者の前地は明淨にして愛すべく、毘琉璃の如く極めて映徹たり。持戒具はる者は地の清淨なること梵王宮の如きを見る。威儀具はらざる者は淨地を見ると雖も猶ほ水精の如し。此の想成ずる時、無量百千無數の夜叉羅刹あり、皆地より出でて手に白羊角・龜甲・白石を執つて〔一〕金剛山を打つ。復た諸鬼あり、手に鐵槌を執つて金剛山を打つ。是の時山上に五鬼神あり、千頭千手にして手に千劍を執り羅刹と戰ふ。毒蛇毒龍皆悉く毒を吐き此の山を圍遶す。復た諸女あり妓歌詠を作し諸變動を作して此の山を護り助く。若し此の事を見ば當に一心に觀ずべし。諸女現ずる時當に此の女を觀ずること猶ほ畫瓶中に臭處を盛る不淨の器の如くすべし。虛妄より出で、來るに所因なく去るに亦處なし。此の如き相貌は是れ我が宿世の惡業罪緣の故に此の女を見る。此の女人は是れ我が妄想なり。無數の世時の貪愛の因緣にて虛妄に從つて見る。應當に至心に無我法を觀ずべし。我身は無我なり、他身も亦然り。今此の所見は諸の因緣に屬し、我れ願求せず。我れ此の身を觀ずるに無常敗壞にして亦我所なし。何處に人と及び衆生と有らんと。此の思惟を作し已つて一心に空無我法を諦觀せよ、無我を觀ずる時、下方琉璃地際に四大鬼神あり、自然に來至して金剛山を負ふ。時に諸夜叉羅刹亦此の鬼を助けて金剛山を破る。時に金剛山は漸漸に頹毀し、多時を經て泓然として都て盡き唯だ金剛地のみ在り。

爾の時諸象及び諸惡鬼力を并せて樹を挽くに樹は堅くして動き難し。此の事を見已つて復た更に歡喜し、諸罪を懺悔せよ、懺悔し已つて前の如く繫念し琉璃人を觀ず。琉璃地上四方面に於て四蓮華を生ず。其の華は金色にして亦千葉ありて金剛を臺と爲す。一金像ありて結加趺坐し身相具足して光明缺くることなく東方に在り。南西北方も亦復た是の如し、復た自ら琉璃身を見るに、狀と更

〔一〕金剛山は、此の世界を周繞する鐵圍山のこと。

爾の時行者は復た應に繋念すること前の如く自ら身骨を觀ずべし。自ら胸骨の明淨愛すべきを見るも、一切の不淨皆中に於て現ず。此の事を見已つて當に自ら思惟すべし。我れ今の如きは、髮是れ我なりや、骨是れ我なりや、爪是れ我なりや、齒是れ我なりや、色是れ我なりや、受是れ我なりや、想是れ我なりや、識是れ我たりや。一一諦觀するに、無明[10]是れ我なりや、行是れ我なりや、識是れ我なりや、名色是れ我なりや、六入是れ我なりや、觸是れ我なりや、受是れ我なりや、愛是れ我なりや、取是れ我なりや、有是れ我なりや。生是れ我なりや、老死是れ我なりや。若し死是れ我ならば諸蟲唼食し散じ滅壞する時、我は是れ何處なりや。若し生是れ我ならば念念住せず、此の生の中に於て常住の想なし。當に知るべし此の生も亦是れ我に非ず。若し頭是れ我ならば頭骨八段に解解して各異り、腦中に蟲を生ず。此の頭中を觀ずるに實に我なし。若し眼是れ我ならば眼中に實なし。地と水と合し、火を假りて明を爲し、風を假りて動轉す、散じ滅壞する時は烏鵲等の鳥皆來つて之を食ひ、蝡蜎諸蟲共に唼食する所なりと、此の眼を諦觀せよ。若し心是れ我ならば、風力の所轉にして暫らくも停る時なし。亦六龍あり、此の心中を擧げて無量の毒ありて心を根本と爲す。此の諸毒と及び心性とを推すに皆空に從つて有り。妄想もて我と名く。是の如く諸法(卽ち)地・水・火・風・色・香・味・觸・及び十二緣を一一諦推するに何處に我ありや。身を觀ずるに我なし、云何んが我所あらん。我所とは青色は是れ我なり、黃色は是れ我なり、赤色は是れ我なり、白色は是れ我なり、黑色は是れ我なりと爲すなり。此の五色は可愛に從つて有り、縛著に隨つて生じ欲水に染せられ、老死の河より生じ恩愛の賊より起り癡惑に從つて見はる。此の如き衆色は實には是れ我に非ず。惑著の衆生は橫に是れ我なりと言ひ、虛見の衆生復た我所と稱す。一切は幻の如く何處に我ありや。幻法中に於て豈我所あらんや。是の思惟を作す時、自ら身骨を見るに明淨愛すべし。一切世間の希見する所の事、皆中に於て現ず。復た己身を見るに毘琉璃人の如く內外倶に空なり、人の

【一〇】以下十二因緣の一々なり。

[五]佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に繫念思惟して面骨を諦觀することを教ふべし。自ら面骨を見るに白玉の鏡の如く内外倶に淨く、淨きこと明鏡の如し。漸漸に廣大して擧身の骨を見るに、白きこと[六]頗梨鏡の如く内外倶に淨く、一切の衆色は皆中に現ず。須臾にして身を見るに白玉人の如し。復た見るに澄淸なること　[七]毘琉璃の如く表裏倶に空なり。一切の衆色は皆中に現ず。復た己身を見るに白銀人の如し。唯だ薄皮在り、皮極めて微薄にして天劫貝よりも薄くして内外映徹す。復た己身を見るに　[八]閻浮檀那金人の如く、内外倶に空なり。復た己身を見るに金剛人の如し。此の地を見る時、黑象倍〻多く、鼻を以て樹に遶らし己の身力を盡すも動ぜしむること能はず。爾の時衆象の吼聲震烈し大地を驚動す。大地動く時金剛山ありて下方の地より出で、行者の前に住す。爾の時に行者は己の四邊に金剛山あるを見る。復た前地を見るに猶ほ金剛の如し。復た諸龍を見るに、樹を尋ねて上下し金剛珠を吐く。樹遂に堅固にして象は動かすこと能はず。唯だ五色の水樹上より出で仰いで樹枝を流れ、樹端より葉間に下流し乃至樹莖にも亦流れ、金剛山の間に布散彌漫し大地に滿つ。金剛地下乃至金剛山に此の五色の水は五色の光を放ち、或は上り或は下りて遊行常なし。爾の時に黑象金剛山より出でて此の水を吸はんと欲す。諸龍は毒を吐きて大象と戰ふ。爾の時諸蛇は龍の耳中に入り、力を幷せて勢を作し共に黑象と戰ふ。爾の時黑象は力を盡して蹴蹹するも亦奈何ともするなし。此の事を見る時諸水の光明は皆伎樂を作す。或は變化あり狀天女の如し、歌詠して伎を作し甚だ愛樂すべし。此の女は端正にして天上人間に比類あることなく、其の作す所の樂及び妙音聲は　[九]忉利天上にも亦此の比なし。是の如く化女諸の技術を作すこと、數億千萬、具さに說くべからず。此の事を見る時愼んで隨著すること勿れ。應當に繫心して前の不淨を念ずべし。出定の時應に智者に詣つて甚深の空義を問ふべし。爾の時智者は應に行者の爲に無我空を說くべし。

【五】第十八、十色十淨觀（破我法無我空觀）。

【六】頗梨(Sphaṭika)は、水精、水玉に當る。

【七】毘琉璃(Vaiḍūrya)は、青色の寶石にして七寶の一。

【八】閻浮檀金(Jambunada-suvarṇa)は、閻浮檀河の底より出づる金にして、特殊の光澤あり。

【九】忉利天(Trāyastriṃśa)は、欲界第二の天にして、三十三天のこと、帝釋の所居なり。

邊より此の樹を拔かんことを樂ふも、傾動すること能はず。復た四象あり、鼻を以て樹に遶らすも亦動かすこと能はず。爾の時に行者は此の事を見已つて、出定の時には、應に靜處に於て、若しくは塚間に在り、若しくは樹下に在り、若しくは[四]阿練若處にて、身を覆ひて密ならしめ、應當に靜寂にして更に好藥を求め以て己身を補ふべし。上の如く補身藥法を修習し、復た三月を經て、一心に精進すること頭燃を救ふが如く心放逸ならず、所受の戒に於て犯心を起さず、晝夜六時に諸罪を懺悔せよ。復た更に身の無我空を思惟すること前の境界の如く、一一諦觀して極めて明了ならしめよ、此の想成ずる時胸骨漸く明らかなること猶ほ神珠の如く、內外映徹す。心內の毒蛇復た更に身を踊らして空中に騰住し、口中に火あり、摩尼珠を吸はんと欲するも了に得ること能はず。前の如く失ひ捨てて自ら地に撲ち、身心迷悶す。四方を望見するに、爾の時諸象復た更に奔り競ひ來つて樹所に至る。時に諸の夜叉・羅刹・惡獸・諸の龍蛇等、俱時に毒を吐き、黑象と戰ふ。爾の時黑象は鼻を以て樹に遶らし聲吼えて挽く。象樹を挽く時、諸龍夜叉は毒を吐いて前み戰ひ肯て休息せず。爾の時地下に一師子あり。兩眼明顯にして金剛に似如たり。忽然として踊り出で諸龍と戰ふ。爾の時諸龍は空中に踊り住す。象は故に樹を挽き終に休息せず、地漸漸に動く。是の時に行者は地動くの時當に此の地を觀ずべし。(この地は)空に從つて有り堅實の法に非ず。此の如く地は乾闥婆城の如く野馬の行くが如く、虛妄より出づ。何に緣つて動くやと。是の思惟を作す時、自ら己身を見るに、胸骨乃至面骨漸漸に明淨にして、諸の世間一切の所有は皆悉く明了なるを見る。此の觀を得る時、明鏡を執つて自ら面像を觀るが如し。行者は爾の時諸の身外の一切の染色及び諸の不淨を見る。亦身內の一切の不淨を見る。此の想成ずる時第十七身念處觀と名く。佛、阿難に告げたまはく、汝好く此の身念處灌頂の章句を受持して、愼んで忘失することなく、甘露の法門を開いて未來世一切衆生の爲に、當に廣く演說すべしと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

【四】阿練若(Araṇya)は、寂靜處、空閑處、又は遠離處などと譯す、一定の法によりて人里を離れたる修行處なり。

巻の中

[一]佛、阿難に告げたまはく、汝今至心に此の四大の觀法を受持し、愼んで忘失することなく、未來世の一切衆生の爲に當に廣く演說すべしと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の觀を作す時、空を觀ずることを學ぶを以ての故に、身は虛にして心を勞せば、應に酥及び諸の補藥を服すべし。深禪定に於て應に補想觀を作すべし。補想觀とは先づ自ら身を觀じ、皮皮相裹ましむること猶ほ芭蕉の如し。然る後心を安んじて自ら頂上の想を開く。復た當に[二]釋、梵護世の諸天を勸進し金瓶を持して天藥を盛らしむべし。釋提桓因は左に在り、護世の諸天は右に在りて、天藥を持して灌頂し擧身に充滿す。晝夜六時に恒に此の想を作す。若し出定する時は諸の補藥を求め好飲食を食せば、恒に坐するも安隱にして快樂は常に倍す。是の補身を修し三月を經已つて、然る後更に其の餘の境界を念ずれば、禪定力の故に諸天歡喜す。時に釋提桓因は爲に甚深の空無我法を說き、行者を讃歎し頭面敬禮す。天藥を服するを以ての故に、出定の時顏色和悅にして身體潤澤に膏油を塗れるが如し。此の事を見れば第十六、四大觀竟ると名く。

[三]佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に繫念して、意を住せしめて外色を觀せしむることを教ふべし。一切の色は何處より生ずるや。此の觀を作す時外の五色を見るに、五色の光の如く己身を圍遶す。此の想現ずる時自ら身胸を觀ず。胸骨漸漸に明淨にして頗梨鏡の如く、明顯愛すべし。復た外色を見るに、一一の衆色は明かなること日光の如し。此の觀を得る時、四方に自然に四黑象を生ず。黑象大いに吼えて衆色を踏んで滅す。是の如く衆色地に在る者は滅し、虛空中に於ては玄黃にして愛すべく、倍ゝ復た常に過ぐ。爾の時に大象鼻を以て樹に遶らし、四象四

【一】第十六四大補想觀。

【二】釋は、釋提桓因(Sakra-devānām-indra)のこと、帝釋天これなり、忉利天に居して佛法を外護す。梵(Brahma)は、此處にては色界初禪の梵天に居する護法神たる大梵天王のことなり、

【三】第十七身念處觀。

火を觀ずるに猶ほ幻の如し。又此の風を觀ずるに顚倒より起る。此の水を觀ずるに虚妄の想より現ず。是の觀を作す時、行者は身を見るに猶ほ芭蕉の中に堅實なきが如し。或は自ら心を見るに水上の泡の如く、諸の外聲を聞くに猶ほ谷聲の如し。是の觀を作す時、諸骨上の一切の火光を見、白光氷を見、諸龍風を見るに、悉く一處に在り。身の靜寂を觀じて身相を識らず。身心安隱にして恬怕悦樂す。此の如き境界を第十五、四大觀竟ると名く。

よ。身内の地大とは、骨・齒・爪・髮・腸・胃・腹・肝・心・肺、諸の堅實なる物悉く是れ地大なり。精氣の所成にして外地は無常なり。所以に之を知る。譬へば大地の如し。二日出づる時大地は焦枯し、三日出づる時、江河池沼悉く皆枯渇し、四日出づる時大海三分の二を減じ、五日出づる時大海枯れ盡し、六日出づる時大地に焰起り、七日出づる時大地然え盡す。外地すら猶ほ爾り勢久しく支へず。況んや身内の地當に復た堅牢なるべけんや。爾の時に行者は應に自ら思惟すべし。今我が此の身、髮は是れ我なりや、爪は是れ我なりや、骨は是れ我なりや、身の諸の五藏は是れ我と爲すやと。是の如く身の諸の支節を諦觀するに都て我あることなし。自ら白骨を觀じ一一諦觀するに、此の骨は何處より生ずるや。父母和合して赤白精の時、乳時の如き泡時の如き、是の如く歌羅邏[七三]の時、安浮陀の時の如き、是の如き諸時において、何處に骨ありや。當に知るべし、此の骨は本無くして今有り、已に有つて還た無し。此の骨は虛空の相に同じ。外地無常なり內地も亦爾なり。

是の思惟を作す時、已身を諦觀するに、一切の諸骨は自然に破散して猶ほ微塵の如し。入定して骨を觀ずるに、但だ骨處を見て骨相を見ず。出定して身を見るに前の如く異ることなし。復た當に身内の諸火を觀ずべし。(身内の諸火は)外火に從つて有り、外火は無常にして暫らくも停ることあることなし。我が今の身火は何に由つて久しく熱するやと。是の觀を作す時、諸の骨上を觀ずるに、一切の火光悉く滅して現れず。復た當に更に身内の諸水を觀ずべし。我が此の諸の諸水は外水に因つて有り。外水は無常にして勢久しく支へず。內水も亦爾なり。緣を假りて有り。何處に水及び不淨聚ありや。外風は無常なり勢久しく支へず。因緣に從つて生じ、還た緣に從つて滅す。今我が身内の所有諸風は假僞に合成し强ひて機關となる。何處に風ありや。妄想より起り是れ顚倒の見なり。是の思惟を作す時身内を見ず。諸龍の耳中の所有諸風は悉く滅して現ぜず。是の如く種種諦かに自ら思惟するに、何處に人及び地・水・火・風ありや。此の地を觀ずるに是れ敗壞の法なり。此の

【七三】歌羅邏(Kalala)は、胎内五位の一にして、初めて託胎したる初七日間の狀態に名く。安浮陀(Arbuda)は、託胎後第二七日の間の狀態に名く。

大觀覚ると名く。亦分別四大相貌と名け、復た見五陰麁相と名く。智慧ある者は亦能く自ら結使の多少を知る。四念處中の身念處と名け唯だ身外を見て未だ身内を見ず。身念處の境界四分の中、此は是れ最初なり。此の觀を得ば身心悦樂にして諍訟を少うす。

[七一]佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて次に當に更に身外の火を觀ずべし。(その火は)因縁に從つて有り、縁あれば則ち起り縁離るれば則ち滅す。此の如く衆火は來るに從來する所なく去るに至る所なく、恍忽として變滅し終に暫らくも停らず。是の思惟を作す時外火即ち滅して更に復た現ぜず。復た當に思惟すべし。外の諸水等(即ち)江・河・池・流は皆是れ龍の力の變化して成ずる所、我れ今云何んが横に此の水を見ん。此の諸水等は來るに從來する所なく去るに至る所なし。是の思惟を作す時、外水現ぜず。復た當に念を起すべし。此の風は虚空と合して諸龍鳴吼し、因縁を假りて有り。此の如き想は亦内に在らず亦外に在らず中間に在らず。顚倒心の故に横に此の事を見る。是の思惟を作す時、外風起らず。復た當に更に繫念して身内の脊骨を思惟すべし。身内の骨を見るに白きこと珂雪の如く、一一の節の間に三十六物穢惡不淨皆中に現ず。或は身皮を見るに猶ほ皮嚢の如く、諸の不淨を盛り無量の瘭疽百千の癰疾悉く其の中に在り、諸膿流出して滴滴絶えず。當に骨人の頭上に極めて厭患すべきを生ずべし。或は身内を見るに五藏悉く皆走つて大腸の中に入る。大腸膖脹し爛潰して堪へ難し。爾の時に行者は定力を以ての故に、出定入定に一切人と及び已身とを見るに同じく不淨聚なり。諸の女人を見るに身は蟲狗の如く穢惡不淨にして、自然に當に色想を貪らざるを得べし。佛、阿難に告げたまはく、此の想成ずる時第十四觀外四大と名く。亦漸解學觀空と名く。佛、阿難に告げたまはく、汝佛語を持し愼んで忘失すること勿れと。爾の時、阿難は佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。

[七二]佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に繫念を教ふべし。身内の地大を諦觀せ

【七一】第十四の第三、外四大觀(漸解學空觀)、

【七二】第十五内四大觀、

り。諸の白光あつて、共に相連持して白光の間に於て復た種種の四色の光明を生ず。光明の間に於て復た猛火を起し諸の夜叉を燒く。時に諸夜叉に火の爲めに逼られ、悉く走つて樹に上る。未だ樹上に至らざるに黑象踏蹴す。夜叉は火を出して黑象の脚を燒く。黑象是の時聲を作して鳴吼し師子の吼ゆる音の如く、苦・空・無常・無我を演說し、亦此の身は是れ敗壞の法にして久しからずして當に滅すべしと說く。黑象說き已つて夜叉と戰ふ。夜叉は大鐵叉を以て黑象の心を刺すに黑象復た吼え一房の地動く。是の時大樹の根莖枝葉は一時に動搖し、龍は亦火を吐き此の樹を燒かんと欲す。諸蛇驚張し各九十九頭を申べて以て此の樹を救ふ。是の時夜叉は復た更に驚起し手に大石を執つて黑象に擲げんと欲す。黑象は卽ち前んで鼻を以て石を受け樹上に擲げ置く。石は樹上に至り狀刀山に似たり。是の夜叉身を奮つて大に踊り、身の諸の毛孔より諸の毒龍を出す。龍に四頭ありて諸の烱焰を吐き甚だ怖畏すべし。此の想成ずる時自ら己身を見るに、身內の心處は深きこと坑井の如し。井中に蛇ありて毒を吐きて上下し、井上に現はる。(六八)摩尼珠あり、十四絲を以て繫いで虛空に懸在す。時に彼の毒蛇は口を仰いで珠を吸ふも了に得ること能はず。失ひ捨てて地に躄し迷悶して知ることなし。是の時口火還つて頂中に入る。行者若し此の事を見ば當に懺悔を起し、適意の食を乞ひ四大を調和して極めて安隱ならしむべし。當に密屋の鳥雀の聲なき處に坐すべし。

佛、阿難に告げたまはく、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして此の觀を得ば地大觀を得と名く。當に勤めて繫念し愼んで放逸なること莫るべし。若し不放逸行を修すれば、流水よりも疾く當に頂法を得べし。復た懶惰なりと雖も已に三塗惡道の處を捨て、身を他世に捨て(六九)兜率天に生じ彌勒に値遇す。(彌勒は)爲に苦・空・無常等の法を說き(行者は)豁然として意に解し(七〇)阿那含果を成す。佛、阿難に告げたまはく、汝今地大觀法を諦受し愼んで忘失すること勿れ、未來世の一切衆生の爲に敷演し廣說せよと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の觀を得ば第十四地

【六八】摩尼（Mani）は、如意と譯す。

【六九】兜率天(Tusita)は、欲界の六天ある中の第五の天にして、彌勒 Maitreya は今現に一生補處の菩薩として此處に住し、來生の成佛を待てり。

【七〇】阿那含(Anāgāmin)は、不還と譯す、聲聞の第三果にして、再び欲界に還らざる義なり。

き、形狀各異り來つて其の所に至る。

佛、阿難に告げたまはく、若し比丘あり、正念に安住して不放逸を修し此の事を見る時は、當に諸法の空無我觀を教ふべし。出定の時亦當に勸進して智者の所に至り、甚深の空義を問はしむべし。空義を聞き已つて、應當に自ら觀ずべし。我身は父母不淨の和合に依因し、筋纒ひ血塗り三[六六]十六物の汚露不淨は、諸の業緣に屬し、無明より起る。今此の身を觀ずるに一として愛すべきものなく、朽敗物の如し。是の思惟を作す時、諸骨人皆來つて已に遍らば、當に右手を伸べ指を以て諸骨人を彈き、而も是の念を作すべし。此の如き骨人は虛妄の想より强ひて分別して現はる。我が身も亦爾り、四大より生じ、六入の村落の共に居止する所、何に況んや諸骨の虛妄より出づるをや。是の念を作す時、諸の白骨人は碎け散ずること塵の如く、積聚して地に在りて白雪の山の如し。衆多の雜色骨人を一大虺ありて忽ちに呑食す。白雪山上に於て一白玉人あり。身體端嚴にして高さ三十六由旬、頸は赤きこと火の如く眼に白光あり。時に諸白水並に頗梨の幢、悉く皆自然に白玉人の頂に入る。龍・鬼・蛇・虺・彌猴・師子・狸・猫の屬は、悉く皆驚き走る。大火を畏るるが故に樹を尋ねて上下す。身の諸の毛孔の九十九蛇は悉く樹上に在り。爾の時に毒龍宛轉して樹を繞る。復た黑象の樹下に在つて立つを見る。此の事を見る時、應當に深心にして六時[六七]に懺悔すべし。多語を樂まず空閑處に在つて諸法空を思ふ。諸法空の中には地なく水なく、亦風火なし。色は是れ顚倒にして幻法より生ず。受は是れ因緣にして諸業より生ず。想は顚倒と爲す是れ不住の法なり。識は不見と爲す諸の業緣に屬し貪愛の種を生ず。是の如く種種に此の身を諦觀す。地大は空見に從つてあり。空見も亦空なり。云何んが堅想を地と爲さん。是の如く推析すれば何者か是れ地たるや。是の觀を作し已るを外地を觀ずと名く。一一諦觀するに地大に主なし。

是の想を作す時白骨山を見る。復た更に碎壞すること猶ほ微塵の如く、唯だ骨人の微塵の間に在

【六六】三十六物は、人體構成要素を并べたるものにて、三部門あり、一には外相の十二、(髮・毛・爪・齒・眵・淚・涎・唾・屎・尿・垢・汗)、二には身器の十二(皮・膚・血・肉・筋・脈・骨・髓・肪・膏・腦・膜)、三には内含の十二(肝・膽・腸・胃・脾・腎・心・肺・生藏・熟藏・赤痰・白痰)なり、不淨觀法に於ては此の三十六物の垢穢を觀じて人身の愛着を離れしむるなり。

【六七】六時とは、晨朝・日中・日沒・初夜・中夜・後夜なり。

亦復た是くの如し。復た淤泥の色の骨人有りて、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ち漸々に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た濁水色の骨人あり、行行相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸々に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た赤色の骨人あり、行行相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た紅色の骨人あり、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ、南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た膿血塗身の骨人あり、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た黄色の骨人あり、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た綠色の骨人あり、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た紫色の骨人あり、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た那利瘡色の骨人あり、諸節の間に於て一節は十六色の諸の惡雜膿を流出し、行々相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ちて漸漸に廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。

此の想成ずる時、行者は驚怖して諸夜叉を見るに來つて己を噉はんと欲す。爾の時に復た當に諸の骨人を見るべし。節節に火起り焰焰相次いで娑婆世界に遍滿す。復た骨人の頂上に諸水を涌出し、頗梨幢の如きを見る。復た骨人の頭上に、一切の衆火化して石山を爲るを見る。是の時諸龍耳より諸風を出し、火を吹いて山を動かす。是の時諸山は空中に旋住し、窯家の輪の如くにして分閡なし。此の事を見已つて極めて大いに驚怖す。驚怖するを以ての故に一億の鬼ありて、山を擔つて火を吐

應に山想を起すべし。當に諸山を想ふべし。猶ほ氷霜の火の爲に融さるるが如く、是の如く猛火極めて大いに熾盛なり。火熾盛なる時身體蒸熱す。復た更に龍を想ひ、諸石を雨らしめて以て猛火を掩ふ。復た當に石を想ひ碎いて塵の如くならしむべし。龍復た風を吐き、諸の微塵を聚め積んで山を成ずるに至る。無量の林木・荊棘・叢刺皆自然に生ず。爾の時に白水は五色具足して諸の刺間を流る。是の如き諸水は山の頂上に住して、猶ほ積氷の如く凝然として動かず。此の想成じ已るを第十四易觀法[六三]と名く。

佛、阿難に告げたまはく、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして三昧正受せる者あらば、汝當に是の易觀法を教ふべし。愼んで忘失すること勿れ。此の四大觀若し得る者あらば佛は酥肉等の藥を服食することを聽す。其の肉を食する時は洗つて味なからしめ、當に飢世に子の肉を食ふが如き想をたすべし。我が今此の身、若し肉を食はずんば發狂して死せん。是の故に佛は舍衞國[六四]に於て諸の比丘に勅して、修禪の爲の故に三種清淨の肉を食するを得とす。爾の時阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[六五]佛、阿難に告げたまはく、易觀を教へ已つて、復た當に更に前の如く、繫念して意を住せしむることを教ふべし。脊骨を諦觀して復た白淨ならしめ、前に過ぐること數倍なり。一一節の間に於て、明淨を以ての故に一切の諸穢惡事を見ることを得。此の想成ずる時、當に自ら身を觀じて一骨人と作すべし。節節の中、白淨明顯にして頗梨鏡の如く、閻浮提中の一切の骨人、及び四大觀のあらゆる境界は、皆一節中に於て現はる。此の事を見已つて、諸の骨人の東方より來つて行者に向ひ、行行相次いで、數、微塵の如きを見る。是の如く東方に、娑婆世界に滿つる諸の白骨人、皆行行相次いで來り行者に向ふ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。復た青色骨人あり、行行相次いで來り行者に向ひ、閻浮提に滿ち漸々廣大し、乃至東方に娑婆世界に滿つ。南西北方四維上下も

【六三】第十四易觀法。

【六四】舍衞(Śrāvastī)は、都城の名にして、國名にも用ふ、祇園精舍の建てられし所、釋尊の多年化導せられし地なり。

【六五】第十四の第二、地大觀(又は分別四大相觀、又は五陰旋相觀、又は斗念處觀)。

べし。腰中の脊骨を諦觀し、諸の脊骨の白きこと珂雪の如きを想ふ。脊骨を見已つて擧身の骨の節節相拄ふを見、轉た復た明淨にし白きこと頗梨の如し。一一の骨を見るに支節大小、一一皆明かなること頗梨鏡の如し。火大・風・水・地大、是の諸の境界は皆一節中に於て現はる。此の想成ずる時。下方の地を見るに、床下より漸漸に就いて開く。一の床下の地を見已つて復た一 床下の地を見る。二床下の地を見已つて復た三床下の地を見る。三床下の地を見已つて漸く一室内を見る。一室内を見已つて次に二室内を見る。二室内を見已つて漸く三室内を見る。三室内を見已つて復た一庭中の地を見、漸漸に就いて開く。此の事を見る時、應當に諦觀すべし。乃至下方に障閡あることなく、下方風輪中に諸風の起るあり。向の諸の夜叉、皆此の風を吸ふ。此の風を吸ひ已つて身の諸の毛孔に鳩槃茶を生ず。一一の鳩槃茶は諸の山火を吐き大千世界に滿つ。是の諸山の間に忽然として復た無量の妙女あり。鼓樂絃歌もて行者の前に至るに、羅刹[六二]復た爭ひ取つて之を食ふ。行者見已つて極めて大いに驚怖し自ら持するに勝へず。出定の時恒に心痛を患ひ、頂骨破れんと欲す。心を攝めて入定するに前の如く悉く四大境界を見る。此の境界を見已つて、四大の定力の故に、自ら身體を見るに白きこと玉人の如し。節節の上に火起り節節の下に水流れ、耳中より風出で眼中より石を雨らす。此の事を見已つて其の前地に於て十の蚖蛇あり。其の身長大にして五百由旬なり。千二百足ありて、足は毒龍に似、身より水火を出して地に宛轉す。此の想成ずる時、但だ當に至心に先きの罪を懺悔すべし。出定の時多語することを得ざれ、寂靜處に於て一心に繫念せよ、但だ食時を除く。復た當に懺悔して諸の酥藥を服すべし。然る後、方に當に此の觀法を易くすべし。佛、阿難に告げたまはく、此の觀を名けて第二の四大觀と爲す。汝好く受持し愼んで忘失すること勿れと。爾の時に阿難は佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時第十三結使根本觀竟ると名く。

佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて當に更に易觀すべし。易觀の法とは、火大動ずる時、

【六二】羅刹(Rakṣasa)は、惡鬼の總名。

に滿ち已れば是の時毒龍は、臍より出でて漸漸に上向し眼中に入る。眼よりして出で頂上に住す。爾の時諸水の中に一大樹ありて、枝葉四布し遍く一切を覆ふ。此の如き毒龍已身を離れず、舌を樹上に吐く。是の龍舌上に八百鬼あり。或は鬼神あり、頭上に山を戴き兩手は蛇の如く兩脚は狗に似たり。復た鬼神あり、頭は龍頭に似て擧身の毛孔に百千眼あり、眼中より火出づ。齒は刀山の如く宛轉して地に在り。復た諸鬼ありて、一一の鬼形に九十九頭あり。各九十九手あり。其の頭の形狀は極めて醜惡たり。狗・野干に似、狸に似、猫に似、狐に似、鼠に似たり。是の諸鬼の頸は各獼猴を負ふ。是の諸の惡鬼は水中に遊戲し、或は樹に上つて騰躍透擲するあり。夜叉鬼ありて頭上に火起る。是の諸の獼猴は水を以て火を滅し、制止すること能はずして遂に增長せしむ。是の如くして猛火は其の水中の頗梨幢邊より忽然として熾盛となり、頗梨幢を燒くこと眞金を融すが如く、焰焰相次いで身を繞ること十匝し、行者の上に住して眞金の蓋の如し。諸の羅網ありて樹上に此の眞金の蓋の三重に足滿するを彌覆す。爾の時、地下に忽然として復た四大惡鬼あり。百千の耳ありて耳より水火を出す。身毛孔の中より諸の微塵を雨らし、口中より風を吐いて世界に充滿す。八萬四千の諸の羅刹鬼ありて雙牙上に出で、高さ一由旬なり。身の毛孔の中よ霹靂として火起る。是の如き衆多、水中を走り戲むる。復た虎・狼・師子・豺・豹・鳥・獸あり、火山より出でて水中に遊戲す。是の事を見る時、一一の骨人娑婆界に滿ち各右手を擧ぐ。時に諸の羅刹は手に鐵叉を執り、諸の骨人を擎げて一處に積聚す。爾の時復た九色の骨人あり、行行相次いで行者の所に來至す。是の如き衆多の百千境界、具に說くべからず。佛、阿難に告げたまはく、此の想成ずる時、四大觀と名く。汝好く受持し愼んで忘失すること勿れと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時、第十二、地大觀・火大觀・風大觀・水大觀と名く。亦九・八使の境界と名く。

〔六二〕佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に繫念して、意を住せしむることを敎ふ

【六二】第十三、第二四大觀（又は結使根本觀）、

風なり。復た當に觀ずべし。是の風大は四方より起り、一一の風大は猶ほ大蛇の如く各四頭ありて二上二下し、衆多の耳中に皆是の風を出すと。此の觀成ずる時、風は變じて火と爲り、一一の毒蛇は諸の火山を吐き、其の山高峻にして甚だ怖畏すべし。諸の夜叉ありて火山中に住し、身を動かして火を吸ひ、毛孔より風を出す。是の如きの變狀一室に遍滿す。一室に滿ち已つて復た二室に滿ち、二室に滿ち已つて漸々に廣大して一由旬に滿つ。一由旬に滿ち已つて二由旬に滿ち、二由旬に滿ち已つて三由旬に滿ち、三由旬に滿ち已つて轉た復た廣大して閻浮提に滿つ。諸の夜叉を見るに火山中に在つて火を吸ひ山を負ひ、毛孔より風を出し、閙憚馳走して閻浮提に遍ねし。復た驚ける夜叉は以て行者に逼る。此の事を見る時、心大いに驚怖せば易觀法を求む。

易觀法とは先づ佛像を觀ず。諸の火の光端に於て各一丈六の佛像の想を作す。此の想成ずる時、火漸々に歇んで變じて蓮華と成る。衆多の火山は眞金の聚りの如く、內外映徹し、諸の夜叉鬼は白玉人に似たり。唯だ風大ありて廻旋宛轉し諸の蓮華を吹く、無數の化佛空中に住立して大光明を放ち金剛山の如し。是の時、諸風靜然として動かず。時に四毒蛇口中より水を吐く、其の水五色にして一床に遍滿す。一床に滿ち已つて復た二床に滿つ。二床に滿ち已つて次に三床に滿つ。是の如く乃至一室に遍滿す。一室に滿ち已つて次に二室に滿ち、二室に滿ち已つて次に三室に滿つ。是の如く乃至十室に遍滿す。水、十室に滿ち已つて五色の水を見るに、色色の中に各白光あり頗梨幢の如し。十四重ありて節節皆空に、白水涌出して空中に停住す。此の想成ずる時、行者は身內を見るに心中に一毒龍あり。龍に六頭あり心を繞ること七匝す。二頭は水を吐き二頭は火を吐き二頭は石を吐く。耳中より風を出し、身の諸の毛孔各九十九の毒蛇を生ず。是の如き諸蛇は二上二下す。諸龍水を吐き足下より出し白水に流入す。是の如く漸漸に一由旬に滿ち皆是の事を見る。一由旬に滿ち已つて復た二由旬に滿ち、二由旬に滿ち已つて三由旬に滿つ。是の如く乃至閻浮提に滿つ。閻浮提

し。脊骨を諦觀し脊骨の間に於て、定心の力を以て一の高臺の想を作す。自ら己身を觀ずるに白玉人の結加趺坐し、白骨の光を以て普く一切を照らすが如し。此の觀を作す時極めて分明ならしめ、此の臺に坐し已つて、神通(を得たる)人の須彌山頂に住して四方を觀見して障閡あることなきが如く、自ら故の身を見るに了了分明なり。諸骨人を見るに、白きこと珂雪の如く、行行相向ひ身體完具して一も缺落なく、三千大千世界に滿つ。此を白光の想成ずと名く。次に縱骨の亦三千大千世界に滿つるを見る。復た橫骨の亦三千大千世界に滿つるを見る。青色骨人の行行相向ひ三千大千世界に滿つるを見る。復た黑色骨人の行行相向ひ三千大千世界に滿つるを見る。復た膿癩人を見る。復た膿血を身に塗れる人の三千大千世界に滿つるを見る。復た膖脹人の行行相向ひ三千大千世界に滿つるを見る。復た爛壞して擧身に蟲出づる人の三千大千世界に滿てるを見る。復た薄皮もて身を覆へる人の三千大千世界に滿つるを見る。復た皮骨相離れたる人の三千大千世界に滿つるを見る。復た赤きこと血の如き色の人の三千大千世界に滿つるを見る。復た濁水の色の人の三千大千世界に滿つるを見る。復た淤泥の色の人の三千大千世界に滿つるを見る。復た白骨人の毛髮爪齒共に相連持して、三千大千世界に滿つるを見る。次に三百六十三節の解きて唯だ角のみ相拄へ、此の如き骨人の三千大千世界に滿つるを見る。次に節節兩向し解離して、相去ること三指許の間に白光ある人の三千大千世界に滿つるを見る。次に白骨の散ぜる人の唯だ白光ありて共に相連持し、三千大千世界に滿つるを見る。是の如く當に衆多の白骨人の數へて說くべからざるを見るべし。

此の觀を得る時、當に想念を起すべし。我が此の身は四大より起り枝葉種子乃至是の如き不淨の甚しき極めて患厭すべし。此の如き境界は我が心より起る。心想則ち成ずれば不想不見たり。當に知るべし、此の相は是れ假の觀見にして、虛妄の見より(起り)諸の因緣に屬す。我れ今當に諸法の因緣を觀ずべし。云何んが諸法の因緣と名くるや。諸法の因緣とは四大より起る。四大とは地水火

のみ相拄ふを觀見す。此の事を見已つて復た四方の衆多の骨人亦復た是の如きを見る。此の觀を得る時、當に自然に見るべし。諸の骨人の外は猶ほ大海の恬靜澄清なるが如く共の心明利にして種種雜色光の四邊を圍遶するを見る。此の事を見已つて心意自然に安隱快樂にして、身心清淨にして憂喜の想なし。佛、阿難に告げたまはく、汝好く此の節節解想を諦觀して愼んで忘失すること莫れと。阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の觀を得るを第十節節解觀竟ると名く。

〔五九〕佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に繫念して意を住せしむることを敎ふべし。右脚大指の兩節の間を諦觀して、節をして相離れしむること三指許の如く、白光の想を作して持用て支拄ふ。若し夜坐する時は月光の想を作し若し晝坐する時は日光の想を作す、諸骨を連持して解散せしむること莫く、足より頭に至る三百六十三解を皆相離れしむること三指許の如く、白光を以て持し散落せしめず。晝日坐する時は日光を以て持し、若し夜坐する時は月光を以て持す。諸節の間を觀じて皆白光を出でしむ。此の觀を得る時、當に自然に日光の中に於て一丈六の佛を見るべし。圓光一尋、左右上下亦各〻一尋なり。軀體は金色にして、擧身に光明あり、炎赫端嚴にして、三十二相八十種好皆悉く炳然たり。一一の相好を分明に見ることを得ること佛の在世の如く等しくして異りあることなし。若し此を見る時は愼んで禮を作すこと莫れ。但だ當に意を安んじて諸法を諦觀すべし。當に是の念を作すべし、佛は諸法の來無く去無きを說く。一切性相も皆亦空寂なり。諸佛如來は是れ解脫身なり。解脫身とは則ち是れ眞如なり。眞如の法の中には見なく得なしと。此の想を作す時自然に當に一切諸佛を見るべし。佛を見るを以ての故に心意泰然として恬怡快樂なり。佛、阿難に告げたまはく、汝今是の流光白骨を諦觀して愼んで忘失すること莫れと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の觀を得ば第十一白骨流光觀竟ると名く。

〔六〇〕佛、阿難に告げたまはく、此の觀を得已つて復た當に更に繫心して意を住せしむることを敎ふべ

【五九】第十一白骨流光觀。

【六〇】第十二四大觀（亦は九十八使境界觀）。

て愼んで忘失すること莫れと。爾の時、阿難は佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時、第八新死想竟ると名く。

五七 佛、阿難に告げたまはく、復た當に更に繫念して意を住せしむることを敎ふべし。左脚の大指上を諦觀し、足より頭に至り、心をして散ぜしめず、身の諸骨を見ること一一分明に、共に相支拄し亦相連持して破るる者あることなく、毛髮爪齒皆悉く具足し、皎然として大いに白し。已身を見已つて往復反覆し想ひて白淨ならしむ。一身を想ひ已つて復た二身を想ひ、二身を想ひ已つて復た三身を想ひ、三身を想ひ已つて復た四身を想ひ、四身を想ひ已つて復た五身を想ひ、乃ち十に至る。十身を想ひ已つて一室内を見るに、周匝上下、悉く是れ骨人にして、毛髮爪齒皆悉く具足し、白中の白なること珂雪の如し。一室を見已つて復た百寳を見る。百寳を見已つて一閻浮提を見る。一閻浮提を見已つて乃至三千大千世界を見る。中に滿てる骨人は毛髮爪齒皆悉く具足し、其の色極めて白く、白きこと珂雪の如し。此の想成ずる時、心意恬安として歡喜常に倍す。佛、阿難に告げたまはく、汝好く具足身骨想を諦觀して愼んで忘失すること莫れと。爾の時、阿難は佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時、第九具身想竟ると名く。

五八 佛、阿難に告げたまはく、復た當に更に繫心して意を住せしむることを敎ふべし。右足の大指兩節の間を諦觀して、心をして專ら住せしめ意を分散することなく、兩節を觀じて相ひ離去せしめ唯だ角のみ相拄ふ。兩節を觀じ已つて足より頭に至り、皆是の如くならしめ、節々を解きて唯だ角のみ相拄へしむ。頭より足に至るまで三百六十三解あり。一一諦觀して節節を各々解かしめ、若し足らずんば心に安きて諦觀し節節を各々解かしめて、唯だ角のみ相拄ふ。已身を觀じ已つて當に他身を觀ずべし。一を觀見し已つて二を觀見し、二を觀じ已つて三を觀見し、三を觀じ已つて四を觀見し、四を觀じ已つて五を觀見し、五を觀じ已つて乃至無量の諸の白骨人の節節を各々解き、唯だ角

【五七】第九具足骨想觀。

【五八】第十節々解觀。

の如く或は濁水の如し。濁水の想を作して持用して皮を洗ひ、足より頭に至り皆是の如くせしめよ、自ら己身を觀じて極めて分明ならしめ、己身を觀じ已つて現前地に於て、復た一身を作つて前に在つて立たしめ、己の如く異ることなし。一を想ふこと成じ已つて復た當に二を想ふべし。二を想ふこと成じ已つて復た當に三を想ふべし。三を想ふこと成じ已つて復た當に四を想ふべし。四を想ふこと成じ已つて復た當に五を想ふべし。五を想ふこと成じ已つて乃至十を想ふ。十を想ふこと成じ已つて一室内を見る。周匝上下、中に滿てること皆是なり。赤色の骨人或は淤泥の色なる者あり、或は濁水の色なる者あり。濁水を以て皮を洗ふ。是の如き衆多のもの、漸漸廣大して一由旬に滿つ。一由旬を想ひ已つて二由旬を想ふ。二由旬を想ひ已つて漸漸廣大して百由旬を想ふ。百由旬を想ひ已つて乃至三千大千世界を見る。中に滿てる赤色の骨人或は淤泥の色なる者あり、或は濁水の色なる者あり。濁水を以て皮を洗ふ。周匝上下、縱横彌滿す。佛、阿難に告げたまはく、汝今此の赤色相を諦觀して愼んで忘失すること莫れと。爾の時に阿難は佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時第七極赤淤泥濁水洗皮雜想竟ると名く。

[五六] 佛、阿難に告げたまはく、復た當に更に繫心して意を住せしむることを敎ふべし。左脚の大指を觀じ足より頭に至り、新死人の如く其の色萎黄す。當に己身を觀ずべきこと亦復た是の如し。萎黄を見已つて當に黄色を變じて青赤と成らしむべし。此の想成ずる時、前地に於て一新死人ありて其の色黄赤なるを見る。一を見已つて二を見、二を見已つて三を見、三を見已つて四を見、四を見已つて五を見、五を見已つて心想利なり、故に恒に己身を見ること新死人の如し。是の如き想成じて一切人の閻浮提に滿ちて新死人の如きを見る。此の想成じ已つて轉じて復た廣大にし、三千大千世界の中に滿てる新死人を見る。自ら己身及び以つて他身を見るに等しくして異りあることなし。此の想成ずる時心意慘然として貪欲轉た薄し。佛、阿難に告げたまはく、汝好く是の新死想を諦觀し

【五六】　第八新死想觀。

虫蹀躞して無數の蟲あり、眼を穿つて出でんと欲し、眼瞼間に生ず。身分の[五三]九孔も亦復た是の如し。諸蟲爾の時に、厚皮より出でて薄皮の中に入り、皮遂に穿ち盡きて蟲皆地に落つ。其の數衆多にして稱計すべからず。一大聚を作し猶ほ蟲山の如く、行者の前に在つて更に相食噉し或は相纏逆す。

爾の時に行者は衆多の蟲を見已つて、復た當に繫念して一蟲を諦觀すべし。此の一蟲をして諸蟲を噉ひ盡さしめ、既に蟲を噉ひ已つて一蟲獨り在り。其の心漸く大となりて向の一蟲を見るに、大なること狗の如く許にして、身體困頓し、鼻は曲つて角の如く行者の前に嗅ぐ。其の眼は正赤にして燒鐵丸の如し。此の事を見已つて極めて大いに驚怖し、當に自ら憶念すべし。我が身は云何んが忽然として乃ち爾く此の如き事を作すや。先に諸蟲を見るに更に相食噉し、今此の蟲を見るに形體醜惡にして何ぞ甚だ畏るべきやと。此の想成ずる時、當に自ら身を觀ずべし。我が此の諸蟲は本無にして今有り。已に有つて還た無し。此の如き不淨は心想より生ず。來るに所從なく去るに所至なし。亦是れ我に非ず亦是れ他に非ず。此の如き身は六大和合にして因緣之を成ず。六大散滅すれば身も亦無常なり。向には諸蟲來るに所從なく去るに所至なし。我が身は蟲の聚りにして當に何の實あるべけんや。蟲も亦主なく我も亦我なし。是の思惟を作す時、蟲を見る所の眼は當に漸漸に小にすべし。此の事を見已つて身心和悅にして恬然として安樂なること倍ゝ前に勝る。佛、阿難に告げたまはく、汝好く是の厚皮蟲聚觀法を受持し愼んで忘失することヽ莫れと。阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の想成じ已るを第六厚皮蟲聚觀竟ると名く。

[五五]佛、阿難に告げたまはく、復た當に意を作して一處に繫念し、右脚の大指上を諦觀して足より頭に至るべし。好く之を諦觀して當に皮肉をして都て盡さしむべし。腸・胃・腹・肝・肺・心・脾・腎、一切五藏悉く地に落墮して、唯だ筋骨ありて共に相連持し、殘膜骨に著き其の色は極めて赤く或は淤泥

【五三】九孔とは、兩眼・兩耳・兩鼻・口・大小便の所なり。

【五五】第七極赤　泥濁水觀。

怖し身心皆動く。

此の如き相貌は皆是れ前身に禁戒を毀犯し、諸惡の根本たり。[五一]無我を我と計し、無常を常と計し、不淨を淨と計して放逸染著し、諸欲を貪受して苦法の中に於て横に樂想を生じ、空法の中に於て顚倒の想を起し、不淨の身に於て淨想を起し、[五二]邪命自活して、無常を計せざるなり。此の想成ずる時復た當に更に教ふべし。汝驚怖すること莫れ。此の如き夜叉は是れ汝の惡心猛毒の境界にして六大より起り、六大の成ずる所なり。汝今應當に六大を諦觀すべし。此の六大とは地水火風識空なり。此の如き一一を汝當に諦推すべし。汝の身は是れ地と爲さんや、是れ水と爲さんや、是れ火と爲さんや、是れ風と爲さんや。是れ識と爲さんや、是れ空と爲さんやと。是の如く一一此の身は何大より起り何大より散ずるやを諦觀するに六大は主なし。身も亦無我なり。汝今云何んが夜叉を畏るるや。汝の心想は來るに所從なく去るに所至なきが如く、夜叉を想見するも亦復是の如し。但だ安意にして坐せよ。設使夜叉來つて汝を打たば歡喜し忍受して無我を諦觀せよ。無我法の中には驚怖の想なし。但だ當に正心にして結加趺坐すべし。不淨と及び夜叉とを諦觀して、一を作すを成じ已らば復た當に二を作すべし。是の如く漸漸にして乃至無量に、一一諦觀して皆分明ならしむ。佛、阿難に告げたまはく、汝好く觀薄皮不淨法を受持し、愼んで忘失すること莫れと。爾の時に阿難は佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時第五觀薄皮竟ると名く。

[五三]佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已らば、復た當に更に繫念を右脚の大指上に著けしむべし。當に脚指を諦觀して脚をして膖脹せしむべし。脚より頭に至る。吹ける皮嚢の如く膖脹津黑し青瘀堪へ難く、中に滿てる白蟲は粳米の粒の如し。蟲に四頭あり蠢蠢として相逐ひ更に相唼食す。肌肉骨髓に皆諸蟲を生じ、一切五藏を蟲皆食ひ盡し、唯だ厚皮ありて其の骨外に在り。其の皮厚薄なること猶ほ繒綀の如く、諸蟲出入して竹葉を穿てるが如く、內外攜攜して其の皮穿たんと欲す。眼

【五一】以下常樂我淨の四顚倒にして四念處觀に反するものなり。

【五二】邪命とは、比丘として不如法の手段によりて食を得ること。

【五三】第六厚皮蟲聚觀。

此の不淨想は來るに所從なく去るに所至なし。汝當に一一に不淨を諦觀すべし。彼我を求索するに了すること得べからず。世尊は我及び他は皆悉く空寂なりと說く。何に況んや不淨をや。是の如く種種に其の心を呵責して教へて空を觀ぜしめ、髮・毛・爪・齒一切は悉く無なるを見、豁然として諸の不淨の物を捨て前の如く意を任せしめて還つて骨人を觀るべし。佛、阿難に告げたまはく、汝是の語を持し愼んで此の不淨觀及び易想法を忘失すること莫れと。爾の時に阿難は、佛の此の語を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずる時、第四膖脹膿血及び易想觀竟ると名く。

五〇 佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて次には當に更に念を一處に繫ぐることを教ふべし。端坐正受して右脚の大指上を諦想し、指の上皮をして携携して穿たんと欲せしめ、薄皮・厚皮、內外映徹す。其の薄皮の內に一の薄膜あり、亦當に諦觀すべし。是の如く漸漸に膝に至り臆に至る。左脚も亦然り。腰に至り背に至り、頸に至り項に至り、頭に至り面に至り胸に至り、擧身皆爾なり。薄皮・厚皮・內外映徹し携携して穿たんと欲し、吹かるる者の如く其の皮膖脹して具さに說くべからず。身の諸毛中の一一の毛孔に百千無量の諸膿雜汁あり。猶ほ雨滴の如く毛孔より出でて疾きこと雹雨の如し。內外俱に流れて膿血盈滿し、不淨の極、堪忍すべきこと難し。猶ほ膿の池の如く亦血の池の如く、諸蟲中に滿つ。此の想成じ已つて當に胸裏を觀ずべし。擧身是れ蟲にして猶ほ蟲の聚まりの如し、復た當に更に左脚大指を觀ずべし。膖脹觀潰し、靑膿・黃膿・赤膿・黑膿・紅膿・綠膿・白膿、爛潰交橫し、屎尿と雜る。復た諸蟲ありて其の中に遊戲し、穢惡臭處堪忍すべからず。此の身を厭患して諸欲を貪らず、生を受くることを樂はず。此の想成ずる時大夜叉を見る。身は大山の如く頭髮蓬亂して棘刺林の如し。六十の眼ありて猶ほ電光の如し。四十の口ありて口に二牙あり皆悉く上出し猶ほ火幢の如し。舌は劍樹に似て吐けば膝に至る。手に鐵棒を提へ棒は刀山に似て、人を打たんと欲するが如し。是の如きもの衆多にして其の數一に非ず。此の事を見る時極めて大いに驚

【五〇】第五薄皮觀。

を觀るも亦復た是の如し。當に想念を作すべし。我が此の身は甚だ患厭すべし。衆多の不淨一切に彌滿すと。是を諦觀し已つて生死の患を畏れ、其の心堅固にして深く因果を信じ、出定にも入定にも恒に不淨を見、厭離を求めて此の身を捨棄せんと欲す。此の想を作す時、自ら己身を見るに擧體の皮肉秋葉の落つるが如く、肉の地に墮ちて前地に在るを見る。已にして卽ち大いに心を動かし、心に驚怖を生じ身心震掉して自ら寧んずること能はず。身氣熱惱すること熱病人の渴の爲に逼らるるが如し。出定の時は、人の夏日曠野を行つて渴乏して水なく身體疲極するが如し。此の想成じ已つて乃至食時に所食の物を見ること膖死屍の如く、所飮の漿を見ること猶ほ膿血の如し。此の想成じ已つて極めて大いに身を厭ひ、身内及び身外を觀ずるに淨を求むるも得ず。

佛、阿難に告げたまはく、復た當に更に敎へて其をして易觀ならしめん、身を棄てて唐く所得無きこと莫らしむべし。易觀の法とは當に遠處臭穢の外に於て一淨物を作るべし。其の繋心をして一淨物を想はしめ、心眼明了にして卽ち往いて取らんと欲す。是の如く漸漸に所見廣遠にして、諸の不淨の外に諸の淨地の琉璃地の如きあり。此の淨處を見て卽便ち往かんと欲す。轉じて復た廣遠にして意達する能はず。

佛、阿難に告げたまはく、爾の時に當に此の如きの行人に敎へて是の言を作すべし。汝の見る所の事は是れ不淨の想なり。此は不淨の想にして雜穢の物なり。當に知るべし、此の想は顚倒より起る。皆前世の顚倒の行に由るが故に此の身を得。此の如き身は種子根本、皆不淨と爲す。汝今實に此の不淨を見るや不や。不淨を見ると雖も外に於て淨を見る。當に知るべし。此の淨と及び不淨とは久しく停まるべからず。諸根を隨逐し。憶想して見るに是れ此の不淨身は、諸の因緣に屬す。緣合すれば則ち有り、緣離るれば則ち無し。爾の見る所の事も亦緣想に屬す。想成ずれば則ち有り想壞すれば則ち無し。此の如き想は五情より出で還つて汝が心に入る。諸欲の因緣によりて此の想あり。

に不淨流溢す。他身も亦爾り、何ぞ愛樂すべけんやと。此の事を見已つて極めて自ら身を厭ひ、慚愧自責す。出定の時、諸の飲食を見ること屎尿汁の如く甚だ惡み厭ふべし。次に易觀を教へん。易觀の法とは當に更に想念を起すべし。想念成ずる時、其の身外を見るに、諸不淨間に、周匝して四面に忽然として炎起り、熱時の焰の如く、其の色正白にして、野馬の行くが如く諸の不淨を映す。爾の時に行者は此の事を見已つて、當に大いに歡喜すべし。歡喜を以ての故に身心輕軟にして、其の心明朗に快樂常に倍す。佛、阿難に告げたまはく、是を第三慚愧自責觀と名くと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ぜば第三津膩慚愧觀竟ると名く。

【四九】第四膖脹爛血觀

四九 佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に繫念を敎ふべし。意を左脚大指の上に住し、脚の大指の節を諦觀せしめて、膖脹の想を起す。膖脹を見已つて爛壞の想を起す。爛壞を見已つて青黑赤白諸膿血の想を起す。是の諸膿血、極めて臭處にして堪忍すべきこと難からしむ。是の如く漸漸に、膝に至り臗に至つて皆膖脹・爛潰・不淨ならしむ。左脚を觀じ已らは右脚も亦然り。是の如く漸漸に腰に至り背に至り、頸に至り項に至り、頭に至り面に至り胸に至り、擧身の支節、一切膖脹し、皆悉く爛壞し、青黑赤白の諸膿流出し、臭惡雜穢堪ふべからざる處なり。一を想ふこと成じ已つて復た更に二を想ふ。二を想ふこと成じ已つて復た更に三を想ふ。三を想ふこと成じ已つて復た更に四を想ふ。四を想ふこと成じ已つて復た更に五を想ふ。五を想ふこと成じ已つて乃至十を想ふ。十を想ふこと成じ已つて一室內を見る。周匝上下、諸の膖脹人皆悉く爛壞して、青黑赤白の諸膿悉く皆流出し、雜穢臭處堪忍すべからず。復た當に更に一由旬を想ふべし。一由旬を想ひ已つて乃至百由旬を想ふ。百由旬を想ひ已つて乃至三千大千世界を見る。周匝上下、地及び虛空に一切彌滿して、膖脹爛壞し、青黑赤白の諸膿流出し、雜穢充滿して堪ふべからざる處なり。

佛、阿難に告げたまはく、爾の時に行者は此の事を見已つて自ら己身を見るに不淨が滿す。他身

を作すべし。我れ前世に於て無數劫來、熱惱法を造り業緣に牽かるるが故に、今は此の火の起るを見せしむと。復た當に念を作すべし。此の如きの火は四大よりあり、我が身は空寂にして四大は主なし。此の大猛火は橫に空より起る。我身も他身も悉く皆亦空たり。此の如く火は妄想より生ず。何の燒く所とせんや。我が身及び火は二つとも皆無常なりと。佛阿難に告げたまはく、行者は應當に至心に是の如きの法を諦觀すべし。空を觀ずれば火無く亦衆骨なし。此の觀を作さば恐懼あることなく、身意恬安なること前に倍勝すと。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此の想成ずれば、第二觀白骨竟ると名く。

[四七]佛、阿難に告げたまはく、第二白骨を觀じ竟れば、復た當に更に繫念法を敎ふべし。繫念法とは先づ當に繫心して左足の大指上に著くべし。一心に足の大指を諦觀し、肉を青黑津膩たらしむること猶ほ日光の[四八]肥肉を炙るが如く、漸漸に膝に至り乃ち髖に至る。左足を觀じ已つて其の右足を觀ずること亦復た是の如し。右足を觀じ已つて次に當に腰を觀ずべし。背に至り頸に至り、項に至り頭に至り、面に至り胸に至る。擧身の支節一切の身分皆亦津黑なること、猶ほ日光の肥肉を炙るが如く、不淨流溢すること屎尿の聚るが如く、己身を諦觀して極めて分明ならしむ。一を想ふこと成じ已つて復た當に二を想ふべし。二を想ふこと成じ已つて復た當に三を想ふべし。三を想ふこと成じ已つて復た當に四を想ふべし。四を想ふこと成じ已つて復た當に五を想ふべし。五を想ふこと成じ已つて復た當に十を想ふべし。十を想ふこと成じ已つて一室內を見、中に滿てる津黑は猶ほ日光の肥肉を炙るが如く、屎尿の聚るが如く、諸の不淨人行列縱橫して一室內に滿つ。一室を見已つて復た二室を見る。二室を見已つて乃至無量衆多の不淨人の四維上下に、皆悉く娑婆世界に充滿せるを見る。此の想成じ已つて、行人自ら念ずらく、我れ前世に於て貪婬愚癡にして自ら覺知せず、歷年に放逸にして情色に貪著して慚愧あることなく、色聲香味觸法を隨逐せり。今我が身を觀ずる

【四七】第三津黑不淨觀。

【四八】宋、元、明本には肥を肌となす。

を倒にして臗骨中に入るを見る。一房內を見已つて乃ち百房の內を見るに至る。是の諸の骨人は皆悉く頭を倒にして臗骨中に入る。百房を見已つて一由旬を見る。中に滿てる骨人は皆悉く頭を倒にして臗骨中に入る。一由旬を見已つて乃ち無量の諸の骨人を見るに至る。皆悉く頭を倒にして臗骨中に入る。此の想成じ已つて諸骨人の各各縱横に悉く前地に在るを見る。或は頭の破れたるを見、或は項の折れたるを見、或は顚倒せるを見、或は繚戾せるを見、或は腰の折れたるを見、或は伸脚を見、或は縮脚を見、或は脚骨の分れて二分と爲るを見、或は頭骨の倒に胸中に入るを見、或は頭骨の偃仰掣縮し紛亂縱横せるを見る。悉く前地に在りて周匝上下、一室內に滿つ。此の想成じ已つて乃ち無量無邊の諸の白骨人の紛亂縱横し或は大或は小、或は破れ或は完きを見るに至る。此の如きの衆事、皆當に心を住めて諦觀し極めて分明ならしむべし。佛、阿難に告げたまはく、是の時行者は、此の事を見已つて當に自ら思惟すべし。前きには骨完具せるに今は破散して縱横に紛亂し記錄すべからず。此の白骨身は猶ほ尙ほ定まりなし。當に知るべし、我が身も亦復た無我たり。是を諦觀し已つて當に自ら思惟すべし。正に縱横に諸の雜亂の骨ありて、何處に我と及び他身あらんと。爾の時に行者無我を思惟して身意泰然として安隱快樂なり。

佛阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて復た當に更に心をして廣大ならしむべし。彼の行人をして一閻浮提に縱横に亂骨せるを見せしめ、諸骨外に周匝し四面に大火の起るあり、焰焰相次いで諸の亂骨を燒くを見、諸の骨人の節節に火起るを見る。是の如き火相、或は衆火なり、猶ほ流水の如く、明炎熾盛にして諸骨の間を流る。或は衆火あり、猶ほ大山の如く、四面より來る。此の想成じ已つて極めて大いに驚怖す。出定の時、身體蒸熱せば還つて當に心を攝して、前に骨を觀ぜしが如く、一白骨人を觀じて極めて明了ならしむべし。是の時行者は、入定の時、自ら起つこと能はずんば要らず當に彈指すべし、然る後起つことを得ん。此の想成ずれば當に自ら念を起して是の言

見る。中に滿てる骨人は行行相向ひ、各右手を擧げて行者に向ふ。此の事を見已つて身心安樂にして驚怖の想なし。心想利なるが故に、〔六〕娑婆世界を見る。中に滿てる骨人は皆兩手を垂れ十指を伸舒して、一切齊しく立ちて行者に向ふ。

時に行者は此の事を見已つて出定にも入定にも恒に骨人を見る。山河石壁一切世事、皆悉く變化して猶ほ骨人の如し。爾の時に行者は此の事を見已つて四方面に於て四大水を見る。其の流れ迅駛にして色白きこと乳の如し。諸の骨人を見るに流に隨つて沈沒す。此の想成ずる時復た更に懺悔し、但だ純ら水の空中に涌注するを見、復た當に想を起して水をして恬靜ならしむべし。

佛、阿難に告げたまはく、此を凡夫心想白骨白光涌出三昧と名く。亦凡夫心海生死境界相と名く。我れ今迦絺羅難陀に因つて汝及び未來の一切衆生等の爲に、是の白骨白光涌出三昧門を說くは、亂心を攝して生死の海を渡らしめんが爲なり。汝當に受持して愼んで忘失すること勿るべしと。爾の時に世尊に此の語を說き已つて卽ち白光三昧を現じ、一一の相貌、皆阿難をして悉く之を見ることを得しむ。爾の時に阿難は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。此を白骨觀最初の境界と名く。

佛、阿難に告げたまはく、此の想成じ已つて更に餘想を敎へん。餘想を敎ふとは當に自ら身を觀じて一白骨人と作り、極めて白淨ならしめ、頭を倒下して髖骨中に入らしめ、心を一處に澄して極めて分明ならしむべし。此の想成じ已つて身の四面を觀ずるに周匝して四方に皆骨人あり。此の想成じ已つて卽ち前地に於て一白骨人を作り、己が身の如くに似たり。亦復た頭を倒にして髖骨中に入る。を想ふこと成じ已つて次に當に二を想ふべし。二を想ふこと成じ已つて次に當に三を想ふべし。三を想ふこと成じ已つて次に當に四を想ふべし。四を想ふこと成じ已つて次に當に五を想ふべし。五を想ふこと成じ已つて乃ち十を想ふに至る。是の如く一房內に滿ちて諸の骨人の皆悉く頭

【六】娑婆(Sahā)は、忍土と譯す、種々の苦惱を忍ぶを云ふ、總じて三千大千世界を娑婆世界と云ふ、前の須彌四洲の如きは一小世界なり。

の如きを見る。不淨の想成ずる時、愼んで身を棄つること莫れ。當に易觀を敎ふべし。易觀の法とは諸節の間に白光流出して、其の明、熾盛なること猶ほ雪山の如きを想ふなり。此の事を見已つて前の不淨の聚りを夜叉吸ひ去る。

復た當に想ふべし。前に一骨人を作り極めて大白ならしむ。此の想成じ已つて次に第二骨人を想ふ。二骨人を見已つて三骨人を見る。三骨人を見已つて四骨人を見る。四骨人を見已つて五骨人を見る。是の如く乃至十骨人を見る。十骨人を見已つて二十骨人を見る。二十骨人を見已つて三十骨人を見る。三十骨人を見已つて四十骨人を見る。四十骨人を見已つて一室内を見る。中に滿てる骨人は前後左右行列して相向ひ、各々右手を擧げて行者に向ふ。是の時行者は漸漸廣大して一庭内を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、白きこと珂雪の如く、各々右手を擧げて行者に向ふ。心復た廣大して一頃の地を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、各々右手を擧げて行者に向ふ。心漸く廣大して一[四一]由旬を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、各右手を擧げて行者に向ふ。一由旬を見已つて乃至百由旬を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、各々右手を擧げて行者に向ふ。百由旬を見已つて乃至[四二]閻浮提を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、各々右手を擧げて行者に向ふ。一閻浮提を見已つて次に[四三]弗婆提を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、各右手を擧げて行者に向ふ。弗婆提を見已つて次に[四四]瞿耶尼を見る。中に滿てる骨人は行々相向ひ、各右手を擧げて行者に向ふ。瞿耶尼を見已つて、[四五]欝單越を見る。中に滿てる骨人は行行相向ひ、各右手を擧げて行者に向ふ。四天下の中に滿てる骨人を見已つて、身心安隱にして驚怖の想なし。心漸く廣大にして百閻浮提を見る。中に滿てる骨人は行行相向ひ、各々右手を擧げて行者に向ふ。百閻浮提を見已つて百弗婆提を見る。中に滿てる骨人は行行相向ひ、各々右手を擧げて行者に向ふ。百弗婆提を見已つて次に百瞿耶尼を見る。中に滿てる骨人は行行相向ひ各右手を擧げて行者に向ふ。百瞿耶尼を見已つて次に百欝單越を

無間地獄と云ふ、八大地獄の一なり。

【三九】三惡道は、地獄・餓鬼・畜生の三類なり。

【四〇】第二白骨觀。

【四一】由旬(Yojana)。四十里を一由旬とす、(六丁一里)。

【四二】閻浮提(Jambudvipa)は、南閻浮提とも云ふ、須彌山の南方にある一大洲にして、吾等の住所たり。

【四三】弗婆提(pūrva-videha)は、須彌山の東方にある一大洲なり。

【四四】瞿耶尼(Apara-godānīya)は、須彌山の西方にある一大洲なり。

【四五】欝單越(Uttara-kuru)は、須彌山の北方にある一大洲なり。

知る、必定して清淨梵行を成ずるを得ん。世尊、此の法は是れ甘露の器なり。此を受用する者は甘露の味を食す。唯だ願はくは天尊、重ねて爲に廣く說きたまへと。

爾の時世尊は迦絺羅難陀に告げたまはく。汝今、審實に此の法を得ば、汝の意に隨つて［三三］十八變を作すべしと。時に迦絺羅難陀は立つて空中に住し、意に隨つて自在に十八變を作す。時に諸の比丘は迦絺羅難陀の我慢心多きも猶ほ能く調伏して佛の敎に隨順し、心を一處に繫けて諸根に隨はずして、［三四］阿羅漢を成ぜしを見る。

爾の時に會中に千五百の比丘あり。亂心多き者は此の事を見已つて皆歡喜を生じ、卽ち佛所に詣つて次第に法を受く。爾の時に世尊は、此の憍慢比丘摩訶迦絺羅難陀に因つて初めて繫念法を制し、諸の［三五］四衆に告ぐ。若しは比丘、若しは比丘尼、若しは優婆塞・優婆夷、今より以後、無爲の道を求めんと欲せば、當に繫念して心を一處に專にすべし。若し此の心をして［三六］六根に馳騁せしむること猶ほ猨猴の如くにして慚愧あることなくんば、當に知るべし、此の人は是れ［三七］旃陀羅にして賢聖の種に非ず。心調順ならず。［三八］阿鼻の獄卒常に此の人を使ふ。是の如きの惡人は多劫中に於て得度するに由なし。此の亂心の賊は三界の種を生じ、此の心に依り因つて［三九］三惡道に墮すと。時に諸の比丘は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

［四〇］佛、阿難に告げたまはく。汝今此の摩訶迦絺羅難陀比丘の不淨觀に因つて解脫を得しや不やを見る。汝好く受持して、衆の爲に廣說せよと。阿難、佛に白す。唯然り受敎せりと。佛、阿難に告ぐ。諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ。第二觀とは念を額上に繫け、額中に爪甲の大さの如きを諦觀して、愼んで想を移すこと莫れ。是の如く額を觀じて心をして安住せしめ、諸想を生ぜず。唯だ額上を想ふ。然る後自ら頭骨を觀ず。頭骨の白きこと頗梨色の如きを見、是の如く漸く擧身白骨にして、皎然として白淨に、身體完全に節節相拄ふを見る。復た前地に諸の不淨聚ること上に說く所

【三三】十八變は、十八神變のこと、一右脇より水を出す、二左脇より火を出す、三右より火を出す、四左より水を出す、五身上に水を出す、六身下に水を出す、七身下に火を出す、八身上に火を出す、九水を履むこと地の如し、十地を履むこと水の如し、十一空に沒して地にあり、十二地に沒して空にあり、十三空中を行く、十四空中に住す、十五空中に坐す、十六空中に臥す、十七大身を現じて空に滿つ、十八大は復小を現ず。右は法華經の說にして、瑜伽論には又別の說あり。

【三四】阿羅漢(Arhat)は、小乘聲聞の究竟の位にして、應供、殺賊、無生などの義あり、四果の中の第四なり。

【三五】四衆とは、比丘(Bhikṣu)勤息男の義、比丘尼(Bhikṣuṇī)勤息女の義、優婆塞(Upāsaka)淸信士の義、優婆夷(Upāsikā)淸信女の義、にして後二者は在家の信者なり。

【三六】六根は、眼・耳・鼻・舌・身・意なり。

【三七】旃陀羅(Caṇḍāla)。屠殺を業とするものにして、極惡卑人のこと。

【三八】阿鼻(Avīci)。地獄は又

入り、咽喉より出でて前地に墮せしむ。此の想成り已つて即ち前地を見る。(即ち、屎尿臭處、及び諸の蚘蟲、更に相纒縛し、諸蟲の口中より膿血を流出し、不淨盈滿す。此の想成り已つて自ら己身を見るに、白きこと雪人の如く節節相拄ふ。若し黄黒なるを見ば當に更に悔過すべし。既に悔過し已つて自ら己身を見るに、骨上に皮を生じ、皮は悉く褫落し、聚つて前地に在り、漸漸に長大して[二五]鉢多羅の如し。復た更に長大して瓮堈に似如たり。乃至大となりて[二六]乾闥婆樓の如し。或は大或は小、心に隨つて自在なり。又漸く增長して猶ほ大山の如し。而して諸蟲ありて此の山を唼食し、膿血を流出す。無數の蟲ありて膿裹を遊走す。復た皮山を見るに、漸漸に爛壞して唯だ少しく在るあり。諸蟲競つて食ふ。四夜叉あり、忽ち地より出で、眼中に火を出し、舌は毒蛇の如く、而して六頭あり、頭は各ゝ相を異にす。一には山の如く、二には猫の如く、三には虎の如く、四には狼の如く、五には狗の如く、六には鼠の如し。又其の兩手は猶ほ獼猴の如く、其の十指の端には一一皆四頭の毒蛇あり。一には水を雨らし、二には土を雨らし、三には石を雨らし、四には火を雨らす。又其の左脚は[二七]鳩槃荼鬼に似、右脚は[二八]毘舍闍鬼に似たり。醜惡の形を現はして甚だ怖畏すべし。時に四夜叉は一々九種の死屍を荷負し、次に隨つて行列し行者の前に住す。佛、迦絺羅難陀に告げたまはく、是を不淨想最初の境界と名くと。

佛、阿難に告げたまはく、汝是の語を持して愼んで忘失すること莫れ。未來の衆生の爲に敷演して廣く此の甘露の法、[二九]三乘の聖種を說けと。時に迦絺羅難陀は佛の此の語を說きたまふを聞いて、一々諦觀し、九十日を經るも心想を移さず。七月十五日に至つて僧の[三〇]自恣竟る。時に諸の比丘は世尊を禮し已つて各々安ずる所に還る。(迦絺羅難陀は)日の後分に於て次第に四沙門果を修得し、三明六通、皆悉く具足し、心大いに歡喜して佛足を頂禮し、佛に白して言さく、世尊我れ今日に於て、思惟に因るが故に、[三一]正受に因るが故に、[三二]三昧に依るが故に、生分已に盡き後有を受けず、如道眞を

【二五】鉢多羅(Pātra)。鉢、應量器のこと、比丘六物の一にして飯器なり。

【二六】乾闥婆(Gandharva)は、蜃氣樓の如きもの。

【二七】鳩槃荼(Kumbhāṇḍa)は、人の精氣を吸ふ鬼の名。

【二八】毘舍闍(piśāca)は、吸血鬼。

【二九】三乘は、聲聞・緣覺・菩薩のこと。

【三〇】自恣(pravāraṇa)は、夏安居の終る日に、僧衆互に已が罪を恣に舉げしめて懺悔するを云ふ。

【三一】正受は、對象を正しく受容し認識することにて、禪定と見て可なり。

【三二】三昧(Samādhi)は、心を一境に住せしめて動かぬこと、禪定の別名なり。

成る時、擧身煖煗にして、心下熱す。此の想を得る時、繫心住と名く。〔二三〕心旣に住し已つて、復た當に想を起すべし。足趺の肉を兩向披せしめ、足趺の骨を見て極めて了了ならしむ、足趺の骨を見るに白きこと珂雪の如し。此の想成り已つて次に踝骨を觀ず。肉を兩向披せしめて亦踝骨を見、極めて皎白ならしむ。次に脛骨を觀じ肉をして褫落せしめ自ら脛骨を見るに皎然として大いに白し。次に膝骨を觀じ亦皎然分明ならしむ。次に髖骨を觀じ亦極白ならしむ。次に脇骨を觀じ、肉の一一の脇間より兩向褫落するを想ひ、但だ脇骨のみ白きこと珂雪の如きを見る。乃至脊骨を見て極めて分明ならしむ。次に肩骨を觀じ、肩肉を刀を以て割くが如きを想ひ、肩より肘に至り、肘より腕に至り、腕より掌に至り、掌より指端に至る。皆肉をして兩向披せしめ、半身の白骨なるを見る。半身の白骨を見已つて次に頭皮を觀ず。頭皮を見已つて次に薄皮を觀ず。薄皮を觀じ已つて次に膜を觀ず。膜を觀じ已つて次に腦を觀ず。腦を觀已つて次に肪を觀ず。肪を觀じ已つて次に咽喉を觀ず。咽喉を觀じ已て次に肺腧を觀ず。肺腧を觀じ已つて、心・肺・肝・大腸・小腸・脾・腎・生藏・熟藏を見る。四十戶の蟲、生藏中に在り。戶は八十億の小蟲を領す。一一の蟲は諸脈より生じ孚乳產生す。凡そ三億あり、口に生藏を含む。一一の蟲に四十九頭あり。其の頭尾は細きこと猶ほ針鋒の如し。此の諸蟲等、二十戶は是れ火蟲にして火精より生ず。二十戶は是れ風蟲にして風氣より起る。是の諸蟲等は諸脈に出入し、遊戲自在なり。火蟲は風を動かし風蟲は火を動かし更に相呼吸して以て生藏を熟す。上下往復すること凡そ七反あり。此の諸蟲等各〻七眼あり、眼は皆火を出す。復た〔二四〕七身あり、火を吸うて身を動かし、以て生藏を熟す。生藏熟し已つて、各〻復た還り走つて諸脈中に入る。復た四十戶の蟲あり。戶は三億の小蟲を領し、身赤きこと火の如し。蟲に十二頭あり、頭に四口あり、口に熟藏を含む。脈間の流血を皆觀じて見せしむ。此の事を見已つて又諸蟲の咽喉より出づるを見る。又小腸・肝・肺・脾・腎を觀じ、皆流注して大腸中に

〔二三〕以下十八觀を示す、第一不淨觀(Aśubhā-smṛiti)最初の境界。

〔二四〕七身を宋、元、明本には七耳となす。

爾の時に迦綺羅難陀は、佛の此の語を聞いて卽ち坐より起つて合掌長跪して、佛に白して言さく、世尊唯だ願はくは天尊我に[一五]繋念を敎へたまへと。爾の時に佛は迦綺羅難陀に告げたまはく、諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ、汝は今日に於て快く如來に亂心の賊を滅する甘露の正法を問ふ。三世の諸佛は煩惱を治する藥もて、一切諸の放逸の門を關閉し、普く人天の爲に[一六]八正道を開く。汝好く諦觀して心を亂さしむること莫れと。佛の此の語を說きたまふ時、衆中に五十の[一七]摩訶羅比丘ありて、亦阿難に白す。世尊今は放逸を除く法を說かんと欲す。我等は隨順して此の事を學ばんと欲す。唯だ願はくは尊者、我が爲に佛に白したまへと。此の語を說く時、佛は諸の比丘に告げたまふ、但だ汝らの爲のみに非ず、亦未來の諸の放逸者の爲に、我れ今此の迦蘭竹園に於て、迦綺羅難陀比丘の爲に繋念法を說かんと。

[一八]佛、迦綺羅難陀に告げたまふ、汝我が語を受け愼んで忘失すること莫れ。汝今日より[一九]沙門法を修せよ。沙門法とは應當に靜處に[二〇]尼師壇を敷き、[二一]結跏趺坐して衣服を齊整し、正身端坐して偏へに右の肩を袒ぎ、左手を右手の上に著け、目を閉ぢ舌を以て腭を拄へ、定心を住せしめ分散せしめざるべし。先づ當に繋念して左脚の大指の上に著くべし。指の半節を諦觀して皰の起る想を作し、諦觀して極めて明了ならしめ、然る後に皰の潰ゆる想を作す。指の半節を見て極めて白淨ならしめ白光あるが如し。此の事を見已つて次に一節を觀ず。肉をして劈去せしめて指の一節を見、極めて明了ならしめて白光あるが如くせよと。佛迦綺羅難陀に告げたまはく、是の如きを繋念法と名くと。迦綺羅難陀は佛の所說を聞いて歡喜奉行しき。

[二二]一節を觀じ已つて次に二節を觀ず。二節を觀じ已つて次に三節を觀ず。三節を觀じ已つて心漸く廣大にして當に五節を觀ずべし。脚の五節を見て白光あるが如く、白骨分明なり。是の如く繋心して五節を諦觀し心を馳散せしめず。若し馳散せば攝めて還らしむ。前に半節を念ぜし如く、念想

【一五】繋念とは、念を一處に專注して他念を雜へざること、坐禪觀法のことなり。

【一六】八正道は、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。

【一七】摩訶羅比丘（Mahallakabhikṣu）とは、愚鈍無智なる比丘の意なり。

【一八】以下繋念法を說く。

【一九】沙門（Śramaṇa）は、勤息の義、勤め修行して煩惱を息むるなり。

【二〇】尼師壇（Nisidana）。坐臥の時に敷きて、吾が身を又は臥具を護るものにして、坐具と譯することもあり。

【二一】結跏趺坐（Paryankasanam ?）は、左右の脚を股の上に組みて坐する法にして、坐禪の正常なる坐法なり。

【二二】此の一段は繋心住を示す。

して、身を擧げて地に投ずること太山の崩るるが如し。卽ち佛前に於て四體を地に布き佛に向つて懺悔す。

爾の時阿難は卽ち坐より起つて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒ぎ、佛の爲に禮を作し佛を遶ること三匝し、胡跪し合掌して佛に白して言く、世尊、此の迦絺羅難陀比丘は、何の因緣あつて生れて多智にして、〔一〇〕四毘陀論、〔一一〕達世羈經、日月星辰、一切の技藝に、通達せざることなく、復た何の罪ありてか出家以來、多年を經歷するも、佛の法味に於て獨り嘗むることを得ず。如來世尊親しく爲に說法するも生聾の人の如く聞なく得なきや。佛法の大將の隨順して法輪を轉ずる者、數五百ありて其の爲に說法するも亦益あることなし。唯だ願はくば天尊、我が爲に分別して、此の比丘の往昔の因緣を說きたまへ。

阿難の問へる時、佛は卽ち微笑するに、五色の光ありて口中より出で、佛を遶ること七匝し、還つて頂より入る。阿難に告げて言まはく、諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ、我れ當に汝が爲に分別し解說すべしと。阿難、佛に白して言さく、唯然り世尊、願樂はくは聞かんと欲すと。佛、阿難に告げたまはく、此の迦絺羅難陀比丘は、過去久遠の無數劫の時に、佛世尊あり、名けて〔一二〕然燈如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と曰ふ。彼の佛の法の中に一比丘あり、阿純難陀と名く。聰明多智なり、多智を以ての故に憍慢放逸にして、亦〔一三〕四念處を修習せず。法身を壞命して終に黑闇地獄に墮つ。地獄より出でて龍象の中に生じ、五百身中恒に龍王と作り、五百身中恒に象王と作る。畜生の身を捨てて、前の出家持戒の力に因るが故に天上に生ずるを得たり。天上の命終つて、來つて人間に生る。前身に〔一四〕三藏經を讀誦せしが故に今、佛に値ふことを得たるも、前に放逸にして四念處を修せざるに由りて、是の故に今身にて覺寤すること能はずと。

〔一〇〕四毘陀論とは、梨倶吠陀(Rig-veda)、沙磨吠陀(Sāma-veda)、夜柔吠陀(Yajur-veda)、阿闥婆吠陀(Atharva-veda)の四書にして印度最古の宗教書なり。

〔一一〕達世羈經（Vaiśeṣika-sūtra）は、勝論經のこと、印度六派哲學の一派なり。

〔一二〕然燈如來(Dīpaṃkara-tathāgata)は、釋尊が過去世に於て仕へし佛なり、如來、應供以下は佛に對する十種の尊稱にして佛十號と云ふ。

〔一三〕四念處とは、身・受・心・法の四に對して次での如く不淨・苦・無常・無我なりと觀ずる觀法なり。

〔一四〕三藏(Tripiṭaka)とは、經・律・論三群の佛教聖典のこと。

禪秘要法經

後秦、弘始の年、鳩摩羅什[一]等、長安逍遙園に於て譯す

巻の上

是の如く我れ聞く、一時、佛は王舍城[二]迦蘭陀竹園[三]に住して、大比丘[四]衆千二百五十人と倶なりき。復た五百の大德[五]聲聞[六]、舍利弗・大目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延[七]等あり。爾の時、王舍城の中に一比丘あり、摩訶迦絺羅難陀[八]と名け、聰慧多智なり。佛の所に來至して佛の爲に禮を作し、佛を遶ること七匝す。

爾の時世尊は、深く禪定に入りて、默然として言ばなし。時に迦絺羅難陀は佛の入定したまふを見て、卽ち舍利弗の所に往き、頭面もて足を禮し、白して言さく、大德舍利弗、唯だ願はくは我が爲に廣く法要を說きたまへと。爾の時舍利弗は、卽便ち爲に四諦を說きて、義趣を分別すること一遍乃至七遍す。時に迦絺羅難陀は心疑未だ寤めず。是の如く乃至遍く五百の聲聞の足を禮して法要を說かんことを請ふ。諸の聲聞等亦各〻七遍して爲に四眞諦の法を轉ず。時に迦絺羅難陀の心亦寤めず。復た佛所に還つて佛の爲に禮を作す。爾の時世尊は禪定より起ちて、迦絺羅難陀が佛の足を頂禮し、涙は盛雨の如く、世尊を勸請して、唯だ願はくは我が爲に正法輪を轉じたまへ、と云ふを見たまふ。爾の世尊は復た爲に廣く四眞諦の法を說くこと一遍乃至七遍したまふ。時に迦絺羅難陀は猶ほ故のごとく未だ解せず。五百の天子は佛の所說を聞いて法眼淨を得、卽ち天華を持して以て佛に供養し、佛に白して言く、世尊、我等は今、迦絺羅難陀比丘に因つて快く法利を得、法を見て、如法に須陀洹[九]を成ぜりと。時に迦絺羅難陀は諸天の語を聞いて、心に慚愧を懷き悲咽無言に

【一】鳩摩羅什 (Kumārajīva)。

【二】王舍城(Rājagṛha)は中印度摩伽陀國にあり、頻婆娑羅王の都せし所。

【三】迦蘭陀竹園(Kāraṇḍaveṇuvana)は、王舍城の附近にあり。

【四】比丘(Bhikṣu)。乞士と譯す、完全に受戒せる僧侶のこと。

【五】大德 Bhadanta)は、修行の成れる僧侶の尊稱なり。

【六】聲聞(Śrāvaka)は、佛の聲教を聞いて修行する佛弟子のこと、教義上には小乘佛教徒のことなり。

【七】舍利弗(Śāriputra)、大目犍連(Mahāmaudgalyāyana)、摩訶迦葉(Mahākāśyapa)摩訶迦旃延(Mahākātyāyana)は何れも佛十大弟子の人々。

【八】摩訶迦絺羅難陀(Mahākakilananda ?)。

【九】須陀洹(Srotāpanna)は、預流と譯す、聲聞四果の中の初果の位にして、初めて聖者の域に達したる境界なり。

の下に同一の經を列ぬるのも、肯んじられない事であるから、此の但し書きは坐禪三昧經の下に附すべきのを誤つたか、さなくば禪法要經も此の日に校正された事實があつたのかも知れない。

斯く疑はしい乍らも夫れらしい經名が三藏記に存し、法經錄には正しく記載せられ、開元錄に於ては蜜多譯の五卷本が前述の如く無稽のものであることが、實見上記載されて居り、而も蜜多譯五卷と云ふことは、三藏記以來附記されて居る卷數であるから、蜜多譯の禪祕要法經と云ふのは、最初から開元錄作者の實見した五卷本のみを指して居たのかと疑はるゝ餘地がある。旁ゝ以て私は現存の本經は、疑はしいとしても羅什譯出として置くつもりである。尙之れは現存本に就いて、兩人の譯語例などを詮索すれば得る所あるであらうか、國譯の際注意はしたけれども、十分に考證する餘地がなかつた。

譯者鳩摩羅什（Kumārajīva）に就いては、此に縷述するの必要はあるまい。舊譯家の第一人者、大乘論部の初傳者、龍樹佛教の傳播、主要な流布經論の傳譯、門下の英才打出、三論宗の祖師、初期支那佛教を轉回して南北朝佛教の源頭に立ち、有ゆる意味に於て支那佛教の一大時期を劃した大人物であることは世間周知の事實であらう。而して禪に關しては、本冊に收むる禪祕要法經、坐禪三昧經、思惟略要法の三種の外に、禪法要解二卷、菩薩呵色欲經一卷、合計五部が現存し、禪法要求の熱一方に高き當代にあつて、多大の法益を與へたことであらう。

禪祕要經の流布に就いては、本冊所收の他の四禪經に比して、記錄の上に於ては其の影響最も尠ないやうである。

昭和六年三月十日

南都戒壇院に於て

譯者　佐藤泰舜識

錄に此の記述なく、早くより缺本として取り扱はれて居るので、眞僞未決であり、恐らく僞傳に過ぎないであらう。

第二は宋の曇摩蜜多(Dharmamitra)が、元嘉十八年(西曆四四一)に禪祕要經三卷(或は五卷)を譯出して居ることが、出三藏記に記載せられ、爾來諸錄皆之れを掲げ、開元錄また一往之れを認めて、本經は前後三譯ありて一存二缺、則ち羅什譯のみが存在すと云つて居る。但し開元錄は曇摩蜜多譯の五卷本を實見して、實のやうに述べて居る。「蜜多譯の五卷本は羅什譯の三卷本と同本異譯と傳へられて來たが、今五卷本を檢して見るに、文極めて交錯して流行するに堪へぬ。初の一卷は治禪病祕要の文が半にして終はり、第二卷目よりは羅什譯の禪祕要法を、第一卷の半ば頃から初めて、第三卷の終り十餘紙を缺いて入れてあつて、此の部分を均して四卷となし、初めの一卷と通じて五卷としてある。されば此の五卷本は他經の一部と、他人の譯本との大部とで出來て居るから、宜しく繁重を刪略して、抹消すべきである。蓋し蜜多譯本の原物は缺本となつたであらう」(開元錄卷十七)と言つて居る。

之に就いて境野博士は、「禪祕要法經は羅什が譯出したことなく、現存するのは蜜多譯出のものであらう。其の理由は出三藏記に羅什に同經の譯あることを云はずして、蜜多譯のみ記るし、歷代三寶記に至つて初めて、支謙譯と羅什譯が記載せられ、開元錄が之れを認容したまでゞある」(支那佛教史講話上卷五四三頁)と論じて居られる。一往傾聽すべきことであるが、又遽に決定し兼ねるとも思はれる。成る程禪祕要法經三卷の名に於ては、出三藏記に羅什の譯あることを記してゐない、此の名が什譯の下に記せられたのは法經錄(第四卷)が最初のやうである。けれども三藏記の羅什譯經の下に、禪法要三卷とあるのは或は禪祕要法經を指したのではあるまいか。禪經は特に略名、通名が用いられ彼此混同し易いけれども、他に羅什譯出の禪經で、之れに似た名稱の者は、禪法要解二卷、禪法經三卷(現在二卷、單に禪經とも云ひ、坐禪三昧經のこと)の二つであるが、出三藏記には此の二經の名が明記してあつて、更に右の禪法經三卷が列ねてあるから、之れは禪祕要法經を指したと見て差支へあるまい。但し困る事には、其の經名の下に、弘始九年閏月五日重校正、とある文句である。之れは僧叡の序文などによつても、坐禪三昧經の重校された月日で、同日に兩經が重ねて校正されたでない限り、此の但し書きの文句によれば、上の經名は坐禪三昧經を指した事になるからである。然し乍ら出三藏記集が、一度坐禪三昧經を擧げておいて、次に又禪法要の名

三十觀迄に相當する。

第四會は第二會と同じく祇樹給孤獨園に於て、摩訶迦葉の弟子阿祇達多(Agnidatta)が、苦修五年にして阿那含果を得れども、進んで羅漢果を得るに至らざるに對し、佛又過去忍辱鎧太子の因緣を說いて後、慈心觀を示して速坐に阿羅漢を得せしめ、更に未來世一切衆生の阿那含より阿羅漢に至る法を示さんとて、念佛觀、慈心觀、因緣觀、數息觀、四大觀、空觀を說き終れば、會中の大衆各ゝ益を蒙り、次で佛は阿難に向つて前項に述べし如き、修禪者の用意其の他の事を說き示し、坐禪の德を歎ずる場合には、來世生天して彌勒に會い最初の說法に於て得道することを反覆してある。

斯くの如く本經は四會寧ろ四經を集めて、之れに前後三十觀の順序と、別に阿羅漢を得る道とを配し、而して「坐禪を欲する者あらば、初め迦絺羅難陀觀法より禪難提の法に及び、復た當に此の槃直迦比丘所觀の法を學ぶべし」(中卷、第二十一觀)と述べ、更に「如來は初め迦絺羅難陀の爲めに不淨觀門を說き、禪難提比丘の爲めに數息の法を說き、阿祇達の爲めに四大觀を說きたまふ。是くの如き衆多微妙の法門を云何んが受持し、當に何の名を以て後世に宣示すべきや。佛、阿難に告げたまはく、此の經は禪法祕要と名け、亦白骨觀門と名け、亦次第九想と名け、亦雜想觀法と名け、亦阿那那般那方便と名け、亦次第四果想と名け、亦分別境界と名く」(下卷、空觀の次ぎ)と說いて、一經の首尾連絡を計つて居るけれども、全體の傾向が全然融合した一經として感じを與へ兼ねて居る。殊に各會の對告衆が夫れ〳〵說法の發端となるべき人物で有り乍ら、途中から阿難を以て之れに代らせ、以て一貫の形式を整へたのであらうが、其所に未だ混雜の跡を殘して居る。

思ふに阿含系統の四經を取り、其の中に禪觀を詳述して、禪觀の立場から各經の連絡を付けて出來たものが、此の禪祕要經三卷となつたのであらう。而も恐らく前三經が先づ集められて三十觀を順序立て、次に第四の者が增補せられたもののやうである。尙ほ法經錄、彥悰錄等には、本經を以て聖賢撰集部に屬せしめてあるが、敍述の體裁から云へば確に小集經藏に屬すべきことは、開元錄の云へる如くである。

三、傳譯に就いて

本經は姚秦の羅什三藏が弘始年間に譯出(西曆四〇一―四一三)したものである。異譯として經錄に傳へられる者が二種あつて、其の一は歷代三寶記に吳の支謙に禪祕要經四卷の譯ありし事を記し、開元錄又之れを認めて居るけれども、舊

るけれども、斯くも鮮かなるは唯一ヶ處のみであつて、本經が特に大乘教義を加味し併用することに意を用いたとは思はれない。

第四に本經は坐禪の實際的作法を說くこと、他の四經に比しては詳かである。經の初めに「沙門法とは應當に靜處に尼師壇を敷き、結跏趺坐して衣服を齊整し、正身端坐して偏に右の肩を袒ぎ、左手を右手の上に著け、目を閉ぢ舌を以て腭を拄へ、定心を任せしめて分散せしめざるべし。先づ當に繫念して左脚の大指の上に著け、指の半節を諦觀して云々」と說くあたりは、特に詳細とは云い得ないが一通りの坐法を示したものと云つてよい。之れに關聯して前に述べた如く、習禪者の用意心得を色々に說きたるが如き、本經が禪の實際的規定の方面に意を用ひて居ることも一の特色と見做すべきである。

二、一經の組織

本經は四會から成つて居り、端的に云へば四つの經典が集められて、一經としての連絡を付けたものであるが、未だ十分に融合した脈絡を保つに至つて居ない。

第一會は王舍城迦蘭陀竹園に於て、聰明多智なれども憍慢放逸にして道果を得兼ねて居た摩訶迦絺羅難陀(Mahākakil-ananda?)の爲めに、佛が往昔の因緣を說き繫念法を教へて解脫せしめ、次で阿難を對告衆とし未來一切衆生の放逸を治する爲めに、十八種の不淨觀（初觀―第十八觀）を教示し、之によつて命終の後は兜率天に生じ、彌勒に會ふて阿羅漢果を得るであらうと示して終つて居る。

第二會は舍衞國祇樹給孤獨園に於て、既に阿羅漢を得たる禪難提が、罪障多き未來世の衆生の爲めに除罪法を問へるに對して、佛が禪難提及び阿難を對告衆として、念佛三昧灌頂法を示して觀像の法を委細に說き、更に貪欲に妨げられて念佛三昧を得ざる者のために、數息不淨觀を教へ、禪難提は改めて阿羅漢果を得、大衆一同歡喜奉行したと結んで居る。之れ第十九、二十の二觀である。

第三會は舍衞國のある多羅聚落に於て、迦栴延 Kā yāyana）の弟子槃直迦（Panthaka）の愚昧放逸にして一偈にも通達する能はざるに對して、佛が過去の因緣を說いて然る所以を明にして後、白骨觀煖法を教へて槃直迦をして阿羅果を得せしめ、續いて迦栴延及び阿難に向つて後世愚癡貢高の衆生の爲めに、不淨觀による煖法、頂法、火大觀を示し、進んで須陀洹道としての四大觀、斯陀含道を得る爲めの水大觀、進んで阿那含を得る風大觀、阿羅漢を得る火大觀を教へて此の會を閉ぢて居る。之れ第二十一觀から

し、此等習禪の心得を說く間に雜へて、繫念不淨の德、禪法の德を歎じ、最後に佛世を遠ざかるに從つて衆生の根機劣弱となり、無常を觀じて解脫を得る者次第に減ずる旨を、滅後百年を一段として千五百年までに至る遞減の比例を示して此の經を結んで居る。

本經が禪經としての特色は、第一に禪定心理の過程を委細に說明して居ることである。主として不淨觀に基いて、觀法の心に影ずる種々相を微密に叙述し、常に一物を觀じてこれを次第に擴充して全法界に及ぼし、更に之を一物につゞめ來たる順序を以て、所謂十遍處觀の特色たる遍一切入の觀法を用ひ、而して不淨觀は淨觀に進み、更に淨と不淨となき空三昧の境地に至るべきことを說いて居る。

第二に禪觀の種類としては、憍慢放逸を治する爲めに不淨觀、罪障を除くために觀佛三昧、貪欲亂心のために數息觀、瞋高愚癡のために白骨四大觀、更に阿羅漢果を得る爲めに慈心、念佛、因緣、數息、四大、空觀等を說き連ねてあるけれども、終始一貫常に不淨觀に出立し、これを基調とし、これの進展完成の爲めに他の諸觀を用ふるの體となつて居る。他の諸禪經にあるが如く所謂五停心として纏めらるべき材料は存して居るが、而も其の面影は他經に比して極めて薄いものである。諸病に對ずる諸觀を示し乍らも、諸病の類別に心を用ひず、之れが對治の禪觀も亦常に不淨觀を基本として居るが如きは、禪觀の種類を示す態度に於て、他の禪經と相違して居る。

第三には阿毘達磨の法相術語が極めて少なく、殊に聲聞修道の階位に於て、他の四經には四善根、四向四果の位に就いて、四念處觀、四諦十六行相、十六心無漏道の如き繁瑣な法相が必ず明示され、若しくは豫想されて居るのに、本經に於ては單に、煖法、頂法の名稱と、四果の名稱だけは擧げて居るが、其の觀法の內容に至つては、常に不淨觀を基本とせる四大、念佛、數息、慈心、乃至前揭の諸觀法を簡單に述べて居るだけで、少しも四諦觀の行相、斷惑の次第などに觸れて居ない。此れ恐らく本經述作の意圖が、阿含經典の變形に留つて、阿毘達磨論藏に關心を持たなかつた所以であらう。同時にまた大乘佛敎に近き用語も、僅かに六波羅蜜の語が一回と、三乘の聖種、如實際、眞如の語が二三あるのみ、思想としても空觀を說くあたり、稍々大乘の空觀に接近し、「佛は諸法無來無去にして一切の性相皆空寂なりと說きたまふ。諸佛如來は是れ解脫身なり、解脫身は則ち是れ眞如なり、眞如法中には見なく得なし、此の想を作す時、自然に一切諸佛を見たてまつるべし」(卷上、第十一白骨流光觀)とある如きは、正に般若空觀その儘と見得

禪秘要法經解題

一、内容一般と特色

本經の内容は目次に列擧せし如く、大體三十種の觀法と、最後に得阿羅漢道の數種の觀法、並に坐禪行者の用心を說いたものである。三十種の觀法は一々本文に順を逐ふて指摘し命名してあるが、第十四觀は三度繰返され、第二十八觀を欠き、而して各觀異名を列擧し、觀名また相互に判明を欠く嫌はあるが、全體が三段に分れて居るのは明白である。

第一段は第一觀より十八觀までにして、聰明多智なれども憍慢放逸にして道果を得ざるもの丶爲めに、不淨觀法の種々相を說き、就中第十一觀までは專ら不淨觀其の物を示し、十二より十七までは不淨觀の進展せるものとしての四大觀を述べ、第十八觀は不淨觀が更に進みての觀佛三昧を略述し、觀法の得果を示して、前來の十八觀全體を結んである。

第二段は十九、二十の二觀であつて、亂心にして破戒し、罪業重きもの丶爲めに、除罪法として觀佛三昧を說き、觀佛像の法、其の相好、四威儀、說法、受灌頂法等を觀ぜしめるのが第十九觀であり、次の二十觀に於ては、觀佛三昧法によつて未だ心穩かならざるもの丶爲めに、其の補足として數息觀を說き示して居る。然し之れまた不淨觀を基礎としての數息であつて、之れに依つて貪欲を對治し、觀佛法を成就すと說いて居る。

第三段は二十一より三十までの一群であつて、愚癡高貢にして散亂放逸のもの丶爲めに、白骨觀法の程度高きもの及び之れに四大觀を配して說いて居る。就中二十五觀までは、主に白骨觀を示して漸次四大觀に進む道程を述べ、煗法、頂法を得るとなし、第二十六觀以後は專ら白骨觀に据はれる四大觀を說いて、逐次四向四果の階程を說明して居る。

以上の三十觀を終つて後、段落を改めて第三阿那含果より第四阿羅漢果に進む爲めに、忍辱慈心觀、念佛觀（佛所得の法を念ずる法身觀）十二因緣觀、數息觀、四大觀、空三昧等を簡單に說き明して、羅漢果を得る所以を示し、次に本經の經名數種を擧げて經德を述べ、更に坐禪實修者の用意心得とも見るべき事項に就いて、習禪者は必ず持戒、獨處、悔過、常坐の四法を守るべきこと、次に名利のために禪を修し、內面放逸にして外に修禪を裝ふが如き僞妄の行者を堅く戒め、進んで修禪者は漸行漸漸にして、決して他に向つて自己の境地を語る可からずと論

あることなく、七寶自然に甘露を雨墮し、人民大小以て歡ばざるなし。吾れ本福あり以て衆患を離るとゝ。出入行歩畏難する所なく、惡獸盜賊の苦あることなく、藥樹自然に蒙る者は皆安し。風雨時節ありて五穀豐熟し、面色和悅にして衣食化して至り衆惱あることなし。猶ほ大樹の忽然として空に生じ普く天下を照すが如しとは、凡夫ありて生死の中に在つて、卒かに深慧を解し眞の本無に至つて罣礙なきが若し。氣の天下を照すとは謂く彼の菩薩の大光明を放ち以て成じて佛と爲り、一切人の婬怒癡の垢を除くなり。長育して安からしむとは謂く四輩をして道義を奉行せしむるなり。高下を平ならしむとは五道人をして皆平等慧を獲しむるなり。七寶自然なりとは謂く七覺意なり。甘露を雨らすとは謂く菩薩法を講ずるなり。人民安隱にして五穀豐滋なりとは謂く終始斷じて五神通に逮び、遂に大義阿惟顏に至つて住するなり。是に於て頌して曰く。

人を卒かに立てて國王と爲すが如く、　菩薩大士も亦是くの如し。　深慧を曉了して無極に至り、佛道を成ずるを得て十方を度す。　猶ほ虛空の大樹を生じ、根・株・枝・葉四分布し、八隅上下方を照し、地の高下を平にし五穀を滋ならしむるが如し。　人の生死凡夫の身に在つて、忽ち深法を解し慧もて流布し、　十方人をして三塗を度せしめ、　等心にして一切に甘露を雨らす。

修行道地經（終）

るは皆草木に因り、草木の根生ずるは悉く地に因從り、地下に水あり、水下に風あり、風は空に因つて立つが如し。是くの如く本を計すれば悉く所有なし。若しくは浮雲の如く忽ち氣ありて來る。況んや所至なきをや。菩薩も是くの如く、三界の空を解するに之を喩ふれば風の住止する所なきが如く、吾我あるを計するは便ち三處あり。我有るを見ず、安んぞ彼有るを計せん。明ならず、冥なく、淨不淨なくんば便ち本無に入り亦出入なし。譬へば昔者一小蟲あるが如し。心に金剛を懷いて海邊に住す。[三六]閻浮大樹高さ四千里、樹則ち震動すれば自ら安きこと能はず。樹神之に問ふ、卿は何を以ての故に震動すれば安からずやと。蟲報じて曰く、蟲我が上に住す、所以に安からずと。神又問ふて曰く、金翅大鳥仁が上に立つも何が故に動ぜず、小蟲上に處つて獨り戰慄するやと。樹之に報じて曰く、此の蟲は小なりと雖も腹に金剛を懷き、吾れ勝つこと能はず。是の故に搖動すと。其れ小蟲とは謂く發意の菩薩なり。其れ大樹とは謂く三界なり。樹動いて安からずとは、謂く發意の菩薩深慧に超至し阿惟顏に達し、三千大千世界爲に六反震動するなり。其れ金翅鳥上に住するも搖がずとは、謂く諸弟子の[三七]四道成ずと雖も能く感ずる所なきなり。是に於て頌して曰く。

譬へば小鳥の大樹に住すれば、戰慄して安からず五枝散ずるが如し。菩薩大士も亦是くの如し、超行成就して三千を動かし、其の心堅固なること金剛の如く、一切生死の患を度脫す。

弟子は猶ほ金翅鳥の如く、三界に處在するも所感なし。

菩薩の解慧は深微妙に入り次第に從はざるは、猶ほ人あつて卒かに立つて帝と爲るが如し。凡夫の士は本無にして心等しくして空の如く、處所なきことを曉了し阿惟顏に至る。昔者虛空に忽ち藥樹あり。枝葉普く八隅上下を覆ふ。其の氣下を照し、諸毒草木惡氣悉く除き、天下を長育す。諸の好人大小悉く安し、地の高きは平と爲り、卑しきは則ち高まる。天下太平にして溪谷及び山陵

【三六】閻浮(Jambu)は、樹の名。

【三七】四道とは、預流・一來・不還・羅漢のこと。

如し、則ち我が所有に非ず亦他人に非ず、猶ほ合材せる機關木人の對に因つて動搖するが如し。愚者は之を視て謂ひて是れ人なりと爲す。慧明もて之を察すれば、木を合せるにて人なし。一切の三界は皆空なること是くの如し。色・痛・想・行・識・十二因本は往返あることなし。水中の影の若く形名あることなし。是の如く行者は法城に超入す。是に於て頌して曰く。

初發意の菩薩は、四大本空なるを解し、生死泥洹を視て、一切皆同じきを視る。譬へば他物を借るが如し、當に取供する所を還すべし。吾我人を計せず、諸の曚曚を除去し、心意識を見ず、道明なれば海江を越え、三界は幻化の如く、菩薩は諷誦を受く、五道は猶ほ野馬の如く、衆惡は悉く佛種なり。諸の未解を勸化し、法身は轉動せず。

或は慧人あり自然に意を發し、如來の行、言説に因らず、而して正覺に至ること、日の大光の一時に普遍するが如し。空義を解する者は道俗觀なく、等しく虚寂の如く永く名くべからず。譬へば曠野汚泥の中に下種することあることなくして、自然に青蓮・芙蓉・莖華を生ずるあるが如し。菩薩も是くの如し。恩愛中に在つて、三界の難は忽然として慧解し、生死を見ず泥洹に住せず、一切を教化して大安に至らしむ。是に於て頌して曰く。

是に於て發意して菩薩と爲り、空義を分別し本末を解し、入道法を以て所乏なし、智慧具足し神通達し、猶ほ蓮華の汚泥に生ずるが如し、如來意を發し菩薩を成じ、一切衆生の類を開化し等しく法門に住して正覺と爲す。華は泥中に生じて清淨にして好く、四種の色は四等に喩ふ。次第を超越して阿惟顏し、勇猛力もて[三四]首楞嚴を伏す。

[三五]菩薩の修道は、譬へば飛鳥の空中を飛行して觸礙する所なく、空を以て地と爲し空を畏れざるが如し。菩薩も是くの如く、發意の頃に便ち道慧に入り、善權方便以て乏しと爲さず。心等しくして空の如く住止する所なし。生死を離れず泥洹を樂しまず、俱に增減せず。譬へば五種の綵色各々異

【三四】首楞嚴(Śūraṃgama)は、健相、健行、一切事竟等と譯し、佛の得る三昧の名なり。
【三五】重ねて菩薩の超行を說く。

人の久しく困貧せるが如し。乞食を衆聖よりし、便ち自ら還つて剋責すらく、吾れ宿積の罪冥しと。便ち恭敬意を發して、衆生を慈念し、若し帝王たることを得ば、萬姓に給施せんと。則ち樹下に臥し、其の影彼の形を蔭ふ。使者群臣に啓し、悉く往いて奉迎し、之を立てて國王と爲す。彼は佛及び衆聖に事ふ。菩薩も亦是くの如し。超越して本淨を解し、德高うして巍巍たり、諸の群生を度脱す。五事空を汚さず、心淨にして寶英の如し。五道の厄を救濟し、終始の冥を除かしむ。月の十五日の星中にて獨り明たるが如し。

二二 昔一人あり往いて佛に見えんと欲し、云何んが身形と爲すや、何像なるや、所説は何趣なるやを知る。阿難遙かに見て前んで佛に白して言さく、此の遠來者は是れ何人と爲すやと。佛言はく阿難よ、未曾有の人なり。其の人徑前して佛を覩ることを得んと欲して之を見ず。佛身は忽然として永く座に在らず。人自ら思惟す故に來つて佛を覲るに而も之を見ず。何を(佛と)謂ふやを察念し、便ち自ら解了す。世尊の法身は本、形あることなく、吾我人を用つて此の身を現ず。譬へば深山にて人呼べば響の應ずるが如く、對に因つて聲あり、法身は處なし。何に縁つて見んと欲するやと。適ょ此を思ひ已つて便ち無所從の生、阿惟顔に逮び、內外なく普く等しくして空の若きことを了じ、正覺に超入せり。是に於て頌して曰く。

昔人あり發意して、佛世尊を見んと欲し、其の尊は何等の類にして、說法の義は云何と(知る)。

阿難何人なるやを問ふ。佛言はく未曾有なり、尊身は忽ち現ぜず、之れ何れに湊く所なるやを怪み、便ち自ら慧を解了す。佛身は所遊なく、空體にして慧は道に仕し、示現して周からざるなし。道法は響の應ずるが如く、等心にして怨讎なし。義を解すること斯くの若くんば、空の如く穢はざるなし。

二三 發意の菩薩は一切を救はんと欲し、四大身は因緣合成にして幻化の若如きを觀る。譬へば假物の

【二二】超行の菩薩は佛の法が無相なることを知る。

【二三】超行の菩薩は、一切皆空を知る。

する、縛するを以て脫を求む。著せずんば縛なし、何ぞ誰か脫を求めん。譬へば五事の虛空に住するが如し。(所謂)雲・霧・塵・烟・灰なり。彼の爲に虛空は垢と作る能はず。心本は空の如く、五陰の毒は喩へば五事の如し。心本を蔽はず。(心本は)無形なることを曉了す。慧罣礙なく深法忍に入るに次第を以てせず。

譬へば人あるが如し、曾つて凡人と爲る。家既に困乏して佛所に行詣し、檀越を逐ふて食す。一好心を發して(曰く)、我が身宿罪ありて布施すること能はず。今貧厄を得て衣は形を蔽はず、食は口に充たず、又福を作さず、佛に因つて食を求む。我れ設し財あらば廣く施し佛及び諸の聖衆に供し、窮乏を給足せんと。爾の時世尊と及び聖衆とは各自ら罷め去る。乞士自ら責めて(曰く)、吾れ本薄祐にして德を興すこと能はず、斯の困匱を獲たりと。是を思惟し已つて蔭樹下に臥し、日・已に中に著し餘蔭皆移るも、臥する所の樹下は其の影轉ぜず。體の諸の垢塗は悉く爲に除去し、自然に威あり。時に國王崩じ、當に賢人を得て君主と爲すべしと。一國中を募つて周遍せざるなし。獨り乞士の超異の德あり、樹蔭之を覆ふこと大蓋の若如きを見る。往いて群臣に啓して其の威德を詠ず。人民咸喜び駕を嚴にして奉迎し、立てて國王と爲す。以て帝王たるを得て普く德化を興し佛衆聖に供す。人は生死五道の苦・五陰・六入・十二因緣に在り、佛の深法本無の慧を聞き、大慈大悲もて一切に加ふ。人を度せんと欲すと雖も人あるを見ず。度するに所度なく吾我を見ず。三界は響の如く一切は無我なり。等しきこと猶ほ虛空の如く、則ち超入の慧、不退轉の法、無所從の生、阿惟顏の事、之を有德と名け、亦所獲なし。譬へば日出でて衆冥皆索くるが如し。還つて平等を成じ適莫する所なく、有縛を見ず亦所脫なし。譬へば金山の自然にして無作なるが如し。求金を曉る者は輒ち之を得るに以て難しと爲さざるが如し。人本清淨にして垢穢なし。此の慧を覺了すれば便ち道門に入つて罣礙なし。猶ほ空の自ら淨くして淨者あることなきが如し。是に於て頌して曰く。

想に緣つて生じ、十二の因は癡を以て元と爲し、癡の元を觀察するに、亦處所なく、著求する所あれば則ち之を癡と名くるを解す。慧ある者は無を了す。譬へば幻師の還つて化人を觀て人あるを見ざるが如し。菩薩も是くの如し、三處の空を省すること、猶ほ野馬・夢幻・芭蕉・深山の響の如し。但だ名あるべくして見るべからず。

昔一人あり自ら夢中に於て國中に諸人民多くあるを見る。王は大いに嚴急にして群臣は奉事して敢へて失意せず。五穀平賤にして衣被・綵色・倡伎・娛樂あり。其の人之を覩て欣然として觀んが爲めに往いて國王に見ゆ。王便ち之を立てて以て大臣と爲し、官職・僕從・田宅・七寶を賜與す。(彼は)踊躍すること無量なり。又自ら身は復た地獄・餓鬼の中に入り、化して驢身と爲り輩中に在つて鳴き、忽然として天に上り、七寶宮殿玉女を相娛むを見る。夢より便ち覺めて獲る所を覩ず。則ち自ら五道は夢の如く一切本無にして不可得なるを解了す。此の慧を分別すれば則ち不退轉にして無處所に至り、權慧具足して明らかに大道を學し、心を觀ずること幻の如く五陰六入は群臣の若如く、色・聲・香・味・細滑の法、五道の所有は、皆彼の人の夢覺する所の如し。見て所見なくんば亦夢想なし。是を超越して無極の慧に至り、次第に緣らずと謂ふ。是に於て頌して曰く。

人身及び五陰、之を觀ずるに處所なし、四諦十二緣は　一切悉く化の如く、其の夜夢に、一國大いに快樂し、王の爲めに大臣と作り、伎樂にして豪富たり、(また)地獄・餓鬼に入り、驢と爲りて輩中に鳴き、天上の七寶の殿にて相娛しむを見て、寤めて見ず。慧ある者は三界を觀ずるに、五陰は悉く夢の如く、以て處所無きを了し、不起忍を逮得し、道法遠近なし。猶ほ空に所處なきが如く、心空にして本無を解し、忽ち日の大いに光るが如し。爾の時に當つて慧は、得なく所失なし、道は去來今なく、覺すれば乃ち本無一なり。

三二 何をか超行と謂ふ。人本一なるが故に之を解せざるを以て便ち吾我を起す。適と著すれば便ち縛

【三二】超行の菩薩は本來淨なることを解す。

心・智慧を爲し、無數劫の勤苦の行を經て、身心相應し言行相副ひ、十方の人を念じては父母の若如く親疏あることなし。譬へば樹を種うるに稍稍芽を生じ、後に莖・節・枝・葉・華・實を生ずるが如し。漸行すること是くの如く、初發意より便ち喜んで佛に向ひ、悅心を獲るを以て惡道を休息し、六度無極の法を成就し、善方便、不起法忍、一切佛慧に入り則ち法輪を轉じて滅度を示現し、大法を分布して後生は恩を蒙る。猶ほ人あるが如し。大屋を立てんと欲して、先づ其の地を平にし漸く根基を興し、稍ゝ其の牆を累ねて高大に至らしめ、材木を以て覆ひ梁柱牢堅にして、瓦を以て之を蓋ひ塗治するに泥を仰ぎ、作悉く成了して之を堊灑し、白壁赤柱・儼然巍巍たり。然る後親族・門室・善友・鄕黨を請會して周遍せざるなく、飲食作樂もて欣歡せざるなし。菩薩も是くの如く、行を積むこと無量、勤苦を以て厭懈あらず、彼の衆生の五道に展轉するを覩て、終始に周旋して磨の不定なるが如し。大慈悲無蓋の慧を發して一切を救はんと欲すること、猶ほ空の覆はざる所なきが若如し。道德以て成じ三界に現處し色身を示し、三十二相・八十種好もて衆をして見て悅ばしめ、十方人の爲に師子吼し、一切、聲を聞いて歸伏せざるなし。各ゝ本心に從つて三乘の行を成ず。是に於て頌して曰く。

初發意の菩薩は　諸の十方を慈念すること、　父母の子の身の如く、　等心にして希望なし、　漸漸に行迹を發し、　樹芽の莖・枝・葉・節・華・實に至るが如く、　種うれば功唐しからず。　菩薩も亦是くの如く、　稍稍奉じて行道し、功德以て成滿し、平等にして最吉祥なり。猶ほ大屋を起すが若し。　地を平にして　基牆を始め、　之を累ねて高大ならしめ、　覆蓋して正圓方とし、　親鄕黨を請會し、　飲食して樂倡を作す。　菩薩は衆生を救ひ、　度脫するに道光を以てす。

〔二九〕何をか超行と謂ふ。適ゝ道意を發して不退轉に至り從つて生ずる所なく、具足成就して〔三〇〕阿惟顏に至る。俱行の菩薩は何に緣つて獨り爾るや。三界の空なること、五陰は無處、四諦は無根にして

【二九】菩薩の超行を示す、聲聞の如く次第階級を經ずして、極位に至る、此の極位を本經にては阿惟顏と云ふ。

【三〇】阿惟顏（Abhiṣeka）は、菩薩十住の位の第十灌頂住のことにして、發意は第一初發心住、不退轉は第七阿惟越致住なること、「菩薩十住行道品（經）」「菩薩十住經」の二經によりて知らる、蓋し十地思想の確立する以前に成立せる菩薩の修行階程を十段とせるものなるべし。

諸の人民を察せり。初め大意を發し、六入・五陰・三毒未だ除かず十方諸佛を見ること能はず。菩薩を成就してより深教を受法し、四等心を行じ三界の空を解し、便ち三昧を得て十方の佛を見、定意より起つて衆生を救濟す。譬へば珍寶を水精上に著くるが如し。其の器を以て瑠璃を受くるに瑠璃の色は器を同像ならしむるが如し。菩薩も是くの如し。一心に念佛して他志あることなし。即ち定意を得て十方の佛を見、佛の威神本德の致す所に因つて佛世尊を見る。是に於て頌して曰く。

譬へば人あり行いて海に入るが如し、未だ曾つて懈廢せずして乃ち至り、人の船に乘つて龍王に至るに合し、從つて大寶如意珠を求め、以て一切に施し蒙らざるものなし。　菩薩は是くの如く[二七]四恩を行ず。　大慈大悲もて大道を行じ、一心精進三昧の門は、人の天に玉女ありと聞いて、夙夜に思惟して夢に見るを得るが如し。　菩薩も是くの如く等しく精進し、十方の佛を見て遍からざるなし。　又目冥くして日光を思ひ、良醫之を治して眼即ち明なるが如く、菩薩も是くの如く專ら佛に向ひ、未だ曾つて休息せず、退轉せず。　珍寶を以て水精に著くるに、展相光耀して照さざるなきが如く、菩薩も是くの如く三昧定にして、佛より教を受けて遍く教化す。

[二八]菩薩は功を積み德を累ねて一切を度せんと欲す。之を視ること父の如く、之を視ること母の如く、之を視ること子の如く、之を視ること身の如く、等しくして異ることなし。五道の人の爲に勤苦すること無量なるも以て劇と爲さず。五道生死の患、地獄の苦、餓鬼の毒、畜生の惱、天上世間終始の厄を歷ると雖も、心は迴動せず、大慈悲を行じて四恩厭くことなし。十方を救濟し衆くの想念を免る。譬へば彼の月初めて生ずるの時は、小羊角の若きも、日日に稍〻大に遂には成滿に至り、光明普く衆星を照して獨り輝くが如し。次第に學道して菩薩の法、布施・持戒・忍辱・精進・一

【二七】此の四恩は、四無量心のことなるべし。

【二八】菩薩初發心の時より五道に輪迴して衆生濟度に志すことを説く。

人の少より仕へ進むが如し、尉及び令長、二千石・州牧、四征より公卿、大王幷に轉輪、日月天・帝釋に至る。　菩薩も亦是くの如し、稍稍功德を積み、六度無極と奉じ、是を行じて佛に至るを得、十方の人を開化し、悉く大安に至らしむ。

[二五] 菩薩定を學び專精一心にして、稍ゝ衆垢を去り其の志を進化す。譬へば人あるが如し。行つて海に入らんと欲し、日月行き前むも往いて退かず、飢寒に遭ふと雖も未だ曾つて動移せず、遠近勤勞の厄を計せず。行いて休息せず遂に海邊に至り、人の船に上り海に入つて寶を採るに合す。三難を知ると雖も以て懅と爲さず。大龍王所居の宮に到り、從つて如意上妙の明珠を求め、窮乏に給せんと欲す。龍王之に與へて言く、一切に施し愛惜を得ること勿れ、衆人光を蒙つて耗滅せずと。其の人珠を得て恩を蒙り忽ち還り、以て一國に至るに安きを得ざるなし。菩薩も是くの如し。等心にして行道し衆生を濟はんと欲し、慈・悲・喜・護し、一心に、念佛し、其の所在の方に專精に之に向ひ未だ曾つて懈廢せず。七日・十日・三月・一歲、俗想を爲さず、一心に佛に向ひ幷に衆生を化す。[二六] 摩訶衍無極の教に乘じて十方の佛を見、教を受けて定を得。三昧不動にして一切の講を爲す。譬へば龍王より如意珠を得て廣く衆人に及ぼすが如し。

譬へば人あるが如し。天上に好玉の端正姝好なるが如きありと聞いて、意に往いて見んと欲するも神足あることなし。夙夜に思想し臥起にも忘れず、積んで年歲あるも未だ曾つて他念せず。便ち夢中に於て往いて之を見ることを得たり。菩薩も是くの如し。一心に思惟して某方の佛に向ひ積年息まず。三昧定を得て行いて懈と爲さず。累劫厭はず、自ら致して佛を得。菩薩は行道して大慈大悲もて哀を一切に加ふ。昔一人あり其の目明ならずして日光を見ず。心中に憂悒すらく、日明ありと雖も我が眼盲冥にして視ること能はず、當に之を奈何にすべきやと。求めて神師を得て、之れが甘露を飲むに、內病即ち除き其の眼精徹にして日光を視るを得、八方上下及び

【二五】菩薩は、苦修錬行して一心に佛を念じて終に十方諸佛を見ることを示す。

【二六】摩訶衍(Mahāyāna)は、大乘と譯す。

の屬を見て、永く盜賊なし。衆人忻歡し爾して乃ち進前す。皆謂へらく導師は天下無雙なり、智慧明達にして誠に世の有る所に非ずと。擧動進止輒ち其の命に從ひ敢へて違失せず。菩薩大人の修行も是くの如し。一切の導と爲り三界は空にして、一切は化の如く、五陰は猶ほ幻の如しと解し、生死を惡んで其の身を滅せず。十方を開化し爲に正路を示し、菩薩の深遠無侶にして、三界に周旋し生死を度脫するを嗟嘆す。弟子は既に小志にして常に懼を懷き、趣かに身を滅せんと欲し一切に及ぼさず、又究竟せず當に復た還退すべし。發意の始より、明人は此に因つて菩薩の教を聞き、皆無上正眞道意を發するなり。是に於て頌して曰く。

菩薩大士の修行を爲すや、一切は空にして身は化の如く、因緣合成して是の體を得、坐心正しからずして邪を追逐するを了す。譬へば賈人の遠く遊行するが如し。遙かに樹木を見て是れ賊なりと謂ひ、心に各々懅を懷いて馳散す。導師之を解して心乃ち安し。菩薩も是くの如く本無を解し、一切の師と爲りて廣く法を說き、弟子等に大道の深きを示す、日光出でて浮雲なきが如し。

[二二] 菩薩學道して稍稍漸く前みて無極の慧に至り、六度無極に因つて空行を分別す。功を積み德を累ぬること無央數劫にして乃ち佛道を得。譬へば人あるが如し。少小より仕へ進むに、始は困貧たるも轉じて大富を得。丞尉たらんことを求めて遂に令長と成り、進むこと二千石にして稍々州牧に到り、四征公卿大臣(となり)、轉じて帝王・轉輪聖王・天帝・梵尊に至る。菩薩道の次第學者と爲るも亦譬へば是くの如し。稍稍發意して布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧、六情を縛制し三毒陰衰の蓋を除去し、空無相無願の法に向ひ、[二三]不退轉に至つて成具の事に近づき[二四]一生補處たり。猶ほ磨鏡するに平鐵を洗治し稍稍細ならしめ遂に復た明も發するが如し。稍稍六度無極を習行し、功を積み德を累ぬること不可計劫にして、自ら致して佛を得十方を開度す。是に於て頌して曰く。

【二二】　菩薩道の修行進展を示す。

【二三】　不退轉 Avinivartani-ya, or Avaivarti) とは、一定の修行を積みて、下退することなき位に至れるを云ふ、其の位次に就いては經論の所說一ならず。

【二四】　一生補處(Ekajāti-pra-tibaddha)とは、一生所繫の意にて、此の一生のみ繫縛さるゝのみにて、次生には必ず成佛して前佛の位を繼ぐべき最高位の菩薩に附する名稱なり。前佛の位處を補ふ意味より補處の譯語を當てしなり。

ち聖王を奉じて常に侍從す。　大道を學ばんと欲するも了了たらず、還つて緣覺に墮するも亦是くの如し。　然る後佛の深微の行を受けて、乃ち無上正眞道に至る。
光光たる佛の威德、其の德は衆生を濟ふ、等心にして一切に加へ、三毒の名を除き、永く生死の苦を脫し、道因・智慧成じ、淸淨なること日光の如く、三界の冥を徹照す。

二〇 菩薩品第三十

二一 其れ修行者は因つて自ら思惟す。人の生死に在るは譬へば車輪の如し、上下に反覆すれども地を離れず、終始斯くの若し。往返の患は三界を離れず。皆是れ本癡にして本無を了せず。謂く四大有れば之に倚つて歸と爲す。復た人あるが如し、師の化幻を見て是れ人なりと謂ひ、化成なるを知らず。愚人は是くの如し。吾我に貪著して身命ありと計し、其の體は地水火風なるを曉らず。譬へば人あるが如し、遠く出でて遊ばんと欲し他國に行詣す。素と道の難を聞き常に懼心を懷き盜賊を畏る。四向望候して遙かに諸塢・衆石・草木を見て、大賊數千百騎ありと謂ひ、當に之を奈何にすべきかと。各〻走り馳散して湊く所を知らず。中に導師あり呼んで衆人に語る。便ち捨てて劇難の處に至るを得ること勿れ。(其處には)水漿なく、或は窮厄に値ひ身命を濟はず。或は困乏極まり爾して乃ち來り還り、往返既に久しうして加〻復た疲勞し、悉く財物を失ふ、當に何を依怙とすべきや。裸匱肌凍し反つて當に恃を求むべし。而して豪富に從つて歸命擧假し、且つ自ら安心して共に相率ひて化し、人を遣はして探候し、設し賊なくんば徑に進前すべし。假使來るあれば堅志にして共に戰ひ當に走壞せしむべし。所以者何となれば、一人死を欲すれば十人當らず、十人死を欲すれば百人當らず、百人死を欲すれば千人當らず、千人死を欲すれば萬人當らず、萬人死を欲すれば天下縱横なりと。衆人教を受けて復た馳散せず。皆住して嚴に待ち人を遣して探竊するに、唯だ草木瓦石

【二〇】第三十菩薩品、羅漢に比して菩薩道の特色を述ぶ。
【二一】先づ菩薩を定義して菩提心を發し、一切皆空を證りて、十方の衆生を教化するにありとす。

中に大殿ありて方四十里、四寶の床座あり。人民熾盛にして五穀豐熟し快樂極りなし。伎樂の音十二部あり。夫人婇女八萬四千、諸國の治王八萬四千、象馬・車乘も其の數亦然なり。王に四德あり、何をか四德と謂ふ。1長者・梵志・凡庶・小民、皆聖帝と敬すること子の父に奉するが如し。2王の之を愛念すること猶ほ母の子を哀むが如し。3王の敎化する所は則ち受けて奉行し、遠近歸命すること人の天を仰ぐが如し。4地に依つて活を得。復た四德あり、1無寒2無熱にして初より3飢渴せず、4生れて未だ曾つて病まず。本祐の致す所なりと。其の人之を聞いて往いて帝を見んと欲す。其の聖敎を慕ひ便ち發して進行し、道に於て疲勞して一異道を見る。則ち順つて中に入り一大城を覩る。人民熾盛にして樹木流水樂しきこと言ふべからず。謂へらく是の城郭を聖帝の邦と爲すと。便ち其の土に止まる。又斯れ樂しと雖も鬼神の處たるを、其の人覺せざるなり。時に天王あり名けて休息と曰ふ。卽ち其の人を視て爲に之を解說し、此れ聖帝の處に非ず、是れ鬼神國なり。轉輪聖王は威德巍巍たり、爾して乃ち欣然として親近奉從すと。若し發意あり菩薩道を學ぶも深義を了せず空を分別せず。世間に佛なしとして、閑居に出入し樹下に處して、萬物の非常苦空にして、身は久立せざるを觀察するも本無を解せず、緣覺を得るを以て自ら以て成ぜりと爲す。般泥洹に臨んで佛は前に在つて住し、爲に大法深妙の敎を現ず、十二因緣本と根あること無く、本末の空を曉れば去來今なし。大慈大悲は三界を見ず、泥洹の想なく乃ち正眞を成じ、一切を度脫するなり。是に於て頌して曰く。

　譬へば人あるが如し。　一城を見るに及んで是れ邦なりと謂ひ、諸の小國王を轉輪と憶ふ。
　中に在つて娛樂し謂く大いに通ずと。　休息天王往いて之を見、則ち爲に此れ鬼土にして、大帝轉輪王と爲すに非ざるを解脫す。　爾して乃ち驚怖して自ら非を知り、便ち發して大帝の邦に往詣し、威神德大にして巍巍たるを見る。　（曰く）吾れ冥にして解せず久しく迷惑すと、則

く、此の舍は久故にして柱心に火然ゆ、轉じて恐らくは柱摧けて殿を壞し、之を鎭さん。當に之を奈何にすべきやと。方便を作して誘化して出さしめ火難を免れしめんと欲し、父は則ち外に於て諸の伎樂を作し、人として諸子を呼ばしめ、各〻當に汝に象馬・車乘・摩尼の珠を賜ふべしと。諸子遙かに伎樂の聲を聞き、又父命を被つて悉く馳せて舍を出で父の所に往詣す。父は則ち各〻諸子に寶車・好乘〻賜はり等しくして偏せず。諸子白して曰く、向には尊父我等を呼び出し、各〻異珍を賜はらんと。今は何故に賜る所一等なるやと。長者告げて曰く、吾が殿久故にして柱の中心腐つて內に火を生ず、吾れ柱摧けて汝等を鎭殺せんことを恐る、故に伎樂を作して汝輩を呼び出し、吾が心乃ち安し。皆是れ我が子にして等しく之を愛念す、故に悉く之に珍寶・車乘を與ふと。佛の言はく、其の故き殿舍は三界を謂ふなり、柱腐つて壞れんと欲すとは三毒の患生死に周旋するを謂ふ。柱內に火然ゆとは衆くの想念を謂い、長者とは如來を謂ふ。諸子の放逸なるは三界の欲に著するを謂ふ。伎樂を作すとは佛罪福を說くを謂ふ。諸子を呼び出して各〻賜與すとは三道の敎を現ずるなり。諸子悉く出で父は等しく寶を與ふとは爲に大乘を現はし三道あることなきなり。滅度の時に臨んで乃ち之を了するのみ。是に於て頌して曰く。

譬へば長者あるが如し、諸子甚だ衆多なり、五樂に自ら迷惑し、故殿舍に著す、柱腐つて壞れんと欲し、中心にして火を生ず、父は殿舍の崩れて其の諸子を鎭殺せんことを恐る。因つて衆くの伎樂を作し、子を出して等しく賞賜す。佛世尊も是くの如し、緣覺より意成ずれば滅度の時に臨んで、佛は則ち其の前に往き爲に一法敎を現ず。大乘は等しくして異なし。

修行し發意して大道を求めんと欲して本無を了せずんば、佛の色身・三十二相・八十種好・人中の尊に著す。譬へば人あるが如し。聞くならく四方の帝を轉輪王と號し四天下に主たり。而して七寶あり。諸子千人、力皆勇猛なり。城は廣く且つ長く、東西四百有八十里、南北二百八十里なり。

【一九】轉輪王(Cakravarti-rājā)は、三十二相を具し威容佛に類す。

現はさず。佛世尊も是くの如し。生死の難を畏るるを見て、便ち爲に無爲と現はし、三界の苦を度せしむ。般泥洹の時に臨んで、爲に大道化を示し、無從生に逮ばしめ、廣く一切を濟ふ。又譬へば大國の卒かに三厄の患に遭ふが如し。各ゝ散じて他國に詣り、國安まるも還た還らずして生死の難を畏る。是を謂ひて弟子と爲す。國に還るも以て恐れざるは、菩薩の十方を化すに、權慧方便もて化し皆其の所を得しむるなり。譬へば大船師の如く、往返して休息なし。佛世尊も是くの如く、法身來り往返し、一切に周旋し日光の普く現ずるが如し。

[一六]緣覺品第二十九

其れ緣覺に從はば自ら了せず。既に無上正眞道を發するも、善友より眞法を受けず。專ら自ら反つて行ひ、假使六度無極を奉敎するも而も皆想あり、尊號・三十二相・八十種好・威神尊重を得んと欲するも善權を了せず。佛の色身を現ずれば返つて有身と謂ひ便ち緣覺に墮す。男子ありて大海を見んと欲するが如し。遊んで陂池及び衆くの江河に到り、彼に於て寶を求めて、水精、小明月珠を獲、自ら以らく金剛尊光を逮得せりと。菩薩心より還退せる者は、如來は出入なく法空にして形なく、道に三世去來今なきことを曉らず。而して見空を謂ひて以て定と爲し、而も適空の行を了知せず。適ゝ三界を度するも進前すること能はず。上は佛に及ばず、復た弟子[一七]を踰ゆるも中道にして止まる。譬へば人あり、天帝を見んと欲して邊王を覩て則ち是れ帝なりと謂ふが如し。正覺を學ばんと欲するも意齊限ありて深慧を解せず、還つて緣覺に墮するも亦是くの如し。若し斯の心あらば、佛は便ち緣覺の法を導示す。[一八]譬へば長者の如し、年又老い極み其の子衆多なり、大殿舍あり柱久故にして腐れて中心に火興る、諸子は放逸にして五樂に淫して此の災を覺らず。父時に念じて言

【一六】第二十九緣覺品、菩薩道に向ふ者の中、根機劣れる一類を緣覺となすと說く。緣覺(Pratyekabuddha)は、十二因緣を觀じて證り、聲聞と共に二乘と稱せられて大乘菩薩と峻別せらるゝが普通などと、本經の所說は寧ろ菩薩に近づけり。

【一七】弟子とは、羅漢を目的とする聲聞衆(Śrāvaka)のこと。

【一八】此の譬喩は、法華經譬喩品の火宅三車の譬と同じ。

塗は悠々たり安んぞ能く至る所永く窮を爲すやと。時に彼の導師聰明博學にして亦道術あり。賈人の心の念ずる所、渉路を厭患するを知り、則ち中道に於て一國を化作す。城邑・人民・土地、豐樂にして五穀平賤なり。賈人大いに喜び轉た共に議して言く、一へに何ぞ快なるやと。本と彌久にして何時難を脫して人間に到るやと謂ふ。適ゝ此の念ありて便ち此の城に至る。當に復た何ぞ懼れんやと。時に衆くの賈人便ち彼の土に住し快く相娛樂し、飮食し自ら恣に意に從つて休息す。之を厭はんと欲するが如くして城郭は則ち沒し國土を見ず、賈人皆何故に此くの如きかを怪しむ。導師答へて曰く、卿等は患厭して道懸曠にして永く達することなしと謂ふ。吾は故に城・國土・人民を化して休息を得しむ。汝の之を厭ふを見るが故に則ち之を沒すと。佛の言はく、是くの如きの弟子の行は終始の苦を畏る、謂く生死の惱なり。三界の患を懼れて早く滅度せんと欲す、故に爲に之を示す。羅漢は得易し、誘進して前ましめ生死を度して[一四]三垢を盡し、無爲道を得、自ら以て達し成就具足せりと爲す。滅度の時に臨んで佛は則ち前に住して大道を現ず。是れ未だ無上正眞の道を通發すと爲さず。無所從生法忍を得て一切智に至り乃ち達せりと爲すのみ。譬へば國ありて三厄に遭ふが如し。何等を三と爲す。一に曰く盜賊、二に曰く穀貴、三に曰く疾病なり。衆人流散し走りて他國に到り久しうして後國安し、或は往還する者あり、或は三難の患を恐怖して永く反る可からざるあり。佛の言はく、國とは謂く三界なり。三厄に遭ふとは謂く三毒の垢なり。捨てて他國に詣るとは謂く羅漢なり。國安くして還るとは謂く菩薩の無所從生法忍一切深慧を得るを以て、還つて三世に入り一切を度するなり。三厄に遭うて還らずとは、羅漢は無爲を得るを以て、[一五]三難處を懼れて、還つて衆生を度脫すること能はざるなり。是に於て頌して曰く。

　譬へば衆くの賈人の　大曠野を行くが如し。　疲れ極まりて達せざるを恐る、　導師は城郭を化し、衆人住して休息し　安止するに日月あり。　其の心の厭ふを知り已るや　便ち沒して復た

【一四】三垢は、貪瞋癡三毒の異名。

【一五】三難處は、地獄・餓鬼・畜生の三惡道のこと。

譬へば昔者一鼈あるが如し。海より出でて遊び岸邊に至る。一大狐あり之を追うて其の命を危うせんと欲す。鼈は狐の來るを覺り。頭四足を藏して甲下に覆ふ。狐は住して之を待つ。設し頭足を出さば我れ當に搏へ食ふべしと。鼈急に動かず、狐は極まつて捨て去る。鼈は還つて大神龍王に詣り其の本末を說く。龍王の身と爲りて乃ち無所畏を求むるは能く五陰を制して魔の爲に嬈されず、泥洹道を得るなり。龍と爲るを得とは菩薩道に入つて四魔を畏れず衆生を救濟するなり。是に於て頌して曰く。

鼈の頭足を縮めて畏れざるが如く、羅漢も然なり。飛んで龍神と爲るを得、菩薩も亦是くの如し。

譬へば人あるが如し。遠行して財を求め、寒暑を涉つて謂く大利を得たり。或る處にて賊に遇ひ其の業を亡失す。又明人あり自ら本土に於て方便計を造り、利入無量にして四方に供給し、功を積み德を累ね、無常・苦・空・非身を計し、外の萬物成敗の事を觀じ、或は禪定を得、羅漢道を成じ、更に發意してより菩薩たらんことを求む。或は達者あり、四大空にして內外あることなきを知り、大慈悲を行じ哀を十方に加ふ。所度ありと雖も無所度と爲す。道に遠近なく解慧を上と爲す。[二二]平等覺を得て去來今なく虛空の若如し。是に於て頌して曰く。

人の遠く賈作するが如く、弟子も亦是くの如し。功を積み惡露を觀じ、萬物の非常を察す。

菩薩は明人の、利を求めて遠遊せざるが如く、生死泥洹く、平等覺を成ずるを得。

其れ修行者は生死を恐畏し三界の難を惡む。苦を畏れて身を厭ひ本無を了せず。趣かに患を越えんと欲して衆生を念ぜず。譬へば軍壞し諸の羸劣の人は唯だ自救を欲して危厄を濟はざるが如し。此の心ある者を佛は則ち爲に、三毒の惱を除き泥洹を快と爲し冥を離れ明に就くものと說く。[二三]譬へば導師の大賈人を將ゐて遠く道路を涉るが如し。大曠野に於て斷えて水草無し。賈人呼嗟して謂く

【二二】平等覺とは、如來の正等覺のこと。

【二三】此の喩は法華經化城喩品の夫れと同じ。

所にして義理を識らず、父母恩養の德を顧みず、愛重く望み深きも自ら非を察せず、今嚴敎を聞く。卽ち當に命を奉じ、孝道を遵修すること凡く他人を超え、夙夜に懈らず我が先を辱しむることなかるべしと。時に彼の諸子は各々行つて治生し、海に入つて珍を採り諸の七寶を得て父母に供給し至孝巍巍たり。唯だ二親を念じ自ら身を顧みず。大光珠の名けて照明と曰ふを獲ては卽ち往いて父に奉ず。父は明珠を見て頭白きは更に黑くなり、齒落ちたるは更に生じ、大長者と爲り遠近歸仰す。是を父慈なれば子は則ち孝たりと謂ふ。弟子行を爲さば大慈あることなし。父に三子ありとは心意識を謂ふなり。子を養長すとは婬怒癡もて三界に著するを謂ふ。之に衣食せしむとは五陰・六衰・十二因緣の縛を謂ふ。子長じ續いて供養を求むとは諸の情欲厭足するを知らざるを謂ふ。父縣官に詣つて告げんと欲すとて恐れしむるは非常を覺して六入を斷ぜんと欲するを謂ふ。子其の教を受けて孝道を奉行するは佛に歸命するを謂ふ。三子更に孝順なるは布施・奉戒・智慧の元なり。海に入つて七寶を得るは七覺意に至り羅漢道を成ずるなり。遂に至孝なりとは弟子の限は泥洹界に至るを知り更に大意を發して菩薩道を爲すなり。照明珠を得て父更に少しとは、現在定意もて十方佛を見、罣礙する所なきなり。是に於て頌して曰く。

昔者一人ありて、生みて三子あり。　養育して長大ならしむ、故に父より衣食を求む。　父は三子に告ぐ、吾れ又年老極まる、汝當に父を供養すべし、旣に大にして吾が力を索む。　告げて言く汝を官に向はしめ、榜笞するに五毒を以てせんと。　子は父の命を聞いて、則ち孝道を奉行し。　海に入つて七寶を求め、尊父に供奉す。　又照明珠を得、父は則ち更に年少し。三子は心意識なり、情欲足るを知らず、父訶して更に孝順なりとは　謂く施・戒・道慧もて、七覺意に遵ひ、羅漢泥洹を成じ、佛の大深教を受け、更に菩薩心を發し、道德甚だ巍巍として、十方の佛を覩見し、四大身を礙へず、猶ほ空の拘る所なきが如きなり。

【八】六度無極の諸等行なり。兵仗嚴正にして時を持し行夜すとは、謂く大慈大悲もて空行を分別し不著不斷たるなり。賊退還すとは謂く【九】不起法忍無罣礙の慧もて、三界の空を視、生死を畏れず、一切の【一〇】四魔は皆之が爲に伏するなり。是に於て頌して曰く。

修行して命盡し　或は三惡道に入るを恐る。　復た吾我を計せず、三寶に歸命す。　猶ほ昔、賈人あるが如し。　遠行して財利を求め、睡眠して臥寐し、惡賊の爲に害せらる。　中に強健者あり、力を盡して走り脫するを得、家に歸つて厄に遭ひたるを說く。　今は乃ち安きを得たるのみ。　已に羅漢道を得て、乃ち自ら限りを爲して、生死に入ること能はずと知り、泥洹を以て礙と爲して、更に强猛件を合して、兵を嚴にし時に行夜す。　賊見て敢へて前ます、便ち退いて本土に歸る。　無爲界に在つて、泥洹の限たるを知り、則ち菩薩の意を發して、大慈大悲を行じ、深空行を分別し、不著にして無所斷なり。　周旋して生死を度し、三界の難あることなし。

修行奉法して【一一】四等心に入るも大慈悲なきは、譬へば小龍の能く一縣に雨らすも周遍せざるが如し。人民の爲なりと雖も潤は言ふに足らず。羅漢行道の四等は是くの如し。若し海龍の普く天下に雨らして潤はさざる所なきが如きは、菩薩大人の大慈大悲の普く衆生に及ぼして濟はざる所なきなり。佛は天中の天にして心を見ること是くの如し。便ち現限を爲し泥洹を踰ゆることなし。稍稍之を進みて大道に至り本の迷惑を知る。喩へば一人ありて三子あり。父少小より養至して長大ならしむ、衣食・醫藥・未だ曾つて乏しからしめず。父は轉じて年長し氣力衰微し、諸子に謂つて言く、汝輩は孝ならず、生れて長く汝を活かし成じて人と爲らしめ、吾れ既に年老ゆるも供養して乳育の恩に報ずることを欲せず。反つて我が身に逼つて財・衣・食を求む。何に緣つて爾るや。當に縣官に告げて汝等を治殺すべしと。子は父の敎を聞いて卽ち恐怖を懷き父に歸命す。我輩兄弟は愚癡の致す

【八】六度無極は六波羅蜜(Pāramitā)の古譯なり。
【九】不起法忍とは、無生法忍のこと、一切法皆空無生の理を悟るを云ふ。
【一〇】四魔は、煩惱・五陰・死・他化自在天の四を云ふ。
【一一】四等心は、慈・悲・喜・捨の四無量心のこと。

値ふやと。則ち良醫を得て其の疾を療し、便ち本土に還り復た行くことを難んず。生死の患を畏るることも亦是くの如し。五道周旋の苦を觀、自ら本咎にて道を覺せざるを責め、終始辛苦し甚だ憂惱す。一心に精進して泥洹を求め、世間の諸の怖懼を度せんと欲す。終始の困を惡むこと猶ほ死屍の如く、專志にして無爲城に向ふ。

修行して恐畏すらく、或は當に命盡くべくんば度脱を得ず、三塗に還歸し拔出を得ること難し。當に懈怠して吾我ありと計し、世の凡人の如く三寶と乖きて窈窈冥冥なるべからず。譬へば昔者衆くの賈人あるが如し。遠行して生を治す。曠野無人の處を更歴し、道を行きて疲れ極まり便ち眠睡して臥す。亦時を持たず兵仗を嚴にせず。大賊卒かに至つて覺むる者なく、弓矢を施さずして賊の爲に害せらる。中に力者あり便ち走つて脱することを得、飢困して家に歸る。更に復た計を設けて強猛なる伴を求め、復た故道に順つて行賈して利を求む。冥に息寐する毎に時を持して行き、夜は弓箭を嚴正にす。賊は是くの如きを見て敢へて前まず、之の當り難きを格知し便ち自ら退去せり。窈窈冥冥とは謂はく癡網と爲す。[五]癡に因つて行を致し而して識を生じて著し、名色・六入・更樂・痛・愛・受・有・生・老病死・愁・憂・啼哭・痛不可意行あり。生を治すとは修行を謂ふなり。疲れ極まつて臥寐すとは非常・苦・空・非身を曉了せざるを謂ふなり。無行夜とは深經の義を曉了せざるを謂ふなり。兵仗嚴ならずとは大慈大悲の慧に遵はざるなり。趣かに自救を欲すとは衆生を念ぜざるなり。賊來つて危きを見るとは謂く坐禪思して空靜に入らず、而して五陰六衰の爲に迷はされ、四顚倒に墮して非常を常と謂ひ苦を有樂と謂ひ、非身を有身と謂ひ空を有實と謂ひ、命盡きて天に生ずるも福盡くれば世に還り三塗を離れざるなり。強者力走して脱するを得て家に歸るとは謂く羅漢を得るなり。卽ち強伴を求めて更に生を治すとは謂く泥洹に至り、羅漢の[六]限は究竟に至らざるを知り、佛を見て教を受け、更に[七]大意を發して菩薩と爲るなり、衆のために伴と爲り相隨行すとは謂く、

【五】以下十二因緣各支にして更樂は觸、痛は受の古譯なり。

【六】限を宋、元、明本にては根となす。

【七】佛道修行には羅漢の上に菩薩道あることをさす。

の榮を慕はざること、明者の毒を捨つるが如し。

修行して自ら念ずらく、我が身惑ひ來ること稱限すべからず、自ら覺知せず。合會、離別憂慼の痛みは譬へば劇醉して之を了すべからざるが如し。枉說趣語して自ら審諦と爲す。恩愛の著は譬へば膠漆の自ら濟ふ能はざるが如し。則ち精進を行じて俗を遠ざかり道に近づく。譬へば人あるが如し。遠く他國に遊び賈作して利を求む、彼に至つて未だ久しからずして大疾病を興す。死亡者衆く十にて一を遺さず、死屍狼藉し臭處言ふべからず。既に良醫なく又好藥の以て之を療すべきなし。其の人恐怖し彼の國に詣れるを悔い、設し來らずんば此の難に遭はじと。夙夜に反側し愁へ、言ふべからず、設し我が病瘳ゆれば一たび本國に還らんも、還る時あることなけんと。其の人適遇一大醫を得て飲藥鍼灸して疾、稍稍愈え氣力強健となり、卽ち本土に反り家と相見る。自ら厄困言ふべからざるに値ひたるを陳べ、今より以後終に敢へて行かず、彼の土に至らず。一衣一食何の求むる所あらんや。唯だ自ら寧きを欲するのみ、安んぞ餘人を知らんやと。後念若し彼の土の名を聞かば戰慄惶懅して舍を出づるを欲せずして其の身を守る。弟子も是くの如く、五道の苦・婬・怒・癡・病・生死の息むことなきを見て、夙夜に專精に坐禪し念道して、世尊の敎を得て泥洹を諮嗟し終始を毀呰す。是を良醫と爲す、之の好藥を飲んで疾則ち除くとは、佛法經の三毒を去るを謂ふなり。死屍狼藉すとは五陰六衰を謂ふ。其の國に至れるを悔ゆとは自ら惟念して、累劫より來た生死に周旋し、恩愛の著は猶ほ心の多端なるが如く、苦諦・習・盡・道諦を見ずと言ふなり。已に道證を得ば苦を畏れ身を厭ひ早く[四]般泥洹し還た、固より然熾に在らしむること能はず。佛世尊の本無を示すを須つて、一ら乃ち當に進前して不退轉を得、進却自由なるべし。是に於て頌して曰く。

譬へば人あるが如し、遠く行賈して、彼の國に至り疾病に遭ふ、衆人死亡し十に一を遺し、死屍狼藉たるも藏する者なし。心に自ら其の國に至れるを悔恨す、吾れ何ぞ不遇にして此の殃に

【四】般涅槃(parinirvāna)は、入滅と譯し、涅槃に入ること。

卷の第七

弟子三品修行品第二十八[一]

巍巍たる佛德尊、威神量るべからず、道法もて時に隨つて化し、諸の十方を度脫す。　生死の瑕を覩見して、現法の橋梁と爲し、終始の苦を毀呰し、泥洹を嗟嘆す。　弟子の快を分別し、厥の行を順示し、稍稍にして開導し、乃ち大安に至る。

[二]若し修行するあれば終始の患を見る。地獄の毒、畜生の惱、餓鬼の苦、人中の憂憒、天上の無常、堪ふべからず。展轉周旋すること譬へば車輪の如し。生・老・病・死・飢・渴・寒暑・恩愛の別、怨咎の集會、愁惻の痛、具さに說言すべからず。累劫より來た父母と違ひ、兄弟離闊し妻子の乖にて、涕泣する流淚は四海を超ゆ。親の乳を飲むこと五江四瀆の流を踰ゆ。或は父の子を哭し、或は子の父を哭し、或は兄の弟を哭し、或は弟の兄を哭し、或は夫の妻を哭し、或は妻の夫を哭し、顚倒上下すること[三]經紀すべからず。勤苦の根、愚癡の元を種う。修行して然るを見て皆之を患厭す。但だ斯の生死の病を免れんと欲して晝夜精進し道義を捨てず無爲を求む。自ら宿命を見るに、無量劫より生死を往反し、設し身骨を積まば須彌山を過ぎ、其の髓を地に塗らば天下に遍かるべし。三千世に死を計すれば周きが如く、其の血流墮すること古今の天下の普雨よりも多し。修行して自ら是くの如きの厄を察するに、千萬劫說くも猶を竟るべからず。故に家を棄捨し髮を除き鬚を去り專精に求道して世榮を慕はず。若し明者の如くならば屍形を貪らず。是に於て頌して曰く。

修行して終始を見る。　地獄の苦惱、畜生餓鬼の厄、天下世間の別、生死の展轉すること、譬へば車輪の如し。　父子兄弟乖き、妻息離れて感し、涕哭の淚流下すること、四海の水を超ゆ。　親の乳湩を飲むこと五江河を踰ゆ。　修行して故に家を捨て、專精に道法を爲し、時俗

【一】第二十八弟子三品修行品、生死を逃れて佛道に入るに羅漢道と菩薩道とあり、後者は佛の無上菩薩を求めて、涅槃に住せず、空を悟りて衆生を度す、三品とは明文なきも、聲聞・緣覺・菩薩の三類のことなるべし。

【二】先づ生死輪廻の苦を察し、佛道に發趣すべきことを說く。

【三】經紀を宋、元、明本にては綱紀となす。

鎚を以て燒鐵を鍛ふれば、火焰忽ち出でて便ち復た滅するが若如く、其れ修行法も亦是くの如し、滅度を得るを以て處を知らず。譬へば天雨に泡あり、其の泡適〻壞れて處を知らざるが如し、設し行者ありて滅度を得ば、永く其の湊る所を知るべからず。諸天・神仙・龍・人民は、度者の何こに至る所なりやを見ず。其れ修行者は非常空の、聰明智慧もて滅度を得。假令行者斯れを獲るを以て、甘露を計すれば是を踰ゆるものなし。爾して乃ち長安隱を覺了す。

已に滅度を得て無餘ならしむれば、其れ佛世尊は是の喩を說く、鎚もて鐵を鍛ふるに火炎出で漸を以て滅度に向ふ者の如し、永く神の所趣を知るべからず。

已に滅度の道を得、平等に解すること是くの如し、佛智慧明なる者は、其の神安んじて動ぜず、已に諸の瑕穢を濟へば、生死より自ら大いに離る、彼の無欲を獲致せば、淸淨にして淡きこと淵の如し。

其れ是の道地敎を奉行することあれば、漸に解脫を得て無爲に至る、是に於て頌して曰く、

其れ無爲を求めて滅度を欲し、永く濁亂を離れて甘露に逮ぶには、當に斯の修行經を講說し、

佛の敎に從つて冥は炬を獲べし。

其れ此の經を說くありて、假使聽く者あらば、佛は當に其に路を示すべし。常に安くして窮極なし。

學ぶこと是くの如き者は便ち究竟を得。修行道地の心は虛空の如し、五通自然にして終始を懼れず、永く燈の滅するが若し。

増益し【三一】阿須倫を損す。是に於て頌して曰く。

巍巍たり【三二】四德、六通を成じ、忍辱の慧は最上を求む。　佛教に順じて究竟を致す。　是の故に無學の地を講說す。

【三三】無學品第二十七

方便もて衆苦に勝ち、永く諸の恩愛を脫す。　已に生死の惱を離れ、塵勞を滅盡すること、日出でて雲を除くが如し。　尊は諸の愛冥を離れ、佛聖道に歸命し、無痛にして長く安隱なり。

已に諸入界を度し、人の牢獄を出づるが如く、譬へば紫磨金の火に在るも損なきが如し。定んで泥洹の寂に至らば、未だ曾つて身を愛せず。　佛は以て甘露に逮ぶ。　吾れ願はくは稽首し禮せん。

其れ修行者【三四】有餘泥洹の界に住せば、故を舉つて造らず、復た身を受けず。而して心は專一にして未だ曾つて放逸ならず。諸の色・聲・香・味・細滑に在つて、一切の著を離れ復た取捨なく、苦根を窮盡す。是に於て頌して曰く。

已に度を得て無爲なり、永く都て所欲なし。　有餘の地に立つて、故を舉り新を造らず、色・聲・香に在らず、諸の味・細滑斷す。　之を譬ふるに蓮花の、塵水に著せざるが如し。　諸根已に定と爲り、諸入の惑に隨はず、金の鐵を雜へざるが如く、永く生死と別なり、因緣著あることなく、礙して乃ち長く安隱なり。　是を閑居の行と謂ひ、勤苦の根を滅盡す。

譬へば爍鐵の如し。其をして正赤ならしめ、鎚を以て之を鍛ふるに、其の上の垢除き稍稍還た冷めて、其の火熱の湊る所を知らず。修行も是くの如し。設し【三五】無餘泥洹の界に至つて滅度せば、漸漸に苦を免る。是の故に此の經を名けて修行と曰ふ。是に於て頌して曰く。

【三一】阿須倫は、阿修羅 Asura のこと、天に似て天に非らず、容貌醜惡にして戰鬪を好む。五道に加へて六道の一に數へらる。

【三二】四德とは、常・樂・我・淨の四にして四顚倒を離れたること、但し今の場合は正等覺無畏・漏永盡無畏・說障法無畏・說出苦道無畏の四無畏を指すやも知れず。

【三三】第二十七無學品、有餘無餘の二涅槃を示す。

【三四】有餘涅槃(Sopadhiśeṣa-nirvāṇa)は、總ての煩惱を斷盡して、再び生死の果を受くることなきも、既に受けたる現在の果體の尙殘れる境界を云ふ。

【三五】無餘涅槃(Nirupadhiśeṣa-nirvāṇa)、既に受けたる生死の果體をも滅して、灰身滅智したるを云ふ。

の恐難を救護し、常自在を逮得す。　十力の佛を無終に、吾れ禮し弟子に及ぶ。
諸天龍神は大聖を奉じ、吉祥にして人民皆歸命す、悉く恭敬を以て度脫を得、衆聖の宗とする所に願はくは稽首せん。

其れ修行者已に學地に在りて終始を樂はず。已に所樂なく三界を貪らず。色無色を超え一切の結を斷ず。[二八]志念根力及び諸覺意、見滅を寂と爲し是を永定と謂ふ。覈觀是くの如く、色無色を離れて戲と自大とを遠ざかる。是に於て頌して曰く。

心已に學地に住し、諸の覺意を曉了す、生死の畏を制し、恐を滅して所樂なし、衆患盡きて餘なく、所見は如審諦なり、戲及び自大を除き、癡を消することも亦是くの如し。

修行して自ら念ずらく、當に知るべし今時已に羅漢を成じて無所著を得、諸漏永く盡きて潔梵行を修し、所作已に辦じて重擔を棄捐す。己利を逮得し生死則ち斷じ、平等慧を獲て溝塹を超出す。穢草を鋤去して穿漏あることなく、聖賢の種を成じ已つて彼此を度す。是に於て頌して曰く。

修行して學地に住し、不動にして聖道を成ず。　已に己利を逮得し、苦を度して常に安きを獲、盛熱の山源竭き、永く盡きて流水なし。　奉敬して調戲を離る、是を無所著と謂ふ。

已に五品を斷じ人中の上と爲る。是に於て頌して曰く。

已に五品を斷じ、具足して[二九]六通を成ず。　諸の塵勞を蠲除すること、水の衣垢を浣ふが如し。　而して生死の患を離れ、度に依つて安隱を得、是を謂ひて正士と爲す。　最上にして塵埃なし。

斯に阿羅漢の無所著を得と謂ふは、應に天衣を服すべし。神宮に處り、紫殿に遊居して飲食自然に、百種の音樂常に以て之を樂しめ、歡喜踊躍して便ち坐より起ち、口に宣揚して言く、今者吾が身は[三〇]十力の子と爲る、と。是を逮得する者は天上世間一切の衆祐なり。其れ奉敬する者は天種を

[二八]　四念處乃至八正道の三十七道品を云ふ。

[二九]　六通とは、前の五通に漏盡通（āsravakṣayajñāna）を加へたるもの、一切の煩惱を斷盡したる自由の境界を云ふ、外道は五通を得るのみなり。

[三〇]　十力とは、如來不共の十種の力のこと、經論によりて多少異れども、倶舍論によれば、處非處智力・業異熟智力・靜慮解脫等持等至智力・根上下智力・種々勝解智力・種々界智力・遍趣行智力・宿住隨念智力・宿住死生智力・漏盡智力なり。

已に不還を得て衆苦を離れ、修行して則ち無量の安きを求む、生死を慕はざること毛髪の如し、譬へば導師の堂に處らざるが如し。

喩を解するに、堂とは人身を謂ふなり。穢濁の水とは九瘡孔常に不淨を出すを謂ふ。蟲水に滿つとは身中の八十種の蟲常に軀中の肉血骨髓を食ふ者を謂ふなり。平地に牆を治すとは身を供養し給するに飲食を以てするを謂ふ。其れ四蚖とは身の四大、地・水・火・風を謂ふ。堂朽故にして危く、晝夜崩れんと欲すとは老病死を謂ふ。其れ修行は晝夜方便もて衆難を免れんと欲するなり。其れ導師とは不還道を謂ふ。修行して專精に世尊の教を聽き、三界を覩て皆熾然たるを見る。目の爽する所の形は悉く無常に歸し朽敗を離れず。譬へば導師の大堂の危きを見るが如し。是に於て頌して曰く。

蚖蛇の毒を懷き、弊惡にして觸近すべからず。　各〻處して四角に在るを、人身の四大と謂ふ。　朽敗して傾危せんと欲するを、身に增減あり、常に衆苦惱に遭ふ、老病死の窮道を謂ふ。　城中の諛諂の人とは、以て漏禪の智に喩ふ。　其の人貪欲、恩愛の罣礙に入る。　禁戒を持するは長者なり。　師と謂ふは著無うして哀れんで、常に救濟修行し、衆苦難を度せしむるなり。　譬へば大估客の、中に導師なる者あるが如し。　佛子は甘露を服し、以て無著の道を得。　師は行者の爲に、苦・空・非常の身を講ず。　三界を諦覩するに、擾動にして安からず。

當に一心に[二六]無學地に至つて無著を諦見せんことを求むべし。是に於て頌して曰く。

佛は衆生を愍んで演じ、能く一切の苦を濟ふ、吾れ佛の諸經を察して、無學地を敷說す。

[二七]無學地品第二十六

其れ王醉象を放ち、兇害の牙甚だ利なり。　諸龍毒氣を懷くも、皆化して調伏せしむ。　衆く

【二六】無學地は、阿羅漢果のこと、無著は、阿羅漢のことにして、三界に著なく、更に學ぶべきことなき位なり。
【二七】第二十六無學地品、阿羅漢果の境界を示す。

の言を聞いて、則ち反つて之に答へて曰く、臭なりと雖も方便を施し、香を燒き衆花を散ずと。

爾の時長者導師に謂つて曰く、當に復た難あるべし。諸の弊惡蟲皆其の中に在り、肉血脈を以て飲食と爲し、假使飢うれば卿の囊裏を穿つて裝物を齧壞すと。導師答へて曰く、吾れ當に之に給すべし、其の所食に隨つて物を穿たざらしむと。是に於て頌して曰く。

多く弊蟲ありて堂に處在し、肉血脈を須ひて食と爲すと。　我れ能く供給して所乏に隨ふと、
導師は此を以て長者に答ふ。

長者導師に報ず、其の堂の四角に四毒蚖あり、兇害喜諍にして近附すべからず。何の方便を以てか此の蚖を安んぜんと。導師答へて曰く、吾れ能く之を曉る、施藥神呪もて所犯なからしむと。是に於て頌して曰く。

四毒蚖ありて其の堂に在り、弊惡にして害を懷き相危うせんと欲す、若干の藥及び神呪を以て、
能く毒蚖の懷く所を結除く。

是に於て長者復た導師に謂ふ。又大難あり、牆の故基是くの如く當に崩るべし。壁垣傾きて危く依怙すべからずと。導師答へて曰く、設し此の難あらば吾は處ること能はず、亦方便もて崩危せざらしむることなし。所以者何となれば、儻し其れ危敗せば失命の難あるが故にと。是に於て頌して曰く。

設し堂久故にして崩壞せんと欲し、假使傾覆せば護るべからずと、導師則ち長者に報へて曰く、
是の恐懼あらば吾は處らずと。

彼の時導師具さに堂の諸難の瑕を講ずるを聞き、又自ら目覩して、心即ち遠離し肯へて之に居らず。不還は是くの如し。世尊の教を聞いて審かに聖諦を知り、生死終始の患を樂はず。是に於て頌して曰く。

ら屎を取つて弄ぶに、年小長大すれば前に戯るゝ所を捨てて更に餘事を樂しみ、年適〻老に向へば悉く諸樂を捨て、法を以て自ら樂しむが如し。修行して已に不還の道を得るも亦復た是くの如し。諸の生死〔二五〕五道の所樂を見るに猶ほ小兒の戯の如し。轉じて更に精進し終始を脱せんと欲して生を樂求せず。是に於て頌して曰く。

譬へば小兒有り、地に在りて不淨を弄ぶ、年遂に長大に向はば、戯を捨てて轉じて餘を樂しむが如し。　修行も亦是くの如し。　三界を度ることを獲んと求め、爾の時遂に精進し具足して四道を成ず。

譬へば遠國に衆くの估人あるが如し。東方より來りて城の外園に止まる。時に彼の城中に一諂人あり、多端にして信なく詐つて飲食・華香・異服を作り、導師の前に往詣して起居を問ふ。遠く至るを多賀す、道路他なし、飢渇の日久しくして始めて乃ち面を奉ず。今小食の與めに哀を垂れて受けられよと。導師卽ち納む。又更に啓するあり。寧ろ城に入るべし、吾に大舍あり中に好殿ありて細滑に具足す。舍に井泉ありて溷廁別異なり。諸樹行列し器物備有す。願はくは威光を屈し德を枉げて城に入りたまへと。此の欺を說き竟つて卽ち之を捨てて去る。是に於て頌して曰く。

人あり諂欺を懷き、遠くの衆估客を見て、奉迎し導師に飲食を供して後說いて曰く、吾が舍に一殿あり、高大にして樂しく巍巍たり、と。　其の人誠信なく、詐語して便ち捨て去る。

爾の時城中に大長者あり、悉く彼の人の導師を詐欺せるを聞き、卽ち自ら出で迎へて導師に謂つて曰く、彼の人を信じて其の堂に居止すること莫れ、穢濁・滂水其の堂の後に在り。屎尿・惡露普く流れて前に趣く、是を以ての故に止頓すべからずと。導師之を聞いて長者に答へて曰く、堂は臭ありと雖も方便を設くべし。燒香散華して以て其の穢を除くと。是に於て頌して曰く。

長者親念を懷き、故に導師に往詣して、之に語る、斯の堂邊には、臭穢不淨ありと。　導師此

【二五】五道とは、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の事なり。

定と爲し知見是くの如し。便ち五結を斷じ、陰蓋無うして[二三]不還道を得。世に退還せず以て愛欲を脫し、諸礙婬鬼の患あることなし。是に於て頌して曰く。

　愛欲疾病の困を脫し、常に惡露觀もて諸患を除くを以て、永く恐畏を離れ苦を遠ざかつて安し、不還道等第三を成ず。

即ち淸涼を獲て衆熱あることなし。若し色欲を視るも常に不淨を見ば則ち瑕穢を知る。譬へば遠方より估客ありて來るが如し。若し疲極まるに當つて二十九日冥くして月光なき夜半に來到す。城門復た閉ぢ、繞つて南牆に至れば、下に汪水あり天雨の潦なり　裝を解いて邊に住まれば、死屍・人形・鷄・狗・象・畜・蛇・蟲の屬悉く水中に在りて或は沈み或は浮く。百千萬の蟲、身中に跳踉し、髮毛浮き出づ。城内の掃除及び漏穢の水悉く此の汪に歸す。是に於て頌して曰く。

　譬へば城の傍に大水あるが如し、目察すべからず、況んや飮者あらんや、遠方の人來りて門の閉づるに値ひ、衆と共に此の池の邊に止住す。

時に衆人の中或は遠客あり、初めにして未だ曾て此の國土に至らず、是非を識らず、疲極まりて旣に渴し衣を脫して入つて洗ひ、意を恣にして水を飮み飽滿して即ち出づ。是に於て頌して曰く。

　其の人初めて此の國に來詣し、水に入つて浴し諸熱を除き、水神を祭祠し飮んで渴を解く、甚だ大に疲極して臥寢す。

明日早く起き天、曉に向はんと欲す。疲解し覺め已つて水中を見れば惡露不淨なり。或は捨てて走り目を閉ぢて視ざるあり。或は自ら鼻を覆ひ又强吐せんと欲す。爾して乃ち水の垢穢不淨なるを知る。是に於て頌して曰く。

　已に第三道を得、欲樂の不安を見、禪定に入つて患なく、欲を視ること瑕水の如し。

[二四]爾の時修行して禪定を樂しみ、愛欲を省するに彼の估客の不淨水を惡むが如し。譬へば嬰兒の自

【二三】第三不還果は、欲界の煩惱を斷盡して再び欲界に生を受くることなき位なり。

【二四】阿羅漢向の修行。

を摑み口もて齧って之を食ふ。夫は是くの如きを見て、爾して乃ち之れ非人なり是れ鬼なりと知る。便ち其の家に還つて床上に臥す。婦便ち尋いで還り來り夫の床に趣き復た臥すること故の如し。其の夫、婦の瓔珞を莊嚴し面色端正にして爾して乃ち親近するを見る。假使之 塚間に在つて死人の肉を噉ふを念ずれば心卽ち穢厭し、又恐怖を懷いて往還道を得。若し外形の端正姝好なるを見ば婬意爲に動くも、設し惡露瑕穢不淨を說かば婬意爲に滅す。是に於て頌して曰く。

　變化せる人の身は鎧を脫するが如く、婬鬼の形を作して塚間に至り、便ち死屍を噉ふこと飯を食するが如くす。　夫爾して乃ち是れ羅刹なるを知る。

〔一〕往還道を得し者心に自ら念じて言く、吾れ欲界に於て〔二〕三結已に薄く其の餘も尠きのみ。聖諦を逮望して愛欲の瑕を見る。多苦少安宜しく習欲すべからず。凡衆庶の如く志情欲に在り、若し蒼蠅の死屍に著ける如くならば、吾れ何の方便をもてか婬怒癡を除き滅して餘なからしめ、盡漏禪を得、然る後安隱なること淨居天の如くならんと。是に於て頌して曰く。

　已に往還を得、修行して一反生ず。　則ち欲の不可を見るも、之を習つて未だ永斷せず。　婬欲の火熾なりと雖も、其の心を危うすること能はず。　惡露觀を作すを以て、欲を憎むこと羅刹の如し。

譬へば人あり盛暑に在つて、熱に堪ふること能はず、扇を求めて自ら扇ぎ、水を索ひて洗浴するが如し。往來も是くの如し。婬怒癡を見て以て甚だ熱しと爲し不還道を念求す。是に於て頌して曰く。

〔三〕二吉祥道を成ずるも、行は未だ永く除欲せず。　無漏禪を得るを以て、行は卽ち梵天と同じ。
　其の身は諸の熱あり、水冷を以て之を除く。　往いて不還道を求め、此を獲ば則ち淸涼なり。

爾の時修行して惡露觀を作し、永く色欲及び諸の怒癡を脫し、五陰の所從起滅を諦見し、滅盡を

【一】不還向の修行。
【二】一來果は欲界の俱生起の煩惱なる貪・瞋・癡の三結の強き部分を斷盡するを云ふ。
【三】二吉祥とは、濟跡と往來道とのこと。

星出でて當に何の瑞なりやと計すべきを占す。曷んぞ因つて不淨を吾が手指に著けん。停まり久うするを得ること勿れ。當に我が言に隨つて其の指の穢を除くべしと。金師之を聞いて燒鉗を正赤にして以て彼の指を鑷す。年少熱を得て痛み忍ぶこと能はずして、指を掣いて口に著く。金師大いに笑ひ年少に謂つて言く、卿は自ら稱譽するに聰明博學にして、古を探り今を知り開通せざることなく淸淨にして、無瑕なり、今に於て云何んが不淨の指を持して口中に含著するやと。年少報へて曰く、痛に遭はざる時は指の不淨を見るも、適〻火毒に遇ひて卽ち指の穢れを忘ると。道跡も是くの如し。本と長夜に習せる愛欲の瑕ありて、須臾の間情欲を離るるも、適〻好色を見ば婬意爲に動く。所以者何となれば諸根小制し未だ盡定を得ず。是に於て頌して曰く。

已に色欲の本習ふ所を見る、義を解して道跡に至らしむると雖も、頭に想華を戴き續いて香を聞けば、江の海に詣るが如く志欲も然なり。

道跡自ら念ずらく、我が身は宜しく婬欲を習ふこと餘の凡夫の如くなるべからずと。情欲の穢を說き無欲を樂しむ。滅盡燋然にして[一七]汚露觀を習ひて晝夜に捨てず。習すること是くの如くんば婬怒癡尠くして[一八]往來道を得。一返世に還つて苦原を剛斷す。已に往還を得、諸の愛欲に於て淸淨を起すことなく婬怒癡薄きも、心は尙ほ斷ぜず故に惱患あり。譬へば男子に婦あるが如し、端正にして面貌無瑕なり、諸の瓔珞を以て其の身を莊嚴し夫は甚だ愛敬す。是の色ありと雖も婬鬼非人にして、唯だ人の血肉以て飮食と爲す。人あり夫に語る、卿の婦は[一九]羅刹にして肉血もて食と爲す。夫は信ぜざるも、人、數數之を語る。夫の心遂に疑ひ意に之を試みんと欲し、夜佯つて臥し鼾聲を出して眠れるが如し。婦は定んで寐たりと謂ひ、竊かに起きて城を出でて塚間に至る。夫は尋いで後を逐ひ、婦を見るに、衣及び諸の寶飾を脫して却つて一面に著け、面色變惡して口より長牙を出し頭上の焰を燃やし、眼は赤きこと火の如く甚だ畏るべしと爲す。前んで死人に近づき手に其の肉

【一七】 汚露觀とは、不淨觀のこと。

【一八】 往來道とは、第二果一來果のこと、一度び欲界に生を受けて、後上進する位なり。

【一九】 羅刹(Rakṣasa)は、惡鬼の總名なり。

降伏し、塵勞衆くの瑕垢を除盡す、願はくは佛に歸命して一心に禮せん。

一三 其れ修行者、已に道跡を得て、諸の 一四 五欒は皆無常に歸することを 一五 知るも、盡く除くこと能はず。所以者何となれば、色・聲・香・味・細滑の念を見るを用てなり。是に於て頌して曰く。

已に成就を得て道跡と爲る、智慧を思ひ五欒の無なるを解す、愛欲界を觀ること怯馬の如く、
心は色に著せざるも續いて未だ斷ぜず。

譬へば梵志の子の如し、淨潔なるを自ら喜ぶ、今後に誤つて卒かに其の指を汚し、行つて金師に詣る、指汚れて不淨なり、火を以て之を燒けと。金師諫めて曰く、是の心を發すること勿れ、餘の方便の此の不淨を除くあり、灰土もて之を拭ひ水を以て之を洗へ、設し吾れ火もて燒かば卿は忍ぶこと能はず、火の毒痛自ら其の身に觸れ更に前よりも甚しと。梵志の子聞いて卽ち瞋恚を懷き、便ち金師を罵り、己心を以て他人を量度すること莫れ、自ら忍ぶ能はざるを人堪へずと謂ふ、吾に所欲なし、手に垢あるを用て敢へて路を行かず、人我に觸るるを畏る。吾れ儻し人に近づかば、身には三經の本を學び及び六藝を知るあり、談語を學び所應を了知し、能く萬物を相し其の義の次第章句を分別し、一六 三光天文地理を識り、六十四相を學び、人の祿命・貧富・貴賤・安處・田宅を知り、百鳥の語を曉り災變を預知し、彼の他國多く怨賊ありて此の土を厄うせんと欲するを觀、時に當つて日災風雨度を失し變星の出づるあり、美人の青絳、男女を別ち、牛馬雞羊の相、五穀の旱澇貴賤を預知し、其の星宿の進止擧動を識り、其の水旱衰耗の多少を別ち、大水若し破壞する所あるを占い、日月蝕出入の變を見、若し懷軀あらば其の男女を別ち、軍法戰鬪の事を曉知し、深く古今を知り、五星熒惑の所處、十二の時、晝夜百刻を觀了し、能く醫道風寒熱病・癒疲の少小何を以て之を療すべきかを曉り、日月道の從つて由行する所、其の色の所變は将何の應と爲すや、山崩れ地動き星隕つるの怪、諸宿の所屬にして天神を奉ずることを知る。古人の學、術は皆能く之を別つて開通せさるなし。指

【一三】 道跡卽ち預流果に未斷の煩惱存することを述べて、上道の必要を說く。卽ち一來向の修行に當る。
【一四】 五欒とは、五欲の欒みのこと、色・聲・香・味・觸の五境に對して欲求を起すなり。
【一五】 大正本は見とあるも三本により知と改む。
【一六】 三光とは、日月星の三天のこと。

走り出づ。賊其の後に隨ひ追うて之を奪はんと欲す。適ゝ賊の追ふを見て則ち馳走す、賊逐うて置かず遙かに喚呼して言く、是くの如くせば卿に及びて傷害し汝を殺さん、設使篋を捨てなば便ち活くる望あり、假令捨てずんば命は不測に在りと。導師は賊の之に逼つて近づかんと欲するを見て、財寶を失ふことを念じ又命を濟はず、則ち更に之を思ふ、我れ當に篋を解いて中の要なる者を取り以て懷中に著け、餘を置いて退去せば、爾らば乃ち安隱ならんと。則ち篋を開いて視るに唯だ毒蛇を見る、乃ち寶に非ずして是れ蛇蚖のみなることを知る。修行も是くの如し、已に道諦に逮べば一切の形は皆猶ほ毒蛇の如きを見る。是を以ての故に觀に至るを得。觀を求めんと欲せば當に是の察を作すべし。是に於て頌して曰く。

譬へば熾火の然ゆるが如し、人遽かに要器を出すに、反つて蚖篋を挾み、是れ珍寶物なりと謂へり。篋を發いて見るに弊惡なる、毒蚖中に盛滿す。其の時便卽ち棄て、爾して乃ち寶に非ざるを知る。修行して計するも是くの如し。諦觀して本無を計し、以て四諦を解す。身を觀ること四蚖の如く、是の行諦觀を作して、常に道德を思念し、以て無爲を逮得し、苦を除いて乃ち安きを獲、自ら度して脫門に入り、他の諸の瑕穢を免る。是の故に分別して無常法を觀察することを說く。

學地品第二十五[三]

善力に勇猛し、面光は金華の如く、神足は疾風を超え、自ら所至の方に遊ぶ、身德は無極を成じ、調順にして能く忍辱す。佛は戒定の安きを樂み、衆は歸願稽首す。行步庠序にして罣塵なく、其の德無底にして所願安らかなり、佛は等倫なく常に無著なり、願はくは尊、能く踰ゆる莫きに歸命せん。佛は巧便の法を執つて弓と爲し、此を以て邪怨敵を

【三】第二十五學地品は、預流果より阿羅漢に至る、所謂四向四果の修行を示す。

に歸し亦滅盡せず。是を以ての故に不生なる者生じ、不盡なる者盡く、諸の萬物を見て當に是の起滅存亡を察することを作すべし。斯を以て觀者は知らざる所なく、悉く能く覩見して了せざる所なし。是に於て頌して曰く。

人物生ありと雖も、積聚せず滅せず、亦衆形を捨てず、沒すと雖も而も滅せず、終ると雖も相連續す、皆四因縁に從ふ、萬物を觀るに是くの如く、超越して終始を度す。

假使修行して專ら自ら思念すらく、東西南北所有の萬物は皆無常に歸し擾動して安からず。適々起れば便ち滅し空に趣かざるは莫し。始め生じて已來無常の事、老病死の患常に身を逐隨すと。是の觀を作さば[九]三處に著せず四生を樂はず[一〇]五識に住することなく、其の心は[一一]九神所居に入らず。設使更に生ぜば則ち三結を除く。一に曰く貪婬、二に曰く犯戒、三に曰く狐疑なり。則ち道跡を成じて無爲に趣く、譬へば流江の會して海に歸するが如し。是に於て頌して曰く。

萬物の動起を觀じ、之を念ずるに悉く當に過ぐべし、愛欲の縛する所、一切は皆無常なり。度世を得んと欲せば、悉く諸の欲著を捨てよ。是を名けて道跡と曰ふ。流下して無爲に極まる。

其れ修行者の所觀是くの如し。自ら其の身を察するに則ち是れ毒蛇なり。假りに譬言を引けば、城の火を失するが若し。中に富者ありて衆の導師たり、舍の燒壞するを見て甚大に愁憒し、心に自ら念じて言く、何の方計を作して中の要物を出さんと。則ち退いて之を思ふ、吾に一篋ありて中に衆寶あり、某屋に在りて藏す。好明月の珠、上妙の珍物は皆盛滿し、價數無極にして其の餘も計するなしと。心に恐懼を懷き適いて前行せんと欲し、火に燒かれんことを畏るるも寶物を貪つて身命を顧みず。突前して火に入り寶藏の篋に至る。邊に蚖蛇あり。爾の時導師既に盛なる火烟の其の目を熏ずるを畏れ、心中憒憒として自ら覺知せず、諦かに省察せず。誤つて蚖蛇を取り之を挾んで

【九】三處は三界、四生は、胎・卵・濕・化の四種の生れ方。
【一〇】七識住のことなるべし、三界五趣の中に於て、識の住せんとする所を七分せるもの。
【一一】九有情居のことなるべし、三界五趣の中にて有情の住せんとする所を九分せるものなり。

其れ無色法は有色に依つて分別す、有色は則ち亦無色の著に倚ることなし。先に鼓あつて然る後に聲を出すが如し。聲と鼓と各異にして同じからず。鼓は聲に在らず、聲は鼓に在らず。名色も是くの如く各異にして合せず。轉た相依倚して乃ち所成あり。其れ色陰なくんば自在を得ず己力にて興らず。譬へば二人あり、一人は生盲一人は生跛にして他國に詣らんと欲するが如し。盲者は目冥くして永へに所見なく所趣を知らず。跛は兩足なくして遊行すること能はず。盲者跛に謂ふ、吾が目は見ることなきも足ありて能く行く、而も目甚だ冥にして東西を識らず、卿は又跛にして屈して行來すること能はず、既に眼の明なるあり、其の進退行歩所趣を見る。今我れら二人轉た共に相依つて他國に詣らんと欲すと。跛は盲の肩に騎りて則ち發去す。跛の威力に非ず盲の德に非ず。色法も是くの如く獨り能く立つに非ず。無色も亦然なり展轉相依る。是に於て頌して曰く。

　諸法を思惟するに獨り成ずるに非ず、其れ有色法・無色も然なり、世間に在つて轉た相依る、
　譬へば盲跛の相倚つて行くが如し。

其れ名色なる者の轉た相依倚すること、譬へば鼓と音の如く、弓絃と箭の如し。而して相恃怙して合せず別ならず。萬物は是くの如し。因緣より成じて力勢あることなく自在を得ず。悉く緣より起見して事、乃ち興る。修行も斯くの若くにして法本を察して起滅あるを知る。本無所有にして忽ち自然に現じ則ち復た滅沒す。無生にして則ち生じ無起にして則ち起り、皆無常に歸す。是に於て頌して曰く。

　五陰は常に空に屬し、依倚し行じて羸弱なり、因緣にして合成し、展轉相恃怙す。起滅常あることなく、興衰浮雲の如し、身・心・想・念・法は是くの如く悉く敗壞す。

[八]其れ修行者は常に四事を以て其の無常を觀ず。一に曰く所生の一切萬物は皆無常に歸す。二に曰く其の所興の者は積聚あることなし。三に曰く萬物は滅盡し亦耗滅せず。四に曰く人物は悉く敗壞

【八】以下無常を示す。

常に此の身を飲食せしめ、五欲を自ら恣ならしめ、安きを求むること親友の如くするも、諦省すれば是れ怨仇なり。救なく所護なく、常に無を懐いて反復し、人を牽いて患苦に至らしめ、生・老・病・死に入る。

人死して已後は、皆當に爛壞して、大獸に食はれ、或は燒かれて枯骨地に散ずべし。無數の法に因つて當に斯の身を觀ずべし。譬へば癰瘡の如し、若しくは箭鏃の體に在つて拔けざるが如し。猶ほ死罪の都市の處なるが若し。[七]體を察するに衆惱生じて終沒に在り。貪著する所あるを名け曰ひて色と爲し、身を觀じて軟と爲し遭ふ所の安危を名けて痛痒と曰ふ。了知する所あるを名け曰ひて想と爲し、心念を行と爲し、諸趣を分別するを名け曰ひて識と爲す。是に於て頌して曰く。

之を計するに眼色は所觀を生じ、是の身獲致するは本緣に因る、柔軟の等以て行を成じ、無色の心を以て衆德を察す。

譬へば江河の邊に潢地あるが如し。衆象中に入つて澡浴し水を飲み、池中の青蓮芙蓉の莖華を食噉し、則ち復た退還す。其の時跡現じて泥沙に在りて大小廣長なり。射獵の人、牧牛羊の者、薪を擔ひ草を負ひて道路を行く者、其の足跡を見て言く、大群象此の地を經過せり。象を見ずと雖も但だ其の跡を覩て則ち群象の是の間を經歷せるを知る。無想の陰・痛痒・行・識の所更を軟と爲す。想・行・識も然なり。是に於て頌して曰く、

江河邊の地の、沙中に行足あるが如く、象の遊跡を見るを以て、群象の過るあるが如し。是くの如く細滑を計して、法を識るの念に至り、多所にして、起滅の因緣を照現す。

是くの如く無色衆想の念は皆色に依倚し然る後に色法あり。譬へば兩束葦の相倚立するが如し。是に於て頌して曰く。

無色は多く倚る所あり、有色は無色に依る、枝の樹に著き連なるが如く、名色も亦是くの如し。

【七】以下五陰幷に名色に就いて身の空無我を觀ず。名(Nāma)は精神的要素、色(Rūpa)は肉體的要素。

の如く以て愚人を惑はし正諦を識らず。是の身は蒜の如く身心を燒毒す。是の身は朽屋の如く敗壞して飲食す。是の身は大舍の如く中に蟲種多し。是の身は孔の如く淨穢出入す。是の身は萎華の如く疾かに老耄に至る。[五]是の身は露の如く久しく立つを得ず。是の身は瘡の如く不淨流出す。是の身は盲の如く色本を見ず。是の身は宅の如く四百四病の居止する所なり。是の身は注漏の如く諸の瑕穢衆垢の趣く所なり。是の身は篋の如く毒蛇の處る所なり。是の身は空拳の如く以て小兒を欺く。是の身は塚の如く人見て恐畏す。是の身は蛇の如く瞋火常に燃ゆ。是の身は顚國の如く十八結の由る所なり。是の身は故殿の如く死魅の牽く所なり。是の身は銅錢の如く外は金塗を現じ皮革に裹まる。是の身は空聚の如く[六]六情の所居なり。是の身は餓鬼の如く常に飲食を求む。是の身は野象の如く老病死を懷く。是の身は死狗の如く常に之を覆蓋す。是の身は敵の如く心常に怨を懷く。是の身は芭蕉の樹の如くにして堅固ならず。是の身は破船の如く六十二見、之が爲に惑はさる。是の身は婬蕩の舍の如く善惡を擇ばず。是の身は朽閣の如く善想を傾壞す。是の身は喉痺の如く穢濁內に在り。是の身は無益にして中外に患あり。是の身は塚の如くにして主あることなく婬怒癡の爲に害せらる。是の身は無救にして常に危敗に遭ふ。是の身は無護にして衆病の趣く所なり、是の身は歸ることなく、死命の逼る所なり。是の身は琴の如く、絃に因つて聲あり。是の身は鼓の如く皮木裹覆するも之を計するに本空なり。是の身は坏の如く堅固あることなし。是の身は灰城の如く風雨に壞され老病死に歸す。是の五十五事を以て身の瑕穢を觀ず。

是の身は欺詐にして、無を懷いて反覆し、親厚を信ぜず哀れむべきを反つて捨てて親疎あることなし。譬へば夢・幻・影・響・野馬の忽然として化現するが如く、若しくは怨家の如く、常に之を恭敬し奉事供給して可意を求め、沐浴・櫛梳・飲食・衣被・安床・臥具、隨所に便宜なるも、人を牽いて老病死の患に向窮せしむ。是に於て頌して曰く。

【五】宋、元、明本には是身の下に、如車輿無常俱是身を加ふ。

【六】眼・耳・鼻・舌・身・意の六識のこと。

巻の第六

觀品第二十四[一]

眉間の白毫相、其の明は日光を踰ゆ、猶ほ鵠の空中を飛ぶが如く、遠近見ざるなし。其の身は師子の如く、天帝の像を超越す、肩胸は脩姝なり。願はくは佛尊に稽首せん。臂肘平正にして滿足し、世尊の臍は水洄の如く、髀・膝・蹲・腸は金柱の若し。常に佛に歸命して稽首すべし。 其の目は長好にして蓮華の如く、體に著ける毛髮は猶ほ孔雀の如く、心常に住止して寂然に在り、我れ願はくは超衆仙に歸命せん。

其れ修行者は何を謂ひてか觀と爲す。若し閑居に至つて獨り樹下に處り、五陰の本を察し如來諦を見る。苦・空・無常・非身の[二]定なること、色・痛・想・行・識の身は則ち本無にして、五十五事は貪るべき者なく亦處所なき(ことを見る。)是に於て頌して曰く。

忍辱を行ずるを以て法觀を得、五陰の本の從つて興る所を察し、過去未來現在を觀見し、喩說五十五を分別す。

[三]何をか五十五事と謂ふ。是の身は聚沫の如く手捉すべからず。是の身は海の如く五欲を厭はず。是の身は江の淵海に歸するが如く老病死に趣く。是の身は糞の如く明智の捐つる所なり。是の身は沙城の如く疾かに壞滅に就く。是の身は邊土の如く多く怨賊を見る。是の身は鬼國の如く將護あることなし。是の身は骨柴の如く肉塗り血澆る。是の身は髓の如く筋纏うて立つ。是の身は窮士の如く婬怒癡の處なり。是の身は曠野の如く愚者惑を爲す。是の身は險道の如く常に淨法を失す。是の身は塼家の如く百八愛の立する所なり。是の身は裂器の如く常に穿漏す。是の身は畫瓶の如く中に不淨を滿す。是の身は涸の如く[四]九孔常に流る。是の身は水漬の如く悉く瑕穢を爲す。是の身は幻

【一】第二十四觀品は、五十五事、名・節について、人身の空無常にして厭ふべきを觀ぜしむ。

【二】宋・元・明の三本は定を空となす。

【三】身の空不淨を五十五通りに觀ず。

【四】九孔とは、兩眼・兩耳・兩鼻・口・大小便の孔。

道跡を成じて會ゝ聖賢に至る。[六四]七反天に生じ七反人間にして永く苦本を盡す。其れ修行者是の比を以て衆惱の根を拔き生死の流を斷じ心則ち欣悅す。已に[六五]三塗を度り[六六]五逆を犯さず。異道を離れて其の所知に遇ひ、外道に從つて榮冀を悕望せず。[六七]衆祐の德を更へずして終始す。七反の患に未だ曾て犯戒せず。無數の明を見て晝夜歡喜す。譬へば人あり、飢饉の地を避けて豐財の國に至り、嶮を脫して安きを得、繫獄より出づるを得るが如く、病の除愈するが如く、心に喜踊を懷く。修行も是くの如く安般守意に因つて則ち寂滅を得、寂然を求めんと欲して習行すること是くの如し。是に於て頌して曰く。

睡眠して重ねて懈怠するを覺了し、身中より息出づる時を分別し、修行して息入の念も還た得、
是を身息其の行を成ずと謂ふ。

【六四】七反生（Sapta krtva bhava parama）とは、有部の說によれば、十六心の中、前十五心は世第一法の後短時間に證悟して完全に預流果を得るも、第十六心以後、全く三界を出離して羅漢果を得るまでには、最鈍根の者は七度欲界に生を受くるを云ふ。

【六五】三塗とは、地獄・餓鬼・畜生の三惡道のこと。

【六六】五逆とは、殺父・殺母・殺阿羅漢・出佛身血・破和合僧の五重罪を云ふ、無間地獄に墮する罪なり。

【六七】衆祐とは、世尊のこと。

已來此の恩愛を習ひ患に今遭ふ。永く愛根を拔かば則ち衆惱なく已に恩愛を離るれば欣樂可意、何に從つてあらん。是を[51]解習斷除法忍と謂ひ、是を第五無漏の心と爲す。欲界に於ける諸の習盡する所を除かば則ち七結を捐つ。[52]便ち欲界の諸患を拔くことを知ると爲す。是を第六無漏の心と謂ふ。修行して自ら念ずらく、[53]色界の本は何より興るやと。其の元を諦觀するに欲よりして起る。恩愛を出づるを樂み可意にして悅ぶ。是を第七無漏の心と爲す。此の行あるを以て[54]色界・無色界の十二諸結を度し心隨つて習慧す。是を第八無漏の心と爲す。是を八義佛の初子と謂ふ。爾の時心に念ずらく、[55]吾れ三界を見て以て苦習を除き欲に於て愛なしと。是を安隱と謂ひ則ち寂滅を樂しみ可意にして之に甘んず。是を滅盡法慧の忍と爲す。斯れ第九無漏の心と爲す。已に此の義を獲て本の[56]滅盡を見、欲界に於て七結の縛を除く。是を第十無漏の心と爲す。則ち自ら念じて言く、[57]若し色界及び無色界に著せずんば此を謂ひて寂と爲すと、是を第十一無漏の心と爲す。則ち十二諸結の疑を除く。[58]已に此の患を度して卽ち滅盡の慧を得。是を第十二無漏の心と爲す。爾の時自ら念ずらく。[59]未曾有を得、佛世尊の如く法を解すること乃ち爾なりと。斯の道義に因つて欲界の苦を知り則ち之を棄捐す。習より生ずるを知り則ち習を離れて盡滅に至るを得。此に因つて法慧道忍に入るを得、是を第十三無漏の心と爲す。爾の時道を以て欲界を視て則ち八結を棄つ。[60]是を去り然る後會ず當に此の興隆法慧を獲べし。是を第十四無漏の心と爲す。時に[61]應じて心に念ずらく、未曾有を得と。是の道行を以て色界無色界の苦を解し、諸習を除き盡滅を證す。是を第十五無漏の心と爲す。[62]道は其の志に從つて、十二結を除き、色・無色界に於て是の結を除き已つて則ち道慧を興す。是を第十六無漏の心と爲す。

時に應じて盡く[63]八十八の諸結を除き當に十想結を去るべし。所以者何となれば、江河より一渧の水を取るが如し。道義を究竟するは江河の水の如く、其の餘は未だ除かず一渧の水の如し。卽ち

【五一】第五無漏心は集法忍にして、欲界に於ける苦の本たる集諦を確認す。

【五二】第六心は集法智にして欲界の集諦を證知す。

【五三】第七心は集類忍にして上二界の集諦を確認す。

【五四】第八心は集類智にして、上二界の集諦を證知す。

【五五】第九心は滅法忍、欲界の滅諦を確認す

【五六】第十心は滅法智。

【五七】第十一心は滅類忍。

【五八】第十二心は滅類智

【五九】第十三心は道法忍、欲界の道諦を確認す。

【六〇】第十四心は道法智。

【六一】第十五心は道類忍。

【六二】第十六心は道類智。

【六三】先きの十結を三界の四諦に配して八十八となる。

れば是を精進定意(二)の法と謂ふ。志、心識を專にす、是を意定(三)と謂ふ。道義に入らんと欲す、是を察識定意(四)と謂ふ。是の緣を以て四神足を致す。已に神足を獲る是を[四一]信根と謂ふ。身心堅固なるを精進根と謂ふ。思ふべき所の法、是を意根と爲す。其の心專一なる是を定根と謂ふ。能く法を分別して所趣を知る是を智慧根と謂ふ。是を以ての故に五根を具足す。其の信溫和なる是を[四二]信力と謂ひ、精進力・意力・寂意力・智慧力も亦復た是くの如し。五力を成就し能く諸法に及ばば則ち[四三]心覺意なり。諸法を分別す、是を精求諸法覺意と謂ふ。身心堅固なる是を精進覺意と謂ふ。心に喜踊を懷きて所欲の如きを得、是を忻悅覺意と謂ふ。身意相依り信柔にして亂れざる、是を信覺意と謂ふ。其の心一にして寂なる、是を定覺意と謂ふ。其の心、婬・怒・癡の垢を滅するを見、所志、願の如くなる、是れ護覺意なり。是を以ての故に七覺意成ず。設使別に諸法の義を觀ぜば定を[四四]正見と謂ふ。諸の思惟する所、邪の願ひなく是を正念と爲す。身意堅固なる是を正方便と爲す。心經義に向ふ是を正意と爲す。其の心專一なる是を正定と爲す。身意造業、是の三悉く淨なり、爾らば乃ち八正道行を成ずるを得、此の八正道中、正見・正念・正方便是の三事を計すれば觀に屬す。其れ正意・正定、是の二事は則ち寂然に屬す。[四五]是の觀と寂との二は兩馬の一車乘を駕して行くが如し。若し無漏心專ら一法ならずんば遍く三十七品の法に入る。是を以て此の三十七法を具足し、便ち[四六]苦を解知す。是の如きの比卽ち第二無漏の心を得。

[四七]爾の時思惟すらく、如今、欲界の五陰は苦あり、[四八]色界・無色界も同然にして異ることなしと。是を知古と謂ひ隨忍の慧則ち成就し、第三無漏の心を建つ。已に是の行を得、用つて苦を見るが故に[四九]十八結を除き已り、色界を過ぎ無色界を超え、宜しきに順じて慧者は卽ち第四無漏の心を得。已に四無漏心を獲て便ち[五〇]三界勤苦の瑕を度り卽ち自ら之を了す。吾れ已に患を度し衆惱あることなし。度苦を得んが爲に則ち自ら思惟すらく、苦本は何ん。恩愛の本に由つて著網を生じ久しきより

【四一】五根を云ふ、信・精進・念・定・慧なり。
【四二】五力を云ふ、名目は五根に同じ。
【四三】七覺支を云ふ、念・擇法・精進・喜・除・定・捨なり。
【四四】八正道を云ふ、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。
【四五】止と觀とは、車の兩輪の如きを云ふ。
【四六】正しく苦諦の理を證知す、苦法智のことなり。
【四七】第三無漏心以下を列す。
【四八】色界、無色界の苦諦を證る智の前行作用卽ち忍の働きにて、苦類忍と云ふ。
【四九】先きに擧げたる十結が、欲界と色、無色界との苦・集・滅・道の四諦に對して配合さるゝに由りて、十六心各々に於て斷ずべき結の數を異にす、今は十八結を除くなり。以下之れに準ず。
【五〇】第四無漏心は苦類智にして、此に至つて三界の苦諦を證知す。

反せん。是を上中の下柔順法忍と謂ふ。設使其の心專思を愛し、志移亂せずんば、是を上中柔順の法と謂ふ。其の忍は何に趣順する所なりや。四諦に趣順し審諦の如くに住し心は以て是くの如く遂に清淨に至る。是を謂ひて信と爲す。爾りと雖も此を獲るも未だ信根を成ぜず。是の信を得るを以て身口心强し、是を精進と謂ふ。尙ほ未だ精進の根を成ずる能はず、志、諸法に向ふ、是を有心と謂ふも、未だ念根を成ぜず。心一志なるを以て是を定意と謂ふも、未だ定根を成ぜず。其の諸法を觀じ厭の義を分別す、是を智慧と謂ふも、未だ慧根を成ぜず。是の五法を計するに諸根に向ふも未だ道根を成ぜず。念あり想あり尙ほ所在あり、而して逆あるを見、未だ定意を成ぜず。是を上中の上、[三一]世俗尊法と謂ふ。

[三二]其れ修行者當に之を知了すべし。[三三]色の起滅の處に痛・痒・法・意あり。起滅の本を觀じて其の因緣・過去・當來を察す。無願定を行じ、隨つて脫門に入り生死の苦を察す。[三四]斯の五陰を計するに卽ち是れ憂患なることと狐疑あることなし。爾の時則ち[三五]苦法忍を解することを獲。已に苦本を見ば便ち慧眼を見て[三六]十結を除く。何をか謂ひて十と爲す、一に曰く貪身、二に曰く見神、三に曰く邪見、四に曰く猶豫、五に曰く失戒、六に曰く狐疑、七に曰く愛欲、八に曰く瞋恚、九に曰く貢高、十に曰く愚癡なり。是の十結を棄て已つて此の心を獲、則ち無漏に向ひ正見に入り、凡夫地を度つて聖道に住す。地獄・畜生・餓鬼の罪を犯さず終に橫死せず。會〻[三七]道跡を成じ無願三昧にして正受を行ず。

[三八]已に脫門に向ひ未だ惡法を起さず則ち復た生ぜず。[三九]諸惡自ら盡き未起の法念を當に興發せしむべし。所興の善法を具足成ぜしめ、心已に是くの如く其の所欲に隨ふ、是を自恣と謂ふ。志を專一ならしむ、是を[四〇]自在定意と謂ふ(一)。是より次第に信・念・精進・觀察・護命す。是を謂ひて信と爲す。其の行を思惟す、是を自恣三昧と謂ふ。道に專精して神足を獲、假使修行して身・口・心、强け

【三一】四、世第一法は有漏心の最高なる境界なり。

【三二】次に無漏の智慧を證るに十六段あり、之れを十六無漏心と云ふ。先づ第一無漏心を述ぶ。詳しくは坐禪三昧經卷下の脚註を見よ。

【三三】身・受・心・法の四念處觀。

【三四】欲界苦諦の理を觀ずること。

【三五】具さには苦法智忍(Duḥ-khe-dharma-jñāna-kṣānti)苦諦の理を證る智慧の前に作用を云ふ。忍は確認にて將に智の作用の起らんとする初めの心作用なり。

【三六】十結は、身見・邊見・邪見・見取見・戒禁取見(以上五利使)、疑・貪・瞋・慢・癡(以上五鈍使)なり。

【三七】初めて無漏聖者の流類に入るが故に、〻果卽ち預流果(道跡)といふ。

【三八】第二無漏心。

【三九】四正勤を云ふ、未生惡令不生、已生惡令滅、未生善令生、已生善令增長なり。

【四〇】以下四神足を云ふ、欲・精進・心・思惟なり。

するが如し。修行も是くの如く、已に明師を得て夙夜に覺悟して結跏趺坐し、麁衣惡食にして草蓐に坐し其の身を困苦す。作行是くの如きも、反つて生死の流波の爲に制せられ、恩情に投じて專一なること能はず、終始衆想の流池に滲す。安んぞ道明を得んや。是の故に行者當に代つて憂愁すべし。譬へば導師の多く財寶を齎して、曠野嶮厄の路を歷度するに、家に到らんと欲するに臨んで、卒に惡賊に遇ひて財物も亡失し衆人悒悒たるが如し。修行を爲すに當つて憂を懷くこと是くの如し。譬へば田家の五穀を耕種するに、子實、茂盛し當に刈るべき頃に臨んで、卒かに雹霜ありて穀實を傷殺し唯だ遺草ありて、其の人憂愁するが如し、修行も是くの如く、已に頂法を得て凡夫地に入れば當に悒悒たるべし。頂法を得已つて復た墮落し或は惡友に遇ひて愛欲を念じ、不淨を淨と爲し淨を不淨と爲し、遠く遊行するを喜び專精を得ず。或は長疾に遇ひ或は穀貴に遇ひて飢匱困厄し糊口を繼かず。或は家事・父母・兄弟・妻息・親屬を念じ、或は不處憒閙の中に坐し、已に頂法を得るも未だ道果を成ぜず、衰老の將に至らんとするや、心遂に迷惑し、忽に困病を得て命、向盡に垂んとし、曾て篤信せし所の佛・法・聖衆・苦・習・盡・道、永く復た信ぜず、定を習ふに當つて反つて之を捨て、當に觀ずべきを觀ぜず、精進して更に懈り、本所思の法、永く復た起らず。是を以ての故に其の頂法より退き墮落す。何をか頂法にして退還せずと謂ふ。曾て信ぜし所の如く日々に信增益し、本定の如く心を遂に不動ならしめ、所觀を失はず常に察して精進し前よりも轉增し、思念する所の法を專精にして捨てず。是を以ての故に頂法を退せず。

〔三〕修行すること是くの如く、其に因つて專精にして心想一なり。各各究竟の法を思惟し、初より未だ曾て動ぜず、新を念ぜざるが故なり。是くの如く卽ち出息異あり入息同じからざるを知る。出入息異にして其の心をして生ぜしめ、此の如き無所畏の想を見知す。是を謂ひて中中の上にして法忍を得と爲す。心に所想なくして是の觀を作し、前意・後意未だ曾て錯亂せず。分別察心云何んが往

【三】　三、忍。

如し。此を五通と爲す。

二六 何をか佛弟子出入息を數へて寂然を得と謂ふ。其れ修行者寂靜無人の處に坐し、心を斂めて散ぜず、口を閉ぢて專精に出入息を觀ず。息は鼻より還た轉じて咽喉に至り遂に臍中に到り、臍より鼻に還る。當に之を省察すべし。出息異あり入息同じからず。意をして息に隨ひ順じて出入せしめ、心をして不亂ならしむ。是の數息に因つて志定まり寂を獲、是の中間に於て永く他想なし。唯だ佛・法・聖衆の德、苦・習・盡・道四諦の義を念じて便ち欣悅を獲。是を溫和と謂ふ。人の火を吹き熱來つて面に向ふが如し。火は面に著かず但だ熱氣のみ。其の火の熱は吹作すべからず。當に是の知を作すべし、溫和は斯くの如しと。

二七 何をか溫暖法と謂ふ。未具足の善本凡そ九事あり。微柔和・下柔和・勝柔和あり。二八 中下あり中中あり勝中あり。上柔和あり中上あり上上柔和あり。彼の微柔和・下柔和を知る是を溫和の善本と謂ふ。其の中下・中中・中上是を頂法の善本と謂ふ。其の下上・中上・上上柔和、是を謂ひて諦柔和法忍と爲す。上中の上是を俗間の尊法と謂ふ。是れ九事善本の義なり。故に是は俗事にして諸漏未だ盡きず。修行して若し溫和の行を得ば數息の想を執り、此に因つて專念なり。息若し還らば意は其の息に隨ひ、他の念なし。若し息出づれば息の往反を知り、心は佛法に入り及び聖衆に在りて苦・習・盡・道は溫和に在るが如し。

二九 其の心轉勝する是を頂法と謂ふ。若し人あり高山の上に住して四方を觀察するが如し。或は山に上る者或は下る者あり。或は聖道に入り或は凡夫地に入る。其し修行者已に頂法を得て凡夫地に入らば甚だ之を憂ふべし。譬へば山水流行し瀑疾く曲横の波を起すに、人あり渡らんと欲して水に入り、泅いで彼岸に至らんと欲す。廻波洄還して中流に在らしめ、既に疲れること且に極まり遂に波水に沈み其の底に沒在す。其の人心に念じ定んで死すること疑なく、岸邊の住人之に代つて憂慼

【二六】佛弟子禪による四禪四善根を示す。

【二七】以下四善根の說明、一、煖。

【二八】大正本は中とあれど三本は中下に作る、今は之による。

【二九】二、頂。

【二二】行者出入息を觀ずる所以は寂を求むるを用ての故に心をして定住せしむ。其の寂然たるに從つて二事を獲。一には凡夫、二には佛弟子なり。何をか凡夫にして寂然を求むと謂ふ。心をして止住して五陰の蓋を除かしめんと欲す。何故に諸蓋の患を除かんと欲するや。第一禪定を獲んと欲するが故なり。何故に第一の禪を求めんと欲するや。五通を得んと欲するが故なり。何をか佛弟子寂然を求めんと欲すと謂ふや。求むる所以は【二三】溫和を得んと欲す。何故に溫和を求むるや。頂法を致さんと欲す。五陰空にして悉く皆我所に非ざるを見る。是を頂法と謂ふ。何故に頂法を求むるや。四諦を見て法忍に順向するを以てなり。何故に法忍を順求するや。世間最上の法を得んと欲す。何故に世最上の法を求むるや。諸法悉く皆苦たることを知らんと欲す。因つて【二四】三十七道品の法を分別するを得。何故に諸法の苦を知らんと欲するや。第八の處を得んと欲す。何を以ての故に第八の地を志すや。其の人道跡を致さんと欲するが故なり。

【二五】何をか凡夫數息因緣もて寂然に至るを得と謂ふ。心數息に在り一意不亂にして他念あることなし。是に因るが故に、其の數息に從つて寂然に至るを得。其の方便に從つて諸の五陰の蓋皆爲に消除す。爾の時其の息設使出入せば、常に心と倶に其の想念を緣ず。入息是くの如し、若し出入息に所趣を觀察せば是を謂ひて行と爲す、心中歡喜する是を忻悅と謂ひ、其の可意なる者是を謂ひて安となす。心尊第一にして自在を得、是を定意と爲す。始めて五蓋を除き心中順解し是より著を離る。何をか離著と謂ふ。衆想愛欲不善の法行を遠かるなり。是の如く念想し歡喜し安隱にして、心一定を得、五品を除斷し五品を具足す。其の數息に因り緣つて五德を致し第一禪を得。已に第一禪を得れば習行して捨てず。一禪適安・堅固・不動なれば、神通を求めんと欲し神足を志し、天眼洞視し天耳徹聽し、從來の生を知り、他の心念を知り恣意自在にして、譬へば金師の紫磨金を以て自在に作る所の瓔珞・指環・臂釧・步瑤の屬を意の如く皆成ずるが如し。已に四禪を得ば自在なること是くの

【二二】數息觀によりて初禪を得るに、凡夫禪と佛弟子禪とあり。

【二三】溫和は普通に煖又は煖と云ふ、煖(Uṣmagataḥ)、頂(Mūrdhānaḥ)、忍(Kṣāntiḥ)、世第一法(Laukikāgradharmaḥ)を四善根と稱し、四諦の眞理に對して相似の觀證を起し、無漏聖者の位に入る豫備的觀法なり。

【二四】三十七道品とは、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道を云ふ、次に出づ。

【二五】凡夫禪による四禪五通。

短と謂ふ。

何をか數息して身を動かせば則ち知ると謂ふ。悉く身中の諸の喘息する所を觀じ、入息も亦是くの如し。何をか數息して身和釋すれば卽ち知るヽ謂ふ。初め息を起す時若し身懈惰にして睡蓋あり、軀體沈重ならば則ち之を除棄して一心に數息す。數息して還た入るも亦復た是くの如し。何をか數息して喜に遭へば卽ち知ると謂ふ。若し數息の時歡喜至る所あり。息入るも是くの如し。何をか數息して安きに遇へば卽ち知るヽ謂ふ。初め數息の時則ち安隱を得。息入るも是くの如し。何をか數息して心の所趣を卽ち知ると謂ふ。數息想を起し諸の想念を觀ず。入息も是くの如し。何をか心柔順なれば數息して卽ち知ると謂ふ。始め息想分別想念を起して數息して順ず、息入るも亦爾なり。何をか心の覺了する所を數息して卽ち知ると謂ふ。初起の息想、諸觀を識知して數息す。息入も是くの如し。何をか數息して歡悅なれば卽ち知ると謂ふ。始め數息の時若し心樂まずんば勸勉して喜ばしむ。出息に順ずるを以て入息も是くの如し。何をか心伏すれば出息して卽ち知ると謂ふ。心設し定まらずんば强く伏して寂ならしめて以て數息す。入息も是くの如し。何をか心解脫すれば卽ち知るヽ謂ふ。若使出息の[三]意實に解せずんば化伏して度せしめて出息を數ふ。入息も是くの如し。何をか數息して無常を見れば卽ち知ると謂ふ。諸の喘息を見るに皆常あることなし。是を出息ヽ爲す。入息も是くの如し。何をか出息無欲なれば卽ち知ると謂ふ。息の起滅を見ること是くの如く欲を離る。是を觀離欲を出息卽ち知ると爲す。入息も是くの如し。何をか觀寂滅を數息して卽ち知るヽ謂ふ。其れ息出づる時滅盡を觀見す。是を觀寂を出息卽ち知るヽ爲す。入息も是くの如し。何をか見趣道を數息卽ち自ら知ると謂ふ。息の出滅の處を見、是を觀て以後心卽ち離塵す。離して無欲なるを以て三處を棄て志卽ち解脫し、其の意を將護す。是を數息と爲す。出息入息是の如し。是を十六特勝の說と爲す。

【三】大正本には出息意不旨解とあれど、宋、元、明本共に意不實解とあり、今は之れに由る。

るが如く、行者も前の如く初め數息より後の究竟に至るまで悉く當に觀察すべし。是に於て頌して曰く。

牧牛者の遙かに住して察し、群の澤上に在るを護視するが如く、數息を持御するも亦是くの如く、守意すること彼の若き是を觀と謂ふ。

[一八]其れ修行者已に觀を成じ、當に復た還淨なるべし。守門者の門上に坐して出入の人を觀て皆之を識知するが如く、行者も是くの如し。心を鼻頭に係けて當に數息を觀じ其の出入を知るべし。是に於て頌して曰く。

譬へば守門者の、坐して出入の人を觀るに、一處に在つて動かず、皆人數を察知するが如く、當に一心に數息して、其の出入の息を觀ずべし。修行も亦是の如く、數息して還淨を立す。

[一九]何をか數の長きと謂ふ。適ま未だ息あらずして預め之を數ふ。息未だ鼻に至らずして數へて二と言ふ、是を數の長きと爲す。是に於て頌して曰く。

尙ほ未だ所應あらざるに、出入の息を數ふ、一を數へて以て二と爲す。是くの如くして數を成ぜず。

何をか數の短かきと謂ふ。二息を一と爲す。是に於て頌して曰く。

其れ息以て鼻に至り、再び還つて臍に至る、二息を以て一と爲す。是を則ち失數と爲す。

[二〇]何をか數息の長きを知ると謂ふ。其れ修行者、初數息より息の遲疾に隨つて之を觀察し、其の趣を視忖し出入息を知り、限度之を知る。是を息長と爲す。數息の短き者も亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

數息長ければ則ち知り、息還るも亦是くの如し。省察して設し此くの若くんば、是を息の長

【一八】四、還淨。

【一九】二數の解釋。

【二〇】十六特勝の解釋、坐禪三昧經上卷に出だす所を參照せよ。

和釋なれば則ち知り、喜悅に遭へば則ち知り、安きに遇へば則ち知り、心の所趣を則ち知り、心柔順なれば則ち知り、心の所覺を則ち知り、心歡喜すれば則ち知り、心伏すれば卽ち知り、心解脫すれば卽ち知り、無常を見れば則ち知り、若し無欲なれば則ち知り、寂然を觀ずれば則ち知り、道趣を見ば卽ち知る。是を數息十六特勝と爲す。是に於て頌して曰く。

數息の長短を別知し、能く喘息動身の時を了し、其の行を和解して定體なり、歡悅は是くの如く更樂する所なり。　安きを曉るを則ち六と爲し、志行を號して七と曰ひ、而して心を和解ならしむる、心行を名けて八と曰ふ。　其の意の覺了する所、是に因つて歡喜を得、心を、制伏して定ならしむ。　自在に順行せしめ、無常にして諸欲滅す。　當に此の三事を觀ずべし、行の所趣を知る。　是れ十六特勝なり。

[一五]何をか數息と謂ふ。若し修行者、閑居無人の處に坐して志を秉つて亂れず出入息を數へ、而して十に至らしめて一より二に至る。設し心亂るれば當に復た更に數へて一二より九に至るべし。設し心亂るれば當に復た更に數ふべし。是を數息と謂ふ。行者是くの如く晝夜に數息を習ひ、一月一年、十息を得るに至つて心中亂せず。是に於て頌して曰く。

自在にして不動なること譬へば山の如く、出入息を數へて十に至らしめ、晝夜月歲懈止せず、修行して是くの如く數息を守る。

[一六]數息已に定まれば當に相隨を行ふべし。譬へば人あり前行して從あるが如く、影の行くに隨ふが如し。修行も是くの如く、息の出入に隨つて他の念なし。是に於て頌して曰く。

數息し意定まつて自由なり、息の出入を數ふるを修行と爲し、其の心相隨つて亂れず、數息して心を伏するを相隨と謂ふ。

[一七]其れ修行者已に相隨を得、爾の時當に觀ずべし、牧牛者の一面に住在して遙かに牛の食するを視

【一五】四事の稱、一、數息。

【一六】二、相隨。

【一七】三、止觀。

顏色を觀察して貪樂せず、譬へば屍死の塚間に捐てたるが如し。羸瘦して骨立ち肌肉なし。
水の沙を沒するが如く色を失ふこと然なり。

其れ修行者も亦復た是くの如し。愛欲を患厭し、汚露觀を發して寂然を致さんことを求む。是に於て頌して曰く。

其れ修行者已に欲を離るれば、五樂を厭ふこと亦是くの如く、人の婦の衆瘡を病み、無央數の
疾にて臥して床に著くを見るが如し。

[一二]何をか數息守意を修行して寂然を求むと謂ふ。今當に數息の法を解說すべし。何をか數息と謂ひ何を謂ひて安と爲し何を謂ひて般と爲すや。出息を安と爲し入息を般と爲す。息の出入に隨つて他念なし、是を數息出入と謂ふ。何をか數息守意を修行して能く寂然を致すと謂ふ。數息守意には四事行あり、二瑕穢なく、十六特勝あり。是に於て頌して曰く。

其れ修行者寂を求めんと欲せば、當に安般出入息を知るべし。　二瑕あることなく四事を曉
り、當に奇特十六變あるべし。

[一三]何をか四事と謂ふ、一に謂く數息、二に謂く相隨、三に曰く止觀、四に謂く還淨、是に於て頌して曰く。

當に數息及び相隨を以て、則ち世間諸の萬物を觀じ、還淨の行もて其の心を制す。　四事の宜
しきを以て定意なり。

何をか二瑕と謂ふ、數息或は長く或は短かし、是を二瑕と爲し、是の二事を捐つ。是に於て頌して曰く。

數息設し長短ならば、顚倒して次第なし、是の安般守意は、棄捐して二瑕なし。

[一四]何をか十六特勝と謂ふ。數息長ければ則ち知り、息短きも亦知り、息身を動かせば則ち知り、息

【一二】　以下數息觀(Ānāpāna-smṛti)を說く。安(Āna)は入息、般(Apāna)は出息の意にして、安般、阿那波那等は音譯、持息念は意譯なり。然るに、今出息を安となし、入息を般と爲すと云ふは、諸經論の說と反對なり、俱舍論第二十二卷等を參照せよ。婆沙論二十六卷には之等の反對說を紹介して論述せり。

【一三】　此の四事の中、三を止と觀とに分ち、四を還と淨とに分ちて、數息觀の六事又は六相(六妙門)とするが通說なり、近くは本冊の坐禪三昧經卷上を見よ。

【一四】　以下數息觀の十六特勝、一々の解釋は次ぎにあり。

に供せんが爲なり。假使勞せずんば何を以てか生活せん。設ひ天上に在るとも尙ほ安きを得ず、況んや人間に於てをやと。既に父命を聞き衆人の諫を得て、卽ち悲涙出で兩手もて胸を推し便ち嚴にして發行す。是に於て頌して曰く。

　親友知識悉く共に諫め、則ち父の敎を受けて莊嚴して行く、欲の爲に傷けらるること箭を被るが如し、心に婦を懷思すること甚だ悢悢たり。

心常に婦を念じて未だ曾つて懷を離れず。往至して買ひ裝へて卽ち尋いで國に還る。道を行くに歡喜し今當に之を見るべし。是の如きは久しからざるなりと。朝暮に婦を思ひ適〻家に到り已つて婦の所在を問ふ。是に於て頌して曰く。

　買作し治生して行いて往返す、心は常に重んずる所の妻を懷念し、已に家中に到つて先づ之を問ふ、吾が婦今は爲んの所に在りや。

其の婦は夫を念じて心に愁憂を懷く、宿命薄裕にして稍〻困疾を得て命呼吸に在り。而も體に卽ち若干種の瘡を生じ、膿血流出し寒熱病を得復た癲癩疾を得。水腹にして乾竭し上氣し體熱し、面・手・足・腫れ、無央數の蠅皆其の身に著く。披髮羸瘦せること譬へば餓鬼の如し。草蓐に臥在し衣被弊壞す。是に於て頌して曰く。

　其の夫一心に獨り愛する所、宿命の殃ありて薄裕に、無數の疾を得て臥して床に著き、好座を離れて地に在り。

是に於て夫は家に入りて人に吾が婦の所在を問ふに、婢既に慚愧して涙出でて悲泣し之に報じて曰く。唯だ賢郞の婦は茱閣上に在りと。尋いで自ら閣に上つて之を見るに、色變すること未曾有なり。此の顏は醜惡にして目覩すべからず。諸の愛欲する所、恩情の意永く盡きて餘なし。絲髮の樂なく悉く更に患厭して復た見んことを欲せず。是に於て頌して曰く。

つて時を經、日中を過ぎて後、腹中飢渴し之を怪しむも來らず、憂感言ひ難し。日、暮に向はんと欲し、樹に上つて四望するも來者を見ず。樹を下りて復た待つて須らく衆人を留むべしと。遂に黃昏に至る。心に自ら念じて言く、城門閉ぢんとして衆人來らず、今此の石蜜美酒畫瓶は已に我に屬す、當に以て之を賣つて自ら富を致すべし。先づ應に嘗視すべしと、便ち手を淨漱して瓶口を開發し則ち瓶中を見るに皆不淨を盛る。爾して乃ち之を知る、諸の捭掩子定んで我を侵欺せりと。修行も是くの如し。已に聖諦を覩て乃ち自ら曉了す、久遠より來た、是の五陰の爲に侵欺せらると。是に於て頌して曰く。

生死に衆身を載せ、五陰に侵欺せられ、常に苦樂を更歷して、我人壽ありと謂ふ。修行して五樂に欺かれ、然る後自ら侵を見る。人の畫瓶を得、之を發いて不淨なりと知るが如し。

譬へば導師の饒なる財寶あるが如し。子の爲に婦を迎ふ、端正姝好にして不可あることなく、（子は）甚だ重く愛敬して其の意を失はず、須臾も相離るれば自ら絡るが如く謂へり。爾の時國中の道路斷絕し、十二年を計するも來者あることなし。後多くの賈客遠方より至り、此の國に住在し休息して未だ前まず。導師は子に語り、卿、彼に往詣して市買し來り還れと。子は父の敎を聞いて愁憂して樂まず、箭もて心を射たるが如し。親友に語つて言く、卿は我が妻を親愛するを知らずや、今又我に告ぐ、遠離して之を捨し、當に行つて賈作すべしと。適ゝ是の命を聞き我が心裂くるに僅とす、今吾れ當に死せん、自ら水に投じ若しくは高山に上つて自ら深谷に投ずべしと。是に於て頌して曰く。

年少親しく婦を敬し、愛欲甚だ熾盛なり。　父の敎命を思ひて、志し大憂感を懷き、心惱んで死せんと欲し、云何が愛妻を離れんと、其の子の意甚だ痛む。　山象の絆を捕へらるるが如し。

親友言を聞いて卽ち之に報じて曰く。子を生む所以は家門を典知し、四向して財を求め以て父母

已に第一禪を得て、無垢にして廣く行に在るも、猶ほ終始脫し難し、當に精進して道を得べし。

修行して自ら念ずらく、衆くの善惡を觀じて乃ち第一禪を致す。本骨鎖よりして之を獲るのみ、其の形は無常・苦・空・非身にして四事に因つて生ずと。是に於て頌して曰く。

其れ第一禪は身に因つて致し、四大を解して一心の行を成じ、無常・苦・空・吾我を脫す。是くの如きを觀ずる者は常に精進す。

修行して思惟すらく、用察する所の心、其の心の本も亦復た非常・苦・空・非身にして四事を以て成じ、皆因緣より轉た拘牽引するのみ。而して猶ほ禍福心想の依の如く、形も亦無常・苦・空・非我に歸し四事より成ず。我れ斯の五陰の體を受くるも空無所有なるが如し。十二因連、去來今なる者も亦復た是くの如し。欲界の諸陰、色界無色の界の陰相も斯くの如く悉く羸弱と爲し、三界の空を見る。其の根本深く邪に及びて正なく、震動熾然たるも陰なきを觀れば皆寂然たり。志恬怕に在り 無爲に趣き、他念なくして泥洹に逮ぶ。爾の時心行和順にして不剛修行なり。是に於て審諦を見るを以て便ち阿那含を成じ、復た動還せず究竟して欲界の苦を解脫す。是に於て頌して曰く。

其の心思想悉く和順にして、志の依倚する所厥の身に因る、五陰の本、去來今を了して、皆空無なるを見るを聖賢と謂ふ。

修行して自ら念ずらく、我が身は長夜に五陰の爲めに蓋はれ、臭處・不淨所に侵欺せらる。譬へば搏揜兇逆の子の如く。瓶を取つて之に畫し、中に不淨を盛つて其の口を封結し、花を以て上に散じ香を以て之を熏じ、田家の子に與へ、汝此の瓶を持つて某園觀に至れ、中には石蜜及び好美の酒を盛れり、住まりて吾等を待て、我れ各〻家に歸り供具を辦作し相從つて飲食せん、堅く持して失ふこと莫くんば卿を顧みて價を勞はんと。田家の子信じて瓶を抱きて歡喜し、心に自ら念じて言く、今當に自ら恣に飲食娛樂すべしと。其の園觀に至り、蠅をして其の上に住せしむるを得ず。遂に待

て是を說き已竟つて便卽還り去る。甫めて當に是の衆惱の患を更べし。宮殿に在つて五欲もて自ら娛むと雖も、安んぞ以て樂を爲上ん。是に於て頌して曰く。

是くの如きの苦惱、不淨瑕穢の困を、誰か當に以て歡欣し、安隱にして憂患なかるべき。罪因の死に臨んで、死を求めて頭に戴著するが如し。王より假りに然るを得るとも、當に復た還つて榜を受くべし。

其れ修行者自ら惟念して言く、梵天より還つて當に惡道に歸すべし。胞胎中に在つて熟藏の上、生藏の下に處り、垢汚不淨五繫に縛せらると。是に於て頌して曰く。

修行して漏禪を得、此を獲て適々中半にして、則ち生じて梵天に在るも、久しく常に安きこと能はず。心中に念ずること是くの如し、命盡きて惡道に歸すと。人の假に出獄するも、限竟して還た考を受くるが如し。

譬へば小兒の一雀を捕へ得るが如し。執持して惱ましめ長縷を以て足に繫ぎ之を放つて飛び去らしむ。自ら以爲へらく脫して復た厄に遭はずと。果樹淸凉の池水に詣つて飮食自恣し安隱無憂ならんと欲するも、縷遂に竟り盡きて之を牽き復た還る。續いて捉惱さるること本の如く異ることなし。修行も是くの如し。自ら惟念して言く、梵天に至ると雖も當に欲界に還つて勤苦すべきこと是くの如し。是に於て頌して曰く。

譬へば雀あり繩もて足に繫ぐが如し、適々飛ぶも縷盡くれば牽かれて復た還る、修行も是くの如く梵天に上るとも、續いて欲界に還り苦を離れず。

〔二〕修行して自ら念ずらく、我が身假使無漏禪を得ば、爾らば乃ち勤苦の畏道を脫し、號して佛子と曰ふ。所在の飮食癡妄と爲さず。猶豫を脫するを以て正道に在りて第一禪を得。徑依怙すべし正見の諦に入るが故に是に於て頌して曰く。

【二】無漏の初禪を得るは眞の佛子なることを示す。

快く娯樂すと雖も此の憹を憂ふ。

獄卒說いて言く、吾に便手あり拵せざる所なく比倫あるものなし、安んぞ勝るものあらんや。吾が身は前後に此の便手を以て無央數の男子女人を殺せり。又手・足・耳・鼻及び頭を斷じ、手を以て眼を挑りて刀刃を用ひず。諸囚を住立せしめて摮博攊捽し、角弶に懸頭し、竹篾もて勉痛し、榜床に在いて五毒もて之を治し、布もて其の指を纏ひ油を塗つて火燒し、膏を髮上に灌いで火を放つて之を然し、草もて其の身を纏ひ火を以て之を焚き、欒欒として體を割きて其の辭對を問ひ、口を決し唇を截り其の面皮を剝ぎ、口もて其の指を嚙むこと譬へば菜を啗むが如し。若し人を鞭榜するには竹杖革鞭もてす。獄卒喜踊し針を以て指を刺し、繩もて脇腹を絞め頭を木梢に纏ふ。是に於て頌して曰く。

　臣は樂を念ぜず獄に還ることを恐る、是くの如き考治甚だ畏るべし、獄卒數々來つて刑罪を說く。此の憂ある者は安きを爲さず。

獄卒又言く、我に憎愛なし、遊觀して歌音聲を聽くを喜ばず。設し死罪あらば榜鼓兵圍して都市に詣り、吾れ悉く頭を斬る。勇猛なる軍陣・將將・豪貴・高尊ありと雖も、我が便手を畏ること猶ほ醉象の牙の如し。剛强逆賊の善人を輕慢する者は我れ皆頸を絞む。父母・兄第・親屬涕泣して哀を求むること一時なるも吾れ之を聽かず。又一子の父、囓呼跳踝して乃ち虎の鳴くが如きも、吾れ之を折伏して聲あることなからしむと。是に於て頌して曰く。

　臣群從と相娯樂し、獄卒の罪刑を說くを思念するに、譬へば人の醇淸の酒を飮んで、或は醉喧するあり又歡喜するが如し。

獄卒又言く、吾に惡氣あり、眼中より毒出で目を張りて人を視れば胸裂け頭劈くること、譬へば氷の裂くるが如し。男女我を見て懅を懷かざるなし。人形ありと雖も鬼魅の行を作す。獄戶に在つ

りと出言すること勿れ。其の處、藏匿の家たるを說くこと莫れ、人を牽引して某は是れ伴黨なりといふ勿れ。或は誘問せらるとも復た之を信ずること莫れ。獄卒は汝を恐らすも愼んで伏を爲すなかれ。若し考治せらるるとも驚懼を得ること勿れと。是に於て頌して曰く。

展轉して相勸勉し、人に下の辭法を敎ふ。　獄吏の門を思念し、何を以て其の言に答ふべきやと。大臣眷屬俱に、復た獄の衆苦を念じ、諸の五欲を習するも、而も心に憂惱を懷く。

獄囚相謂く、卿等見ずや、人の父母兄弟親屬を捨てて、身命を惜まず其の本國を遠ざかつて、荊棘・竹木・叢樹・坵荒・嶮難を行き、其の身を顧みず海に入つて財を求むるに、吾等は勤勞の苦を歷ずして寶物を致す。是を以ての故に當に考掠を忍び、失財を他人をして得ざらしむべしと。是に於て頌して曰く。

賊は他人の財を劫め、所獲は己れの有に非ず、念じて當に命を惜まざるべし。　失財にて更に厄に遭ふ。

臣自ら念じて言く、吾れ何ぞ見るに忍びんやと。(卽ち)獄卒の前に住して叫喚して之を呼んで自ら說いて言く、我は織女三星陂蘭宿の生なるを以て地獄王に屬し、二十九日夜の中半に生ず。卿は聞かずや、吾れ初め地に墮つる時、國に衆患あり擾動安からず諸の怪變を興す。空に崩音あり地は震動を爲し、東西に赤を望み四方勿ち冥く、鵰・鷲・烏・鵲・狐・狼・野獸・鵄・梟・塚間に在りて生にて人肉を噉ひ、鬼神・諸魅・鳩桓・溷鬼・反足・女神悉く共に欣悅す。此の獄卒の生じたるは正に我等の爲なり。假使長大せば多く男女を害し從つて獄塚間に在く。我等は當に死人の血肉及び脂髓腦を得て以て食欲を爲すべし。是を以ての故に吾等は子を護つて壽命をして長からしめんと。我れ初生せし時此の救あるを以ての故に人を畏れず。是に於て頌して曰く。

慈哀あることなく言剛急なり、其の人故なくして怨結を懷く、獄卒の言を念じて臣の意悲し。

でんことを望むあり。或は自ら念ずるあり、我れ獄中に在つて出期あることなく復た悒悒たらずと。其れ新來者は或は絞殺せられ、或は考せられ或は擊たる。或は口に辭を受け或は以て形を結び、或は死人と床褥を同一にし、或は牽いて之を出して溷上に臥著し、或は道地に行きて大いに考せられず。是に於て頌して曰く。

悪人甚だ衆多にして、瑕穢憎惡すべし、愚と倶に止る、譬へば屠膾と與なるが如し、啼呻哭し涙下る、苦なること鬼と同家なるが如し。　是れ大臣の愁憂なり、何ぞ忍んで重ねて獄に入らん。

此の諸の罪囚刑獄中に在つて、各各國王盜賊を談說し、或は穀米飮食の屬、華香伎樂男女の事を說き、或は山海行故の事を說き、或は他國の捭掩の事を說き、或は王の所積の行を嗟歎し、或は王の惡治、國政ならずして賊來つて攻伐し、是くの如くして國を失ふを說き、或は言ふ、王崩じて新立あるに當つて大赦を出し、夫人の懷軀是くの如く產に在る獄囚は脫するを得、若し城、火を失せば焚燒する所多く、獄門開くことを得て我等は則ち脫せんと。或は共に議して言く、若し瑞怪を見て鳥鵲來つて鳴き、獄門に倚つて住まり獄戶に聲を作し、夢に堂に上り及び高山に上り又龍宮に入り、蓮花の池に墮し舟に乘つて海を渡るを見て、自ら覩ずるに久しからずして一切の苦を免れんと。是に於て頌して曰く。

諸の王法を犯す者、談語して自ら勸勉す、聚會して心歡喜し、解脫を得んこと奇望す。　群牛の谷に投じ、厄井に墮つるが如く是くの如し。　時に大臣此れを思ひ、無福の人甚だ愁ふ。

時に臣思念すらく、我れ當に云何にして復た此の盜賊の言談を聞くべき(卽ち)或は相敎ふるあり、若し獄吏問はば當に是の答を作すべし。極重に考治せらるること二七日を過ぎずして、體轉た狎習し復た大いに患へず。假使身を取りて段段に之を解し、刀頂上に在るとも妄りに我は斯の過を犯せ

に還た獄中に著く。是に於て頌して曰く。

譬へば臣有つて王法を犯すが如し、王は故恩を念ふて獄を出でて、意を恣にして所欲を相娯樂せしめ、然る後還た獄中に閉著す。

獄吏教を受けて王の勅告の如くす、其の人脫するを得て沐浴服飾し、諸の群從と倶に出て遊觀し五欲を自ら恣にす。相娯樂すと雖も心に退いて之を念ず。今群從と五欲を自ら恣にす。云何んが是を捨てて當に還た獄に就くべけんやと。三時に歎息す。復た考治せらるるに當つて弊衣を着け麁食して草に臥し、小人と倶に共に一處に止る。何ぞ一へに痛ましきや。當に蚤・蝨・蚊・虻の爲に食はるべし。中に在ること惡むべく、夏は則ち盛熱にして冬は則ち慘寒なり、鼠夜に鳴走し冥冥たること漆の如く、垢穢不淨流血地を覆ひ、頭髮蓬亂し考治百千なり。或は耳を刓り鼻を截る者あり、或は手足を斷じ穢濁不淨なること塚間に在るが若く惱言ふべからず。當に此輩の瑕穢と倶に處るべしと。是に於て頌して曰く。

夏四月を竟りて其の臣念ずらく、親愛と倶に歡樂するも、夏には當に獄に還るべし、諸の考治、遭厄の惱は量るべからずと。

當に復た更に諸の罪繫囚を見るべし。其れ犯禍者は作事道ならずして、婬盜竊、人の男女を劫め、人家及び諸の穀積を焚燒し、毒を以て人を害し、喜んで輕慢を行ひ、或は男女を殺し及び居牛を爲し、諸丘・聚・縣・邑・城郭を掠め國家の惡を念ず。當に復た此の五毒の榜笞を見るべし。手・脚・耳・鼻は血の爲に塗られ、或は頭を斫られ瘡痍裂壞し膿血漏出し、或は重く考せられて身體腫起し、無數の蝍蛆來つて身に著き、地に在つて臥し極めて鵄猪の如し。或は新に獄に入り面目手足悉く爛傷し腫れ、驚悍燋悴し愁言ふべからず。住まりて敢へて動かず、或は羸瘦して骨立ち、顏色醜陋にして譬へば餓鬼の如く、或は久しく獄に在りて氣を以て胛腫し、頭亂れ爪長く、或は中に在つて日日出

【一〇】五欲とは、普通は色・聲・香・味・觸の五境を云ふ、財・色・食・名・唾の五を云ふ場合もあり。

に是に神足を致すを歎詠す。

[八]數息品第二十三

其れ威神耀くこと日光の如く、徳炎魏魏たること天帝を過ぎ、顔色端正にして月滿の如く　衆冥を消除し諸垢を滅す、口に法言を說いて甘露の如く、出語殊妙にして十善を歎ず。　篤信合して倶に最尊に歸す、願はくは佛無等倫に稽首せん。　諸經を觀採すること海に入るが如く、禪定を獲るを以て穿漏なくんば、敢へて佛弟子に計數すべし。　是の故に最勝安に稽首す。

[九]其れ修行者は、自ら惟念して言く、何をか無漏にして第一禪に至ると謂ひ、何をか謂ひて之を世尊の弟子と名くると。若し修行者禪に在りて穿漏せば、當に是の心を發すべし。我れ一禪を得たり故に穿漏と爲す。穿漏行第一の禪を以て、梵天に生ずるを得るも、在上の福薄く、命若し盡きなば當に地獄・餓鬼・畜生に墮し及び人間に在るべし。此の輩を計するに梵天に在りと雖も、是の比を諦視すれば惡道凡夫の類を免れざるなり。所以者何となれば未だ解脫せざるが故に。是に於て頌して曰く。

設使始めて漏禪を學得せば、其の修行は穿てる漏器の如く、梵天に生ずと雖も當に復た還るべし、綵衣に雨りて其の色變ずるが如し。

譬へば國王に一大臣ありて重事を犯すが如し。先づ之を考治するに五毒並びに至る。却つて乃ち械を著けて深獄に閉在し、弊衣を衣せしめ給するに麁食を以てし、草蓐を床を爲し、家人をして入つて相見を得しむること莫く、房は廁の臭穢處に近からしむ。吏は教を受け已つて卽ち王命を承け考治すること法の如し。其の人往時に小功夫あり恩を王に施す。王之を思念して獄吏に告げて其の人を放出せしむ。之を恣にすること四月自ら娛樂に在り、眷屬と倶に相勞賀す、四月を竟つて已

【八】第二十三數息品、有漏禪・無漏禪の別、凡夫禪と佛弟子禪との別を說き、次に數息觀の四事十六特勝を示し、進んで四善根、十六無漏心を得て、預流果に入ることを說く。

【九】有漏の初禪を得て梵天に生るゝも、又欲界に墮在す、之れ眞に佛教内の禪に非らざることを說く。

修行も是くの如く、自ら其の形を擧げ專心にして空を念ず。是に於て頌して曰く。

其れ修行ある者は、神足もて飛ぶこと天の如し、身の諸骨節毛孔を觀じて皆空と爲す。已に離して吾を計せず、專念に空を想樂すること、大稱の物を量るが如く、擧身も亦是くの如し。

其れ修行者は、習行すること是くの如くにして便ち成就を得。初め身を擧ぐる時地を去ること蟣の如く、轉じて胡麻の如く、稍〻大にして豆の如く、遂に復た棗の如し。擧を習ふこと此くの如くにして（七）梵天に至り乃ち淨居諸天の宮に到る。須彌を通徹して拘礙する所なく、地に入ること無間にして出でて而も孔なし。空中に遊んで坐臥行住し、身上に火を出し身下に水を出し、身上に水を出し身下に火を出す。諸毛孔より若干の光を現はし、五色の耀は日の明照するが如し。能く一身を變じて以て無數と爲し、牛・馬・龍・象・騾・驢・駱・駝・虎・狼・師子に化作して現ぜざる所なし。發意の頃普く佛界に遊び旋つて則ち尋いで還る。是れ神足界通達の變にして、是の神足は四禪に因つて致す。其れ四禪は不淨觀と數息とに因つて之を致す。是の故に修行して當に惡露を念じ數息もて定を思ふべし。是に於て頌して曰く。

輕擧を習學するに因つて、風の如く罣礙なく、身は踊つて梵天に至り、悉く諸の天宮を觀る。飛行して虛空に在ること、雲の如く禁制なし。地に入ること水に入るが如く、空に在ること地に處るが如し。身より自ら火を出すこと、日の光明の若如く、身下に其の水を雨らすこと、月の霜露を降すが如し。專精にして神足を得、自在にして所礙なし。梵天を捫づることを得んと欲せば、自ら恣にす、何に況んや餘をや。他方界に至らんと欲せば、輕擧して卽ち能く到ること、釋の金剛を擲つよりも疾かなり。往返も亦是くの如し。自在にして變化し、能く無數の形を現ず。釋の幻を娛樂するが如く、神足を樂しむも亦然なり。佛經の甘露の池に遊び、亦大象の華泉に入るが如し、總べて其の義を說くこと本敎の如し、故

【七】梵天(Brahmadeva)は、色界の初禪天なり、淨居諸天とは、色界第四禪天の中なり。

是の第一禪續在し、穿漏の諸漏未だ盡きず、是くの如き行者は第一禪に住するが故に凡夫と爲す。佛弟子を計するが故に立てて外に在りとす、未だ盡く應に入室すべからず。外仙人の欲を遠離するも終始に斷ぜざるが如きは佛弟子に非ず。修行して是くの如く、第一禪を求むること甚だ亦致し難し。其の餘の三禪は稍ゝ前轉すること易し。譬へば射を學ぶに、遙かに大准を立てて習ふこと久しくして乃ち中る。習いて休息せずんば工なること則ち毛を析くが如し。初め一禪を學ぶは精勤して乃ち致すも、其の餘の三禪は之を學ぶこと則ち易し。是に於て頌して曰く。

其れ第一禪を學ぶは、精勤するも甚だ致し難く、其の餘の三禪は、方便もて遂に至り易し。譬へば射法を學ぶに、初始は甚だ中て難く、已に能く大准を中つれば、目を閉づるも一毛を破るが如し。

若し第一禪寂然として致さば、故に是れ凡夫なり。當に訶教すべし。佛弟子に非ずして界外に在らば、已に愛欲を離るるも仙人に似たり。

其れ修行者、已に自在を得て四禪を順成す。神足[六]を得んと欲して觀じ悉く空を見、諸の節解・眼・耳・鼻・口・項・頸・脇・脊・手・足・胸・腹及び諸毛孔の虛空の若如きを省し、是の觀を作し已つて自ら其の身の解解連綴すること蓮花の本の如く、猶ほ根の諸孔の如く、觀ること虛空の如きを見、然る後身を見ること譬へば革囊の如し。漸察すること是くの如くして便ち形想を離れ唯だ空想あり。已に空想を得て復た色想なく或は空想を習ひ續いて其の體を見るも但だ無所著なり。身を觀んと欲せば則ち自ら之を見、觀ざらんと欲せば則ち亦見ず。虛空を觀んと欲せば則ち之を見、觀ざらんと欲せば則ち亦見ず。體心俱に等しくして意は其の內に在ること乳水の合するが如し。心は身を離れず身は心を離れず。其の志を堅固にし心を以て身を擧げ其の座を去らしむ。專心にして空に在ること人の稱を持ち、稱鎚をして等正に銖兩を安ぜしめ、斤平かになり已つて後手を舉げ稱を懸くるが如し。

【六】神足通（Ṛddhividhi-jñānam）。又は身如意通、身通、神境智證通など云ふ。

て廢せず、經行・坐起・寢覺・住止に、若しくは獨り若しくは衆なるも常に心を離れず、疾病にも强健にも當に以て志を著け、但だ此の無常・苦・空・非身を以ては定と爲さざるなり。所觀如諦にして虚妄に從はず。是に於て頌して曰く。

因緣觀を察し若し忘れなば、重ねて塚間に到つて之を觀視す。但だ專ら無常苦を觀ずるのみならず、其の心を轉ぜずして省ること見るが如し。

塚間に在つて見る所の屍形を一心に思念して初より忘捨せざるが如く、身を觀ずるも亦然り。死人の形及び吾が軀體を觀ずるに等しくして差特なし。若し他人の男女大小の端正・好醜・裸形・衣被・莊校・瓔珞若しくは嚴飾なきを見て一心に之を察せば、死屍と異ることなく、不淨觀を用つて寂と爲るに至るを得。爾の時修行して常に惡露を察す。譬へば衆流の悉く海に歸するが如し。是に於て頌して曰く。

我身と死屍と及び大小と、其の惡露を見るに等しくして異ることなし、心常に專精にして未だ曾つて捨てず、譬へば衆流の巨海に入るが如し。

[四]爾の時修行して心に自ら念じて言く、已に自在を得、心我に違はず、復た惑を爲さずと。即時に歡喜し能く甘樂を以て奇特を致し、堅立して志を秉り復た欲に隨はず。若し女人を見るも是れ骨鎖なりと謂ひ好顏と爲すに非ず。本習ふ所の欲を察知審諦して以て瑕穢と爲し、情色を離れて衆惡を造らず。是れ第一禪なり。[五]五蓋を棄捐し五德を具足し、諸の思想を離れ衆くの欲惡不善の法を遠ざかり、其の心專念に、靜然一定して歡喜し安らかに第一禪を行ず。是を謂ひて寂淡然の法と爲す。之を求むるに此くの若く惡露觀に因る。是に於て頌して曰く。

志自在にして弓の如く、心心相牽挽す、女人の皮骨を觀て、意を制して欲に隨はず、瑕を離れて心清淨に、身は衆惡を脫し、世に在りて自在を得、歡喜にして禪定を得。

【四】不淨觀の修行進みて初禪乃至四禪を得。

【五】蓋は本性を蓋覆するの意、貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑法の五なり。

るに同等なり、是を謂ひて寂と爲す。尋いで便ち思惟するに、頭頸は處を異にし、手足各〻別れ、骨節支解各〻一處に散す、是を謂ひて觀と爲す。此の骨鎖の身は四事に因つて長ず、飲食と愛欲と睡眠と罪福との緣より生ずる所なり。皆無常・苦・空・非身に歸す。不淨朽積し悉く無所有なり、是を謂ひて觀と爲す。要を取つて之を言へば、見て察せさる是を謂ひて寂と爲し、其の元を分別する是を謂ひて觀と爲す。是に於て頌して曰く。

　諸の骨鎖を見て察省せず、心濁亂せざる、是を寂と謂ひ、其の體頭手足を分別し、發意して省せんと欲す、是を觀と謂ふ。

[三] 其れ修行者何に因りて專精に寂然に入らんことを求むるや、無數の方便もて寂に逮ぶ。今要言を取つて之を解說すれば二事に因つて致す。一に惡露觀、二に曰く數息して出入息を守る。何をか不淨觀と爲す。初め當に發心して一切を慈念し皆安隱ならしむべし。是の心を發し已つて便ち塚間に到り坐して死人を觀る。計して一日より乃ち七日に至る。或は身の膖脹して其の色青黑となり、爛壞して臭處は蟲の爲に食はれ、復た肌肉なく膿血もて汚され、其の骨節を視るに筋もて纏裹せられ、白骨星散して甚だ惡むべしと爲す。或は久遠若干歲の骨を見るに微碎して地に在り、色は縹碧の如し。心を存して熟思し、其の所觀に隨つて行步・進止し臥起・經行し之を懷ひて忘れず。若しくは閑居寂として無人の處に詣つて結跏趺坐し、彼の塚間にて見る所の屍形を省み、一心に思惟す。是に於て頌して曰く。

　惡露を省んと欲して塚間に至り、塚間に往到して死屍を觀る。空寂にして人聲なきに在つて、
　自ら其の身を觀ずること彼の屍の如し。

其れ修行者、設し此の觀を忘れなば復た往いて重ねて視、還つて本坐に就いて無常觀を作し、出入進止に未だ曾つて懷を捨てず。夙夜に懈らさること一月一秋なり。復た是の數を過ぎて專精にし

【三】定に入るに二事あり、惡露觀と數息觀となり、惡露觀とは、不淨觀 Aśubha-smṛti のこと、今は先づ之を說く。

卷の第五

神足品第二十二[一]

其の心清淨にして流泉の如く、比丘と倶に猶ほ德華の如し、苦を免れ慧、安くして涼風の若く、佛樹を長養し願はくは稽首せん。

時に應じて寂定を得、山の如く動く可からず、明觀し等しく稱の如し、瑕を除きて無穢ならしむ、經義寂觀を以て、現世間を照曜し、心を斂めて自ら歸命し、三界の尊に稽首す。

其れ修行者、或は先に[二]寂を得、而して後に觀に入り、或は先に觀を得て然る後に寂に入る。寂寞を習行して適よく觀に至つて便ち解脫を得。設し先に觀に入り若し寂寞に至るも亦解脫を得。何をか謂ひて寂と爲す。其の心、正住し不動不亂にして放逸ならず、是を寂相と爲す。尋いで其の行に因つて、心に正法を觀じ、所作を省察して本無を見る。其の形相に因つて是を謂ひて觀と爲す。譬へば金を賣るが如し。人買ふ者あり、金を見て已後好醜を言はず、是を謂ひて寂と爲す。金を見て分別し某國より出で銀銅の雜る者たるを知り、其の眞僞、紫磨黃金たるを識る、是を謂ひて觀と爲す。

人の草を刈るに左手は草を獲、右手は鎌もて刈るが如し。其の寂然なる者は手に草を捉ふるが如く、其の法觀なる者は鎌もて之を截るが如し。是に於て頌して曰く。

其の心瑕穢無く、不動なるを名けて寂と曰ひ、若し心遍く省せば、斯を號して法觀と謂ふ。手に草を捉ふるは寂に應じ、鎌もて之を截るを觀と爲す。是を以ての故に寂然と、微妙とは解脫を得。

其れ修行者は人身の骸を觀るに前に在るも後に在るも等しくして異ることなく、開目閉目之を觀

【一】第二十二神足品、初めに止と觀との別を示し、次に不淨觀によりて四禪を得て神足通を得ることを說く。

【二】寂と觀とは、坐禪の二方面にして、普通には止、觀と云ふ、止(Samatha)、觀(Vipaśyanā)。

観て、ニ脱安隱を致し、悉く衆苦の惱を度し、吉祥の遠からざるを見ること掌中に文を觀るが如し。是を謂ひて沙門の、終始の患あることなきと爲す。

省察して佛の諸の經法を覺し、解脫して永く安隱ならんことを求めんが爲に、義深廣に總哀を演說し、行者をして解多からしめんとして空を講ず。

て其の家に歸る。是に於て頌して曰く。

小兒は沙を積んで以て城を爲し、中に在つて娛樂を盡す、黄昏に、日適よ冥に向ふや戀慕せず、卽ち其の城を捨てて家に歸還す。

其れ修行者は當に是の觀を作すべし。吾れ未だ道を解せず、吾我ありと計し恩愛の著、普ねく身色を護る。老病將に至らんとし、無常對到して忽ち盡滅す。今適よ色を捨てて心に所樂なし。智慧の法を以て分別散壞し、四大五陰は今已に解了す。色・痛・想・行・識、諸入の衰は皆我所に非ず。今の五陰は身の所有に非ざる如く、過去當來現在も亦然なり。其れ生死を觀ること是くの如きを以てせば、便ち能く具足して脫門に至るを得ん。空を求めんと欲せば順行すること斯くの若し。是に於て頌して曰く。

其れ習欲ある者は、恩愛の著を捨てず、普く自ら身を將護すること、人の親を奉敬するが如し。若し情欲を離るれば、月蝕して光伏するが如く、身は沙城の如きを知り、復た吾我を計せず。

[二三]其れ修行者は、三界の空を見て復た向生する所あるを願樂せず。何をか無願にして脫門に向ふと謂ふ。所有の境界に婬怒癡の垢、假使起らば制して隨はず。是を無願にして脫門に向ふと謂ふ。無相、是くの如く已に是を了せば三脫門と謂ふ。其れ修行者は所以に專精にして唯だ空を解せんと欲す。是に於て頌して曰く。

三界に我を見ず、覩る所皆空と爲す。安んぞ能く生を求めんや、一切退還せず。設し心常に無相無願空を思念せば、戰鬪中に在つて、怨賊を降伏し除くが如く、五陰本無にして、依倚して人身に在るを觀じ、過去及び當來、現在も亦是くの如し。積聚せる勤苦の身は、一切悉く敗壞す、明者は五陰を觀ずること、水の泡沫の如し。若し無相願を得ば、三界皆空なるを

【二三】三解脫門又は三三昧と云ふ、空(Śūnyatā)、無相(Animittam)、無願(Apraṇihitam)なり。

感し惱言ふべからず。天轉じて曉に向ひ星宿遂に沒して日光出でんと欲す。爾して乃ち賊に非ずして是れ樹なることを覺知す。其れ修行者は當に是の觀を作すべし。我れ往昔より愚癡に蓋はれ、吾身あり、及び頭・手・足・脇・脊・胸・腹、諸の合聚する所、行步・進止・坐起・言語・作爲すべき所は稍稍自ら致すと謂へり、學問曉道し智慧聰明にして、愚癡の冥遂に淺薄と爲る。爾して乃ち吾我あることとなく骨鎖相連り皮革纒纏し、心意の風に因つて行步進止し以起語言し作爲する所あることを解了す。是に於て頌して曰く。

人あり冥き行路にて、樹を望見して賊と謂ふ、愚人も亦是くの如し、身を見て我ありと計す、
明なれば吾我人なく、衆事を積んで體を成し、骨鎖諸孔流は、心神の動風に因る。

吾れ嘗つて之を聞く、昔一國あり。諸の年少の輩江邊に遊在して相娛樂し、沙を以て城を起し或は屋室を作り、是を我所と謂ひ各々自ら護り、所爲を分別して差錯せざらしめ、之を作り已竟る。中に一子あり即ち足を以て觸れて他の沙城を壞す。主大いに瞋恚して其の頭髮を牽き拳を以て之を打ち、聲を擧げて大いに叫ぶ。某我が城を壞す、仁等願はくは來つて我れを助け罪を治せよと。衆人聲に應じて悉く往つて佐助し、之を過治し足にて其の身を踏み、汝は何を以ての故に他人の所作を壞すやと。其の輩復た言く、汝は他の城を破る、當に之を還復すべしと。共に相謂つて曰く、寧ろ此の人を見よ。他の城を壞し其の效ある者にあらず、治罪是くの如し。各自に城に在つて戲れ欣笑し復た相犯すこと勿れと。是に於て頌して曰く。

小兒沙城を作り、之に觸れて皆破壞す、戲笑して之を作り、謂ひて是れ我所と爲す。　各各自ら心に、是れ吾が城屋の界なりと懷ひ、而して已に娛樂中は、王、國宮に處るが如し。

爾の時小兒沙城を娛樂し、謂へらく是れ我所にして將護して之を愛し人をして觸れしめずと。日遂に冥に向ふや各々還歸せんと欲す。其の心戀せず沙城を顧みず、各々手足を以て之を蹈壞し去つ

野に棄捐せしむ。是に於て頌して曰く。

若干の功夫もて其の音を成ず、是れ虚妄にして俗を迷惑すと爲す、假使鼓することなくんば聲出でず。　煩勞甚だ多く是を用ていかにせん。

其れ修行者は是の思惟を作す。譬へば彼の琴の若干の功を興せば爾らば乃ち聲を成ずるが如し。眼も亦是くの如し、風寒熱なければ其の精明徹し、心は他念せず、目は外明に因り、覩る所の色は遠近あることなく、色は細微なることなく亦覆蓋せず、識は一種に非ず。是の緣に因つて便ち眼識あり。是に於て頌して曰く。

琴の若干にて成ずるを得、聲は耳より聞いて心に之を樂しむが如く、衆病あることなく、目睛明らかに、設し他念無くんば眼識と名く。

所從の因緣もて眼識を起さば、其の緣の所合は無常・苦・空・非我の物なり。眼識此の患を致すに因り從つて、設し人ありて常樂の命の是れ我所なる者ありと言はば、是れ不可得なり、此を虚言と爲す。安んぞ自ら眼識は我所なりと云ふべけんや。是を以て之を知る、身に眼識なし、眼識は無常なり。心の諸の所想も亦復た是くの如し。審諦に觀る者は其の根本を知る。一切諸法は皆我所に非ず、譬へば御車の如し、芭蕉の樹の一葉を摘取して之を謂ひて堅と爲すも、手に在りて卽ち微なり、次第に摘取するに其の根株に至るも一も堅固なることなし、亦た要あらず、安んぞ能く剛ならしめんや。修行も是くの如く初發意の時より、其の毛髪を觀じて是れ我所と爲すや他所に在りと爲すやと。審かに觀ずること是くの如く其の髪頭を察せば、一切の地種・水・火・風・空、幷に精神に及ぶまで觀察するに身なし。吾れ曾て聞くが如し、日入つて夜冥く、人あり獨り行つて月光あることなく、遂に中半に至り遙に樹を察見し之を謂ひて賊と爲す。刀を拔き弓を張り戟を執りて我を危うくせんと欲するが如く、疑なしと、心に恐怖を懷きて敢へて復た前まず。足を擧げて移動し志甚だ愁

王に傍臣に告ぐ。便ち琴を取り來れ、吾れ之れ何の類かを觀んと。即ち勅命を受けて則ち琴を持ち來る。王之に告げて曰く、吾れ是を用ゐず其の聲を取り來れと。傍臣報へて曰く、是は名けて琴と曰ふ。當に方便を興して動作功夫し乃ち聲あるべきのみと。何に緣つてか聲を擧げて以て王に示さんや。是に於て頌して曰く。

其の王所問あり、群臣尋いで答へて曰く、其の聲は獲べからず、自然に音あることなしと。

王群臣に問ふ、何の功夫を興して聲あらしむるやと。群臣王に白す。此は名けて琴と曰ふ。工師作成するに既に燥ける材を用ひ、加ふるに筋纏を以てし、以て作成し竟る。復た厥の音を試み大小ならざらしめ、其をして平正ならしむと。是に於て頌して曰く。

燥材を治用して斯の琴を作り、覆ふに薄板を以てし、內を空ならしむ、復た好絃を著けて其の音を調へ、然る後爾して乃ち聲悲和なり。

臣王に啓して曰く、琴を鼓するに、工に當つては巧節相和し、急ならず緩ならず遲からず疾からず、音の時節を知り、聲の麁細を解し、高下所を得、又既に賦詠歎詠の聲を曉り、歌は節を失はず鼓音を習ひ、八音九韶十八の品あり、品に異調ありて其の絃の變は三十有九なり。是に於て頌して曰く。

其の音而も悲和にして、宣暢の聲逸殊なり、四部の聲柔軟にして、能く歌ひ皆通利す、詩賦詠を曉了し、天の伎樂の若如し。是くの如きの人を得ば、鼓琴乃ち清和す。

群臣王に白す、斯くの如きの師の琴絃を調へて聲爾して乃ち悲快なり。向に王の聞く所の如し。聲已に滅盡すれば復た得べからず。設ひ人四方に其の音を追逐して、之が所在を求むるも獲べからずと。王群臣に謂く、所謂琴なる者は世に益なく、要あることなし。是を謂ひて琴と爲す、無數の人をして放逸不順ならしめ、是が爲に欺かれ、人を迷惑す。是の琴を取り去れと。破つて百分にし

譬へば火燧を取るが如し、之を破つて百分と爲すも、都て火を見ず、火を觀るに木を離れず。其れ諸識の種、之を計するも亦斯くの若し。　六情に因つて識あり、之を察するに分つべからず。

譬へば王あり高樓に上り在つて群臣百僚と倶に會するが如し。未だ王たらざる時は山居に在つて仙人の子と爲る。群臣之を迎へ立てて國王と爲すに未だ曾つて樂を聽かず。鼓・箜・篌・琴・瑟の聲を聞くに其の意甚だ悲しく、柔和雅妙にして未曾有を得。顧みて群臣に謂はく、是れ何等の聲にして其の音殊好なるやと。是に於て頌して曰く。

仙人王の閑居に在り、來つて人間に在つて琴聲を聞くが如し。　其の王爾の時群臣に問ふ、是れ何の音聲にして殊なること乃ち爾るやと。

群臣王に白す。大王は未だ曾つて此の音を聞かざるやと。是に於て頌して曰く。

群臣王に報へて曰く、王は未だ曾つて聞かずやと。　王は試さるゝ者の如し。　臣は惡言を宣べず。

王群臣に告げて言く、吾が身本學んで久しく雪山に居り仙人の子と爲る。其の處閑居にして此と差別す、故を以て聞かずと。是に於て頌して曰く。

王は本末を以て臣の爲に說く、閑居に止在して法もて樂と爲す。　獨處に遊ぶが故に知らず、此の音聲を分別すること能はずと。

爾の時傍臣前んで王に啓して言く、大王知らんと欲せば、是を名けて琴と曰ふと。是に於て頌して曰く。

王は未だ曾つて此を聞かず、音の出づる所を解せず、臣言く人中の尊よ、是は名けて琴と曰ふと。

種の覆蓋する所と爲らず。是の虛空に因つて四大を分別す。而して往反・出入・進退・上下・行來・屈伸・擧動・下深・上高に依つて、風は周旋を得、火は起り山は崩れ、日月星宿は周匝圍遶し、因を得て行ず。是を外の空と爲す。是に於て頌して曰く。

其の色像を見ず、能く忍んで罣礙なし。衆人の因つて往還し、屈申及び動作し、衆水の涌流する所、日月と風の旋行、山崩れ若しくは火起る。是を謂ひて外の空と爲す。

其れ修行者は諦觀すること是くの如し。而して身內の空すら尙ほ吾が所に非ず、況んや復た外の空を我と云はんやと。執心專精なれば內外の諸空は等しくして異あることなし。所以者何となれば、苦樂あることなきが故なり。捉持すべからず、想念あることなし。已に心意なく苦樂あることなし。當に我を計すべからず。是に於て頌して曰く。

是の身中の諸空、體を計するに我なきを了す。何に況んや外の空に於て、當に復た有を計すべけんや。內外の空を察するに、悉く等しくして差異なし、苦樂と與ならざるを以て、諸の想念を離る。

三 今當に心神の種を觀察すべし。心に我ありや我は心神に依るやと。何をか心神といふ、心神は內に在りて外に在らず。心は內種に依り外種を見るを得、而して因緣を起す。神に六界あり。眼・耳・鼻・口・身・心の識なり。彼の修行者は當に是の知を作すべし。目は色に因つて明なること猶ほ空の心に隨ふが如し、是を以ての故に便ち眼識あり。是に於て頌して曰く。

內の諸の種火、及び外衆の四分に因る、兩木の相鑽つて火出づるが如く識も斯くの如し。耳・鼻・身・口・意と、分別して六事を成ず。色は罪福の主と爲る。是を名けて諸識と曰ふ。

其れ眼識は目裏に在らず、外色に在らず、色、眼と合同せず、亦眼を離れず。外は色に因り、內は之に應ずることによつて、是に緣つて識と名く。是に於て頌して曰く。

【三】六、識大（Vijñāna）に就いて無我を觀ず。

す。是の四大身は皆是れ怨讐にして、悉く我が許に非ず、誠に患厭すべし。明者は棄捐して未だ曾て貪樂せず。是に於て頌して曰く。

火本木に在り、相揩りて還つて自ら然ゆ。　四種も亦是くの如し、和せずんば其の身を危うす。　明人は常に諦觀して、其の本原を省察す。　是の內の四大は空なり、此れ怨にして何ぞ樂と爲さんと。

二〇　其れ修行者は自ら思惟し念ずらく、吾れ四種を觀ずるに實に我所に非ず。當に觀ずべし空種は何等の類と爲すや。空は身ありや、身に空ありと爲すやと。何をか空種と謂ふ、空に二事あり、內の空と外の空となり。何をか內の空と謂ふ、身中の諸空、眼・耳・鼻・口・身・心 胸・腹・腸・胃・孔竅・臭穢の屬、骨中の諸空衆脈潤動す、是輩を名けて內の空と爲すなり。是に於て頌して曰く。

蓮華の諸孔の如く、體の空も亦斯くの如し。　骨・肉・皮・動潤し、身內の空も異ることなし。

其れ修行者は當に斯の觀を作すべし。身中の諸孔を皆名けて空と曰ふ。此の空よりして想念を起さず。(想念は)空と合せず。所以者何となれば、意は心より起り、意意の相續は本對より生ず。其れ意法は當に自ら心を觀じ、他人の心を觀ずべし。心は無にして亦空なり、依倚する所なし。三達の智を以て去來今を察するに皆無所有なり。若干の方便もて內の空を省せば永く身を見ず。是の故に內の空には吾我なし。是に於て頌して曰く。

內種を觀ずるに何れに所在するや、永く我の毛塵の如きをも得ず。是の故に身は空にして心意識は、譬へば冥影の但だ名あるが如し。

二一　其れ修行者は當に是の觀を作すべし。已に內の空は悉く無所有たるを見る。當に復た外を觀ずべし。(外空は)何等の類と爲すや、我ありと爲すや、我之に依るやと。何をか外の空と謂ふ、身と連らず、像色なき者にして、見るべからず又獲るべからず、身形あることなく牽制すべからず、四(大)

【二〇】五、空大(Ākāśa)、先づ內の空大に就いて無我を觀ず。

【二一】次に外の空に就いて無我を觀ず。

つて吾が手中に墮す、既に曠野に在つて人民あることとなし、此の間前後の所傷一に非ず、今斯の道路は城を離れて玄隔し縣を去ること亦遠し、前後に人なく、邊に候望なく、亦放牧し薪草を取る人、射獵の者もなし、今正に日中にして猛獸すら尙ほ息す、況んや人當に行くべきや、今危くすべきに垂んとすと。時に四怨は富者の髮を捉へ之を撲つて地に著け、其の胸上に騎りて各ゝ本罪を陳ぶ。一怨言つて曰く、某の時我が父を殺せりと。第二人言く、卿は我が兄を殺せりと。第三人言く、汝は我が子を殺せりと。第四人言く、汝は我が孫を殺せり。今卿を得て便ち段段に相解き、當に其の頭を截るべしと。解解に之を斬り、自ら本心を省すれども曾て作せし所、皆之を思惟するにあらず。(曰く)今汝命を亡ひて閻羅の獄に至らんと。爾の時富者は爾く乃ち覺するのみ。是れ我が怨家なるを反つて親親と謂ふ。初め來りて吾に附し吾れ之を愛信し、食飮・好樂に悋惜を爲さず、之を視ること子の如くし、吾が得んと欲する所は悉く其の前に着けたり。久しく我を害せんと欲せるに我は覺せざるのみ。今我が頭を捉へ之を撲つて地に在き、吾が萬罪を陳べて吾が耳鼻及手足指を截り、皮を剝ぎ舌を斷つ。今諦かに卿は是れ我が仇怨なることを知ると。是に於て頌して曰く。

其の人相隨ひ來り、怨家にして善友に像る。口軟なるも心に毒を懷くこと、灰もて盛火を覆ふが如し。　現に信じて所持なく、吾を剝ぐこと屠羊の如くす。　其の人、心に乃ち覺す、是れ怨にして親友に非ずと。

修行して是くの如く等しく此の義を觀ず。吾れ本自ら地水火風の四事は我に屬すと謂へども、今諦かに之を察し已つて覺知を爲せり。是れ怨家たり、骨鎖相連れることを。所以者何となれば、身の水增減せば寒病を發せしめ百一の苦あり。本身より出で還つて自ら己を危うするなり。若し身火をして復た動作あらしめば則ち發熱して百一の患を疾む。本、身より出で還つて復た自ら危うきなり。風種若し起らば則ち風病百一の痛を得。地若し動かば衆病皆興る。是を四百四病俱に起ると爲

本、心より起るも亦猶ほ是くの如し。是に於て頌して曰く。

　諸種に依倚して衆法を想ふ、本邪思より意念を起す、因つて長じて身を成し言說あり、若干の義を出すこと山川の如し。

其れ修行者當に復た自ら念ずべし。是の四種身は吾なく我なくして、轉た相憎害す。譬へば人あり財富無數にして四怨あるが如し。四怨念じて言く、此の人大富にして財寶訾られず、田地・舍宅・器物無量なり、奴婢・僕使乏少する所なし。宗室・親友、皆亦熾盛なり。吾れ等既に貧にして復た力勢なし、我れ輩此の怨を報ずるを得ること能はず。當に方便を以て斯の人を屈危すべし。當に何の因を以て其の方計を成すべきや。常に之に親近して乃ち怨を報ずべしと。爾の時四怨は詐り往いて歸命し、各自に說いて言く、我等は君の爲に趨走給使し以て當に奴客となるべし。作爲を欲する所あらば願はくは告勅せられんことをと。其の人卽ち受け悉く之を親信して左右に在らしむ。四怨恭肅にして晚く臥し早く起き、悚慄叉手し諸の重作すべきは皆先んじて之を爲して劇難を避けず。爾の時に富者は彼の四怨の恭敬・順從・淸淨にして言和し、其の心を卑下せるを見て、意に甚だ之を愛し、此の四人に謂はく、是れ吾が親親にして卿を踰ゆる者莫しと。所在の坐席にて輒ち之を歎說す。是れ吾が親友なり亦兄弟・子孫の如く異るなし。是輩の興す所にして作爲すべきあらば吾れ終に違はじと。是の敎あり已つて食飮に器を同じうし、出入には乘にて參ず。是に於て頌して曰く。

　親近するに無數の便もてす、慢を除き命に逆はず、卑下すること家客の如く、意に順つて歡喜せしむ、怨安んぞ能く此を行ぜん。　是等は本讐の爲なり、世に在りては嫌結ある、之に依つて親友の如し。

爾の時、富者は是の四怨に親しみ心未だ曾て踈ならず。然る後に緣ありて斯の四人と與に、其の本城より異縣に到らんと欲す。自ら共に竊に議すらく、此の人は長夜是れ我が重讐なり、今此に在

謂ひ走り行くこと里あるも永く至るを知らず。此れ云何と爲す。本の所見は實に是れ河水なりや吾れ自ら惑へるやと。遂に復た前に進むに日轉じ晩暮となる。時に向つて野馬を見ず、此の水あることなし。心に卽ち之を覺す、是れ熱盛炎の所作のみ。吾れ渴極まるを用つて遙かに野馬を見、反つて是を水なりと謂へりと。是に於て頌して曰く。

遙に日の盛炎なるを見て、是を流水波なりと謂ふ、渴困極まるを以ての故に、意に想ひて是を河なりと呼ぶ。　時に暮れて遂に涼に向ひ、更に諦かに之を察視するに、乃ち是れ野馬にして、吾れ惑ひて謂ふて水と爲す。

修行して自ら念ずらく吾が本も亦然なり。情欲に渴して之を追うて息まず。終始愛に著し還つて自ら燋然す。迷は疑想と爲り癡網に蓋はれ野馬に惑はさる。吾れ久遠より唐しく是の心あり、我に貪著して是れ吾所なりと謂ふ。今已に覺了し視る所審諦なり。身の想見する所斯に已に除けり。今六分を觀るに吾我あることなし。一毛髮を觀ずるに永く有を見ず。況んや體中の毛孔諸物に於てをや。身の一毛を解するに若干說あり、況んや當に一切地を講論すべけんや。是に於て頌して曰く。

自ら其の身を觀じて我ありと謂ふ、愚の渴して炎を見るも亦是くの如し。　此の六分は我所に非ざるを知る、是の心ある者は德に合すと謂ふ。

其れ修行者當に復た思惟すべし。愚者は明ならずして心を發して想を生じ、是れ吾なり斯れ我なりとす。彼れ意に念ずる所の衆想邪行、初め起るを念と謂ひ後に起るを行と謂ふ。是を思ひ然る後心中に風動き口をして發言せしむ。四大身に倚つて吾に我ありと計す、是の事皆空にして吾なく我なし。唯だ是れ陰種諸入の根なり。是の故に身あれば因つて號して人と名く。男子・丈夫・萠類・覩息・栽齒の種は志し內より動く。風に因つて聲あり舌をして言はしむ。譬へば大水の高山より流下し、其の震洞暢逸して行者之を聞くが如し。亦深山の響の如し呼べば卽ち應ず。人の舌に言あるは

ありとも學道の人は未だ曾て形を計せず。是に於て頌して曰く。

我れ寧ろ勝あるや、能く內我を超ゆるやと。　愚騃亦是くの如く、無慧にして邪見に隨ふ、言語增減あるは、凡俗の所說のみ、智慧除くこと是くの如く、分別せば特異なし。

其れ修行者、見知了了として淸淨の慧を成ず。設使內種是れ我所ならば、常に自在を得て、當に之を制詞すべし、進退は人に由る所以に之を知る。（もし）[一八]無我ならば何ぞ自在を得ず、衰老して鬚髮自ら白く爪長く齒落ち面皺み皮緩み、顏色醜變し筋脈緩と爲り、肉損じ骨を傷め風寒熱至り、相錯つて和せず膿血濁亂するを感しむや。外の四大を計するも亦復た是くの如し。或は地を掘つて山崩れ谷壞るるあり。地水火風或は增し或は損じ、用つて自在ならず、是の故に身なし。此に由つて之を知る。內外の諸種は吾なく我に非ず。是に於て頌して曰く。

生老病死至り　猶尙自在ならず、外地も亦此くの如し、崩掘して常に增減す。　內の衆事身を成し、外種も亦若干なり。　如實に正諦觀すれば、則ち吾我なきを知る。

修行して自ら念ずらく我心は云何。久遠より來た四大悉く空なるを反つて我所と謂ふ。譬へば夏熱し淸淨にして雲なきに曠澤に遊んで遙に[一九]野馬を見るが如し。時に當つて地熱し炭火を散ずるが如し、既に水あることなく草木皆枯る。及び沙地の日中炎盛なるが若し。或は賈客あり衆くの伴ふ輩を失つて獨り後に在り。行くに上には傘蓋なく足下には履なく體面汗出で、唇口燋乾し熱は身體を炙り、口を張り舌を吐き劣極にして甚だ渴く。四顧望視すれば其の心迷惑して、遙かに野馬を見、意に是れ水なりと爲す。謂つて遠からず水波あるに似如たり。其の邊に樹若干種類を生じ、梟・鴈・鴛鴦皆其の中に遊ぶ。我れ當に彼に至つて自ら坑底に投じ、復た出でて身の垢熱を除き、及び諸の劇渴疲極は解することを得べしと爲す。爾の時彼の人是を念じ已つて後、力を盡して馳走し野馬に趣く。身劣にして益〻渴し遂に更に困頓たり。氣乏しく心亂れ即ち復た思惟すらく、我れ水近しと

【一八】有我とする方が意味通じ易し。

【一九】野馬 Ghota kum(ga) は、陽炎のこと。

所處、四大種の變、漸漸に日に長ず。本無を觀ずるを以て則ち我あることなく、等しくして差特なし。四種法爾として精神の所處となり、漸漸に軀を成す。其れ精神なきも亦た轉じて長大す。是に於て頌して曰く。

內は心に由つて實を生ず、樹の子より出づるが如し、心は樹の因果の如く、外種も亦是くの如し。　其れ身法も亦然なり、心に因つて衆想を念ずるも、厥れ外種は意なし、安んぞ能く衆想あらんや。

譬へば外種の如し、或は金を出すあり、後に工師あり、或は銅鐵を出し、或は鉛錫を出し、或は銀を出し、或は鍮石・車磲・馬碯・琉璃・水精・珊瑚・虎魄・碧玉・金剛・金精・衆寶を出す。其れ外種より是くの如き輩の琦瑋珍異を出す。身內の種を計するに胎中より始生して、若しは二肉の摶なるを名けて眼相と爲し、其の目中光りて所見ある者を名け曰ひて睛と爲す、目中の黑瞳は內睛に因つて外形を見るを得、內外相迎へ然る後、識を爲す。識は何の興す所ぞ、謂く痛・想・行なり。若しは目より痛・想・行を生ずるが如く耳・鼻・身・口・意も亦復た是くの如し。內外の諸種等しうして亦異ることなし。內の諸種に從つて心・痛・想・行あり、本、內より起りて外に由らず。是に於て頌して曰く。

外種を護るあり、用つて金銀を出すが故なり。　內種も亦是くの如し、二肉摶して眼を成じ、眼根より色を覩、色に因つて識を成ず。　心に由つて衆想を起し、內の自在なるを識と號す。

其れ修行者儻し是の疑あり、所謂內種に頗し踰ゆる者、所謂內中の內ありやと。或は自ら覺して言く、曚瞑の人は聞かず了せず、其の心反つて邪にして貢高に入り、所見の身は則ち是れ吾が所、我を有體と爲し、我或は內に在り。他人の身を觀ずるも亦是くの如し。覩る所斯くの如く超踰すること能はず。人身の四大五陰及び諸の[一七]衰入なるを解せず、因つて之を身と號す。我所他人と此の內外を計するは凡俗の言のみ。俗の所言の如く吾れ之に從はんと欲す。設し從はずんば儻し諍訟

【一七】衰は六衰卽ち六境のこと、入は六入卽ち六根のこと。

其れ修行者風を觀ずること是くの如し。則ち自ら念じて言く外風同じからず、或は大或は小、或る時は中適に、或る時は盛熱にして扇を持つて自ら扇ぎ、若し塵土あれば之を拂拭し、急疾の飄風は則ち逝いて人を驚かし、旋嵐の風は虛空に立在し、天地壞する時は須彌山を拔き、兩兩相搏つて皆破壞せしめ、下を擧げて上ならしめ、高きを飄して墮さしめ、相搩し碎壞して皆塵の如からしむ。身を計するに一ありて大小あることなし。外風は旣に多く又復た大小あり。內外の風を觀ずるに等しくして差特なし。所以者何となれば、俱に所屬なきが故なり。是に於て頌して曰く。

　若使扇を執つて汗著を除く(風)、人身中の風及び旋風、虛空の衆風も亦我なし、是れ則ち名け曰ひて外風と爲す。

〔一六〕其れ修行者皆能く分別して、此の四大を了す。爾りと雖も未だ捨てず、身空を解せずして、所在に作爲するを輒ち有身を計し、亦吾ありと言ふ。本無を觀ずるを以て、內の四種及び外の四種を計するに俱に等しくして異ることなし。色・痛・想・行・識は則ち猶內と爲すも亦所猗なし。所以者何となれば、其れ心意識は內に在らず、痛想行識も亦身の四大と相連らざるが故なり。是に於て頌して曰く。

　當に此の四種分を觀察すべし、其れ慧なき者は常に疑を懷くも、色・痛・行・識は內に連らず、安んぞ當に外の四種に相著すべけんや。

其れ修行者假使狐疑せば、當に本原を觀じて能く其の根を解すべし、則ち知ること審なるが如し。譬へば樹を種ゑて果實を生ずるに、是れ本の子に非ず亦本を離れざるが如し。一切は是くの如く四大を獲るに因つて五陰あるが如し。則ち胞胎に在つて心精神を成じ、形は濁酪の如く則ち息肉を生ず。稍稍にして小兒の身を成じ、少小身より便ち中年に至る。是の若干種は本と胎より起る。旣に身を成就すれば初合の身に非ず亦初を離れず。始め胎精より稍稍形を成じ中年に至り、精神の

〔一六〕以上の四大を總めて內外兩面より無我を觀ず。

く、亦彼に在らず、內火外火倶にして異ることとなし。所以者何となれば、等しく空に歸するが故なり。是に於て頌して曰く。

　此の火ある所以は　唯だ燒熱し炊熟するのみなり。　山巖諸石子、積聚する所は是くの如く、各各所在異り、熾然たること一時ならず。　外火は無にして斯くの如し、是の故に無我なるを知る。

一四 今當に觀察すべし、諸所の風氣に我ありと爲すや、我は風に在りやと。何をか謂ひて風と爲す、風に二事あり。內風と外風となり。何をか內風と謂ふ、身の受くる所の氣上下往來し、脇間・脊・背・腰に橫起する風、諸百脈骨間を通ずるの風、其の筋力を掣縮する風、急暴なる諸風の興作動發すれば則ち人命を斷ずるもの、此を內風と謂ふ。是に於て頌して曰く。

　載身の諸風は猶ほ機關の如し、其れ人命を斷ずるに衆風動き、喘息動搖して體を掣縮す。　是れ則ち名け曰ひて內風と爲す。

其れ修行者は當に是の觀を作すべし。此の內の諸風は皆飲食に因り時節起ならず。及び餘の因緣風も虛しく發せず。風の若干種は步步の中に各各起滅す。彼に於て我を求むるも得べからず。是を以て之を言へば內風を求むるに吾我なし。是に於て頌して曰く。

　人身の動風及び作風は　計するに若干種にして緣よりて起る、此は各〻殊異にして我あるに非ず、是の故に內風は我なし。

一五 其れ修行者心に自ら念じて言く、今內風を求むるに則ち我あることとなし。當に復た外を察すべし。何をか外風と謂ふ、身と連らず、東西南北の暴急の亂風・飄風、冷熱多少の微風、雲を興すの風、旋嵐の動風、天地を成敗し、及び水を持する風、是を外風と謂ふ。是に於て頌して曰く。

　四方の諸風及び寒熱、旋嵐の風亦成敗(の風)持雲塵淸(の風)幷びに飄風、是を則ち名け曰ひて外風と爲す。

〔一四〕四、風大(Vāyu)、先づ內風に就いて無我を觀ず。

〔一五〕次に外風について無我を觀ず。

身中の諸水に吾我なし、設ひ苦樂及び増減ありとも、是くの如く外水に豈、身あらんや、苦樂増減するとも患なし。

【二】今當に諸の火種を觀察すべし、火に我ありや我は火に著するやと。何をか謂ひて火と爲す、火に二事あり、内外と外火となり。何をか内火と謂ふ、身中に溫暖諸熱煩滿し、其の命識を存し、飲食を消する者、身中の諸溫此を内火と爲す。是に於て頌して曰く。

身中の諸煖、飲食を消し、溫和にして命を存す　諸熱なる者、是れ則ち體分及び日光、斯れ謂はゆる之を名けて内火と爲す。

其れ修行者は當に等觀を作すべし、身中の諸溫或は熱、頭に著し或は手・足・脊・脇・腹・背に在り。是くの如く觀ずれば各各異ありて、人身を計するに一も應に我あるべからず。諦視すること是くの如くんば則ち所屬なし、是を内火と爲す。是に於て頌して曰く。

分別して人身を計し、心に火の無我なるを察すれば、所處若干種は、各各我を見ず。

【三】其れ修行者は便ち自ら思惟すらく、吾れ内火を求むるに則ち身あることなし。當に外火を觀ずべし、我ありと爲すや、我、火に依るやと。何をか外火と謂ふ、身を運らず、謂く火及び炎溫熱の屬、日月星宿出す所の光明、諸天・神宮・地岸・山巖・鑿石の火、衣服・珍琦・金銀・銅鐵、珠璣・瓔珞及び諸の五穀、樹木・藥草・醍醐・麻油、諸の所有の熱、是を外火と謂ふ。是に於て頌して曰く。

日月炎火及び星宿、下地の諸石の光熱なる者、及び餘の一切諸の溫暖、是を則ち名け曰ひて外火と爲す。

其れ修行者外火を思惟するに、觀る所是くの如くんば、則ち外火の稱げて數ふべからざるを知る。火に二事ありて燒煮する所あるも、火、草木に在らば草木を焚かず、(火と草木は)所處各異ればなり。設し外火中に吾我あらば則ち(外火と吾我と)別異ならず。故を以て之を知る、外火に身な

【二】三、火大(Tejah)、先づ内の火大に就いて無我を觀ず。

【三】次に外火に就いて無我を觀ず。

ず、通流して遍身に遍ねし、是を謂ひて內水と爲す。

其れ修行者涕唾を前に在き、諦觀して之を視、木を以て之を擧ぐるに我之に著するや。假使是に依るとも日日に流出し棄捐滅沒し、將て定んで外に在り。是を我なりと計せず又之を護らず、假使木擎げて吾我あらば、器中に盛著するに何を以てか之を名けん。是くの如く觀ぜば諦かに無身なるを知る。所以者何となれば、形體を計するに若干あること無し。此の比を以てせば水種衆多なりとも、水は則ち我なし。內外亦爾なり。是に於て頌して曰く

假使我水の如くんば、水消ゆれば我も則ち滅すべし。身水稍長きが如く、我なる者も亦應に爾るべし。體中の水を棄つるが如く、計して是の身を貪らず。是くの如きを諦觀せば、則ち吾我あることなし。

二 其れ修行者は復た更に省察し已に內水に吾我あることなきを見る。當に觀ずべし、外水に我あることなきや、我は水に依るやと。何をか外水と謂ふ、已に在らざる者、根味・莖味・枝葉・果實の味、醍醐・麻油・酒・漿・霧・露・浴池・井泉・溝渠・澇水、江河・大海・地下の諸水是を外水と謂ふ。是に於て頌して曰く。

地上の諸の水と名く可き者、及び餘の衆藥根莖の味、身と各別にして相連らざる、是れ則ち之を謂ひて外水と爲す。

其れ修行者、外水を諦觀し分別すること是くの如し。而も身中の水すら尙ほ吾我なきに、增減する所あれば身をして苦痛ならしむ。何に況んや外水にして身あらんや。設ひ取る者ありとも已に於て損なし。若し與ふる者ありとも身に於て益なし。

是を以て之を觀れば此の內外の水は等しくして異ることなし。所以者何となれば倶に無所有なるが故なり。是に於て頌して曰く。

【二】次に外の水大について無我を觀ず。

くして狐疑を懐かずんば、髮に我なきが如く一切も亦然なり。髮・毛・爪・齒・骨・肉・皮膚悉く所屬なし。諦觀すること是くの如くならば地に吾我なく、我は地に在らず。是に於て頌して曰く、

身髮の種類に吾我なし。體內を分別すること百千段し、中に於て之を求むるも身あることなし、譬へば水に入つて火を求むるが如し。

九 其れ修行者は心に自ら念じて言く、吾れ內の地を求むるに都て吾我なし。當に外の地を察すべし、儻し吾我あらば外地に依るやと何をか外地と謂ふ、身と連らず、麁强堅固にして人身を離る。謂く土地・山巖・沙石・瓦木の形、銅・鐵・鉛・錫・金・銀・鍮・石・珊瑚・虎魄・車磲・馬瑙・琉璃・水精・諸樹・草木・苗稼・穀物、諸の積聚する所と爲す。是に於て頌して曰く、

山・巖・石・瓦・地・樹木、及び餘の諸の所有形類、其れ各々身と離れたる衆殖の生、是を則ち名けて外の地種と曰ふ。

其れ修行者、外の地を觀ずるに則ち內の地に吾我有ることなきを知る。所以者何となれば、內の地增減すれば則ち苦安あるすら、尙ほ身あることなし。何に況んや外の地、當に體あるべけんや。設ひ破壞・斷截・燒滅・鑿掘・剉裂することあるも苦痛を覺えず。寧んぞ之を吾我ありと謂ふべけんや。故に外と內の地は皆所屬なく等しくして異ることなし。是に於て頌して曰く、

譬へば內の地に吾我なきが如し、何に況んや外に在つて有る者ならん、無我を觀ずるを以て等しくして異なし、之を省みるに空に同じうして別ならず。

一〇 何をか謂ひて水と爲す。水は我に在りと爲すや、我は水に在りと爲すや。水に二事あり、內水と外水となり。何をか內水と謂ふ。身中の諸の軟濕なるもの(則ち)膩肪・膏・血・脈・髓・腦・涕・淚・涎・唾・肝・膽・小便の屬、身中の諸濕是を內水と謂ふ、是に於て頌して曰く、

肝膽諸血脈、及び汗肪の屬、涕淚諸小便、身中の諸濕の者、體に散じて柔軟あり、神と相連ら

【九】外の地大によつて無我を觀ず。

【一〇】二、水大(Ap)、先づ內の水大に就いて無我を觀ず。

餘者を置くや。若し毛悉く是(我)ならば、斯れ亦應に非ず。若干身と爲る(が故に)。又鬚髪を除きて小より長に至るも、亦計量し難し、(髪毛、我ならば)若し火を埋著して其の髪を燒く時身は便ち當に亡ぶべきなり。髪は四より生ず、一に曰く因緣、二に曰く塵勞、三に曰く愛欲、四に曰く飮食なり。是れを計するに身に非れば則ち吾我なし。鬚髪衆緣合して我れ適とあり。一髪地に墮ち、設しくは火に投じ、若しくは捐てて厠に在き、足を以て之を蹈むも身に於ては患なし。頭上に在つても亦所益なし。是を以て之を觀るに、頭に在るも地に在るも等しくして異ることなしと。是に於て頌して曰く。

頭上多髪なりと雖も、增減するも亦異ることなし。設ひ除き及び與へ在くとも、亦以て憂と爲さず。諦かに是を觀察し已れば、則ち吾我あることなし。是の故に分別了せば各各身あることなし。

假使彼の髪を吾我と爲さば、葱韮を截りて後に則ち復た生ずるが如し。是を以て之を計すれば當に復た我あるべし。所以者何となれば、其れ葱韮は自ら毀れ自ら生ずればなり。(而も)一切は皆空にして吾に非ず我なし。假使鬚髪神と合せば、水乳の合するが如く猶倘ほ別つべし。設使鬚髪吾我あれば、初め胎中に在つて形識を受くる時は都て髪毛なし。爾の時吾我は何許に在りと爲すや。後に因緣より生ずるなり。是を以て之を知る、髪に吾我なし。髪生ずるも生ぜざるも、若しくは除くも若しくは在るも、計するに身あることなし。是を以て之を觀れば草苗及び髪は一も異あることなし。是に於て頌して曰く。

假使鬚髪に吾我あらば、便ち是れ葱韮の如きを見るべし。身は猶ほ芻草の如く之を判析するに體と草とを觀ずるに等しくして異ることなし。

其れ修行者思惟すること是くの如し。本と吾あることなく、今我を見ず、曉了すること斯くの若

欲す。我何所にか是れあらん、寧ぞ身あらんやと。是に於て頌して曰く。

其の處に我想解して乃ち覺す、常に之を諦觀して本無と爲す、設使俗に踏つて自ら了せずんば、
冥中に盲を追ふが若如し。

六 其れ修行者退いて自ら思惟すらく、身あれば我を成ず。衣食供養は餘あれば他に與ふ、是を吾我と爲す。本悉く空なりと計するも、假使難あらば先づ自ら將護し然る後に他を救ふ。若し身を捨て已るも復た餘患あらば則ち當に追護すべし。人の一切の貪は皆身に由つて興り、復た他を討ぬることなし。是の故に之を知る、身は吾我と爲ると。是に於て頌して曰く。

諸の財色を貪るは皆身の爲なり、設し恐難あらば先づ自ら護つて、永く人を顧みず唯だ已を慕ふ、是の故に俗人は吾我と爲す。

修行して自ら念ずらく、當に身の本は六事合成なるを觀ずべし。何をか謂ひて六と爲す、七 一に曰く地、二に曰く水、三に曰く火、四に曰く風、五に曰く空、六に曰く神。何をか謂ひて地と爲す、八 地に二事あり、內地と外地となり、是に於て頌して曰く。

地・水・火・風・空・魂神と合して六と爲す、身に六あり外も亦六なり、佛は聖智を以て演ず。

何をか身地と謂ふ。身中の堅き者、髮・毛・爪・齒、垢濁の骨・肉・皮・革・筋連、五臟・腸・胃・屎・穢不淨、諸所の堅き者は是を身地と謂ふ。是に於て頌して曰く。

人身之を積むこと若干種なり。髮・毛・齒・骨・皮・肉、及び餘の體中の諸所の堅きもの、是を則ち謂ひて內身の地と爲す。

彼の修行者便ち自ら念ずらく、吾れ內の地と觀ずるに是れ我が身なりや否や。神は之に著すと爲し內と合するや。身合して異と爲り吾我は別なるや。當に觀ずべし、剃頭して鬚髮を下す時、目前に著せる一一の髮を分つこと布散して心に察せよ、何所に吾我あらんと。設し一毛我ならば安んぞ

【六】以下は吾我の念は身あるに由つて起る、而も身は六大の假和合にして眞の存在に非ることを示す。

【七】六大又は六界といふ、有情の成立要素なり。

【八】一、地大（Prthivi）、先づ内の地大に就いて無我を觀ず。

し便ち往いて奉現す。外は陽に嘲說して王をして歡喜せしむるも、退いて自ら思念すれば母の喪に遭ひ、心中悲感して火の草を燒くが如し。嗚呼痛ましい哉、何ぞ忍んで當に笑ふべき。適、重喪に罹るも、竊かに國王を畏れて卽ち哀心を制すること、水の火に澆ぐが如し。遂に復た俳戲して稍〻諸憂を忘れ、戲笑して益盛に王をして踊躍せしむ。其れ修行者も亦當に是くの如くなるべし。道心を誘進して、空無を解し吾我の想を除かしめよ。是に因つて習行して遂に眞空に入らん。是に於て頌して曰く。

　譬へば王に俳あるが如し。　身は重き憂喪に遭ひ、陽に笑つて憂感を除き、心遂に歡喜悅す。
　修行も亦是くの如し、稍々に心を誘つて空に向け、照耀して慧明に近づき、志定つて動轉せず。

是の故に行者は當に空教に順ずべし。設ひ其の心を誡むるも或は中ごろ亂るる者ありて、吾我の想を起さば則ち自ら思惟せよ。譬へば人あり、草木を合集して、以用て栰を作り廣河を渡らんと欲するに、其の水急に暴漂して栰を壞すが如し。吾れ心を誘進してより來た、日を積み勤苦言ふべからざるも、亂志卒かに起り其の專精に違ひ吾我の想ありと。是に於て頌して曰く。

　譬へば草木を合集せる栰の如し、山川・江河、之を漂はして壞す、愛欲の河は急なること是くの如し、意に寂を念ずれば則ち空に向ふ。

譬へば夏月に草木を熱燋するも、霖雨を得る時便ち復た茂生して五穀豐盛なるが如し。吾れ空を思惟すれば則ち吾我なし。設し思惟せずんば便ち身想を興す。是に於て頌して曰く。

　譬へば彼の霖雨の時に於て、諸の枯れたる草木悉く茂生するが如し、設使修行して空を思惟せば、則ち吾我を捐てて想念なし。

修行して自ら念ずらく、吾れ坐する所以は、滅度を求めんと欲す。(而も)實事には求むべからず。設し我あらば方に之を求むべし。而も我本と空にして吾我あることなし。今身の本無を分別せんと

而して佛より經法の樹を生じ、衆要の鈔に因ること華を採るが如し、正法須臾も懈怠有れば、自ら勉めしめんと欲す、故に是を說く。

〔四〕行空品第二十一

各ゝ自名・人物、悉く其の本號を知り、衆生の微苦の、蓮花の根絲の如きを曉る。審かに諦觀するを以ての故に、吾我の想有ることなし。人上に身を計せず、願はくは無著の尊を禮せん。其の光は世を照すこと、炬の冥室を明らかにするが如し。厥の心の覩る所、一切固要なるものなし。我れ彼の覺に歸命す。其の心行平等にして、諸天及び人を察し、普く見ること空無の如し。

〔五〕設し修行者吾我の想有りて空に入らずんば、則ち自ら剋責せよ。吾れ衰へて利用なく心罣礙せり。空慧に順ぜず、吾我の想を樂しむと。憂感して自ら勉め心を誘つて空に至り、或は其の志を誡め、之を誘つて定に向はしむ。因つて本無に至り三界皆空、萬物無常なり。是の計ある者は其の心を諫進して放逸ならざらしむ。是に於て頌して曰く。

其れ空を解せずして我想あれば、志則ち動起して樹の搖るるが如し。厥の心を勸誘して空無に向はば、久しからずして當に本淨に至るを獲べし。

譬へば國王(のもと)に俳兒あるが如し。其の俳の母終りて(兒は)服を持して家に在り。王は說を聞かんと欲し、人をして之を召さしめ、王相見んと欲すと。俳自ら念じて言く、吾に親老あり、適ゝ背棄せらる、今、王嚴急なり、若し往かずんば、當に我が命を奪ふべし、或は誅罰せられん。母は壽終ると雖も、(吾に)他の基業なし、宜しく當に之に應ずべし。尊命に違はず、陽に俳戲を作して王の歡心を得、强いて自ら意を伏し哀感を制し、復た母を念ぜじと。則ち自ら莊嚴して和悅被服

【四】第二十一、行空品は六大に就いて我身の空無を觀じ三解脫門に入ることを示す。

【五】先づ我想を離るゝことを示す。

巻の第四

勸悅品第二十[一]

慧を承けて衆を得度す、道成ずれば淸く流を爲す、其の智は常に此を飮み、服するに法の甘露を以てす。厥の水は盡くることなく、猶ほ穿漏の斷ぜざるが如し。願はくは智慧種の道德已に具足せるに歸せん。其れ以て羸弱なる者は、學を承けて意自ら達し、度に造りて意を定め、便ち志法を立てて禪思す。其れ佛は天中の天にして、權善方便を行じて、無量の智慧を現はす。身心歸し稽首せん。

假使修行して羸弱心を發せば、心に自ら念じて言く、我は善利を得、[二]八難を脫し、閑居自在を得たり。吾れ已に一切の智師に逮遇し其の法と無欲の衆僧とに歸命することと具成するあり。吾れ已に梵行して道を種ゆ、而して成ぜる者あり、或は道に向ふ者あり。衆人は邪に墮し我は正道に順ず。餘人は反を行ひ、吾は善行に從ふ。今吾れ久しからずして法王子と爲り、天上人間は戒德の香を歎じ、其の功德を匿さず不熱惱を得ん。爾らば乃ち安隱にして解脫の味を服し、日に當に飽滿すべし。救濟の安きを得、惡路を度して恐懼あることなく、寂觀に乘じて[三]八道行に入り、無恐難に到り、泥洹の城に趣く。是を以て自ら勸めて遵奉精勤す。是に於て頌して曰く。

修行して設へ羸弱なるも、常に法利に值遇し、吾れ世尊正法及び衆僧に歸するを得、方便歡喜の心、以て羸弱の意を勸めて、常に專思し遵奉す。是を謂ひて修行と爲す。初學及び道成、人雜なること叢樹の如くなるも、邪徑を離れ、便ち立つて正路に在るを以て、戒德を以て香と爲し、譬へば林樹の熏ずるが如し。　忽然として解脫し、道を得れば則ち普く現す。

【一】第二十、勸悅品は、正法を修して善利を得、歡喜して益々行を進むることを說く。

【二】八難處のこと、佛道の修行に障礙ある所にして 地獄・餓鬼・畜生・北拘盧洲・長壽天・盲聾瘖啞・世智辯聰・佛前佛後なり。

【三】八正道のこと。

量なり。　利き諸の矛戟を以て、刺さるる百倍の痛あり。　此の衆惱害を計するも、獄の毛痛に比ならず。

其れ修行者心に自ら念じて言く、吾が身、今は未だ此の患を脱せず。當に歡欣すべからずと。是くの如く自ら制して復た輕戲せず。斯くの若く立つ者は則ち能く專ら行ひて善法に入る、行者爾らば乃ち戰慄驚恐して、夙夜其の法に違はず。是に於て頌して曰く。

衰耗斯くの若く、樹果の自ら傷づくるが如きを視、且つ罪の塵勞、之を積むこと太山の如きを觀、是の穢濁の苦を見る。人犯せば惡道に墮す。專精修行に在りて、歡及び調戲を棄つ。惡道窈冥の苦を觀る、而して佛の經法は照すこと日の如し。　衆患を厭ふを以て順じて此を講ず、鈔經卷に依つて輕慢を除く。

るが故に死せず。

是に是て二獄あり、燒炙・煻煮と名く。彼の時守鬼諸の罪人を取つて段段に之を解し、鐵上に持著し火を以て之を熬り、鐵鏟を反覆して火を以て之を炙る。是に於て頌して曰く。

已に大苦に到り、燒炙・煻煮に在り、罪中に殃美ゆる者は、則ち本行の惡を識る。刀を以て段段に解し　破壞して無數ならしむ。　鏟を用て之を燒炙し、鐵上に著けて之を熬る。　燒炙・煻煮に在つて、惡むべし、瑕惱の爲に、無數の人酷せらるること、厨の肉羹を作るが如し。設し賢者を害すれば之を大火中に投じ、其れ戒を犯し法を壞せば、洪象に蹈蹍せられ、人性剛弊と作り　常に喜んで衆生を害すれば、所食擇ぶ所なく、守獄鬼に生ず。

修行道者心に自ら念じて言く、吾が身將に此の比を以て八罪獄及び[三三]十六部に墮することなからんとするや。又吾が前世無數生より來た斯の惡道を更たり、假令聖道を究竟すること能はずんば、當に復た中に入るべし。譬へば人あり逆惡を犯し、王、羣臣に勅して明日早時に矛もて刺すこと百痛なり。日中に刺すこと百なり。冥に向つて刺すこと百なり。彼の人一日に三百痛を被り其の身指壞して一言處もなく、體痛苦惱甚だしくして言ふべからず。此の痛ありと雖も、地獄の惱に比すれば、地獄は百千萬億無數の倍にして、相喩ふべからず。地獄の痛み甚だ苦なること是くの如しと。

是に於て頌して曰く。

自ら衆惡を犯し牽いて斯を致す。　毒痛もて考せられて憎むべし。　此の苦惱を視ては當に諦思して、常に勤めて精進し、速に成道すべし。

其れ修行者は是の學地に立つて、當に歡喜を除き其の心を堅固にすべし。若し志輕擧なれば當に自ら制止すべし。譬へば御者の馳車を將御するが如し。是に於て頌して曰く。

喩へば燒けたる炭火の如く、未だ曾て休息あらず。　常に此の苦痛に遭ひ、晝夜酷なること無

【三二】　第七焦熱地獄(Tāpana-n.)、第八煻煮地獄(Pratāpana-n.)。普通には大焦熱地獄(Mahāta-pana-n.)と云ふ。

【三三】　十六部は八大地獄の各々に屬する十六地獄のことなり。

被り身を傷づけ軀體を破壞す。而して皆血を吐いて地に躃し胸を傷づく。是に於て頌して曰く。
罪人之を駕するに鐵車を以てし、獄鬼之を驅りて犇走せしむ。　其の身を撾搒して血を吐き、
馬の戰闘して矛瘡を被るが如し。　若し信あることとなくして善人を輕んじ、自ら罪惡を犯して
應法なりと謂はば、凶罪之を引いて阿鼻に入れ、無央數の諸の苦毒を受く。

阿鼻地獄の自然の炭火罪人の膝に至り、其の火廣大にして里數あることなし。爾の時罪人邪念を發し、反つて曲道に從つて是を好地と謂ふ。卽ち火中に入つて其の皮肉及び筋血脈を燒き、適ゝ還つて足を擧ぐれば平復すること故の如し。是に於て頌して曰く。

時に炭火然えて膝に至る、既に自ら廣長にして復た風吹き、罪人上を行つて皮を然爛す。　正を捨てて邪に入る罪は斯の如し。

此の獄を離るることを得、之を去ること遠からずして沸屎地獄あり。廣長無數にして其の底は甚だ深し。罪人之を見て是れ浴池なりと謂ひ、轉ゝ相語つて言く、彼に浴池あり、中に青蓮五色の華あり。當に共に往いて洗ひ水を飲み渇を解くべしと。悉く皆中に入り沈沒して底に至る、中に諸蟲あり、其の口は鐵鍼の如く肉を以て食と爲す。罪人の身を鑽し肌膚を壞破し、足より鑽して乃ち頭上に出づ。眼・耳・鼻・口に皆蟲の出づるあり。本罪未だ竟らざるが故に死せざらしむ。是に於て頌して曰く。

罪果の致す所苦痛を受く、爾の時罪人阿鼻地獄にて　苦痛歎喚して懊惱し、其の身體を拕して鐵もて之を釘つ。
沸屎臭くして不淨なり、廣長無數量にして、惡露皆彼に在り、其の底は甚だ深し、罪を犯して一善もなくんば、此の閻王の獄に墮す。　斯の諸の罪人輩、鍼嘴蟲、之を噉ふ。
炭火獄及阿鼻に在り、并に一切瑕沸屎中の流河に墮するは罪の興す所なり。　宿殃の致す所な

え、城内皆火にして罪人の身を燒き、展轉して相見る。譬へば然ゆる炬の如し。猶ほ掣電の如く、亦散火の如し。體を焚いて毒痛すること譬へば火箭の象を射るが如く、叫喚苦痛言ふべからず。百年を積み已つて東門乃ち開く。時に無央數百千の罪人悉く走つて門に趣き適ま至れば便ち閉ぢ、相排して地に墮つること大樹の崩るるが如し。轉た相鎭壓すること積薪の若如し。過惡未だ盡きざるが故に死せざらしむ。是に於て頌して曰く。

恐怖し懍る叫喚獄に至る、救護を求むるが故に彼に到れば、大積薪を火を以て燒くが如く、罪人是くの如く相積燒す。
斯くの若く燒毒の痛みあり、叫喚して走りて四散す。 常に獄鬼を畏れ、恐怖して懍を懷く。
若し所寄を受くれば、抵突して背へて還らず、叫喚獄に閉在して惡罪もて毒痛を受く。 無央數の苦酷を受け、火の爲に燒かれて甚だ困厄す。 無量の惱に遭ふこと言ふべからず。 罪人叫喚し大叫呼す。

爾の時罪人は叫喚獄を脫出し、次に[三二]阿鼻摩訶地獄に入る。守鬼尋いで即ち諸の罪人を錄し五毒もて之を治す。其の身體を拕すること牛皮を張るが如く、大鐵釘を以て其の手足を釘ち及び人の心を釘ち、其の舌を拔出して百釘もて之を釘ち、又其の皮を剝いで足より頭に至る。是に於て頌して曰く。

身を拕すること牛皮の如く、鐵釘もて之を釘ち、兩舌の致す所、鐵釘もて其の舌を壞り、身皮を剝いで地に曳くこと、師子の尾の若如し。 是くの如く之を計數するに、苦を受くること量るべからず。

是に於て守鬼は罪人を錄取し、駕するに鐵車を以てす。守鬼は車を御し勒を以て口を勒し、左手に御を執り右手に杖を持ち、之を擿つて東西南北に走らしむ。罪人車を挽いて疲極し舌を吐き、杖

【三二】 第六阿鼻地獄(Avici-ci)。

試ひ國の長と爲るを得て、横に萬民を制すとも、以て地獄界に至れば、考治せらるること百億年なり。鑊湯の中に墮して釜に在つて煮られ、火を以て之を燒煮す、譬へば豆を煮るが若如し。

鐵釜より脫して遙かに流河を見、轉ゝ相謂つて言く、彼の河は洋洋として威神あり。水波興降し、衆花流れに順じ兩邊に樹を生ず。其の葉靑靑として彼の河水を蔭にす。底は皆流沙にして其の水淸涼なり。往詣して水を飮み洗浴して疲を解せんと。兩邊に棘を生ぜるを罪人は察せず。彼の河水に入れば悉く是れ沸灰なり。是に於て頌して曰く。

其の人前世に水蟲を害す。　血肉皆落ち骨腦を潰す。　本と涼水と謂ふに反つて沸灰なり、甚だ深くして熱沸踊躍す。

罪人は沸灰地獄に墮在し、髮・毛・爪・齒・骨・肉各ゝ流れて處を異にす。骸・體・筋・纏流に隨つて上下し、適ゝ出でんと欲求すれば、守鬼鉤取して熱地に臥著し、風起り之を吹いて體復た故の如し。獄鬼問うて曰く、卿の從來する所何の湊る所を欲するやと。罪人答へて曰く。去來を審にせず、計するに若干百千億歲より飢ゑて食を獲ず、飢渴を以ての故にと。守鬼鉤を取り、鉤もて其の口を開き燒鐵團を以て、叉洋銅を以て其の口中に注ぎ、罪人の咽を燒き、腹內の五藏悉く爛る。腸胃便ち下つて過ぎ去り、毒痛甚だしく言ふべからず。過惡未だ盡きざるが故に死せざるなり。

河を去ること遠からずして[三〇]二地獄あり。一を名けて叫喚と曰ひ、二を大叫喚と名く。鐵を以て城と爲し、樓櫓百尺埤堄嚴牢なり。悉く鐵網を以て其の上を覆蓋す。罪人相謂ふ、此の城は大いに好し、共に往いて之を觀んと。適ゝ中に入り已れば、心に自ら念じて言く、已に恐難を脫せり、復た衆惱なしと。歡喜跳踩して皆萬歲と稱す。或は面を地に拍ち或は面を仰いで臥し、或は睡眠し擗して面を破傷する者あり。四垣の外より自然に火あり、諸の樓櫓埤堄を燒き、衆網及び門悉く然

【三〇】　第四叫喚地獄（Raurava-n.）。第五大叫喚地獄（Mahāraurava-n.）。

の罪人は見るに及んで、謂ひて是れ果樹なりと爲す。 宿命の罪の致す所、殃垢の犯す所なればなり。

爾の時羅刹あり。顔貌畏る可く、爪髮悉く長く、衣被惡むべし。頭上より火出で、兵仗を提持して來り罪人を撾つ。勅して樹に上らしむ、罪人恐懼して涙出でて交ゝ横に悉く皆教を受く。其の刺下向せるは皆彼の身を貫き、其の軀體を傷け血出でて流離たり。是に於て頌して曰く。

體大にして色は炭の如く、麁獷にして惡目張る、獄王の使、杖を持つて、皆此の人を撾撃す。前世に罪殃を積み、愚にして喜んで他の妻を犯せばなり。 自ら言く、我が宿過によりて血流れ身を刺傷すと。

爾の時罪人は守鬼の爲に射らる、箭至ること雨の如く啼泣悲哀するを、呼んで來下せしむるに、刺便ち上向して軀を貫くこと炙の如く、復た喚んで上らしむ。罪人叉手して皆共に哀みを求め、惡鬼に歸命して原赦せられんことを願ふ。是に於て頌して曰く。

刺樹上より來下し已るに、獄王の守鬼逆に刺害す。 箭の爲に射られて、叉手し哀んで愍む可きを求め罪を免れんと欲す。

時に獄守の鬼、求哀を聞見して、忿ゝ瞋怒を以て復た重ねて撾刺し、更に遣して上らしむるに、體悉く傷壞し啼哮して還た上る。是に於て頌して曰く。

獄王の守鬼は撾刺し、求哀して脱せんと欲すれば鬼は忿ゝ怒る。 時に諸刺貫いて身は悉く傷づき、勅して還た上らしむること復た故の如し。

彼の鐵樹の邊に二大釜ありて猶ほ大山の若し。守鬼即ち犯罪の人を取つて、鐵釜の中に著く。湯沸いて或は上し或は下す。譬へば人間の大釜の中に小豆を煮るに沸して上下するが如し。又鑊湯に於て、若しくは千萬億年の考治毒痛あり。是に於て頌して曰く。

へば鬪に入るが如く傷つくるも是くの如し。

爾の時鐵樹の間に、便ち自然に烏・鵲・鵰・鷲あり。其の口は鐵の如く肉血を以て食と爲し人の頭上に住し、眼を取つて食ひ頭を破つて腦を噉ふ。是に於て頌して曰く。

彼の人前世時に、依信にして生を害すれば、鐵を以て身上に落し、解解にして斷截す。　烏鵰甚だ畏るべきもの、四面より來りて人を撃ち、頭に住して目を脫し　腦を發いて之を食ふ。

是に於て鐵葉大地獄中に、便ち自然に衆狗を生ず、正黑或は白き者あり、走り來つて喚吼し罪人を撃たんと欲す。罪人悲哭し之を避けて藏れ、或は四散するあり、或は怖れて動かず。狗走つて之に及び便ち罪人を捉へて、頭を斷つて血を飲み次に肉髓を噉ふ。是に於て頌して曰く。

口を張れば齒は正白なり、吼鳴の聲は畏るべし、舌を吐いて脣を舐め、强逼して人を傷害す。刀を以て其の身を傷つけ、鳥獸に食噉せられ、苦毒もて惱害せらるるは、依信殺生に坐すればなり。

爾の時罪人狗の爲めに噉はれ、烏鳥に害せられて恐怖忙走し、更に大道の分れて八路あるを見る、皆是れ利刀なり。意中に自ら謂へらく、生草青青たり、若干の樹あり、當に彼に往詣すべしと。利刀の上を行つて其の足趺を截り血出でて流離たり。是に於て頌して曰く。

其の人經律を受けて、法橋を破壞し、戒に順ずる者あるを見れば、而も强ひて戒を犯さしむ。

之を逐うて長路に入り、刀刃其の足を截り、足下皆傷壞し、窮極自在ならず。

爾の時遙かに諸の刺棘の樹を見る。高さ四十里にして、刺の長さ尺六なり。其の刺は皆錐にして自然に火出づ。罪人心に念ずらく、彼は是れ好樹にして種種の花實ありと。皆共に鐵樹の間に往詣す。是に於て頌して曰く。

遙かに鐵樹葉を見る。　枝柯甚だ高遠なり、利刺皆錐を生ず。　或は上に或は下に向ふ。　其

て頌して曰く。

獄吏慈仁なし、鐵輊・杵臼を以て罪人を困苦せしむること　麻油を搾る人の如し。

爾の時罪人遙かに太山を覩る。之を見て怖れ走つて廣谷中に入り、自ら濟はんと欲望するも脱することを得ず。適〻其の谷に入り轉た相謂つて言く、此の山は多樹なり、當に斯に止るべしと。時に各〻怖れ散じて諸樹の間に在れば、山自然に合して其の身を破碎す。是に於て頌して曰く。

衆くの罪殃、己の本造る所を積むを以て、彼の時諸の罪人、悉く山谷に入るとも、適〻山谷に入り已るや、彼の山自然に合して、罪人の身を碎く時、其の聲甚だ悲痛なり。

牛・羊・猪・鹿・飛鳥を害し、既に哀を加ふること無くして、人命を奪へば、合會地獄に在つて痛み無數なり。　他人の身を危うして此の惱を獲。

又遙かに火の燒くを見る。罪人謂つて言く、此の地は平博にして草木青青たり、譬へば琉璃の如し、當に彼に往詣すべし、爾らば乃ち安隱ならんと。卽ち行つて火に逆つて樹木の間に坐すれば、四面に火起つて其の身を圍遶し、之を燒きて毒痛嘷哭悲哀し、東西南北に走つて此の火を避けんと欲するも、輒ち與に相逢つて自ら救ふこと能はず。是に於て頌して曰く。

爪髮自然に長く　色變じ燒炙して痛し、風吹いて體舌乾き、獄吏を見て怖懅す。　無數の衆罪人　焰の爲に燒かれ、煙熏じ火之を燔く。　蛾の燈中に入るが如し。

又復た遙に[二九]鐵葉叢樹を見る。轉た相謂つて言く、彼の樹は甚だ好し。青草流泉あり、共に彼に行詣せんと。無數百千の諸の犯罪人、悉く樹間に入り或は樹下に坐し、或は佇立するもあり、或は睡つて臥寐するに、熱風四起して樹を吹きて動搖し、劍葉落墮して其の身上に在り、皮を剝ぎ肉を截り、骨を破り、髓に至り、脇・胸・背を傷つけ、項を截り頭を破る。是に於て頌して曰く。

依信する所多くして衆生を害すれば、地獄の有活と謂ふに墮し、熱風四起して鐵葉を落す、譬

【二九】鐵葉地獄、沸灰地獄、沸屎地獄等は八大地獄の各々に屬する十六地獄の中なり。

守鬼は罪人の惡行に會ひ、斧鑿斤鋸及び繩とをもて、罪囚を劈解すること木工の如く、譬へば人ありて新に屋を起すが如し。

時に獄の守鬼、火に燒けたる鐵繩もて互に其の身を槃にし、肌を截り體を破り骨に徹し髓に至る。脇・脊・髀・脛・頭・頸・手・脚、各〻處を異にせしむ。是に於て頌して曰く。

考治の百種の痛みは、黑繩の獄に在り、皮を剝ぎ斧を以て解す、斫らるること舍を起つるが如く、各支に其の身を解す、血出づること流泉の如く、骨肉處を別異にす、酷痛其さに言ふべからず。閻王の守鬼、其の身を破ること此くの如く、彼の過罪未だ盡きず、膿血流るゝこと斯くの若し。

[二八]其れ合會地獄に墮在すること有れば、罪垢の致す所、罪人をして坐せしめて鐵釘もて其の膝に釘ち、次に復た之を釘ちて盡く其の體に遍す。身碎け破壞して骨肉皆然り。諸節解脫し各〻異處に在り。其の命斷ぜんと欲し困ずること言ふべからず。自然に風ありて諸の釘を吹拔し平復すること故の如く、更に復た釘を以て其身に釘つ。是くの如き苦惱は不可計數百千萬歲なり。是に於て頌して曰く。

無央數百千の釘を以て、空中より下すこと雲雨の如し。其の人の身を碎くこと麨麵の如し。本罪の致す所、斯の厄に遭ふ。

次に鐵椎及び復た鐵杵を雨らし、黑象大山其の身上を鎭ふること、甘蔗を擣くが如く蒲萄を笮るが若し。髓・腦・肪・膏・血・肉・不淨皆自ら流出す。是に於て頌して曰く。

黑象鐵杵大石山　笮るに鐵軛を以てし、其の身を碎く。地獄の鬼を見て皆慄を懷き、其の身を破碎すること甘蔗の如し。

鐵の輾輪を以て其の身を笮ること麻油を厭すが如し。臼中に置著して杵を以て之を擣く。是に於

【二八】第三合會地獄(Saṃghāta-n.)。

灑ぎ已に活き且つ起つも過惡未だ盡きざるが故に死せざらしむ。獄鬼の聲を聞いて卽ち起つこと故の如し。是に於て頌して曰く。

水を以て其の身に灑ぎ、涼風來つて之を吹く。爾の時獄の罪人、叉守鬼の言を聞く、罪人の身壞碎され、卽ち活きて想あり、塵勞の罪未だ盡きず、當に復た考治を受くべし。

爾の時罪人住まり轉じて復た相見れば卽ち瞋恚を懷き、口脣戰慄し眼赤きこと血の如く、腸胃脫落し戰鬪故の如し。結怨以來其の日固に久し。身體傷壞し、地に墮つる流血は譬へば濁泉の如し。身體平復し、復た地より起ち、相害すること故の如し。是に於て頌して曰く。

地獄中に墮すれば　勤苦言ふべからず、相害して大恐を懷く、宿罪の致す所なり。　數數害せられて、還た復た活きること故の如し。　惡意もて反つて相害し、積罪して休息なし。此の世間の人に於て　喜び造つて殺害を爲せば、想地獄に在つて、罪を受くること本行の如し。　是の故に同行の人は　久長に罪獄に處り、命を相奪ふこと無數にして、死して復生ずること故の如し。　世に住して罪を犯す者は　想地獄に墮す。　譬へば芭蕉の樹の　適ゝ壞旋して復た生ずるが如し。

二七 罪人若し黑繩地獄に墮せば、彼の時獄鬼諸の罪人を取つて、熱鐵の地に排著し、叉鐵繩を持ち及び鐵鋸を執り、火自然に出でて其の體を拼直し、鋸を以て之を解し頭より足に至るまで百千段ならしむ。譬へば木工の諸の板材を解くが如し。是に於て頌して曰く。

守獄の鬼、王の敎を受けて、鐵繩もて身を拼り鋸を以て解す、其の鋸に火然え上下に徹す、人を撲ちて地に著け段段に解す。

守鬼叉斧を以て其の身を斫り、斤鑿幷び行ふ。譬へば木工の材木を斫治し、或は四方にして八角あらしむるが如し。罪人の身を治するも亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

【二七】第二黑繩地獄(Kālasū-tra-n.)。

不淨の器の　瓦盂にして完からざるを以て、膿血・涕唾を盛り、之を服すること水を飲むが如し。貪饕して常に鬪諍す、殃罪の致す所なり。作行是の如き者は　則ち餓鬼道に墮す。

[二四]地獄品第十九

修行して自ら念ずらく、[二五]我が身將に地獄に墮すること無きや。曾て聞く罪人適ゝ共に相見れば、則ち瞋恚を懷いて還つて相害せんと欲す。手爪鋒利なること刀刄の若如く、自然の兵杖・矛戟・弓箭・瓦石なり。相向ふ時に當つて刀戟の聲は破銅の若如く、兵杖碎壞し刀矛交錯するは羅網の若如し。罪人此を見て心に愁憂を懷くと。是に於て頌して曰く。

是輩の諸の罪人は地獄に在つて相害し、意に兵杖を得んと欲すれば、心に應じて皆之を獲。刀刄を持つて相害すること、水羅網の動くが如く、猶ほ夏の日中の熱の如し、刀刄の炎も是くの如し。

或は恐怖あつて自ら覺知せず、又稱怨ありて毒恚を懷き命を相害せんと欲し、此を以て樂と爲す。遂に諍鬪を興して轉ゝ相推撲し還た相傷害す。節節に之を解し頭頸處を異にす。或は其の身を刺して血流るゝこと泉の如く、刀刄體に在りて痛豈に言ふべけんや。刀瘡の處に火、中より出づ。或は身摧碎することゝ譬へば亂風の樹葉を吹き落すが如し。臥して地に在りては身碎けて[二六]塵の如く、須臾の間にして身復た故の如し。是に於て頌して曰く。

髮を挽いて相扠蹋し、展轉して相牽曳す。　罪人會へば共に鬪ひ、苦惱無央數なり。　恐怖更に相加はり、爾の時に當つて大戰す。　譬へば叢樹を拔くが若く、相推壓すること是くの如し。

爾の時罪人須臾にして平復し、涼風四來し吹くこと故の如くならしむ。守獄の鬼、水を人の上に

【※】元、明、宋、宮内省本共に、第四卷の首めとす。
【二四】第十九、地獄品は、八大地獄の相を說く。
【二五】以下八大地獄を列ねて其の相を示す、第一等活地獄(Saṃjīva-niraya)。
【二六】大正本は麈に作るも、元、明、宋本によりて塵と改む。

假使修行して心に輕戲あらば、便ち當に愁感の法を思惟すべし。會ゝ當に死に歸すべきに、未だ度脫を得ず。無常の法にして、歡喜する時に非ず。所有恩愛は會ゝ當に別離すべし。是に於て頌して曰く。

無數の諸の川流、苦邪の汎水を滿たし、未だ死河の法を度らざるに、耗亂にして反つて歡喜す。　無量の恩愛は　久しからずして當に別離すべし。　非常の惡對は　各ゝ罪福に追隨す。

其れ修行者は心に自ら念じて言く、吾れ儻し命終して道德を成ぜず亦道に向はずんば、或は恐らく逆を犯して法教に隨はず、三塗に入つて無底の患を免濟することを得ず、衆邪見に墮す。迷惑無きを得るも復た更に胞胎す。將に積骨は太山の若如く、或は恐らくは斷頭の血は江海の如く、或は涕泣に値へる淚は五河の如く、父母と別れ、妻子無常にして兄弟死亡する憂惱は無量なること無からんとす。是に於て頌して曰く。

倘ほ未だ成道を得ず、死を恐るるの原を斷ぜず當に百千の難を更ぶべく、當に復た胞胎に入るべし。　未だ憂感の根を除かず、衆くの無量の惱に遇ひ、聖道に歸するを得ず、三塗自然に開く。

修行して自ら念じ宿夜恐懼すらく、儻し禽獸非法の處に墮せば、常に害心を懷き轉た命を相奪ひ、羞恥あることなく冥より冥に入る。已に此の患に墮すれば人身に復すること難し。一錢を海に投じ之を求めて得べきとも、已に人身を失はゞ此を得ること難し。是に於て頌して曰く。

貪婬に蓋はれて怒癡冥く、欲杖に驅られて羞慚なし。　以て畜生の雲霧に入り、而して此の苦に墮し人に復すること難し。

行者自ら念ずらく、我が身將に餓鬼に墮すること無きや、曾て聞く其の人瓦器を執持し、盛るに涕唾・膿血及び人の穢吐を以てし、以て飲食と爲し遍行乞匃すと。是に於て頌して曰く。

曰く。

天眼の徹視は　諸の人非人を見て　衆の顏色を視察し　亦心の所念を視、其の意の本元を知る。何に緣つてか此の行を獲るやと。　其れ修道は悉く、懷瞋及び和悅を省す。

譬へば人あり江邊に坐して、水中の物・魚・鼈・黿・鼉及び無央數の異類の蟲を見るが如し。修行も是くの如く衆生の心の所念の善惡を覩ること了了として疑なし。是を神通もて他人の心の所念の善惡を知ると名く。是に於て頌して曰く。

覺眼明了にして心淸淨なり、修行道に因つて斯れを獲、他の心念の思想する所を知ること、猶ほ樹根枝葉を見るが如し。

譬へば賈客の水精の珠を得んと欲して、便ち江海に入れば則ち此の寶を得、幷びに眞珠・金剛・珊瑚・硨磲・馬瑙を獲るが如し。修行も是くの如し。睡眠を棄てて心を專にして明に在けば、則ち天眼を得幷びに天耳神足を獲、自ら己の從來する所を知り、他人の本を見る。是の故に修行して當に覺明を習ふべし。是に於て頌して曰く。

一事を以て江海に入れば　無數の大珍寶を獲るが如く、修行も是くの如く睡眠を除かば、天眼聽飛し本末を識る。　修行斯くの若く志寂定なれば、今吾が宣ぶる所は佛の教の如く、無量の色を見ること天眼を踰え、衆生の心念の是非を覩る。　其の忍辱力は地を踰え、柔軟安和なること水に過ぐ。　志を乘りて堅固なること須彌の如く、人民を越え虛空を超ゆ。深意は江に過ぎ、海に瞋恨なきが如く、其の德能く及ぶもの莫し。　願はくば最勝に稽首せん。　其の心は道を懷ひ、諸天の嗟歎する所なり。　心を執つて一定にし、以て歡喜と爲すに非ず。　彼は調柔等意にして、以て增減する所に非ず。　明德にして輕戲なし。　吾れ願はくは稽首し禮せん。

三二 念往世品第十七

智慧は芽たり善根の元なり、經法は華と成り、德は果と爲り、解脫示現して立つて動かず。今吾れ佛の大樹に歸命し、億百生より善根を殖ゑ、昔無限の世に寂にして梵行し、百千億の本宿命を識り、佛覺意强く心定に歸す。

假使修行して心に自ら念じて言く、吾れ何より來りて人身を致得するやと。天眼を以て視、明心にて徹視す。本生れて人となり若しくは非人に在りと。譬へば人あり一縣邑より復た一縣に至り、前に往反坐起せる處を識るが如し。修行も是くの如し。自ら本生に歷る所の受身を念じ、名・姓・好惡・壽命長短・飲食・被服・皆悉く之を識る。彼に沒して此に生じ、此に終つて彼に生ず、是くの如きの比、無央數に更る所の生死を知る。是を號して本宿命神通を識ると曰ふ。是に於て頌して曰く。

天眼を以て覩るを修行と曰ひ。　無數劫に歷る所の生を知り、皆過去可受の身を見る。　譬へば船に乘つて自ら面を照すが如し。　佛は所生の處を悉く識念す。吾れ諸經を觀て鈔取す。是を號して昔の所更と曰ふと爲す。　慧の心を以て至要を採る。

三三 知人心念品第十八

不可計の哀宣は、衆の趣く所の念を知り、自ら心の所思の是非と定と、放逸と、志の懷く所の至意とを覩、無量の智を解了して、諸の瑕穢を除く。願はくは尊最勝に歸せん。

其れ修行者は天眼を以て、人及び非人の是非・善惡・端正・醜陋を視、心行の所明窈冥を徹視し、瞋恚を喜ぶ者は其の心斯くの如く、志、和悅なる者は當に趣く所なるべしと（知る）。是に於て頌して

【三二】第十七、念往世品は、宿命通を得ることを說く。

【三三】第十八、知人心念品は、修行によりて人の心念の善惡に由つて、生ずべき處を知ることを示す、他心通に當る。

かに神通を得て罣礙なし。　佛は皆普く一切の淨を見、衆人を愍傷するが故に此を說く。終始の根を決して速かに度せしめ、無極の義を以て分別す。

天耳品第十六 【二】

識慧を穀と爲し寂として緣に應じ、罣礙する所なうして正道に順ず。　其れ此の道法輪を轉ずるあり、轉輪大聖族に稽首して、若干の伎樂を察省せば、設ひ悲哀ありとも心は正等にして、諸の天人地獄の聲を聞き、叉手して尊淨性に稽首す。

其れ修行者、適ま天耳を成ずれば便ち徹聽を得て亦煩憒なし。譬へば人あり、地を掘つて藏を求め、本規に一を索むれば幷に餘の藏を得るが如し。行者も是くの如く、本、天耳を求むれば徹聽は踏從し、悉く天上世間の聲を聞く。是に於て頌して曰く。

彼の修行者を計するに、法を興すに善權を以てす。　精勤して天眼を得、天上世間を覩、徹聽自然に生じて、所聞亦限りなし。　人の地に藏を求むれば、自然に餘の寶を得るが如し。

譬へば夜半に衆人眠寐し、一人獨り覺めて七重の樓に上り、寂靜の時に於て、諸音・伎樂・歌舞・啼泣・悲哀・撾鼓の聲を聽省するが如し。修道の所見も亦復た是くの如し。心、本寂靜なれば遙かに地獄の啼號、酸苦を聽き、餓鬼及び畜生・天上・世間の伎樂の音を見聞す。是を天耳神通の證と爲す。是に於て頌して曰く。

夜衆庶皆眠寐して、一人起つて七重の樓に上り、靜心にして一切の人の、妓樂歌舞の音聲を聽くが如し。　其れ修道者も亦是くの如く、天耳もて諸の音聲を徹聞し、其の三界に在る諸の形色を　悉く曉了して、其の語言を知る。　無央數の大經の義より、我れ其の餘を得て甘露を服す。　譬へば人病んで良藥を服するが如く、今世尊の天眼の教を演ぶ。

【二】第十六、天耳品は、修行して天耳通を得ることを說く。

想ひ、手を澡ひ面を盥ぎ四方を瞻視し、夜は星宿を觀て以て心を御し、懈怠を棄捐して臥寐を思はざるべし。若し睡つて止まずんば當に起つて經行すべし。假令不定ならば當に其の坐を移すべし。想にて明を見んと欲せば、心中冥しと雖も三光を思惟して、內外をして明ならしむ。是に於て頌して曰く。

　當に生死の苦を念じ、罪を觀じて四方を覩、外の光影を省視して、內心に照明を求め、睡眠の冥を滅壞すべし。　日の闇を消除するが若く、是くの如く閉目すと雖も、所見は開者を踰ゆ。

其れ修行者は常に明を見んことを思ひ、晝夜異ることなし。大小是非の所趣を分別し、遠行普學して博からざる所なし。思惟して是くの如くならば則ち道眼を得、所見平等にして[一九]遠なく近なく、[二〇]淨居天に及ぶることなし。是に於て頌して曰く。

　眠りを爲すと雖も目は常に開くが如く、禪定の所見は天眼を踰え、普く世間衆生の類を覩、天上に徹達して見ざるものなし。

其れ修行者已に道眼を成ぜば、悉く諸方三惡の處を見る。譬へば霖雨の一旦晴除し、明眼の人ありて山頂に住し、城郭・郡國・縣邑・聚落・人民・樹木・花實・流水・源泉を觀視し、師子・虎・狼・象・馬・羊・鹿及び諸の野獸の行來進止、皆悉く之を見るが如し。是に於て頌して曰く。

　譬へば明鏡及び虛空の如し。　霖雨已に除き日は晴明なるに、淨眼の人ありて高山に住し、上より上を視て見ざるものなく、又城郭及び國邑を觀る。其れ修行者も亦是くの如し、世間及び禽獸、地獄・餓鬼・衆生の處を覩見す。

修行して是くの如く、三千界を覩、人の生死善惡の所趣を見る。是を之れ名けて所達神通と曰ふ。是に於て頌して曰く。

　甘露の無上味ありと雖も、三千世を見る德は彼を踰ゆ。　其れ道を修行して佛教に倚はば、疾

【一九】無有彌延を異本には無遠無近となす、今は之れに由る、
【二〇】淨居天は、色界の第四禪にあり、不還果を得たる聖人の居する所なり、

忍辱品第十三[一六]

設使人ありて行者を撾罵せば、爾の時修道して當に是の觀を作すべし。罵詈すべき所は但だ音聲のみあり。諦かに惟だ之を計して皆空無と爲し、適ゝ起るも卽ち滅す。譬へば文字の其の名各ゝ異るが如く、一一の字を計するに罵聲あることなし。譬へば一盲目の所見なくば、正使百盲も亦覩る所なきが如し。罵も亦此くの如し。一字成ぜずんば正に百千字も亦悉く空無なり。設使父母・家室・親里、共に我を稱譽するとも亦復た皆空なり。當に是の觀を作すべし。譬へば夷狄異音の人の如し、來つて我を罵ると雖も譬へば風響の如く、是の聲は皆空なり。

棄加惡品第十四[一七]

假使行者寂定に坐せば、人來つて撾捶し、刀杖瓦石を以て其の身に加ふとも、當に是の觀を作すべし。名色は皆空なり、捶つ所は捶つべし。悉く所有なし、本何より生じ、誰をか瞋者と爲す、何人に向つて怒らん。我れ宿不善にして此の患を致すを得、設し名色なくんば緣の厄に遭ふものなし。我れ若し瞋もて其の人に報ぜんと欲せば、衆怨甚だ多く悉く報ずべからず、譬へば毒蛇及び百足・蚤・蝨・蚊・虻・蚑・蜂の屬の如し。是れ輩は人を嬈るとも以て報を加ふることなし。假使能く外の諸の憂患を除くとも、安んぞ能く其の內體中の四百四病八十種蟲を辟除せんや。是を以ての故に當に內心を伏して諸の垢穢を滅し、其の志を寂定にすべし。故に修行と謂ふ。

天眼見終始品第十五[一八]

其れ修行者假使睡眠せば、當に無常にして久しからずして死に趣くことを念じ、衆苦生死の惱を

【一六】第十三、忍辱品は、毀譽褒貶皆な空なりと示す。

【一七】第十四、棄加惡品は、他人に害せらるゝとも空なりと諦忍すべきを示す。

【一八】第十五、天眼見始終品、睡眠を戒め心眼を開きて天眼通を得べきことを說く。

れ當に相從ふべしと。身命を貪るを用ての故に親厚を爲すなりと。長者の子の具さに此の賊は怨家たることを知り、窮逼を用ての故に外に於て示現すること親厚なるが若如くも、而も內は疎薄なり、四大の寄りて非常の物たるを知り、四事增減して輒ち安隱なきこと、蛇虺の毒の如く、幻・野馬・水月・山響の如し。身を解すること是くの如く、其れ行道者も亦復た此を解す。五陰を曉知して皆怨賊と爲し、趣かに衣食を以て其の體を將養し危害せざらしむ。夙夜專精なること頭然を救ふが如くし、以て懈廢せずんば道德を成ずるを得、無爲に至り、三界始終の患を度せん。

【一四】伏勝諸根品第十二

其れ修行者婬怒癡薄く、設ひ習塵せず、嬈害する所なくとも、未だ道德を成ぜず、聖諦を見るに非ずして自ら獲たりと謂ふ。是くの如き行者は自ら心意を誡むべし。之を放つて色聲香味細滑の念に在き、五陰に著すれば所作未だ辦ぜず。設し心五陰の蓋に隨はずんば則ち得道を知る。若し其の心亂れて諸の情欲に隨はば、卽ち還つて恐懼して當に更に精進すべし。牧牛者の牛を澤に牧するが如し。其の牛犇突して他の禾穀を践む。牧牛者其の主之を覺らんことを恐怖して、牽ひ將つて家に歸り杖を以て捶治す。明日復た出でゝ還た牧上に在り。陽に視ざるが如くして、復た他の禾稼を犯すや不やを知る。時に牛心に念ずらく、牧者見ず、復た他の苗を食はんと。其の主之を見て便ち復た過榜す。牛後に恐畏して敢へて復た犯さず。行者も是くの如く自ら五根を誡めて、情欲に隨はずんば則ち道成ずるを知る。若し【一五】六衰に從はば卽ち還つて自ら制し、三塗の苦・生死の難を觀、晝夜精勤して前に勝ること萬倍せば、未だ獲ざる所の者は當に成就せしむべし。已に成就を得ば放逸ならざらしむ。

【一四】第十二、伏勝諸根品は、眼・耳・鼻・舌・身の五根を制御して、色・聲・香・味・觸の五境に馳せざらしむることを示す。

【一五】六衰とは、色・聲・香・味・觸・法の六塵を云ふ、人の本性を衰滅せしむるが故に名づく。

と欲す、況んや乃ち獨り食はしめんや。今我れ自在ならば則ち當に之に逼つて獨り水をも飲ましめざるべし、何に況んや獨り食はしめんやと。其の長者の子は少小より驕樂にして、須臾も左右に行かざるに忍びず。舍後に至らんと欲して、便ち賊に報じて言く、共に厠上に至らんと。其の賊報へて言く、卿に至る所ありとも吾は行くこと能はずと。時に長者の子逼急窮極し、其の賊に謂つて言く、(吾は)子を過つことなし。子、横に吾を牽いて刑獄に閉在す、今(吾れ)小起を欲するに反つて相從はざるや。設し共に繫がれずんば終に相報ぜず。吾れ假し相犯さば卿は便ち之を說け。以て當に過を省して其の罪を謝すべしと。時に賊答へて曰く、子は實に過なし、吾れ横に相牽く、卿には眷屬多く、自ら罪を免れんと欲せば考治せられず。飲食を得ることを蒙る。故に相枉ぐるのみ、仁に餉ありて來る。而るに反つて獨り食ひ、求むるも相分たず、故に相從はずと。　時に長者の子則ち賊に報へて言く、子の恨む所を解け、今より以往は終に相失せず、若し餉あらば先づ當に子を飯せしむべし、然る後自ら食し、曼く我が命を存せん、願はくは、舍後に到つて身氣を通ぜしめよと。賊乃ち之に隨ふ。彼日餉來り便ち婢使に勅すらく、所持の飯來らば先に親厚に奉じ、所食の餘のみ乃ち我に給せよと。時に婢は敎を奉じて輒ち其の言の如くす。使人還歸し具さに長者に啓す。長者之を聞いて心に恚怒を懷き、明日獄に詣つて其の子に謂つて言く、卿は豪族に生じ、反つて逆賊惡人と與に事に從ひ、而して與に親厚して都て覺知せず、此は横に汝を牽いて牢獄に閉在すと。其の子報へて言く、父の言ふ所は是なり。此の人を敬して以て親厚を爲さず、具に是れ賊たるを知るのみ。我れ小行を欲して逼るも相從はず、身重く腹脹れ眼反し、耳聾し、頭痛し背裂け脅肋拔けんと欲し、胸懷に氣滿ち喘息斷ぜんと欲し、心意煩亂し迷ひて自覺せず、諸節解せんと欲し骨體疼痛し、命窮絕せんと欲す。惡對上に在り、汗出で氣を短くす。而るに賊は我に語りて、卿能く吾に隨ふこと病の醫に從ふが如くせば、爾らば乃ち可なるのみ。先づ以て我に飯し、然る後自ら食はゞ、吾

飛鳥日日に稍ゝ減ず。中に一鳥あり、心に自ら念じて言く、肥えたる者は先に死す。若し吾れ當に肥ゆべくんば亦死すること前の如し。設し食はずんば便ち當に餓死すべし。今當に食を節して身をして肥えざらしめ、亦羸らしむること莫るべし。身をして輕くして便ち出入無礙ならしめ、宰人に烹害せらるる所と爲らず、羽翼漸漸に生長するを得べし。若し籠より出づれば便ち飛逝して意の所至に從ふべしと。修行道者も亦計すること是くの如し。食趣かに身を安んじ體をして重からざらしむ。食適輕なれば便ち睡眠を少くし、坐起・經行[三]・喘息、安隱にして大小便を尠くす。身は行に依つて婬怒癡薄し。其れ修行者は當に是の觀を作すべし。吾れ身を貪らず諸の情欲を除く。此の身は要に非ず、骨鎖相支ふ。今此の身中但だ不淨を盛り堅固あることなし。譬へば怨家の無益なる羅網の常に怨賊を懷いて親友を傷け、當に之に消息し供養奉事するが如し。譬へば王者の當に以て如何に佛教を遵承し坐起經行災患なからしむべくとも、常に汚露を觀じ具さに多穢を知り、其の命を將養し行道を趣得するが如し。親屬あれば棄捨すべからざるが如く、身も亦是くの如し。沐浴し飯食し衣被もて形を蓋ふこと、一子を愛するが如く常に之を將護し、寒溫飢渴の苦あらしめず、蚊・虻・蚤・蝨の齧む所と爲さしめず。

逆賊ありて牢獄に收閉さるゝが如し。獄吏考治すること若干榜にして、卿は前後誰の物を劫盜を爲し、家居所在何の所藏ん盜み、誰と同伴し魁師黨部たるやと。五毒もて之を治し氣絕して復た蘇る。卽ち自ら思惟すらく、何の方便を以て榜笞を脫するを得んやと。心便ち開解して獄吏に對へて首す。遠計の某國大長者の子名けて禁戒と曰ふ。前後偸む所は皆彼の所に著く、其の家に居止し共に竊盜を行ふ、是れ吾が伴侶なりと。獄吏之を聞いて長者の子を收し前賊と共に、同一牢中にて俱に鐵絆に繫ぐ。時に長者の子に家より餉の來るあり。便ち自ら獨り食ひ、分つて賊に與へず。賊大いに瞋怒し目を張り齒を嚙んで、汗出で嘆息して惡意を興して長者の子をして其の命を濟はざらしめん

【三】經行(Caṅkramaṇa)とは、坐禪の間などに、一定の地を往來するを云ふ。

てて行地に專にすべし。是に於て頌して曰く。

髮・毛・爪・骨・肉、及び諸の像・色形、衆來つて心法を惑はす。五陰の亂す所、無常・苦・不安にして、無我・不淨なり。身は空丘舍の如く、明者の觀ること是くの如し。

[一〇]曉了食品第十一

佛は巴質樹に在り、天帝は百味を奉ず。[二]又舍衞城に在り、[三]波斯匿供養し、比蘭若飯を設く。麥飯甘味を離るゝも、皆等意にして之を受け、稽首して所著なし。此の飯を食し已ると雖も、著するに非ず、以て色とせず、亦憍慢を造らず、諸の貢高を棄捐す。所在に供養を受け、大曠路を越ゆるが如し、以て甘美と爲さず。是の故に稽首し禮す。

爾の時修行して當に飯食を觀ずべし。設し百種の味及穢麥飯、腹中に在れば等しくして異あることなし。食を擧げて口に著け、嚼んで唾と合し吐と適同す。若し生藏に入らば身火之を煮、體水之を爛る。風吹いて展轉として稍稍に消化し熟藏に墮し、堅きは大便と爲り、濕へるは小便と爲り、沫は涕唾と爲る。藏中の要味は潤を以て體を成し、此の要衆味、諸脈に流布し、然る後髮・毛・爪・齒・骨・髓・血・肉・肪・膏・精氣・頭腦の屬を長養す。是れ外の四大の內の五根を養ふなり。諸根は力を得、心法に長じて婬怒癡を起す。是を知らんと欲する者は、揣食の本、是に由つて起る。是に於て頌して曰く。

無央數の諸の上味を計するに、腹中に墮在すれば異ることなし。體に於て變化し等しく不淨なり。故に行道者は食を貪らず。

當に飯食すべしと雖も肥えんことを求めず、趣かに命を支へんと欲す。譬へば大官の諸の飛鳥を捕へ皆其の翅を剪り籠中に閉著して、日に肥えたる者を擇んで以て官厨に給するが如し。時に諸の

【一〇】第十一、曉了食品は、食を貪ることの道行に益なきことを示す。
【二】舍衞城(Śrāvastī)は、國名。
【三】波斯匿(Prasenajit)は、舍衞國の王。

と爲し、還た續けて故の如く差錯せざらしむるが如く、是の事甚だ難からずや、答へて曰く、甚だ難し甚だ難し。幻化諸藥神呪を以て髪を續けて故の如くすべし。泥洹の道は此の事を以て成立せざるなり。道證を致すこと能はざる者と雖も、當に方便あるべし。是に於て頌して曰く。

常に健にして精進し脫門に向ひ、此の難くして復た難きことを覺了せんと欲せば、勤力勸樂して退なきこと、深く地を穿つて泉水を得るが如くすべし。

當に是の觀を作すべし、速疾に成就するもの泥洹に如くは莫し、他より求めず、自ら心に因つて致すが故なり。他人より得るは乃ち難しと爲すのみ、己が勤めに由つて獲るは何ぞ難き所あらんやと。當に斯の計を作し、唯だ諦觀を以て其の心を誘進すべし。小兒を誘つて之を呼び前に至り、來つて手の物を取つて之を食噉せしむるに、小兒來至し一指を擘くも所得なきが如し。世人は是くの如く所見顚倒す、無常を常と謂ひ、苦を謂ひて樂と爲す。非身を有身と謂ひ、空を謂ひて實と爲す。四顚倒を捨てて本無觀を作す。爾らば乃ち佛の敎誡に順ずると爲す。是に於て頌して曰く。

人、本無を曉らずして、常に樂と計し淨と謂ふ。　譬へば捉捲を以て、用以て小兒を誘ふが如し。　是の人の顚倒して　吾我の想あるに於て、當に爲に光曜を現ずること、冥中に燈を燃すが如くすべし。

吾に頭髮あり、常久なる能はず、亦淨潔に非ず、安からず我なし。是を以て之を觀るに一切皆然なり。其の心を勸發すること、明眼の人の炬を執り行き空室に入つて之を觀るに、人無く亦覩る所無きが如く、審諦に見る者は亦復た是くの如し。色の本を察して、無常・苦・無吾・非身なるを見る。虛妄に見る者は反つて自縛す。空觀を解するは何の難きこと有らんや。現に見聞すべし(卽ち)道迹[八]を得たる者・往還・不還・及び無所著、平等覺[九]を得たる。此れ等は斯れ人なり、吾も亦是れ人なり。此れ等成道す。我が身何故に獨り獲ざらんや。修行道者は心を勸むること是くの如く、四顚倒を捨

【八】道迹は、預流の古譯、Srota-āpanna. 往還は一來の古譯、Sakṛdāgāmi. 不還――、Anāgāmi'n. 無所著は羅漢、Arhan. 以上は聲聞の四果なり。

【九】平等覺(Saṁmasaṁbudha)を得たる者とは、佛のこと。

如く。若し人、學道を欲せば、心を執つて當に是くの如くなるべし。意に諸の徳と明とを懷き、皆一切の瑕を除き、若干の色欲、再び怒癡を興さば、志ありて放逸ならず、寂滅にして自ら制す。人身に病疾あれば、醫藥以て之を除く。心の疾も亦是の如く、四意止もて之を除く。

心堅强なる者は志能く是くの如し。則ち指爪を以て雪山を壞し、蓮華根を以て金山を鑽穿す。則ち鋸を以て須彌寶山を斷ず、其れ信あること無くんば精進すること能はず。諛諂を懷いて放逸喜忘ならば、世に在ること久しと雖も終に婬怒癡の垢を除くこと能はず。信・精進・質直・智慧ありて、其の心堅强ならば、亦能く山を吹いて動搖せしむ。何に況んや婬怒癡を除くをや。故に修行者、道徳を成ぜんと欲せば、信・精進・智慧・朴直を爲し、其の心を調御して專ら行地に在くべし。是に於て頌して曰く。

直・信にして精進、智慧ありて諛諂なし。是の五徳は瑕を除き、心の無數の穢を離す。無量の經を採解して、自ら斯れ佛教なりと覺し、但だ其の要言を取りて義の無量を分別す。

離顚倒品第十[六]

功徳は覺に住して高きこと巍巍たり。猶ほ學術の靜居に依るが如し。智慧の川流れて善く寶形なり。願はくは大山王を稽首禮せん。

天上より來下して、趣を知つて惑はず。佛は生ずるや胞胎ならず、入らず亦出でず。諸の苦惱を更ず。著せず顚倒せず、徳重くして所著なし。歸命して生死を度せん。

修行道者或は懈怠を懷きて、謂く法は微妙にして曉り難く了じ難く分別すべからず。當に苦[七]本を識つて諸習を斷除し、盡滅を證して道術を修念すべし。譬へば人あり一髮を取つて破して百分

【六】第十離顚倒品は、常・樂・我・淨の四顚倒を離れて空無我に達し、涅槃に至るべきことを説く。

【七】苦本、諸習、盡滅、道術は苦集滅道の四諦のこと。

彼の時大雲は焰掣電し、霹靂落墮し孔雀皆鳴く。天、便ち雨を放ち諸雹を墮す。此の變ありと雖も其の人聞かず。所以者何となれば、專ら油鉢を念ずるが故なり。是に於て頌して曰く。

其の放逸なる象の時、猶ほ大雲の興るが如し。　雹を墮し火風を失し、樹を拔き屋舍を壞す。
其の人、何が善なるや誰が惡を爲すやを覩見せず。　風雲の起るゝ覺せず、但だ滿鉢の油を觀る。

爾の時其の人滿鉢の油を擎げて、彼の園觀に至り一滴だも墮さず。諸兵臣吏悉く王宮に還つて、具に王の爲に更し所の衆難と、而も(その)人專心に鉢を擎げて動ぜず、一滴をも棄てずして園觀に至ることを得たるとを說く。王、其の言を聞いて則ち歎じて曰く、此れ人の及び難きところ、人中の雄なり。親屬と及び玉女とを顧みず、巨象水火の患・雷電・霹靂を憹れず。吾れ雷聲を聞けば愕然として怖憹し、啓白すること有りと雖も、其の言を省みず、或は心裂けて終に亡する者あり。或は駒を懷いて胎を傷くる者あり。人民の立てる所を悉く自覺せず、衆難に遇ふと雖も其の心移らず。是くの如きの人は辨ぜざる所なし。心强きこと斯くの如く終に難きを恐れず。地獄の王拷するも能く金剛を食ふと。其の王歡喜し立てて大臣と爲す。是に於て頌して曰く。

親族涕泣し及び醉象暴亂するを見、諸の恐難に遭ふと雖も、其の心移易せず、王、(此の)人の
此くの如く、心堅く定まりて轉ぜざるを覩て、親愛して弘敬し、之を立てて大臣と爲す。

爾の時正士、其の心堅固にして、善惡及び諸の恐難に遭ふと雖も、志、轉移せず、死罪を脫するを得たり。既に自ら豪貴にして壽老長生す。修行道者、心を御すること是くの如く、諸患及び婬怒癡の來つて諸根を亂すこと有りと雖も、心を護つて隨はず意を攝して、第一に其の內、[五]體を觀じ外、他の身を察す。痛痒・心・法も亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

人の油鉢を擎ぐるに、動ぜずして所棄なく、妙慧にして意は海の如く、專心に油器を擎ぐるが

【五】體、痛痒、心、法は身、受、心、法の四念處のことなり。

し。　火熾にして人の故に燃さんと欲するが如し。

火、城を焼く時、諸の蜂は皆出でて毒を放ちて人を齧む。觀者痛を得て驚怪して馳走し。男女大小ともに面色變惡し、頭を亂し衣は解け寶飾は脱落す。烟の爲に熏ぜられて眼瞳より涙出づ。遙かに火光を見て心に怖懅を懷き、湊く所を知らず。展轉して、父子・兄弟・妻息・奴婢を相呼び更に相敎へて言く、火を避け水を離れよ、泥坑に墮すること莫れ、爾らば乃ち安隱なりと。是に於て頌して曰く。

　愁憂を心に懷き、自ら覺せず。家室親屬及僕從、諸の象馬に乘り悲哀して出で、大火あり、當に避捨すべしと言ふ。

爾の時官兵悉く來つて火を滅す。其の人は專精一心にして鉢を擎げ、一滴だも墮さず、失火と及び滅時とを覺せず。所以者何となれば、心を秉り意を專にして他念なきが故なり。是に於て頌して曰く。

　衆人の迷惑するあり。鳥の火に遇つて飛ぶが如し。其の火殿舍を焼き、烟出でゝ浮雲の如し。頭亂れて驚怖し、烟火を避けて馳走するも、一心を油鉢に在きて、火の起滅を覺せず。

是の時五色の雲起り天大いに雷電す。是に於て頌して曰く。

　既に大霧を興して非時に雨ふり、風起つて雲を吹き純ら陰ならしむ。虛空普遍に青天なく、猶ほ暴象の群のごとく、雲は是くの如し。

爾の時に亂風起りて地を吹いて塵を興し、沙礫・瓦石を王路に塡め樹を拔き枝を折り諸の華實を落す。是に於て頌して曰く。

　風起つて塵を揚ぐること周普く、雲を興し水を載せて遍からざるなし。暴風ありて忽ち冥くして相見ず、雷電倶に降りて驚かざるなし。

彼の時人ありて化象の呪を曉り、心に自ら念じて言く、我が自ら學ぶ所の調象の法、善惡の儀凡そ八百あり。吾れ是の象を觀るに此に一事なし。吾れ今當に何種より出づるかを察すべし。上種に四あり。是れ中種なりと爲すや、下種なりや、と。之を察知せるを以て卽ち大聲を擧げて神呪を誦す、是に於て頌して曰く。

天王金剛を授け、吾に微妙の語あり。　能く諸の貢高を除き、羸劣をして能く强ならしむ。

彼の人卽時に聲を擧げて稱へて曰く、諸の覺明者は自大あることなく亦熱を興さず、恩愛を棄除し彼を承けて法を奉じて修行す、誠信の致す所なり。象よ貢高を捐て、心を伏して安からしめよと。此に往古先聖の二偈を說いて言く。

婬泆及び怒・癡、此は世の三大橋なり。[四]　成道せば諸垢なく、衆熱爲に以て消ゆ。　彼の至誠の法を用つて、修行するも亦是くの如し。　大意洪象王、惑を除いて貢高を捨てよ。

爾の時彼の象此の正敎を聞いて、卽ち自大を捐てて、其の心を降伏し、便ち本道に順つて還つて象厩に至り、衆人を犯さず嬈害する所なし。其の鉢を擎ぐる人は象の來るを省みず亦還るを覺せず。所以者何となれば、專心に死を懼れて他の觀念なきが故なり。是に於て頌して曰く、

象の暴雨の如きを見るとも、心は未だ曾て亂れず、其の雨止み已ると雖も、虛空は亦悅ばず。　其の人も亦是くの如し、象の往還するを省みず。　心を執つて油鉢を擎ぐること、藏寶を忘れざるが如し。

爾の時觀者は擾攘馳散して東西に走るが故に、城中に火を失して諸の宮殿及び衆くの寶舍・樓閣・高臺の妙を現じ巍巍として展轉連及するを燒く。譬へば大山を見ざる者なきが如く、烟皆周遍して火尙ほ盡く徹す。是に於て頌して曰く。

其の城は豐樂嚴正にして好く、宮殿屋舍は甚だ寬妙なり。　而して烟普く熏じて達せざる莫

【四】大正本は誠道とあれど、三本に從つて成道となす。

大象力強くして甚だ當り難し、其の身より血流れて泉源の若く、地を踏み塵を興し而して口を張る。衆人を危害せんと欲するが如し。

其の象是くの如く、觀者を恐怖せしめ其をして馳散せしむ。兵衆を破壞し諸象は犇逝し、一切の覩者は怖死せんと欲す。能く大樹を拔き群生を踐害す。杖痛を得と雖も畏難する所なし。是に於て頌して曰く。

衆及び群象を壞り、人を恐怖せしめ或は死せしむ。　諸の舍宅を排撥し、犇走して御を畏れず。　名遠近に聞え、剛强以て德と爲す。　憍慢錄する所なく、高く望むに忍びず。

爾の時街道市里の肆に坐せる諸の賣買者は、皆懅れて物を收め蓋藏して門を閉ぢ、屋舍を壞さるるを畏れて人悉く避走す。又象師を殺して制御あることなし。瞋惑轉た甚だしく道中の象・馬・牛・羊・猪・犢の屬を蹈殺し、諸の車乘を碎いて星散狼藉す。是に於て頌して曰く。

諸の肆に坐する者は皆蓋藏す。　人畜を傷害し車乘を碎く。　是くの如きを覩見して門戶を閉づ。　狼藉すること賊の大營を壞するが如し。

或は人見て振を懷き恐怖して敢へて動搖せざるあり。或は稱怨呼嗟して淚下るあり。又迷惑して自ら覺知せず、未だ衣を著けず之を曳いて走るあり。復た迷誤して東西を識らざるあり。或は馳走すること風の雲を吹くが如く至る所を知らざるあり。中には惶懅して腹を以て地を拍つあり。又人窮逼し弓を張り箭を安じて之を射んと欲し、或は刀刃を把つて意に前んで格せんと欲し、中には色を失ひ恍惚として妄語するあり。或は瞋を懷いて其の眼正赤なるあり、又屛住して遙に覩て歡喜するあり。兵仗を執ると雖も加施すること能はず。是に於て頌して曰く。

斯に於て迷つて怖懅し、亦悲涕するあり。　或は愕いて所難なく、又兵仗を執るあり。　愁憒して地に躄する者、邈絕して自ら知らず。　是の不安隱を獲るは、皆醉象を見るに由る。

て獨り明らかなるが如し。色は蓮華の如く御道を行き像貌巍巍として姿色人に踰え、譬ふるに玉女の如く、又忉利天王の后の如し。字を護利と曰ひ端正姝好にして、諸天人民敬重せざるなし。今に於て斯の女の昭昭たること是くの如し。八種の舞を能くし音聲清和にして聞く者皆喜ぶ。是に於て頌して曰く。

擧動而も安詳に、歌舞は法を越えず。其の心歡喜を懷き、一切の人を感動せしむ。歌頌の聲は則ち悲しく、其身は逶迤するに、疾からず又遲からず、被服順にして正齊なり。七種の微妙の音、奇述五十あり。三處而も清淨にして、宮商の節は相和し、身は頭より足に至るまで、寶瓔珞を莊嚴す。語言の美雅なること、猶ほ甘露の降るが若し。

爾の時其の人一心に鉢を擎げて、志動轉せず亦察視せず。觀る者皆言く、寧ろ使し今日此の女の顏を見ば身を終るも恨まじ、久存して觀ざる者に勝ると。彼の時其の人此の語を聞くと雖も、專精に鉢を擎げて其の言を聽かず。是に於て頌して曰く。

巧便にして安詳に、其の舞最も巧妙なり。一切の人貪樂す、譬へば魔の后の如し。能く離欲者をも動かす、何に況んや凡夫に於てをや。（此の女は）其の人の邊を來往するも、（其の人）鉢を擎げて心傾かず。

爾の時に當り大醉象あり、放逸にして犇走し、御道に入る。衆人相謂ふ、今醉象來る、吾等を踏蹴して橫死せしめん。此れ魑魅化して象形を形すと爲す。多く危害する所男女を避けず、身に瘡痍を生じて其の身麁澁なり。譬へば大髀より毒氣下流するが若し。舌赤きこと血の如く、其の腹は地に委し、口脣は垂れ行步縱橫にして省錄する所なし、人血體に塗れ、獨遊無難・進退自在なること猶ほ國王の若し。遙かに視れば山の如く、暴鳴哮吼すること譬へば雷聲の如く、而して其の鼻を擎げて瞋恚忿怒すと。是に於て頌して曰く。

其の人は心に念ずらく、吾れ今定んで死すること復た疑あることなし。設し能く鉢を擎げて油をして墮さらしめ、彼の園の所に到らば、爾らば乃ち活くるのみ。當に專計を作すべし。若し是非を見て轉移せず、唯だ油鉢を念じて志し餘に在らずんば然る後度るべきのみと。是に於て其の人、安行徐歩す。時に諸の臣兵及び衆くの觀人、無數百千隨つて之を視ること、雲の興起して太山を圍遶するが如し。是に於て頌して曰く。

其の人鉢を擎げて心堅强なり、道に若干の諸の觀者を見る、衆人圍遶して之に隨ふ、譬へば江海の大雲を興すが如し。

爾して其の人鉢を擎ぐるの時に當つて音聲普く流れ聞知せざるもの莫し。無央數の人皆來つて集會す。衆人皆言ふ、此の人の衣・形體・擧動を觀よ、定んで是れ死囚なりと。斯の消息乃ち其の家に至れば、父母宗族皆共に之を聞き、悉く奔走して來り。彼の子の所に到つて號哭悲哀す。其の人專心にして二親・兄弟・妻子及び諸の親屬を顧みず、心は油鉢に在りて他の念なし、是に於て頌して曰く。

其の子啼泣して涙は泉の如く、若干種の[三]音もて父を嗟嘆するも心に怖懅を懷いて親を省みず、專精に志を秉りて鉢を持す。

衆人論說し相稱歎せしむ。是くの如くすること再三。時に一國の人普く來り集會し、觀る者擾攘・喚呼・震動し、馳せ至つて相逐ひ、地に蹙して復た起つ。轉じて相蹈躡し間、相容れざるも、其の人は心端しくして衆庶を見ず。是に於て頌して曰く。

衆人叫喚して休息せず、前後相逐うて間を容れず。　而も油鉢を擎げて都て觀ず、雹の空に雨るも傷くる所なきが如し。

觀者復た言く、女人の來るあり、端正姝好にして威耀光顏一國に雙びなし。月の盛滿して星中に

【三】大正本は泣哭嘆父とあれども今は三本によりて音嗟嘆父と改む。

卷の第三

勸意品第九

修行道地は、何の方便を以て自ら其の心を正さんや。吾れ曾つて之を聞く、昔國王あり、一國明智の人を選擇して以て輔臣と爲す。爾の時國王は權方便無量の慧を設けて、一人の聰明博達にして其の志、弘雅に威ありて暴ならず名德具足せるを選び得たり。王之を試みんと欲し、何如にしてか知らんと欲す。故に重罪を以て此の人に加へんと欲し、臣吏に勅告して、鉢に油を盛り滿たして之を擎げしめ、北門より來つて南門に至り、城を去ること二十里、園を調戲と名く、將つて彼に到らしむ。設し(彼の)人油を持して一滴を墮さば、便ち其の頭を級る、須らく啓問すべからずと。是に於て頌して曰く。

假使其の人戲園に到り　吾が敎を承けて油を棄てずんば、當に其の人を敬すること我が身の如くすべし。　中道に油を棄つれば便ち頭を級らん。

爾の時群臣は王の重敎を受けて、鉢に油を盛り滿たし以て其の人に與ふ。(其の人)兩手もて之を擎げて甚だ大いに愁憂し、則ち自ら念じて言く、其れ油器に滿ち、城里に人多く路を行き、車・馬・觀者は道を塡むと。譬へば水定まるも風之を吹いて其の水波揚るが如く、(其の)人も亦是くの如く、心安隱ならず。退いて自ら念じて言く、一人として我を勸勉して恐懼すること莫れと言ふもの有ることなし。是の器の油を擎げて七步を至るすら尙を詣るべからず、況んや里數あるをやと。此の人憂憒して湊く所を知らず、心自ら懅を懷く。是に於て頌して曰く。

覩人・象・馬及び車乘あり。大風水を吹く、心も此くの如し。　志し怖懅を懷き達せざるを懼る　安んぞ能く究竟して此の事を了せんや。

【一】第九勸意品は、四念處を以て心を攝し、信、精進、智慧等を以て三毒の爲に亂されざることを勸む。

【二】此の油鉢の譬話は大般涅槃經南本第二十二卷にも記す。

其れ身心倶に定にして、内外放逸ならず、寂然として跏趺坐すること、柱の定まりて傾き難きが如し。生死の諦を見るに、水の岸に樹を漂はすが如し。身心にして相應せば、疾かに道を成じ果を得ん。

修行道地にして、道に專精にして動轉せず、是くの如く寂滅ならば速かに泥洹に至らん。是に於て頌して曰く。

若干の要義を講說すること、乳石蜜を和して之を食ふが如し。其れ諛諂なくして能く法を承くれば、則ち佛教を以て自ら調順せん。

の如し。 大道を解する能はず、正眞の慧に至らず、設使道に入らずんば、分別して說く能はず、則ち慧を解せず、義なく了ならず。 盲の盲を御せんと欲して、所趣を致すこと能はざるが如し。 義なく亦慧なきは、之を譬ふれば亦其れ然なり。

[46]其れ修行道者は計するに三品あり。一に曰く或は身は道を行ふも心隨はず。二に曰く或は心は道を行ふも身從はず。三に曰く修道するに身心俱に行ふなり。何をか身行ふも心隨はずと謂ふ。假使行者[47]結跏趺坐し、正直端心にして、譬へば柱樹の未だ曾つて動搖せざるが如し。而も此の相を現ずるも內心は流逸にして、色・聲・香・味・[48]細滑の念、所更不更に普く之を求め、其の心放逸にして自在を得ず。譬へば死屍を塚墓に捐在するに、虎・狼・禽獸・飛鳥・狗・犬・狢爭つて之を食ふが如し。身定にして內亂るゝも亦猶ほ其れ然なり。斯を道德地を修行する者の身定にして心亂ると爲す。是に於て頌して曰く。

結跏趺端坐して、動かざること太山の如きも、其の心內は迷散し、情は猶ほ象の淵に墮せるが如し。 是くの如き修行者は、身定にして心亂る。 譬へば樹の狂花は、果を成ぜずして落つるが若し。

何をか修行道地者の心は道に在りて身從はずと謂ふ。身端坐せずして[49]四意止を成ず。是の時心定にして身は安からず。是に於て頌して曰く。

假使心性自ら調和し、四意止に住して他相なくんば、是の時則ち四意止と名け、身は不定なりと雖も心は亂れず。

修行道地にして、何をか身心俱に定なる者と謂ふ。身は坐して端正に、心は放逸ならず。內根皆寂にして亦外に走つて諸の因緣に隨はず。爾の時に當つて身心端定にして都て不可動なり。此を以て之を知る、身心等定なりと。是に於て頌して曰く。

【四六】身の定と心の定とに就いて三假を分つ。

【四七】結跏趺坐は、左右の趺(足背)を組み合はして左右の䏶の上に置きて坐する坐法にして、坐禪の正式の型なり、左右各ゝ一方づゝなるを半跏趺坐と云ふ。

【四八】細滑、更は共に觸(Spraṣṭavya)—古譯。

【四九】四意止は、四念處のこと。

想・諸穢を除く。是を以ての故に、行遂に長成し得道に至らん。是に於て頌して曰く。

其れ樹木曲戻にして、邪出し順生ならずば、荊棘諸の瑕穢は、悉く落し治して[四二]正ならしむるに、若干の方便を以て、修理して乃ち成ずるを得。　修行して法樹を治するに、經を奉ずることも亦是くの如し。　諸の婬怒癡を除き、師の百千の教を受け、諸の瑕穢を滅去すること、園師の樹を修するが如し。

[四三]法師の經を說くに、察するに四事を以てす。何をか謂ひて四と爲す。一に曰く博學にして至道を得。二に曰く懷き來るに道を以てするも、其の學問に於ては論議すること能はず。三に曰く博學なれども道德未だ成就するを得ず。四に曰く知なく道なし。復た四法あり。一に曰く初め法師に由り其の啓受に從つて義を知り法を解す。二に曰く其の義を解すと雖も微妙なること能はず。三に曰く淺法を分別すれども深きに至る能はず。四に曰く其の義を知らず、亦曉了せずして、是くの如く學法し、習ふ所に唐しく苦しむ。譬へば兩人倶に泅を曉らずして深水中に墮し、相免濟せんと欲して反つて更に溺死するが如し。盲の盲を牽いて至る所あらんと欲し、中道に迷惑し竟に達する能はざるが如し。義を知らざる者は亦慧を曉らず。而して說法せんと欲し救ふ所あらんと欲するも亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

譬へば人の博學にして、衆善無央數にして、已に[四四]度無極を得たるが如し。　若し人大海を越ゆるに、善く[四五]淨如諦に入るも、智慧あることなくんば、但だ其の要を取るべく、深義を獲ること能はず。　若し入道を習ふ者は、隨順して律に違はず、能く教を敬受するを以て、是くの如く反復あり。　譬へば尊者に近づけば、必らず當に大利を獲べきが如し。　其れ修行道を學すれば、所求の義必らず進む。　但だ解して進むも、其の義は微妙なること能はず。　人の空糞を食して、飯具あることなきが如し。　師に從ふて義を諮受して、妙を了せざることも是く

【四二】大正本は政、今は三本によって正となす。

【四三】修行者が法師の說を聞きて領解する程度に四種の差あることを示す。

【四四】度無極とは、波羅蜜多(Paramita)の古譯にして、新譯にては到彼岸に云ふ。

【四五】原本は若人淨如諦とあれど三本に從つて善入淨如諦となす。

此の悪道を度せんことを願ひ、其の冥を脱するを得んと欲せば、當に十二緣を觀ずべし。

設し婬怒多ければ、當に二事を行ずべし。(乃ち)其の不淨を觀じ又慈心を奉ず。若し婬癡多ければ爲に二事を講ず。(乃ち)空無及び慈なり。設し怒癡盛なれば爲に二事を說く。(乃ち)導くに慈心を以てし、幷に癡本を了ず。是に於て頌して曰く。

慈を行じ、不淨を觀じて、婬怒癡を攻治し、[三九]教色の諸愚者は、十二緣明かならず、若し人瞋恚盛に及び癡にして甚だ[四〇] 陰冥ならば當に爲に慈心と、十二因緣の本とを講ずべし。

若し口婬にして心欲ある者には、爲に無常空寂の義を說く。心怒り口恚なれば唯だ慈仁を講ずるなり。口癡にして心冥なれば十二緣を講ず。其の餘の四種は衆病備具有す。一には口婬にして心に三毒を懷く。二には口怒にして婬恚癡具はる。三には口愚にして內に三垢を懷く。四には人あり淳ら三毒を懷く。其れ解法師は當に此の輩の爲に說法教化し、其をして寂然として因緣の本を觀ぜしむべし。所以者何となれば、是れ輩の種類の塵勞は淳厚ふして、諸の罪殃を積んで自ら纏裹す。現法に聖諦を見ずと爲すと雖も、唯だ當に之をして諷誦せしめ勸進すべし。是に緣るが故に專ら誦務に在りて塵勞轉た薄し。道を獲ずと雖も上天を得べし。是に於て頌して曰く。

其れ犯婬を行ずるありて、心、瞋恚癡なるには、當に經を諷誦せしめ、及び勸めて福を爲さしむべし。 塵勞興盛なりと雖も、是に緣つて罪蓋を除き、斯の方便に因つて、然る後に天に生ずるを得ん。

譬へば人あり、樹園を修治するに、地高ければ之を下し、坵墟は之を平にし、漑灌時を以てし、荊棘を拔き去り、穢草薫葦、邪生し、諸曲橫出して、理ならざるは皆之を落治して垣外に棄著し、其をして順好ならしめ、樹木無礙にして根生じ[四一] 葉茂り、皆悉く之を護つて折傷せざらしむ、是を以ての故に、樹木轉た大にして花實興盛するが如し。其れ修行者は法師の教を受け、婬怒癡・欲

【三九】 教色諸愚者、十二因緣不明。

【四〇】 大正本は除とあれど、三本に從つて陰となす。

【四一】 大正本は滋となす、今は三本に從つて葉に改む。

爲に法言を講ぜん。欲を習ふこと多き者は地獄・餓鬼の中に墮す。然る後出づるを得るも復た婬鳥となる。（乃ち）鷄鵠・青雀・及び鴿・鴛鴦・鶉・鷲・孔雀・野人・獼猴なり。設し還た人と作るも多婬にして放逸・輕擧・卒暴なり。仁、當に此を察すべし。人身に曼及して、罪垢惡露不淨を觀知し、婬欲を習ふこと莫れ。是に於て頌して曰く。

其れ多く婬色を習はば、憍慢にして速に〔三七〕自ら燒く。人若しくは畜生、地獄・餓鬼中に在り、彼に生じて還つて自ら害し、塵勞の火に燒かる。此を解脫せしめんと欲して、修行する故に是を說く。

設し多瞋なる者には其の行跡に隨つて、說法を爲す。衆くの瞋恚を犯せば地獄・餓鬼の道に墮し、惡處より出づるも當に毒獸と作るべし。（乃ち）鬼魅・羅刹・反足・女鬼・溷鬼の類なり、又師子・虎・狼・蛇・虺・毒蟲・蚊・虻・蚑・蜂・百足の蟲と作る。設ひ此の道より還つて世間に在るも、形貌醜陋にして人の媚びざる所、常に當に短命にして疾病多く、身體完からざるべし。是を以ての故に殃罪分明なり。常に慈心を奉じて其の瞋恚を除くべし。是に於て頌して曰く。

人多く瞋恚を懷けば、衆共に憎惡する所なり。是に坐すれば惡道に墮し、多病にして安隱ならず。鬼及び毒獸に墮し、既に人と作るも下賤なり。能く慈心を行ずる者は、即ち瞋恚の冥を除く。

設し愚癡多ければ爲に此の法を說く。曚冥興盛なれば死して地獄・餓鬼の路に墮す。若し畜生に在りては則ち癡獸と作る。謂く牛・羊・狐・犬・騾・驢・猪・豚の屬なり。設し還た人道ならば性、決了ならず。〔三八〕少明にして根弱く、當に疾病多く六情完からず、夷狄野人の中に生れ、冥より冥に入るべし。是を以て之に敎へて十二緣を觀じ愚冥の本を除かしむ。是に於て頌して曰く。

多く愚癡を習ふ者は、諸根完具せず、牛羊の中に生じ、然る後地獄に墮す。假使修學の人、

〔三七〕大正本は目とあれど、三本に從つて自と改む。

〔三八〕大正本は眼とあれど、三本に從つて明に改む。

行人上を躡めば便ち其の足を燒くが如し。口癡にして心怒るも亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

口癡にして心剛なるは、柔ならず惡言なく、常に惡を懷いて人に加へ、人の善利を念ぜず。所言了了ならず、惡を藏して心に在き、灰もて炭火を覆ひ、設し躡めば人の足を燒くが如し。

何をか口癡にして心に冥を懷くと謂ふ。善を以て人に加施する能はず、亦惡を加へず、心に亦他人の善惡を念ぜず、增損する所なし。所以者何となれば勢力なきが故に。譬へば火滅し灰を以て之を覆ふが如し。若し枯草及び[三四]乾牛屎を持つて其上に積著し、手もて觸れ足もて蹈むも、能く燒く所なくして成熟せず。所以者何となれば、堪任する所なし。口癡にして心冥きも亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

其れ口に癡愚ありて、心に闇冥を懷くは、都て惡を念ずる能はず、亦善を念ずる能はず。事を成辦すること能はず。　亦能く爲さゞるなし。[三五]暴中にて炊煮するも、能く成熟する所なきが如し。

何をか口癡にして心に三毒を懷くと謂ふ。口に所犯なく人を益せず、中傷する所少し。晝夜常に思念すらく、何の方便を以て人を中傷せんと。又復た心に念ずらく、云何んが人を饒ましめんと。或は心に念じて言く人を損益せずと。譬へば故瓶に淨と不淨とを盛りて其の口を蓋へば、其の裏を見ざるも、口を發けば則ち現はるゝが如し。口癡にして心に三毒を懷くも亦復た此くの如し。是に於て頌して曰く。

作性反戾を喜び、口言了除ならず、而して婬怒癡を懷き、盛滿するに臭穢を以てす。　譬へば大なる故瓶の、諸の淨不淨を受くるが如し。　人を益すること能はず、亦都て所損なし。

[三六]其れ法師たるや、此の十九事を以て、人情を觀察して說法をなす。其れ婬相とは云何が解說して、

【三四】大正本は燥牛屎とあれど三本に從つて乾牛屎となす。

【三五】大正本は如暴中炊煮なれど、三本は如暴秋中暑となす。

【三六】法師たるものは迷情の十九輩に應じて、說法敎化すべきことを示す。

べし、此の輩は雜毒を行ず。

何をか口麁にして心癡なる者と謂ふ。言常に剛急にして惡を人に加へ、擧動所作を心に自覺せず。人の善を念ぜず又惡を念ぜず。譬へば賊あり刀を拔いて人を恐れしめ而も害すること能はざるが若し。是くの如き行者を、口急にして心愚癡となすと知る。是に於て頌して曰く。

口言剛急にして心害せず、喜んで人を恐れしむるも加ふる所なし。　譬へば刀を拔くも施す所なきが如し。　口麁にして心癡なるも亦是くの如し。

何をか口麁にして心に三毒を懷く者と謂ふ。口言剛急にして或は人に善く、又復た惡を加へ乍ち不善を念じ亦惡なる能はず。譬へば大吏盜賊を捕得するに、其の下の小吏は其を責むるを恐れて辭し、又復た吏あり誘進して之に問ひ、其の次の小吏に鞭杖もて之を拷ち、又復た吏あり善惡を問はず亦拷責せざるが如し。是を口麁にして三毒を懷く者と謂ふ。是に於て頌して曰く。

口言は剛急にして、其の心に三毒を懷く。　志性是くの如き者は、善ならず惡を爲さず。　行跡斯くの若き者は之を中間の人と名く。　勤苦及び安隱、是の事雜錯して俱なり。

何をか口癡にして心欲なる者と謂ふ。人を別知する所なくして與に共に語る。都て所解なくして善惡を曉らず。義の歸趣する所を心常に自念すらく、當に何を以て人に加益すべきと。趣事に至つて思念する所の如きは本要を失はず。譬へば冥夜、雲を興し雨を降すが如し。其れ口癡にして心欲なる者も亦復た此くの如し。是に於て頌して曰く。

其れ口癡にして心婬なるあれば、口の言說する所了了ならず。　龍の雲を興すも雷せざるが如し　口癡にして心婬なるも亦是くの如し。

云何んが口癡にして心剛なりと爲す。善を施すこと能はず亦惡を加へず。常に心に念じて言く、何の方便を以てか人を中傷せんと。設し便を得れば輒ち人を危害す。譬へば灰を以て炭火を覆ひ、

の如し。是に於て頌して曰く。

口言柔和ありて、心に冥癡を懷く。當に知るべし、此の輩の人は、口婬にして心愚なることを。其の口を觀ずれば慧なるが如く、心中は冥きこと漆の如し。外は好きこと畫瓶の如く、其の內は空にして且つ冥し。

何をか口欲にして心怒癡といふ。所言柔軟にして善を念ずること尠少なり。性調順ならず或は復た惡を念じ、時ありて念ぜず。善惡を別たず、其の性知り難し。譬へば甜藥に雜ふるに鹹苦を以てせば分別すべからざるが如し。其れ口欲にして心怒癡なることあるも亦復た此くの如し。是に於て頌して曰く。

其れ口言に欲ありて、心に諸の怒癡を懷くは、譬へば醍醐蜜に、雜ふるに辛苦鹹を以てするが如し。

何をか口麁にして心婬なる者と謂ふ。語言剛急にして人を中傷し、衆の憎惡して、之を見るを欲せざる所にして敬者あることなし。譬へば父母の子孫を訶敎するが如し。口剛急なりと雖も而も心は猶ほ愛す。譬へば瘡醫の人の瘡を破洗するが如し。時に當つて大いに痛けれども久久に除愈し心甚だ歡喜す。其れ口剛にして心婬ある者も亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

口言急を現して、心に婬欲を懷くあり。譬へば夏日熱して、其の光冷水を照すが如し。

何をか口剛にして心怒る者といふ。口言麁獷にして、懷念すべき所、慈善あることなく、人の利を欲せず。譬へば苦藥に復た和するに毒を以てするが如し。設し病人に飲ましむれば之を吐いて服せず、設し飲消する時は則ち人命を害す。其れ口剛急にして心怒る者も亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

其れ口言急にして親敬なく、心念弊惡にして毒を懷き、常に喜んで他人を侵枉す。當に觀ず

び、慧なくして苦惱に遭ふ。　鬚髮常に蓬亂し、無信にして喜んで冥に居る。　五味を別知せず、多臥すること虎狼の如し。　寡見にして貢高なり。　舌を齧んで脣を舐め、口を弄んで齗を喜ぶ。　語る所に而も多く笑ひ、臥處にして而も安からず、諸の急事進み難く、呼び還すに突き前む。　性爾るを癡相と爲す。

〔三三〕何をか婬怒癡の相と謂ふ。向に說く所の婬怒癡是なり。婬癡、怒癡の相も亦是くの如し。其れ一切の塵勞と合する者は、是を婬怒癡の相と謂ふ。是に於て頌して曰く。

其れ塵勞に處して、婬怒と俱に合すれば、當に婬怒の相を觀ずべし。　是を癡にして慧なしと爲す。　一切前に說く所、貪欲諸の垢穢、婬怒の愚行あれば、則ち癡を離れざるを知る。

何をか口欲心欲なる者と謂ふ。語言柔軟にして順從して違はず。身の欲せざる所は人に加へず。言念輒ち善く安隱にして可意なり。譬へば好樹は其の華の色、鮮かに果實も亦美なるが如し。口欲心欲も亦復た此くの如し。是に於て頌して曰く。

其れ語常に柔和、順從にして言は人を可にす。　言と行と相副ひ、心身人を傷けず。　譬へば好花樹の實を成せば亦甘美なるが如し。　佛尊、是を心口の婬相なりと解說したまふ。

何をか口欲心怒なる者と謂ふ。口言柔軟にして心に毒を懷く。苦樹を種ゑ、其の花色は鮮かなるも成果は甚だ苦きが如し。言柔くして毒を懷くも亦復た是くの如し。是に於て頌して曰く。

其れ口言柔軟にして、心に毒害を懷く、人を視て甚だ歡喜し、相隨つて親しむ可し。　口言は而も柔順なるも、其の心內には毒を含む。　樹の華色、鮮なるも、其の實は苦く若くは毒なるが如し。

云何が口欲心癡なる者を知る。言語柔和にして其の心冥冥なり。人を益すること能はず亦欺損せず。譬へば畫瓶の表を視れば甚だ好きも裏は空にして且つ冥きが如し。口欲心癡なるも亦猶ほ此く

〔三三〕　以下貪瞋癡の組み合せによる迷情の種ゝ相を心口對照して示す。

ず。一たび所親を捨つれば之を思はず。未だ曾て還變せず亦伏せず。力を勤めて精進し
大事を修す。佛是の輩を說きて瞋相と爲す。

〔三二〕云何んが愚癡の相を察知するや。謂く性柔軟にして喜んで自ら稱譽す。慈哀あることなくして法橋を破壞す。常に目を閉ぢ面色燋悴す。黠慧あることなく冥處を愛樂す。數〻自ら歎息し懈惰にして信なし。善人を憎み常に喜んで獨行す。寡見にして自大し事を作すに猶豫す。吉凶を了せず善惡を別たず。若し急事あれば自らを理むること能はず又諫を受けず、善友と怨家とを別たず。作事反戾して弊して虎狼の如し。弊衣を被服し身體垢多し。性自ら喜ばず鬚髮蓬亂して自ら整頓せず。多憂にして臥を嗜み多食にして節なし。人倩ひて之を使ふも肯へて作さず、倩はず使はずして更に自ら爲す。當に畏るべきを畏れず、當に畏るべからざるものは然も反つて之を畏る。當に憂ふべくして反つて喜び、當に喜ぶべくして反つて憂ふ。應に哭すべくして笑ひ、當に笑ふべくして哭す。設し急事あれば之をして行はざらしむ。適々去つて呼び還せば肯へて反顧せず、常に勤苦に遭ひ強ひて塵勞を忍ぶ。食噉する所あるも五味を別たず。言語するに笑喜多くして重語を忘る。舌を嚙み脣を舐め然じて齗み嚛む。行步坐起未だ曾つて安隱ならず。擧動作事畏難する所なく去就を知らず。佛是の輩を說いて愚癡の相を爲す。是に於て頌して曰く。

弱顏愚にして慈なく、強額にして自ら擧し、眼目視眴せず、燋悴して數〻歎息す。獨行し然して信なく、賢を嫉み及び〔三三〕懈怠なり。常に憂ひて狐疑多く、諸の善惡を別たず、豐面に塵垢多し。善惡の語を知らず、作事に憒閙多し。自ら究竟すること能はず、倩使せられて肯かず、使はれずして反つて行ふ。當に畏るべくして畏れず、畏れざるを反つて畏れ、應に喜ぶべくして反つて憂ひ、應に憂ふべくして反つて喜ぶ。當に哭すべくして反つて笑ひ、當に笑ふべくして反つて哭す。飲食を貪つて飽くことなく、反つて怨讐を別たず。志性佷戾を喜

〔三二〕愚癡多き人の性行を示す。

〔三三〕大正本は懈息とあれど、三本に從つて懈怠となす。

法財色及び親友に於て、不可なれば便ち疎んじ尋いで卽ち悔ゆ。　諸の所造の學卽ち能く得、疾に之を知ると雖も速に忘失す。　花飾もて其の衣服を莊嚴し、所作不要にして老を敬す。智者は之を敬して學志あり、通達して能く明かに和解す、常に喜んで城を出で丶遊觀を行ひ、言語を美にし亦聽くを樂しむ。　利口便辭にして能く分別し、所處の臥坐久しきを忍ばず。柔軟にして性至誠なり、事を輕んじて後を顧みず、志卒にして苦に耐へず、朋友に好んで惠施す、長鬚を憎み短を喜ぶ。　自ら喜び然して臭し、巧黠多皺にして白し。　戒を奉じ蕩無礙なり。　人を見ては先に問訊し、衣薄く面齒淨し、慈ありて事に從ひ易く、趣行して財を惜まず。　人を別知して慈を行じ、教へ易くして佷戾ならず。　佛、性を說くこと是くの如きは、貪婬の相に應ずと爲す。

三〇 當に何を以て瞋恚の相を觀ずべきや。深義を解して卒に懟恨せず、若し怒れば解き難くして哀心あることなし。所言至誠なれども惡口麁獷なり。普く狐疑を懷き尋いで之を信ぜず。喜んで他の短を求め、多く寤めて少しく寐ぬ。多く怨憎あり友を結べば究竟す。仇讐と和し難く所受を忘れず、怨驚あることなく人の怖るゝを懼れず。多力にして反復し下屈すること能はず、多憂にして訓へ難し。身體長大にして肥項・大頭・廣肩・方額・好髮なり。勇猛にして性強く伏し難し。聽受すべき所は遲鈍にして得難く、旣に之を受得すれば亦復た忘れ難し。若し法財所欲親友を失ふも永く愁顧することなし。進み難く退き難し。是を以て之を知るを、瞋恚の相と爲す。是に於て頌して曰く。

志性剛强にして深く義を解し、普く人を疑ひ長短を求む。　睡眠を少くし屈伏し難し、性曠にして學び難く亦忘れ難く、能く勤苦を忍びて觸近し叵し、畏錄する所無く卒に瞋らず。　身口相應し諫曉し難く、勇猛にして力ありて剛强なり。　恐少く友尠く怨憎多し、安らかなること少く反することありて身は廣大なり。　作爲すべき所追悔せず、法財を棄てゝ反つて顧念せ

【三〇】 瞋恚多き人の性行を說く。

口柔なる復た四あり。口癡に言癡なる四あり。世尊の説く所、人情十九種なり。

[二七]何にして人に貪婬の相あるを知るや。文飾にして自喜し調戯にして性急に、志操忽々として性獼猴の如く、而して忘誤多く、[二八]智計淺薄にして遠慮あることなく、擧動所爲前後を顧みず、不要を造作し多事にして恐怖し、多言にして喜啼し詐り易く伏し易し。安隱にして解し易く勤苦に耐へず、小利入を得ては大に用つて歡喜し、小々を忘失するも甚だ憂慼す。人の稱譽するを聞いては歡喜して之を信じ、伏匿の事は悉く道說を爲す。體溫かくして多汗、皮薄く身臭し、毛髮稀疎にして、多白多皺なり。長鬚を好まず、白齒にて[二九]趣行し、淨潔の衣を喜び、好んで文飾を著け、其の身を莊嚴するに薄衣を喜ぶ。多く伎術を學んで通ぜざる所なく、數〻遊觀を行ひ常に喜び笑を含む。綺飾にして戒を奉し性和にして長を敬す。人を見ては先に問ひ、巧黠妍雅にして性佷戾ならず、慚愧して慈多し。好醜を分別し、取與交易し、柔和にして哀多く恩惠する所多し。諸の親友に於て放捨施與し、所有の多少を人と爭はず、惠む所廣大なり。身形を觀顧して所作遲緩なり。世法を了知して悉く能く決斷す。若し好人を見れば敬して之を重んじ、事を覺れば翻すること疾く、言語に工に、黠慧にして言和す。多く朋友あるも久しく親しむこと能はず。瞋恚を少くして長老を尊敬し、臥起行歩而も安詳ならず。法を學ぶと雖も財物を愛欲し、親屬朋友捨て〻堅固ならず、結友久しからず。色欲の事を聞いては卽ち之に貪著し、其の惡露を說けば尋いで復た之を厭ひ、進み易く退き易し。是を以ての故に貪婬の相と爲す。是に於て頌して曰く。

卒暴輕擧なること獼猴の如く、常に歡喜して笑ひ又喜啼す。　利を得ては大に喜び失つては甚だ憂ふ。　言語を多くし降伏し易し。　志惑ひ忽々として驚恐す。　自ら喜んで詐り易く人語を信じ、　志性多忘にして遠慮なし。　好んで戒法を按じ而して慧あり、色を貪視し善施を志し、其の身を綺顧し朋友を敬す。　舒緩にして體溫かく多汗たり、喜信慚赧にして勇あり。

[二七] 貪婬多き人の性行を說く。
[二八] 大正本には詐とあるを宋、元、明本に從つて計となす。
[二九] 大正本は起とあるを三本に從つて趣となす。

くの如し、獨り多想に生せば行を成ぜず。

［二四］修行道者、設し憍慢多ければ爲に此の義を說く。人に三慢あり、一に曰く、我れ某に如かずと言ふ、二に曰く、某我と等し、三に曰く、我れ某に勝れり。是を念ずることある者は自大を懷くと爲す、當に此の計を作すべし。城外の塚間に棄捐されたる骨鎖頭身處を異にし、血脈あることなく、皮肉消爛す。當に往いて觀ずべし、此れ貧富貴賤なりや、男女大小端正醜陋なりや、枯骨正等にして何の殊別あらん。本末終る時、肉は［二五］皮裏に依り、血は筋束を潤ほし、衣服香花は其の身を瓔珞するも、譬へば幻化の巧風合する所の如し。心意識に因つて周旋して行き城郭國邑聚落に至つて出入進止す。是の觀を作し已らば憍慢あることなし。本と觀ずるなき者は塚間を見て、一切の人は等しくして異ることなきに及ぶ。是に於て頌して曰く。

其れ豪富貴あり、駕に乘り城を出て遊ぶと、及び塚間に散棄せると、之を計するに等しくして異ることなし。　閑居して樹下に處り、若し是の觀を作すことあつて、執心して道を行ぜば、慢火も燒くこと能はず。

［二六］法師經を說き、人情を觀察するに凡そ十九輩あり。何を以て了知するや、塵勞を分別し爾して乃ち之を知る。何をか十九と謂ふ。一に曰く貪婬、二に曰く瞋恚、三に曰く愚癡、四に曰く婬と怒と、五に曰く婬と癡と、六に曰く癡と恚と、七に曰く婬と怒と愚癡と、八に曰く口淸く意婬なる、九に曰く言柔に心剛なる、十に曰く口慧に心癡なる、十一には言美にして三毒を懷ける、十二には言麁にして心和なる、十三には惡口にして心剛なる、十四には言麁にして心癡なる、十五には口麁にして三毒を懷ける、十六には口癡にして心婬なる、十七には口癡にして怒を懷ける、十八には心口俱に癡なる、十九には口癡にして心に三毒を懷けるなり、是に於て頌して曰く。

其れ婬怒癡あり、此を合して三毒と爲す。　兩々にして雜錯し、計すれば便ち復た四あり。

【二四】　多慢に對して白骨觀を勸む。

【二五】　大正本は衣とあれど、今は三本によりて依と改む。

【二六】　貪瞋癡に由る迷情に十九輩あることを示す。

宿舊親親なり。又福德ありて人をして敬せしむるのみ、三品九惱恨を懷くに足らず。何をか横瞋といふ、未だ曾て相見ずして、見れば便ち之を恚る、卽ち當に思惟すべし、此の人未だ曾て我身を侵枉せず、今亦過なし[19]後且つ失無からん、何故に惡を懷いて他人を視るや、其れ惡心を發して横に人に加ふれば還つて自ら罪を受く。譬へば風に向つて塵を揚ぐれば還つて自ら身を坌するが如し。修行道者、恚を滅して起らざらしむること能はずんば、此の輩の人は道品に入らず。坏に水を盛れば遠きを致す能はざるが如し。能く恚を制する者は水を火に澆げば則ち所害なきが如し。是れ應に修行して道律に入るべし。是を以ての故に、苦惱に遭ひ刀鋸もて身を截らると雖も瞋恚を起すこと莫れ。枯樹を燒くに恨心あることなきが如し。況んや復た瞋恚もて精神に向ふ者あらんや。是に於て頌して曰く。

[20]等しく己身も、凡人も怨あるも異ることなきを觀じ、諸の九惱を棄捐し、志を立てゝ横瞋せず。　心を制して恨を懷かざること、枯樹に恚無きが如くせよ。　修行道地者、是くの如くならば瑕穢なし。

[21]修行道者、設し愚癡多ければ當に十二因緣を觀ずべし。分別して之を了ぜよ、生の因緣よりして老死あり、設し來り生ぜずんば則ち終始なしと。是に於て頌して曰く。

癡ならずんば則ち生なし、已に老死の患を除く、本を觀るに始あることなし、何によつてか衰盡を致さん。　原因の六情興り、多亂の故に癡を致す、癡より結網あり、轉じて愚冥の癡成す。

[22]修行道者、設し想念多ければ、則ち爲に出入數息を解說せよ。喘息已に定まらば意寂にして求めなし。是に於て頌して曰く。

數息して[23]止及び相隨を求め、正諦想を觀て心便ち止まる。　本性淨なる者は奉ずること是

【一九】大正本は復なれど宋、元、明本によりて後と改む。

【二〇】等觀於己身、凡人怨無異。

【二一】多癡に對して因緣觀を勸む。

【二二】多散に對して數息觀を示す。

【二三】止及び相隨とは、數息觀の內容を六分したる中の二種なり、後に至りて說明あり。

くの如し。常に智慧を以て猶豫なく、道德に住することゝ[illegible]教の如し。

一六 修行道者、云何が邪ならず。謂く諛諂せず其の心質直にして、專精に道を行ひ敦く信じて誠を守り、設使行に在るとも行を爲さずとも、諸所の塵勞不可の事、悉く法師に向つて其の瑕疹を說く。譬へば病者の疾苦あり、悉く當に醫の爲に至誠もて之を說くべきが如し。法師は行者の志意を觀察し、乏短せる所に應じて其が爲に說法す。是に於て頌して曰く。

　行者質直を懷き、其心諛諂なく、法師の教を承受して、諸の塵勞の垢を斷ず。安隱善淸淨にして專精に勤めて修道し、經を奉ずること佛の教の如く、法に遵ふこと猶ほ戰鬪の如し。

一七 假使行者、情欲熾盛なれば、爲に人身不淨の法を說く、三品教あり。一に曰く、身は骨鎖の如く支拄して相連る。二に曰く適々法教を受け便ち頭骨を觀ず。三に曰く已に是の觀を了し、復た額上を察し係心して頭に著く。

一八 假使瞋恚の而も熾多なる者には、爲に慈心を說く、慈に四品あり。一に曰く父母宗親、二に曰く中間の人、大親疎なし。三に曰く凡人衆庶、四に曰く、是の行を得るを以て等しく慈心を施し、怨家を護つて仁心具足し、則ち九惱と横瞋とを除く。此の義を分別し、親厚ありと雖も則ち之を遠離す。何をか九惱にして横瞋なる者と謂ふ。一に曰く心に自ら念じて言く、此の人、本と曾て我を侵枉すと。二に曰く此の人後に儻し我を侵すことあらん。三に曰く今復た我を欺く。四に曰く過去の時我が親友を枉ぐ。五に曰く後に儻し復た我が親友を侵すことあらん。六に曰く今に於て現に復た我が親友を欺く。七に曰く其の人前時に我が怨家を敬す。八に曰く後に儻し復た敬することあらん。九に曰く今に於て現に復た之を敬す。是の心ありと雖も悉く當に棄捨すべし。何ぞ能く人をして己身を侵さゞらしめん。但だ當に自ら守つて人を侵さざるべきのみ。是れ我が宿罪不善の報、此の惡果を致すなり。吾が親友も本と亦罪あるが故に此の患を致すなり。及び吾が怨家素と彼の人と

【一六】此の一段は不邪を示す、道行に順ずるなり。

【一七】多婬欲に對して不淨觀を示す。

【一八】多瞋に對して慈悲觀を示す。

が如し。譬へば萎める華は人の惜まざるが如し。塵勞を捐棄すること當に是くの如くなるべし。

[一〇]修行道者、何をか智慧といふ。寂定を曉了する時、當に觀ずべきを知る時、察慧を知る時、受法を知る時、定意[一一]正受を了知するの時、亦遲疾を知つて定より起つ時、己心の所有の善惡を分別す。譬へば良醫の腹中の病を知るが如く、當に其の心を制して放恣ならしむること莫るべし。譬へば健象の溝井に墜向するに、將養の者は以て御抑して墮落せしめざるが如し。修行道者、外著を制斷するも亦當に是くの如くなるべし。心因緣と諸想の[一二]湊く所とを知る。譬へば明者の食の所便を知るが如く、又宰人の君主の意の嗜む所の可否を知るが如し。方便・一切・解脫・進止・所趣を了知すること猶ほ金師の金の好醜を別つが如し。設し行道者、明智を離れ、道趣を了ぜず、心に恐懼を懷き、是を以て非と爲し、非を以て是と爲さば、則ち慧を成ぜず。其れ行道者設し[一三]一禪を得て第二禪に至らば、則ち自ら畏懼して禪を失したりと謂ひ、轉た寂なるを知らず。心に自ら念じて言く、[一四]咄、我れ迷誤するも本は善應あり、今反つて失す、心便ち移走せるなりと。歡喜の悅に在つて定意を離るれば、則ち自ら心を限つて前むを得ず。疑を懷くこと此くの如く、便ち禪を失すと爲し、成を不成と謂ひ不成を成たりと謂ふ。云何が禪定の意を了知せんや。專心にして志を秉り、第一禪に入つて心は滅定に在り。適々是の行を作して第二禪に入る。迷ふ所以は久しく俗事を習ひ、未だ正諦及び諸の[一五]漏盡を知らず、諦を了せず、志し所漏に在るを用ての故なり。第二禪を求めて心を制すること能はずんば、則ち禪を具せず。是の故に行者當に此の非を知るべきなり。設し行者明にして是の迷を作さずんば則ち禪を失せず。斯を智慧と謂ふ。是に於て頌して曰く。

假使身の諸法を曉了すれば、則ち其の意の歸趣する所を知り、方便もて心の所趣を制止す。

譬へば鐵鉤もて白象を調するが如し。其れ明了に定意を解し、寂觀を分別するあるも亦是

【一〇】此の一段は智慧を示す。禪定に由つて起る明察なる心の働きにより、煩惱を斷じて眞の認識を得るを云ふ。

【一一】正受とは、三昧の異名にして、如實に對象を認知受容するの意にして禪定のことなり。

【一二】大正本は奏とあるを、宋、元、明本によりて湊となす。

【一三】一禪二禪は、色界の四禪の中の初禪二禪を指すならん。

【一四】大正本は咄哉迷設本有善應而念とあれど、三本によりて咄我迷誤本有善應而心と改む。

【一五】漏(Āsrava)は、漏る〻の義にして煩惱のこと、漏盡は煩惱の滅することなり。

[八]誰か能く斯を奉じて道に順ふこと是くの如きや。唯だ信ある者は精進智慧もて、諂なく志あり、爾して乃ち順行す。何をか謂ひて信と爲す、萬物は皆無常に歸するを見知し、受くべき所の身は悉く憂苦と爲し、三界は悉く空にして一切の諸法は皆無我なりと計す。此の如きを解する者、是を謂ひて信と爲す。是に於て頌して曰く、

其れ修行道者は、世の不安を計知す。萬物は盡く非常なり、其れ受身は皆苦なり、三界は悉く空と爲し、一切法は無我なり。所在に能く受行す。是の故に信有りと謂ふ。設し吾我の想あれば、則ち顚倒の人と爲す。能く悉く空なるを解了すれば、卽ち當に知るべし、是れ佛にして、甘露の道を獲致す。是くの如きを覺了せし者は、能く動搖すること有ることなし。此を乃ち謂ひて信と爲す。

[九]修行道者、何をか精進といふ。假使行者空無に專精して心捨離せず、是を精進と謂ふ。設し野火燒けて稍ゝ來りて座に近づき、並に衣服を燒き上つて首目に及べば、心に當に念じて言ふべし。火我が頭を燒き、正使骨肉皮肌を燋燃し、我が身をして死せしむとも終に行を捨てず。所以者何となれば、吾が身を燒くと雖も言ふに足らずと爲す。其れ內體の中の婬怒癡の火、生死三惡道中に展轉して、我が身を燒き來れること無央數世にして、未だ究竟して道德に至るを得ず。一身を燒くと雖も救を爲すに足らず。但だ當に力めて婬怒癡の火を濟ふべし。已に滅度を得ば復た退還せず、已に身あることなくんば則ち內外諸火の患なし。此の婬怒癡は輕滅す可からず。譬へば糠を以て銅鐵を消さんと欲するも終に能はざるが如し。執心堅强にして一切の方便もて、乃ち婬怒癡の病を除盡す可し。是に於て頌して曰く。

其れ道德に專精するあれば、當に爾の時、身を惜むこと莫るべし。譬へば象あり、其の身を洗ひ、沐浴適淨にして復た土に臥せば、假使急厄來りて己に及び、雷電霹靂あるも以て驚かざる

【八】此の一段は信を說く、空無我に徹し吾我の念を離るゝを云ふ。

【九】此の一段は精進を示す、不惜身命にして空無に進み、道を重んじて塵勞を厭ふにあり。

於て頌して曰く。

或は恐怖を以て地に躄し、自ら正しく法に立つ能はずんば、敎へて持戒の法に堅住せしむ。風山を吹けども動かす能はざるが如し。　譬へば彼の蜂の花の味を採るが如し。　吾れ諸經を抄するも亦是くの如し。　其の文甚だ少けれども安んずる所多し、恐怖を除かんと欲するが故に是を講ず。

分別相品第八［六］

本と寶珠を失して、之を大海に墮す、卽時に器を執取し、海を耗して珠寶を求め、精進して以て懈らず、執心して移さず。　海神此くの如きを見て、卽ち珠を出して之を還す。　適ゝ此の方便を興して、休息して天王を意ひ、超えて大寶山に至り、以て懈倦を爲さず、能く本無を究竟し、無所著に稽首し、所願而も轉ぜず、最勝に歸命し禮す。　龍王の蟠結するが如く　端坐することも亦是くの如し。　道を求めて以て精進し、大力を起して佛を得、獨歩七日に於て、能忍して女人を化す。　彼の至尊に稽首し、信見して轉ぜず。

［七］其れ行道者、心に設し自ら念ずらく、生死に在つて稱計すべからず、婬怒癡と習つて已來甚だ久し、人命旣に短く又復た懈怠すれば、安ぞ能く一生に諸瑕を除盡せんやと。若し此の念あらば、當に是の觀を作すべし。譬へば故舍に初め居る者なく、若干の歲冥くして燈を燃さず、火を執りて入れば冥卽ち消索するが如し。久しく塵垢衆毒に習ふことを爲すと雖も、智慧あるを以て諸瑕則ち滅す。所以者何となれば、智慧の力強くして愚癡劣るが故なり。是に於て頌して曰く。

道義を求めんと欲せば懈怠すること莫れ。　法利を得るを以て衰耗を離れ、佛の光明智慧を承けて、婬怒癡を除きて悉く永盡す。

【六】第八分別相品は、迷情の種類、之れに對する修行法等を分別し、衆生を十九類に分ちて、法師たる者は之れに應じて說法敎化すべきことを示す。

【七】此の一段は智慧を以て貪瞋癡を除き、生死の迷妄を破すべきを示す。

・其れ慈心を行じて一切に向ひ、諸の瞋害を除く、是を慈と謂ふ。今吾れ已に衆くの德本を現じ、佛經を觀察して抄說す。

[三]除恐怖品第七

諸所當に覺了し分別して悉く之を解すべし。諸の過去佛を視るに、明達すること斯くの若しと爲す。正等覺を用つての故に、是の故に號して佛と爲す。明智及び天龍、歸命し奉ぜざるなし。諸部の界を敎化し、衆くの瑕穢を除去し、惡窈冥者を化し、心をして光明を獲せしむ。諸苦を安脫することを得、衆くの恐怖を除去す。願はくは彼の佛に稽首し、最勝に歸命せん。佛は不調を降し、象吼え雷震ふが如し。志を秉れば、聲は普く聞こえ、悉く出でて永く度を蒙る。愚癡にして自ら恣にし、奔走すること暴雨の如し。象あり名けて檀鉢と爲す、以て貢高を制伏す。及び諸龍神王、毒を懷き眼より火を出すも、佛は善を以て化救し、其の身常に寂然として解脫して無礙なり。今吾れ願はくは稽首して、寂然にして勝れたる、世尊の足下に歸命せん。魔の恚毒を懷くを視るに變化して普く火と爲り、山を戴き兵仗を齎らし、刀及び矛戟を持す、蛇虺、大樹を擊げて、來つて世尊を危くせんと欲し、諸の鬼神普く至るも懼れず亦慴れず。其の毛は錐刀の如く、周匝して圍繞し、計數甚だ衆多なるも、以て恐畏を爲さず、亦未だ曾て驚疑せず、而して諸の愚癡なく、已に諸の畏難を棄つ。願はくは最勝に歸命せん。

其れ行道者若しくは閑居に在り、及び[四]屛處に於て、儻し恐怖を懷いて衣毛爲に竪たば、當に如來功德の善、形像顏貌及び法、衆僧を念じ、其の戒禁を思ひ、分別して空を解し、[五]六分十二因緣と爲すを知り、慈哀を奉行すべし。假使恐怖あるとも、若し此の事を念ぜば復た畏るる所なし。是に

【三】第七除恐怖品は、恐怖苦情を免れんと欲せば佛法僧を念じ、持戒堅固にして、空を解するにありと說く。

【四】屛處は、人無き所。

【五】六分は、地・水・火・風・空・識の六大（六界）のことか。

其れ瞋恚に從つて　怨害もて他人に向ふあらば、　後生じて蛇虺に墮し　或は殘賊獸と作る、譬へば竹樹の㔟け　芭蕉、騾の懷妊するが如く、還つて害すること亦是くの如し。　故に當に慈心を發すべし。

其れ修道者は當に等慈を行ずべし。父母・妻子・兄弟・朋友と及び怨家とは、遠なく近なく等しく憎愛なし。及び十方無量の世界に於て、普く慈を以て向ひ未だ曾て增減せず。此くの如きの行あれば乃ち應に慈と爲すべし。是に於て頌して曰く。

其れ慈心を行ずる者は、等意にして憎愛なく遠近を問はず、乃ち應に大慈を爲すべし。　等心にして大哀を行じ　乃至三界の人、慈を行ずること是くの如き者は、其の德梵天を踰ゆ。

其れ修道者、慈心を成具せば、火も燒かざる所、刀刃も害せず、毒も亦行はれず、衆邪使を得ず。是に於て頌して曰く。

刀刃害する能はず、　縣官及び大怨　邪鬼諸の羅刹、　蛇虺・雷・霹靂・師子幷に象虎、及び餘の諸の害獸　一切敢へて近づかず、　能く中傷する者なし。

修道して慈行を習ふこと當に是くの如くなるべし。夜寐ては安隱に寤め已つては歡然たり。天人宿護し未だ曾て惡夢せず。顏色和悅にして衣食乏しからず。梵天に生じ所在の處にて、常に端正にして好眼目ありて白黑分明なり。身體柔軟にして疾病少く、而も長壽を得て諸天恭敬す。趣得する所の道は佛の稱歎する所なり。塵勞を消して不退轉に逮び、以て安隱を獲て無餘界に至り、而して寂度を得るは皆慈心に由る。是に於て頌して曰く。

其れ慈を行ずる者あれば、端正にして衣食豐に、衆人皆宗仰し、長壽明かなること日の如し。

臥覺行止安く、神天悉く擁護し、梵に生れて諸天敬ひ、世尊の稱歎する所なり。

是の故に修道して當に慈心を行ずべし。是に於て頌して曰く。

の裸形にして衣を得て覆蓋するが如し。身に垢あり、沐浴澡洗して、心大いに忻歡して[二]安隱なるが如し。定寂然にして、若干種の苦各々所便を得るも、身志踊躍して諸安を得るが故に、執心亂れず、愛敬すべき所の親親・恩愛・父母・兄弟・妻子・親屬・朋友・知識を、皆安隱ならしめ、一切衆生の諸の苦惱ある者をも、亦復た我身の如く安隱を得しめ、十方の人民を悉く度脫して身心安きを得せしむ。二親・宗族・中外をして悉く安隱ならしめんと欲す。次に凡ての人等を念じ、加ふるに慈を以て怨家に普及して差特の心なく、皆得度せしめて我身の安きが如くす。設使前に十方の人民を念じ、中ごろ怨家を念じて、其の心儻し亂るれば、初始の心頓に等しきこと能はざるなり。怨家及び友と中間の人は、當に是の觀を作すべし、我が懷きし所の結は怨家を憎めども、此の心已に過ぎて今已に棄捨し、更に甚だ之を愛し念ずること父母及び身、妻子の如し、亦宗親の如く之を敬せんと。是くの如く復た恨を懷かず。其の本源を察するに、五道の生死に或は父母・家室・妻子・兄弟・朋友と作れり、但だ其れ久遠にして復た識念せざるのみ、是を以ての故に當に怨を懷くべからず。是に於て頌して曰く。

當に慈心を發行して、怨を念ずること善友の如くすべし。展轉して生死に在り、悉く曾て親族と爲る。譬へば樹の華を生じ轉じて果を成すも異なきが如し、父母・妻子・友、宗親も亦是くの如し。

修行道者は心に自ら念じて言く。假使瞋恚もて他人に向はゞ、則ち自ら侵すと爲す。木の火を出して還つて自ら身を燒くが如し。若しくは芭蕉の實を生ずれば便ち枯るゝが如く、騾の駒を懷めば、還つて自ら身を危くするが如し。吾も亦是くの如く、設し瞋恚を懷けば自ら侵すこと猶ほ然り。瞋恚を起して他人に向ふ者あらば、儻し此の罪を用てせば蛇虺に墮し或は惡道に入らん。是くの如きも諦觀して當に惡を懷くべからず。若し人を憎まば當に慈哀を發すべし。是に於て頌して曰く。

【二】大正本は騂害とあれど今は三本による。

巻の第二

慈品第六[一]

賈人曠野を行き、厄道に飢渇す。導師之を救護して、將ゐて水果の處に至る。無爲の道を以て、諸の垢毒を消滅し、安を積んで等心を得、佛世尊に稽首す。本と船、巨海に在り、魚の摩竭口に向ふ、其の船、魚腹に入るに、慈を發して以て之を濟ひ、沒に向ふの頃間、人及び珍寶を度す。無數百千の終始の苦樂を知り、諸の先聖を超越す。其の德は太山の如く、道智は日光を踰ゆ。奉願して慧に稽首せよ。

修行道者は當に瞋恚を棄てゝ常に慈心を奉ずべし。或は行者あり、但だ口にて衆生を安からしめんと發願し、何に緣つて救濟して安からしむるかを曉らず。此れ言の柔軟安穩なることありと雖も、慈心平等定と爲らざるが故に、修行道者は口の慈を爲すこと莫れ。或は修行者あり。發意して慈を念じ、一切衆生の類を安ぜんと欲す、此の慈心あるも亦佳と爲すのみ、是れ道德具足の慈に非ざるなり。大道を行ぜんと欲せば、此の慈を興すこと莫れ。是に於て頌して曰く。

設使學道の士、心口にて慈を言ひ念ずれば、則ち自ら安隱なること尠く、亦薄き福祐を獲、譬へば師の箭を治するが如し、失して火に墮して之を燒かば、安ぞ能く其の箭をして、成就して用ふ可からしめん。

修行道地に大弘慈を建つ、當に何んが之を行ずべき。設し修行者暑熱に在らば、清涼に處することを求めて然る後安穩なり。氷寒の處に在らば、溫暖に至ることを求めて然して乃ち安隱なり。飢えて食を得るが如く、渴して飮を得るが如し。遠路を行きて疲極まり甚だ困じ、車乘を得て然る後安穩なるが如し。住立させられて安坐を得るが如し。疲極者の臥するを得て、安穩なるが如し。人

【一】第六慈品は、十方の衆生に對して怨親平等の慈心を起し、瞋恚の害を除くことを示す。

者、二十、三十、四十、五十、一歲の死より百歲に至り到る。復た長壽すと雖も會ゝ當に盡に歸すべきなり。是くの如く五陰は本を計するに皆空にして展轉して相依り、須臾にして起あり。須臾にして滅あり。擧足下足に而も皆無常なり。愚癡の人は聞かず知らず反つて有身を計す。少より老に至るを皆我所と謂ひ、呼んで一種と爲す。非常の變を知らざるなり。

修行道者は思惟して之を計せよ。是より是を致し是無くんば則ち無しと。何をか是より是を致すと謂ふ、本の行の作す所の殃福に因つての故に、死亡を致して中止に在り。胞胎に至つて精神之に處り、形は薄酪、息肉・段肉の如く、稍ゝ堅肉に至り因つて六根あり。六根具足すれば則ち便ち出生し、少小身より及び中年に至り、乃ち老病に到つて當に復た死に歸すべし。其れ五陰、生死の輪を轉ずること、常に川流の如く休息あることなし。一切皆空にして譬へば幻化の如し。是くの如く顚倒して老病死に至る。譬へば大城の西門に失火あるが如く。次より之を燒きて乃ち東門に到り皆灰燼ならしむ。東門の火を計するに是れ初火に非ざるなり、然れども其の燋燃すること本火を離れず。人も亦是くの如し、本の因緣に從つて其の禍福に隨ふ。當に觀ずべし、此の如きは、一是に從つて是あるなり。と、何をか是れ無くんば則ち無しと謂ふ。凶福及び餘の塵勞あることなくんば則ち死に歸せず。已に死に歸せずんば中止に在らず。設し中止なくんば、何に從つてか生あらん。已に生あらずんば、其れ老病死は何に由つてかあらん。生死の流を計するに本末此くの如し。修行道者は當に五陰の所從成敗を觀ずべし。是に於て頌して曰く。

明らかに諸慧の義を識れば、心淨きこと月盛の如く、志を秉りて專一にして、三界の人を愍哀す。蓮花の水に於けるが如し。甘美柔軟成る。口の宣說する所、聽者は則ち欣び達せん、分別して本起を演ぶ、之を了せば滅盡に歸す。能仁は悉く究竟す、衆生を愍れむが以ての故に、吾れ佛經中より、省採して鈔取す。佛の講說に因つての故に修行經を造る。

【五二】以下五陰の成敗による衆生の輪廻は業力に由るものにして、修行者は此業力も因緣所成にして本と空なることを示す。

【五三】原本は柔軟上とあれど宋、元、明本によりて柔軟成ると譯す。

し。本、體に因つて興り反つて來つて人を危くす。及び身の中表の八十種の蟲は、其の身を擾動して人をして不安ならしむ。豈に復た況んや外の諸苦の惱をや。身を計するに是くの如く常に憂患あり、凡夫の士は自ら謂ひて安しと爲し、聞かず解せず。所以者何となれば、見諦せざるが故になり。是に於て頌して曰く。

　髮・毛・諸爪・齒　心・肉・皮・骨合し　精血寒熱生じ、髓・腦・脂・生熟し、諸寒・涕・唾・涙、大小便常に漏れ、非常にして不淨なりと計す。愚者は謂ひて珍と爲す。

人身を計念するに覆ふに薄皮を以てす。褁奈を合するが如く、皮甚だ薄く少きのみ。僞を以て之を蓋ふも人は知らず。假使皮を脫せば困鈍肉の如し、何ぞ之を名けて是れ人身なりと爲すべけんや。骨節相拄へて鐵鎖を連ぬるが如し。諦見するに是くの如し。尙ほ足すら蹈まず況んや復た親近して之を目視せんや。是に於て偈を以て歎じ頌して曰く。

　本を計するに瑕穢たり、譬へば臭爛せる屍の如く、亦諸の塵垢の如し。　體蟲倶なること復た然り、亦畫ける好像の如し。　會々當に腐敗に歸すべし。　本無を諦見するを以て、安ぞ之に附近す可けん。

五〇 人の世に在りて作す所の禍福を計するに、其の壽を盡さず、亦中夭して死するあり。譬へば陶家の諸の瓦器を作るが如し。或は始に破るゝ者、刀もて坏を治せんと欲する時に向つて破るゝ者、或は埠上にて破れ、或は下す時破れ、或は地に著いて破れ、或は拍つ時破れ、或は坏、燥いて破れ、或は陶中にて破れ、或は熟して破るゝ者、或は移す時破るゝ者、或は用ゐて破るゝ者あり。設使用ひざるも久久なれば破に會ふ。人も亦是くの如し、初發意向來、未だ死に至らざる者あり。或は二根の胎にて生酪の如きあり。熟酪・息肉・段肉・六情を具足する如きあり。或は不具足にして死する者あり。生ぜんと欲する時に向ひ、又適ゝ地に墮ち、一日、百日、一歲、十歲、學業して死する

【五〇】以下五陰の成敗による人身の空無常なることを示す。

子に在り、一を曰生と名け、二を不熟と名く。兩種は[四七]肩に在り、一を曰垂と名け、二を名けて復垂と曰ふ。一種は臂に在り、名けて住立と爲す。一種は手に在り、名けて周旋と爲す。兩種は胸に在り、一を額坑と名け、二を廣普と名く。一種は心に在り、名けて班駁と爲す。一種は乳に在り、名けて運現と曰ふ。一種は臍に在り、名けて闇遶と爲す。兩種は脇に在り、一を名けて月と爲し、二を月面と名く。兩種は脊に在り、一を月行と名け、二を月貌と名く。一種は背[四八]胸の間に在り、名けて安豐と爲す。一種は皮裏に在り、名けて虎爪と爲す、兩種は肉に在り、一を消膚と名け、二を[四九]燒樹と名く。四種は骨に在り、名けて甚毒・習毒・細骨・雜毒と爲す。五種は髓に在り、名けて殺害・無殺・破壞・離骸・白骨と曰ふ。兩種は腸に在り、一を蜣蜋と名け、二を蜣蜋嘴と名く。兩種は細腸に在り、一を兒子と名け、二を復子と名く。一種は肝に在り。名けて蝍嗾と爲す。一種は生藏に在り、名けて帔攸といふ。一種は熟藏に在り、名けて太息と爲す。一種は穀道に在り、名けて重身と爲す。三種は糞中に在り、名けて筋目・結目・編髮と曰ふ。兩種は尻に在り、一を流下と名け、二を重流と名く。五種は胞に在り、名けて宗姓・惡族・臥寐・不覺・護汁と爲す。一種は髀に在り、名けて過杖と爲す。一種は膝に在り、名けて現傷と爲す。一種は踝に在り、名けて鹹嘴と爲す。一種は足指に在り、名けて燋然と爲す。一種は足心に在り、名けて食皮と爲す。是を八十種蟲と爲す。人身に處在して晝夜に體を食ふ。是に於て頌して曰く。

　頭髮より下りて足に至るまで、中に遍する蟲は人を消食す、之を計念して瑕穢と爲す、譬喩もて比すれば濁水の如し。　已より生じて反つて自殘す、刀怨の人を患害するが如く、常に來つて其身を齧傷すること、流水の兩岸を侵すが若し。

其れ、人身中には風に因つて病を起すに百一種あり、寒熱共に合して各ゝ百一あり、凡て之を合計すれば四百四病、人身中に在り。木の火を生じて還つて自ら燋然するが如く、病も亦是くの如

【四七】肩を宋、元、明本は脣となす。

【四八】胸を三本共に骨となす。

【四九】燒を三本共に遶となす。

が若し。　苦樂の由る所は、皆罪福に因つて成ず、在在生の所作の身を受くること各ゝ是くの如し。

其れ小兒の身既に產に向ふに當つて、叉地に所する時外風に吹かれ、女人の手觸れ煖水もて之を洗ひ、逼迫する毒痛は猶ほ瘡病の如し。是の苦惱を以て死亡を恐畏し、便ち癡惑あり、是の故に迷憒して、本、來去して何所に至るかを識らざるなり。適ゝ生れて地に在れば、血穢臭き處に、鬼魅來り遶り、姦邪中に所し、飛尸に觸れられ、蠱道癲鬼各ゝ伺つて之を犯すこと、四交道に一段肉を墮せば烏・鵄・雕・狼各ゝ來つて之を諍ふが如し。諸邪魅鬼、兒の便を得んと欲して、周匝圍遶するも亦復た是くの如し。宿行善き者は、邪便りを得ず。設し宿行惡しければ衆邪卽ち著く。兒初生する時母乳に因つて活き、稍稍長大すれば食に因つて立つを得。是に於て頌して曰く。

胞胎に在る時、若干の苦惱に遭ひ、既に生じて人と爲るを得ば、其の痛百千あり、諸根已に成就し、因つて危脆の身を出だす、生あれば必らず老死すと、是れ最も不眞と爲す。

兒已に長大せば揣哺もて身を養ふ、適ゝ穀氣を得れば、其の體卽時に八十種蟲を生ず。[四六]兩種は髮根に在り、一を舌舐と名け二を重舐と名く。三種は頭に在り、名けて堅固・傷損・毀害と曰ふ。一種は腦に在り、兩種は腦表に在り、一を蟠蛛と名け、二を秏擾と名け、三を憒亂と名く。兩種は額に在り、一を卑下と名け二を朽腐と名く。兩種は眼に在り、一を舌舐と名け、二を重舐と名く。兩種は耳に在り、一を識味と名け、二を現味英と名く。兩種は耳根に在り、一を曰赤と名け、二を復赤と名く。兩種は鼻に在り、一を曰肥と名け、二を復肥と名く。兩種は口中に在り、一を曰搖と名け、二を動搖と名く。兩種は齒中に在り、一を惡弊と名け、二を凶暴と名く。三種は齒根に在り、名けて喘息・休止・捽搣といふ。一種は舌に在り、名けて甘美と曰ふ。一種は舌根に在り、名けて柔軟といふ。一種は上齶に在り、名けて來往と曰ふ。一種は咽に在り、名けて嗽喉と爲す。兩種は瞳

【四六】以下身內の八十蟲を數へ擧ぐ。

人、身に在ること九月にして　則ち諸體脈を具し骨節皆成就し、滿足して乏くる所なし、腹中漸やく自ら辨じ、稍々にして成長し、期至つて悉く具足す。　月の十五日の如し。

其れ小兒の體には二分あり、一分は父よりし、一分は母よりす。身の諸の髮・毛・頰・眼・舌・喉・心・肝・脾・腎・腸・血の軟かき者は母よりし、爪・齒・骨・節・髓・腦・筋・脈の堅き者は父よりするなり。是に於て頌して曰く。

人體相連綴するは、皆父母に由つて生ず、若干の節解は、因緣の化成じて立す、依つて顏色を致し、悉く當に衰耗と爲すべし、衆材合して車を起す、體を計するも猶ほ亦然なり、前に作せる二事あり、身を立するも譬へば斯くの若し、父母に因り、從つて報あり、然る後乃ち生ずるを得。

其れ小兒、母腹中に在るや、生藏の下、熟藏の上に處る。男子は外を背にして面は內に向ひ、左脇に在り。女子は母を背にして面は外に向ひ、右脇に處在す。臭處に苦痛し不淨に汚露し、一切の骨節は縮んで伸ぶるを得ず。革囊腹網の纏裹し、藏血塗染する所に捐在す。逼迮に處り屎尿瑕穢に依因すること斯くの若し。其の九月に於て此れ四日を餘す。宿、善行あれば初日と後の日とに、心念を發して言く、吾れ園觀に在り。亦天上に在りと。其の惡を行ぜし者は謂く、[四五]泥犁世間の獄に在りと。三日中に至つて卽ち愁ひて樂まず、四日に到る時、母腹に風起る、或は上に或は下に其の兒の身を轉じて倒懸して頭を產門に向はしむ。其の德ある者は時に心に念じて言く、我れ浴池に投じて、水中に遊戲し、高床華香の處に墮つるが如しと。其の福なき者は、自ら念を發して言く、吾れ山より墮ちて樹岸・溝坑・溷中に投じ、或は地獄・羅網・蕀　上・曠野・石澗・劍戟の中にあるが如しと、愁憂して樂まず。善惡の報同じからざること此くの若し。是に於て頌して曰く。

燒熱の火に投じて、亂煙來つて圍遶するが如く、放逸の果の致す所は、形を處くこと沸湯にある

【四五】泥犁(Niraya)は、地獄のこと、那落迦(Naraka)とも云ふ。

其れ五骨積聚するは、心輕く放恣なるに隨ひ、身に在つては掣頓を現ずること、猶ほ蛇を牽拽するが如く、前世に造る所の行、善惡の興す所の法なり。譬へば人の行路の或は平かに或は荆棘あるが如し。

二十四七日に七百筋を生じ其の身を連著す。二十五七日に七千脈を生ずるも尙ほ未だ具さに成ぜず、二十六七日に諸脈悉く徹し具足成就すること蓮華根の孔の如し。二十七七日に三百六十三筋皆成ず、二十八七日に其の肌始めて生じ、二十九七日に肌肉稍ゝ厚し。三十七日に纔に皮に像あり、三十一七日に皮轉た厚堅となり、三十二七日に皮革轉成す。三十三七日に耳・鼻・脣・指・諸膝節成り、三十四七日に九十九萬の毛孔髮孔を生ずるも猶尙ほ未だ成ぜず。三十五七日に毛孔具足し、三十六七日に爪甲成ず。三十七七日に其の母の腹中に若干の風起る。風あり兒の耳・目・鼻・口を開く、或は風ありて起るや其の髮毛を染む、或は端正に或は醜陋なり。又風ありて起るや體顏の色を成ず、或は白・赤・黑なり好あり醜あり、皆宿行に由る。此の七日中に在つて風寒熱大小便通を生ず。是に於て頌して曰く。

是の身は筋纏裹し、諸の血脈の成ずる所にして、不淨盛り腐、積む、水は諸の漏孔を洗ひ、[四四]虛覆の心然らしめ、巧僞して合成す。　機關は木人の如く、之を求むるに甚だ得難し。

三十八七日に母腹中に在つて、其の本行に隨つて自然に風起る。宿行善なる者には便ち香風あり、其の身意を可にし柔軟にして瑕なく、其の骨節を正し、其をして端正にして愛敬せざる莫からしむ。本行惡なる者は則ち臭風を起す。身をして不安ならしめ、心意を不可にす。其の骨節を吹くや僂にして邪曲ならしめ不端正ならしむ。又男となる能はず。（女なるが故に）人の喜ばざる所なり。是を三十八七日と爲す。九月に滿たざること四日にして、其の兒の身體骨節は則ち成じて人と爲る。是に於て頌して曰く。

【四四】虛覆を宋、元、明本には虛妄とす。

尋いで胎に在る時卽ち二根を得、意根と身根となり。七日、中に住して增減せず、又二七日に其の胎稍ゝ轉ず、譬へば薄酪の如し。三七日に至つて生酪に似如たり。又四七日に精凝りて熟酪の如く、五七日に至つて胎の精遂に變じて猶ほ生酥の如し。又六七日に變じて息肉の如く、七七日に至つて轉じて段肉の如し。又八七日に其の堅きこと坏の如く、九七日に至つて變じて五皰と爲る。兩肘・兩髀及び其の頸項、中より出づるなり。又十七日に復た五皰あり、手腕・脚腕及び其の頭を生ず。十一七日に續いて二十四胞を生ず。手・指・足指・眼・耳・鼻・口、此の中より出づ。十二七日に是の諸胞相轉じて成就す。十三七日にして則ち腹相を現じ、十四七日に肝・肺・心及び其の脾・腎を生じ、十五七日に則ち大腸を生じ、十六七日に卽ち小腸あり、十七七日に則ち胃處あり、十八七日に生藏と熟藏と、此の二處を起し、十九七日に髀及び蹲・腸・骸、手掌・足趺・臂・節・筋連を生じ、二十七日に陰・臍・乳・頤・項の形相を生じ、二十一日に體骨の各分、其の所應に隨ふ。兩骨は頭に在り、三十二骨は口に著き、七骨は項に著き、兩骨髀に著き、兩骨肘に著き、四骨は臂に著き、十二骨胸に著き、十八骨背に著き、兩骨は臗に著き、四骨膝に著き、四十骨足に著き、微骨百八は體肉と合す。其の十八骨は兩脇に著在し、二骨は肩に著く。是くの如く身骨凡そ三百ありて相連結し、其の骨柔軟なること初生の瓠の如し。二十二七日に其の骨稍ゝ堅く未熟の瓠の如し、二十三七日に其の骨轉た堅く、譬へば胡桃の如し。此の三百骨各相連綴して、足骨は足に著き、膝骨は膝に著き、踝骨は踝に著き、髀骨は髀に著き、臗骨は臗に著き、脊骨は脊に著き、胸骨は胸に著き、脇骨は脇に著き、脣骨は脣に著く。項・頭・臂・腕・手・足の諸骨轉た相連著すること是くの如く、聚骨は猶ほ幻化の若く、又合車の如し。骨は垣牆となり、筋は束ね血は流れ皮肉は塗裹し薄膚は之を覆ふ。本の罪福に因つて果を獲て此を致す。思想あることなく、其の心元に依り、風の由る所に隨つて牽引擧動す。是に於て頌して曰く。

剛弊にして喜んで人を諂り、戒を遠かつて法に順ぜず、禁穢濁の事を犯し、貪饕にして獨り食ひ、膿血の處に墮し、飢餓煩惱極まる。　當に知るべし、此の輩の人は定んで入つて餓鬼となる。

德善を淸修すれば、凉風四來して其の風は甚だ香しく、若干種の熏り其の身上に雨り、諸の妓樂の音相和して鳴り、園觀樹木花果を瞻視すれば悉く茂盛し意を發して往かんと欲すれば、卽時に便ち中止の五陰を失し、精神自然に[四三]忉利天に上る。是に於て頌して曰く。

法を習つて聖道に歸し、福業を種ゑて天に生ず、妓樂以て自ら娛み、諸花樹間に遊ぶ、美艷なる玉女の衆、端正にして光り從容たり、常に觀じて心欣悅し、大山の頂に居止す。

行、淳一ならず、或は善、或は惡ならば當に人道に至るべし。父母合會し 精、時を失せざれば子、應に來生すべし。父母德想ありて倶に同時に等しければ、其の母の胎通じて拘礙する所なし、心に喜躍を懷いて邪念なくんば、則ち柔軟となりて儱悷ならず、疾疹あることなくして子を受くるに堪任す。輕慢を爲さず亦反行なく、其の正法に順じて濁汚を受けず、卽ち一切瑕穢の塵を捐つ。其の精淸からず亦濁と爲らず、中適にして强からず亦腐敗せず、亦赤黑ならず、風寒衆毒の雜錯を爲さず、小便と別なれば、應に來り生ずべき者の精神便ち趣く。(その精神は)心に自ら念じて言く、設し是の男子、女人と共に倶に合せずんば、吾れ與に通じて瞋怒心を起さんと欲すと。彼の男子を恚り、志、恭敬を懷きて女人を念じ、瞋喜倶に作し、便ち男子を排して女人に向はんと欲す。父時に精を下し、其の神忻歡して、是れ吾が許なりと謂ふ。爾の時卽ち中止の五陰を失し、便ち胞胎に入り父母の精合す。旣に胞胎に在りて倍々用つて踊躍す。是れ中止の五陰に非ず亦之を離れず、胞胎に入る是を色陰と爲し、歡喜の時を痛樂陰と爲し、精を念ずる時是を想陰と爲し、本の罪福に因り緣つて入胎を得る是を行陰と爲す。神、胞中に處すれば則ち應に識陰なるべし。是くの如く和合するを名けて五陰といふ。

【四三】忉利天(Trāyastriṃśa)は、欲界に六天ある中の第三天にして、須彌の頂上にあり、帝釋天の居所。

の中止に在り、唯だ道眼ありて乃ち之を見るのみ。中止に處しては三食あり。一には曰く[40]觸軟、二には曰く心食、三には曰く意識なり。中止に在る者は或は住すること一日、極く久しきは七日なり。父母の會に至り其の本行に隨つて、或は[41]三塗、人間、天上に趣く。惡を行ふこと多き者は中止中に在りて、大火起りて其の身を圍遶するを見る、猶ほ野火の草木を焚燒するが如し。塵は其の形に雨る。烏・鵰・鷲・惡人の類の爪・齒皆長く面目醜陋衣服弊壞にして、頭上に火を然し、各ゝ兵仗を執り爲に、棒に撾たれ矛もて刺し刀もて斫るを見て、心に恐懼を懷き、救護を求めんと欲して遙かに叢樹を見、走り往いて之に趣き、爾の時即ち中止の五陰を失す。刀劍樹泥犁の中に入り、地獄に墮する者の神は此の若きを見る。是に於て頌して曰く。

迷惑すること醉象の如く、聖法の數に違失す、染濁すること潦水の如く、心憒亂すること斯くの若し。常に正道を捐て、放心して邪徑に入る、此の人は衆苦に遭ひ、命終して地獄に墮す。

小惡を行ずる者は火煙塵の其の身を繞滿するを見、及び師子・虎・狼・蛇・虺・群象の爲に逐はる。又故渠・泉・源・深水・崩山大澗を見て、心に怖懅を懷きて、其の中に赴趣し、爾の時即ち中止の五陰を失し畜生處に墮す。是の變を見る者は獸身を受くるを知る。是に於て頌して曰く。

癡を習つて慧便を捨て、或は醉つて冥道に墮し、惡口し常に麁言にして、喜んで人を撾捶するを行ひ、又は爲に罪殃を犯し、樂んで不善事を爲す、是くの如き無慈なる者は、畜獸の中に生ず。

罪若し微なる者には、四面を周匝して熱風の起るあり。身體欝蒸して自然に飢渴し、遙に人の來るを見るに、皆、刀杖・矛戟・弓箭を持つて之を圍遶す、大城を望み見て意に中に入らんと欲す、適ゝ此の心を發せば卽ち中止に受くる所の五陰を失して[42]薜荔に生ず。其れ是くの如きの變を見る者は、當に知るべし、餓鬼の中に墮す。是に於て頌して曰く。

【四〇】 觸軟(Phassa-āhāra)。心食(Manosañcetanā-ā.)。意識(Viññāna-ā.)は、有情の精神的要素にして、普通は次での如く、觸食、思食、識食と譯し、之れに假食(Kabalin-kāra-ā.)(肉體的要素)を加へて四食説となす、原語は巴利語。

【四一】 三塗は、地獄・餓鬼・畜生の三惡道のこと。

【四二】 Preta(薜荔哆)。餓鬼と譯す。

す。亦老人の鏡に照らして身を見、爲に衰至ることを知るが如し。是に於て、頌して曰く。

金寳等の所作、巧拙成ずること同じからず、設し惡を行ずる者あらば、深淵に沈沒す、已に沒すれば更に[三八]出づると雖も、顧視するに所依なく、水の爲に漂はさるゝが如し。　死に臨むも亦斯の若し。

其れ善を行ずる者あり、三輩ありと爲す。身口意を攝して衆德を淨修し、法を以て財と爲し、壽終るの時に臨んで心に喜踊を懷き、吾れ定んで天に上るとなす。譬へば賈客の遠行し治生して、厄道を度るを得て多く財利を獲、還歸して家に到り心悅無量なるが如し。又田家の犁すること時を失はず、風雨復た節ありて多く五穀を收め、篅中に藏著し、意甚だ歡喜するが如し。(また)困病の愈ゆることを得るが如く、(また)債を償ふことを得畢りて、中心踊躍するも亦復た是くの如し。猶ほ蜂の花より採つて以て蜜を作るが如く、德を積むことも亦爾なり。其の意大いに悅び我れ定んで天に上るとなす。是に於て頌して曰く。

其れ有學の正士は、積累して眞法を行じ、以て衆患を度し、自ら明道を得ることを致す、譬へば閑居者の、高山より其の下を望むが如し、彼の人、命盡くる時、善道を見ること斯くの若し。

爾の時、其の人の命已に盡くれば、身根・識滅して便ち[三九]中止を受く、譬へば稱の其の輕重に隨つて或は上り或は下るが如く、善惡も是くの如し。神は人身を離れて中止に住し、五陰悉く具して乏少する所なし。死時の五陰は中止に到らず、中止の五陰は亦本を離れず、譬へば印章を以用つて泥に印するに、印は泥に著かず亦之を離れざるが如し。五穀を種うるに苗は莖實を生ずるも、是れ本種に非ず亦本を離れざるが如し。是の如く人死し、精神魂魄は五陰と齊しからず亦本を離れざるなり。本の所種に隨つて各ゝ果報を得、其の德を作せし者は善の中止に住し、惡を履行せし者は罪

【三八】大正本は生なるも、宋、元、明本によりて出となせり。

【三九】中止は、中有(Antarā-bhava)のこと、又は中陰とも云ふ、人死して未來の生を受くるまでの中間存在。

諸節を斷解す。風あり饅と名け筋脈を緩ならしむ。風あり破骨と名け病人の髓を消す。風あり減と名け其の面色を變じ、眼耳鼻口咽喉は皆青く、出入の諸孔は斷絶破壞し其身を剋剝す。復た一風あり、名けて止脇と曰ひ、其の身內、及び膝・肩・脇・背・脊・腹・臍・大小の腸・肝・肺・心・脾並びに餘の諸臟をして皆斷絶せしむ。風あり旋と名け其の肪血及び大小便をして生藏熟藏より、所食を通ぜず、寒熱悉く乾かしむ。風あり節間と名け諸の支節をして或は縮め或は伸ばしめ、而して手足を擧ぐれば虛空を捉へんと欲し、坐起して煩憒し時ありて笑戲し、又復た大息し其の聲は懇惻し、節々は以て斷じ筋脈は則ち緩にして髓腦は消を爲し、目は色を見ず、耳は聲を聞かず、鼻は香を別たず、口は味を知らず。身冷え氣絶えて、復た識る所無く、心下に尙ほ煖と魂神と續在するも、挺直して木の如く動搖すること能はず。是に於て頌して曰く。

其れ刀風起る時、身動いて多く安からず、衆緣普く皆至るも、悉く自ら覺知せず、身は若干の惱に遭ひ、命は乃ち爲に窮盡す、譬へば弓弩の弦の緩と急とは用ふべからざるが如し。

爾の時に彼の人、其の心周匝し、所有、四大は皆、衰落を爲す。微かに命在りと雖も燈の滅せんと欲するが如く、此の人の心中に身意根あり、其の生存時に爲す所の善惡は心に卽して、本と殃福吉凶なりと念じ、今世後世作爲すべき所を、心は悉く自知す。善を奉行する者は面色和解なるも、其の惡を行ふ者は顏貌悅ばず。其の人の心喜び面色則ち好ならば當に知るべし、所歸は必ず善道に至り、其の面色惡く心に不善を念ずれば則ち惡道に趣く。老人ありて淨鏡を照らすが如し、皆自ら形を見るに、頭白く面皺より、齒落ちて瘡痍し塵垢黑醜にして、皮緩み脊僂み、年老いて戰疾す。設し是くの如きを見れば還つて自ら羞鄙し、目を閉ぢ鏡を放つて、吾れ已に少を去り、衰老將に至らんとすとて、心に愁憂を懷く。已に安隱を離れて窮極に至れば、素と惡を行ひし者は壽の終る時に臨んで所見惡變して愁慘恐怖し、深く自ら吾れ惡道に歸することと定んで疑あることなしと剋責

今此の病者、設し飲食美味を索むる所あらば、意を恣にして之を與へ、逆ふことを得ること勿れ、吾は急事あり、(故に)相捨て去らん、事了れば當に還るべしと。故にこの緣を興して便ち捨てゝ退去せり。是に於て頌して曰く。

命斷に向はんと欲する時、病を得て甚だ困極す。塵勞と倶に合し、罪至るも自覺せず、怪變自然に起り、對陰熱極を得。正使執金剛も、其の命を濟ふこと能はじ。

是の時病家の大小の男女、醫の所說を聞いて、便ち湯藥及び諸の呪術を棄て、家室・眷屬・宗黨・比隣・親厚・知識、悉く來り聚會して病者を圍遶し、悲哀啼哭して病困を覩念す。譬へば屠家の群中より猪を捕へ、牽いて之を殺さんと欲すれば、餘の猪は悉く聚つて驚怖し、耳を側だてゝ聲を聽き、惶懅愕覩するが如し。譬へば猛虎の群中に牛を搏てば、餘の牛は之を見て驚怖して走り、或は山巖に入り、或は深谷に投じ、又は樹間に入つて跳騰哮吼するが如し。譬へば魚師の網を持つて魚を捕ふれば、餘の魚は之を見て怖れ散じ、石岸草底に沈竄するが如し。又蒼鷹の其の衆鳥に臨んで掣取する所あれば、餘鳥は之を見て各〻散りて飛び去るが如し。其れ人は是の如し、無常對至すれば、其の身は壞散し、家室・親屬は當に別離すべしと念ず。悲哀斯の若し、命斷ぜんと欲するに臨んで、閻王の使者自然に來至す。其の到るや縛られて鐵箭に射られ、生死の船に上つて罪に牽引せらる。卽ち發去せんと欲すれば家室之を繞り、髮を放つて悲慟し塵もて其の面目を坌り、哀泣歎息して涕涙面に流れ、皆言く、痛ましき哉、奈何ぞ相捨つるやと。胸を椎ちて鬱悒し、病者の若干の德行を稱歎し、心に懊惱を懷く。是に於て頌して曰く。

其れ人病みて苦困し、身冷消して熱を離るれば、室家悉く聚會し、聲を擧げて悲哀す。造業は更に苦樂なり。蜂の華の味を採るが如く、心は遂に憂感を受け、並に一宗門を惱ます。

其れ人の疾病は是くの如し、身中に刀風起りて、病者の骨節をして解せしむ。風あり科と名け、

【三七】執金剛(Vajradhara)は、金剛手、金剛力士などとも云ふ、帝釋天の宮門を守る夜叉神にして、力用無双なり。

眼眴醫の等きは、藥を造合すること分明にして、疾の瑕冥を除くこと、日の諸冥を滅するが如し。

復た瘡醫あり、諸瘡を治療す。名けて法財稚弟、端政辭約、黄金言談と曰ふ。是を瘡醫等と爲す。是に於て頌して曰く。

其れ能く百種の瘡痍を療治するものあり、能く衆くの厄疾を除くこと、脚を以て地を平にするが如し。　法財の世に出づる所以は、經書を造つて、正に瘡病を治し、衆をして患難を離れしめんが爲なり。

復た小兒醫あり。其の名を尊迦葉耆域、奉慢速疾といふ。是等は皆、小兒の病を治す。是に於て頌して曰く。

〔三六〕譬へば蒼頭あるが如し。　務を捐て貢高を除く、故に世俗に生じ、愍傷して小兒を治す。　此の尊迦葉等は、仁を行ずるに正法を以てす。　童幼を哀念するが故に、則ち醫經を作る。

復た鬼神醫あり。名けて戴華、不事火と曰ふ。是等は鬼神來つて人を嬈す者を辟除す。是に於て頌して曰く。

諸宿轉じ周行す、人生も猶ほ亦然り、主、恐怖する所あれば、多く危害あり、是の經を造立する者は、悉く其の患を解する爲めなり、佛の正法を以て、愚を除き明を見せしむるが如し。

正使、此の上の諸醫及び幻蠱道幷びに巫呪の說を合會するとも、差えしめ終に亡ぼさざらしむることを能はず。是に於て頌して曰く。

罪と塵勞とを造作し、勤苦して衆惱を懷けば、病痛其の志を亂す、垢多く命の日促し、病の爲に漂沒せられ、死證見れて便ち怖る。　天帝諸神等も救安せず。　況んや吾をや。

醫、心に念じて言く、命を長うして未だ斷ぜずんば、當に（病を）避退すべしと。便ち衆人に語る。

【三六】譬如有蒼頭、捐務除貢高、故生於世俗、愍傷治小兒、

の如く、其の人の志性は變改常ならず。或は端正を現じて其の身柔軟、或は復た麁堅なり。身體數ゝ變じ、或は輕く或は重くして所願を失ふ。此の諸の變怪(中にて)命應に盡くべき者は、各ゝ數事に値ひ、悉くは具有せず。是に於て頌して曰く。

若干の變を覩見するに、衆惱身に趣逼し、志恐怖を懐き、厄に遭ふこと斯くの若しと爲す。

人性敗るること此くの如し、身變ずること一種ならず、猶ほ竹葦の實の、自ら生じ自然に壞するが如し。

今我が學ぶ所は所聞の如く知るべきなり。人死に臨む時に現はるゝ所の變怪は、口は味を知らず、耳は音を聞かず。筋脈は縮急して、喘息は定まらず。體痛みて呻吟し血氣微細にして、身は轉た羸瘦し、其の筋は麁を現じ、或は身、卒かに肥えて血脈隆起し、頬車垂下して其の頭戰掉し、之を視るに憎むべく、擧動舒緩なり。其の眼瞳子は常よりも甚だ黒く、眼目は視ず、便利は通ぜず、諸節は解せんと欲し諸根は不定なり。眼口の中盡く青く、氣結連して[三二]蹶す。諸の所怪變、各ゝ現ずること此の如し。是に於て頌して曰く。

其れ病惱は無數なり、血脈精氣竭き、水の樹根を嚙むが如し、當に愍むべし、拔栽するが如し。

時に醫は心に念じて言く、此の如きの病あらば必らず死すること疑なし。古昔の良醫經文を造結す。名けて曰く、[三三]於彼除恐、長耳灰掌、養言長育、急數多髯、天人長蓋、大首退轉、頻頷太白、最尊路面、調牛岐伯、醫徊扁鵲と。是くの如き等の輩悉く身病を療す。是に於て頌して曰く。

彼の等きの類に於て、尊法[三四]梵志仙は正に所有る果を救ひ、及び餘王良醫、此は成敗を主るとなす。博く知りて能く厄を度し、愍みて經を以て命を救ふ、猶ほ[三五]梵の造法の如し。

復た其の醫耳目を治すを主とするあり。名けて眼眴動搖、和鬪鈴鳴、月氏英子、篋藏善覺、調牛目金、禿梟力氏、雷鳴と曰ふ。是の上の醫名のものは耳目を治するを主とす。是に於て頌して曰く。

【三二】大正本は喘とあれど、宋、元、明本によりて蹶となせり。

【三三】以下醫師の名なるべし、句讀明らかならず。

【三四】梵志（Brahmacārin）は、婆羅門の行を修する人、仙(Rsi)は仙人行者の意。

【三五】梵天（Brahmadeva）が一切造化の主なりとは、婆羅門一派の一主張なり。

譬へば二人有るが如し。俱に發行して海に入り、或は彼岸に到るあり、或は中ろ斷絕して疾病の海に墮するあり、其れ譬ふれば亦是くの如し、儻し時に病より差ゆるも、而も更に死する者あり。

是に於て、其の醫已に病家に到れば、則ち惡怪ありて便ち殉聲を聞く、亡失・焚燒・破壞・斷截・剝撥・掣出・恐殺・曳去・發行・拘閉して當に以て之を占ふべし、復た療すべからず、以て死し已れりと爲す。南方に狐鳴き、或は烏梟の聲を聞き、或は小兒土を以て相坌り、而して復た裸に立つて頭髮を相挽き、甖・瓶・盆及び諸器物を破るを見る。此の變を見已つて前んで病人の困劣して床に著くを省る。是に於て頌して曰く。

醫は則ち病者の相の、驚怖し惶々として安からず、或は坐し或は起ち、復た床に著き、煩懣して熱、極まつて皮を燒くが如きを占視す。

醫は是くの如きを覩て便ち心に念じて言く。吾が諸經の本末を觀歷するが如く、是は則ち死の應なり。面色煌懅として眼睫爲に亂れ、身體萎黄し口中に涎出で、目冥し眊昧んで鼻孔驀黄し、顏彩色を失ひて聲香を聞かず。脣斷じ舌乾いて其の貌、地の如く、百脈正靑にして毛髮皆竪ち、髮を捉へ鼻を搯るも都て所覺なく、喘息均しからずして或は遲く或は疾し。是に於て頌して曰く。

面色は則ち變を爲し、毛髮は正に竪ち、直視すること思ふ所あるが如し。舌强ばりて怪已に現はる。病人是の應あれば、餘命少少なるのみ。疾火に圍まれ、草木を焚燒するが如し。

復た異經あり、人終る時の諸怪の變を說く。設ひ洗沐するあるも、若しくは復た浴せざるも、設し好香木・檀・栴檀・根香・花香を燒けば、此の諸の雜香は其の香り實に好し。病者之を聞くこと、死人の骨・髮・毛・爪・皮・膚・脂・髓・糞・除を燒く臭の如し。又梟・鷲・狐・狸・狗・鼠・蛇・虺の臭の如し。病者の聲變り、言は破瓦の如く、狀は咽の寒がるが如し。其の音或は鶴・雁・孔雀・牛・馬・虎・狼・雷・鼓の聲

其の人、覺め已つて心に恐怖を懷き身體戰慄し、命盡きんと欲すと計して、審爾にして疑はず。今吾が夢みる所は昔より未だ有らず。意憐るゝを以ての故に衣毛爲に堅ち、病遂に困篤し震動して安からず。譬へば猛象の群衆普く至つて芭蕉を踏蹈するが如し。病轉じて床に著く、其れ譬ふれば是くの如し。窮迫して計無く、便ち醫に歸せんことを求む。昆弟親族、困ること此くの如きを見て、人を遣はして醫を呼ぶ。遣はすべき所の人の體は垢穢多く、衣被は弊壞し、或は毛爪長くして、裂けたる繖蓋を戴き、其の〔三二〕足履は缺け、木の屐屜は破れ、朽壞せる車に乘り、顏色正黑にして兩眼復た靑し。而して數々手を以て鬚髮を摩抆し、駕すべき所の牛は或は靑く或は黑く、又正白なるあり。急急に醫を呼んで捉へ來り車に上す。是に於て頌して曰く。

人行いて遊觀する時、唯だ樂んで益事なし。所欲を放恣にし、未だ曾て醫を念はず、體、適々疾病あれば、困篤して床席に著き、然る後乃ち醫を請ひて、其の疾を療せしめんと欲す。

時に其の醫は意を以て之を察し、病者は必らず死すとなし。所以者何となれば、此の怪應を見、來たり呼ぶ人の服色語言を視、壞れたる繖蓋を持ち、鬚爪毛は亂れ、又其の日惡しく、若し四日、六日、十二日、十四日、此の日を以て來たる者は皆不祥と爲し、醫は卽ち喜ばず。星宿に觝し良時を失ふを以て、神仙先聖の禁ずる所の日なり。醫、心に念じて言く、此の怪しき星宿吉凶に値ふと雖も、或は治療すべし。所以者何となれば、病者の方便消息することありと雖も、本命未だ盡きずんば、想ふに當に除愈すべし。若し對至者をして差さしむること能はずとも、是を以て之を言ふ。必らずしも善日の星宿吉凶に在らずと。是の故に慧人は曆日に從つて良時を求めず。神仙常に言く、當に方便を求むべしと。或は風寒の病にして命未だ盡きざる者、儻し橫死することあれば、是の者は治すべし。設し命應に盡くべくんば之を如何ともするなし。爾りと雖も往いて之を治するは猶ほ行かざるに勝る。醫、此れを念じ已つて卽ち起つて去らんと欲す。是に於て頌して曰く。

【三二】足履決を宋、元、明本には足履缺とあり、今は之れに由る。

或は蟻子の戯笑するを覩、或は自ら華飾を床に墮し、灰を以て身に坌り復た取りて之を食ふを覩、或は身の其の上を越ゆるを見、或は鹽を嚼める狗犬・獼猴の追逐せられて各々還つて之を嚙むを見、或は婦を娶り、又家神を祠るを見、屋崩壞し諸神の寺破るゝを見、夢に犁に駕すに犁鬚髮に墮ち、或は時に牙齒の自ら地に墮ち、又は白衣に著伍するを見、或は已身倮跣にして行き、麻油もて身に塗り土中に宛轉するを見、皮草弊壞の衣を服するを夢み、夢に他人の朽敗車に乘りて、其の門戸に到り之を迎へ去らんと欲するを見、或は衆花甲煎諸香、親屬之を取りて以て其身を嚴り、先祖爲に顏色の青黑なるを現はし、前に呼びて捉へ挽くを見、數々此の夢を作す、(卽ち)丘塚の間に遊んで華瓔を拾ひ取り、及び赤蓮華落ちて頸に在るを見、大河の中に墮ちて水の爲に漂はさるゝ(を見)、倒に水に墮ち五湖九江其の底を得ざるを夢み、或は其の身諸の叢林の華果あることなきに入り、荊棘の爲に軀體を鉤壞し、諸の瓦石を以て其の身上を鎭ふるを見、或は枯樹の都て枝葉なきを見、其の上に緣りて獨り戯樂し、廟壇に在りて自ら拍舞するを夢み、或は叢樹にて獨り其の中に樂しみ欣々として大笑し、枯枝を折り取つて束ねて負ひて持ち行くを見、或は冥室に入つて戸より出づるを知らず、又山嶽の巖穴の中に上りて出づる處を知らざる(を見)、復た山崩れて已が身上を鎭し、悲哭號呼するを見、或は群象の忽然として來至し、其の身を躢蹈するを見、夢に塵土を其の身首に坌り、或は弊衣を着けて曠野を行くを見、夢に虎に乘つて暴く奔走し、或は驢狗に乘つて南に遊行し、塚間に入つて炭、爪髮を收むるを見、自ら其の身、枯華を戴いて、大山に引入し閻王に問はるゝを見る。

是に於て頌して曰く。

世に處して安樂多きも、命對至すれば乃ち怖る。疾の爲に中傷せられ、逼困して自在ならず。一心熱し憂惱至り、夢を見て恐懼を懷くこと、猶ほ惡人の逐はるゝが如し。憂畏も亦、是くの如し。

は一の貫珠の一時に倶に行して若干の行を造るが如し。若し[二七]心より出づれば一の貫珠の同時に倶に興退して五陰に從ふが如く、一切諸入も亦復た是くの如し。目、見る所の色に五陰皆從ふ、是くの如く耳聲・鼻香・舌味・身[二八]更・心法(もあり。但だ)心中の四陰は色陰なしとす。是くの如きを五陰の本を別つと爲す。是に於て頌して曰く。

無極の德を分別して說くこと、其の講ずる所の經中の義の如し。　貪欲ある者は迷うて教を受けず。　吾れ今、法に順じて其の講を承く。

[二九]五陰成敗品第五

明智の無きは世尊、要らず、調順すること無底にして其の際を獲しむ。　已に境界を超えて邊涯なし。　世尊に稽首して、無量と稱す。

講ずる所は猶ほ日明のごとく、弟子を照すこと玆の若し、塵勞を了知し、畏を除くこと、華を萎むるが如し。　其れ諸の起滅を觀、五陰の成敗を了す。　願はくは彼の佛に稽首して、我が尊言を說くを聽け。

修行道者は、當に五陰成敗の變を知るべし。何をか當に五陰成敗を知るといふ。譬へば人命の終らんと欲する時の如し。壽盡に逼るが故に、其の人の身中に、[三〇]四百四病前後して稍ゝ至り、便ち多くの夢に値ひて、瑞怪を覩て驚恐を懷く。夢に蜜蜂・烏鵲・鵰鷲の其の頂上に住するを見、衆、堂に住し上に在りて娛樂し、身に著くる所の衣は靑・黃・白・黑にして、亂髦の馬に騎りて復た嗚呼するを覩、大狗を枕にし又獼猴を枕にして土上に在つて臥するを夢み、死人・屠魁・除溷者と一器を共にして食ひ同乘して遊觀し、或は麻油及び脂・醍醐を以て、自ら其の身に澆ぎ、又之を服食し數數是くの如くするを夢み、蛇の身を纏ひて倒掣して水に入ると見、或は自ら身、歡喜踊躍し髀を拍つて

【二七】心を、宋、元、明本には身となす。

【二八】更は、觸(Spraṣṭavya)の古譯。

【二九】第五、五陰成敗品は、衆生の生死輪廻は業因緣の力に由つて、五陰の成敗するのみにて、人我の主體なきことを示さんが爲めに、病・死・中有・來世の受生等の相狀を詳說す。

【三〇】病の全體を數へしもの普通には、地・水・火・風の四大に各百一病ありて四百四病となる。

其れ修行者は當に五陰の相を解すべし。云何んが各々五陰の相を知るや。[二四]光明あるを色と爲し、像相あるをも亦復た色と爲す、手に獲持する所も亦名けて色と爲し、若しくは他人に示すも亦復た是れ色なり。[二五]習樂を痛と爲し、不樂不苦も亦復た是れ痛なり、是を痛想と爲す。識相を想と爲す、若くは男、若くは女、及び餘の衆物、是を思想といふ。造作する所あれば、之を名けて行と爲す、若くは善行を作し若くは惡行を作す、亦不善惡(を作す)、是を謂ひて行と爲す。曉相を識と爲す。善・不善・亦有善に非ず亦不善に非ざる、是を曉るを識と爲す。是くの如く、各々五陰の相を了ず、是に於て頌して曰く。

色は不安にして瑕穢多く、佛說の經教は實に應の如し。其の所言の如く隨順して行ひ、五陰の若干の相を分別せよ。

[二六]分別五陰品第四

而して甘露を以て盛火を滅し、五陰諸苦の本を消除す。其の慧光明は日光に喩へ、三界普ねく奉し吾も亦歸す。佛・能仁・尊の深慧力は清淨の智を解了して黠なり、其の所知に順じて義を現はし、佛法の教を採りて應に隨つて說く。當に分別し解して其の講を聽くべし。今は彼を導くに定意に順ひ、五陰の本の興る所を別了し、博く衆義を引く。善く之を思へ。

其れ修行者は、當に五陰の行ずる本を分別して了すべし。何をか五陰の本を曉了すといふ、譬へば四衢に貫ける眞珠を墮すが如し。人あり、之を見て意中に欣然として、往いて斂め取らんと欲す。其の人の目に眞珠の貫けるを見るは、應に色陰なりと謂ふべし。愛樂して意に可なるは是を痛陰と謂ふ。初始めて之を見て、是れ貫ける珠なりと識るを名けて想陰と爲す。其の人、意を生じて貫ける珠を取らんと欲す、是を行陰と爲す。貫ける珠を分別す、是を識陰と爲す。是くの如く是の五陰

【二四】有光明――顯色
有像相――形色
手獲持――有對
示他人――有見

【二五】習樂は、苦樂の誤りか。

【二六】第四分別五陰品。吾等の身心の行動は、五陰が共同して成立することを示す。

修行道者は當に復た身の五陰の本を觀ずべし。[17]色・痛・想・行・識、是を五陰と謂ふ。譬へば城に若干の家居あり、東西南北を合して乃ち城と爲すが如し。色も亦是くの如く、亦一色にては色陰と爲さゞるなり。痛・想・行・識も亦復た此の如し。但だ[18]一識と名けて識陰と爲すに非ず。彼に[19]十入あり。或は[20]色にして法を觀ずる、是を色陰となすなり。[21]八百痛樂之を痛陰と名く。想・行・識陰にも各〻八百あり。乃ち名けて[22]陰と爲す。五陰の本を解すること、亦當に斯の如くなるべし。是に於て頌して曰く。

色・痛・想・行・識の五陰の起る所、譬へば大城あるが如し。若干の家を色と名く、一色を色と爲すに非ず、凡そ十色入あり。痛樂に八百あり。想行識も亦爾なり。慧人は此法を解す。若干を乃ち陰と名け、分別して一に非ざるを知る。(これ)行者の念ずる所なり。

[23]五陰相品第三

衆事を合集して而も相連なる。離慧の言を用ふれば佛教を捨つ、愚癡を習ひて了了ならずば、譬へば樹ありて枝葉多く、其の五瓠生じて分布するが如し。無巧便の種も亦是くの如し、當に五陰は斯くの若きものあることを了すべし。黠人は解慧明かにして此を知る、有性の地に生長する所以なり。法を講ずる所の言は蜜の塗りたるが如し。比丘、譬へば蜂の華味を採るが如く、猶ほ蓮華の開剖するが若し。其の慧、覺了にして日出に勝り、佛は復た超越して蓮花に勝る。佛は之れ清潔にして所著なし。是の故に尊に稽首し歸命し奉る。(佛は)其の相淡然として達して礙りなく、寂寞無想にして定を得、未だ曾つて退還墮落せしことあらず。而して救濟を以て無爲に至らしめ、意を乘り將導して示現す。群萠を敎訓すること已が行の如し。愍傷を以て、吾れ是故に說く、乃ち當來の衆生類の爲めなり。

【一七】色(Rūpa)は物的要素。痛(Vedanā)は感覺、主として苦樂の感、新譯にては受と云ふ。今は痛樂二感の中の痛を取つて譯名とせり。想(Sañjñā)は概念又は觀念表象などに當る。行(Saṁskāra)は凡てものの成る働きにして、克明には心作用の成立作用と見るべし。時には吾等の行爲を指し、意志作用とも見られる。識(Vijñāna)は識作用。

【一八】「一識を名けて識陰…」は「一色…色陰」の誤りならん。

【一九】十入とは、耳・眼・鼻・舌・身の五根と色・聲・香・味・觸の五境とのこと。

【二〇】「色にして法を觀ずる…」とは、法處所攝の色にして無表色のことなり。

【二一】百八の誤りか。

【二二】陰(Skandha)は、蘊の舊譯にして積聚の義なり。

【二三】第三五陰相品は、五陰各〻の定義特徵を示す。

に趣くなり。云何が四德なるや。謂く有餘[一四]泥洹の界と爲す。云何が有餘なるや。謂く、其は當に無爲の界に至るべきなり。云何が當に無爲の界に至るべき。謂く衆の苦本一切除き盡す。是の故に行者、一切劇苦の惱を捨てんと欲せば、常に當に專精にして異行を興さず、敎禁を傷らず、寂觀を修建すべし。假使、行者、戒を毀ち敎を傷りて、寂觀に至らずんば、唐しく功夫を損つ。譬へば人あり、木を鑽つて火を求むるに、數々休息して、專一ならずば終に之に到らず。既に火を獲ずんば唐しく其の功を勞するが如し。其の懈怠の心もて無爲を欲求することも、譬ふるに猶ほ亦然り。是に於て頌して曰く。

常に寂然を得て定を行じ、當に憍慢及び輕戲を捨つべし。以て修行を奉して毀失すること莫れ。譬へば冥夜に目を開いて行くが如し。是くの如く行者、所趣を見、智慧斯くの若く、精進し前み、正化を奉じて未だ曾て懈らずんば、乃ち靜漠無爲の道を致さん。衆玄微妙の事を徹視し、大德所說の敎を觀採す。此の經の洪訓を寂觀と名く。吾れ衆經を鈔して以て演說せん。

[一五]五陰本品第二

若干の經より明要を採り、不老死なる甘露の言を立つ。耳の聽聞する所を明者は行ひ、清淨の慧もて垢冥を除き、寂然に入ること日光の若く、譬へば月行の衆星を照すが如し、已に度世を獲んとせば當に敎を受くべし。是れ盛にして無量なること秋月の如し。羅漢を恭敬して稽首し、[一六]能仁は空の如く、頭面もて禮せよ。巍々たるに歸命して甘露を獲、世根の芽種々の欲を除け、(然らざれば)若干種の果實を生じ、欣樂憂慼は諸枝となる。佛は五陰は本無なりと解したまふ。當に衆經を觀じて其の源に從ふべし。

【一四】泥洹は Nirvāṇa(涅槃)の舊譯なり、有餘涅槃と無餘涅槃との區別に就いては、種種の場合あれども、今は主として初果より第四果に至る道程にある者の體認せる心境と見て可なり。

【一五】第二五陰本品は、五陰(新譯にては五蘊)成立の本を示して、各々幾多の部類を集合せる上の名稱なることを示す。

【一六】能仁は、Śākya(釋迦)の字義を譯せしものなり。

瞋恚と貪欲と、命を害せんことを念ずと、常に身の不淨なるを樂しむの想あると、邪智及び若干の瑕に順ふと、佛は是れ輩を行ふべからずと說きたまふ。

何をか可行と謂ふ。瞋恚を起さず、加害を念ぜず、善友に親近し、奉戒清淨にして、言は輒ち道を以てし、受教學問し、自ら輕慢せず、無常・苦・空・非身を念計し、可居に處り、女色を習はず、其の方逸を除き、當に精進して塵勞を滅せんことを志すべし。少食にして節を知り、身行を救攝し、宿夜覺悟して心を斂めて忘れず、狐疑あることなく、恐怖を懷かず、根門を寂定にして、衆緣あることなく、所說輒ち正しく、平等にして解脫す。閑居を樂しみ、所觀は諦の如く、未だ獲ざる所の法は當に以て來さんことを懷ふべし。諸の逮る可きの法は堅持して忘れず、心を歡ばして法化の要を採取し、諸の衣食に於て止足を知り、志を經道に存して厭極することなく、非常を習計して、世間の穢食の諸想を樂しまざるなり。無爲の道は所爲寂然たり。是くの如き輩の法は無爲に近づく。是を可行といふ。行、何許に在りとも之を泥洹といふ。是に於て頌して曰く

　戒淨にして無我の想を志樂し、唯だ經の義を聽き、善友に隨ひ、所見、審諦にして教の如く行ふ。　佛は此れ則ち無爲の道なりと說きたまふ。　諸の所趣たるべき衆法を念じ、定、若干にして、意に苦厭なし。　是を德の所聚を講說すとなす。　諸根を攝定す、是を行と謂ふ。

何をか修行と謂ひ、云何んが行と爲す。謂く能く順行し、修習し遵奉す、是を修行となす。其の修し及び習する、是を謂ひて行となす。

何をか修行道と謂ふ。專精なる寂道、是を修行道と爲す。其れ彼の修行に而も[二二]三品あり。一には凡夫と曰ひ、二には向道を學する、三には所學無きなり。所謂凡夫の修行とは、新學にして舊學未だ成ぜず、此の輩の爲に修行道經を說く。其の學せざる者は以爲らく、通達せば何ぞ復た論ずる所あらん。彼所以に謂く、修行道地經は寂然にして觀ずと。云何が寂觀なるや。沙門[二三]四德の果

【二二】修道の階位に三段あることを示す、一は新學の凡夫位、二は漸々に眞理を體認しつゝある階梯、三は學道完了して夫れ以上學ぶことなき位なり。一は內凡外凡の位、二は四向四果の位、三は羅漢無學位に當る。

【二三】沙門の行を修して阿羅漢の位を得るまでの四種の段階にして、初果・二果・三果・四果と云ひ、次での如く、預流果・一來果・不還果・阿羅漢果と名く。

生死の懼を了除したまふ。佛と正法と衆僧と、是の三德は踰ゆるものなし。當に觀ずべし。此の道眼もて、諦かに平等の法を說き、意に尊教の猶ほ甘露を出すが如きを採宣す。或は專ら修行するものありて、世俗を觀察するに、衆鬧若干種あり、生死これ安からず、世根に沈溺して、猶ほ朽車の泥に沒するが如く、自ら拔濟すること能はず。當に經典の要に從ふべし亦、諸花を採るが如し。世を愍れむ、是の故に演ぶ。專ら修行經を聽きて、有を除きて無に至らしむ。

是に於て當に修行道經を講ずべし」生死老病、憂結啼哭、諸の不可意の衆惱集會す。專ら修行する者、在家出家、清淨の法を究竟せしめんと欲し、志し轉還せずんば、遂に甘露に至り、衆患は爲に絕えん。其れ、救護なく、依仰する所なくんば、唯だ當に一切諸の求を棄捨すべし。是故に修行して惱を離れんと欲する者は、常に當に精進して、此經を奉行すべし。卽ち頌を說いて曰く。

生老死に墮して憂惱し、身心の興る所に衆苦あり。濟度を得て復た還らざらんと欲せば、修行の道を學んで厭あること莫れ。

何をか〔一〇〕無行と謂ひ、何を謂ひて行となす。云何んが修行、云何んが修行道なりや。其れ無行とは、謂く淫欲を念じ、親屬・諸天・國土を害せんと欲し、友を弊り戒を毀ち、惡麁の言を習ひて、不善を聽き、學問を好まず、自輕し自慢し、有著の想を興し、邪を起し、常を計し、有身所居の處に貪樂し、女色に習近し、放逸懈怠にして、情欲に著し、怒癡を離れず、多く衆を緣じ、人を求めて遠避を捨て、縱恣にして自ら是れ放心睡疑し、精進を失して常に恐怖を懷き、根門定まらずして衆事を追逐し、言語を多くして節度あることなく、長路を思樂し、及び邪說を論じ〔一一〕、戻事を樂說し非法を順逐して、道義に遠ざかる。是を無行と謂ふ。此れ無爲に於て行ずべからず。是に於て頌して曰く。

〔一〇〕無行とは、無爲涅槃の道に背く行にして、爲す可からざる身口意の三業なり。次の可行は之れに反するもの。

〔一一〕宋、元、明三本共に、反論邪說を及論邪說となす、今は之れによる。

偸伽遮復彌經〔一〕 晉名修行道地

序

修行道地經を造立する者は、天竺の沙門にして、厥の名を〔二〕衆護といふ。中國聖興るの域に出で、幼にして大業洪要の典を學び、法藏〔三〕十二部經に通盡し、〔四〕三達の智、貫博せざる靡し。玄を鉤り妙を致し、能く深奥を體し、大慈悲を以て弘く衆生を益し、大光を助明して盲冥を照悟し、尊き甘露蕩蕩の訓を叙す、權りに眞人と現はすも其の實は菩薩なり。後賢の道を庶幾ふ者、儻し力劣る者ありて、自ら前む能はざらんことを愍念するが故に、衆經の大較を總べ、進み易きの徑路を建て、五陰の成敗、所起、變趣の機微、生死の苦を分別し、迷へるを勸め惑へるを勵まし、故に斯の經を作る。文約なりと雖も而も義は豐にして、喩を遠近に採り、奸心を防制す。但だ〔五〕三昧禪を以て數と務となし、空を解して無に歸し〔六〕衆想爲めに定まる。眞に離患の至、寂無爲の道と謂つべし。

西晉の三藏、〔七〕竺法護譯す

修行道地經卷の第一

〔八〕集散品第一

厥れ元由顯興して、灼灼として日光を踰え、德積んで甚だ巍巍たり。帝王の種、諸天及び神仙に勝る。專精にして暴露成じ、多く博衆の義を學ぶ。咸皆〔九〕最安を禮す。天人龍鬼神世に在りて精進し、世尊を奉迎す。（世尊は）、三界に等倫なく、濟ふに無比の慧を以てし、

〔一〕偸伽遮復彌經(Yogācārabhūmi-sūtra)。

〔二〕衆護(Saṅgharakṣa 僧伽羅殺)。

〔三〕十二部經とは、原始經典をその文學的形式及び記述の内容等より分類して、十二となしたるものにて、常識的には一切經典の別名と見て可なり、十二分經とも云ふ。

〔四〕三達とは、三明のこと、六神通の中の天眼・宿命・漏盡の三神通をさす。

〔五〕三昧(Samādhi)は、三摩地とも音寫し、等持と譯す、禪定の別名なり。

〔六〕大正本は衆想爲宗とあれど、宋、元、明本共に衆想爲定とあり、今は之れによる。

〔七〕法護(Dharmarakṣa 曇摩羅刹)。

〔八〕第一集散品は、禪法修行の意義と目標とを示す、總序の如きものなり。集散とは散亂の心を攝集するの意と解し得べきも、安世高譯し道地經には、散種章第一と譯せり。

〔九〕最安を宋、元、明三本には最要となす。

は甚だ危險であるが、假りに前二十七品が彼の眞撰であるとするならば、彼は多分に有部系統の教學に親しみ、夫れの實踐修道の方面を尊重し、そして片苦るしき法相理論よりも、なだらかに一般向きの讀物を撰し、文學的の興味を豐に具へてゐた人のやうに察せられる。

最後に大經の梵名に關して、經初に偸迦遮復彌、晋名修行道地と記るされてあり、尚ほ達磨多羅禪經前附の序文にも、庾伽遮羅浮迷は譯して修行道地と言ふとあるから、Yogācāryabhūmi であるかのやうに一般に認められて來たが、之れでは瑜伽師地論の原名と同一であり、若し然らば何故之等二經の譯業に携つた人達が玄奘三藏のやうに瑜伽師地もしくは修行師地と譯さないで、修行地又は修行道地としたのかを不審に思つて居たところ、宇井博士の印度哲學研究第六の五〇二頁に、瑜伽師地論の原名に就いては、當時の印度に於て Yogācārya……(瑜伽師……)の外に、Yogācāra……(瑜伽行……)を用ひた根據もあり、修行道地經や達磨多羅禪經の梵名は、後者と同じであると斷じて居られるのを見て、釋然たるものがあつた。卽ち本經の梵名は明に Yogācārabhūmi であつて、當時の印度に於て特に流行したと察せらるる瑜伽行者、卽ち禪定を以て實踐修道とする一群の傾向に影響せられて、ヨーガ行に關する實踐の階程を示した、幾多の禪經が成立し、本經も亦其の雰圍氣に釀されて、かゝる題名の下に述作せられたのであらうし、所謂佛教の瑜伽唯識の一派も最初は此の空氣の中に育てられたのであらう。

昭和六年三月九日

南都戒壇院に於て

譯者　佐藤泰舜　識

研究新第四卷の一號（昭和二年一月號）に「修行道地經と法華經との關係に就いて」と題して詳細に論じ、本經の成立過程を考察してあり、私の所論も第三の理由に於ては、同氏の說以外に出づるものではない。

四、本經の部屬幷に作者

本經は大正藏經に於ては經集部に編入せられて居るが、縮刷藏經にては大乘論部に入れ、卍藏經には印度撰述部に入れてある。多くの經錄は小乘經に屬せしめて居り、開元錄は經部編入を不可として西土聖賢撰集部に編入して居る。事實に於て僧伽羅刹（Saṃgha rakṣa 譯して衆護）が、衆經の要を取つて、禪觀修道の階梯を示したものであることは、本經前附の序文、道安の註序、經の本文、經の內容等を綜合して明らかな事實であつて、嚴密な意味に於ての經律論三藏の何れにも屬せず、雜藏若しくは印土聖賢撰述雜集部に屬するものである。諸經の要を採ると云つても、後三品の法華に依れるは別として、大體は阿含部系統、譬喩經系統、幷に阿毗達磨の法相を取り來つて、禪觀中心の實踐修道を階位的に示したものである。

僧伽羅刹は修行道地經を撰述した外に、佛傳を述べた僧伽羅刹所集經二卷があつて、僧伽跋澄が支那に譯出（西曆三八四年）して居る。坐禪三昧經の中にも彼の撰述が一部分編入されて居ることは、僧叡が同經の序文に述べて居るが、之れは恐らく修行道地經から採用したものと思はれる（此の事は同經の解題を參照せられたし）。然らば僧伽羅刹は如何なる人物であるか、僧伽羅刹所集經の序文に須賴國の人、佛滅七百年頃に生れ、出家學道して諸國に遊歷し、揵陀越土に至つて甄陀罽貳王の師となり、高明絕世にして述作する所多く、此の土の修行經、大道地經及び此の經は其の撰述する所であると述べてある以外には、彼の傳記に關する文獻が存しない。揵陀越土が揵陀羅地方であり、甄陀罽貳王が迦膩色迦大王であらうとは一般に推定せられて居るが、之に關する根據に就いての考證は、本國譯本緣部第九の僧伽羅刹所集經解題の下に、常盤博士が指示された以外に、目下の私としては何物をも附け加へ得ないから、此には省略することにする。

但し修行道地經の何の部分までが、果して彼の撰したものであるかは、後三品が支那で附加されたこと、安世高譯の一卷本には、本經の特色に觸れて居ないことなどから考へて、遽に判定する事が出來ない。從つて坐禪三昧經に採用された部分も、必ずしも彼の撰集したものとは定められないことになる。それ故現存の本經よりして、彼の思想を想像すること

こそ眞の佛道であることを主張するに、法華經の骨髓をなせる譬喩、化城、火宅三車の二喩を引いて居る。前二十七品に於ては、殆んど大乘的の臭がないのに、後三品に至つて突如として大乘敎義を述べ來たるはまだよいとして、法華經もどきの態度を以て、小乘聲聞を貶抑するが如きは、前二十七品の終りが一經の經文をなして居る所と照合して、一卷三品の加增は此の後三品なりと、想像されるではないか。後三品が法華經の意を採つたものであることは、明の知旭が閱藏知津に於て指摘し、後三品加增の事實は近來學者の認める所であるが、法華經との關係を探れば、右の二喩の外に、入海採寶の喩が法華の五百弟子品のそれと類似し、生盲無色の喩が法華の藥草喩品のそれに似て居るし、更に此の眼を押し廣むれば前二十七品の中にも、兩經類似の點がないでもないが、特に後三品は法華との關係が濃厚である。而して此の部分は前二十七品と比して、殆んど別立の感があるから、本經中に一卷三品の加增部分を見出すとせば、此の部分を置いて他にないと云はねばならぬ。然らば此の加增の三品は如何にして成立したか、確然性は保證し難いけれども、多分の蓋然的回答を與ゆるものは次の第三の理由である。

第三の理由は經錄の記載である。出三藏記第二卷法護譯の下に、三品修行經一卷があつて、下に「安公云く近人大修行經に合す」と註してある。此の三品修行經は彥悰錄以來、或は缺本とせられ、或は三品悔過經のことであると記せられて、其の內容を確め得ないけれども、其の經名から云つて、又道安の言から推して、恐らく現存本經の後三品と同一のものであらうと思はれる。果して然らば、後三品加增は、法護譯出の時より百年以內の間に、同じ法護譯の三品修行經を以てしたと云ふ事になる。而して諸經錄が何れも本經を以て、六卷或は七卷と斷り書きをして居る所を見れば、後の時代まで原の六卷本と、加增された七卷本が幷び存して居たか、或は七卷本のみが傳つて居ても、而も經記などに明瞭に六卷としてあるので、卷數を決し兼ねて、六卷或は七卷と記るして置いたのかも知れない。因に此の三品修行品と類似した經名の三品弟子經（一名弟子有學三輩經）一卷が、法經錄失譯の部に記載せられ、三寶記には支謙の譯と記るし、現に大正藏經の經集部第四の中に存して居るけれども、本經の後三品と內容を異にするものである。

以上の三理由によつて、後三品は傳譯當初は別な經典であつたのが、後間もなく本經に倂合添加されたものと云ふことは承認出來やうと思ふ。之等の事に關しては、立正大學敎授渡邊泰道氏が、宗敎

讀破された經典であることは、此の時代に作られた經序、經記の類が三種も現存して居ることによつても察せられる。殊に道安は世高譯の一卷本に註解一卷を著したことは、三藏記第五卷に記す所であり、同第十卷に現存する道安の道地經序は多分右註解の序分であらうが、其の中に、雁門の支曇、鄴都の僧輔の二人は、章を尋ね句を察して此の訓傳を造るとあるから、一卷道地經の流布研究は、蓋し初期佛教に於ける經典流傳史の上位に位するものと云はねばならぬ。法護譯の本經に於ては、註釋書の述作されたことを見ないけれども、其の當時禪觀習禪の徒輩によつて相當に讀破されたことは想像され得るし、經錄に存する道地經要語章なるものは、果して本經の要語を拔萃したものか否か不明であるが、法經錄以來、本經中の各品を別行したもの十二種を擧げて居る所を見ると、本經が全く教界人士の關心の外にあつたとは思はれない。またかの天台智者大師の雄大なる止觀法門の組織の何れに、本經の影響が存するかを指適するは困難であらうが、本經が五種の禪觀を并べ、凡夫禪と佛弟子禪とを判別し、更に三乘對一乘の思想に觸れて、菩薩禪を提唱するあたりは、必ずや該博なる智者大師の腦裡に印せられて、何等かの參考資料となつたこと丶思はれる

三、本經の後三品に就いて

本經の現形は七卷三十品であるのに、法護の譯出した時には、六卷二十七品であつたことは、前述の經記に於て明であり、道安も一卷本の註解の序分に、一部二十七章が全分の道地經であると云つて居るし、且又、三藏記以來の經錄が何れも、本經の卷數に就いて常に六卷或は七卷との但し書を附して居る所より見ても、法護譯出の當時と現形の經との間には、一卷三品の增加のある事が察せられる。然らば增加された一卷三本は、現存本經の何の部分であるかと云ふに、種々の理由で第七卷の全部、即ち後三品がそれである事は疑ない。今其の理由を三方面から述べて見よう。

第一は經典の形式から見るに、第六卷二十七品の終りに、一經の結文とも見るべき一段が存して居る。即ち「是の故に此の經を名けて修行と曰ふ……其れ是の道地教を奉行する有らば漸く解脫を得て無爲に至らん……其れ此の經を說くものあり、もしは聽く者あらば、佛は當に其の路を示し、常安にして窮極すること無からん、……」とある如きは、凡ての經典の流通分に存する經典受持の功德を述べたもので、本經は形式上此に終りを告げて居ると見ることが出來る。

第二は後三品の內容を見るに、聲聞・緣覺・菩薩の三乘道あることを示し、菩薩道

に、後漢安世高の譯出（西曆一四七—一六七年）せる道地經一卷がある。之れは本經の初五品、第二十二品、及び第二十四品とに相當する七品から成つて居るので、古來の經錄には、印度西域で行はれた抄經を譯したものとされてゐるが、或は本經の完成する以前のものであるかも知れない。此の經は出三藏記集以來、大道地經二卷として諸經錄に記載せられて居たが、開元錄に至り、道安の註解の序文によつて考證し、道地經一卷と訂正せられ、以て今日に傳つて居る。

安世高には右の抄譯の外に、本經と全く同本異譯にして、六卷乃至七卷の修行道地經の譯があつたことを、隋の法經錄以來、諸錄一致して記載し、開元錄また之れを採用して、道地經は總じて三譯ある中、二存一缺なりと斷定して居るけれども、出三藏記には此の事を記せず、道安の道地經序（三藏記集第十卷所載、恐らく世高譯の一卷七品の經を略註せし時の序ならん）には、安世高は道地經の七章を譯して漢文となすと記して、其の七章の名を列ぬる所は、全く現存のものと一致するけれども、本經に見る如き全體的の譯があつた事を云はないし、且つ又、安世高に全譯があつたとしたならば、抄譯一卷經のみが相當に持て囃されて流傳されたのに、何故全體のものが早く散逸したであらうかと疑はれる。而も抄經は全體の道地經の中の主要部分でなく、特色として尊重すべき點が無い。旁〻以て安世高に本經全體の異譯があつたことは、誤傳に過ぎないものと思はれる。

されば修行道地經は法護譯一回と、世高の部分譯一回との譯出があつて、兩者共に現存し、他には散逸したものがないと見て然るべきである。然るに大正藏經に於ては、後漢支曜譯出の小道地經一卷が、前二者の異譯として編輯されてゐる。併し乍ら現存の此の經は、本經の何れの部分にも相當せず、全體を概括したものでもなく、本經の內容以外の事をも記されて居るから、之れは決して修行道地經の別譯と見るべきではない。經錄を按ずるに隋の法經錄に至つて、初めて小道地經一卷が別生經の部に載せられ、內典錄に來つて之れが支曜の譯出と認められ、而して世高譯のものを大道地經とし、今の支曜譯を小道地經とし、共に同類の經典と見做されて來たが、開元錄は之れを引き離して、大道地經より大の字を廢し、支曜譯の小道地經は拾遺編入の單本の部に入れて、修行道地經との關係を認めて居ないのは當然である。

修行道地經は支那佛教の初期、幷に六朝時代を通じて相當に流傳したけれども、他の代表的の經典の如くに特に著しく研究し普及されては居ない。然し羅什以前の初期佛教界に於ては、最も注目し

きである。要言すれば佛教禪觀の特色、特に小乘禪觀の次第進展を述べたのが本經の最大特徴と見るべきである。

　而して之れを成すに阿達達磨の法相、就中、主として說一切有部の教義を取り、其の實踐修道の方面を殆んど其儘持ち來つたのであるが、譬喩例證を多く用ひて、敍述をなだらかにし、重說偈言を以て前說を繰返し、一般的讀物としての感じを與へる民衆的作品である。若し漢譯が十分に潤文されて居たならば、吾等に取つて至極肌觸はりのよい聖典である。

　尙菩薩品に示せる菩薩の階位に關して、恐らく十地思想の先驅と思はるゝ十住說を暗示し、又初發心時便成正覺の思想の先行とも見るべき、菩薩の超行を說けるが如きは注目に値することであらう。

二、傳譯流布

本經が支那に傳譯されたのは、確實に認め得べきもの二回、何れも支那佛教の初期に屬する早い時代である。其の內今國譯するところは、西晉の太康五年（西曆二八四年）、竺法護によつて譯出せられたものである。宋・元・明の大藏經に載せてある本經の後記によれば、罽賓の文士竺侯征なるもの、好學尊道の君子であつて、此の經を齎して燉煌に來たり、時に月支の沙門法護に値ふて共に之れを譯出し、法護の弟子法乘、月氏の法寶等が筆受者となり、其の他三十餘人が助力して、太康五年二月二十三日に譯了し、榮攜業、侯無英の二人が書寫して、六卷二十七品、六萬餘言、以て衆賢に配布したとなつてゐる。諸經錄其の他の文獻から察して、右の傳譯事情は大體眞なりと認め得べきであらう。而して此に注意すべきは、現存本は七卷三十品であるのに、今の記事は六卷二十七品となつて居ることであるが、之れに關しては次項に述べる。

　譯者法護は、竺法護、又は曇摩羅刹（Dharmarakṣa）とも記せられ、月支菩薩、燉煌菩薩などと敬稱せられる。父祖は月支人であるが、世々燉煌に移住してゐた。八歲の時出家して竺高座の弟子となり、長じて大乘經典を求めんが爲め、師に隨つて西域諸國を遊歷し、外國の異言三十六種に通達し、多くの經典を齎して燉煌より長安に至つた。爾來四十年間專ら飜譯に從事し、正法華經、十地經、光讃般若經、密迹力士經、普曜經等を初め、凡そ百五十餘部を譯出し、初期、譯經史上拔群の功勞者である。晩年長安靑門外に寺を建てゝ教化大いに努め、七十八歲を以て寂した。古來の傳記者は云ふ、經法廣く中華に流るゝ所以の者は法護の力なりと。以て傳譯史上の地位を知るべきである。

　次に本經の異譯として現存するもの

して實踐せらるゝのである。羅漢道の正觀德行は未だ徹底せざるの恨みあり、要するに之れ途中の施設に過ぎずとして、法華經に有名なる化城の喩話を以て、之を示して居る（弟子三品修行品第二十八）。

菩薩道に向ふ者の中にて、機根劣れるものは無上正眞道の心を發して進むと雖も、佛の色身相好に心奪はれて、空無所得の深慧を起すこと能はず、羅漢道より勝ると雖も、菩薩の如く正觀自在ならず、實人生に於ける行動の足鈍き一類を緣覺と稱する。之れまた理想的の佛道に非ずして假の施設であるとし、此處にも法華經に名高き譬喩、火宅三車の例話を以て、佛に三乘道の施設あることを示して居る。（緣覺品第二十九）。

眞の菩薩道は無上正眞道を發して、一切皆空を悟り、發心の當初より五道の生死に在つて一切衆生を濟度せんと志す大勇猛の修行者であつて、菩薩道の實現の爲めには、如何なる艱難辛苦も辭せず、永遠に進んで無際の空を行き、佛弟子聲聞の如くに、次第階級を經ることなく、發心の當初に不退轉に至り、超行越位して極果を得、而も如來の法身の無相なることを解して、證果に捉はれず、自在闊達の正觀妙行に生くるものである（菩薩品第三十）。

以上本經の內容を概觀したが、今其の特色を見るならば、菩薩禪を說ける後三品に於て大乘思想を說き、而も法華經に於ける如き態度を以て、三乘道を幷べ、小乘對大乘を說いて居ることは注目すべきであるが、此の部分を除いては全部小乘敎義に屬する禪觀を述べたものである。其の中でも着目すべきは、分別相品に於ける衆生十九輩の說、幷に五種禪觀の列擧であるが、更に最も特色とすべきは、數息品第二十三に於て、凡夫禪と佛弟子禪との區別を力說する點である。四禪五通を得、生天の果を得るを以て凡夫有漏の禪とし、外道仙人の修とする所なりとは、他の禪經にも說いてあるが、本經の如く力を注いで之れが佛弟子禪との相違を明にせんとしたものは稀である。蓋し禪法は佛敎に限らず、印度の多くの宗敎學派に通ずる修道の一方法であるだけに、之れが佛敎に於ける特色を樹立することは最も必要な事であるから、本經は特に此の事に努力を傾けたのであらう。而も兩者の差違は要するに內觀の相違に歸するもので、其の心一境の三昧境たる點、其の坐法、殊に四禪の境地に至ると說く邊りは、二者の間に格段の區別を認めることが出來ない。之れ佛敎の四禪八定は外道の禪觀を採用し整頓したものと言はるゝ所以であらう。併し乍ら夫れ丈けに、佛弟子禪の樹立と其の特徵の表示に努力した本經作者の意圖を察すべ

天眼(天眼見始終品第十五)、天耳（天耳品第十六)、宿命(念往世品第十七)、他心(知人心念品第十八)の五神通を得るに至るのである。

斯くの如く四禪を得、五通を得て、且つ天に生ずることを得るも、未だ究極の解脫とは稱し難い、尙心に著する所あるからである。之れ卽ち有漏凡夫の禪であり、外道仙人も能くする所であつて、佛教門內の禪法ではない。たとひ生天するも、軈ては欲縛の世界に沈潜すること、恰かも囚人の假出獄の如くであり、糸に繫ながれた小雀が暫しの自由を得る如きものであつて、永劫眞實の解脫境とはならない。佛弟子たるものは斯かる禪法を以て理想とすべきでないと誡めてある(數息品第二十三)。

四、佛弟子禪　佛弟子たるものは、不淨を念じ數息を觀じて心寂靜に至るも、單に四禪五通を得て之れに著せず、更に無漏聖道の觀察を進めて、四念處觀を修し、四聖諦の理を察して、佛の說き給へる三十七道品の實踐窮行を眼目とすべきである。凡夫禪は徒らに寂靜の樂味に著して、狂暴の欲を去ると雖も、微細の情念を斷ぜず、單なる快樂輕安に心惹かれて道德の實行を疎外する。換言すれば寂の一面に沈潜して正觀微妙の働きを缺き、快適奇蹟を樂しんで道行の實踐を忘れて居るのが凡夫禪である。然るに佛弟子に於ては、寂を得ると共に妙智正觀の働きを得、欲を離るゝと共に德行の實踐に全力を傾ける、之れこそ眞に有ゆる煩惱を離れて無爲の解脫に至る所以である。されば佛弟子は數息觀を修するに當つても、能く其の四事十六分(六妙門、十六特勝)を得、進んで四念處を觀じ、四諦十六行相を以て眞理を察認し、四善根の位を經て、無漏聖道の十六心を起し、煩惱を斷じて欲界を離れ、眞に無漏の初禪に入り、初めて聖者の域に達するのである。(以上は數息品第二十三)。

更に進んで所謂四向四果の修道を經て、最後阿羅漢の無學地に入り、所作既に辨じ、重ねて生を受くることなく、佛と等しき智力を得て解脫涅槃の妙境に到達し、禪觀修道の能事全く完了するのである(學地品第二十五、無學地品第二十六、無學品第二十七)。

五、菩薩禪　迷界の輪廻を解脫して到達する道に、羅漢道と菩薩道との二途がある。羅漢道は前に述べし如く、凡夫有漏の禪に墮せずして佛弟子(聲聞の意)の本分を守り、止觀相應して無爲の涅槃に至るものであるが、菩薩道は佛の無上菩提を求めて驀進し、禪觀修行成ると雖も涅槃に住せず、一切皆空の理を悟つて、廣く十方の衆生を濟度するものである。之れぞ眞の佛道にして、正觀は此處に活ける働きを現はし、道德は眞に實人生に卽

るとも、能所皆之れ如空夢幻の一時的事象と諦忍して、心の平靜を保つべきを敎へ（棄加惡品第十四）、更に進んで吾が身心を反省して、身は不淨なり、受は苦なり、心は無我なり、法は無常なりとの四念處觀を學び、專ら心を攝して信・精進・智慧の諸德を以て三毒の爲めに亂されざることを工夫し、專念道に進むべきを勸め（勸意品第九）、凡そ凡夫の謬見たる淨・樂・我・常の四顚倒を捨離して空無我の理を慕ひ、究竟の涅槃に達せんことを志し（離顚倒品第十）、若し退墮卑屈の念起らば、志を奮起して正法を念じ、其の善利に勵まされ、常に歡喜して益ゝ修道に進入すべしを諭してある（勸悅品第二十）。

以上は修行一般論であり、坐禪觀法の豫備的基礎となる訓練であるが、禪觀の初入としては五種の觀法を擧げて居る。其の五種は夫ゝ凡夫の迷情に應じて、心病を對治する爲めのもので、分別相品第八には、法師たるものは、衆生の迷情十九輩を辨別し、夫ゝの病に適應する禪觀を以て指導すべきことを述べて左の五種に要約して居る。

（一）情欲熾なる者に不淨觀
（二）瞋恚熾なる者に慈心觀
（三）愚痴多き者に因緣觀
（四）想念多き者に數息觀
（五）憍慢多き者に白骨觀

之れを所謂五停心觀に比すれば、念佛觀を缺ける代りに、白骨觀を加へて居る。白骨觀は不淨觀に屬し、時には其の主要部を成すものであるから、結局本經に於ては五停心觀の中、四觀だけを擧げた事になる。兎も角此の五種觀法が禪觀の修行に入るの五門であつて、修行者は必ずしも此の五門の全部を修する必要なく、心病に應じて其の一門に入り、而も觀法よろしきを得れば、その一門を以て最後究極の解脫位に到達し得るのである。

三、凡夫禪　禪法に寂（止）と觀との二面がある。寂は心一境に住して寂然不動の狀態に至るを云ひ、觀は心不動の狀態に在つて法の本原を觀察する心の行相である。例へば草を刈る時、手に草を握るは寂、鎌を以て刈り取るは觀であつて、行者の機根に應じて先きに寂を得て後に觀を得るあり、先づ觀を得て後に寂を得るの差はありとも、而も寂觀の兩面が具はらざれば、眞に解脫に趣くの禪法ではない。而して行者が先づ寂を得んと欲せば、不淨觀と數息觀とは最も良い方法であるが、試みに不淨觀を說くならば、先づ塚間に至つて死屍を念じ、其の靑淤膖脹の汚穢、骨鎖集散の空無を專念する時、心自然に欲想を離れて不動不亂の狀態に至り、次第に執著を捨てゝ第一禪に達し、更に進んで四禪を得るに及んでは、身體輕軟にして意の如くに飛行し、種々の神變不思議を得るに至る、之れ卽ち神足通にして（以上は神足品第二十二）、同樣に

修行道地經解題

一、內容一般と特色

修行道地經七卷三十品は、ほゞ順を逐ふて禪觀修道の階程を示して居るが、品に長短あり、記述に繁簡ありて、所說時に前後し、說明或は反覆して居るから、品を逐ふて梗概を述べるよりも、纒めて左の五項に分つて、內容一般を概觀するが便である。

一、迷界の相狀　先づ初めに生死輪廻の生活が、畢竟ずるに無常・苦・無我・不淨なることを說き(集散品第一)、特に有情の生活は、色・受・想・行・識の共力によつて五蘊成り(五陰本品第二、五陰相品第三、分別五陰品第四、五陰成敗品第五)、地・水・火・風・空・識によつて合成されたものであるから(行空品第二十一)、自我として賴むべき確實性がなく、五十五事の一々が、皆空無常にして厭ふべきの極みである(觀品第二十四)。然るに凡夫は貪瞋癡の三毒に犯され、之れを本として千種萬樣の癡態狂亂を演じ、其の著しき迷情性行を示して十九輩に分別し(分別相品第八)、之れに應じて地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の生活開展あることを說き(知人心念品第十八)、而して特に地獄の種類相狀を委曲に述べ(地獄品第十九)、斯くして賴むべからざる自我に執著し、誤れる自我觀念を基として開展せる生活の種々相は、迷妄にして苦惱に充つるもの、早く佛陀の敎法に歸順して、此の惱みと此の迷とを除くべし、との意味を述べたのが、本經の序說とも見るべき項目である。

二、修道の初門　輪廻の生活が理に反するの迷妄であり、苦惱に終始さるゝ失敗であるとの反省は、必然に解脫への要求を産み出し、解脫の要求はまた必然に自我固執の妄念を取除くことを必要として、こゝに修道の生活が開かれる。修道の手初めは先づ、自己の苦惱恐怖を逃れん爲めに、己れを空うして佛法僧の三寶を念じ、持戒堅固にして我執我欲の生活を捨離するにありとし(除恐怖品第七)、次に眼・耳・鼻・舌・身の五根を制して、色・聲・香・味・觸の五境に驅使せられざることを努め(伏勝諸根品第十二)、特に食を貪ることの道行に益なきことを示して、好食粗飯一等に取捨憎愛の念を止め(曉了食品第十一)、而して他に對しては寬容慈忍の德を以て、十方の衆生に於て怨親平等の慈念に住し、苟も瞋恚の心を起して自ら苦惱を招くことなく(慈品第六)、毀譽褒貶は畢竟するに空無根の虛事にして(忍辱品第十三)、たとい他人の毀害を被

目次

毘達磨の法相に關係し、而も其の本文が甚だ簡潔なるため、之れを徹底的に闡明するには、毘曇部の諸書を渉獵して複雜な註釋を加へねばならぬから、本國譯に於ては餘儀なき範圍に留めて詳細な說明を省略した。殊に達磨多羅禪經に伏在せる阿毘達磨の法相は、國譯者の無知の故に、氣が付かずして註釋を略した場合もあり、故意に筆を控へた部分もあるのに對して、讀者の諒恕を乞ひ、識者の示敎を仰ぐ次第である。

修行道地經と達磨多羅禪經とは、邦文に書き下し難き文句が尠くない。國譯者の力乏しきは元よりなれど、又漢譯本文の然らしむる所であらう。前者は意通ずるも訓讀し難く、後者は意通ぜずして訓讀し兼ねる場合が多い。

此の五經の國譯は、同學の文學士水野弘元氏との協力に成つたものである。勞作の順序としては、初めに私が着手し、次に水野氏が大に勞作し、後に又私が之を受けて出來上つたのであるが、嚴密にして詳細に亘る同氏の勞作を、私が却つて平漫粗雜にしたのではないかを惧れる。

二人が若し東西百里を隔てず、常に膝を交へて論究することが出來たなら、かゝる機械的な協力でなくて、眞に二人の力を融合して、もつと缺點を少くし、そして公然二人の共譯として天下に見えたであらう。過誤不行屆の點は凡て私の罪であることを陳謝する。

昭和六年三月二十日

南都戒壇院に於て

國譯者　佐藤泰舜識

國譯禪經五部凡例

本册に收むる五部の經典は支那傳譯の當初から、禪經と稱せられた一群の經典の代表的のものである。故に今之れを國譯するに當つて、禪五經の總解題とも云ふべきものを揭ぐるのが便宜であるけれども、都合によつて省略し凡例數言を以て之れに代へる。

禪經は西洋紀元前後より、佛敎內外を通じて禪の實行家たる禪師、瑜伽師、瑜伽行者等が輩出し、夫々の立場から敎書(テキスト)を造るの風潮に乘じて、阿含に基き、阿毘達磨に出り、時に初期の大集思想を加味して、主として西北印度又は西域地方で成立したもののやうである。禪定に關する南方巴利聖典は Visudhimagga, Abhidhammathasaṅgaha, Yogāvatara 等の所說であるが、北傳の說とは多少趣を異にして居る。

禪經の主眼とする所は、坐禪の目的と禪觀の內容とによつて佛敎に於ける禪の特質を明にし、坐禪による修道進展の位次を示し、特に禪定初入の方便として數息觀、不淨觀等の諸觀を詳說するにある。

之等の禪經は支那佛敎の初期に於て一時に傳譯され、所謂、禪數の學として當時の佛敎修道の根幹をなし、後には天台の止觀法門によつて代表せられる大乘禪觀にまで發達するに至つた。智者大師の止觀に關する諸撰述は、著しく之等の禪經に影響され、そして遂にそれを超越したものである。

各禪經の內容より云ふも、支那禪敎の發達より見るも、安般(數息)、不淨、慈心、因緣、念佛の五種の禪觀は、禪經を閱讀するに當つて最も注意すべき事項の一であり、支那では之れを五停心觀と稱して居るから、今五經の各解題に於ても此の名を用いて特に注意を拂つた。

一般に脚註選擇の標準に就いては考慮すべきことであるが、今の禪五經に於て詳註を施すべき術語は、主として阿

經集部 四

佐藤泰舜譯

國譯一切經

大東出版社藏版